KAIZO

改造

五月號

1927

若槻禮次郎

國民に訴ふ

民衆は彼を倒すべきか、將立たしむべきか？

我國歷代の首相で自己の抱懷を直截に國民に問ふたものは若槻君が始めてだ。君の立場については幾多觀點を異にする人があらう。しかし此一書を機緣として街頭に立ち、民衆に直面せんとする君の熱意は充分認識すべきであらう。彼は本書に於て抑々何を語らんとし、何を國民に訴へんとするか？　力の政治を排し、ロシヤ、伊太利の獨裁政治を痛擊し、泥試合を政界革新の過程と觀じ、政治の倫理化は新味なしと一蹴し、外資輸入の必要を力說す。說者は責任の衝に當面する宰相。今彼は勇敢に自己を曝露した。民衆は彼を立たしむべきか、將た倒すべきか、徹底的に批判せよ。（定價拾錢）

目次

發賣所　東京市麴町區內幸町　幸ビルデング一階　振替東京八四〇二　改造社

GIFT OF
SIDNEY M. EHRMAN

腦溢血の突發！

危險信號（高血壓）を無視する勿れ

壯年季及び初老期にある健康者の生命を青天の霹靂の如く突如として奪取しその死亡率に於て結核に次ぐものありと稱えられ、人類恐怖の中心となれる腦溢血は、何等の豫告なく襲來するにあらずして、高血壓てふ危險信號（病的苦痛を伴はざることあり）の存在するにかゝわらず、これを無視せる必然的結果に外ならず。

腦溢血に對しては、百の治療も一の早期豫防に及ばざることは既に知らるゝところ、而してこの目的に最も汎用さるゝものはアニマザなり。

動脈硬化症 腦溢血 治療及豫防劑

アニマザ

高血壓症の治療幷びに豫防にアニマザの内服が現時に於ける最良の療法なることは既に多數の臨床實驗幷びに批判の結果確定さるゝところにして、本劑は血管硬化に對し原因的に奏効し、長期に亙り適用するも全く無害なるため高血壓者の常用藥劑としてその聲價を專らにするに至れり。

「高血壓の治療及豫防に就て」と題する小册子御申越次第進呈す

三〇錠……………二圓四十錢
一〇〇錠……………六圓八十錢
粉末…二五瓦入特製…[illegible]
各地藥店にあり

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社

總代理店 株式會社 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改造 五月號 目次

五月の朝

創作

『社會科學』四月特輯

定價壹圓貳拾錢
送料拾錢

帝國主義研究

資本主義はその進行の必然に從つて帝國主義的毒芽を現し、資本の侵略、新植民地の獲得、世界の再分割は、英・米・日の資本主義列强を中心として深刻に轉回しつゝある。支那の革命に於ける「打倒帝國主義」「民族解放」運動の急速なる進展は帝國主義の前途に對して重大なる暗示を與ふ。今や資本主義の行方、そしてその前驅をつとむる帝國主義の分析究明は、刻下最大の急務である。本誌は四月特輯に於て内外の碩學に乞うて我資本主義の現段階及世界的帝國主義の現實的進行を追究し、帝國主義研究の礎石を据ゑんことを期した。

改造社發行

内容

學生・教授・大學

我大衆の時代的生長の速力は何物にも比類なき飛躍振りを示した。數年前までは我大衆に對して指導的地位にあつた新聞、雜誌の多くが大衆の進展に伴ふことが出來ずして現在ではジャーナリズムの任務が一轉向を來たしたことを看取される。否。單に新聞、雜誌のみが時代にとり殘されたといはんより總ての指導的地位にあつたものが、まるで正反對の事象を顯現するに至つた。政治家、教育家、司法官、外交官より勞働大衆の方面に於て讀書力が著しく展開し、隨つて時代精神をつかむことに於て一日の長あるを示したことは爭ふことの出來ぬ事實である。否。否。それのみではない、最近は大學に於てまで――主に法學部、經濟學部――學生と教授との地位の全然一轉化を示せるは驚くべき事實だ。新聞紙の傳ふる所によれば、四月四日學生事件公判廷に於て被告藤井は裁判長の「社會科學に入つた動機は何か」の問に對し「大學教授の云ふところは十年一日の如く、その理論に黴の生へた取るに足らぬもので、ボロボロのノートを朗讀するだけです、それが堂々たる大學教授の仕事ですが、我々はもつと學問をしたいと思つて研究會に入つたのです」と答辯したそうだ。そうした事實の正否はとにかく、我々の聞き及ぶところも大同小異である。一代の碩學と稱せられる人が講義草稿に十年間唯の一字の改訂もなく、時にそれを一杯機嫌で二三頁も飛ばして講義をすることがある。學生が「先生中が拔けました」と注意すると「さうか、もとえ！」と云ふ調子だ、まるで嘘のやうな話である。大學學問に對するかくの如く不眞面目なるものを文部省は何故停年まで高い俸給を支拂つてその身分を保障せなくてはならぬか？――尤も司法官もその通りだが――何故に大學教授だけが――官立ばかりの――そうした國家の恩惠を受けなくてはならぬか。これ等の教授の大半は既に老朽して時代精神を解せざる「昨日の人」であり、その學問は死灰の如きものである。輓近我が學生が大學を離れ、教授を離れつつある傾向を識者は何と見る。今までは二、三年洋行せる教授は一、二年は學生にも新知識として歡迎されたものだが、このごろでは洋行歸りの殆んどすべてが、却つて歸朝則日から學生より嚴なしの輕侮の念を以て迎へられつつある事實と共に我々の深く考へねばならぬことだ。從つて現下の法學部、經濟學部の學生大半が、教授を離れて、自らの研究方法を工夫して或る研究に沒頭しつつある狀勢は彼等が社會と大衆の生長に刺戟せらるるに依るのである。特に森戸事件のとき佐々木、安部教授等の特別辯護は東大生の歡喜するところであつたが、今回の學生事件では一齊に「教授は既に昨日の人である、昨日の人より辯護して貰ふ必要なし」と、却つてその厚意を峻拒したといふ。時代の深刻な變化はこうした場面にも著しく看取できる。先覺者はこの底深き暗默の過程を深慮すべきであらう。世界の偉大なる動きと並行して考察すべきであらう！

海外より見たる邦人の短所

新渡戸稻造

此の標題は餘り人氣のないものであることは承知の上で選びました。お互日本人程惡く言はれることを嫌ふ國民は恐らく他にあるまい。またこれを聞いて反省する性質に於ても、お互隨分長じて居るものとも思ふ、殊に外國人から受ける同胞の缺點の批評は殊更重く感ぜられ、實際的參考にもなると思つて、癪に障るやうな題を選んだのである。

いま世界には彼是れ七十ばかりの國家を成して居る團體がある。その中には隨分一國といふデグニテイを有たない團體もある。例へばリヒテンスタインの如き、アンドーラの如き、或はモナコの如き、人口と言へば東京市の半分にも足りないやうな、面積と言へば一村落と較べてどうだらうといふ位のもの、國防と言つた所で兵隊が二十人居るかどうか、獨立存在の要素を悉くは具へて居らず「郵便は特にして居る所もあるけれども、外交といつた所で隣國の政府に委託し、自國の公使も領事もないやうな、全然主權を有しない國家もあるが、兎に角七十許かり「邦國」と稱する團體がある。さてこれ等の國の人々が外の國民より異つた性質或は性格を有するか、即國民性なるものがあるかといふと、これは大問題である。大問題と言へば何でも大問題となし得るが、私の言ふ大問題といふのは、若しありとしたならばどういふ結果を來たすといふ意味での大問題にあらずして、僕の大といふのは問の字について居るので、大きな疑問の意味である。といふのは國民性とでも名付ける心理的現象が果してあるかないか、その國民性そのもの丶存在を實は私は疑つて居る御承知の通り大戰爭の前には獨逸人は己の屬する民族人種の德を讃へるために愛國的學者達が寄集つて、「ポリチシエ・アンソロポロギイ・などいふ學問を拵へた。是れは、政治的人類學と譯さんより政治用人類學であつて、その目的はゲルマニッシエ人種より優つた國民はない。世界の文明といふ文明は皆彼等の御蔭で維持したのである。此人種の居らぬ、此の人種の血のない所には、文明の名に値するものは起らぬと主張した。斯く極端な所まで論じた學者は一人や

二人ではない。或はそんなことを言ふけれども、英吉利にはシェークスピヤーが居るではないかと言ふと、彼もその血統を調べれば獨逸人種だ。伊太利のダンテは勿論獨逸人種で、キリストも獨逸の血統だと唱へた。流石に獨逸は研究の行屆いた國柄丈あつて、吾々素人が讀むと成程キリストの系圖がダビデから來たと聞いたが途中獨逸人の血が混つて居るらしいと思はしむるやうな、證據を擧げて居る。すべて平均以上に優れた人は、皆獨逸民族の血が混つて居ると誇つた。併して猶ほゴビノー氏に依れば、獨逸の國が衰へるのも、他國人種の血を混ゆるからである、純粹の獨逸の血を護つて居れば、彼等は全世界を統治すること疑ひないと、頻りに公言したものである。つひ此間もさる獨逸の學者が、ムッソリーニが獨逸人なることを論じた。此事は或は新聞にて御承知かと思ふ。吾々素人の目から見ると、いかにも極端に走つた曲學の說、學說の美名の下に一種のプロパガンダを行つてあるが如く見ゆる。一定の政治目的を遂げんが爲め無理やり議論を構造したものとしか思はれない。かかる議論こそ改造して貰ひたいものであるところが、これとまた反對に、國民性などと稱すべきものは斷然無いものだ、人間はどこへ行つても同じであつて、人種の區別はたゞ境遇によつて少しく異なる位のもので、人種の區別は單り人種學即ち「エスノロヂー」の方面では多少顯著なるものもあるが、民族の精神的方面の研究即ち「エソロヂイ」なぞと言ふものはない。眼に見ゆる、風俗、習慣、制度等を論ずる「エスノロヂー」には無論各國に差異がある、鼻の寸法などは無論人種によりて違ふけれども、もつと奧に立入つて民族の性質に至つては甚しき差はない。故に民性學とも言ふべき「エソロヂイ」の學問は成立せぬといふ說は、殊に近來盛んに行はれて居る。亞米利加のボアース氏などは中央亞非利加の黑ン坊でも暫く歐洲の白ン坊の中に入れて置けば、雜婚しなくとも段々白くなる歐羅巴から何拾萬の人間が年々米國に移住するが、其內、一代を經ないうちに頭の恰好さへ違つて來る、その子供即ち二代目になると鼻の形と言ひ目の形と言ひ皆違つて來て、三代を待たずして全く顏形さへ、所謂亞米利加人になり了はる。故に人種的の區別は不合理だといふ說が盛んだ、此說は移民問題解決の上に頗る重要且つ有利な議論である。これで寸尺を量つて形而下の確かな實驗を基として立てたる議論だから信頼するに足る。併ながらこれは形の上に現れた、「エソノグラフイ」の研究法であるが、ボアース氏は「エソロヂイ」に對しては、何等區別無きを力說してゐる。

右の如くたつた玆に二ッの極端なる例を擧げたゞけにとどまるが、この二つの學派には、それ〴〵據るべき事實があるので、吾々その道に在らざる者は、いづれの議論を聞いても感服する許かりである。故に彼の移民問題などが起ると、何となく獨逸の議論杯に感服したくなる。ボアースの議論に傾きたくなる、これまた己れの爲にしやうと思ふところがあれば、知らず識らずそつちへ向く。感情的には人種區別なしといふ方の議論に賴る。であるから恐らくかくの如き問題に付て

は、まだ客觀的な學術的の方法を用ゐて、立證した結論はないかと思はれる。餘程感情が混つた議論を、學者がして居る如く思はれる。私は今に記憶して居るが、餘程以前のことである。佛蘭西の心理學者であるルボン氏が、各國の國民性を説明したうちに、日本人を殊に罵倒的に批評して居る。淺薄な國民、たゞ猿眞似の上手な國民、西洋の文明を批相的に模擬するけれども、それはほんの薄ッぺらな皮であつて、直ぐ剝げて仕舞ふもので、海軍なども英吉利に倣つてやつて居る、軍艦などを外國から買つて――その時日本にはまだ軍艦が出來なかつた――さうして海岸にはぶら〳〵浮かばつて居るけれども、いざといつた時には何の役もすまい。たゞ機械をそこに備へて置く位の話であつて、これを活用、運用する力は決してない。なぜかならば軍艦の構造の良し惡し位は判斷するのは、所謂インテリヂエンスを以て出來る。して日本人は此位の智能は有つて居る。又黒奴でも之れしきの分別はある。インテリヂエンスは動物にも有るけれども、キヤラクターといふものが無い。日本人にはキヤラクターは欠けてゐる。少しく有るとしても之れは、歐羅巴人のそれとは大に違つて居る、さうして文明の利器を運用する能力はキヤラクターであつて、インテリヂエンスではないと結論した。我輩が此書を讀んだ際、其の中にヂヤパネースを書いてある所に來る毎にピーの字をヴイの字に改めてしてジヤヴネースと訂正した。但しこれは日本人を知らぬの甚きもので、ルボンとも云はるる學者にあるまじき事ゆへ活字職工の誤だと思つたからである。さうしてルボンといふ人は私は甚だ感服しない。寧ろルボンを輕蔑するやうな心地になつたのである。先年の大戰爭の際に、ルボン氏の戰爭原因、經過及び結果等に關して屢々論説を發表したが、彼の謬言にして只一つとして中つたものはないと佛蘭西人は冷評して居るのを見て僕の溜飲が下つたのである。同氏が國民性を論じたのも餘り當てにはならぬと思ふ。

さて話は一向本問題に觸れぬやうであるけれども大體國民に特有なる性質があるかないかといふこの根本問題は只今述べた通り、今日猶ほ學者間に徹底した議論はない。吾々は新聞雜誌或は談話の中に某國民はかう、某民族は左樣と概括的に論ずるが、評論の範圍は甚だ狹い。現に私は近頃勤めて居つた、ジエネヴアに於ける國際聯盟の事務所では日々に各國の人々に接する。で、例ば自分の預つて居つた一局に於ても、日本人は私一人で、私の秘書には佛蘭西と英吉利の婦人、其外局の庶務には、もう一人英吉利の女が居る。其外には波蘭のワルソー大學の教授と羅馬尼亞の大學の教授が居り、補助として芬蘭の女が一人居る。如斯、各國の人が集つて居る、事務局全體には五百人の役人があつたが、それを國別すると四十個國から來て居る、まるで「エスノロヂー」といふよりは、皆同じやうな着物を着て居るから、「エソロヂイ」の方から言ふと頗る材料豐富な博物館たるの觀を呈し、尙ほこの國際聯盟内に行はるゝ話にかういふことがある。世界中に懸賞論文を募集した。論題は「愛」であつた。するゝ英吉利人が亞非利加に於け

る家持の記事を書いた。これは英吉利にしてありさうなこと、佛蘭西人は象の戀愛說を書いた。伊太利人は「おゝ象よ象よ」と歌ふが如き、象に宛てたる詩を出した。獨逸人は六百頁の大作を「象研究の緒論」として著はした。波蘭人は「波蘭の主權と象の關係」といふ政見を述べた。日本人のことは書いてなかつたが、まあかういふ風に國々の心持と氣分が異なつてゐる。尤も波蘭といふ國は非常に政治熱の盛んなところで、何につけても波蘭一點張りで他事を語らぬ傾向がある、それでいくらか波蘭にあてつけた話であるが、それはそれとして此話は所謂國民性を餘程よく現して居る。尙外にかういふやうな話がチュネーヴに行はれて居る。英吉利人一人居れば愚昧なり「ワン・イングリッシュマン・スチュピッヂチイ」英國人二人居ればスポーツだと、三名居れば大帝國をなすと。波蘭人に付てはかういふことを言ふ。一人の波蘭人は人を魅し、二人の波蘭人は直ちに爭ふ、三人居れば三政黨をつくると。現に今のところ波蘭には七十餘の政黨があるさうだ。支那人に付ては私は餘り感服しない。若し支那の方が此處にお居でになつたならば、私が同意しないといふことをお含み願ひたい。一人の支那人は何でもない。二人の支那人あれば喧騷、三人居れば亞米利加の保護國なりと。これは少し言ひ過ぎだと思ひます。そこで日本人のことを、日本人一人居れば沈默なり、「ワン・ジヤパネース、サイレンス」日本人二人居れば微笑「ツウ・ジヤパネース・スマイル」三人居れば不可思議なり、「スリー・ジヤパネース・ミステリー」。この話は私の本論に入る門口である。普通に外國から見た日本人の特徵は沈默である。玆に說くまでもなきことながら、國際聯盟には各種の委員會がある。軍備縮少だとか經濟だとか、或は阿片會議といふやうなものが今四十餘もある。其會に多勢の日本人が交る〳〵委員になつて出席する。無論その多くは言葉の關係上沈默を守るを國威を輝かす道と心得てゐる。齒痒いやうに沈默を守る。發議討論することは甚だ稀である。一目討議の問題を理解せぬと見ゆる。然し採決の時はチャンと擧手もするし起立もする。ただ口で同意を表することはしない。そこで「一人の日本人は沈默なり」といふ詞が出る。ところが二人日本人が集まるとお互に見合つて、にやつと笑ふ。のみならず日本人は大層笑ふものであるといふ評判が高い。我々は嚴格に姿勢を正しくして居る時には笑ひもしないが、二人同胞が居るとお互に笑つたり冗談を交へたりする程騷々しい。三人集ると笑つては居るが、議題が分つたのだか分らないのか、賛成だか不賛成だか實に分らぬ。一種不可思議ミステリーとなる。而てこのミステリーといふのは、決して好き意味ではない氣味が惡いといふ意を含んでゐる。日本が議事を全然分らぬといふのならば沈默の理由も明瞭だが、採決の際の有樣を見ると何もかも理解してゐることが明かだ。先に述べし如く一人の英吉利人は愚鈍なりとの言は英吉利人は甘んじて受けてゐる。己れが愚と呼ばるるを喜んで居る。フールと言はれたならば怒るかも知らぬが——愚鈍愚昧といふやうなぼんやりして、分つたか分らないか判らぬ樣の態度を示してゐ

る。然し彼等は何時も大きな要領だけはチャンと摑んで、饒舌ることは佛蘭西人に委して、自分達はボンヤリ坐してゐる。彼等は花は他に譲り實は自ら收めてゐる。佛蘭西人は兎角能辯をもてあそぶが、英吉利人が饒舌ると皆欠伸をしたり居睡して居る。聽くことを以て己れは喜びとするが如き趣の形容詞を戴くことを一種のプライドとする有樣である。さうして肝腎の所に來ると中々以て愚鈍でない。ソコで日本人の方は何だか分つたやうな分らぬやうな所まで英國人風である。然し我々は決して　鈍たるを以てプライドとはしない。反對に愚なり抔と許せらるれば忽ち決闘を申込む意氣込がある。否我々は、鈍でない、何の事でもチャンと筋道が分つて居る、それだから他人は我々が氣味が惡いと思ふ。それがために第一に我同胞が外國人に與へる印象は、氣味が惡い陰險な國民だ、といふ考へを起す。此印象はあらゆる方面に害を來す虞れがある。何事にも日本の言行には何か奧があり、眉毛に睡をつけてよく聽かなければあぶないといふやうに、向うに構えられる、さうして吾々が云ふ言を其儘にすらつと取つて與れない。かう言つたから本旨は多分この反對だらうといふ念がある。これは實に吾々を損な立場に置かしむる。それで私が玆に此題を選んだのも、それを深く感じてかういふ印象を外國人に與へた責任は全體の國民にあるが私個人としても、その責任を分たねばならぬ。長く海外に在つて外國人と交際した關係上、申譯かた〳〵此處に一言するのである。敢えて他あるでない。

然らば果して日本人は陰險で氣味の惡い者であるか、どこにその證據があるかといふと、この證據を擧げるに私は假りに外國人の立場より云へば、大別して私は國際問題に付て日本人の態度は如何といふこと、二つには外國關係を別にして、國内で如何なる國民性を國家が現して居るか、第三には個人としてどういふ性質を示して居るか、この三段にして考へて見たいと思ふ。尤もこれを詳しく述べると例が多過ぎてあまりに長文となるから、多くの例を省きませう。議論としては頗る簡單である。第一の日本の國際的態度について西洋人が、何故吾々を氣味惡く思ふかと問へば、何しろ長い間鎖國主義を守つて居つて、六十年前に始めて開國したから、まだ外國の交際に馴れない。それに言葉が日本は縱に書いて西洋文字と違うから早くは馴れ得ない。それに物の考へ方が違う。ベルグソンの云ふ通り西洋人は推理的で東洋人は直觀だ、東西間に折々喰違の起るは無理からぬことである。その上折り〳〵我々さへ變だと思ふことを外交上我が政府はやつた。私は此處で政治論は憚かる。然し過去の事實より外國人から、やゝもすると例に出されることは、彼の大戰爭中支那及びシベリヤに於ける火事泥的の行爲である。幸か不幸かこれは世界中に普く知れ渡つて居ないからいゝやうなものゝ、如何にも極東に於ける日本の態度が大戰爭中はつきりしないことは我々も否めない。殊に西伯利出兵の如き、一昨日も衆議院でこれが爲にとつ組み合があつたといふこと、國内に於てさへもあれ程に疑しい問題を惹き起す位、なるだけ能く諒解しや

うといふ我同胞に於ても、そこに反對が大分あるやうだが、況して我國民の感情に頓着ない外國人から見て、西伯利出兵の如きは何かミステリーを包んでゐる。また所謂二十一個條の如き、これは殊に亞米利加留學の支那人の口を借りて、一層ミステリー性を帶びたのである、さういふことから如何にも日本のやり方が不可思議となつた、また近頃外國に起きた疑は阿片問題の處分である。日本で阿片を止めるのか止めないのか、止めるとは言ふけれども止めるやうな風がない。一層印度のやうに止めぬ腹なら斷然止めないのだと云ひ切るが好い。阿片耕作から大きな收入を得るから是非それはやらなければならぬといふ。成程道德上惡い。惡いのは承知だけれども背に腹は替へられぬと、明らさまに言へば或は愚鈍かも知れぬけれども、態度がよく分る、日本の態度はさうでない。道德上惡いと公言しつゝ止めない理由も判然述べない。尤もいま印度のことに就て說きましたけれども、近頃新聞や何かで御承知でありませうが、これがため英吉利は亞米利加から非常な攻擊を受けたのである。けれども印度で阿片を作ることに就ては飽迄もやると昨年まで主張して居つた。ところが昨年何を悟つたか、斷然これを止めることに決した。併し急には止められぬから年々一割づゝ減らして、十年經つたならば全く印度の阿片耕作を廢する。固より藥用の少量は續ける、たゞ外國に輸出することを斷然止めることを宣言した。

今玆に例を以て說明せし如く我邦の對外政策にははつきりしないことがちよい〳〵ある、であるから好意を有たない者は、その他かある事柄を擧げてあれもからであらう、これもからであらうといふて、神戸のクロニクル新聞の樣に何事に就ても惡く解釋し易い。その論據はどこにあるかといふと、古き例を引出して來て、現在と未來を批判する。我々は痛くない腹を探らるゝ感を有つのである。併し願くば好意を以てならば尙よし少くとも公平に日本の外交研究をした人はミステリーを語らぬ。日本外交のレコードは頗る良好である。グレー卿の書いた傳記を一見しても其處に、日本のことはたび〳〵掲げてあるが、いつも日本に讃辭を呈し居る、あれは公けに本に書いてあるが、同卿は內々どうか知らぬと云ふ人のために私は一言いたして置きますけれども、私の知人でグレー卿の親友が二三人ある。その人等が直接彼の口より本に現れないところの日本感を私に傳へて吳れた。何れも日本の外交に對しては非常な好感を表して居る。かの北淸事件に就ても或は日英同盟の行はれた時代に就ても、日本の外交に非難するところなしといふことを、日本に何の關係も無い人に屢々繰返して居つたことを私は聞いて居る。また亞米利加人でもさうである。彼の北淸事件の時は亞米利加人は傍觀して居つたにも拘らず、公平に見た者は日本のやり方の秩序ある合理的なことを見て、ただ賞嘆して居るのみである。故に西伯利出兵も矢張り北淸事件のやうになるかと信じたところが此の望を裏切つたので急に信用が墜ちたけれども、けれどもちやない墜ちたが爲め、信用を恢復するのに今度の支那の事件に對して、如何なる態度に出るや世界は注目して居る。また國際聯盟に加入してから、日本の

態度がミステリーの幾部分を失つて、吾々を始め個人としてはミステリーの印象を全く取消すことに成功しなかつたとしても政府側では更にミステリーの度を増さない。阿片問題は前に述べたが外のことに付ては日本の態度が明かである。種々の例を綜合して考へて見ると、まづ國際的に日本の態度は非難を受くべきところは甚だ少い、或ひは笑ひを催すことはあるかも知れぬが――、非難を招く點は甚だ少いと思はれる。我が國民性の弱點は現今の外交には著しく現はれて居らない。寧ろ長所が現はれて居るかと思はれる。或人はかういふことを言つた。日本は武士の國だ。支那は商人國なりと。であるから商業上の道德は支那人は日本人より遙かに進んで居る。支那の商人の一言は決して破ることはないとは專ら西洋人の證言である。併し日本の商人の一言も、二言も信用するに足らぬと。如何とならば日本では從來商人なるものを輕蔑したから、「人を泥棒と呼べ然らば彼必らず盜まん」との諺の通り、商人は欺くものなりとの觀念が行はれた爲に、彼等の道德標準が下つた。反之流石日本は武士國丈けあつて、政府の役人、學者の如き人々の言には間違ひはない。此點になると恰度支那と反對で、支那の役人位の言行のあてにならないものはない。例へば國際聯盟に加入した上は是非とも理事會にまで這入らなければ承知せぬと主張し、遂に此事に成効したけれども、分擔金は、四年間も拂はない。支那の役人が果して商人であつたならば、かういふ借金は片つ端から拂うだらうに、役人は更にさういふ點には頓着しない。如斯日本の有識社會の言は信ずる價値があるから國際上政府は威信も信義もある。日本人が普通に受けて居る不正直だといふ評判は更にない。全然ないではないが證據が餘りない。それならば外國に對してでなく、國内に於ける日本政府のやり方に如何なる民族的弱點が見ゆるか、又國内の動作に鑑みて國民の欠點は對外態度に比べて餘程よく現はれて來ると思ふ。動もすれば例に出されるが邦人は偏狹だといふこと、寛大に物を處さないこと、英語で言ふと「イントレラント」な所がある、人を責むるに酷な所がある。英吉利の有名な歷史家のフレンダースペトリー氏が、文明といふものは四つの要素を必要とすると陳べた内の一つに「トレランス」を算へて居る。私がこの先生に一度會つた時に、あなたの論文中にトレランスといふことを陳べられたが、あれは曾て老人が「リバーテー」自由と稱したものゝ中に含蓄されて居りはせぬかといふて質したことがある。先生暫時首をひねつて居つたが、さうです、廣い意味に使へばそれでいゝ、けれどもリバーテーといふ字には範圍の廣狹甚しいから、私はトレランスの方を選ぶと答へた。このトレランスが日本人に欠けてゐる、近き例を取ると思想の取締と言つたやうものである。個人に任かせ置き意見に立ち入りて取締らんとする。反對の意見ならば十分に饒舌らして聽かうとの度量がない。とても英國――英米と言ひたいけれども、今日の形勢上私は米を茲に入れることを躊躇する――まづ英國人から見れば實に窮屈千萬にして無益の勞としか思はれまい。皆さんも御承知の通偏狹

の「ハイドパーク」に行くと、勝手放題な社會主義だらうか共產主義だらうが、皇室廢止論だらうが何でも聲高らかに演べられてゐる。勝手なことを饒舌つて居る、これこそトレランスと云ふのである、英吉利の運送業者のストライキの時に私は倫敦に居つたが、成程こゝだここだと思つた。これ程社會に迷惑かけてストライキをしてゐる勞働者に對して、お前はお前の主義で行く、俺は俺の所信がある各自の評議に任かせる態度は恐らく他國に決して見られぬ。クックの如き日本なら疾うにやられて居ると思ふ人も、平氣で市中を獨歩しても更に生命に何の危險がない、隨分手緩いやうに吾々は思ふ。さう思ふこと程それだけ我邦がトレランスがないのである、このトレランスなき所は、吾々の先天的國民性とは云はぬが國民の鍛錬の足らぬ點と思ふ。これが爲政者の手先に現はれると兎角世界の物笑ひになる私は政治論をするのではない、餘處から見る外國人はどう思ふかといふことだけを話すに過ぎない。尙ほ右に加へて陳べたい事は、社會政策であれ或は勞働者保護の問題であれ。或は勞働組合に關する態度であれ、日本人はまだまだ自由の何たるを知らぬのではないかと思はれる節がある、個人の自由を尊重する點に付ては隨分トレランスの割合少い獨逸でさへ、少くとも新聞を見ると、日本の國民はまだまだ歐羅巴に及ばぬを嘲つて居る。また些事ながら一つ附言したいのは、私が聯盟講堂へ行く途中で見たことである。西洋各國に動物虐待防止の運動が盛んにある。近頃は此運動を國際的にするの動議さへある、一體動物虐待は法律か取締規則か何か個人以上の權力に依つて防止して居る、さて日本では動物の取扱がどうなつて居るかといふと、玆に奇態なる心理狀態が現はれ來る、日本人は死んだ動物さへも大事にして、藝者が時々集つて三味線のために犧牲になつた、云はば藝術に殉死した猫の供養を行ふ誠に人情の深いことで感心なものだ、死馬の爲めに祭も執行する、それもその筈、佛教は總ての生命は皆一なりと敎へて居る。猫であれ馬であれ人間であれ生と云ふ生は是皆一としてゐるために、吾々は皆動物も同胞視する、故に虐待などは理論に於てある筈がない、けれども私が一時間前迄公園を通過する時、私が此の八年間歐羅巴で見たことのない、馬の取扱ひを目擊した。又家畜取締規則もない。於是、西洋人は日本人といふものは兎角殘酷な國民なりとの印象を得るのは當然である。そこで國の法律なり國の施政方法を見て判斷すると、いろいろな弱點が現れて來る。

これも例を出せば數多ありませうけれども、私は殊に第三の個人の言行なり、思想なり若しくは品性なりに現れる弱點を述べたいと思ふ。外國人が吾々を批評する時には、多くは個人の見る所によつてする、國の法律を調べたり、歷史を讀んだりして批評するのは甚だ少い。吾々にしても同然で、外國に旅行する時分に、その歷史を挾んじて國民性を究むることは少い、個々カフェーで美人でも見ると、英吉利の女はきれいだなんと言つて歸つて來る。目前の些事を以て判斷するのが普通である。

この前私が歸朝の折、船が瀬戸内海を通る間に見たことですが、一人の外國婦人が周圍の景色を見て、「いゝ景色だな、きれいだなあ」、と觀賞したところが、傍に馬關から乘つた書生さんが居つたが、婦人の言を聞いて、「サンキユー」とやつた。「あの島の森が好い」と云ふと又々書生サンは頭を下げて、「サンキユー」と禮を述べた――その婦人が國へ歸つたら、日本人の愛國心の大なること、國の石木を自己の物の如く想ふその深き情を物語り、以て、愛國心の一例にするに違ひない。

この間も私が神戸から上京する途中、一人の外國婦人が頻りに窓外を見てゐる。此の婦人は前にローズベルトの時代商務卿をした人の未亡人で、今は諸種の社會事業に活動をして居る婦人である、何を見てゐるのかと思ふと、日本の事は地理書や案内記で大略承知してゐるが、人間の働いて居る所を見たいのだといふ、それで百姓や小商人の戸外に働いてゐるのを見て喜んで居る有樣であつたが、斯くの如くして日本に關する概括的の感想を拵へるのです。

そこで普通一般の外人が、彼等の限ぎられたる實驗に基いて日本の國民性をどう見るかといふに、第一には愛國心、先に述べた國を愛するの念が強いことは、恐らく世界に於て日本人に及ぶものはないと思ふ。或る點に於ては愛し過ぎるとも云へる、即ち愛すべからざる事も愛する、是であれ非であれ、我が國のことなれば之を愛する。

二三年前、私が瑞典諾威を旅行してゼネバに歸る途中伯林を通過した。ところがあらゆる書店の窓に新版物として黄色な表紙の本が出てゐる、見ると「日本ペスト」なる題目である、その題の不愉快さに求めもせずに停車場へ行くと、新聞の賣子が皆その本を賣つてゐる。僕も書物の内容を知らずにケギライするのも大人氣なしと思つて一冊求め、汽車中で讀んで見ると、日本では科學が非常に盛に行はれてゐる。そして最近には或る博士が一種のバクテリヤを發見した。それは恐しいもので、一滴たらすと何所までも擴がつて、三十分も經たんうちに一國の全人口を殺す力がある。日本海軍の軍醫は、この發見を利用せんが爲め、メキシコ沿岸に一寸斗り突出する岩を租借してこれに穴を穿ち、そのバクテリヤの繁殖場を拵へて、米國と事ある場合にはそのバクテリヤを持出して、ばら〳〵と撒布する計畫をしてゐる、さういふことを書いた小説なのです。要點は國のためには、如何なる危險も冒し如何なる手段もとる心をあり〳〵と現はしたのです、人類を滅しても日本人だけが存在すればよいと考へてゐる國民であると諷した。結局世界は日本人に歸すべきものである。他の國民は悉く滅亡させるを喜ぶ英、米にも日本人の感情を害するやうな本もあるが獨逸では時々毒々しい筆法の書物が現れるのです。

餘計な話をするやうだが、やはりその時分でした、伯林でやはり黄色な表紙の本が「アジアテーン」即ち「亞細亞人」といふ本が至る所の本屋に見えた。それも停車場の賣子から買つて見ると、亞米利加の資本家が、日本の醫學校を悉く買收して、一大トラストを作り敢

府が監督の下に一つのモノポリーにして世界中ののろまな男を日本に引致する計畫を述べたものであつた。そのプロパガンダのために、おいらん道中を世界至る所に行ふ事を記し、何十人の美人を率ゐて歐羅巴に旅行する話を書いたのである。これも根本に於ては日本人の性格を輕蔑しきつたものである、一讀する者は、如何に日本人が御國のためには道德も何も捨てるかといふことが分る。即ち愛國心を極度に發揮する國民であるの印象を深からしむる。

古い話だけれども、あの「タイフーン」大嵐といふ芝居もさうです、今は止んだから結構ですが、一時非常に盛には行れた、私が十二年前紐育へ行つた頃は四箇所で同時に擧行して居つた。その要領は、日本人の心中には愛國以外何の道德もない、國の爲めなら己れの命は勿論のこと、他人の命でも何でも顧みないことを現して居る。斯く日本人の愛國心は、西洋人の眼にはやゝもすれば極端なる變形的否病的思想の如く映つて居るのであります。

ところが日本人は、大概の缺點はうまく隱す、隱し得るのです。何故かといふと、物を言はんからです、「口開いて、はらわた見せるざくろかな」、口を開かないから、はらわたも何も見せない。それから日本人は、普通に謂ふ「ポライト」だといふことは誰も是認する。山水を褒められても「サンキユー」と低頭大謝する位、たゞその「ポライト」なる言行動作が一定の形式になつて、西洋人の謂ふポライトとは大に違ひはしないか、その違ふ點が恐らく缺點ではないかと外國人が思ふのも無理はない。違ふものは、ポライトといふのは相手の人に迷惑をかけぬやうに先方に快く思はせる努力である、これが禮儀作方の基礎的觀念である。ポライトたる以所は常にその目的を達するかといふと、虚禮と形式多き結果寧ろ其の目的に反對することが往々ある。

一寸例を擧げると、人を訪問して座敷へ入る。そして謙遜の余り、入口に座つて、こちらへ〳〵と言はれても、なか〳〵立たないで後から來る人の爲に通路を遮ぎつて迷惑をかける、人の迷惑はどうでもよい、自分が謙遜してさへ居ればといふ態度である、日本人は形式的禮儀に却て相手に迷惑をかけ、或は不思議の念を與へるといふことは否まれぬ。

日本人を研究した人が不思議に思ふのは、我々の常に笑ふことである。おかしくもない時にハハ〳〵とやる、しばらくお目にかゝりませんでしたが……ハハ〳〵と大笑する。甚だしきは、父が先頃死にましてねえ……ハハ〳〵。我々自身には何故笑ふかの理由が意識に解つてゐる。私の親が死んで私は悲しんでゐる、けれどもこの悲哀の苦痛をあなたにまで掛けたくない。彼の死生は貴下に無頓着なことであるとの謙遜の意味が含んである。然し一方より見れば親を失つた苦痛にして眞に深いものなら人情として果してこれを抑へて笑ふことができるか、實に日本人の心理はミステリーなりと言ふ。有名なラフカデオ・ハーン氏の書物の中に、「ジヤパネース、スマイル」の一長篇がありますが、私も日本人の笑ふといふことに就て西洋人に説明するに屢々苦

しんだ。日本人はポライトでありながら、外國人が汚いと思ふことを平氣でやる。自らさへ氣を惡くする事を他人の前で不遠慮にやる。例へば到る所で唾をする、それも高かく〳〵と喉を鳴らして痰を吐く、そんな事は歐羅巴では、よほど下劣の輩にあらざればめつたになさぬ。口を漱ぐ時にも嘔吐の音を立つる如きは外人には妙に映る、自己の清潔のためには、人の不愉快は顧みないである。私の知人の英人が芝の何町に家を借りて居た。或時「日本家はどうですか」と尋ねたら、「毎朝近所の人のうがひで目が醒めます」と答へた。又は楊子を使ふこと或る外人は小楊子を口に啣ゆることは日本の「ナショナルゲーム」だと言つた。西洋の習慣では人の前で楊子を用ゆるのは禁物である、單に西洋の習慣でない丈けでは善惡の區別がつかぬが、日本さへも小楊子の使用は決して見る人に好感を與ふるものでない。

無論これらの事は些細なるが故に態々茲に引用したのである、外人は些細なる所を見て國民全體を批判する、日本人はポライトだといふけれども、人の前で鼻をかむ、唾をする、楊子を使ふ、眞のポライトたる心なしと斷定する、日本人の唯一の誇として居るポライトネスもそれがために消滅することになる。

それから日本人の一大缺點と見做さるゝことは、日本人に正直を欠く點である。これに就て四五十年前から海外に行はれてゐる話がある、幾多の人士が、幾度となく辨解をしたが今尚續いてゐる、日本の銀行には支那人を雇つてある、日本人は平氣で噓を言ふから彼等自身の間にも信用がないから金錢を託することに不安心だ、故に日本の銀行でも現金を日本人に扱かはさせない。代りに支那人を使つてゐるといふ話。此の話は一種の迷信の如く四方に傳はつて居る、從て中々叩き壞すことができない、日本の政府は噓を言はない、けれども國民は、個人にしても、會社にしても一向日本人の言ふことは信用出來ぬ。是は一にはポライトたらん爲め相手の感情を害さぬと努めて自分に不愉快と思へば好い加減なことを言ふからである、抑々日本人にある諸種の缺點は衣食住に起因するものであらう。日本食は恐らく文明人の中で最も粗末であらう。加之恐らく日本ほど食料品其他必要品の高價なる國はあるまい。家賃、着物、日用品總て高い、そのために營養不足となり、神經過敏となり延いて精神上の缺點となる。

かういふ話がある。或る支那の學生が、コロムビアの大學へ試驗を受けに行つた。すると試驗の最中受持の教授が、これは直接試驗問題に關係ないが序に聽きたい、一體東洋文明と西洋文明と比較して、何れが優ると思ふか、支那學生は暫らく考へて答へた、交通運搬等に就ては、吾々は到底西洋に及びません、けれども支那が西洋に優る點が三つある、一つは文學、私の國には三四千年前に既に文學が盛んであつた。哲學者、歷史家、美文家、詩人、皆立派な者が出てゐる。シエクスピヤ位な者は二十人もあらう。第二に宗教、西洋の人達は、吾々を野蠻視して宣教師などを送つて呉れるが、實は抱腹絶倒の次第で、私は亞米利加に四年間も留學してゐて、何萬といふ人を見、何百の人と交際し

く話つた。けれども未だ曾て一人でもキリストに似た人を見たのことはない恐らくキリスト教は、あなた方にはあまり高過ぎるのではないか、それともあなた方はキリスト教を奉ずるにあまり拙な過ぎる民族ではないでせうか、私の國では、教へる所は低いが、日々それを行つて居る、宗教でやれと教へたことはやつて居る、理想は低いか知らんけれども實行はして居る、あなた方のは高い〱と言はれるが、實行し得ない宗教である。實行といふ點から論ずれば、吾々の宗教は遙に優つて居る。第三は料理。西洋人は吾々が鼠を食ふなんて言はれるけれども、あなた方の食へないやうな鼠をよく調理して、うまく食へる方法を研究して居ると言つた、是れは實に要領を得た話である。實際支那料理は歐羅巴にも、亞米利加にも大に流行して居る。反之日本料理で西洋人間に好かるゝのは僅にすき燒位である。日本人でさへも、日本料理が他の調烹法に及ばぬことを感じて居る。この料理の進まないのは民族的の缺點とでも言ふべきものではなからうか。これに就ては何れ改めて申述べたいと思つて居ります。

尙外國人の立場から見て痛切に日本民族の缺點だと思ふことは、日本人が交際の拙劣なること、第一交際しにくいこと、禮儀が正し過ぎるのか知らんが一見舊知の如くといふやうな言葉をめつたに用ひることがない、どれほど話を打明けていゝのか分らぬ。又汽車や船へ乘つても、互に睨め合うてゐる、向ふから何とも言つて來ない先に、俺の方から出るのは甚だ不見識だといふ考、人に陛を讓るは、その人に負けたやうな氣がする。甚しきに人が立つてゐればいゝ氣味だといふやうな態度さへ見える。昨日も鎌倉で見たことですが、電車に學生が一パイ乘つてゐる。そこへお婆さんが小兒を連れて入つて來た、學生は頑張つて一寸も讓らない、このくされ婆がと言つた格好、此の排他的態度は外國人の目に有害なる印象を與へてゐる。

私は八年間も歐洲に滯在し、日本から來る人士を紹介するのが一つの役目であつた。紹介する前に、豫め某氏はかく〱の大家なりと吹聽して置き此の人愈々辭するに至つて、握手するに、甚だ拙なく且つ不親切なることは先方に對し、如何にも不快の感を與へる、西洋の禮儀に慣れぬといへばそれまでの話だけれども、此習慣れる慣れぬの話でない。心地の咄である。普通手を握るに相手の顏を見るべきに、一寸握つてクルッと後を向いたり、或は先方の足を見つめたりする。要するに交際の術が頗る拙い。寧ろ交際の下手なことを誇り恰かも他の事に長じて居るを誤する者が多い。傍若無人と云ふ言は細謹を顧みざる偉大なるを示すと心得る風がある。

私の今まで申上げたことは何れも淺薄なる觀察でありますけれども、何でもない風俗も習慣も其の根底に於て弱點があれば其の及ぼす所は大きいといふことを記憶したい。兎角一國民が他の國民性を測る時には、深い研究の下にすることは少い。又學術的の方法に依りもせぬ殆んど直覺的に「エソロジー」を測らんとする。近頃こそ「メンタルテスト」が不十分ながらも行はれるが、これとてインテリヂェンスを

こそ幾分測れ、「エソロヂー」の目的物たる「カラクター」を示すものではない。國民全體でなくても、國民の標本と言ふべきの若干を選出し、これにメンタルテストを應用しても猶は「エソロヂー」の要求を充たさぬ、情ないながら今日の場合、所謂國民性を知らんと欲せば直觀的觀察法によるより確かな途はなく、歷史が確實なら他に方法もあらう。

日本は國家として、その國際的態度或は國內の政治についても世界より相當に信用も得た、現に先日某英國人の言にも、過去六十年間、各國が倫敦で國債を募つたが、たゞの一度も債務を怠らずして必らず借金を支拂つた國は二つしかない、これは智利と日本であると、かういふ點に於ては實に名譽と信用を世界に博した。國として斯く獲得した位置を、吾々平(ヒラ)國民が維持し得るや世界の交通は今や益々盛に進み、これに伴つて國民間相互の交際が日々親密になり行く世の中に、國民の威信を保つ者は我々個人の朝暮の動作である。於是我々の日々責任の重きを感じ本題を揭げて玆に一言した譯である。(三、二七)

(本稿は博士が慶應義塾に於ける本社の講演會で講演せられしものを補正加筆されたものにかかる)

自由主義のファシズム化的傾向

――吉野作造君及び堀江歸一君の早大事件評を讀む――

大山郁夫

解題　本論文起稿の理由について

（１）筆者の主張への反對意見としての兩君の所論

『改造』三月號所載の拙稿『早稻田の學徒に與ふ』に於て、私は、無産政黨に關係する一實際問題としての最近の早大事件を中心として、大學教授と政黨員との兩立可能論を述べておいた。ところが、それ以來、少くとも二つの反對意見が評論雜誌の上に發表されたのを、私は見て來た。一は吉野作造君による『教授と政黨員との兩立不兩立』に關する一篇『中央公論』三月號）であり、他は堀江歸一君による「大學教授の政黨加入問題」に關する一篇（『世界』三月號）である。

もつとも、兩君のそれらの論文は、直接に『改造』三月號に出た私の論述に據つて書かれたものでないことは明かであつて、恐らく私の早大辭職問題が尙ほ喧傳されてゐた頃の諸新聞紙の上に現はれたところの私たちの主張を基準として書かれたものであらうか。兎も角この點は、兩君に對しての公正のために、ここで特に明言しておかなければならぬ。無論、それにしたところで、反對意見はしかし、他の何物かである前に、矢張り反對意見であるには相違ないのだから、從つて私はさうしたものとして、兩君のそれらの論文に對するより外はないのである。

だがしかし、私が今特に開き直つてそれらの論文の檢討に立ち向はうと企ててゐるのは、實は決して、それらが私へ向けられた反對意見であるため、といふ譯ではないのである。私たちは私たちの日常生活に於て、時としては眞正面から、時としては（恐らく更に一層屢々）側面から、私たちの立場への反對意見を差し向けられるとを、始終數限りなく經驗する。で、私たちがその度毎にさうしたものに一々應酬してゐては、私たちはそれだけで充分に奔命に疲れてしまふだけのことはある。そんなことは、私たちには、して居られないことでもあれば、また、することを欲しないことでもある。――と、大體から言つたやうな譯で、兎に角私は、ただ單に吉野堀江の兩君が私への反對意見を出したといふだけの理由で、それらに取り合はうとしてゐるもの

でない、といふことだけは、先づ以て最初にきツぱりと斷つておかなければならぬ。

それに、兩君による問題の二論文は、私への反對意見として見ても決してその種類中の優秀なものでないといふことだけは、極めて確かな事實である。かういふと、私はそれが兩君のアカデミック・プライドを傷けることになりはしないかを虞れる。だが、私は、兩君と同様に、歯に衣着せずに物を言ふことが、私にも許されてあることを信ずるものである。そこで、正直のところを言ふと、兩君の所論は、如何にも双方とも、月並的な大學教授たちに通有の、一種のアカデミク風の、いやに鹿爪らしく勿體ぶつた辭句の連續で外面を裝はれてこそはゐるが、しかし肝腎の内容は、精々通り一遍の小ブルジョア式常識論以上に一歩を出てゐるものでないことは、私が後に至つて論證しようとしてゐる通りのものである。だとすると、單純に論旨に對する不服といふだけの理由でそれらの論文に反對を加へるといふやうなことは猶ほ更ら以て、私の本意ではあり得ないのである。

（2）筆者への挑戰狀としての兩君の所論

かういふと、『では、それらの二論文は明かに君に對する挑戰狀と見られるものだから、それを不問に附しておく譯には行かないといふのか？』といふやうな問ひを設けて私を試みるものがあるかも知れない。が、それに對してもまた、私は再び斷然『否！』と答へる。もとより、問題の二論文は、表面上は直接私に論難の鉾を向けてゐるものでないやうに取繕はれてあるが、しかし實質上に於ては、そこには厭々人身攻撃とも聞き做されるやうな辛辣味がかつた評語さへもが諸處に伏せられてあつて、多少注意深く讀むものには、それらが紛ふ方もなく私への挑戰狀として企てられてあるものの如く見えることが拒めないやうに出來てゐる、といふことは事實である。だが、それにしたところで、私から見れば、さういふ事もまた、別に異とすべきほどのことではないのである。もともと、私が早大辭職に際して取つた態度は、その結果から見れば、明かに學界及び學校の反動化的傾向の暴露に歸着したものだから、その邊からの痛烈なる批難攻撃に直面するやうなことは、私が初めから豫期してゐた以外のことではなく、更らにさうしたことが今後も容易に絶えないであらうことも、一向想像に難くないことである。それしきのことは、だから私に取つては、先刻覺悟の前のことである。のみならず、さうした挑戰狀への應酬は、動々もすれば純粹に個人的性質のものになり勝ちであるから、大抵の場合は、それを所謂「天下の公器」（或る意味に於て）として見られる評論雜誌の上などへ持ち出すべきものではないといふのを安全とするやうな事情もある。

だが、たゞ當面の問題の關する限り、そこでは我々が、その挑戰狀を、無產階級政治戰線の一翼をなすものと見られてゐる社會民衆黨の關係者である吉野堀江兩君の側から、同じく無產階級政治戰線の他の一翼をなすものと見られてゐる勞働農民黨の關係者である私の側へ向つて投げ掛けられたものと見るとき、最早それへの應答は、必ずしも純粹に個人的意義に止まるものと見做されるべきでなく、そこに或る程度の社會的意義が伴生して來るものであることは、何人によつても承認されなければならない事實であらう。だが、その場合でも、兩君の所論がさうした意味の挑戰狀として見られるといふだけの理由で、私がそれらに掛かり合つてゐる氣持になれたか否かは、寧ろ疑問である。第一に、現在の私の生活は、さういふことをするには、餘りに多

代である。私はこの一文を、さういふ意味とは全然無關係とはいへないまでも、次に述べようとしてゐるやうな、少くとも最も直接的にはそれは多少別個の、そして私には一層重要と思はれる意味に於て、餘程久しき以前から書き出してゐたのであつたが、それさへも中途で様々の要務のために遮斷されて、いまだにそれを終結にまで持ち來たすことが出來ないで居る位だが、ただ昨今病床の身となつたのを機會に、やつとそれを書きつづけることが可能にされたやうな譯である。かういふ次第であるから、單純に私への挑戰狀として見られるといふだけの理由で兩君の所論に立ち向つて行くといふやうなことは、縱しそれに何程かの社會的意義が伴つてゐる場合にもせよ、さうしたことを企ててゐる餘裕が私には先づないといふのが、寧ろ事實に合致した言ひ方だとすべきである。

（3）本論文の主要目的

では、私が今更ら槃々しく兩氏の問題の論文を検討しようとしてゐる意志を表明しながら筆を執つてゐるのは、一體何のためであるか？その理由は？――と訊かれるまでもなく、それは私が恰度今言はうとしてゐることである。

それは、最も簡潔に表明すると、かういふことになる。――兩君及びそのグループが――特に最も鮮明な形に於て吉野君が――代表してゐるやうな小ブルジョア的自由主義は、それの本來の軌道に沿うて進展をつづけてゐる限り、結局は、――特に今日に於て見られるやうな帝國主義下に於ける反動時代の出現に際しては、――それ自身に反動化し、ファシズム化しさへする傾向に陷るといふのが、それの免れられない運命のやうに見える。そして、その過程を、吉野堀江の兩君の問題の論文は、餘りにも明細に展開せしめてゐるのである。

で、今その點を分析的及び綜合的に究明しようといふのが、本文の主要目的である。それには様々の方面からの探究が必要になつて來るから、上の簡短な結論を最終的に論證しつくすまでの道程は、幾分か長くなることを免れないであらう。その點に關しては、前以て讀者諸君の諒解を得ておくことが必要である。そして、その道程が如何なる線に沿うて進むものであるかは、間もなく讀者諸君の眼前に展開せしめられるであらうから、それを今揭示するやうなことは、全く無駄な手數にすぎないものであらう。

（4）本論文の出現を促進した或る實際的必要

ただ私は、かうした論究を企てることの實際上の必要が果してどこに存してゐるかに關して、茲で特に一言を費しておくことは、決して無用のことでないと考へるので、讀者諸君の寛容を期待しつつ、次の通りの短き説明を附け加へる自由を保留する。

今日無産政黨と稱してゐる諸政黨中の或るものが、その或る意味に於て特殊的な地位から、或る特殊的な形式に於て、ファシスト化するかも知れないといふやうなとは、或る方面で眞面目に氣遣はれてゐることである。私たちのやうに、勞働農民黨のみが唯一の眞の無産階級的大衆黨だといふ確信の下に、それの旗の下に來り集まつて居るものから見ると、同黨以外に別派を樹ててゐる『所謂』無産政黨のすべてが、多かれ少かれ、その危險に瀕してゐることが、明かに看取され得るやうに思はれる。就中、例の『勤勞階級本位の政治』を標榜してゐる日本農民黨や社會民衆黨に關聯しては、私が間もなく述べるであら

う理由によつて、そのことが極めて適切に言ひ得られるやうに、私には考へられる。

ところで、日本農民黨のことに關しては、それは私の當面の問題に直接に交渉してゐるものでないから、私は今それに言及しない積りであるが、他方の社會民衆黨に至つては、吉野君や堀江君やを『産婆役』として出生して、いまだにこれらの學者たちの『義擧』を謳歌してゐるものだから、それに深い交渉がないとは言へない筈である。そこで、その社會民衆黨の上にファシスト化の萠芽の實在してゐることもまた、多くの人々によつて相當に注意されて來た事實である。この一點は、少くとも同黨の首腦者たちの或る人々によつて高唱されてゐる『日本主義』とか、『現實主義』とかの主張を概觀しただけでも、我々には極めて有理に首肯し得られるのである。

ここまでは、間違ひやうのない事實である。唯しかし、社會民衆黨の上に實在してゐるそのファシスト化の萠芽は、將來順調に(ー)育つて行く(ー)可能性を持つてゐるか、どうか? 問題は、その一點に繋がる。そして、それはまた、我々の立場から見て、相當に重大性を帶びた問題でもある。

我々は無論、社會民衆黨が自ら札附きの反動的暴力團體となつてムツソリニ式獨裁を行はうとしてゐるといふやうなことを想像してゐるものではない。假りに若し、今日のイタリアやポーランドなどで現實に行はれてゐるやうなファシスト的革命が將來の日本にも出現する時機が到來するものとするならば、その時にファシスト的獨裁の直接の當事者の因つて立つ基礎となるべき、、の社會的組織は、今日既に完全に官僚軍閥の、、の下におかれてゐる反動的及び國粹的諸團體の上に打ち建てられるべきものであらうことは、誰れにでも容易に想像ができることである。けれども、それらの反動的及び國粹的諸團體に對して、社會民衆黨を初めとし、今日餘りにも急速に意識的に右翼化しつつある『所謂』無産諸政黨のいづれかが、若しくはそれらのすべてが、補助者もしくは協働者——積極的もしくは消極的の——としての地位に來るやうなことはないであらうとは、誰れに保證が出來よう! それに、それらの『所謂』無産諸政黨は、そのことのためには、極めて仕事のし易い地位におかれてあるといふこともまた、當然我々の考慮の内に入れられなければならぬ。彼等は即ち、大衆の或る部分に對して、意識的指導者としての地位に於て、直接に接觸してゐるのである。で、若し彼等がその地位を惡用することによつて、無産階級の政治戰線の最尖端に突進してゐる眞正の無産政黨の上に、彈壓的惡法や國家權力や反動團體の暴力やを集中的に誘ひ寄せて、自分達はその蔭に一時的もしくは永續的の安全を貪らうとするやうにならうものならば、我々は最早その結果の重大性について云々する必要さへも持たないであらう! いふまでもなく、さうしたこともまた、ファシスト化的傾向の一つの現はれには違ひない。そして我々は、今日に於て既に、或る程度に、その傾向の現はれを痛感してゐる。が、我々にとつて更らに一層重大なことは、その傾向が今後果してどう伸びて行かうとしてゐるか? といふ一點を見定めることであらねばならぬ。

再び社會民衆黨だけの問題に戻るが、同黨に存してゐるさうした危險の萠芽に對しては、或る程度に反對物としての作用を作用し得るものがあるのではないか? 少くとも、かういふことが幾分かでも考へ得られる基礎がないでもないやうである。どういふ意味で?——といふと、それは斯うである。即ち、社會民衆黨には當初から『産婆役』として關係して來た吉野堀江の兩君といひ、また同黨の中央執行委員會

議長の安部磯雄君といひ、いづれ皆、從來自由主義――斷るまでもなく小ブルジョア的自由主義――の信奉者として知られて來た人々だが、これらの諸君のその自由主義には、同黨のファシスト化的傾向を牽制する力が少しでもありはしないか？　と、かう言つたやうなことを想像するのは、必ずしも無根據な臆測とすべきものでないやうに、一應は考へられるからである。

實は私自身も、嘗て少しばかり、この問題を考察しかけてゐたが、しかし私は、それを未解決のままに放うつておいたのである。ところが、このたび、吉野堀江兩君の例の論文を讀んでからは、最早さういふことは、私には問題でなくなつた。といふのは、私はそれらによつて、小ブルジョア的自由主義は、今日の如き反動時代に在つては、それ自身を止揚することなくして、そのままで直にファシズム化傾向を辿る可能性のあるものであることを、無條件的に承認せざるを得なくなつたからである。私はその理由を、本論文の進行中に於て充分に展開せしめるであらう。

だがもう一つ、私は茲に序ながら附記しておきたいことを持つてゐる。私は私の『早稻田の學徒に與ふ』に於て、自由主義には如何に一定の限界があつて、そしてそれが一たび到達されるや否や、如何にそれが一變して支配階級の協調者となるものであるかを、私の最近の經驗に據つて論述しておいた。ところが、その私の經驗が絡まつてゐる最近の早大事件に關する吉野堀江兩君の批判を讀むに及んで、私は更らに自由主義は、或る一定の條件の下に於ては、如何にファシズムに轉化さへする可能性のあるものであるかを知つた。で、その點を改めて論究することを主要目的としてゐる本論文は、そのままで『早稻田の學徒に與ふ』の續稿を構成するものである。

前篇　小ブルジョア的自由主義の今昔

（1）我々の研究の出發點に横はる一問題

自由主義のファシズム化的傾向。――この合ひ言葉は、一體何を意味するか？

それは、單純に表面上の語義だけについていへば、一見直ちに理解し得られる表現であつて、その間些かの疑義を挾む餘地がないやうである。ただ問題は、しかし我々がそれを現實の社會的狀勢の一面の說明として見るとき、それは抑も如何なる具體的內容を持つか？　の一點の上に存する。

しかも我々は尙ほ、少くとも最初は、問題の範圍を更らに縮少して、それを一般社會的傾向に關聯せしめて把握する代はりに、一應まづそれを、直接に我々の眼前に展開してゐる日本の社會的局面の現勢に適用して、それに何等かの具體的內容が含まれてゐるか否かを檢しそしてもしそれが肯定的に答へられるものとするならば、次にその具體的內容といふものが果して何であるかを確かめるといふ風に、我々の考察を順次に進めて行くことが出來る。――否、我々は、單にさうすることが出來ると言ひ得るだけでなく、寧ろさうすることが、我々の便宜にも適合することではあり、且つまた、何よりも殊に我々の推理の順序の上から言つても至當のことだとすら言ひ得るのである。

ところで、我々が今我々の問題の範圍をかういふ風に限定してかかつても、しかも我々がそれを適當に解決し得るためには、我々は尙ほその前に是非とも企てられなければならない仕事が今一つ殘されてあるのを見る。それは一言でいへば、今日の日本の社會的諸勢力の分布對立關係の現勢の上に於て、小ブルジョアジーの『社會的存在』が如何

なる位置を占め、如何なる形勢を展開せしめてゐるかを測定する、といふ一事である。この仕事が、なぜ回避されてはならないか？　それは言ふまでもなく、所謂日本の社會生活上の特殊事情が何ういふものであるにもせよ、小ブルジョアジーの社會層が、年來、政治的にも社會的にも、自由主義の本來の支持者たちの本據として存續して來たといふ一點は、日本に於てもまた、一般の所謂先進諸國と、少しも變はりがなかつたことだからである。

もとより、茲でこの問題を新たにその根本に溯つて說き起さなければならないといふ段取りになると、それは我々を、どこまで行つても涯てのない旁徑に踏み入らしめる結果に終るのみであらう。我々はさういふ穽に引ッ掛かつて、徒らに我々の精根を傾らせてはならない。だが、それにしても我々は、今我々の論究の出發點に際して、少くとも我々の日常の社會觀察の成果に即してなりと、この問題の概觀だけをでも、我々の眼前に見据ゑておくことを試みなければならぬ。

（2）反動時代に於ける小ブルジョアジーの『社會的存在』の種々相

だとすると、今言つた意味に於て、まづ第一着に我々の注意の上に現はれて來るものは、次の一事である。すなはち、——

曾て全社會に於ける階級對立がまだ甚だしく尖銳化して來なかつた時代に當つて、政治的に社會的に、大體上は自由主義の旗印の下に統一された一團塊をなしてゐたものと見られた小ブルジョアジーの社會層の上に、最近數個年來の社會的大動搖につれて、急遽に複雜な分裂若しくは分化的傾向が生じ始めた。

かくて、小ブルジョアジーは、現在に於ては最早、如何なる意味に於ても、一の定型を持つた社會層でなくなつて來てゐる。それは動きつつある。即ちそれは、刻々に樣々と組別けされつつ、慌ただしく動きつつある。小ブルジョアジーは未だ曾て決して一の特殊の階級的地位を持つた社會層であつたことがなかつたといふことは事實であるが、しかも過去に於ける或る期間に亘つては、それは少くとも外觀上超階級的地位らしく見られた或る立場を持つてゐた。けれども、近年來加速度的に强められて來た階級對立尖銳化の壓力は、それをすら小ブルジョアジーから引き離した。また、現に活潑に引き離しつつもある。そしてその結果として、我々は今日、小ブルジョアジー層の各部がそれぞれに一定の階級陣營への所屬の決定を急ぎつつある情况を分明に觀取することが出來るやうになつて來てゐるのである。

今日に於て、小ブルジョアジー中の比較的少數分子は、着々と無產階級の陣營に步みを向けつつある。そして、更らに一層注意すべきことは、階級戰線上の精銳なる闘士たちさへもが、始終彼等の間から送り出されつつあるといふ一事である。しかも、かうした戰闘的インテリゲンツイアの意義及び價値は、無產階級の政治戰線の擴大及び進展につれて、益々多く發揮されようとする傾向をさへも示してゐる。更に角、曾て經濟鬪爭全盛時代に現出されてゐた知識階級排斥の氣勢は、今日となつては、少くとも或る方面に於ては全然轉換されたものとなつて來てゐることは、誰れの眼からも隱されてゐない顯著な一趨勢である。

だが、さういふ狀勢は無論楯の一面——しかも非常に限局されたその一面——である。我々はその反對面に於て、小ブルジョアジーがまたファシズムの豫備軍の無限の貯藏庫ともなつてゐるといふ事實を、瞬時も忘れてはならないのである。例の在鄕軍人會とか、官製青年團

もしくは處女會とか、もしくはその他の無數の反動的もしくは國粹的諸團體とかは、もとより多數の欺かれたる、もしくは階級的に無自覺なる、無產大衆をも包含してゐるには相違ないが、しかしそれらの中堅的諸分子を供給してゐるものは、疑ふべくもなく、都市及び農村の小ブルジョアジー以外の何物でもないのである。

我々は、上に述べたやうな狀況の最も精密なる縮圖を、小ブルジョアジーの公設訓育場として見ることが出來るところの諸學校や諸大學やの生活の上に見ることが出來る。そこには、一方に於てはあらゆる彈壓の下に無產階級運動の理論と實踐との辯證法的統一を基調とする社會科學に精進してゐる多數の青年學徒の群が見られるが、しかし更らにまた他方に於ては、それらの青年學徒を相手に陰に陽に抗爭しつつあるファシストの卵が無限の多數に於て存在してもゐる。そして、例の軍事教練とか、各種の課內もしくは課外の修養談とか、精神講話とか、倫理訓話とか等々が、それらの無數の卵の孵化生育のための好環境を作りつつもある、と言つたやうな事情もある。

けれども、諸學校や諸大學やに於て、特に我々の最も注意深き觀察を必要とするものは、さうした極印附きの反動的諸分子であるよりは、寧ろ隱微の間に婉曲に反動的役割を演じつつある最大多數の教師及び學生たちの集團である。彼等は今日でも尙は自由主義――若しくは彼等の間の或る人々の命名による「新自由主義」――を固執することによつて、彼等が超階級的立場を取つてゐるもののやうに裝つてゐる。のみならず彼等のうちには、實際上さうだと思惟――妄想――してゐるものさへも少からずある。だが、事實上、彼等の自由主義もしくは新自由主義が外觀上だけでも超階級的であり得た時代は、疾つくに過ぎ去つてしまつてゐる。即ち今日に於ては、彼等は彼等自身で超階級的だと揚言してゐるその自由主義もしくは新自由主義の立場から、有意的もしくは無意的に、支配階級と協調してゐるのである。もとより彼等は彼等の立場から、無產階級運動への同情とか支持とかを表明することを憚からない。けれども、彼等が積極的に同情したり支持したりする無產階級運動は、その主張及び行動に於て、彼等の自由主義もしくは新自由主義の立場と或る程度に調和若しくは同行し得る種類のものに限られてゐるのである。でさうした種類の無產階級運動以外の無產階級運動――殊に階級鬪爭的立場を率直に高揚するそれ――は、彼等のその立場から見れば、「過激的」のものであり、「不健全」のものであり、そして嚴重に「穩健」なる――從つて「正當」なる――ものから識別されなければならないものである。なぜか？ けだし彼等から見れば、さうした「左傾的」な運動及びそれを支持する「赤化」思想の上に、あらゆる彈壓的法律や、國家權力や反動團體の暴力やが臨んでも、それは「當然」のことであつて、毫も辯護の餘地のないものだからである。否、彼等は時として、彼等の自由主義もしくは新自由主義の立場から、反動團體の暴力の行使などに對しては、議論による抗議を力弱く提出することはある。けれども、さうした場合に於ける議論による抗議が、徒らに聲ばかりのものに止まつて、何等の實効のないものであることは、今では誰れもが知つて居る通りである。從つてさうした抗議は、結局あつてもなくても同じことである。

ところで、彼等のさうした社會的態度、及びそれと相表裏してゐる彼等の社會理論は、今日の反動時代下の支配階級の最も歡迎するところのものである。殊に、それらが自由主義とか新自由主義とかといふ樣な勿體ぶつた名を伴つてゐる點に於て、益々さうである。今日あらゆる直接間接の手段方法を通じて、無產大衆の階級的行動の上に彈壓

乃至强制を加へることによつて、──若しくは直接間接にさうした彈壓乃至强制を幇助し援護することによつて、──他方の側に於ける金融資本閥とか、大商工業資本閥とか、大地主團とかをして、無産大衆の脅威から全然遮斷された平安境に於て、靜かに階級的搾取と利潤狩りとに沒頭することを得しめるための社會的障壁としての役割を演ずるものは、言葉の完全なる意味に於て、支配階級との協調者と、否、支配階級への奉仕者とさへも、言ひ得られるのである。

我々の理解するところに據れば、ファシズムの社會的もしくは反社會的機能といふものは、要するに、さうしたところに、その核心を持つてゐるものである。そしてそれは必ずしも、直接に暴力の赤裸々なる表示の下に行はれることを以て、その必須條件とはしない。更らにまた、それが『非合法的』手段によつて行はれるか否かすらも、同樣に根本的な問題を構成するものではないのである。我々は從來、今言つた意味に於けるファシズム的機能が、ブルジョア議會に於ける合法的決議を通じてさへも自由に行はれ得るものであることを、餘りに屢々見て來た。同樣に我々はまた、同類項に屬する機能が、自由主義もしくは新自由主義の信奉者たちによつて、無論もつと間接的な手段によつてそして最も多くの場合もつと消極的な態度に於てではあるが、始終行はれてゐるものであることを、現に今我々の眼前に見てゐる。

我々が小ブルジョアジーの社會層の著大なる一部について、そのファシスト化的傾向を云爲するのは、今言つたやうな現象を含めての、言葉の最廣義に於てである。

（3）ファシスト化的傾向への轉化の契機

小ブルジョアジーの社會層の內部に於けるファシスト化的傾向！

それは何といふ皮肉な現象だ！

小ブルジョアジーは、我國の近代社會史上に於ても、嘗て相當に久しい期間に亘つて、少くとも思想運動の方面では、最も戰鬪的な社會層を構成してゐたものではなかつたか？　若しくは、この社會層の思想的代表者たちは、政治的に社會的に、曾て勇敢にデモクラシーを標榜して、官僚閥族、及びそれらと密接な關係におかれてゐた大・中・ブルジョアジーに挑戰して、自由主義の果實を勝ち取らうと努力したものではなかつたか？　その彼等が、時勢の推移につれてとは言ひ條、次第に反動化しファシスト化するに至つたとは、一體どういふことを意味するものであるか？　それは、彼等が年來のデモクラシーの看板を撤回し、自由主義の主張をかなぐり棄てたことをいふのであるか？

否、さうではない！　彼等は今尚ほ依然として、彼等自身の解釋によるデモクラッツであり、自由主義者である。それは、誰れにも否定が出來ない事實である。だが、我々から見れば、寧ろ彼等がさうしたデモクラッツであり、自由主義者であることが、彼等をして、今日の帝國主義支配下の反動時代に於て、そのままでファシスト化傾向を辿つてゐる結果に陷らしめてゐるものである。

今この點を、單に表面的若しくは形式的見地から觀察すれば、彼等のデモクラシーの主張の本質內容は、外界の社會的狀勢の不斷の發展に相應する自己發展を實現することを拒否したが故に、最近數年間に異常の速度を以て進轉した無產階級側の社會的政治的思潮との間に不可測のギャップを生ぜしめるに至つたものであるが、今や、これらの兩側の間に存する絕大の矛盾こそは、實に、彼等の舊態のままに固定してゐる社會的政治的立場を著るしく反動的のものとして、更らにまたファシスト的のものとしてさへも、我々の眼底に映ぜしめるやうになつた

ものに外ならないのである。

けれども、我々は、かうした表面的もしくは形式的見地からだけでなく、更らにまた、もつと內面的な、もしくはもつと實質的な見地からも、この問題に一應の考察を加へておかなければならない。この視野に於て、まづ第一に我々の注意を向けなければならないことは、彼等のデモクラシーは、嘗てさうであつた如く、今日でも尙ほ依然として、ブルジョア・デモクラシーの埒內に止まつてゐるものだ、といふ一點である。從つて彼等の主張する自由主義は、ブルジョア・デモクラシーが許與し得る限りの自由を以て、それの限界とするものである。彼等はもとより、好んで『社會改造』を口にするが、しかしそれは、ブルジョア・デモクラシーのノーマルな進步によつて到達することが期待され得る『改良主義』以上に一步を出てゐるものでないことは、餘りにも明白である。このブルジョア・デモクラシーの完成。――プロレタリアートまでもが、一樣に漏れなく、その恩惠に均霑し得るまでに、ブルジョア・デモクラシーを完成させて行くこと。――それが、最善の場合に於て、彼等が究極に於て到達しようと志してゐる最終の目標である。彼等が明示的にそれを言ふのを好むと好まないとに拘らず、事實はまさにその通りである。

彼等は嘗て、彼等のさうしたデモクラシーを、自由主義を、あたまから高壓的に抑塞しにかかつた官僚閥族及び大・中・ブルジョアジーに對して、――即ち支配階級の牙城に對して、――勇敢に抗爭の矛をあげた。それは誰れもが記憶してゐる筈である通りに、例のデモクラシー全盛時代に於てであつた。その頃の彼等こそは、最も戰鬪的であつた小ブルジョアジー層の、最も花々しき代表的戰士――よし單なる思想鬪爭上のそれであつただけにもせよ――でもあり、またさうしたものとして、或る意味に於ける時代の寵兒でもあつた。だが、それも、これも結局は一時的現象として慌ただしく過ぎ去つてしまつた。そして、それ以來、時勢はふたたび急轉直下的に進展した。

で、今日では彼等は最早、支配階級に對しては、彼等のデモクラシーの根本的阻止者に對するが如くに抗爭する必要を感じなくなつて來てゐるのである。もとより彼等は、部分的の不滿や、部分的の要求やを無際限に持つてゐるであらう。けれども、根本的には支配階級は段々と彼等に讓步しだして來てゐるのである。さうだ！　支配階級はよし大部分は名目上のものにすぎないにもせよ、兎も角『普選』を實施しようとするまでに、小ブルジョアジーに對して讓步態度を示すやうになつて來てゐるのである。なぜか？　理由は簡單である。支配階級は今や、小ブルジョアジーを敵側に廻はすよりも、寧ろ味方に引き入れることを、絕對的に必要視するやうになつて來てゐるのである。そして彼等は、事實上に於ても、着々とそれを努めてゐるのである。今日支配階級は、資本主義末期の社會相の上に反映されてゐる一切の矛盾――一切の破綻――の糊塗彌縫策に死力を出して從事してゐるが、それは結局、プロレタリアートに向けられる辛辣なる彈壓政策の砲火による掩護の下に押し進められるところの、所謂『資本の攻勢』の不斷の續行によつてのみ可能であることを、彼等は充分に知り拔いてゐるのである。しかも彼等はまた、そのことのために、小ブルジョアジーの協力を誘ひ寄せることの必要をも意識してゐるのである。無論この目的のためには、彼等は小ブルジョアジーがそのデモクラシーに卽して提出する諸要求を少しづつは取り上げなければならないことも承知してゐるが、しかし彼等は今日では、さうすることを大して顧慮しないまでには成熟して來てゐるのである。それに、ブルジョア議會は

デモクラシーの名の下に、多數決の威力によつて、プロタリアート彈壓法とか、勞農大衆の團結權の抑壓に結果するやうな勞働法や小作法とかをさへも制定することが出來るのである。そして、小ブルジョアジーの法治主義は、さうした諸法律の個々の趣旨に反對を表明する場合でも、『それらの諸法律が嚴存する以上は――』と言つたやうな前提の下に、それらの拘束力の無條件的肯定を强調するばかりでなく、時としては、特にプロレタリアートに對するそれらの假借なき勵行を督促したりすることとすらあるのである。で、かうした傾向に驅られる可能性を持つ小ブルジョアジーを抱き込むことは、反動時代の支配階級に取つては、極めて有利でもあれば、必要でもある譯である。

嘗て小ブルジョアジーの自由主義が、封建的イデオロギーを多分に保有してゐる支配階級からの脅威に對して抗爭してゐた時代に於ては、それはそれ自身の超階級的外觀を、大した破綻もなく取り繕らふことが出來た。ところが、今や、その脅威は去つた。若しくは、全然去つてしまはないまでも、著るしく緩和された。で、小ブルジョアジーは、それがそれ自身のために必要とするだけの自由主義を、大體は獲得してしまつた。と同時に、意外にも別の或る方面から、それへの新たなる脅威が、突如として出現した。それは言ふまでもなく、戰鬪的プロレタリアートの側からの脅威である。かくて、足許から鳥が立つたやうにそれに直面した小ブルジョアジーは、昨日の敵手であつた支配階級との或る形式に於ける協調の下に、この新來の共同の敵に當らなければならなくなつた。かくて、嘗て或る一時期に於て超階級的立場の如く裝はれて居た小ブルジョアジーの自由主義も、茲に至つて遂にその本來の階級性を暴露せざるを得なくなつた。かうなつて來ると、それは最早、反動的支配階級の對プロレタリアート彈壓政策に對して力強き抗爭を向けなくなつたばかりでなく、多くの場合に於て默認的態度に出るやうになり、時としては更らに一歩を進めて、それの肯定のための理論を組み立てることがあるやうにさへなつて來た。

かうした過程の上に、私が前に言つたやうな廣い意味に於ける小ブルジョアジーのファシスト化的傾向が、段々と具體的に形成されて來たのである。

（4）資本主義社會の發展過程の上に於ける小ブルジョアジーの行方――その一般的傾向

我々は上來、直接に我々の眼前に展開されてゐる日本の社會狀態の現勢の觀察に即して、所謂小ブルジョアジーの終極のファシスト化的傾向に於ける内面的諸關係を解剖して來た。だが、我々がその傾向に就いて見て來たところのものは、單に現代日本の社會進化だけに伴生した特殊的現象とのみ見るべきものではない。それはもとより、その外殼の上に特殊的現象としての諸相を多く具へてゐることは事實であるが、しかし若し我々がそれらを拂ひ退けるならば、我々はそこにその核心に於て、資本主義社會の發展過程の上に於ける小ブルジョアジーの革命的態度から反革命的態度への過渡の一般的傾向が鮮明に反映されてゐるのを、歷々と指點することが出來るのである。

この點に關して、私は、さうした一般的傾向としての小ブルジョアジーの行方に關する一の極めて適切なる説明を含んでゐるものとして、次の數行の引用を私自身に禁ずることが出來ない。それはラピンスキーの研究論文――ポーランドに於けるピルスドスキー將軍の統率の下に行はれたファシスト的反革命に關する――の中に見出されるものである（P. Lapinski: Auf den Kopf gestellt, Veroeffentlicht in der

„Kommunistischen Internationale“ 1926/ Heft 9.) のだが、私は私の論述が今到達した點でそれを持ち出すことが、必ずしも場處錯誤だとは思はないのである。

ところで、ラピンスキーは斯らいふ。——

『これまでに述べて來たすべてのことから、次のことが明白になる。即ち、小ブルジョアジーの最も密接なる參加の下に遂行されたこれらの諸變革は、決して、そして如何なる方向に於ても、過去の歴史的諸時代のブルジョア的及び小ブルジョア的諸革命に比較し得べくもないのである。といふのは、それらの既往の諸革命に於ては、小ブルジョア的デモクラシーは、單に封建的諸層に對してのみならず、更らにまた、それらの封建的諸層との妥協苟合に努力しつつあつたブルジョアジーに對してもまた、革命的鬪爭の現實的遂行者だつたからである。その頃には、小ブルジョアジーは、偉大なる歴史的標準に於て、一の革命的使命を果たしたものであつた。そして彼等の役割は、この革命過程の最終段階（その革命過程は何時もこの最終段階にまで成熟し得たものとはいへない。といふのは、それはそこへ來るまでの手前の段階に於て既に萎縮し去つてしまつたからである）に入るに及んで、始めて反革命的のものとなつたものである。即ち彼等が、その最終段階に於て、近代社會の最も若き階級——この社會のすべての基礎の極端に根本的な改造へと猛進するプロレタリアート——に直面しだした時、彼等小ブルジョアジーの役割は、始めて反革命的のものとなつたのである。だが、近代資本主義社會の前進的發展の程度に應じて、換言すれば如何に近代勞働階級が、獨立的の、そして偉大なる歴史的の、勢力として前景へ乘り出して來てゐるか、そして如何に現代の基礎的な歴史的對立——即ち資本的ブルジョアジーとプロレタリアートとの間の對立——がそれ自身を暴露してゐるかの程度に應じて、小ブルジョア的デモクラシー的諸要素の全役割もまた、極めて根本的な工合で變遷して行く。小ブルジョア的諸黨派は、最早革命的デモクラシーの急先鋒でなくなつてゐる。かくて、小ブルジョアジーは、次第々々に獨自の階級的綱領の所持者でもなくなつて行つて、刻一刻と、他階級の道伴れに即ち——或る瞬間には——プロレタリアートの、若しくは——一層屢々、そして一層根本的に——ブルジョアジーの道伴れになり下がつて行く。』

ラピンスキーは、尙ほ論じつづける。——

『去世紀の中葉に於て既に、かの一八四八—四九年の革命の試みの後に、マルクスは革命の二段階の間に截然たる分界線を劃した。彼によれば、その第一段階では、小ブルジョアジーが（革命的勞働者たちの加勢の下に）權力獲得のための鬪爭を導く。そして、その第二段階では、彼等は彼等の權力を既に確立し得てゐる。で、この第二段階に於ては、小ブルジョア的諸黨派は、或る確定的樣式に於て、革命の一要素から反革命への一要素へと、即ち社會主義的變革の目標に向つて進むプロレタリアートに對抗する直接鬪爭の一機關へと轉換して行くのである。……』

資本主義社會の發展の過程の上に於ける小ブルジョアジーの行方。——それは、上の引用文に於て、可なり明確に指し示されてゐるやうに、私には考へられる。もとより、それは一般的傾向に關聯して與へられてゐる說明であるから、それを或る特殊的現象に適用する場合には我々が幾分かの制限をその上に加へる必要を持つことは、たしかである。だが、我々がそれだけの用意を以てそれに對するとき、我々は

それが、その核心に於て、現在の日本の小ブルジョアジーの或る著大なる部分が今まさに歩みつゝある途の方向への指針をも藏してゐるものであることを疑ふことが出來ないのである。

後篇　自由主義の・ファシズム的理論構成への轉化過程

(1) 問題の諸要點の整理

我々は既に、小ブルジョアジーの社會層の著大なる一部が、資本主義社會の發達が或る一定の段階に入るに及んでは、特にその對プロレタリアートの諸關係に於て、必然的に或る樣式に於て反動化し、更らにファシズム化さへする傾向のあるものであることを見て來た。我々はまた、それに關聯して、曾て戰鬪的小ブルジョアジーの武器であつた自由主義が、それが尙ほ依然として自由主義であるその本質を止揚することなしに、直ちにファシズム的理論構成へと轉化して行く過程をも注視して來た。

ところで、我々のその論究は、今までは主として理論的に遂行されたものであつたが、今や我々は、若干の具體的實例によつてそれを補足的に證明しようとする段取りにまでやつて來たのである。そして、その點について、さうした具體的實例の非常に豐富なる貯藏庫として我々が着眼したのは、實に、我々が本論文の冒頭で擧げておいたところの、吉野堀江兩君による、最近の早大事件を取扱つた二論文である。

往年のデモクラシーのチャンピオンとしての我々の吉野作造君、及び我々の理解してゐるところでは矢張り年來自由主義の陣營を護つて來た我々の堀江歸一君は、そこで如何なる主張をなし、如何なる態度を取り、如何なる傾向を示してゐるか？　その點こそ、我々が或る程度の關心を以て觀察しようとしてゐるところのものである。

かういふのは、我々が前に、その論旨の故にそれらの二論文に打向はうとしてゐるのでないといふ意味を表明しておいたことと照應せしめられてゐるものである。それらの二論文は、その內容からいへば、我々が向きになつて取り合ふほどの價値のあるものではない。おそらく、それらの執筆者である兩君にしても、その點で讀者を感服させようとして起稿されたものではあるまいから、それはもとより當然のことと見るべきであらう。尤も、かういふのは、我々の勝手の推測にすぎないものだが、しかしいづれにしても、我々がそれらの論文を讀んで最も强き印象を受けるのは、それらの論旨によつてであるよりは、寧ろ兩君がそこで示してゐられる對社會的主張及び理論構成上の態度を貫流してゐる一の强き傾向である。從つて、我々がこれから先き我々の注意を向けようとしてゐる目標もまた、主としてそれの上におかれてあるのである。

ただ玆で一言だけ序ながらに附記しておきたいことは、兩君のそれらの論文の上に現はれてゐる論旨は、その大體の行き方に於ては、殆んど相互的に符節を合したやうに一致してゐるのであつて、ただ多少異つてゐるのは、末節枝葉に屬する部分に於てだけだ、といふ一點である。そして、さういふ風に異つてゐる部分についていへば、大體に於て吉野君の方が、反動的內容を表示する文句を、動々もすれば、より多量に盛り上げてゐる感じがするといふことも、同時に我々に注意される。その點から、少くとも私の個人的立場への非難としては、堀江君の發言の方が、より少く意識的に組み立てられてゐるもののやう

に私に感じられる。だが、さういふことは、要するに大した問題ではない。寧ろ私がこの際特に强調しようとしてゐることは、小ブルジョア的自由主義そのものは、階級對立の著るしく尖銳化して來た今日では、意識的にもせよ、無意識的にもせよ、その對プロレタリアート態度に於て、少くとも後者の側からは、反動的に、そしてファシズム的にさへも、見られるところの樣々の要素を包含するやうになつて來てゐることが、兩君のそれらの論文によつて、まざまざと證明されてゐる、といふ一事である。

私は今、その點を論究するために、兩君の問題の論文の上に現はれたる對社會的主張及び理論構成上の態度を貫流してゐるところの、その强き傾向を檢討し、それに隨伴する次の三つの主要特徵を採び出して、私の考察の對象とすることにしようと考へてゐる。——

（一）法律萬能主義的傾向。
（二）學術の本質に關する小ブルジョア的見解。
（三）政黨——殊に無產政黨——に對する偏倚的解釋。

これらの三つの主要特徵の各々は、それぞれに樣々の副次的特徵を包含してゐて、そしてまた、それらのもののうちには、兩君のうちの一方には濃厚に出てゐるが、他方には稀薄にしか出てゐないやうなものもあり、また一方には存してゐるが、他方には全然缺けてゐるやうなものがあつたりすることは、無論である。だが、主要特徵としては、それらの三項目が、大體は兩方に通じて見られるのである。

私は以下、順を追うて、それらを出來るだけ簡短に說明するであらう。

（2）法律萬能主義的傾向

私が大學教授と政黨員との兩立問題に關して既に先月の發表の中に掲げておいた趣旨は、私は茲では文意の關係上それを反復することが絕對的に不可避と認められる場合の外は、重ねて述べないことにする。

ただ私は、この問題の考察に際しては、先づ最初に、政黨——殊にあの場合それに最も直接的な關係におかれてあつた無產政黨——の立場と、大學の立場とを基準としての論究から出發したのであつて、そして、それに關係のある法律問題を顧みることの如きは、それを最後に廻はしたのであつた。それは、取扱はれた問題の性質上、當然のことだと言はなければならないのである。

のみならず、その頃、實際上に於て私たちの間に於て中心問題となつてゐたものは、教授の政黨加入の無條件的承認の原則の確立が、大學及び政黨の立場から見て正當とされるべきか否かの上におかれてあつたのである。それはもとより、學生たちの私に對する留任運動に結び附けられて論じられてゐたことは事實であつたが、しかし私たちとしては寧ろ、私の事實上の留任の可能不可能に拘はらず、理論上の問題としてそれを解決しようとすることを、私たちのプログラムのうちに加へてゐたのである。そして、その關係に於て、その問題が、それに絡まる法律問題と引き離して論じ得られるものであることは、言ふを須たないことである。

もとより、私の事實上の留任が問題にされた限りの範圍內に於ては、例の治安警察法第五條の『學校教員の政事結社加入』への禁止的規定が大學教授の政黨加入に關して効力を及ぼすものか否かに關する解釋も、當然考慮のうちに加へられなければならないと言へたには違ひない。——私たちは、それに關して、否定的解釋を取つて居たが。——けれどもその場合に於ても、苟くもそれが大學及び政黨の生活に重

大なる關係のある問題として取扱はれる限りは、その先決問題は尙は依然として、大學及び政黨の立場から見ての、敎授の政黨加入の無條件的承認の原則を確立することの可否の上におかれるべき筈のものであつて、それに關する法律問題の如きはその次に顧慮されるべき順序だといふのが當然である。

ところが、吉野堀江の兩君は、他の如何なる事よりも、先づ第一着に、鬼の首をでも取つて來たかのやうに、治安警察法の條文を擔ぎ出して來て、これがある以上は、他の詮議立ては一切無用だといふやうな意氣込みを示し、そして、それに基いて、吉野君は、『之を無視して敎授政黨員の兩立不兩立を爭ふのは、私共の甚だ了解に苦む所』（一一九ページ）と喝破し、堀江君は『治安警察法第五條學校敎員の政黨に加入する規定のあることこそ幸ひ』（五四ページ）と見えを切つてゐるのである。（註。參照のページ附けは、吉野君のに關するものは『中央公論』三月號のそれであり、堀江君のに關するものは『世界』の三月號のそれである。以下同じこと。）さういふ處に、我々は、兩君の法律萬能主義が赤裸々に躍り出してゐるのを見ることが出來るのである。

更らにまた、治安警察法中の問題の規定は、縱し立法者の意志に於て大學敎授の政黨加入の上にも効力を及ぼすべきものとされてゐたものにもせよ、——さうであつたか、なかつたかは、私に不明だが、——從來の久しき慣行上、不行使の狀態に歸してゐるものであることは、兩君が共に、明示的に認めて居る所（吉野君の場合は一二一ページ、堀江君の場合は四九ページ）である。我々は尙ほそれに附け加へて、小學校敎員の被選擧權上の制限をさへも撤廢してゐる普選法の精神が、尙ほ更らそれを無効に歸せしめてゐるといふ解釋の成立ち得るものであることを信ずる理由を持つてゐる。またさういふ事から離れて考へても、第五十二議會に於ける政府委員の同問題に關する說明によれば、治安警察法の第五條の規定の『學校敎員』の中には、高等學校、專門學校、及び大學の敎師は包含されてゐないことになつてゐるやうである。それにも拘らず、兩君は私に關する問題を論ずるに當つて、頻りに威丈高になつて、その規定の拘束力を言ひ立ててゐるのである。かうなると、兩君の氣持こそ、私の『甚だ了解に苦む所』である。

けれども、今言つた第五十二議會に於ける政府委員の說明は、兩君の論文發表後になされたものであるから、その點で兩君を責めるのは、殘酷であるかも知れない。だから、それはそれとしておいていいが、しかしさうでなくとも、治安警察法中の問題の規定は、初めから解釋の餘地の非常に多いものであつた。一體法文に解釋の余地の多くあるときには、本來のデモクラットは、それをその字義に拘泥して解釋すべきでなく、或ひは條理を基準として解釋すべきものとか、或ひはその時代に於ける社會的通念を基準として解釋すべきものとかの原則を揭げてゐたものである。更らにまた、一部の最も進步した自由法學派の人々に至つては、さうした場合には、その時代の社會の多數人の間に行はれてゐる『正義意識』を基準として、その法文を解釋すべきものだと說いてゐるばかりではなく、そこから更らに一步を進めて、さうした場合に、なまじひ『立法者の意志』などを事々しく擔ぎ出したりするやうなことは、人間社會生活の流轉進步の相を無視した行き方であり、且つまた、死せる過去をして活ける現在を支配せしめようとする態度であつて、それは余りといへば頑迷な、保守的な、反動的な、法文解釋の原則だ、といふやうなことをすら唱道してゐるのである（たとへば、『近代國家觀念』に於けるクラッベの如き、。

デモクラットが尙ほ本來のデモクラットであり、自由主義者が尙ほ

本來の自由主義者である間は、彼等は當然のこととして、少くとも疑義を伴ふ法文の解釋の原則としては、自由法學派の人々の立場位のところには止まつてゐるべき筈ではないか？ 兎も角、我々がそれだけのことを彼等から期待することには、決して些かの無理があるとではないのである。ところが、我々の親愛なる反動化せるデモクラットたちは、——我々の親愛なるファシスト化せる自由主義者たちは、——さうした原則をすら、無雜作にも一蹴し去つて得意になつてゐるのである。或ひはまた、彼等には、あの治安警察法中の問題の規定が、初めから何等の疑義を伴つてゐるものとすら見えなかつたのかも知れない！ だとすると我々は、彼等が一切の法文の適用に關して、例の『惡法もまた法なり』といふやうな、昔の專制時代からの傳來の原則を固執してゐるものと見ていいのかも知れない。何と恐ろしいデモクラットたち、何と恐ろしい自由主義者たちで、彼等があることよ！

それにしても、堀江君の方は、治安警察法中の問題の規定の適用に關しては、如何に時代錯誤的な前提の上に立つて居るにもせよ、その前提から結論までには、割合に筋路が立つたことを言つてゐる。即ち同君は、一方に於て「治安警察法第五條……（云々の）……規定があるこそ幸ひ」などと言つてゐるところを見ると、夢中になつてその規定を謳歌してゐるやうにも見られる。で、この點から見ると、同君はその規定を「惡法」とすら見てゐないやうでもある。だとすると、それは『惡法もまた法なり』の原則への固執以上に偏屈頑迷な態度の表示だといはなければならないが、しかし我々が今そのことを不問に附しさへすれば、その前提から導き出された同君の議論は割合に徹底してゐるのである。即ち堀江君は『從來右の規定の適用は頗る緩漫であつて、一方に大學の教授の職に居りながら、他の一方に政友會とか、憲政會とか云ふが如き、既成政黨に加入し、衆議院議員として活動するものがあり、然も其れが默過されて居つたことは、私の認めて奇怪とする所である』（四九ページ）と言つて、その規定が如何なる場合にも漏れなく適用されるべきものであることを、極力強調してゐるのである。

ところが、そこへ來ると、吉野君はそれに反して、その規定の適用に關して言つてゐることの上には、可なりの昏迷と矛盾とを示してゐるのである。いかにも同君は、一方では『……私共は寧ろ治安警察法第五條の改正運動に必死の奔走をして貰ひたかつた』と言つてゐる位だから、それが惡法であることを認めてはゐるやうである。が他方に於て同君がその適用に關して言つてゐることは、全體として通觀すると、可なりの程度にふらついてゐるのである。即ち同君は先づ、治安警察法第五條中にある「學校教員」といふ言葉を廣汎に解して、『一切の學校の一切の教員を含むものとせられてゐる。形式的稱呼の教授たり教諭たり、又講師たり、臨時雇たるは問ふ所でない』（一二一ページ）といひ、更らにその少し先きでは、——

『……故に例へば政黨に入つたから教授はやめるが講師となつて暫く講義を續けて往かうと云ふの類も、治安警察法の規定とは明白に兩立しないものである。その事の是否は別として、大山君が政黨員として依然早稻田大學に教鞭を執るといふのは、教授講師の名目如何に拘らず、ひとしく國法の認許せざる所なのである。同じことは安部磯雄先生に就ても云へる。』（一二一ページ。——傍點は私が施したもの——大山。）

と言つてゐる。

この引用文中に『その事の是否は別として』とあるのは、後に至つ

て『安部磯雄先生の執られたあの立派な態度（後任者の決定するまで「從來の情誼上學校並に學生に迷惑を掛けても濟まぬから暫く講師として引續き講壇に立たう」と決心された態度」には私は心から敬服する』（一二五ページ。――傍點は私が施したもの――大山。）と言ふための伏線なのかも知れない。（私の知つて居るところによると、安部氏が『暫く講師として講壇に立たう』と決心せられた動機は、吉野君の說とは異つてゐる。一體この論文に於ける吉野君は、論斷には極めて勇敢だが、事實の調査には極めて疎漏であることを示してゐる。）それによると安部氏の場合には、氏の講師としての留任は、『國法の認許せざる所』であるにも拘らず、その事自體は『立派な態度』であつて、『心から敬服』すべきことだといふのが、吉野君の見解である。それからまた、同君は、大學教授であつて同時にブルジョア政黨員を兼ねて居るものの場合については、一言も是非してゐない（吉野君は內ヶ崎早大教授の場合に關して、同教授は『用心深くも憲政會に黨籍をおいて居ない』（一二五ページ）と言つてゐるが、私が同教授から直接に聞いたところによると、その『黨籍をおいて居ない』との推定は、同教授が黨費を納入してゐない事實だけから來る解釋ださうである）。だが問題が私に關することになると、忽ち打つて變つて、『それ（治安警察法中の問題の規定が）明かに改廢されぬ限り、之を無視して教授政黨員の兩立不兩立を爭ふのは、私共の甚だ了解に苦む所』（一二九ページ）といひ、更らにまた、私が兩者を兼務することが『水陸兩棲の醜態』（一二六ページ）にひとしいものだといふ趣旨を述べてゐるのである。かういふところに、我々は、我々のデモクラットが、如何に無意識の間に（恐らく）、私が屬してゐる勞働農民黨を、――恐らくそれが左翼黨であるといふ理由で（？）、――單にブルジョア諸政黨からだけでなく、同時に他の意識的右翼側の無產諸政黨からさへも、嚴重に區別しようと努力してゐるかを見て取ることが出來るやうに感じるのである。

要するに、吉野君は、殊に治安警察法中の問題の規定の適用に關聯して、無限の昏迷と、收拾しがたい矛盾とに陷つてゐるのである。それは、ファシズムへの意識的もしくは無意識的轉化の過程の上にあるデモクラットの自由主義が今遭遇しつつある皮肉な運命を反映してゐるものでなくて何であらう！

（3）殘餘の諸要點

我々は今まで、『法律萬能主義的傾向』の項下に於て、ファシズムの理論構成への轉化の過程の上にある小ブルジョア的自由主義を特徴づける論斷の檢討に長々と從事して來た。しかも我々の論點はまだ中々に盡きないのに、既に豫定以上の時間と紙數とが費されてしまつた。で、この上は、我々は、殘餘の諸要點に關しては、ただ單に、次にそれらの輪廓を粗雜に印しづけることだけで滿足しなければならないことになつた。

（Ａ）學術の本質に關する小ブルジョア的見解――教授政黨員兩立問題に關する吉野作造君の意見と我々のそれとの相異は、學術――殊に社會科學――の本質に關する見解の相異からも、多分に來てゐることは拒めない。もとより、兩君の社會科學觀は、問題の二論文の上に明白に現はれてはゐないが、しかし兩君が社會科學の方法に於ける理論と實踐との相關性に全然無理解な見解を示してゐるところを見ると、――兩君はまだ充分に、――或ひは全然、――社會科學をメタフイジックスと區別された姿態に於て把握してゐないやうである。我々から

見れば、マルキシズムが社會科學に向つて他の科學性を與へることに貢獻した最大の仕事の一つは、理論的認識に於ける實踐の必然性を確立した點にあるといふのも、決して過言ではないと私には考へられるのである。殊に無産階級の社會科學の科學性現實性は、所謂理論と實踐との辯證法的統一の基礎の上に獲得されたものである。そして無産階級の社會科學からその科學的現實性を引き去ると、それは最早無産階級の社會科學としての用をなさなくなりさへするものである。

今日一般に自由主義もしくは新自由主義を唱道する人々が、熱心に社會科學の研究の自由を唱へてゐて、更らに彼等の或るものが、マルキシズム研究の必要をさへも强調してゐることは事實であるが、しかし彼等の所謂『研究』は、實踐から分離されたそれである。それ故に彼等の意味に於ける社會科學の研究の自由の擁護は、例の文部省の役人たちが、學生たちの社會科學研究に關聯して、『研究はいいが實行はいけない』などと言つてゐる妄語の趣旨と、相距ること甚だ遠くないのである。

吉野堀江兩君の議論を讀んでゐても、矢張り同樣の意味が處々に明示的もしくは暗示的に散布されてあるのが見られるのである。のみならず、兩君は多少の程度の相違を以てであるが、實踐と切り離されたる研究を任務とする教授の地位の世俗性を拒否するが如き口吻をさへ弄して、或る意味に於てそれを神秘化しようとするやうな意圖までを仄めかして居るのである。かうした點に於て、兩君の見解はかのギルド・ソーシアリストのファンタショナリズムの理論から出發するところの、教授なり、政黨員なり、その他の何々なりの義務の兩立可能論の域にまでさへも達してゐないのである。小ブルジョアジー一流の限局された見解を脱するとが出來ないギルド・ソーシアリストですら、少くとも教授もしくは類似の職業の世俗性を拒否するやうな古典味、もしくは反動的態度を逆に露出して居る點に於て、兩君の立場とは比較にならないほど高い立場の上に在るものといふとが出來るのである。

（B）政黨―殊に無産政黨―に關する僞瞞的解釋――次に、今まで論じて來た點に關聯してではあるが、吉野堀江兩君は、政黨――殊に無産政黨――の本質に關して、全然の無理解を示してゐるのである。即ち吉野君は、まづ一般政黨に關しては、『私は本來政黨といふものが、政治家が政治家としての目的を達する爲に組織する所の、謂はば玄人達の團體であると考へてゐる』（一二二ページ）と言つてゐる。これは、ブルジョア政黨の現在の實情を述べてゐるものとしても、少しもその階級性に觸れてゐないところに於て、事實と背馳してゐる。のみならず、同君はそのすぐ次に、それを當爲としても肯定してゐるやうなことをすら言つてゐるところを見ると、同君は職業的政治家の存在を當然のこととして是認してゐるらしくも見られるのである。更らにまた同君は、無産政黨に關しては、それは『既成政黨の醜怪なる諸惡から良民の神聖性を匡救するといふ考に基き、その前提の下に大衆の政治的結束を必要として廣く天下に求むる』ものだと言つてゐる。かうした小ブル的臭氣の紛々たる立言は、『勤勞階級本位の政治』を行はうと揚言する社會民衆黨の『産婆役』としての同君の口にふさはしいものだといふことは拒まれないが、しかしそこには、眞の意味に於ける無産政黨の階級性も示されてゐなければ、況んや『歷史的使命意識』に卽する無産階級的政治鬪爭との交渉の如きものは、全然觸れられてゐないのである。

堀江君に至つては、ブルジョア政黨と無産政黨との區別すらも全然

眼中におかずに、すべての種類の政黨に關してただ一律に、『政黨員から進んで議員と爲り、俗中の俗事に鞅掌するに至つたならば、學者としては正に致命傷を蒙るもの』(五二ページ)とか『一旦政黨に加入したからには、學問的良心の如きは、之を不問に付して、總てを擧げて黨の犠牲と爲らなければならない』(五三ページ)とか言つたやうな妄語を放つて、少くとも眞の無産政黨の實際上の政治行動に於ては、如何に眞の意味に於ける學術的認識が必要視されてゐるかの事實を全然無視してゐることを恥ぢてゐないのである。殊に同君が、縱し假定的の言ひ方にもせよ『學界の清淨を望む』の項下に於て、『政黨員となつて、權勢に近づかうと云ふ念を起したならば』とか、『學界と政界とに跨つて、二足の草鞋を穿かうとするが如き』とか、『功名心や物質慾に驅られて、政界の事に關係するが如き』とか、『大學教授たることを利用して俗衆の尊敬を買ひ、又は學生を頤使し、以つて政治上の野心を遂げる一助とするが如き』(以上五四ページ)とかいふやうな、野卑な淺膚に響く言葉を濫發して、盛に『大學教授の政黨加入問題』の一篇の末尾を賑はしてゐることの如きは、我々をして、その動機がどこから來てゐるものかについて、無限の疑惑を懷かしめるに足るものだと言はなければならないのである。

かうした一般の政黨及び特に無産政黨に關する偏倚的な、もしくは歪曲的な見方の上にも、我々は轉化過程の上に立てる今日の小ブルジヨア的自由主義の悲喜劇的な立場を見ることが出來ることを感じないで居られないのである。が、さういふ點に關する精密なる解剖に至つては、私は今私が用ひ得る時間の關係上、それを拋棄しなければならないことを遺憾とするものである。

支那の動亂と米國

鶴見祐輔

一

支那の動亂に、今や刻々に、太平洋上の勢力均衡を破壞せんとしてゐる。太平洋上の勢力均衡の破壞は、當然に日本の國際的地位を變革せんとしてゐる。故に支那大陸の動亂は世界的大事件であつて、同時に日本國民自身の大問題である。

しかるに、太平洋上の勢力均衡に重大なる關係を有する大國は、北米合衆國である。今や支那の動亂は、露英の角逐と化しつゝあるやに見へ、日米兩國はその渦外に立つの觀があるけれども、仔細にこれを點檢すると、日本が到底永く今日の態度を持續する能はざると等しく米國も遂には、この大奔流中に卷き込まるべき事理の當然である。語を瞰しくして之を謂へば、太平洋上の關ヶ原に際し、日本がその去就向背を決すべき時期は刻々に近付きつゝあるのである。

かゝる際に於て我々は、太平洋問題としての、支那の動亂を觀察し併せて、その決定的勢力たる米國の亞細亞政策を點檢するの必要がある。而して、米國の亞細亞政策を諒解するがためには、吾人は更らに一歩を進めて現代米國社會の鳥下瞰を試みる必要がある。斯の如くにして初めて吾人は、將來の大計を熟圖することを得るからである。

二

廣東に起つた南方政府が、武昌を陷れた時に、全支那の局面に一大轉化が發生した。その南昌より、進んで上海に迫るに及んでは、變局の範圍はも早や何人も、否定することが出來ない程擴大してゐた。その南方の勢力が長江以南を支配したといふ事實の外に、南方革命政府の實質が從來の支那爭亂當事者と異ることが、この事件の重大性と複雜性とを裏書きしてゐる。吾人の論斷は、支那動亂自身でなくしてこの動亂の太平洋問題に及ぼす影響である。

支那南方政府が如何なる程度に於て、露國政府と了解あり、連絡あるやは吾人の知らざる所である。乍併、南方政府當局者のうちには露國政府に同情ある幾多の個人の存し、露國政府當事者中に南方支那政府に同情ある幾多の個人の存在することは、吾人の推察し得るところである。これと同時に、南方政府を組織せる人々が、多くは英國の政

策と利益とに闘ひたる經歷を有することも確かである。素より南方政府の人々の第一の思念は、支那民族の福祉であることは勿論であるがその外交關係の色彩が、大體に於て、露國と好く、英國と好からざるは必しも吾人の憶測のみではあるまい。茲に吾人の議論の出發點がある。

即ち南軍の勝利は英國に不利の結果となり、露國に取つては少くとも不利ではない、といふことである。

聰明なる英國の政治家が、支那の內亂に對し、不必要なる干渉を試むべしとは吾人の信せざる所である。從て南軍北進の結果が、直ちに支那に於ける露骨なる英露の衝突と化するとは、吾人は結論しない。乍併時あつて、上手の手から水が漏るといふことがある。例へば今回の英國の出兵程、吾人にとつて不可解なることはなかつた。用意周到水も漏らさぬ英國の外交振りを數百年來見慣れたる世界は、全くあつと驚くの外はなかつたのである。而して一方、これと有關係か無關係か、英國本國に於て、强硬なる對露抗議が現れてゐる。

これ等一切の形勢を綜合する時に、吾人は數百年の敵手であつた英露の兩國が、漸くにして再び積年の抗爭を世界の各局面に於て開始するの已むなきに至らんとしつゝあるかと感ぜざるを得ないのである。これを演劇的に言へば、君府を衝いて破れ、印度を脅かして成らず、朝鮮と滿洲とに進出せんとして敗れたる露國が、南下して冬無き國に不凍港を求めんとするの傳統的慾望を、廣東に於て發見したり、とも言ひ得べきである。

若し若き支那が、友邦を世界の列强に求めて得ずして、これを露國に發見したりとせんに、その外交的提携の約成れりと假定して、先づ英國の利益を支那全土より驅逐せんとしたらんには、支那南北の抗爭は一轉して、英露の衝突となり、四百餘州の紛亂は更らに、太平洋全局より歐洲に擴大せんも未だ知るべからず

今日の日本は幸にして、絕對不干渉の好題目を提げて一時の人氣を中外に博しつゝありと雖、支那の變局が英露の反目となり、さらには米國の國策確定して、太平洋上の强國間の抗爭と轉向したらんには、日本は果して尙ほよく、絕對不干渉の標語を中天に掲げて、光榮ある孤立を持續することを得べきか。吾人の憂ふるところはこれである。進んで英米と結はゞ、二億圓の對支綿織物輸出貿易は如何の影響を被るべきか、退いて露支と伍せば、八億五千萬圓の對米生絲はいづくにか往くべき。進退共に容易でない。しかも太平洋問題の全局を按ずれば社稷百年の運命にも關らんとしてゐる。果して然らば、南方革命軍の飛躍は、日本國民の運命に一大變化を招致せんとしつゝありといふべきである。

三

今日の東亞の形勢は、刻々安政開國當時の事情に近接しつゝある。七十餘年前英佛の勢、南より迫り、露は北より下り、米國艦隊東より來たつて、日本島嶼の周圍に太平洋上の勢力均勢成り、遂に日本開國と成つたやうな狀勢が、また一度太平洋上に到來してゐる。しかも我國內の事情も亦、幕末と相似てゐる。國民生活の不安と、舊勢力の衰微とのために、遂に德川氏三百年の幕府が倒れて、新興勢力の明治政府が出現したあの當時の形勢が、今日の日本內地にも存在すること

は、少しく社會の實相を窺ふ人の、何人も首肯するところである。但々支那の變局を機緣として、日本內地に於ける、、、、、起らざるべしとは、誰人も保障することは出來ぬ。

四

遠からずして、再度の世界戰爭あるべしとは、多くの人の憂慮し警戒するところである。今日の歐洲の形勢が一九一四年の歐洲大戰前の事情に近似し來れることは、識者の夙に指摘する處である。殊に太平洋上に於ては、戰禍を孕む諸問題の幾多存在することは、識者の一致する處である。英國は白人濠洲論を維持するが爲めには、種々の不條理なる設備をしなければならない。新嘉坡築港はその一である。比律賓維持のためには、米國は同島と布哇との防備を固めなければならない。南北滿洲に於ける未解決の問題の存在は、日支露の三國を否定しがたき不安の關係に置いてゐる。此等の一切が、世界の現勢研究者をして、太平洋上に戰禍ありと呼ばしむる所以である。しかるに今や廣東より上海に亙る支那大陸の形勢は、更らに太平洋上の戰禍發生地にその一を加へたる譯である。

戰爭發生の眞因は、政治家はこれを公言することを欲しない。多くは別題目をもつて民心を昂起することに務める。乍併、嚴正なる眞理の探究者は、憚る處なく事實の眞相に直面して、天の未だ雨降らざるうちに、その牖戸を綢繆するの用意がなければならない。支那動亂は太平洋上の陰影を濃厚ならしめつゝありとの吾人の所說が、一片の杞憂に終らば、吾人望外の大幸である。

五

吾人は直ちに本篇の眼目たる米國論に入らんと欲する。第一に吾人の穿索せざるべからざるは、米國の亞細亞政策である。米國の外交政策は比較的單純である。歐洲に對してはモンロー主義による政治的無關係を固執し、中南米に對しては汎米主義による指導的立場を要求し亞細亞に對しては支那門戶開放支那領土保全の原則を樹てゝ協調親善策を取つてゐる。乍併、米國の亞細亞政策の歷史を顧みると、その親亞細亞政策のうちに、自ら二個の潮流あることを看取する。これは最初の支那特派大使クッシングの主張したる條約尊重國際法尊重論である。辯護士出身の彼は、條約と國際法との合法的手段によつて、その亞細亞政策を遂行すべしと主張した。然るにこれと正反對の手段を主張したるが、ペリー提督である。海軍士官たりし彼は、門戶開放を確保する爲には、海軍根據地を領有するを必要とすと稱へて、領土の獲得を力說した。この矛盾したる二潮流が、米國の亞細亞政策に、交互に隱見してゐる。その一八九八年に布哇を併合し、一八九八年に比律賓とグアムを占有し、更らにサモアの一部を掩有したる如きは、ペリー思想の露出で、平和的支那援助策の大體はクッシング思想の餘流である。

その手段に於ては、斯のごとく異つてゐるけれ共、その目的に至つては、終始一貫してゐる。米國は不思議に亞細亞に對して、興味を持つてゐる。吾人の不思議といふは、米國が歐洲政治問題に關して、絕對無關係の立場を常に執拗に主張するに關らず、事苟も亞細亞に關す

るに於ては、經濟上のみならず進んでは、政治上の協力をも、辭せざるの態度に出づることである。而して米國のこの對亞細亞興味は、年を逐ふて增進してゆくであらうと思ふ。

これは米國の本能的要求であるかも知れない。米國々民は米國の未來は太平洋上にあることを、半ば本能的に意識してゐるのかも知れないからである。

たゞ米國の太平洋政策が、歐洲列强と異る點は、歐洲の諸國が弱き亞細亞を希望したるに反し、米國は强き亞細亞を祈願したることである、と米國の極東問題研究者のデネットは言つてゐる。それは多少の條件付で聞くとしても、兎に角事實上米國は少くとも過去に於ては亞細亞の國々の强くなることを妨げてはゐなかつた。

然るに太平洋における米國最初の相手は露西亞であり、英佛であつたのが、最近に至り更らに日本といふ一國を加へた。そのために過去十幾年に亘つて、米國の太平洋政策は幾多の變更を閲して來たが、今や新たなる支那大陸の狀勢が發生したるにつき、米國は如何なる新太平洋政策に出でるであらうかといふことが、吾人に取つて興味ある問題である。

六

然らば、米國の太平洋政策の指導者たりしは、如何なる種類の人々であつたか。さらに進んで、將來は如何なる人々であらうか。

米國の亞細亞に進み來つたのは、最初は通商貿易のためであつた。從て當初の亞細亞政策の先驅者は商人であつた。然るに漸を追ふて宣教師の東洋に渡來するに及び、彼等はその勤勉と熱情とをもつて、次第に指導的立場を占有するに至つた。たゞ日本に於ては、日本人が進んで自ら外國語と外國事情とを研究したると、天草亂の史實に鑑み西洋人側に於て遠慮したるとの爲めに、宣教師は前後を通じて政治外交の問題に關與し來ることがなかつたが、支那に於ては、宣教師の勢力逐年增加し、史家ベネットをして『十九世紀の大部分を通じて、米國人は宣教師の眼を通じて亞細亞を見たり』と謂はしめた程であつた。

米國が海外布教に熱心なるは、世界周知の事實であつて、一九二三年の統計によれば、海外布教費約一億圓に上り、その駐外宣教師及家族の數約三萬に及び、その五割五分は亞細亞に居るのであつて、殊に大部分は支那に在住するの盛況である。從て此等宣教師の思想觀察が、本國の輿論を動かすの力の大なることは、吾人想像の外である。即ち米國の太平洋政策の一半が、宣教師の手中にありしことは吾人の注意すべき點である。

この大勢は非常に永く續いた。巴里會議の當時、山東問題に關して如何に米國内に、感傷的支那同情論の横溢せしやは、吾人の記憶に新なる處である。而してこの宣教師の支那同情論が、排日輿論に轉換する機會の多かつたことも周知の事實である。

ところが華府會議前後より、在東洋宣教師の意見は多少變更し來り更に日本大震火災と排日移民法成立以來は、宣教師は大に從來の排日態度を緩和したるやの兆候歴然たるものがある。これと同時に、米國實業家殊に國際金融業者側の對支意見は急速なる變化を示し來り、從來の感傷的支那同情論は、少くとも余の在米したる大正十三、十四年

の交に於ては、實業家側には殆んど聞くことを得なかつた。その意見は次第に新聞に反映し、過去に於けるが如き極端なる親支攻日の議論は、公平なる新聞紙上より姿を隱すに至つた。

此處に吾人は隱約の間に、米國の東洋政策乃至は太平洋政策の轉換すべき片鱗を窺ひ見るのである。換言すれば、將來の米國の對支政策が、次第に米國の資本的太平洋進出と相俟つて、感傷論より實利論に轉換するの傾向なきか、との推測を下すの餘地ありと爲すのである。

七

論じて此處に至り、吾人は米國現在の國情を一瞥するの必要に到達した。

米國が百五十年前初めて東洋貿易を開始したる當時は、微々たる新獨立國に過ぎず、從て支那茶を求むる商人が廣東に渡來するに過ぎざりしもの、今や一變して世界最富の大國となり、國內の經濟組織は根本的に變化してゐる。當時農業國であつた米國は、今や一流の工業國であり、昔日の債務國は一變して世界一の債權國と爲つてゐる。歐洲戰前には債務約百億圓、債權五十二億圓、差引約五十億圓の債務國であつた米國は、一九二四年には百八十億圓の海外債權を有し、一九二六年の豫想は二百四十億に上り、一九百三五年(昭和十年)には五百億一九五〇年(昭和廿五年)には、大約千億圓の對外債權を有するに至るであらうと推算せられてゐる。一九二四年の米國の海外投資は、七割一分は加奈太南米中米に留り、二割一分は歐洲に往き、その亞細亞及び濠洲に投下されたる資本額は僅かに、八分に過ぎざる勢力であつたけれども、東洋に於ける戰亂の終熄と共に、その比率の大に變化すべきは、幾多の事情よりして、吾人の安全に推算し得るところである。

米國の對外貸付が年々三十億圓の割合を以て増加する一方、米國の農業と工業との比率が次第に變じて、一大製造工業國と變化しつゝあるの事實に鑑みれば、米國が從來の自足自安の國內主義を捨てゝ、海外發展の世界國と化し來るべきことは、理の當然である。

この時に於て米國の進出すべき第一の地域は南米中米と加奈太であり、第二の地域は太平洋對岸の諸國であるべきことは、說明を須ゐずして明らかである。

斯のごとく米國資本の海外流出、米國製品の海外搬出が、漸次加速度をもつて増加し來るべきものなりとせば、その太平洋政策も當然共に變化を被らざるべからざることも明白である。

八

米國は斯のごとく、近年に至つて俄然として、債務國より大債權國に變化したのであるが、その數字的變化よりも、さらに驚くべきことは、米國自身の本質的變化である。

例へば、その人種についてこれを見る時は、米國建國當初の人種が主として英人であつて、これに僅かの獨乙人和蘭人を加へてなつた所謂北歐人種であつたのが、最近に至つて俄然として一變し、南歐東歐の新移民の增加したことは、米國研究者にとつて、見逃すべからざる現象である。

一八六一年より一八七〇年までの十年間の移民は、英國系の三割八

分と獨乙系の三割五分を以つて以つて居つたに比し、四十年後の一九〇一年より一九一〇年に至る統計を見ると、英國系は四分四厘、獨乙系は三分九厘に減少し、反之、墺匃系二割四分四厘、伊太利系二割三分三厘、露西亞系一割八分二厘を算してゐる。換言すれば、一八七〇年までは、北歐チユートン民族の移民は七割二分の多數を占めたのが一九一〇年頃には、僅かに八分三厘に下り、非チユートン族の來るもの七割五分九厘といふ大數に上つたのである。

現に一九二〇年の統計によると、米國にある外國生れの人口及其の子の數は大約二千九百萬の多數に上り、そのうち、獨乙系の七百二十六萬を除けば、二位は愛蘭系の四百萬強、露西亞系の四百萬弱、伊太利系の三百三十萬、墺太利系の三百十萬、スカンヂナヴイアの二百五十萬で、英國系が僅かに第七位の二百三十萬である。

これを以つて見ても、現代米國は次第に英國系の思想感情傳統より分れて、別種なる亞米利加的傳統に展開せんとしつゝあることが明瞭である。これを文學について見るも、近代米國の文學は、次第に英國系の文學から分れて、純米國文學を作らんとしつゝある傾向が顯著である。我々は少年時代には、米國の文豪と云へば、エマーソン、ロングフエロー、ホーソーンのごときを數へたが、今日の米國民を動かしてゐる文學は、かゝる純英人系の思想でなくして、全然異る新米國的情操である。七年前に發行されて、一躍五十萬部を賣り盡した、小說ゼ・メーン・ストリートのごときは、全然從來の英國式文學の規範を脫したる新文學である。かくて、獨乙系、露西亞系、愛蘭土系、伊太利系、猶太系の新しき思想傳統が、猶き英國の傳統を變化しつゝある處に、我々の注目すべき新米國がある。

これを宗教の方から見ても、最初は淸教徒たちが打ち建てた新英蘭六州のごときですら、今日は伊太利、波蘭土、愛蘭土等の舊教徒が多數を占むる有樣であり、政治的に見れば從來は、大統領の産地と言はれたヴオジーニア州は見る影もなく衰へ、新英州の勢力も永久に去つて、新移民の多數を占しむる中西部諸州が、政治的中心となつてゐる。

更らに經濟的にこれを觀察するならば、米國が世界史上特有の現象として誇つた『自由土地』の時代は、永久に去つてしまつた。つい四五十年前まで、新來の移民達が、一打の鍬を擔いで、西部未墾の大平原に趣き、森林を拓り開いて作つた新田地を、そのまゝ無償で自己の所有地として占有することを得た所謂自由土地の時代は、も早や永久に去つたのである。米國の隅から隅まで、私人の所有權の確定したる今日、新來の移民は直ちに大地主中地主となることは出來ない。或は農園に入つて小作人となるか、或は工場に入つて勞働者となるか、或は商店に入つて使用人となるより外に途はない。

即ち新來の移民達は、人種的に變つたのみならず、職業的階級にも變つてきてゐるのである。自由農民の國として起つた米國が建國以來百五十年にして、今や農民の三分一は耕さゞる大地主、三分の一は自作自主、他の三分の一が小作人といふ狀況に變じてきてゐるのである。而して工場地帶に至つては、更らに甚しく、新來の移民は工場勞働者として、本國のまゝの生活、言語、宗教を持續して共す有樣となりつゝある。

これは明白に、米國の誇りとしたる米國化――アメリカニゼーシヨ

ソ——の運動の不可能を物語るものである。この勢で進んでゐつたなら、米國は日ならずして、混亂不統一なる別の國となるであらうとの憂慮から、一九二四年の有名な移民法案が制定されて、歐洲からの移民に極度の制限を加へたのである。日本はこの時、偶々傍杖を喰つた形である。

九

建國當時の米國の政治家たちは、斯のごとき形勢の到來せんことを非常に憂惧した。一代の思想家であり、又大政治家であつた第三代大統領ジェファーソンは、米國を永久に自由農民の平等的デモクラシーの國として維持せんと欲し、その教書に於て、手翰に於て、屢々これを切言してゐる。彼は歐羅巴各國を以て米國の工場と爲し、米國は永久に大地主中地主の農業國と爲さんと欲したのである。彼はデモクラシーは恒産あり生活の安定せる人々によつてのみ可能なりと信じたのであつた。しかし、彼の希望は裏切られて、米國は今や、工業國と爲り、富める人と貧しき人との二つの階級が發生せんとしてゐる。勿論今日の米國は、歐洲のごとく、富める階級と貧しき階級とが固定してゐない貧しき人も、一躍して富める階級に上り得るといふ觀念が大多數の人々の胸中に健在であり、またその觀念を保存するために、一切の宣傳を行つてゐる。而して、この希望が貧しき人々の胸裏から消えない限りは、米國のデモクラシーは安全である。

米國建國當初に於て、貧富の差の少かつたことは、當時の米國一の富豪と言はれた、ワシントンすら、その財産は六十萬弗、即ち百二十萬圓と評價せられてゐたに反し、今日米國第一の富豪ロックフェラー家の富は四十億圓に上つてゐる。(フォードの財産は實際以上に甚しく誇張せられてゐるとのことである。)

今日の米國の社會的變化は、古代羅馬帝國の變化と甚しく似通つてゐる。羅馬も亦四民平等の自由農民國として起り、領土全世界に跨るに及び、大富豪と貧しき勞働者とを生じた。その羅馬發達の第二期たる冒險的富豪の躍進時代といふのが、今日の米國と酷似してゐる。そうして、當時の羅馬人の意氣込が、今日の米國人の氣宇と似てゐる。羅馬の第三期たる職業軍人全盛時代のごとき寡頭政治時代が、米國に出現すべきや否やは豫斷の限りではない。現在の事情としては、米國では起りにくからうと思はれる。

(この古代羅馬と現代米國との比較は非常に興味ある研究で、伊太利の史家フェレーロや英國の思想家ウェルズなどの透徹した著述がある)

一〇

我々が米國を研究するに當り、忘るべからざる一つの點は、米國が驚くべき幸運の國であるといふことである。建國以來米國の歴史は、破格な成功のみを以つて綴られてゐる。失敗したことのない國民である。欲すること悉く成り、しかも豫期以上に成つてゐる。

かゝる容易なる成功は、その成功者に一種の心理狀態を植え付ける即ち運命と自力との混同である。また或る場合には、自己の幸運の過信である。自分のすることは何でも出來るといふ、天も地も一呑みといふ氣持である。この一種の樂天癖が、米國々民の心理を裏付ける特

有な色調である。これは外國人が初めて米國に趣くときに、何人も感得する顯著なる特色である。米國人自身もこれに氣付いてゐる。米人クローリーはその名著『ゼ・プロミス・オブ・アメリカン・ライフ』の中でこれを最も明快に論述して米國人は、その經濟的條件の有利なりしため、何をしても儲かつた。誰でも生活が安定し、金持ちになつた。米國の社會が見るく\うちに繁榮した。まるで成功といふものは、坂を辷り下りるやうなもので、米國人はずるく\と成功といふ淵へ辷り落ちたのだ、といつた。そうして米國人の樂天觀はこの辷り込み主義であるといつた。つまり米國人は自然に拋っておいても成功の深淵に辷り込んでしまふのだ、といふ自信が、何時ともなしに米國人の腦裏に出來てしまつたのだ、と記述した、殊にこれは歐洲の舊い國々のやうな生活の苦しい國の國民とは異る處であるとした。

その米國人の樂天的成功意識は、最近に至つて次第に變りつゝあるしかし歐洲戰爭のためにに巨富が流入したゝめ、その樂天觀の消滅は少しさきの時期まで延ばされたものと見なければならない。

からゆう樂天的な成功國民が、自己の幸運を確信しつゝ太平洋時代の開幕と共に登場して來るのである。

二

これより我々は進んで、米國の精神的內容を點檢して見る必要がある。かゝる惠まれたる經濟條件の下に、國を起したる米國が、如何なる教育方法をもつて國民精神を築き上げてゐるか、といふことを少しく檢討して見るならば、米國人は果して如何に考へ、何を爲すやを推想する一助となすことが出來る。

現代世界の大きい傾向は、一切の救治策を教育に求めんとすることである。中世に於て、我々の祖先が宗教に求めたやうな熱情をもつて一切の救濟を教育に求めようとしてゐる。ことに其の傾向の顯著な國は米國である。ゆえに學者はこれを呼んで、米國人の教育に對する迷信と稱し、中世紀の迷信と對比して、眞の宗教が迷信と低下したると同じく、米國の教育も本當の教育から迷信に變化しつゝあるとすら極言してゐる者もある。

シカゴ大學教授のラヴェット博士の所論の大様は、文明批評家より見たる現代米國の教育論として、頗る興味がある。これは我々は米國のみのことゝして閑過することは出來ない、その大要はかうである、

歐洲を旅行する人の眼に映ずるものは、大寺院大伽藍の宏莊なる建築である。米國を旅する人の眼を驚かすものは大學の巍々たる校舍である。共に人の靈魂を救濟せんために、罪を犯して富を造りたる人々が、その贖罪のために爲したる寄附金で出來上つてゐる。昔は旅する僧侶が人の靈を救はんとしたが、今日は旅行して歩く哲學博士が學問を切賣して歩いてゐる。

と爲し、古代の宗教が此の權威を失つたごとく、近代の教育も社會に有したる確乎不拔の地位を失ひつゝありと爲し、その原因は、傳統の權威すたれて、個人的意見がこれに代つたゝめであるとし、その近因をハーヴアード大學の總長エリオット博士の創始したる、學生の教授課目隨意選擇制度にありとした。これが爲めに學生は、容易なる科目を選擇して、深遠なる學問を退け、平易なる部分的知識を吸收して、誤

合的大知識を閑却するに至つた。こゝに米國高等教育の根本的病弊が伏在すると論じた。

自分もラヴエツト博士のこの論には深く共鳴する。今日の米國を旅行し、且つ米國各地大學に於て講演したる短き經驗に徴するも、米國人の一般思想を支配する根本病弊がこの處にあることを痛感する。

自分が米國を旅行して、米國人より屢々米國觀如何と問かれた時に忌憚なく答へたことは、米國人の思想的單調といふことであつた。それは米國人が、どこの誰れでも大てい同じことを考へてゐるといふことである。これを英國や佛蘭西に比して、米國人の思想が同一の型に入つてゐるといふことは深く我々を印象する。それは米國の教育からその弊を發してゐることを、ラヴエツト博士の説明によつて、自分は首肯した。

博士は更らに謂ふ。

近代の教育は科學を與へた。故に學生は自然科學については可成り進んだ教育を受けてゐる。併し、政治、社會生活、一般文化等については、甚しく後れた知識しか與へられてゐない。この二つの知識の部門の跛行的狀態が、近代世界の悲劇の原因である。

而して學生が大學に於て近來、實業教育を受けてゐる。しかるに其の目的は、個人的成功術の教授であつて、社會全體の福祉増進の觀念を與へるに存しない。

と、この點は、ウエルズが最初の米國訪問の際に痛感したるところで米國々民の思想的基調が個人的成功に存し、しかもこれが、經濟的繁榮時代なる爲め勢ひ財産獲得を目標とする努力に集中することが、米國社會の根本的欠陷であるとして、その著『米國未來記』において指摘した。尤もこれは米國に限つたことではない。たゞ米國に於ては個人的成功の機會が頗る多かつたゝめに、其の才能が異常の發達を爲したので、それが近代米國の顯著なる第二の特色を形成してゐる。即ち、能率崇拜、といふことである。樂天觀に次いでは、善惡ともに、この能率崇拜が現代米國の特色である、戰前の獨乙が、力の崇拜を基調としたると、多少趣を異にする特色である。この近視眼的個人成功主義の因つて來るところを指摘して、ラヴエツト教授は謂つてゐる。

かゝる專門的技能習練の機會としての大學教育は、學生を科學者のごとく專門的としたけれども、科學者のやうな徹底味を與へなかつた。ことに科目選擇の自由は困難なる科目を避けしむる結果、學生は、數學と古典とを捨てゝ顧みず、古典(ラテイン語希臘語)を捨つるの結果は近代語(獨乙語佛蘭西語等)の基礎は失はれた。その爲め自國語のみをもつて學問する習慣を生じ、次第に學生の眼界は偏狹固陋となつてきた。

この所説は、たしかに近代米國の病弊を突いてゐると思ふ。ウイルソンが、プリンストン大學の總長として努力したのは、米國の學界に古典を復活しやうといふことであつた。それは學生に現代文明の基礎を敎へ、同時に古典の有する綜合的思索力を學生に注入せんとすることであつた。自分は日本の教育についても同一のことを言へると思ふ。古典教育を失つて、部分的な科學教育に奔ることは、日本の大なる憂である。

近代米國の今一つの特色は、亞米利加至上主義の擡頭である。亞米

利加のことさへ知つて居ればよい。外國のことなどは知らずともよいといふ、中華式の心持ちの發達が、今日の米國に於て眼立つ現象である。その病弊の原因の一つは、この大學に於ける外國語研究の衰退に歸され得る。自國語のみをもつて、自國のみのことを研究する人に取つては、自國が一番偉く見へるのは當然である。さうして自分の國が他國から後れてゆくことに氣が付かずにすんで仕舞ふのである。

更らに教授は進んで謂ふ。

自己の好む學課のみを選擇する結果、學生は集中力と批評力とを失つてきた。ことに教授たちが、學生を指導するに當り、根本の材料によらずして、抜萃記事のみを與ふる爲、學生は單調なる抜萃のうちにある皮相なる意見と、この抜萃を作りし人々の固定的批評を鵜呑みにする習慣を養ふ結果、原本によりて骨を折りて思想を探索し、且つ自己の意見を立つる批判力を失ふに至り、學生は千遍一律の單調なる思想を抱いて校門を出でるのである。ことにこの風潮を煽つたものは、講演の流行と、ショトーカ式教育の風である。

と結論してゐる。

教授は更らに進んで、中等教育、初等教育も同一の病弊あることを指摘し、學生に思索するの習慣を與へずして專門的技能のみを與ふる近代教育が、根本哲理として何物を與へつゝありやといふに、

近代教育の目的は、現存社會制度に對する信仰を鼓吹せんとするにあるが故に、自由なる思索、自由なる研究は、學界よりその跡を攘はんとす。

と嘆じてゐる。苟も今日の米國の社會組織の根本を究明せんとする思想は、一切教育界から排斥せられてゐると爲し、その實例を多く舉げてゐる。たゞ近頃、ある少數者の間に、現在の教育自身の效力を疑ふもの生じ來り、教育制度と現在社會組織との同盟を排斥して、獨立なる學校、例へば勞働學校の發生せることを指摘し、又一方今日の教育によりて社會的成功をかち得べしとの信仰は教育ある教師達の生活の貧弱なることによりて最も雄辯に裏切られつゝある爲め、從來の如き教育過信の風は今や變ぜんとしてゐると說いてゐる。

吾人は上來、太平洋問題とあまり緣遠き米國教育論に深入りしたる觀があるが、吾人の結論に到達する順序としては、米國人の思想的傾向を知るを必要とし、米國人の思想的傾向を知る爲には、その思想の揺籃地について之を尋ぬるの要があると考へたからである。

二

上來記したるところを綜合して、吾人の結論し得るところは、第一に米國が過去の主農的自給自足國より一轉して、工業國と化したるの事實は、米國をして製品を海外市場に送らしめ、食糧を國境外に求めしむるに至るものであつて、從て米國は太平洋政策に益々力を用ゆるであらう。といふことである。第二には、米國内の經濟的變化、即ち個人生活の大第に逼迫せんとすることは、米國の政治外交の人道的色彩を益々稀薄ならしめるであらう。第三には、米國の中地主小地主階級の勢力衰退は、大金融家大工業家の掌中に、政權を集中するの傾向益々顯著となるであらう。第四には、人種的變遷と教育的變化との爲めに、過去の清教徒的政治は大第に個人成功主義の政治と轉化してゆ

くであらう。依つてローズヴエルトや、ウイルソンのやうな政治家の出現が、今後は段々困難になつてくるであらう。第五には、米國は從來の英國系の文化から次第に脫脚し、從て社會的にも政治的にも英國の指導に服したる如き過去の傾向が段々薄らいでくるであらう。この米國が英國より文化的に思想的に獨立せんとする傾向は、將來の世界政局に向つて、可成り重大なる因子であると自分は考へるのである。

乍併、一方に於て米國は、歐洲の諸邦とは、全然異る傳統を持つて發達してゐる。歐洲の無產階級の解放のためには、革命の危險があるが、米國に於てはこれなしと、クローリーが言つてゐるやうに、米國の社會は自ら改革し自ら治療する融通性を備へてゐる。且つ衰へたりと雖、過去の宗教的情熱が米國の社會的根底に殘つてゐる。ゆえに滔天の現實主義に反抗して、正面から挑戰する理想主義が、まだ今日の米國に殘つてゐる。またその樂天癖の結果として、一本氣な情熱が大多數の國民のうちにある。たゞ怕るゝところは、米國人は上記したる如く單調な思想を共有してゐる。これは米國のみの特色でなくして、デモクラシーの自己防衛本能であるとある學者は稱してゐる。その結果米國はプロパガンダの非常によくきく國である。自分の深く憂慮することは、このプロパガンダに應じやすき米國が、ある少數の指導者又はある外國の故意の宣傳によつて、ある他國に不利益に利用せられることはあるまいかといふことである。此點について自分は、日本がその眞相を間斷なく米國の民衆に知悉せしめておくことは、日本の自衛のためにも、世界の平和のためにも緊要事であると考へてゐる。

かゝる一切の事情を眼中に置いて、我々が支那の今次の動亂を機として米國太平洋政策の變化を大觀する時に、米國は從來のごとく、在支宣教師の感傷的支那同情論に動かされて、行動することはないであらう。少くとも、巴里平和會議當時に於ける、米國々務卿ランシング氏の如き偏支政策に出でることはないであらう。と思ふのである。

米國を論じて此處に至り、自分の痛切に感ずることは、生氣潑溂たる興國は、常に若い國であるといふことである。古代希臘の榮えたのは、若い國であつたからだ、とギルバート・マレーは言つた。亞米利加が今日まで伸びて來たのも、若き力の躍動である。今日支那の南方革命政府の成功も、若き力の成功である。露西亞の今日も若き力の奔逸である。日本の王政維新直後の盛觀も、若き日本の飛躍である。いま太平洋時代の開幕と共に、若き力に支配せられる國々が、新裝を被つて登場せんとしてゐる。若し獨り日本のみが、舊態依然として、舊き力と舊き思想に賴らんとするならば、これは千載一遇の機會を失するものである。七十年前の日本の新世界政策が、國內の改革から初まつたやうに、今日の日本の國際的準備も亦、國內の新興勢力の解放から始まらなければなるまい。

不自然なる今日の太平洋上の勢力均衡は、早晩破れる日が來るであらう。その時に日本は、今日の光榮ある孤立政策を捨てなければならない。その日に日本は、果して奈邊に向つて往かんとするのか。

(昭和二・三・七)

南京事件と『共同動作』

山川均

國際聯盟の軍縮準備委員會と、米國の提唱による三國海軍制限會議とが、軍備競爭の廢止と世界の平和への貢獻とに競爭してゐる時に皮肉にも列國の對支政策は内政不干渉から武力干渉に推移しようとし、かくて戰後の世界を脅やかす第二の世界戰爭の火山脈は、そのうちで最も危險な活動帶と見做される支那において、强烈な震動を起こしてゐる。

一八三九年の第一回阿片戰爭以來、支那の内臓に最も深く爪を引つかけてゐたものは、いふまでもなく英國の帝國主義であつた。そこで反帝國主義的國民運動のまづ第一番の目標にされたのは、英國であつた。

英國の工業と貿易とは、著しい衰頽の傾向を示してゐる。しかるに英國資本主義の繁榮は、その足の下から殖民地といふ大切な基礎を失ひかけてゐる。弱り目に祟り目で、支那の革命的民衆運動の槍玉に上げられてゐるのが、この英國である。對支政策において、英國が最もぢれてゐるのはちつとも不思議はない。そこで英國の註文は、よかれ惡しかれ日本とアメリカとを道づれにすることである。かりに漢口事件のあとで、日本が英國の出兵の尻馬に乘つてゐたならば(言ふまでもなく、日本にはそれほど間抜けな外交家はゐない筈だが!)、英國は或る程度まで、その目的を達してゐたにちがひない。そして日本は支那の國民全體を敵として、反帝國主義的民衆運動の矢面に立つ光榮を擔はされて居つたらう。英國は『共同動作』を希望する。なかんづく武力干渉の共同動作を希望する。

○

遙かにおくれて火事場にかけつけた米國としては、英國に追從することは必ずしも利益でない。少なくとも米國は、近い將來に支那における英國の地位に取つて代はるのは、自分でなければならぬと考へてゐる。であるから支那の革命的民衆運動が英國の鼻梁骨をへし折つてゐる間は、それは『人類の自由を目標とする無限の鬪爭を點綴するところの、人類大蹶起のいま一つの實例』なのである。そこで英國が日米に鬼ゲ島征伐のお伴をさせようとするに反して、米國は一足お先きに馳けぬけて、『單獨行動』を取らうとする。最近に支那問題の火の手があがつて以來、『協同動作』に對する『單獨行動』の意見は、米國の朝野に有力であつた。『協同動作』は資本主義列國の支那における既得權の擁護を代表し、『單獨行動』は、支那における新たな勢力の扶殖を代表する。

そこで舊るいものを失ふまいと必死にかぢりついてゐる英國の對支政策が一本調子なのと違ひ、新しいものを狙つてゐる米國のそれはもつと複雜であつて、少なくとも武力干渉一天張りではない。しかしこう云つたからとて、米國の帝國主義が英國の帝國主義にくらべて、ほんの少しばかりでも、平和的だといふわけではない。內政不干渉と武力干渉とを使ひ分けてゆくところに、英國とはちがつた米國の利害がある。

○

ワシントン電報は、アメリカ政府の對支態度がますます硬化しつゝあること、さらに千五百名の海兵團をサンヂエゴに召集する命令を發し直ちに上海に向けて出發のできる準備を整へたと報じてゐる一方には米國は大規模に、蔣介石に財政的援助を與へるといふ報導もある。これはどこまでが事實でどこまでが宣傳であるか、もとより分らぬが、これとても必ずしも有り得ぬことではない。蔣介石によつて有力な中央政府が成立し、そしてなほその上に、民衆の革命運動を米國の望み通ほりの地點で阻止することのできる見込みさへあれば、資本の輸出は軍隊の輸出よりも、米國に取つては、はるかによく目的にかなつた手段である。

○

こんどの南京事件は、英國の立場を幾分有利に導びいた觀がある。北京外交團は、『ともかくも』南京事件の共同調査をすることに決定した。しかしこの共同調査がどの程度まで、英國の欲するがごとき共同動作の方向に發展するかは、固より疑はしい。英國は例の通ほり、この機會を列國共同の武力干渉に導びこうと努めて居り、今では米國も英國と歩調を合はせてゐるのである。しかし米國の利害は一そう複雜であつて、いつこの厄介な道づれを撒いて、單獨行動で走り出すやら分らない。

しかし何と云つても英國の成功は、日本に出兵論や共同武力干渉論を起したことである。上海商業會議所は、陸軍の出兵を要求し、揚子江一帶の邦人引揚げの必要を說いた決議をしたと傳へられてゐるし、內地では、いつでも『國家本位』でばかり行動するわが政友會は、斯の如く帝國々旗の威稜は空しく南軍暴兵の蹂躪する所となり、同胞男女は名狀すべからざる侮辱を蒙り、彼等が慘憺の苦心に成れる公私の經營は依然として一空に歸せり。更にまた領事館護衛の海軍將卒がその武器を用ふるに由なく、無限の忍辱の下に居留官民と共に辛うじて九死に一生を得たりといふが如き、實に國民をして血湧き肉躍らしむ……』といふ極めてセンセーショナルな聲明書を出して、國民の血を湧かせ、肉を躍らしめようと努めてゐる。英國帝國主義の對支政策はよいところにその協力者を見出したものである。

これに反して北京における五ケ國公使間には、南京事件の解決に關する要求事項では一致を見たが、この要求に武力的手段を伴はしめるといふ點で、各國の意見が一致せぬと傳へられてゐる。また共同調査の方法についても、英米は調査委員と共に軍隊を南京に派遣して『強硬調査』をなし、『實力的』に問題を有利に解決しようとするに反し、我國は、軍隊の力を用ひることに絕對に反對し、この問題についての英國大使チリー氏の交涉に對しても、幣原外相は『婉曲に』これを拒絕したといふことである。また北京電報は、『南方相手の正式抗議も、各當事國打合せて同樣の內容として各別に提出し、實質的には共同だ

が、形式的には各國別々として、その解決に當つては、日本としては自由の立場で解決し得る樣考慮するもの』と報じてゐる。吾々はもちろんその眞僞を知らないが、もしわが外務省の態度がさうだとしても、これは寧ろ當然であつて、軍艦で南京を砲擊した英米と共に、日本が『共同の動作』をもつて支那を威嚇することは、決して割のよい役割ではないからである。

○

支那問題の展開をめぐる列國間の關係についての最も著しいことは、第一には、英國の國際的地位が少なくとも支那問題における著しく低下したことである。

第二には、これに反して日本の地位と勢力とが、著しく增大したことである。そしてこれは我國の、帝國主義的勢力としての一大飛躍を意味してゐる。そしてこれは戰後における帝國主義の二大新勢力が、支那の舞臺においてまともに向き合ひつゝあることを意味してゐる。

第三には、支那における列國間の――なかんづく最も利害關係の大きな日、英、米の――利害の對立抗爭は、もはや完全な一致と『共同動作』とを不可能とするまでに發展してゐるといふことである。

そしてこの利害の對立抗爭は、支那の革命民衆運動の發展と共に、ますます發展するにちがひない。支那の民衆運動が、資本主義の世界を分解する强烈な化學藥品たる作用の一つはこゝにある。(四月三日)

西比利亞出兵の責任者は誰ぞ

清瀬一郎

日本の議會は、宣戰、講和、條約の締結については何等の權限も有つて居らぬ。右は天皇の大權であつて、議會の協賛なくして行はれる。(憲法一三)。天皇補弼者(國務大臣)が戰爭を必要とし、之を天皇に奏傳し、裁可を得れば、議會の意思に拘らず、戰端が開かれ、動員は令せられる。天皇補弼者(國務大臣)が講和を可とし、之を奏請すれば、亦同様講和が成立する。議會の意思を以て之を動かすことが出來ぬ。たゞ戰爭を繼續するには金がいる。政府は戰費の爲めに豫算を編成し、國費の支出を要求せねばならぬ。豫算の成立には帝國議會の同意は絕對必要條件である。(憲法六四)。議會は、豫算審議の爲めには戰爭目的に關し質問することが出來る。戰爭が國家の爲めに不利となれば、戰時豫算を否決することに依り戰爭を中止せしめ得る筈である。(少くとも、理論上だけでは)。講和條約も亦議會の意思に基かずして締結せられるのであるが、戰爭の成績については、戰時豫算の執行如何といふ形、即ち決算審議といふ形に於て議會の檢討は受け得られる。

西比利亞出兵は大正十一年十月に終了したに拘らず、當局は後に陳ぶるが如き不純の動機よりして、臨時軍事費特別會計の打切りを故意に遲延せしめた。此會計を大正十四年迄存續せしめたが爲め、議會としては今日迄、正式に此出兵の成績を檢討する機會が與へられなかつたのである。決算は、會計法上、豫算打切りの次の議會に提出せらるることゝなつて居るから、大正十四年四月一日に終結したる右軍事費會計の決算は大正十五年の議會、即ち第五十二議會に附議せられ、議會は茲に始めて西比利亞出兵の功罪を論議する機會が與へられたのである。右出兵に關し、戰術上の講評を爲す人は世間、別に其人がある。筆者は茲に主として會計法規上、並に政治上の觀察點より此事件の責任を究明しやうと思ふ。本文は、三月二十四日、院内に於て、某政黨の激怒を買つた演說の草稿を基礎としたものである。

第一節　會計法上より觀たる軍事費の濫費

西比利亞出兵は實に大きな金を食つて居る。此會計は、大正三年より大正十四年に至る「臨時軍事費特別會計法」に依り整理せられたのであるが、此會計に依り支出せられたる金は實に九億圓を突破して居る。此出兵は大きな金を食つたといふので特色があると同時に違法支出の多かつたといふ點に於ても亦一大特色がある。彼の穩健な會計檢査院が不法不當として批難したものだけでも、既に十九件、三千四百萬圓に及んで居る。私は先づ、會計法上の觀察より研究して見やうと思ふが、檢査院の指摘した點は今假りに之を除く。讀者は、別に同院の報告書を見られたい。茲には檢査院指摘外の事項を論定するに止める。しかも、枝葉末節のことは煩に絕へぬから、其内大きなる綱目のみを擇ばう。此標準を以て、私は次の四件につき論議を進める。一に曰く、機密費の本質。二に曰く、科目更正問

題。三に曰く、軍備補充問題。四に曰く軍票。

(一)機密費の本質。機密費の本質については、私はこれ迄、院内、院外に於て屢々意見を發表した。機密費の本質とは何ぞやといへば、それは後日、會計檢査院の檢査も議會の決算も受けないでもよろしい。行政府の自由消役に委せたる金額といふことに歸する。それ故、いづこ迄が機密費であるかといふとは豫算議定の際、明示されて居らなければならぬ。豫算面に於ては、通常の人件費、物件費なりと計上したものを、消費する方で、これも機密費だ、あれも機密費だと勝手に機密費の限度を擴張して行くことを許すならば、遂には豫算、決算の制度は有名無實になつてしまふ。故に一般の會計に於ては機密費は豫算上別に一項を設け、此限度を超ることを許さぬのである。然るに此度の臨時軍事費に於ては別に項を設けたる機密費を置かなかつた。然るに軍事當局は、驚く勿れ、二千六百萬圓の金を機密費だと稱して摑み出し、會計檢査院の檢査に應じない。もし、軍事當局の主張にして、此金の使途は軍の秘密に屬する。今日之を明言することが出來ぬといふならば、それは別問題であるが、之が法規上の機密費であると稱し、會計の檢査に應じないといふのは無茶苦茶である。此理論を以てすれば、もし軍事當局が更に一千萬圓を殖し、三千六百萬圓が機密費であつたと言つても檢査院は手を引かねばならぬ。五千萬圓、六千萬圓に殖して來ても同一である。こんな横紙破りの議論に叩頭して、遂に軍事機密費の審査をすることが出來なかつた會計檢査院は十分に其任務を盡したものといふことが出來ない。

(二)科目更正問題　檢査院の緩漫はこればかりではない。陸軍當局は臨時軍事費で米價調節をやつた事がある。斯く言へば世人は之を信ぜぬであらう。或は糧抹の殘りを賣り拂つたのであらう位に考へるであらう。然るに事實はそうでない。大正八年の一月より十一月に至るまでの間、我陸軍當局は臨時軍事費を以て、支那米四十四萬九千石を買込んだ。之に要した金額千六百萬圓である。附言して置くが、軍隊には總て日本米を用ひ、外國米は用ひないことゝなつて居る。又、當時の出征軍人は五萬内外であつて、一人宛一年二石を食ふとしても、四十四萬九千石では四年半の食料となるのである。米は長くとも二年以後には使へぬ。此米は買ふた時よりして軍事用ではなかつたのである。此事は政府も自白して居る。支那から、内地に移入するや、直ちに之を鈴木其他の政商に賣拂つてやつた。以て米價を調節し、國家に貢獻したと言つて居る。しかし、軍事費で以て支那米を買つて米價を調節したと聞いては、何人も驚く。驚かぬのは會計檢査院ばかりである。檢査院は此場合、政府が科目更正をして、此一千六百萬圓を一般會計支出に書き換へて置けば善かつたのを、其書き換へをしないのが惡いとばかり言つて、此豫算目的外の支出自體は非難して居らぬ。さればこそ又別に陸軍が内鮮米十三萬二千石を軍用以外に買ひたる場合につき、内四萬九千八百石については一般會計に科目更正を爲し殘り八萬二千八百石は科目更正をしなかつた。此場合檢査院は科目更正をした四萬九千八百石を是認し、科目更正しなかつた八萬二千八百石を非難して居る。同一豫算内の款項流用さへも、會計法上不法なりと論ぜられて居るのに、一般會計と特別會計の科目更正を、檢査院が行政部に慫慂するとは何事ぞ。我國會計檢査の甘さ加減は、此一事でも判る。

(三)軍備補充問題　西比利亞撤兵が完了したのは大正十一年の十月である。然るに其後兵器、彈藥、被服の費用が非常に殖えて居

る。大正十二年、十三年の物件費は實に三千四百萬圓である。これは不審議であるからよく調べて見ると、後にも說く通り撤兵後軍事費は六千萬圓ばかり餘つて居つた。陸軍は、之で、議會の協贊なしに易々と軍備の補充をやつたのである。議會では、戰爭中に消耗したものを補足したのだといつて居る。其眞僞は疑はしいが、かりに左樣であつたとしてもそれは次の戰爭に備ふる爲めの經費で、所謂一般の軍備充實費である。臨時軍事の目的を達するための經費ではなかつたのである。

（四）軍票　軍票は、二十七、八年戰にも、三十七、八年戰にも用ひられて居る。然るに今回は此等二戰役とは異つて、前後十一年に亘る長期の出兵である。戰時とはいふものゝ非常急變といふ譯のものでもなかつた。此間に政府が勝手次第に兌換券のやうなものを出して、國家の義務を負擔する契約を爲すのは不法である。もし、非常急變の場合であつたといふならば法律に代る緊急勅令でも出そうなものである。（憲法八、七〇）然るに勅令さへも出さず、單に大藏省の決定のみで、ドシドシ印刷局で軍事手票なる兌換券を印刷せしめるとは何事ぞ。政府當局は右は約束手形の樣なものであつて兌換券でないと辯解して居るが、それが惡い。約束手形の樣なものを議會の同意なしに行政府が出し得るか。既に此約手には期限がない。臨時軍事費特別會計は今日終結して閉鎖されて居るが、軍票は今尚ほ十九萬四千圓の未回收のものを殘して居る。所有者が、日本政府に請求して來れば何時にても其支拂の責に任ぜなければならぬ。これ今日より見れば全く豫算外の國庫負擔である。（憲法六二第三項）議會の同意なくして斯の如き契約上の負擔を招きしは違法である。怪むべし。檢査院は何等之に論及して居らぬ。

第二節　政治的立場より觀たる軍事費の濫用

以上は主として會計法上よりして軍事費問題を論議したのであつた。事柄が地味であるので讀者の倦怠を恐れる。仍て此事は之にて切り上げて、更に政治的觀察點より軍事費問題を論ずる。是れ亦論點を四つに制限する。一に曰く、勅裁制度の不勵行。二に曰く、金塊事件。三に曰く、本特別會計終結の遲延。四に曰く、出兵目的の違反。

（一）勅裁制度の不勵行　臨時軍事費は大正三年に始まり、其歲出は一款二項より成つて居るのみである。

第一款　臨時軍事費
　第一項　臨時軍事費
　第二項　豫備費

といふのである。此一款、二項内の「目」なるものは豫算にも參考書にも示してない。そこで餘りに流通自在となり濫費の弊あるべしと爲し、大正三年九月、勅裁といふ制度を創始した。陸軍又は海軍に於て、金が使ひたかつたならば、先づ大藏大臣と協議し、使用の目的を定め此目的の爲めに必要なる金額の支出につき勅裁を乞ふのである。此制度は、初の頃は相當眞面目に行はれたが、中途よりして全く亂脈に陷つた。今一例を擧げて言へば、大正四年五年、及び九年十年の四回に靖國神社寄附金として前後二十四萬圓の金が支出された事になつて居る。しかし、神社寄附金などいふことは未だ曾て勅裁科目として大藏大臣に協議されたこともなければ、閣議に上つた事もない。然かも、此金は寄附金とはいふものゝ陸軍以外に出たものではない。同じ陸軍大臣の下に保管されるのである。前年、陸軍大臣や、文官の個人名義の銀行預金や、公債買入があると難じた際、前陸軍大臣山梨半造氏はそれは公金及び官金であつて、靖國神社の金や、共濟組合の金であると答へた。

事實を靖國神社の寄附金と自分で名を附けそれを個人名義で預金する。會計法も何も要つたものじやない。又大正十二年の如きは一ヶ年の間一度も勅裁を仰がず總て前年に勅裁を仰いだものを使つて居つた。前年來の餘り金である。本來勅裁當時の目的以外に使はれたものなる事は云ふまでもない。元來、勅裁制度には重大な欠點がある。ある目的を示して勅裁を仰いでも之に使はなかつた場合、又は一部分しか使はなかつた場合に於ても、其剰餘金を返還するに及ばぬのである。それ故、此制度は名ばかりで實は勵行不可能であつた。

二、金塊事件　此事件は一昨年來政界に一の大なるセンセイションを起した事件である。此度の決算で、餘程明白になつた。又、決算委員會以外の記錄で、私は相當面白き事實を知つて居る。これは別に筆を新にして記述し、世間に公開しやうと思つて居る。たゞ極めて簡單な二事實のみを玆に指摘する。（一）大正七年九月十六日と十月十五日の二回に鹵獲せられたる金塊は、大正十二年一月六日に大藏省に納入せられて居る。明治三十七年陸軍省達第八十七號に依れば、通貨及金銀塊を鹵獲したならば陸軍は直ちに之を國庫に納入せねばならぬ。それに、七年に鹵獲したものを十二年に納入して宜しいか。此五年間金塊は何處に潜んで居つたか、鼠は咬らなくても人は咬り得る。（二）大正九年二月十三日、「ハバロフスク」に於て、我軍が「カルミコフ」より預つた金塊は鹵獲の手續をしなかつた。其後「カルミコフ」は殺されて返す人はなくなつた。此金塊は二百十二貫四十匁といふから、百六萬圓である。これは陸軍では大正十二年三月廿九日に、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と云ふが、當日二百貫の金塊、之等の者に現實に、、

（三）會計終結の遲延　臨時軍事費特別會計法には事件終結迄を一會計年度とすと規定せられて居る。西比利亞出兵といふ事件は、西比利亞の撤兵といふ事で終結としたものと見なければならぬ。然るに西比利亞の撤兵は大正十一年の十月に完了した。仍て此時に本會計を終結しなければならなかつたのである。然るに時の當局、田中、は此時に會計を終結することを肯じない。とうとう大正十四年四月一日迄引張つた。然らば何故に當局は此特別會計の終局をきらつたのか。それには凡そ二つの理由があつたであらう。（一）臨時軍事費は以上の如く色々とやり繰りに使はれて居る。米を買つたり、金塊でいきさつを生じたりしたのはまだしも、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。之を終結すれば決算が廻つて來る。決算が議せらるればやり繰が暴露する。一日も長く此會計を引つ張る心事はよく讀める。（二）此特別會計には金が餘つて居る。大正十一年十月撤兵の時には七千萬圓位餘つて居つたのであらう。大正十二年四月一日即ち一般會計にすれば次の年度に移る時期には陸軍の手もとだけに六千萬圓の金が餘つて居つたとは當局の答へる例である。撤兵の時に此特別會計を締切るときは、、、

（四）出兵目的の違背　これこそ實に重大な問題である。西比利亞出兵の責任はこれで定まると思ふ。――西非利亞出兵といふものが、眞に政府が國民に示した目的の範圍を超えて

居らぬかどうか。今日の立憲國の戰爭は戰費を豫算に求めて居る。豫算目的を示して國民(議會)の協贊を求めて居る。故に戰爭の目的は豫算の目的であらねばならぬ。此目的外に兵を動かす者は議會及び國民を欺く者である。又、今日の戰爭は徴兵に依り集められた兵卒を本體とする。兵卒は戰爭目的を了解して此目的の爲めに義憤を發するに依りて、勇敢たり得る。無意味に上官に盲從するのでは眞の忠勇義烈の活動を望みがたい。故に今日の如き大國家の出兵に於ては戰爭目的は明白でなければならぬ。戰略には祕密はあらうが、戰爭目的には秘密があつてはならない。

今回の出兵に際し、政府は屢大帝國の出兵目的を公示した。(一)大正三年八月二十三日には對獨宣戰の布告があつた。(二)大正七年八月一日には西比利亞出兵の宣言があつた。(三)大正九年三月三十一日には西比利亞駐兵の告示があつた。(四)同年七月三日には「ザバイカル」撤兵、「ザガレン」保障占領の聲明があつた。右各公文書を研究して見れば、我國出兵の理由は初は「チエック、スロヴアック」の救援であり、中途より西比利亞の秩序維持邦人の生命財産の保護といふことになつた。殊に露國の内政干渉はせぬといふ事は度々聲明されて居る。玆に大正七年八月一日の西比利亞出兵の宣言の一部を引用すれば、次の如くである。「帝國政府ハ一意、露國及露國人民ト恒久ノ友好關係ヲ更新センコトヲ企圖スルヲ以テ、常ニ同國ノ領土保全ヲ尊重シ併セテ其内政ニ干渉セザルノ既定方針ヲ聲明スルト同時ニ所期ノ目的ヲ達成スルニ於テハ政治的又ハ軍事的ニ其主權ヲ侵害スルコトナク速ニ撤兵スヘキコトヲ玆ニ聲明ス」と。然るに所期の目的たる「チエック」軍は救出されたが、我軍は撤兵せぬ。大正七年末以來、我軍は西比利亞に於て何事を爲しつゝありしや。

此度決算委員會に提出せられたる書類の内大正七年十一月二十一日の條下に二百四十萬圓の機密費支出の記事がある。其備考に實に、左の如く書いてある。

「後貝加爾州、黑龍州、沿海州及北滿州ニ於ケル露軍ヲ糾合シテ同地方ノ保安ニ任セシムル爲メノ機密費」

と。即ち知るべし。此時代より、當局(田中)は、機密費、、、、、、、、、、、、使用しつゝありしことを。又、今回政府提出の決算書類の内には公然と大正九年以後に「露軍援助費」なる費目を擧げて居る。此れにつき質問して見たら、右は大正九年七月のことであるが、七月に此金(八十一萬圓)を彼に渡したのではなく、從前供給して居つた物資(被服、糧秣等)を此時決濟したのであると。果然、當時の當局は内政干渉はしないと稱し乍ら、露國の一政團を援助し、他政團を討滅するに努めて居つたのである。此疑は今日起つたものではない。既に大正十一年一月後には總理大臣の印綬を帶ばれた加藤高明子でさへ、軍司令官が「人道を無視する政府を默視すること能はず」と聲明したるに關し、

「是ハ軍司令官ノ聲明デアルケレトモ、——實ハ政府ノ意ヲ受ケタモノニ相違ナイ。サウスルト過激派政府ヲ默視スルコト能ハスト云フノト過激派政府ヲ討伐スルト云フ意味ニ當リハセヌカ、外國内ノ一ノ政府ヲ日本ガ討伐スルト云フコトハ内政干渉ニアラズシテ何ゾ。政府ハ度々内政干渉ヲシナイト云ヒナガラ斯樣ナコトヲスルト云フコトハ何事デアルカ」

と切論されて居る。(貴族院速記錄)

帝國の名を以て世界に對し爲したる聲明を裏切り、豫算要求の爲め議會に於て陳べたる言質を食み、「チエック」救援じやと、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

、、、、、、、、、、、、た者の責任は恐ろしい程重大なものではあるまいか。

彼等は必ず辯解するであらう。是れ帝國の爲めに闘つたのである。偶々事志と伴はなかつたのだと。左もあらう。假りに左樣しやう。、、、、、、、、、、、、、、、、陛下の軍隊を動かした。其主旨は假りに忠誠一徹であつたとするも、是は腹藝といふものである。腹藝は成功した、場合には殊の外痛快である。今迄、其行動を批難した國民も、實はそんな事であつたのか。親の心子知らず、吾々は君を誤解して居つたと、且謝し、且喜ぶ。さる代り腹藝が失敗した場合には之を企てた者は腹を切つて罪を謝せねばならぬ。今日の世の中は本當に刃を以て腹を切らないでもよい、社會的に、政治的に、切腹の法はある。英國で「セシル、ローズ」は議會の承認を經ずして亞弗利加の戰爭をやつた。一種の腹藝である。成功したから、よかつたが、失敗して居れば必ず處刑せられて居る。外科醫師が、患者に對し切開を要すといへば必ず痛心して之を承諾すまいと考へ、無斷に麻痺を行ひ切開手術をしたと假定せよ。もし之で病が癒れば其先生は實に命の恩人だ。生涯其患者より尊崇せられる。しかし、間違つて、患者が落命したらどうするか。彼は罪を一身に負はなければならぬ。

西比利亞の腹藝は成功したか。否、否、失敗も失敗、我國開闢以來の大失敗である。數億の國費を濫費した事は改めていはぬ。西比利亞の水に屍を埋めた二千の壯丁をどうしてくれる。尼港で失つた七百の老幼の魂をいかに慰めてくれる。そればかりではない。斯の如き無名の干渉を爲して失墜された我國の信用を誰が回復してくれるか。責任者は曾て、口に臣節を完ふせんと云つた。舌根未だ乾か、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、を掌握せんとす。今の世、起つて此妖魔を除く源三位なきや。

(二、四、二)

三國軍縮會議となつた正體

高橋龜吉

一

クーリッヂ大統領の五ヶ國軍縮會議の提唱は、豫期の如く、佛伊の拒絕に由つて、一先づ蹉跌したが、しかし日英米三ヶ國の軍縮會議と姿を變へて、來る六月一日から愈々開催せられることゝなつた。而して、佛伊に對しては、「オブザーバー」として出席するやう、極力勸誘せられたが、それすら佛國は拒絕した。斯樣な譯で三國軍縮會議の前途に對しては、各國とも、大した期待をかけてはゐないやうである。例へば英國の新聞は、この三國軍縮會議の成立を雜報として取扱つたと云はれてゐる程輕視してゐる。（三月九日東京日々ロンドン特電は曰く、「日英米三國の軍縮問題は、イギリスでは重要視されず、多數の新聞は雜報の一として取扱ひ、これにつき社說を揭げたるはクロニクルだけである。」と。）更にまた、他の方面では、五ヶ國揃つた去るワシントン會議ですら不成功に終つた補助艦制限問題が、日英米のみの三國會議で成功しやう筈はないと云つてゐる。何れも、この會議の前途に對し少からぬ悲觀である。

にも拘らず、三國軍縮會議は何故に開催せられるに至つたか。思ふに、この點が、この三國軍縮會議の成立を機會に、われ〳〵の注意を惹くに足る最も興味ある問題であるであらう。蓋し、この點を突き止めることに由つて、その會議の性質と前途とを略ぼ推知し得る筈だからである

米國が五ヶ國軍縮會議を主唱して、先づ日本が之に應じた。しかるに英國の軍備と最も利害關係の密接な佛伊兩國は之を拒絕したるにも拘らず、英國のみは此の提唱に應じ、終に日英米のみで補助艦制限軍縮會議が開かれるに至つた。と云ふことは、そのことだけで、日英米は、佛伊とは別な、特殊な海軍競爭の關係にあることを物語つてゐる。それは即ち太平洋を中心とする戰雲である。所が、佛伊はこの太平洋の戰雲には殆んど關係なく、その主として關心事とする所は歐洲乃至地中海に於ける戰雲であつて、その渦卷きは專ら英佛伊の巴である。斯樣なわけで、英國の軍備は單に太平洋問題に於けるのみでなく、歐洲乃至地中海のそれにも關連してゐる。

然るに、米國から云へば佛伊は殆んど競爭の相手ではないが、しかし英國の軍備を制限さすためには、是非とも佛伊を引込まない限り英國が云ふことをきかないことは明かである。之れ、米國がその直接關心事とする軍備は、日英のみであるにも拘らず、五ヶ國軍縮會議を提唱するに至つた事情であり、又、佛伊が露骨にその主唱者米國の提唱を拒絕して憚らなかつたわけである。而して、この事實は又、米國が初め五ヶ國軍縮會議を提唱しながら、佛伊の不參加となりたるにも拘らず、今度は單に日英米三國のみの軍縮會議を提唱するに至つた理由であり、而して、この關係こそは又、日英が佛伊の如く我まゝを云ふことが出來ずして、米國の提唱に——五ヶ國會議が三ヶ國會議と變質しても何ほ——應諾せざるを得なかつた根本事情があらう。繰返し

て云へば、米國の軍縮提唱の目差す目的は太平洋上に於ける軍備縮少乃至制限であつて、その目的の一手段として佛伊をまで加へたものに過ぎないわけである。

二

果して以上の如しとせば、三國軍縮會議は要するに太平洋軍備會議の別名に外ならないことになる。所が、此の太平洋上の競爭は、米國の富力のみ特に大にして、英は已に之に少からず劣るに至つてをり、日本は著しく兩者に及ばない。而して日本にせよ英國にせよ。米國に楯ついて、競爭をやらうなどゝ云ふことは、現狀に於ては殆んど夢想である。それほど米國の富力は壓倒的である。從つて又、米國が主唱になつて、軍縮乃至軍備制限をやらうと云ふに對し、日英は反對すべき位置に置かれてゐない。事實、英國は米國の歡を購ふために日英同盟を破棄した程であり、日本の如きはその財政上米國と建艦競爭の餘地なきことは流石の軍閥と雖も之を認めざるを得ないのである。斯様なわけで之を單に太平洋上問題のみから云へば、米國は優に、所謂軍縮會議を指導し成功に導き得る位地に在る。現に、佛伊の拒絶にも拘らず、日英米のみの三ヶ國軍縮會議が成立し得たわけだ。

さり乍ら、英佛伊の競爭に於ては、佛伊は英國を左程恐れてゐない。尠くとも太平洋に於て、米國が有するだけの倒壓的威力を今のの英國は失つてゐる。英佛伊の軍縮問題が容易に一致點を見出し得ざるわけである。斯く英佛伊の間に、軍備の協定が出來ない限り、英國は日米と協定して、その軍備を束縛せられるわけには行かない。斯様にして、英佛伊の協定不能は引いて日英米の協定不能を陷らす危險が極めて大である。今度の三ヶ國軍縮會議の成否の鍵は英國が握つてゐると云はれてゐる所以は之れである。而して、之を日本から云ふも、補助艦比率がより重大の關係に立つものは、米國よりも英國に對してゞあらうから、尚ほ更らに、英國の態度は見ものである。更にまた、此間に處して米國は何處まで太平洋上の覇權を最少犧牲を以て確保するに成功し、日本は軍國主義者の名に何處まで頭を丸めしめて、しかも尚ほ今日の位地を保持せんとするか。思ふに、三國軍縮會議は、斯様な三ヶ國の太平洋上の勢力爭ひを可なりに反映するであらう。

國民政府に返り咲きした汪兆銘氏

山村時男

一

今月四日の上海電報は、

國民政府首席委員汪兆銘氏は、國民黨の招電に應じベルリンから西比利亞鐵道で大連を經て三日上海に歸着、直ちに蔣介石氏と會見し國民政府の方針につき商議した結果、意見の一致を見たので、蔣介石氏は即日國民黨支配下の各省に左の意味の通電を發した。

國民黨の忠實なる黨員で、余の尊敬する汪兆銘氏は今回外國から歸來し、我々は共に相語り萬事において意見の一致を見た、今や余は軍事、民事、財政並に外交の諸政務を汪氏の指揮に委し、力を中央政府に集中しようと欲する。然して軍事については、命令は一途に出づるを要するが故に、余は唯北伐軍のみを指揮し汪氏の命令ならば如何なる命令にも服從する。國民黨の各員皆この態度をもつて國民黨の基礎を堅め、速かに我々の革命の成功を期するよう努力ありたい。

と報じて居る。昨年五月蔣介石氏から廣東を追はれた形ちの汪兆銘氏が、けふは蔣介石氏に迎えられて再び國民政府の首席委員に就いたのである。汪氏今後の活動や如何、玆に昨年よりのいきさつと汪氏の略歴とを述べる。

二

民國十四年六月三十日廣東で開かれた、國民黨中央執行委員會の決議で、七月一日から廣東政府を改組して中華民國國民政府を廣東に樹立することに決し、國民政府委員並に各部長に左の人々が推擧されたのである。

委員長　汪兆銘
常務委員　胡漢民、譚延闓、許崇智、林森
政府委員　張人傑、于右任(不在)、張繼(不在)、徐謙(不在)、廖仲愷、戴季陶、伍朝樞、古應芬、朱培德、孫科、程潛
軍事部長　許崇智　外交部長　胡漢民
財政部長　廖仲愷　大理院長　徐謙

以上顏振れから見れば皆舊國民黨關係者ではあるが、その中で于右任と張繼とは所謂西山派と密接の關係があり、徐謙は當時左程の勢力もなく、國民政府の實權は汪兆銘、廖仲愷許崇智、胡漢民ともう一人隱れた有力者で當時の衛戍總司令たる蔣介石の五人に限られて居つた、一方共產派に屬する有力者には譚平山、于樹德、顧孟餘、王法勤等が居つて露人顧問等と結んで勞働者間に勢力を扶植することに暗中飛躍をして居たのである。

汪、廖、許、胡、蔣等は國民黨の主義と共產黨主義の勢力を打て一團とし革命勢力の集結を圖ろうとする主意の下に、初めのうちは一致の態度をとつて居たところ、その中汪と廖とは漸次共產派に接近の傾向を生じ、之れに對し許、胡は上海、北京方面の右派と提携して汪、廖等の向ふを張ろうとし、玆に兩者は暗々裡に反目するようになつて、遂に廖仲愷

は七月十日反對派の手に暗殺された。

此事件に關聯して胡漢民は蔣介石の手に捉へられ、黃埔軍官學校に禁錮されたが、後事情視察の名目の下に露西亞に送られた、其後許崇智も亦蔣介石に睨まれ身邊の危險を感じて九月十九日上海に遁れ、次て孫科、林森、古應芬等も事に托して廣東を去り朱培德は出征し、政務委員で殘留するものは汪兆銘、伍朝樞、譚延闓の三人となつたのである。

當時汪兆銘は元來が調和的の人物であるから、共產派にも好く隱然たる勢力を握つて居つたのである。之れに對し蔣介石は其部下軍隊中に純孫文主義者と共產主義者の二團隊を擁し兩々相拮抗しつゝある狀況で、左ともつかず右ともつかずその立場よりしてどうしても兩主義を併進せしめて行く方針で頻りに自己勢力の扶植を怠らなかつたのである、そのため當時蔣介石は右傾派か左傾派かの點で區々の世論を受けて居つた位である。

かくて汨、蔣兩者は、各その立場に據つて勢力扶植に餘念なかつた折柄、翌十五年四月下旬胡漢民が露國視察を終り休暇歸國中の「ボロヂン」同伴廣東に歸來するや、左派の勢力が俄かに活氣を呈するに至つたので、蔣介石はその擡頭を防ぐため遽かに汪兆銘に壓迫を加へるやうになつた、そのため汪兆銘は五月十日に廣東を脫出して先づ南洋にいつて後歐洲漫遊の途に就いたのである、胡漢民も亦危險を感じて汪と前後して上海に去つた。即ち汪氏は蔣介石の壓迫を逃れて支那の土地を離れたのであるが、今日はその追つた蔣介石が又々汪兆銘を歡迎するようになつた、このいきさつが支那の內部の事情を物語るものであつて我日本の國民は、此機微の作用を知ることが必要である。

三

汪兆銘君字は精衛、廣東省番禺縣(即ち廣東市城)の人。眉目秀麗今猶一見白面の美少年に見ゆるも本年は僅か四十五歳なるべし。彼れは原來文筆の人で幼にして俊才、年十五にして擧人に及第したのである。光緖二十九年(明治卅六年)赴日留學生として東京に來り中央大學に留學したのである、留學中胡漢民等と一所に支那字新聞民報を東京に發行して支那の革命を皷吹した。當時梁啓超氏も橫濱で新民叢報を發行して居つて盛んに立憲君主說を主張して居つたので、或時民報に汪兆銘氏が革命論を掲げて之れと論戰した事がある、此頃梁啓超氏の文章は所謂妖文といつて人を魅するの文才あるものと稱せられて居つたが、汪兆銘氏の革命論が民報紙上に顯はるゝや、梁啓超氏は革命は支那を列國の分割に委するの結果を導くものであるとの論旨で、盛んに民報の汪兆銘氏と論爭した、甲論乙駁數萬言に亘つた汪梁兩氏美文の華を咲かせたのである。然し此論爭は梁氏の方はたゞ美文であつて實質の採るべきものゝないのに反し汪氏の方は根底を法律、社會學に說き支那の實況救濟を主としたので、遂に汪氏の勝利に歸すると共に、國の內外各方面から賛歎されたものであつた。是れは汪氏が廿歳前後の時のことである。

光緖三十二年には孫文、黃興、胡漢民等の同志と一所に南洋に至り革命の時機を窺つて居た。後又日本に來て明治四十四年東京に於て革命實行の計畫中、同志章炳麟が端芳から贈金を受けて變節の行動があり、そのため他の同志の結合も稍動揺の氣味あるに憤慨して、單身北京に歸り、當時淸朝の攝政王たる載澧を暗殺せんと企てた。此計畫は他の同志の廣東人一名と密かに行つたが爆彈の裝置が不完全であつた爲め遂に失敗に終つて、北京前門外の寫眞館に潛伏して居る所を逮捕された、時の民政長官であつた肅親王の訊問を受けた

が、廣東語を使ふので言葉が通じない、そこで彼れは直ちに筆を採つて一二時間の間に堂々數萬言、立派な革命主張論を呈出した。肅親王も其文才を愛して之れを殺すに忍びず、單に投獄して他日の使用に供そうとした。丁度此年に武昌の革命が起つたので、河南總督揭度の進言に依り赦免を受けて南下し、講和參贊に任ぜられたが、北方代表唐紹儀氏を動かして遂に革命派と提携させるに至つたのである。

此汪氏の北京暗殺事件に關聯して汪氏には面白いエピソートがある。

汪氏の妻君は陳璧君女士といつて南洋華僑富豪の娘であるが、汪氏が革命前南洋に亡命して居た時隨分汪氏の美貌に人知れぬ胸の思を焦したものである、南洋に居つた汪氏は年少氣鋭志す時はたゞ革命の一途で、陳氏からの切なる求婚の申出でも之れに耳を貸さなかつたのである。汪氏が北京の暗殺事件に座して投獄せらるるや、陳女士は百方金力を利用して、汪氏の救出免赦に勉めて之れに成功し、目出度く汪氏の令夫人たることを得たのである、汪兆銘氏の秀麗王の如きに對し、陳令夫人は居正君などの心易い友達は「老母猪」と敬稱として居るのである。

日十四年に孫文氏等と一所に北京に行つた時當時汪氏の失敗に歸した爆彈のなきがらを一日本人が所有して居つた。一日吾等が會合した時、汪兆銘氏に向ひ「あなたの北京に於ける最大の記念物を御贈りしましよう」といつて汪氏に深いショックを與へた事があつたが、其後孫文氏の逝去等の混雜でその儘になつた事と思ふ。

四

辛亥革命成功後は國事共濟會を發起し進德會を組織して專ぱら野に在つて活動して居つた。元來汪兆銘氏は蔡元培氏（北京大學校長や教育總長をした人）等と同じく六不會の會員であるから今迄で官職に就いた事がないのである。此六不會と云ふのは不嫖（或不納妾）不喫肉、不喝酒、不打牌、不當官、不擔議員といつて、女を買はず、肉を喰はず、酒を飲まず、賭博をせず、役人とならず、議員にならず、と云ふ六件實行を約束した會である。汪氏が官職に就かなかつた事も又彼れが平素の行狀も今猶六不會々員たることに依て窺はれるのである。

民國九年に陳炯明が廣東省長となるや、汪兆銘氏を其最高顧問に聘した。十年十一月廣東政府の設置に當つて幹部として國民黨勢力の擴張に努め、十三年二月孫文三度び廣東に入り大元帥となるや汪を總參議に任ず、十四年孫文上海より日本を經て北京に至るや汪兆銘氏は先んじて北上し孫氏の爲めに諸準備を整へたり、孫氏病むや日夜寢食を忘れて其看護と黨務に盡瘁した。孫文氏死するや廣東に歸り胡漢民、廖仲愷と共に廣東政府の首領となつて働いて居つたのである。

唯物史觀經濟史出立點の再吟味

＝『古代共產制度』に關する若干の考證と祖述＝

福田德三

(一)

一九〇七年版のマルクスの『經濟學批評』へ其編輯者カウツキーがマルクスの遺稿中から收錄(其前一九〇三年『ノイエ・ツァイト』誌へも掲載)した有名な『緒論』Einleitung は、佐野學氏の云はれる通り、『文章は流暢なものではないが、生產論、經濟學の性質論、研究方法論、其他の方面に涉り、ブルヂオア經濟學を痛擊し、社會主義經濟學の立場を明かにした頗る貴重の議論であつて、マルクスの著作中に於て唯物史觀を明瞭に書き現はした唯一のものと言はれる此書の序說と共に甚だ珍重すべきものである』(マルクス全集第十册『經濟學批判』大正十二年刊譯者序二頁) 其の說き起しに次の一節がある。(圈點を附した部分は私の改譯、然らざる部分は佐野氏譯文其まゝ)

『吾人の此處に取扱ふ對象は先づ物質的生產である。社會內に於て生產する諸個人――從つて諸個人の社會的に決定せられた生產が當然に本論の出發點である。スミス及びリカルドが其議論の出發點とした所の個々の而して孤獨の獵人及び漁人は、十八世紀の殺風景な幻想に屬して居る。……

………………

スミスとリカルドとが、全く其肩上に乘つて居るところの十八世紀の豫言者等に取つては、十八世紀式個人てふもの——其れは、一方に於て、封建的諸形態の解消の產物であり、他方に於いては、十六世紀以來新たに發展した生產諸力の產物であるところの（佐野氏は此の挿入句を「豫言者等」にかゝるものとして譯出せられたが其れでは意味が通ぜぬ、此挿入句は『個人』にかけてあるものと思ふ）——が、理想として翺つて居た。而して、此個人なるものゝ存在は、過去に屬するものであると考へられた、即ち、其れは一の歴史的の結果としてでなく、歴史の出立點として認められて居た。個人は、合自然的のものと見られ、而して其れは人間の本性に關する彼等（豫言者等）の見解に（準應したから）（個人は）一の歴史的に成立したものでなく、反つて、自然によつて置かれたものと認められたのである。

…………

我々がより深く歴史を溯るほど、個人、從つて生產に從事する個人は、非獨立的なる、一のより大なる全體に屬するものなるを見るのである。』

十八世紀の豫言者並びに其肩上に乘つて居たところのスミス及びリカルドは、其の歴史の出立點に個人を置く、而して、彼等は一般に個人主義者と呼ばれて居る。共產主義者たるマルクスは、右の一句に明なるが如く、其れとは正反對に、個人を、ブルヂオア社會にまで發展して來た歴史の最終の階段に置き、此歴史の出立點は、個人たることとは正反對なる『一のより大なる全體』なりとした。『我々がより深く歴史を溯るほど、個人、從つて、生產に從事する個人は、非獨立的なる、一のより大なる全體に屬するものなるを見る』として居るのである。これが、マルクスの經濟史の出立點で、從つてまた其唯物史觀成立の出立點である。此結論は、カウツキーによれば、一八五七年に書き下されたものと云ふ。然しマルクスの唯物史觀は其れよりも前に出來上つて居たものなることは、誰も皆知つて居るところである。エンゲルスは『共產宣言』の一八八三年版の序文中に『宣言』の根本思想を述べ、其れに脚注して云ふ『此の思想——其は私の見る所では、ダルウヰンの學說が自然科學に對して打ち建てたと同じ進步を歴史學に對して打建つる使命を有するところの——には、一八四五年に先づ數年前に於て、我々兩人は、段々に近付いて來たのである。私自身が如何なる程度まで此方向に向つて進んで行つたかは、拙著『英國勞働階級の地位』が、之れを示めして居る。乍去一八四五年の春、私がブリユクセルに於いて、マルクスに邂逅したとき、彼は、此思想を全く作り上げて居た、而して、私が玆に總括したと殆んど同じ明瞭な言語に於いて、彼は其れを私に披瀝したのである。』と。

共產宣言公認第七版伯林一九〇六年フォーアヴェルッ社出版本第十八頁脚注

從つて、エンゲルスは、『共產宣言』の此根本思想は、一に全く einzig und allein マルクスにのみ屬すると斷言して居る。此れは、必ずしも、エンゲルスの美德たる謙遜からのみ出た言ではあるまい。マルクスもエンゲルスも共に一八四〇年代に於いて、粗ほ同樣の考を抱いて硏究しつゝあつたのであらうけれども、此思想を決定的に取りまとめたのは、マルクスの方が先であつたか、又は少くとも、より徹底的であつたものと見るべきであらう。

トコロが、玆に一つの稍ゝ重要な疑問が起る。其れは外の事でもない、エンゲルスは右の根本思想の要錄中に挿注して『土地に對する原始の共同所有の解消以來』と云ふ一句を入れて居ることそれである。諒解を助ける爲め、其前後の文句を左に譯出して見る。

『經濟的生產と、其れから必然的に生ずる各史的時期の社會的構成とが、其史的時期の政治的及び理知的歷史に對する基礎を成すこと、從つて──土地に對する原始の共同所有の解消以來──全歷史は階級鬪爭の一歷史であつたこと……』

右と同じ事は、また『共產宣言』の本文中にも繰返されて居る。即ち『宣言』第一節の起句『總ての從來の社會の歷史は、階級鬪爭の歷史である』と云ふ一句に、エンゲルスは、直ちに脚注を入れて居る。此脚注は一八七二年版にはなく、一八八三年版になつて入れたものであらう。私は今『共產宣言』の諸版を比較することが出來ない。私の手許にある限りで調べた處では、一八七二年版其他の佛譯には、此脚注は全く無く、Fotums 版の獨語本にもアクチオン版同本にもない、反對に、公認版は勿論、フランケス版同本、ランド學校版英譯本等には、何れも、此脚注をのせてある。恐らく、一八八三年獨原本版に於いて、加筆せられたものとの私の推測は、間違ないことと思ふ。先覺學者の敎を待つ所である。因に一昨年モスクヴアのマルクス、エンゲルス研究所で、ツオーベル敎授が、私に與へられた各國語の『共產宣言』(コミー語、スーワシア語、ノルドヴキア語、韃靼語、オセチニア語、ハシクミフスキ語、ダゲスタン語、パルカール語、キングリース語、チオルチア語、アルメニア語、アセルベトガン語、高架索語、シリア語、アラビア語、波斯語、土耳古語、キルギスタン語、トルキスタン語、印度語、ホンゴリー語、支那語、朝鮮語、日本語)には、此部分は何れも載せてない。

其の脚注とは、左の如きものである。

『玆に歷史と云ふは、正確に云へば、文書によつて傳へられた限りの歷史の意である。一八四七年(共產宣言起草の時)には、社會の前史、總ての記錄せられた歷史に先づ社會の組織のことは、未だ殆んど知られて居なかつたと言つてもいゝ位であつた。其れ以來、ハックストハウゼンは、露國に於ける土地共有制度を發見し、マウラーは、同じ制度を以て、總てのドイツ種族が歷史的に出立した社會的基礎であることを立證した。而して漸次に土地共有制を有する村落團體が、印度から愛蘭に至るまで、社會の原始形態であつたことを見出すに至つた。而してついに、此の原始的の共產社會の內部組織は、ゲンスの眞の性質と其の種族內に於ける地位とに關するモルガンの卓越なる發見によつて明かにせられた。特立的にして而して終には互に對抗せる諸階級に社會が分割されたことは、此の原始共產

體の解消すると共に始まる。

右二個の挿注は、唯物史觀による階級鬪爭社會の始期に關する重要なる一の限定を意味するものである。此の挿注がなければ、階級鬪爭に出立する唯物史觀の適用範圍は、其始期に關しては、無限遠——追記。河上博士によれば、少くとも『數千年に亘る』。後段參考——のものであらねばならぬ。否其れは、人類あると共に始まると解釋しても差支ないこととならう。エンゲルスの挿注による限定あるによりて、其始期は——エンゲルスによれば、少くともドイツ民族に就ては、カイザー以前に溯り得ざる——明確に示めさるゝに至つたのである。

此一事は、從來餘り論ぜらるゝことはなかつた樣である。殊に我邦に於いては、全く一顧だもせられなかつた樣に思ふ。少くとも、私が寓目した限りに於いては。

斯く始期が明かに限定せられると云ふことは、唯物史觀による社會革命の將來に就て、甚だ重要なる關係を有つことである。始なくして終あると云ふ解釋よりも、始ありて終ありと云ふ解釋の方が、遙かに自然的である。エンゲルスの始期限定あるによつて、所謂『唯物史觀の公式』なるものゝ最終段左の一節が、始終一貫、首尾徹底したものとなることが出來るのだと思ふ。

『吾々は極く大づかみに、亞細亞的の、古代（ギリシヤ、ローマ）的の、封建的の、及び近代のブルヂオア的の、生產方法を以て、經濟社會構成の進步的階段と爲すことが出來る。さうして、ブルヂオア的の生產關係は、社會的生產過程の敵對形態を採れるものゝ最後である。玆に敵對的と謂ふのは、個人的敵對の意味でなくて、諸個人の社會的生活條件から生ずる敵對の意味であるが、併しブルヂオア社會の胎内に於て自ら發展する生產諸力は、同時に此の敵對の解決に必要な物質的條件を產み出す。されば、人類社會の前史——河上博士註、『とはこれより以後に人類の眞の歷史は始まる譯にて、それ以前は、其の前置に過ぎずとの意』——は、此の社會構成を以て終りとする譯である』。河上博士著『唯物史觀研究』第六版九頁に據る。圈點を附した部分は、不遜ながら、私の改めたもの。

階級鬪爭の歷史は、始あつて、而して終りのあるものである。其終りは、ブルヂオア社會の終りと同時的である。其始は、原始共產社會の解體と同時的である。ブルヂオア社會に續く社會、即ち人間社會の本當の歷史時代は、原始共產社會と同じく、階級の分立なく、階級鬪爭なき社會、時代である。此れが唯物史觀に基く階級鬪爭時代の始終であるのである。而して、唯物史觀に基く社會革命觀は、此の始終の劃期を出立點として、其上に打立てられたものとなるのである。

ブルヂオア社會終ると共に、階級の對抗消滅すると云ふ見解には唯物史觀の全體が、其の支柱となつて居ることは勿論であるが、其依つて基く所は、本文の最初にかゝげた『經濟學批評』緖論の一節に表はされたマルクスの見解にあることは明かである。而して、其れはエンゲ

ルスの挿注によつて、歴史的事實的に更らに具體的に詳述せられたのである。乍併、エンゲルスの言ふ樣に、其の歴史的、事實的解釋なるものは一八四五年代には、未だ殆んど知られて居なかつた一の新らしい——當時に於いては——解釋であるのである。ソコデ一の疑問が湧いて來る。エンゲルスが右の二個の挿注中に示した原始共產社會に關する此の新しい解釋は、果して、マルクスも亦之れを認むるものであるか否か、マルクスに生き殘つたエンゲルスは、モルガン其他の新しい歴史研究に接し之を取り入れたけれども、先つて死んだマルクスは果して其等の研究を知つて居たであらうか、知つて而して、之を其唯物史觀に認めたのであらうか否か。エンゲルスは、唯大體にマルクスの意を布衍して、右樣の挿注を加へたに止るものであらうか否か。

(二)

マルクスは、單に『一のより大きな全體』と云ふのみで、其れが『原始共產社會』であるとも何とも云つて居らぬのである。從つて、エンゲルスが『共產宣言』の根本思想なりとして揭げた一節に『土地に對する原始の共同所有の解消以來』と限定したのは、果して、マルクスの考を正しく傳へて誤なきものであるか否か。階級鬪爭としての人間社會の歴史は、此の原始共產社會の解體から出立すると云ふ見解は、エンゲルスのみでなく、マルクスも均しく之を認むるであらうか否か。

此問題の解答は、少くとも唯物史觀の出立點を決定するに重要の關係あるものであると思ふ。其の出立點の決定は、また、或度まで、所謂『唯物史觀の公式』に關する解釋に影響するものであらうと思ふ。殊に此『公式』の冒頭の一句『人間は、其生活の社會的生產に於いて、一定の、必然的な、彼等の意思によらざる諸關係、(即ち、彼等の物質的生產諸力の一の定まつた發展に相應する生產諸關係を、認容するものである。此等の、生產諸關係の全體が、社會の經濟的組み立て——其上に一の法律的及び政治的上層構造が立つ所の現實的基礎を形づくる。而して、此の基礎に、一定の社會的意識諸形態が、相應ずるものである』と云ふ其の人間が認容すると云ふ『生產諸關係の全體』『社會の經濟的組み立て』『現實的基礎』と云ふ內に、此の原始共產社會が含まれて居るか否かの決定は、輕視し得ない問題であらうと思ふ。

他方に於いて、マルクスは此『公式』の最終段に、經濟的社會組み立ての漸次に進步して來た發展階段を列擧して『亞細亞的』『古代的』『封建的』『ブルヂオア的』の四と爲して居て、別に『共產的』を擧げて居らぬ。其眞意は『共產的』生產關係は、敵對的形態でないから、右の發展諸階段中に含まれて居らぬと云ふにあるだらうか。其れとも『共產的』生產關係を全く度外に置いたものであらうか否か。言ひ換へて見れば唯物史觀の『公式』の最終段は、原始共產社會には、全く適用せぬとの意味であらうか否か。

私は、此の疑問も亦た輕視す可からざるものと考へる。マルクスが時に意を用ゐて、有意的に『共產社會』を列擧の外に置いたものであ

り、從つて、唯物史觀の『公式』の最終段は、『原始共產社會』に適用せざるものと考へたのでありとするならば、タトヘ具體的の歷史解釋は、與へられてなくとも、彼の考は、エンゲルスの歷史解釋と一致するものと云ふ可きであらう。然らざれば、此兩人の間には、可なり大なる見解の相違が存するものと見なければならないから。而して其はあり得ないことであらうから。

併し、其れをあり得るとして考へて見ると、左の樣になりはしまいかしら。

マルクス說。敵對的關係は、人間社會あると共に在り、即ち『一のい、より大なる全體』たる『マルク共產社會』（此事は後に言及す）にも在り而して、此社會が『封建社會』へ發展し行つたのは、階級鬪爭の敵對關係を通してゞある。

エンゲルス說。敵對關係は、『原始共產社會』には存せぬ。其れが『マルク共產社會』なりとする改說以前のエンゲルス（コヴァレフスキーの影響を受けざる以前の）によれば、『マルク共產社會』には、敵對關係、階級鬪爭は存せぬ。從つて、此社會から次の社會へ移り行つた過程は、『唯物史觀公式』以外に屬する。（其は、黑正氏によれば『墮落』と云ふ過程とせられたものと云へるが如しである。後段參考。）

反對に、改說後のエンゲルスに從へば、『原始共產社會』は『マルク共產社會』に、又た一つ先つ『世帶共同體』（西雅雄氏の譯語）社會である。其處には、敵對關係は存せぬ。階級鬪爭は存せぬ。

然し、改說前と後と、共に、エンゲルスは、カイザーは勿論、タキトス時代の獨逸民族の社會は、敵對關係存せず、階級鬪爭存せざりし社會と認むるものと云はねばならぬ。何となれば、改說前の彼によれば、其時代は所謂『原始共產社會』としての『マルク共產體社會』であり、改說後の彼によれば、同じく『原始共產社會』としての『世帶共同體社會』であつたのであるから。即ち、何の道、カイザーからタキトスまでの獨逸社會は、

エンゲルスに據れば、敵對關係なき社會で、『唯物史觀公式』最終段適用以外に立つものであり。

マルクスに據れば、如何であつたか、一向分らないと云ふ可きであらうが、少くとも、敵對關係は存せず、『唯物史觀公式』最終段の適用以外に立つとしたものと。直ちに斷言すること能はざる丈けは明かである。

私の幾多の疑問中、此れが、其の最根本的なものなのであるが、更らに、之れに關聯して、

然らば、改說後のエンゲルスに據るときは、『マルク共產社會』は、一の共產社會であり乍ら、猶、敵對關係の存し、いつしか階級鬪爭の起つた社會と見る可きであるか否か。

の疑問も抱いて來るのである。

私は今、直ちに、此等の疑問に向つて突貫することを敢てし得ない幾多の吟味、再吟味を經た上でなければ、突貫は無謀であり、無益で

あると信ずるものである。

『原始共產社會』は、マルクスの所謂『經濟的社會構成の漸次に進步して來た發展階段』以外にあるものであり、從つて、此の社會は、唯物史觀『公式』最終段の適用範圍に屬せざるものとすれば、ブルヂオア社會解體後の、即ち河上博士の言を藉れば『人類の眞の歷史の始まる』時代の其の社會に關して、我々は、其れ丈けで、可なり大なる暗示を與へられて居るものであると云ふ可きであらう。黑正巖氏は、其の力作たる『農業共產制史論』大正十五年第一刷九頁に於いて、極めて卒直に云つて曰く、『原始共產制が研究せられ論爭を生むに至つた動機は二つある、その一は純學術的研究の動機である……(中略)……第二の動機は、社會改造の理想を懷くものが、その理想の基礎づけ、又は理想實現の方便として研究した事である。人類は、過去に理想社會を享有せしに拘らず、私有財產制の成立は、人類を墮落に導いたものであるから、古代の人が享有せしが如き、共產的な自由平等の社會を實現し、現代の頽廢せる不合理なる社會を改造しようとの理想を基礎づける爲めに、農業共產制の遍在論を主張し、その如何なるものなるかを研究するに至つた。故に最近に於ける歐米の社會主義者等は、盛にこの種の問題を研究して居る』と。

問題を極めて素朴的に取扱つて、黑氏の說明せられた通りとし、而して、網羅的に、マルクスを氏の所謂『歐米の社會主義者等』の中に編入するとして見る。其處に更らに、一の新なる疑問が湧き出でゝ來る。

マルクスは、『原始共產社會』を以て『吾々は極めて大づかみに』云々以下の『公式』最終段の適用範圍外に屬するものと認めたものと推するとして、玆に起る疑問は、然らば『公式』の他の部分に就ては如何、此れも同じく『原始共產社會』に適用せざるものと見る可きか否か、であらねばならぬ。若し、他の部分が『原始共產社會』に適用しないものとすると、然らば、『原始共產社會』から、次の『社會』へ移つた其の過程は、唯物史觀の『公式』によるものでなく、他の過程によつたものであるとせられるのでなければなるまい。即ち、黑正氏の所謂『人類が過去に有せし理想社會』は、『私有財產制の成立』によつて『墮落』したと云ふ其過程が、其れであると云ふことにならう。唯物史觀の『公式』によらざる、階級の對立と其の鬪爭とによらざる此の『墮落』過程の存在を認むると云ふことは、唯物史觀其ものに取つては、考へ樣によつては、一の自殺行爲であらねばならぬ。唯物史觀は、『公式』の最終段に示してある通り、Progressive Epochen『進步的時期』をのみ認めるもので、而して『ブルヂオア社會は、其の最も發達した』緒論の四十一頁ものとせられて居るのである。然らば、此等の諸々の進步的階段の始まる以前に、一の『墮落』Suendenfall? があつたものとせられるのであらうか。

反對に、『唯物史觀公式』の最終を除く以外の他部分は、『原始共產社會』に適用するものとする。然るときは、『原始共產社會』は、諸々の進步的階段の中に屬せず、敵對的社會形態には屬せざるも『物質的

生産諸力の一の定まつた發展階段』であり、其れに『相應する生産諸關係』を、人間が認容した社會であると云ふことになり、從つて、河上博士の所謂『公式』の第二、第三、第四節も此れに適用せられなければならぬことにならう。

第一の假定を採るときは、將來に於て、原始共產社會同樣な理想社會が實現されても、其れはいつしか第二の『墮落』をせぬとの豫言は出來ないわけである。其れは、唯物史觀の當否を些も考へることなくして、言ひ得ることである。何となれば、其の『墮落』は、『唯物史觀公式』の適用範圍以外に屬するから。即ち、人間は、原始時代の終末に方つて——基督敎は原始時代の最初に於てと敎へる——一の大なる『墮落』を爲し終つて、扨、其以後は絶へず、進歩的發展を成し來つたものと云ふことになる。歷史學に於ける此の進化論は、自然科學に於けるダルウヰンの其れと同じきこと、前に引いたエンゲルスの言の如くなりとは、如何考へても受取れぬこととなることは言ふまでもあるまい。

第二の假定を取るときは、更らに又た餘程六ヶ敷こととなる。將來に實現せらる可き『共產社會』は、社會進化の必然的な過程によつて實現せられる。然し一度來れが實現せられると、其れから先の進歩的發展階段は、『唯物史觀の公式』によつては示されて居ない。公式の第二、第三、第四節——河上博士の分類による——は、第五節があつて初めて諒解せられ得るもので、第五節を適用範圍以外に置いては、何が何だか、少しも分らぬものとなる外はない。私は河上博士が、其の上篇『研究』に與へられた諸々の說明を、再三精讀して見たが、矢張り、分らなかつた。

ソコデ、私は已むを得ず、最終段——河上博士の第五節——も、『原始共產社會』にも適用するものと假定して考へて見た。さうすると『原始共產社會』がより進歩した發展階段——封建社會——に移り行つた過程は、矢張り、敵對的形態によるものと見なければならなくなる。さうすると、理想的な自由平等な『原始共產社會』は、矢張りいつしか、敵對的形態に移り行つて、而して封建的社會を發展したことになる。其れは『墮落』でなく『進歩的發展』である。言ひ換れば『理想的』な共產社會が實現せられても、人類が進化發展するものである限り、其れは、敵對的形態を取つて、次の社會形態階段に進み行くと考へねばならぬことになる。玆に至つて、私の『唯物史觀公式』解釋は行詰らざるを得ない。何となればマルクスは明かに、ブルヂオア社會の終末と共に、敵對的形態は終局すると敎へるから。而して、敵對的形態以外の形態は、黑正氏の『墮落』過程以外、誰も私に敎へて與れる人がないから。私は、私の乏しい考の力を出來る丈け働かせて見た結果、結局何が何だか分らなくなつたと言ふの外はないことになつた。

私の考へ得る限り、マルクスは、ブルヂオア社會の後に來る社會には、右の敵對的形態起らざるものとするものである。從つて所謂『公式』の第五節に、彼が列擧した諸々の進歩的發展階段中に、『原始共

產社會』は當然算入せられざるものであると共に、プルヂオア社會終つて後の社會については、右の『公式』は何事も言つて居らぬと解釋するのが、マルクスの眞意に合ふものゝ如くである。左樣解釋すれば、エンゲルスが、『人間の歴史は階級鬪爭の歴史である』に挿注して、『原始共產社會』は、其歴史に先つもの、言ひ換れば、其中に含まれざるものとしたことは、マルクスの見解に相合するものと云へよう。即ちマルクスもエンゲンスも階級鬪爭を人間の歴史——追記。河上博士によれば數千年に亘る——の出立點には置かず、其途中から始まるものと考へたものと云ふことになる。左樣すれば、人間社會の發展過程に於いて、階級鬪爭は早晩なくなるものだと云ふことは、首尾一貫した考へ方となると云ひ得る。而して階級鬪爭過程以前及び以後にある人間社會に就ては、『唯物史觀公式』は、何事も言つて居ないと解釋す可きことゝなるであらう。果して然りとすれば、唯物史觀の史觀其ものの妥當性は、出立點と終末點とを有する限られた——甚だ限られた——ものと云はねばならぬことにならう。

併し右の樣に考へるのは、假定に假定を重ねた上のことである。マルクスの唯物史觀——其『公式』に顯はれた——なるものは、果して、右の樣に、限定せられた出立點を有つものであるか否かの根本的疑問は、假定の假定を以つては、解答せられないことは言ふまでもないことである。であるから、若しも、エンゲルスの挿注がないならば、素**朴的に解釋して、從來の人間歴史は、其出立點に於て、既に階級鬪爭**を以て始まるものとするのが、少くとも、マルクスの意味した所であると云ふ人があつても、其説を斥けることは出來ないであらう。

私は、此小論文を認めつゝ此處まで來つたところ（四月二十日午後時）、恰も河上博士の『社會問題研究』の四月號（第七十九册）の卷頭に掲した。其の第四頁に此いう句がある。私はすでに『理論の實踐的根源』の項下において、次の如く述べた。『總じて吾々が現在を——從つて過去を——問題とするのは、未來を問題とするからである。』又た『マルキシズムは世界を變革せんとする强烈なる意志を以て、世界にぶつかつた人間の頭腦に反映され撮影され把握されたる一の世界觀であると』『更らに又た』『吾々にとつて共產主義は、現實がそれに則るべき一の理想ではない』。之れは、歴史が——過去數千年に亘る人類の歴史が——現代に向つて提出した問題、歴史がその解決を迫ると共に、同時に、その解決の諸條件を與へてゐるところの現代の人類にとつての最大最難の問題である。すでに、理論の前に規定されて横たはるのである。』（第五頁）『マルキシズムが、何等の理論的構成を經ざる、何等思惟の加工を受けざる、最も根本的な事實を出發點とすることを意味する』（二十五頁）而して、博士は『ドイチェ、イデオロギー』から次の一句を引用せられる。『吾々はたつた一つの科學を、歴史の科學をしか知らない』と（三十一頁）過去數千年に亘る歴史が、其の解決を迫る問題、理論の前に（『ヂアレクチック』や『イデオロギー』やの前の意と解す）規定されて横はるところの問題、何等の理論的構成を經ざる、何等思惟の加工を受け

ざる、最も根本的な事實』を、『吾々が、たつた一つしか知らない』と言はれた歷史の科學によつて、其の出立點に溯つて、再吟味することは、右に陳述した疑問を解答するに全然無關係な仕事ではあるまい。其れは、『未來を問題とする』立場からも、『世界を變革せんとする强烈な意志を以つて、世界にぶつかる』立場からも、必ずしも無用ではあるまいかと思ふけれども、私の吟味は、黑正氏の所謂『第一の動機』からのみするものであることを、豫め篤と諒し置かれんことを玆に願つて置く。

（三）

今、此の吟味を始める前に、少し縁の遠い一節を、玆に押入して置くことを許されたい。それは、私が、前段に於いて、『原始共產社會』に適用せらるゝや否やを、第一の疑問として、あげて置いた所謂『唯物史觀公式』の第一節に關する事柄である。私は云つた『殊に此『公式』の冒頭の一句『人間は、其生活の社會的生產に於いて、一定の、必然的な、彼等の意志によらざる諸關係、（即ち）彼等の物質的生產諸力の一の定まつた發展に相應する生產諸關係を認容するものである。此等の生產諸關係の全體が、社會の經濟的組み立て——其上に、一の法律的及び政治的上層構造が立つ所の現實的基礎をつくる（中略）と云ふ其の人間が認容すると云ふ『生產諸關係の全體』『社會の經濟的組み立て』『現實的基礎』と云ふ内に、此の『原始共產社會』が含まれて居る否かの決定は、輕視し得ない問題であらうと思ふ』と。之を言換へて見れば、『原始共產社會』なるものは、『唯物史觀公式』による人間の認容の對象たるものであるか否かの疑問である。トコロが此疑問は、私は人間が認容するものであるかの疑問としてあげたのであるけれども、我邦に於ける唯物史觀の先覺諸氏によれば、私の言表はし方は、必ずしも當を得て居らぬ樣である。即ち河上博士によれば、此疑問は、人間が『入り込む』か否か、若しくは『おつかぶさるか』否か、の疑問として言ひ改められなければならぬ樣であり、更らに又た堺、福本兩氏によれば、『結ぶ』又は『取り結ぶ』か否か、の疑問として提出せなければならなくなる樣である。斯く言ひ改めるのと、私の考ふる樣に『認容する』か否かの疑問として提出するのとでは、其間に多少差別があることと思ふ。事は、此れに關してである。

初めに御斷りして置く。此一節は、改造社主催の講演會では、述べたところであるけれども、考へて見ると、本題に大した關係のないことでもあるし、餘り學問的興味を持つ事柄でもないから、此小論文に於いては省くつもりであつた。然るに一兩日前未見の知己石井健介氏から、ワザ〱一狀を寄せられて、其事に就ては、河上博士の『社會問題研究』七十一號に、博士自ら改正の提案をせられて居る、汝の講演は其事に言及してないから、又た誤解を生ずる虞なきに限らぬと、懇に注意せられた。私が今玆に此一節を挿入するのは、第一に石井氏の好意に酬ひ、第二に、若し傳聞によつて誤解を惹き起しては、相濟

まねと思つたからである。

私は、右の講演の腹案を作るに方つて、河上博士から兼て惠送されてある博士の『唯物史觀研究』（大正十年刊の第六版）を逐一精讀した。而して、多大の教を其れから享けたことを心から感謝した。唯一つ所謂『唯物史觀公式』の譯文中に、僅かに、博士の讀み方が、私の理解する所と異る箇所を二つ見出した。其れは第一節の左の上半中にあつた。

『人類は、彼等の生活の社會的生産に於て、一定の必然的の、彼等の意思より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に、入り込むものである。此等……（中略）又一定の社會的意識形態が、之に適應する所の現實の土臺である。』（右書第六頁）

右の中『現實の』と『入り込む』とは、必しも當つて居らぬではあるまいかと思ふ。マルクスは reale Basis と言つて居るので、wahre Basis とは、云つて居ない。後者なら『眞實の土臺』が正しい、前者は『現實の土臺』でなければならない。『眞』と『現』との違ひ丈けだが、其意味は決して、混同す可きものではないと思ふ。次に、『入り込む』は、少し素朴過る讀み方である。然し此讀み方は、餘程執念に、諸譯者を煩はしたものと見へる。現に、佐野學氏の『經濟學批判』（大正十二年刊第十冊第四頁）にも『入り込む』としてある。

私は博士の右『研究』を讀み卒つてから、『社會科學』（大正十五年十月刊）の『唯物史觀研究』に掲げてある福本和夫氏の論本『我々はいま如何にして戰鬪的唯物論を戰ひとり得るか』を一讀して、其筆鋒の鋭さと、一種獨得の文體とに痛く打たれた。其文中福本氏は、（第二十二頁）河上博士の訂正說を引用し且つ之を徐さに評して居られる。

私は改造社主催の講演會のとき、右の二本を携へ行き、『入り込む』の讀み違ひであらうこと、更らに博士の改譯『おつかぶさる』は、恐らく何かの辭書に auf sich nehmen, übernehmen とあるのを、無理に『受動的』に譯出しようとして心付かれた畸形語であらうこと、更らに、福本氏の改譯『取り結ぶ』は成程尤の様に聞へ、辭書には忠實であるに相違ないが、マルクスが、彼の場合に用ゐた意味を譯出する邦語としては、妥當なものと考へ得ざること、而して、私自らとしては、其れは、『認容する』とするのが、日本語を以て、マルクスの眞意を言ひ表はすには、適當して居るではあるまいかと考へることなどを申述べたのである。然るに石井氏の注意によつて『社會問題研究』第七十一號を初めて見て、（甚だ濟まないことであつた、河上博士からは、毎號惠送を受けて居り乍ら、右號は、私の洋行不在中に到着したもので、私に歸朝後、留守中の雜誌に目を通す餘暇を見出さず、其儘藏つてあつた。石井氏の注意により早速取出して見たのである）、福本氏引用の出典（同氏は其れを示して居らぬから）を知ることを得た。果して博士は、辭書から etwas auf sich nehmen, uebernehmen（四格を受けるは少し可笑しい、四格によつて受けられる とか四格を支配するとかと云ふ可

きであらう）をあげて居られる。私が講演の際知らなかつたことも同時に之を見出した。即ち『結ぶ』は福本氏の改譯ではなく、堺利彦氏のものであること、而して其に對して、河上博士は『これも全く遺憾な事とは言へぬやうに思ふ』と云つて居られること之れである。博士が『結ぶ』を採られざる理由は、其れでは、受動的の意味がよく顯はれないと云ふ點にあるらしい。博士も福本氏も、此の『受動的』云々には、大分頭を惱ませたらしく見へる。而して、兩氏とも、其改譯を以ては、未だ少し不安心を感じて居られるのではあるまいか。即ち福本氏は、eingehen＝eintreten と簡單に認めることによつて、形ちは、發動的だが、意味は受動的であつて、『たゞ字義として『取り結ぶ』と發動的に譯すべきのみ』と、事もなげに處分して仕舞はれた。河上博士の綿密性は其れを許さない。從つて『おつかぶさる』と云ふ福本氏の所謂『恐らく我々の辭書には容易に求め得ざる珍譯』を採用せられ、而して其れに付いて『決定論たる唯物史觀の本來の精神』までが論ぜられるに至つたのであらう。eingehen の一字が、斯くも懇に取扱はれたことは、恐らく、ドイツに於ても滅多になかつたことではあるまいか。ソコデ私までが雜魚の魚雜り的に、モ少し懇に此一字を取扱つて見たくなつたのである。

eingehen と云ふ字は、主として『イントランシチーヴ』動詞として用られる。『トランシチーヴ』動詞として用られるは、寧ろ少數の場合に屬する。グリムの辭書(1)の其項に、vieldeutig, meist intransitiv（多くの意義あり、主として『イントランシチーヴ』として用ゆ）としてある。グリムは第八の用例として、始めて『トランシチーヴ』としての其字を擧いて居る。其れによれば、更らに又た二つの場合に分れる。第一は拉丁語の intrare に該當する用法、第二は、同じく inire に該當する用法是れである。更らに、此の第二の用法に、二つの小別がある。（A）は、四格（アクサチーヴス）によつて受けられる場合（B）は二格（ゲネチヴス）によつて受けられる場合、之れである。

第一の用法は、十五、十六、十七世紀に於いては未だ時々用られることはあつたが、今日は全く廢たれて居る。其れは即ち、河上博士佐野氏の譯語『入り込む』の意味で intrare domum『家へ這入る』と云ふ場合の如く、transitiv, sinnlich である。然し此用法は、十七世紀を限りとして、全く廢たれたのである。（『イントランシチーヴ』としては、無論左樣ではないが、河上博士も其改正文に言はれた如く、マルクスの文には、前置詞がなく、『イントランシチーヴ』として用られたのでないことは、言ふまでもないことである）。一八五七年のマルクスが此一字に限り、十七世紀以前の用法を採つたとは、到底考へられない。ソコデ、マルクスの用法は、第二用法と解せねばならぬ。即ち拉丁語の inire に該當する abstrakte Anwendung でなければならぬ。而して、明かに四格によつて受けられて居るから（A）の用法によるもので、（B）の用法によるものでない。

第二用法の(A)は、グリムの引例では、 einen Bund, Vertrag, eine Wette, Bedingungen, eine Heirat, die Ehe eingehen 等があげられてある。而して、グリムの此用例は、現存の殆んど總てのドイツ辭書、獨英、獨佛、獨伊、獨拉、獨和諸辭書が採引して居るものである。

グリムの辭書は例をあげるのみで、同義異語をあげてないから、其用例に當る若くは類似の用例の獨逸文を外國語で釋いた他の辭書をあげて見る。

Freund, Woerterbuch d. Lat. Sprache. Bd. I. 1844.

ineo—*annehmen* (他の例は省く)

と云ふのがある。

Birmann, Grand Dictionnaire.

eingehen // v. a. *souscrire à, adhérer à, approuver, accepter.*

eine Ehe eingehen—*conclure* un mariage; einen Handel eingehen—*faire* ou *conclure* un marché; einen Kontrakt eingehen—*passer* un contrat; einen Vergleich eingehen—*faire* un compris; eine Wette eingehen faire—un pari.

Fluegel, German English Dictionary.

eingehen II t. *to accede to, to agree to.*

einen Handel eingehen—to *make* (to *strike*, or to *conclude*) a bargain; einen Kontrakt eingehen—*to enter into* a contrast; einen Vergleich eingehen—*to come to terms*; eine Ehe eingehen—*to contract a marriage*; eine Wette eingehen—*to lay* a wager.

Michaelis, Dizionario completo tedesco-italiano.

eingehen v. a. *accettare, approvare, acconsentire, contrarre.*

eine Wette eingehen—*fare* una scommesse; Bedingungen eingehen—*accettare* condizioni; einen Vergleich eingehen—*far* una convenzione; eine Verpflichtung eingehen—*contrarre* un impegno.

Georges, Ausfuehrliches Deutsch Latein. Handwoerterbuch.

eingehen—*accipere* aliquod (*annehmen*); *probare* adiquod (*gutheissen*).

等とある。

堺氏の『結ぶ』、福本氏の『取り結ぶ』は、右等用例の大多數には、全く的確に適用する譯語なること、右によつて明かなると共に、其れのみが唯一の用法でないことも、亦知られ得る。殊に、マルクスの用例に、最も近い、Bedingungen eingehen, Verpflichtung eingehen の場合は、右何れの辭書も、取り結ぶと云ふ字を以て譯出してなく、而して、此字に、佛語の譯字としては、adhérer à, approuver, accepter などがあげてあり、英語に to accede to, to agree to 等の譯字があり、伊語に accettare, approvare, acconsentire 等の譯字があり、拉

丁の譯語として haire の外に accipere, probare 等があり、其ドイツ語の同義異語として、annehmen, gutheissen 等があげられてあることを見るのである。

私は更らに、物好にも、河上博士の辭書は、何であらうかと思つて、ハイネを見たが、其れには、transitiv, unsinnlich- *sich wozu verpflichte* とあるを見たのみである。よつて最も流布の廣いサンダースの辭書を引いて見た、果然左の通りあつた。

Sanders, Handwoerterbuch.

eingehen mit akkusativ. etwas eingehen—*es auf sich nehmen, uebernehmen, sich damit einverstanden erklaeren.*

誠に惜しいことには、河上博士は、初めの二つの解義丈けを取られて第三の解義を捨てられた。而して、其れが此の三の解義中、マルクスの用法に最も近いものであつたのである。私の物好は、更らに、『獨華大字典』にまで及んだ、其れには、一致、容許とあつた。而して更らに auf etwas eingehen の譯語として、聽從、承諾、同意の三語が載せてあつた。此れは、一の間違ひであつて、auf etwas eingehen は bloss der Versuch, nicht der Abschluss.（單に企てのみで決定を意味せぬ）Ich gehe darauf ein—*ich will mich darauf einlassen.*（私は其事に耳を藉すであらう）Ich gehe es ein—*ich habe mich dazu verpflichtet*（私は其事を爲す可き義務を負ふた）の差別があるとグリムには明白に區別してある。だから、『聽從』丈けは當つて居ると云へようが、『承諾』『同意』は auf のない用法の譯としては當つて居るが auf のある譯としては、間違つて居る。乍去、此點を除けば、右譯は大體としては、善く中つて居る。支那亦學者ありと云ふ可きであらうか。

福本氏が、マルクスが eintreten（福本氏の treten ein を斯く改む）と云ふ語を eingehen に代へたと云ふ場合の eintreten も to enter into a contract と云ふ場合の to enter into に當る樣である。『契約に入り込む』とは、少し無理な言ひ廻しではあるまいか。寧ろ agree, accepter, approvare の意味とするか、少くとも『取り結ぶ』と譯されねばならぬのであらう。ダカラ『アインゲーエン』に限り、『字義として取結ぶと譯す可きのみ』と同氏の云はれるのは、ヒイキの引倒しであらう。

『取り結ぶ』『結ぶ』と譯するのは、此字の用法の多數の場合には當る、併しマルクスの用ゐた場合には、必ずしも的中するとは云へまい。殊に左樣譯出すると、河上、福本兩氏が心配せらるゝ『決定論』との調和は、少し『あぶなげ』を帶ぶるものとならざるを得まい。

其の反對に accepter, approuver, adhérer à, to agree to, to accede to, annehmen, gutheissen, accipere, probare, accettare, approvare acconsentire（一致、容許、聽從、承諾、同意）等に當る日本語として、『認容する』と譯すれば、發動詞を無理に受動的に解釋したりなどの手數を煩はずして、『決定論』なるものと調和することも出來よう。發動的なるは、認容の行爲であつて、生產諸關係に關することではな

い、生産諸關係は、必然的に、『決定論的に』與へられるものである。人間は、之れに對して認容と云ふ行爲を發動的に爲すものなのである。此れが、マルクスの眞意であらう。人間は、生産諸關係を『取り結ぶ』など云ふ潜越なことは出來るものでない。其れと共に生産諸關係が人間に『おつかぶさる』ものでもない。生産諸關係其ものは、必然的に成立する。人間は、唯だ此れを認容するのみである。認容するとは『這り込む』こととは違ふ。然し『おつかぶさる』『取り結ぶ』よりも、まだ『這入り込む』の方が、『認容する』に多少は近いのではあるまいか。厭な女房の處へ必ずしも『這入り込む』わけではなけれども、既に之れを『認容』すれば、結局同じ事にはなるであらう如くに。果して然りとすれば、河上博士は急いで改譯を企てられずとも、結局大して差支ないことになるのではあるまいか？

序に下らぬ餘談を添へる。發動動詞を何とかして受動的の意味に働かせたいとする河上、福本兩君の努力は、希臘拉丁兩語には、其反對の努力として存在して居る。即ち希臘語の中聲 Medium 拉丁語のデポネンス Deponens は共に、形は受動動詞で意味は發動的である。希語の中聲は、『自己の利益の爲め』にする又は『自己へ向歸する』行爲を表はす多くの動詞に存する。拉語のデポネンスは左樣に一般的でなく、或る若干の動詞例へば模倣する imitor 誤魔する blandior 畏れる vereor などと云ふ動詞のみに限つて存する形である。河上、福本兩氏の努力せられた樣に、形は發動的な動詞を受動的の意味に働かせた例は、淺薄な私の知る限り見當らぬ。河上、福本兩氏の企ては、恐らく破天荒的のものであるのではあるまいか。

此文を改造社へ送らうとして居るところへ、又た或人の注意で、宮川實氏の『經濟學批判』邦譯（昭和十年十一月十五日改譯發行）が新刊されて居ることを知った。依つて、急ぎ使を走らせて、一本を購つて見たら、『現實の土臺』となつて居り、更らに、『入り込む』問題は『與へられたものとして受取る』、右書四頁）として解決されて居る。『與へられたものとして』は、原文にない句で、餘程苦心の結果挿入せられたものと思ふけれども、右譯の樣なれば、私の『認容する』と殆んど同じことになる。私は、宮川氏に對して、深厚の敬意を表さなければならず、又た、宮川氏の序言によつて河上博士が『更らに嚴密に加筆せられ』『殊に唯一の令息政男君の日々に絶望の淵に沈みゆかれる病軀を眺めながら、此譯書の初版を校閲せられ』たことを知つて、嗚咽を禁じ能はざる程感激したのである。同時に、私の此一節が、此篤實な譯書出づるによつて、無用に歸せられたことを寄ぶのである。シカシ、折角、認めたものであるから、削除せずに留くことを許して頂きたい。猶其他に、近來續出する新刊の諸邦譯に目を通さなかつたことから生ずる迂闊が多くあるであらう。同時に宥恕を乞ふて措かねばならぬ（四月四日追記）

（四）

さて、初めに返る。

私は前に云つた。『マルクスは、單に一のより大なる全體と云ふのみで、其れが原始共産社會であるとも何とも云つて居らぬ。從つて、エンゲルスが共産宣言の根本思想なりとして掲げた一節に『土地に對する原始の共同所有の解消以來』と限定したのは、果して、マルクスの考を正しく傳へて誤なきものであるか否か』云々と。

私は此疑を釋く可く若干の文獻を渉獵して見たが、一八四五年時代のマルクスに就ては、不幸にして何ものをも見出し得なかつた。一昨年モスクヴアのマルクス、エンゲルス研究所を訪ふたとき、同所の主任諸君と會談の際、何かないかと尋ねて見たが、シカとした答を得なかつた。故に『共産宣言』起草時代のマルクスに就ては、此疑問は、暫らく保留して置く外はない。

降つて一八六〇年代に就ては、クノーの『マルクスの歷史、社會、國家學說』(2) に若干の記述を見出した。即ち此書伯林一九二三年版第九十二頁にクノーはマルクスがマウラーの研究に關してエンゲルスに宛てた手紙を引用し左の如く云つて居る。

――追記、此書の一部は後に掲ぐる如く近頃邦譯が出來た。然し私が玆に引く部分は譯出以外の部に屬する――

『マウラーのゲルマンのマルク、村落、都市制度に關する諸著作はマルクスは其のエンゲルスに送つた諸書簡に見へた通り、一八六八年に至つて、始めて之を知るに至つたのである。彼は其年三月十四日付のエンゲルス宛書簡中に次の如く報知して居る。

（書簡略）

マウラーの諸著述は、マルクスに深い印象を與へたに相違ない。何故となれば、彼は屢々此事を（エンゲルス宛書簡中ならん）繰返し記して居り。而して、マウラーの業績を賞讃して居るから。例へば、一八六八年三月二十五日付エンゲルス宛書簡中に、彼は次ぎの如く報じて居る。

『マウラーに就て。彼れの諸書は非常に重要なものである。獨り原始時代のみならず、其他の發展の全體、即ち自由帝國都市、不輸の釆地地主、公權、自由農民と隷僕との間に於ける鬪爭、等は、彼れによつて、全く新な面目を與へられた。

人間の歷史に就ても、古生物學に於けると同じ事が行はれる。我々の鼻の前に横る事柄が、原則として一種のjudicial blindnessによつて――最も卓越な頭腦の主によつてさへも、看過される。後に至つて、時は既に過去つてから、人々は、以前に看過した事物が到る處に、其の根跡を止めて居ることを見て、驚く』

エンゲルスは、マルクスよりも、幾らか冷靜な言を用ゐて居る。彼曰く

『マウラー老の云ふ所は、甚だ結構である。一體此等の事柄に關

する材料が、此くの如く澤山既に存在すること、而して、大學教授諸先生が之を利用すること、斯くの如く乏しいと云ふことは、誠に注目に値することである」

次には、更らに十年後れて、一八七〇年代のマルクスに關する一旁證がある。其れは、エンゲルスの『家族、私有財産及び國家の起源。ルイス・エッチ・モルガンの研究に關聯して』(3)——私の用ゐて居るのは其第十一版。此書には、邦譯が一二種ある。私は本年三月新刊の西雅雄氏の譯本(東京白揚社出版)を坐右に置いて居る——の一八八四年第一版序言中の次の一節である。

『本書は一つの遺言の執行とも言ふべきものである。カール、マルクスこそ、實にモルガンの研究の結果を、彼れの——或る限度内において吾々の——唯物的歴史研究と結びつけて記述し、そしてはじめてその全意義を明かにしたいと考へてゐたのである。けれども、モルガンは、マルクスによつて四十年前に發見された唯物史觀をアメリカにおいて彼自ら新たに發見し、そして野蠻と文明との比較において主要なる諸點で、マルクスと同一の結果に到達したのであつた』 西氏譯本序言第一頁に據る

モルガンの『古代社會』(4)は、一八七七年に初めて世に出たものであるから、右に云ふ處は此年か其以後に於けるマルクスに關するものなるは明である。

さて、マルクスが一八六八年時代に、口を極めて稱揚しつゝあつたと云ふマウラーの研究、同じく一八七七年代に於て、之れを其唯物的歴史研究と結び付けて記述し、其全意義を明かにしたいと望んで居たと云はれるモルガンの研究は、共に、マルクスの所謂『一のより大なる全體』を一の『共産社會』と認め、其れを出立點とするものであることは、茲は管々しく言ふまでもない。——詳くは、西氏の譯本と黒正氏の前掲の研究とを見られたい。——

而して見ると、少くとも、一八六八年以後に於けるマルクスが、其の唯物史觀經濟史、社會史の歴史時期の出立點を一の『共産社會』なりとしたこと丈けは、疑を容れる餘地はない樣である。而して、エンゲルスは、『モルガンは、四十年前にマルクスが——筆者註。而してエンゲルスも——發見した其の唯物史觀を、獨立的にアメリカに於いて發見した』と云つて居る處から推して見ると、一八八四年から四十年前頃のマルクスも亦た左樣であつたと云ふ可きが如く見へる。

然るに、クノーは次の如く云つて居る。

『マルクスに於ても、エンゲルスに於けるが如く、經濟史は、古へのマルク共産體を以て、初めて本當に始まる。此時代に先つより古き定住及經濟諸形態は、唯だ折に觸れて、極めて簡單に言及せられて居るに止る。マルクスが其の『資本論』に於いて、ゲルマン人、ケルト人、ドイツ人に於ける土地共有に關して論ずる場合

には彼は、常にマルク共產體的組織諸形態を眼中に置いて居る。同じ事は、エンゲルスにも當てはまる。彼は、其の小著『ウトピアから科學への社會主義の發展』にドイツのマルクに就て、一の特別な附錄を添へて居ることは、人の知る處である。』

筆者註。エンゲルスの此書には、『空想から科學へ』と題する堺利彥氏の邦譯本がある。私は本年三月刊の其第八版を玆に持つて居るが、其れには、此の附錄は添へてない。堺氏は英譯から重譯せられたと斷つて居られるが、私の見た英譯、(5)には此附錄は併載してある。然し、讀者は、幸にも、本年三月東京同人社刊の烏海篤助氏のクノー氏前揭書の一部の邦譯『婚姻及び家族の發展過程』に附錄として譯載されあるに據つて之れを見ることを得る。マルクスとエンゲルスとに就ては、最近に至り、實に多數の邦譯が公けにされるに至つたことは、學者の幸福此上もないことであらう――

クノーは更らに續いて云ふ。

『發展行程に於いてマルク共產體に先つ最古の經濟組織諸形態を斯く度外に置いたことを以て、マルクスもエンゲルスも非難さる可きではない。兩人とも、其一生中に、左樣に多く價値に充てる學問的の業績をあげた。彼等に對して其爲した以上、其爲し能ふた以上に、更らにより多くを要求するは、思慮なきわざと云ふ可きであらう。乍去、經濟發展に關するマルクスの見解に、此の大なる缺陷あることを看過し、マルク共產體的發展階段の共有形態を以て所謂原始諸形態(詳言すれば、農業への過渡に直ちに續く諸形態)と認め、これからして、農業共產制の假定的原始歷史なるもの――其れは、所謂自然民族なるものに付いて、蒐集せられた諸經驗に矛盾するところの――を組み立てるは、誤つたことたるは、元より言ふまでもない。』 前揭書第二卷九一・九二頁

斯くて、クノーは、カウツキー及シエーンランク共著の『エルフルト綱領』中種族及ホルドの共有社會に關する記述を難じて、此の『原始共產主義』なるものは、單に一のフヰクションに過ぎぬと斷言して居るのである。クノーの此非難は、コヴアレフスキーの影響に基くエンゲルスの改說(西氏譯本二五〇頁第二項を見よ)にも當てはまることとなる外はあるまい。ソコデ、暫らく、クノーの非難を避けて、マルク共產體に出立點を置くと、彼れが斷言したマルクスとエンゲルス(即ち改說前の)とに就て、吟味するのが此小論文に於ける私の仕事であらねばならぬ。言葉を換へて云へば、玆に吟味すべき唯物史觀の出立點は、『原始共產社會』ではなく『古代共產社會又は制度』であらねばならぬ。

斯くすることは、吟味の對象を著しく單純化することになるので、私は、クノーの指摘した『缺陷』なるものの存在することを、却つて歡迎せざるを得ないのである。若しも、所謂『原始共產社會』にまで溯り、所謂『種族、ホルド時代』なるものまでも吟味の題目とせねばならぬと

なると、其れは、學問的研究としては、殆んど不可能なことに屬する。クノーの爲した様に、之を單なるフヰクションなりとして斥けて仕舞へば、無論事は容易であるが、其れは、私の敢てし得ざるところである。其反對に『マルク共產體』から吟味を始めると云ふことは、經濟史の研究として、歷史學の問題として、慥かに爲し得ることである。

併し仕事は單純化せられる代りに、エンゲルスの二箇の挿注の取扱は、事面倒となる。『土地に對する原始の共同所有の解消以來』『特立的にして、而して終いには、互に對抗せる諸階級に、社會が分割されたことは、此の原始共產體の解消すると共に始まる』と云ふ其の『原始共產體』『原始の共同所有』と云ふは、クノーがフヰクションとして斥けた其の『原始共產主義』なるものに當るか、其れとも『マルク共產體』に當るかの疑問が起つて來る。

私は疑問計り多く提起して、其何れをも解答することの出來ないのを悲しむ。然し、自身の力で解答出來ないものを、無理に牽强附會して解答を試みることの爲す可からざるを熟知して居る。

クノーは、また言つて居る。

『マルクスとエンゲルスとが、後に至つて、モルガンのイロケーゼンの盟社に關する著書と、其の『古代社會』とを知るに及んだときも、彼等は此を機として、原始の共同體及經濟諸形態を更らに研究することをしなかつた──此事は、一體は、腑に落ち兼ぬることである。何となれば、共產主義者たる彼等こそ、原始の經濟生活の様々に異れる共產的事實を究めると云ふことを意とす可き筈であるから。然し此の手控へは、當時に於ける兩老匠の手腕、政治的活動に鑑みるときは、如何にも諒察し得られることである。殊に、此くの如き研究に向つては、當時踏込んだ前人の研究もなく、又た關係材料の取扱は、一部には新らしい言語研究を要したことであらうから。』前掲書第二卷九〇・九一頁

クノーの此言には、悉く贊同せざるを得ない。併し、前人の研究が可なり豐富に與へられてあり、殊に比較言語の研究、希拉兩古典語の研究の其以後驚く可き計り進んだ今日、伯林大學教授としてあらゆる便宜と十分な時間とを有するクノー氏其人の此問題に關する研究が、必ずしも多數の專門學者の認むる所とならず、殊に其の最も得意とする家族制度の研究は、一度は、シュモラーの激賞を贏つた後、今日は、シュモラー自らの說と共に、著しく、時代後れのものと看做す人が多いことを鑑みるときは、マルクス及びエンゲルスが當時其の多忙の中から暇を偸んで、此種研究に從事したとて、其れは、必ずしも、クノー氏の其れの如く ueberholen せられないとは限るまい。少くとも、私は、マルク團體を其經濟史の出立點に置いたマルクス及エンゲルス（改說前の）の爲したところの方が、歷史學の立場、經濟史の立場からは、遙かに有り難いことではなかつたかと思はざるを得ないの

である。――序に云ふ。クノー氏は、近く數卷より成る經濟史の著述に志し、其第一卷は既に刊行されて居る。私の手許にも近く到來することと思ふ。其書には、其後に於ける氏の研究が滿載されて居ることであらうから、私の玆に云ふことは、或は全く訂されるかも知れない。私の言ふところは、前掲の一九二三年刊の著述に顯はれた事のみに關するのである――。

（五）

ソコデ私は幾多の疑問を解答不能の狀態の中に殘しつゝ、クノーの明言したところ、而して其れについては、些の疑を容れないところのマルクス及びエンゲルスの經濟史の出立點のみに限局して、私の吟味を始める。

私の吟味は、再吟味である。其意は、二つの點からである。一は、私は、今から二十五年前明治三十五年に起稿した『經濟單位の發展に關する舊說と新說』と云ふ一文を、其翌年京大の『內外論叢』に寄せたことがある。（其文は今は拙著『經濟學全集』第四卷の初めに收めてある）これは、私が留學歸朝後、初めて筆を執つて公けにした文で、私としては、一の信仰告白位の意氣込で認めたものである。私は四年餘りの留學中、ゲンスやホルドに關する部分を除いては、悉くマルクス及エンゲルスの經濟史觀に信服したものである、而して其れは、私の二人の學師ブレンタノ及ブュヒアー兩先生の採つて居られた學說と多くの點に於いて、實質上共通のものであつたのである。留學の第一期をブュヒアー先生の許に過した私は、先生のラヴレエの書の飜譯『原始所有制度』を熱讀し、更らに、ラヴレヰの原本を讀んで、悉く其說に魅せられた。續いてブレンタノ先生の許に移つてからも、先生も同樣の說を主張して居られ、殊に『經濟單位の發展』に關しては、ブュヒアー先生に見ざる徹底的な說（其れは今收めて先生の論文集『國民經濟の具象的根本條件』一九二四年ライプチヒ刊にある。）(6) に接して、私は心眼を開かれた思を爲したのである。續いて、先生は、經濟史の講義を開かれた。これは、ドイツ大學に於て最初の經濟史講義であつた。（ズット以前に、ハイデルベルヒ大學で、キーセルバッハ氏が、經濟史の講義を開くと云ふ豫告を爲したことがある。有名な經濟史の著者マックス、ウェーバーは當時伯林大學の學生であつたが、此豫告を聞いて、ハイデルベルヒ大學に轉學した。然るに、何故かキ教授は、ついに其講義を爲さなかつた爲め、ウェーバーは地段駄踏んでくやしがつたさうである。）此講義に於て、先生獨得の經濟單位發展史は、實に光彩陸離たるものであつて、私は生れて、此の講義を聞き得る我が身の幸福を神に謝したものである。ソコデ、私は、先生の說に基いて、日本の經濟史を一瞥しようと云ふ大望を起し、其事を先生に申出でたところ、先生は大いにそれを嘉し、其以來は、私を目の中へ入れる程面倒を見て下さつた。先生今八十三歲、年來の眼病と戰ひつゝ英國經濟史の著述に從事して居られる其の忙しい中からも、月に一回、時としては二回必ず短文たりとも消息を惠まれる其の機緣は斯くして作られたのである。私の『日本經濟史論』は斯くして出來た。其の根本の考へ方を歸朝以後の第一の文として世に出したのが、右云ふ『經濟單位の發展に關する新說と舊說』で而して其は其年旅行して來

た朝鮮に、此説を當てはめて見ようと企てたものである。此文に私の書いたことの要領は、本小論文の冒頭に引用したマルクスの一節と殆んど同樣の趣意に基くものである。從つて、私の『日本經濟史論』は、マルキシストによつて喜ばれたようであつた。墺國社會黨の巨擘故エックシユタイン氏は、拙書を讀んだとて、來朝の節ワザ〳〵私宿を尋られ、而して後に私の拙い書物の要領を認めた論文を『ノイエ・ツアイト』誌へ揭げられ、其別刷一本(7)を惠與せられた。其が傳はり傳はつてか、クノー氏の前揭著の第二卷二三四頁『日本の封建制度の成立』の底本となつたものと見へる。――クノー氏は、其據る所をあげて居られぬ。私の斯く推測したのは、第一、內容が全く同じのと、第二、一昨年伯林で或人から、汝の本はクノーも之を利用したと言つて居たと聞いたからである。但し此推則は誤つて居るかも知れない――又た我邦のマルキシストの中、故森近運平氏は、何かの雜誌に『此書こそ我々の立場からの日本歷史である』と書いて下さつた。更らに、故マックス・ウエーバー氏は、其經濟史の卷頭に、若干の引用書をあげた內に、私の右書物を入れて居られる。

然るに、私自身は、西洋の經濟史に就ても、日本の經濟史に就ても其後少し學んだ所から、甚しい根本的の疑問を持つようになつた。而して、大正三年出版の和田垣博士記念經濟論叢に『シーザー及タシトスによる古獨逸土地共有制度に關する若干の疑問』（今『經濟學全集』第三集三二七―三六二頁に收む。）と云ふ主としてリヒアードヒルデブランドによる一文を公けにした。此文に於ては、古ドイツ土地共有制度の存在に關するカイザー（シーザーとしてあるのを、今拉丁の讀方に從つてかく改む）及びタキトス（シをキに改む。）の文に就て少し考證した結果、土地は共有にも私有にも、抑も所有の目的物ではなかつたのではあるまいかとの疑問を提出したに止るが、實は、當時拉丁語がよく讀めないから、要愼に要愼を重ねて、疑を成る可く差控へて置いたのである。ヒルデブラントを底本としたことは、私は其文に明記して置かなかつたけれども、篤學なる黑正氏は、其の『農業共產制史論』二九頁及び三五頁に於いて、其れを指摘して下さつてある。――總じて、私の過去の諸々の文には、孫引、受賣だらけである、其事は『經濟學全集』第一卷の序文中に明記して。深く罪を謝して置いた。殊に月刊雜誌へ洋文を組み入れる不便を思つて書名を略したことが多い、これからは餘り略さないつもりである。――

爾來、私は疑に疑を重ねざるを得なくなつた、日本の歷史に就ては其後內田博士の深く廣い諸研究があるから、必ずしも急いで訂正するにも及ばないと思つた。――但し此問題に付ての博士說は、『私が日本經濟史論』に述べたところと、大體同じものではあるが――併し、自身としては、出來る丈けのことはしたいと云ふつもりは持つて居た。昨年に至つて黑正氏の該博な書が出で、又た瀧川政次郎氏の『日本農民の生活』（大正十五年四月同人社刊）が出た。瀧川氏のは、主として法制史に屬するから、私に彼是申す資格はないが、實に近頃稀なる力作である

ことは疑を容れない。而して氏は故内田博士の說に疑を挾んで土地共有の存在を否認して居る。（右書六三頁以下）黑正氏の說は、此點に關しては、『私も先生（内田博士）の驥尾に附して、我國古代に於て土地共有制の存在を肯定せんとするものである』（同書二三一頁）と云はるゝのみで、其證據は之れをあげて居られない。其外の經濟單位云々等に關しては少くとも造語等は、私のを取られたように見へるし、有賀長雄氏の『帝國史略』や栗田寬氏の『氏族考』などを底本とした私の記述其儘に見へるところが、彼是あつた。兎に角、全體として見ると、瀧川氏の著は慥かに獨創の工夫の充溢して居る雄篇であり、黑正氏著も苦心の述作たるには相違ない。唯氏は内田、ペロー、ウエーバーの諸氏を餘り信じ過ぎられた樣に見へた。

兎に角、日本の歷史は姑く措くとして、西洋の事は幾多先人の有力なる研究の存する今日、舊說——明治三十五年の私に取つては新說——を其儘に奉ずることは、私の心がそれを許さない。ソコで、私は『再吟味』を試みて見ねばならぬと志ざした。シカシ、ヒルデブランドを愛讀した頃の樣な語學の程度では、迚も駄目であることは明であり、而して、之を補充することは、『ジアーナリズム』に累せられて居た私としては、迚も出來ないことであつた。私は、此れを深く慨いて居た。幸ひ一昨年から昨年にかけて、歐羅巴に居たから、色々な忙しい仕事の合ひ間を縫むようにして、巴里大學の或先生について、古典兩語の中學程度の練習をして見たが、五十の手習迚も駄目であつた。ソコデ、註釋・飜譯、辭書の類を、力の及ぶ丈け集めて來て、ボツボツ取り掛つて、見たのである。誠にあぶなかしいものではあるが、私の此の再吟味は、其れによつたものである。即ち、大正三年の吟味を今一度覺束なくも、やつて見ると云ふ程度のものである。

再吟味と云ふ第二の意味は、此問題に就ては、一八八五年フュステル・ド・クーランヂュ氏が、佛蘭西學士院の總會で、大論戰を、やつたことがある。其論戰を、四十年後の今日再び吟味して見ると云ふ意味である。當時反對論者即ち共有存在肯定論者としては、法制史に就ての佛蘭西第一の泰斗グラソン氏と其れからラヴェーソン氏とがあつて、フュステル氏と應酬した。然るに、佛蘭西諸大學に於いては、グラソン氏及び同じく共有肯定論者たるヴヰオレ氏とが、殆んど獨占の姿で、各大學の法制史講義は、兩氏何れかの著書以外殆んど之を用ゐない。極く最近になつて、一二の新しい教科書が出たが、其れは、餘り大したものではないと云ふことである。

從つて、共有否定論者たるフュステル氏の說は、學士院では、兎に角、大學學問間——佛蘭西では、ツヒ近い頃まで、大學と學士院とは、少くとも經濟學や史學に於いては、反目の狀があつた。今日でも、ヂード教授は、學士院に何の關係を有たぬ、其事を氏は極めて皮肉に『佛國經濟學の最近狀況』（ブレンタノ記念論集に收む）に於いて詳述して居る。——には、極めて冷遇されてあつた。トコロが、最近數年、

歴史及び古典語に對する佛蘭西の進歩は、實に目まぐるしいほど著しいものであつて、フュステル氏の說は、再び甚だ重視せられるに至つた。――氏の『古代都市』丈けは昔から今に至るまで、非常に汎く行はれて居る。此書には中川善之助氏の邦譯（京都弘文堂刊）があると聞いて居るが、未だ見ない。シカシ此書は、此問題には、關係は極めて薄い――。

私は、主として、フュステルに據つて、而して、最近の若干の研究を祖述し、旁ら、カイザー及びタキトス（ストラボンは、よく讀めないから飜譯によつて）の原文に就て、少し考證して見たいと思ふ。其意味で、フュステル說に基く再吟味を試みるのである。

フュステルの論戰講演は、右學士院の報告一八八五年第百二十三卷及百二十四卷 (8) にのせてあり、更らに同年刊の同氏の論文集 (9) 第百八十九頁至三百十五頁に再錄してある。此論文集には、右文に直ちに續いて『マルク團體』に關する氏の論文も收めてある。フュステル氏には、此外此問題に關して、一の論文がある。其は『土地所有の起源に關する問題』(10) であつて、此れは『歴史問題評論』の第四十五卷に收めてある。而して、其れは更らに、氏の『歴史的諸問題』(11) に再錄せられてある。アシュレー氏は其夫人（なる可し）に此書を英譯させ、自らは、英國の『マナー』に關する長文の緖論を添へて、刊行させて居る。(12)

更らに、フュ氏には、畢世の大著述がある。此書中には、此問題に觸れた箇所が往々ある。其書は『古代佛蘭西政治諸制度史』(13) と云ふので、前後六卷から成る驚く可き力作である。第一卷は、羅馬時代のゴールで最新版は一九二二年刊の第五版（ジュリアン氏校訂）、第二卷は、ドイツ民族の侵入で、同一九二四年第五版（同校訂）、第三卷はフランク王朝で、同一九二二年刊第四版（校訂者なし）第四卷はメロヴンヂアン朝で、同一九二二年刊第三版（校訂者なし）第五卷は封建制度の起源で、同一九二二年刊第五版（ジュリアン校訂）、第六卷は、カロヴヰンヂアン朝に於ける王權の推移で、同一九二三年刊第六版（ジュリアン校訂）である。かく管々しく卷と版とをあげたのは黑正氏の用ゐられた、而して普く人の信賴する一九二三年刊ウェーバー氏の遺著經濟史第二十頁に、全二卷第三版一九一二年刊とのみしてあつて、誤りを傳へるといけないと思つたからである。

再吟味の由來談が長くなつて恐縮であるが、私は、爾後、私の底本や證文、出所を一々明かにして再び罪を大方に得ることを、全廢し[illegible]いからである。

(1) J. u. W. Grimm, Deutsches Wœrterbuch. I I Bd. Leipzig 18?2. Sp. 186-188,

(2) H. Cunow, Die Marxsche Geschichts- Gesellschafts- und Staatstheorie. Grundzuege der Marxschen Soziologie. Berlin 1923.

(3) F. Engels, Der Ursprung der Familie, des Privateigentums

und des Staats. Im Anschluss an Lewis H. Morgan's Forschungen. 1881. 11 Aufl. (?) Stuttgart.

(4) Lewis H. Morgan, Ancient Society, or Reserches into the lines of human progress from savagery, through barbarism, to civilisation. London 1877. Reimp. (?) New York 1907.

(5) F. Engels, Socialism utopian and scientific tr.by E. Aveling. 2 E, London 1907.

(6) Lujo Brentano, Konkrete Grundbedingungen der Volkswirtschaft. Leipzig 1924. SS. 1-102.

(7) Gustav Eckstein, Die Entwickelung des japanischen Familienrechts. Ergaenzungshefte zur Neuen Zeit. Nummer 2. Ausgegeben am 17 April 1908.

(8) Séances et travaux de l'Académie des sciences morales et politiques. 1885. Vols. 123 et 124.

(9) Fustel de Coulanges, Recherches sur quelques problèmes d'histoire. Paris 1885.

(10) Le problèmes des origines de la propriete foncière. Revue des questions historiques. XLV.

(11) Questions historiques. Paris 1893.

(12) The origin of property in land tr. by M. Ashley with Introduction by W. J. Ashley. 3. Imp. London 1904.

(13) Histoire des Institutions politiques de l'ancienne France.

(14) Max Weber, Wirtschaftsgeschichte. Abriss der universalen Sozial-u. Wirtschaftsgeschichte. Aus den nachgelassenen Vorlesungen herausgegeben von S. Hellmann u. M. Palyi. Muenchen u. Leipzig. 1923.

(以下續出)

カール・カウツキー著

改譯 資本論解說

―最新刊―

東京市麹町區内幸町
幸ビルディング一階

改造社發行

振替東京八四〇二番
電話銀座 四五五八・五〇四六・一七三三

高畠素之譯

今日マルクスを知らずして社會問題を論ずるものあらば愚の極だ。それ程マルクス學は今日諸理論諸運動の基調となつて居る。だが、彼の膨大にして難解なる資本論全卷を讀破することはその精力と時間に於いて我々萬人に許されざるものである。此の點本書の如き完全なる解說書は何時の時代にまでも大いなるその役割を演じ得るものと斷言し得る。譯文また、數回の改譯を經て定評のもの。我が社が今日此の廉價版を出すは可成の社會的貢獻と信じてである。あらゆる人々に必讀を勸む。

四六判三三六頁・定價壹圓・送料十八錢

高畠素之著
社會主義と進化論
定價壹圓 送料十八錢

アーサー・レヴイス著 高畠素之譯
社會主義社會學
定價壹圓 送料十八錢

正宗白鳥著

〔好評三版〕

文藝評論

四六判上製
定價壹圓八拾錢
送料拾八錢

最近文壇は徒に喧騷に趨つて紛糾を極め、歸趨する所を所らない。藝術的鑑賞眼は階級文學の爲に或は利己的黨派心の爲に、全く地に墮ち、正に藝術の危機は到來した。文壇の耆宿正宗氏は玆に默視するに忍びず憤然立つて舌鋒鋭く文壇を馳驅し、明晰なる鑑賞眼と痛烈骨を刺す評論は、彼の『正宗の名刀』の切れ味を思はせる。その快刀亂痲を斷つが如き鋭利なる鋒先はありとあらゆる文藝作品を餘す所なく批判し、尙白鳥自身の抱懷する人生觀、世界觀をも展開した。本書の劃期的な出現は現文壇をして驚倒せしめ、群小評論を一蹴して文藝作品の價値批判の尺度を確立した。彼のプロ派の論客青野季吉氏は正宗氏の論鋒の前に如何に恐怖したか。讀め！本書は現日本文壇の總決算である。

戲曲 ある心の影

「ある心の影」…「人生の幸福」…「影法師」…「秘密」…「白壁」の五篇を收む。

價一・六〇 稅一八

安土の春

「安土の春」…「勝頼の最後」…「ある文學者の心」…「柿の木」…「老醜」の五篇を收む。

價一・三〇 稅一六

歡迎されぬ男

「歡迎されぬ男」…「光秀と紹巴」…「わしが死んでも」…「さまぐな不安」…「溺死者の鞄」の五篇を收む

價一・五〇 稅一八

發兌
東京市麹町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二一番
改造社

岡本綺堂著

（最新刊）

江戸子の死

綺堂氏は江戸情緒を近代の纖美感で彩る點に於て、正に陶然たる芳香を放つ藝術の所有者である。本書は氏自身が數年間の作品中より嚴選せる傑作を收めた近來の得がたき寶玉。「江戸子の死」外五篇は、何れも劇壇にて好評嘖々たりしもの、綺堂獨自の世界である。この人情味豐かなる情緒物語は我國民の傳統的美しさを傳へ、高き藝術的筆致と、深き人間性への探究は讀者をして卷を繙いてより閉ぢるまで感嘆惜く能はざるものあらしむ。

四六判三三〇頁
定價壹圓八拾錢
送料十八錢

國枝史郎著

（最新刊）

劍俠受難

大衆文藝作家の內我が國枝氏の存在は一つの奇蹟だ。「バアナアド・ショウの弟子を以て任じ、時代物と云ふ名の下に現代を縱橫に揶揄しやう」と宣言する著者の作風は、奇想天外、着想雄大にして、時代物に名を借りて巧みに現代人を描き、皮肉つた劃時代的な作品である。本書は全篇を立體的に描き、時代「時」と「所」と「人物」とを終始一致させ、重要なる人物十數人を拉し來りて夫々性格づけて活敍し、從來の大衆物の格を破つて、新機軸を提唱した。

四六判二三〇頁
定價壹圓
送料十八錢

發兌　東京市麴町區內幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社

藤森成吉著（最新刊）

故郷

四六判上製　定價壹円五拾錢　送料十八錢

現文壇に於ける一異彩＝身を挺して勞働者の間に投じ血の滲むが如き人間的、社會的苦悶を體驗せる藤森氏の近業十四篇を收めしもの、その心情の熱烈さと、穩かなる氏の風格は、自らそのふくよかなる藝術的詩韻と綾をなして、この神品をなした。誠に氏を措いて他に見られぬ點々苦澀、而も清冽比珠玉の如き逸品のみである。恐らくプロ、ブルを問はず一讀再讀して三嘆を措かざるもの。

久米正雄著（近刊）

木靴

久米氏の快心の作中より自選せる力作のみである。氏の文壇に於ける地位と、その藝術的氣韻の高さは今更吹々爲する必要はあるまい。それは自らなる世の讃仰者の多數によつても充分に證し得られる處だ。木靴舞子外數篇の短篇は皆文壇を賑かしたるもので、その心境の深かさと、その特有の詩的ふくよかさは誠に秋空の如き萬人の心底に滲み入るもの。凡そ文藝を口にする者の必讀翫味すべき書である。

藤森成吉著（近刊）

何が彼女をそうさせたか？

憤然悟る所あり、勞働生活の慘苦をなめて歸り、プロレタリア作家として甦生せる藤森氏が、始めて世に問ふ戲曲數篇を收む。孤兒として轉々せる少女が終に放火に至る經路を描く、卷頭戲曲は讀む者をして「何が彼女をそうさせたか？」の社會的根本惡をまざ〳〵と見せつけられる。本書は正しく既成ブルジョア文壇に投げつけられた爆彈であり、プロレタリア藝術の存在權を力強く主張するものだ。讀め！敵も味方も。

田中耕太郎著（最新刊）

法と宗教と社會生活

（四六判上製　定價貳円五拾錢　送料二十二錢）

本書は、その深き哲學的思索と現實生活の鋭き批判の上に生れたものである。吾々の社會生活が、それ自體に於いて法と宗教とに如何なる關係を有し、如何なる調和の上に立つべきであるか？著者は今それに、專門的なる考究を試み、明快なる哲學的理念を與へ又法學通論的方法でなくて法・國家及社會生活の意義を簡單に闡明して居る。趣味深く述べられてあるから、各人必讀の書だ。

發行所　東京市麹町區内幸町　幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社

正しく食つて生きんがために

武林無想庵

Villa Les Pins, Cros de Cagnes, A. M., France.

——一千九百二十六年九月三日——

云ひやうのないアンニユイを感ずる。自分のやうな下らぬ人間はないと思ふ。妻はそばにゐても、子供は勢よく遊んでゐても、かれ等はそれ〴〵にたゞ自分達自身の生活に忙しい。さうしてわたしのこの云ひやうのないアンニユイとは、彼等とまつたく交渉がない。

わたしは毎日どうかしてわれ〳〵三人の衣食の資を得るべく、自分できめた、原稿書きといふメチエに、一生懸命精を出さうと思つて、つとめて机へ向ふのだけれど、どういふわけだか、すぐこのエタイの知れぬアンニユイが、心の底へまツくろな顔を出して、書かうと思ふ原稿の腹案をば、メチヤクチヤに塗りつぶして了ふ。さうしてゐても立つてもゐたゝまらぬ不安と不快とを残してゆく。結局、何もせずに手を束ねて餓死をまつ、と云つた最後のみじめな境遇にまで、わたしを追ひ落すつもりなのであらう。要するに、わたしの死敵はこのアンニユイだ。

一體、アンニユイとは何物なのだ？

ラルッスにはかうある。Lassitude morale produite par désoeuvrement——無爲によつて生ずる道德的倦怠。羅典語の、In—dans と、odium—haine との二字が結びついて生れて來た文字だといふ。dans haine——憎惡の中に、だ。勝手にそれ等を綜合して考へると、徒食から道德的に倦怠を感じて、それが憎惡の念を惹起す、といふ意味になる。

わたしはつねに働きたい〳〵と思つてゐる。原稿を書くことが一番自分に適してゐると考へるから、それに沒頭すべく努力してゐる。しかるに、原稿を書くといふことが、自分の希望するところでは、決してかういふ隨筆をヘラヘラと書くといふ意味ではないのだ。もつと深い、もつと高い、もつとチヤンとした藝術的の形式をそなへた、一口に云ふと、それが詩であるところの、萬人のためになる、本當に人類の生活を豐富になし得る、一箇の傑作が書きたいのだ。さうして文士でゐながら傑作が書けぬやうでは、まつたく文士と生れた甲斐がないとまで、自分の力量を顧みずに、考へ込んでゐるわけなのだ。

そこで、わたしの毎日机へ向ひながら、一行も文章の書けぬのは、つまり、さうした手にをへぬ非望のもとに、奮勵努力しようとしてゐるからだ、といふ結果が生ずる。

ラルッスを引くまでもなく、わたしのアンニュイは非望を遂げようとして、それに手の屆かぬ惱みにすぎない。

小說といふ形式の下に、わたしの目のまへには、水滸傳がある。金瓶梅がある。西鶴の一代女がある。源氏がある。アンナカレニナがある。戰爭と平和がある。フロオベルがある。モオパッサンがある。チエホフがある。ツルゲニエフがある。さうしてそれ等にまけないやうな大傑作が書きたい。といふ、はなはだ子供じみた野心が、きまつてアンニュイの原因になつてゐる。ナポレオンになりたいといふ中學生の夢が、五十ぢかくなつたわたしをば、まだ苦しめつゞけてゐるわけだ。

英雄病にかゝつてゐた明治維新の人々は、かの西鄕南洲でさへ、陽明學者ださうであるところのかれでさへ、『建業たゞ期すワシントン、鬪爭ひとり希ふナポレオン』などゝいふよまひごとを云つて、さうしてその夢のために、その夢を實現すべく企てゝ、それがために、しかしやつぱり英雄らしく、城山で死んだ。アキレスを夢みたアレキサンドル、アレキサンドルを夢みたジュリアス・シーザア。ジュリアス・シーザアを夢みたナポレオン、英雄はつねに傳統主義者だ。

わたしの大傑作もさうした傳統主義に從つたらきつと完成する日も來ないとはかぎらない。然るに、わたしは一方に於いて、極端な反傳統主義者なのだから、結果に來て、甚だしい矛盾を生じて了つたものなのであらう。

けふもくれた。

こんな屁のやうな事を書いたゞけで、二度とはかへらぬ尊い一日をつぶして了つたかと思ふと、はづかしい。くやしい。實際腹だゝしい。書きたくて書いたのでも何でもないのだ。あんまりアンニュイを感じたので、たまらなくなつて、書きなぐりはじめたのだ。さうしてしまりのないわたしの頭の底から、虹のやうなこんなことがズル〱と筆先へわきだして來たものにすぎぬのだ。

こんなことを書きなぐつて見たつて、わたしの頭はすこしもセイセイしやしない。反對にいよ〱アンニュイを感ずるばかりだ。

明治四十三年ころ、わたしは『京都』と題する平凡な小說を書からとして、それを京都の『京都新聞』へ送りつゝ、續けてゐたことがあつたが、その時にも、どうも小說となると、妙に筆がかたくなつて、日一日と書けぬ時の方が多くなつたので、その新聞から金はもらつてはゐなかつたが、編輯に故障を生じさせるのが氣の毒になつて、別に「小說の書けぬ時」と題する隨筆を書き送つたところが、その方が讀者に大へんうけがよかつた。齋藤弔花氏なンかが激賞してくれた。骨を折つた小說の方は、內容が平凡なために讀者にうけず、書きなぐつた隨筆の方が讀者の氣に入るところを見ると、或はわたしは元來が隨筆向きで、藝術家としての素質はまつたく持ちあはしてゐないのかも知れない。と、すると、層一層アンニュイだ。

――九月七日。

ポアンカレーの擧國一致内閣の政策で、フランは遂に百六七十とい
ふところで、しばらく居すわつてゐるが、物價がどし〱あがつて行く勢は、まつたく凄じいやうだ。われわれの懐中には、もうあと四千フランしきやない。先月末にわたしが「歐洲評論」へ送つた日記と、けふ送り出した妻の「婦人公論」へあてた小說が、金になつて戻つて來てくれるまで、果して、われわれのこの新世帯がたもてるかどうかはなはだ心元ない。

――さア、あしたからは、なるべくジャガ芋ばかりたべるやうにして、大いにポアンカレ氏の勤儉するやうな、レストリクションを實行せざるを得ないよ。

――けふあんたが買つて來た鱈がドミキロ六フランだなんて驚くわねえ。下のかみさんにきくと、十年前には、二フランも出すと、鱈が十キロもかへたんださうよ。それでゐて妻の漁師たちはどし〱お金がもうかつたものなんだつて。呆れるわ。

こんな問答ばかりしてゐて、原稿がサフパリ書けない。

＊　＊　＊

十數年か前、わたしのロンドンからとりよせてゐた「アカデミイ」によく偉大な筆を揮つてゐたフランク・ハリスの評論が、この頃の「ラ・フランス」に時々のつてゐる。さうして記事はいつもわたしの日本文的佛文をば佛文的佛文に書きなほしてくれてゐるリシテル氏が書いてゐる。つまり、近頃恐ろしく風俗壊亂な自叙傳を書いて、それを英米で發賣禁止されたフランク・ハリスが、アングロサクソン國の追放にあつて、このニースへ亡命してゐるわけなのだが、凡てに於いてアングロサクソン國の非難ばかり語つてゐる彼の論說は、同國の鄕まつた偽善文壇の與論を無視してまで、フランク・ハリスを弾劾へ呼びつけたりしてゐる始末だ。

數年前、同じ様にアングロサクソン國で禁止の厄にあつた、ゼイムス・ジョイスの「ユーリセス」が、巴里で公然發賣されてゐたものだが、恐らくフランク・ハリスの自叙傳も、さういふ事になりはせぬかと、噂でばかり風俗壊亂をつくつてゐる英人が、チエンジの實元で、それまでを防止しようと企てゝゐるものなのであらう。ばかな話だ。

正直な文士のその時代のためにいろ〱と苦しめられることは今はじまつた話ではないけれど、監督家なんてものが、いつも大きな顔ばかりして、かうした暴を仲裁りもなく撲滅してゐなければならぬ責の中かと思ふと、しみ〲いやになる。が、また考へなほして見ると、それだからこそ、なほのこと、ジエムス・ジョイスやフランク・ハリスのやうな文士が、人間生活の眞實のために、ます〱輩出しなければならぬ必要があるのだとも思ふ。

わたしもそのうちには是非思ひきつて正直な自叙傳を書きはじめやうと思つてゐるのだから、このフランク・ハリス事件は、わたしには特に人事とは思はれぬのだ。

リシテル氏は今日の記事のしまひに、ヴイクトル・ユーゴーが追放された際の詩句をそへてゐた。

――Quand même l'Angleterre et même l'Amérique
Diraient au fugitif « Va-t-en! nous avons peur. »

——英國も米國も亡命者に
「立去れ！　我等は恐る。」と云ふであらう。
「風俗壞亂」がなぜそんなに怖いのであらう。人間生活の眞實の描寫がなぜ「風俗壞亂」なのであらう？　「常識」だけで人間生活の眞實がわかつたら、文盲ぐらゐ世の中で無用の長物はないであらう。わたしは思ふ。「風俗壞亂」の小說と、「、、、、」の創作とがなかつたら、この世は横着者ばかりの横行跋扈するところになるであらう。「常識」は横着者の常用するマスクではないか？　「常識」のマスクをむしりとる人間醫學の大手術は、まづ「、、、」の小說からはじまる。「、、、」の創作がそれにつゞく。さうした揚句に、、、、、、、
——フランク・ハリスが若しフランスを追ひ出されたらどこへ行くでせう？　と、妻がきいた。
——リシテル氏の話では、フランク・ハリスは澤山金をもつてゐさうぢやないか？　それならどこへでも行かれるだらう。英國へ送られて牢へぶち込まれないかぎりは。と、わたしは答へた。
オスカー・ワイルドはセバスチヤン・メルモスと變名して、出獄後佛國の北海岸に籠居してゐたさうだが、かれは金がなかつたと見えて、死んだのは巴里のリユー・ジヤコブのホテルで餓ゑきつたゝめだつた。
餓死！　餓死！　わたしは發賣禁止の自叙傳を書かぬうちから、いくたびそれを考へたらう？
亡命しても金のあるフランク・ハリスは決して餓死することはあるまい。
同じ亡命客に、西班牙のブラスコ・イバアニエツがマントンの立派な別荘にゐる。オスカア・ワイルドとは正反對で、先生の著書は各國に飜譯され、活動寫眞になり、さうしたものゝ收入が、とても大變なものであらう。
わたしはむしろ人生そのものゝ亡命客といふ嘆きがある。さうしてこんなデタラメな文章ばかり書いてゐては、讀者なンぞは一人もなからう。さうして來年の三月には家主へ拂はなければならぬ次の二千フランがかせぎ出せないと、この別荘の二階から追ひ出されるにきまつてゐる。亡命文士もいろ〱だ。

——九月十二日。
大いに働きたいと思つて、さうして充分に働ける境遇に落ちついてしかも全く働けない狀態にゐる事は苦しい。睡眠、食事、その二つを除いては、われ〱夫婦はあとの時間を悉く原稿書きに費し得る境涯にゐるのだ。それで二人とも、どうも思ふやうに原稿が書けない。どうかして原稿だけで飯をくはうと決心した人間が、來る日も〱ただ徒らに机へ向つたきりで、一行も文章が書けないやうでは、まつたくもつて心細さのかぎりだ。こんなナマぬるい事ではどうしてもいけないと思ふ。併しその間に立つて、子供だけは毎日元氣旺盛でハネまはつてゐる。こゝの家主の同じ年頃の女の子等と終日外をかけまはつてくらしてゐる。もと〱子供を中心としてはじめたわたし達夫婦の生活は、その點に於いては、たしかに目的どほりに行つてゐる。これで思ふやうに原稿が書けさへしたら天下泰平なんだ。

ところが、世の中はなか〱。たつた一家の家族達が考へるやうにたゞ自分達の都合のいゝやうにのみ、決して進行するやうに出來てゐないところが面白い。慾ばかり深くて、それに對する努力の、ともすれば缺けがちであるところの、われ〱夫婦は、こゝのところで、人一倍の苦しみをば、その目的とするものゝ上にそゝぐことをしないと恐らく生涯もうとりかへしつかぬ生活へ陷つて、再び復活の餘地のないことにをはるであらう。

――われ〱は原稿を書く。原稿を書いて飯をくふ、それで原稿が書けなければ、書けるまで書く。さうして書けるだけ書く。又それで飯がくへなければ、くへるまで書く。

さうした家訓の下にはじめた生活なのだ。さうしてそれでいけなければ、われ〱の前にはたゞ餓死があるばかりだ。

さうだ。われ〱の前には、常に餓死が待つてゐるのだ。それゆゑに、われ〱は飢死と戰ふべく、文章を書かなければならぬのだ。まづ、それを忘れてはならぬ。さうしてそれを忘れかけた時に、いつも云ひやうのないアンニユイが來る。

――九月十七日。

四五日前、妻がニースのイサドラ・ダンカンのところへ行つて來て以來、妻のアンニユイだけは、一寸まぎらされることになつた。

何でも、イサドラ・ダンカンがすつかり妻を氣に入つてしまひ、タロ・ド・キヤヌなンぞすぐ引きあげて、自分のアトリエへマリも子供も一緒に引越して來い、とまで、冗談半分に云つてくれたさうだ。

われ〱の眼には、忽ち「イヴオンヌの教育」といふ事が、電光の如く閃めいた。

わたしはまだ逢はないけれど、妻の話を綜合して考へて見ると、恐らくイサドラ・ダンカンといふ人は、自分自身の姿の運動の點から發足して、この世の中に於いて、あくまでもその極致を究めようと熱望してやまぬ藝術家であるやうな心持がする。

イヴオンヌは女性だ。わたしはどうかして彼女を、現代に於いて最も多く女性そのものゝ眞價を知り、さうして將來の女性の當然行くべき道を踏み求めて、本當に自分自身の根柢から發足し、あくまでもさうした道の上を歩んでやまぬやうな先覺の手に依頼したいものと、生れた當時から、さう思つてやまなかつたものだ。

諸法因緣の世相は、どうやらわれ〱夫婦の上に、ひよつとしたらさういふイヴオンヌの教育主任をめつけさしてくれたやうな氣がしきりにする。

日本を出る前、わたしは妻と共に巴里へ赴くか、或は單獨で莫斯科へ行くか、いづれにしても、子供を何とかして、自分自身の頭で判斷の出來る程度に於いて、出來得るかぎり最も進んだ現代の教育所に落ちつけさせたいものと考へてゐた。妻の他の半面には、〈丁度わたしに子供を離れたわたし自身の半面があるやうに〉もちろん女性としてかの女が自分自身の途をば求めてやまぬ前途がある。子供の教育を中心として結びついてゐるわれ〱夫婦は、つまり、いろ〱な方面から周圍の情況に刺戟され、誘惑され、さん〱にこづきまはされつゝ、とにかくさうした一筋途をさぐり〱歩いて來たものだ。さうしてと

うく〳〵愛まで辿りついたといふやうな心持が、しきりに心の底にさゝやかれる程度になつた。

イサドラ・メンカンとわれ〳〵の生活と、果してどういふ風に交渉されてゆくか、今のところまだそんなことまでが分らう筈はないけれど、何となくこれが動機となつて、われ〳〵の生活の上に、やゝ行きづまりつゝある前途をば、さぐり求めるに足るだけの、或る的確な暗示を與へて、きりひらかしてくれるやうな氣がするのだ。そこでわたし自身のアンニユイの形式も、こゝで少しく變つたニユアンスに着色されさうな勢ひを示して來た。何の變哲ではないが、そこが所謂「空即是色」の變動なのであらう。

——九月十八日。

子供はかぜを引いてるけれど、一日も早く彼女をイサドラ・メンカンに見せたいといふので、スツカリ、ブツペエ・ジヤポネーズに仕立てゝ、妻は彼女をつれて出かけた。

どうやら今晩はかへりさうもないやうな氣がしたが、もう十一時すぎたけれど、まだかへらないところを見ると、果して豫想どほりだ。先日、イサドラ・メンカンのところへ行つた日は、子供をつれて行かなかつたので、十二時すぎに、イサドラのところで落ちあつたアメリカ人の金持の女を中心とした連中に送られてかへつて來たが、けふは子供が一緒だから、殊に風ひき最中ゆゑ、七時のブスに乗りおくれたとすると、どうでどこかへ泊ることになつたのであらう。たぶん、イサドラが非常に妻を氣に入つたとか云つたさうだから、その上にけふ子供を見たら、きつと、ぜひとまつて行け、などゝ云つた言葉にあまえたものだらうと思ふ。或は話がはづんで、いよいよ子供をイサドラに弟子入りさせ、自分も一緒にそのアトリエへ引越すことになつてしまつたかも知れない。いよ〳〵さういふ事になつたとしたら、わたし自身はどうなるであらう？

一面から見れば、厄のがれだ。から毎日〳〵妻子と鼻つきあはして生活してゐては、讀みたいと思ふ本もろく〳〵よめず、考へたいと思ふことも考へられず、書きたいと思ふことも書けず、要するに、フヮフヮと、しかも、全く自分自身の自由といふものゝない生活ばかりつゞけなければならぬことに極るにきまつてゐる。どうでたはいのない一生なンだから、それでもかまはないと思つて、なるがまゝになつてゐたものだが、若し妻子にさうした千歳一遇の前途をきりひらくべき糸口がみつかつたものとすると、わたしは今度こそは安心して、妻子と別居し、喜んで一人きりの生活へ這入り、充分に讀み、充分に考へ、さうして充分に書きながら、徹底的に自己の眞理と信ずる途の方へ猛進するやうな方針をとることができるであらう。

もうイヴオンヌもかぞへどし七歳だ。イサドラが本氣で弟子にしてくれる氣だつたら、進んで弟子入りさせた方がいゝ。さうしてイサドラの弟子から、彼女自身の生活の第一歩を踏み出すことにしたらよからうと思ふ。

何しろ現代はなか〳〵老子の所謂鷄犬相きこゆる原始的理想鄕ではないのだから、かうした極樂淨土のやうな平和村で、夕顔棚の下で一家團欒するといふやうな生活のうちに、安閑と一生を消耗して了ふべく、あまりに人生と宇宙と社會とには大問題が澤山に橫たはりすぎてゐる。さうした問題があるがために、わたしはさま〴〵な境遇に遭遇しつゝ、いかなる場合にも、決して今日まで自己の本分を失はずに來ることができたわけだ。然らば、その自己の本分とは何ぞやときかれたら、わたしはよどみなく、『眞理のために一生を献げることだ』と答へることができる。さうして過去のわたしの生活の一々は、たとへいかなる批難を蒙らうと、悉くそれは眞理のための生活だつたと、わたしは同樣によどみなく斷言することができる。

すべて眞理を求めんがためなのだ。本當に腑に落ちるまで、これが人間の正體だといふ、動きのとれぬところを、シッカリとにぎりしめるまでは、土に食ひついても、生きて生きて考へなければやまないといふ。さうして一番人間らしい生活につかりつゝ、一生を費したいためなのだ。

――九月二十日。

なんといふたわいのない頭だらう？　わたしといふ人間は！……一昨夜、妻子のかへる前の瞬間に考へてゐた事は、十二時半すぎ、近所のヴイラの主人に、電車の停車場から送られて來た妻子の顏を見るとさうして妻の話をきくと、たちまち煙のやうに消えてしまつた。

――イサドラといふ人は、本氣で子供にダンスを敎へる氣でゐるかどうかまだどうもハッキリ腑に落ちないわ。向ふへついたのは五時半頃だつたのだけれど、イサドラさんはまだ寢てたんだから、さすがにわたしも一寸驚かされたわけよ。で、起きて來るまで、例のアトリエへ行つて待つてたところが、何しろ全く窓といふものゝない家だもんだから、暑いの暑くないのと、それはお話しにならないのよ。そこでいつまでそんなガランとした穴倉のやうなところに待つてもゐられないので、外へ出て、近所のカフヱで待つことにして、そこの主人にいいろきいて見ると、イサドラさんは毎日午後六時ごろでなくては起きない人なんださうなの。この間もダンスだけは感心したけれど、あとの生活は一寸腑に落ちないやうに思つたのよ。何しろアメリカ人と一緒にお酒をのむ事が、それが一ト通りではなかつたんだから、わたしもそれだけは少し考へさせられたわけよ。お酒をのんで、夜ふかしをして、午後の六時まで寢てゐる人が、どうして子供なンぞ敎育が出來るかしらんと思つたのよ。で、とにかくまア起きては來たけれど、その時分になると、いろ〳〵な人間がイサドラさんのところへ集まつて來ることになつてると見えて、さうして大ていそれがもう小範圍の御定連にきまつてるらしく、やつぱりこの間來てゐたやうな人や、それからアメリカの新聞記者だとかいふやうな人達が來てゐて、これからヴイルフランシへでかけるとかいふ話で、碌にこつちの話なンぞ出來ぬうちにもう七時すぎてしまつたわけよ。で、ニイスまで送つてもらつたけれど、その途中でイサドラさんは床屋へ行つたりなぞして、とう〳〵汽車にも間にあはなくなつてしまつたわけなの。併しとにかくこつちへかへる方々があつたら誰かにのつけてもらはうときいて見た

けれど、それがなか〳〵めつからないうちに、茶目がどうしても活動が見たいと云ひ出したので、とう〳〵活動へはいり、そして十二時の電車でかへつて來ることは來たけれど、先生ねてしまつて、どうしても電車からおりないのよ。とにかく併しおろしはおろしたけれど。今度は爰までつれて來ることが出來ないで、途方にくれてゐたところへ丁度ヴイラ・アレル・シモシヌの御主人が郵便を出しに、オリヴイエまで來てゐたので、こゝまで抱いてつれて來てもらつたわけよ。とてもさん〴〵な目にあつてしまつた。

わたしの勝手な妄想を逞しうしてた間に、妻の方ではこんな目にあつてゐたわけだ。

さういふ調子の生活につかつてる人であつては、いかにダンスの天才でも、子供の教育は辛抱できさうな筈はない。なぜイサドラ・ダンカンが露西亜へ行つたか、なぜ若いコンミユニストをつれてアメリカへわたつたか？　なぜ、アメリカからかへつて、再びロシアへは行かぬのか？　なぜレニングラードへかへつた若いコンミユニストの詩人は自殺して了つたのか？　さうしてなぜイサドラは大酒に自分の健康を害しつゝあるのか？　さういふ幾多の「なぜ」が充分に納得できぬうちは、子供を委託することはさて置いて、イサドラ・ダンカンといふダンスの天才が、果していかなる人物であるのか、人間として、女として、本當に徹底するところまで、果して精進波羅密を行つてる人であるかないか、それさへ俄に斷定はできかねる。ひよつとすると、たゞ過去の夢の中につかつて、ブルジョア社會の頽廢的雰圍氣の中だけで、それから一歩も踏み出さうとはせずに、滅亡にまかせて了つてゐる。このコツトダ・ジユールにはざらにある、あまり香ばしくない女の一人にすぎないのかも知れない。若しさうだとすると、われわれの友達どころか、正反對に、最も嫌ふべき敵であることになる。とにかくイサドラ問題に關しては、もうすこし冷靜に見きはめる必要がある。そこへ妻の氣のついたことは、何よりもまづめでたかつたと云はなければならぬ。

われ〳〵はまたアンニユイに戰ひながら、新しい希望の下に、コツコツと原稿を書くことにせいをだすべき毎日にかへり得たわけだ。

——九月二十五日。

つい日記の方へ手が出る。これが自分の最大弱點だと知りながら、つい出る。丁度、たばこをよさう〳〵と思ひながら、そばにあると、つい一本ぬく。なくなると、つい煙草屋へ買ひにゆきたくなる。二フラン二十五文の節儉が、どうしてもできなくなる——と、それと丁度同じ程度だ。從つて、この日記へ書かれる程度の、わたしの思想も文章も、一本のたばこを吸ふくらゐのところまでしきや及んでゐぬことも明かだ。それにも拘らず、一つしきやない貴い人生の時間をば、心弱くもそんな事のために費して了ふ結果となる。

——なぜこんなに自分といふ人間の心は薄弱にできてしまつてゐるのか？　と思ふ。

——考へなくちやならぬこと、書かなくちやならぬこと、一生懸命にならなければならぬことが、こんなに澤山目のまへにころがつてゐるのに！　と思ふ。

わたしの机の上には、書きかけの、ほんのかきかけたばかりで、しかもそれがもう大分氣に入らなくなつてゐるところの小說が一つある。また、その隣りには、この四月からかゝつて、まだ半分もできてゐない、妻のフランスで出す筈になつてゐる藝者小說の佛語のやりかけがある。さうしてそのどちらもわれ〳〵親子三人の生活をあがなはうとして企てた仕事なのだ。

自分のしようと企てた仕事にセイを出さうとはせずに、かうしたヘラ〳〵した日記にばかり牽きつけられてゆく自分の料簡がどうも自分ながらわからない。

＊　＊

一昨日、九月號の大きな「改造」がついたので、二人でとりあふやうにして讀んだ。いくら外國の讀むものが澤山あつても、それが日本語で書かれてゐないために、どうしてもシツクリ自分の心に觸れて來ない。人類にとつて、この位大きな惱みはないとまで思はゞ、國語の難關にさしかゝつてゐる最中であるやうな氣がしきりにする。

昔、どこかで、ヴイクトル・ユーゴーが、シエークスピーアは偉大でも、どうも自分にはコルネイユ・ラシーンを讀むやうにシツクリゆかない、といふやうな言を吐いたのを見たことがあるが、丁度さうした感がある。

フランスには今でもまだ澤山讀むに足りさうな立派な本があるやうだけれど、さうしてそれをもかたつぱしから讀んでゆきたいとは思つてゐるけれど、年に一度か二度手に入る「改造」を讀む心持とは、どうも大變ちがふやうに思ふ。根本的に全くちがつた讀書であるやうに思ふ。丁度、いくらフランスの生活に慣れても、毎日一度はパンの代りに米の飯を日本流にたいてくはなければ納まらぬのと、よく似た感じだ。もちろん、これは四十年も日本で文藝を愛し日本で米の飯を食ひつけた、すでに第二の天性となつてゐる、長年の習慣からさうなのであらうけれど、フランスで生れ、フランスで育つてゐる子供はいざしらず、わたし等夫婦はさうした習慣からは、決してもう一生ぬけきれる筈はないであらう。

日本にゐたときは、一册の雜誌をば、はじめからしまひまで、廣告にいたるまで、一語ものこさず讀むといふやうな事は、決して一度もなかつたのだが、だん〳〵外國生活が長くなるにつれ、また一生到底日本へかへれさうもないと思はれゝば思はれるほど、ます〳〵日本の文章が戀しくてたまらぬやうに思ふ日が多くなるやうだ。そこでたまに送つてくれる雜誌に、二人とも大騷ぎして武者ぶりつく事もある。

この九月號の「改造」特大號は、殊にいろ〳〵なことをわたしに思はせた。

まづ、島崎さんの「嵐」からはじめた。「破戒」「春」「家」「新生」――さうした島崎さんの人生行路は、とう〳〵こゝまで來たのかと思つた。さうして島崎さんはやつぱりエライと思つた。それから德田さんのを讀む。何だかしらずたゞ非常に嬉しかつた。正宗君のを讀む。むやみと面白かつた。佐藤君のを讀む。どうかして正しい或は本當の生活をつかまうと努力してゐる春夫君の心持がよく分る。德田さんのゝ中にも、この春夫君のゝ中にも、わたしが一寸顏を出してゐたが、春

夫君がわたしに不醜亭といふ名をつけてくれてゐたことが、殊に大へん嬉しく感じられた。それから引きかへして、卷頭の如是閑君の論文をよんだが、同君の頭がだん／＼明晰になつて行くことが、さうしてそれを一層のサエをもつて表現して行かれつゝあることが、どんなに將來の、やがて展開すべき日本のために、どんなに役に立つことがあらうと、ます／＼同君に對する尊敬の念を强めた。

以上の作者はわたしが日本にゐた時、いろ／＼な因縁で、みな親しく交つてゐた人々なのだ。書きそびれたが、佐藤君のと並んで、谷崎君の近作があつたが、それを讀みながら、兩君の間柄が自然のいたづらで妙なことになつてゐることを、しみ／＼悲しく思つた。谷崎君も佐藤君もわたしには後輩に當る友達だが、さうして二人とも稀に見る日本文壇の天才兒たちであると思つて、つねに尊敬措かぬ人々だが、その二人の間にわだかまる『人間性』そのものゝ矛盾と格鬪とを考へると、實際心苦しくてたまらなくなる。

わたしには人生がだん／＼解するに苦しむ甚だむづかしい容易ならぬところであることを感ずる程度が深まつてゆきつゝある。さうしてそれとは反比例に、さうしたどこまで行つてもだん／＼深くなるばかりなる、到底手のつけられさうにない人生に對して、それをかりにもそのまゝに表現して見ようなどと企てた、わたしの半生の目的が、自分ながらずゐぶん思ひあがつた、同時にずゐぶん愚かしい企てゞあつたことが、ひし／＼と反省される。

――九月二十七日。

わたしは自分に打克つことができない。さうして周圍の波動の刻々うちよせるまゝに、出したい首をばその都度／＼にひツこめる。それほどわたしは臆病なのだ。それほどわたしは自分自身の立つ瀨にとりすがる力が弱いのだ。從つて、朝起きると、夜寢るまで、毎日／＼ただいたづらに、周圍に動かされてのみ暮してしまふ。

一口に云へば、あまりに神經質にすぎるのだ。あまりに物事を苦にしすぎるのだ。さうしてそれは決して今はじまつての事ではない。十年も二十年も三十年も前からさうなのだ。つまり、恐らく、それがわたしの本來からの素質だつたものなのであらう。

それが苦しくて、わたしは旅にばかり出てゐた時代があつた。それが苦しくて、飮酒に自分を忘れようと企てた時代もあつた。又深山に籠つて、どうかして心の統一を得ようとして、坐禪のまねごとなどした事もあつた。が、駄目だつた。どうしても駄目だつた。わたしはやつぱり生れたまゝの極端な神經質な臆病者として殘つたゞけだつたのだ。

わたしは周圍の人々に理解されにくいほど、それほど複雜な性格の持主ではないのだ。實は極めて單純な人間にすぎないのだ。併し周圍にゐる人は、わたしがあまりに物事を苦にする人間であるがために、どうして取扱つたらいゝか、結局手のつけようがないことに終るのが常だ。それも食ふに困らぬだけの金がある間は、たゞさうした氣むづかしい人として、そのまゝにホツて置けば、それでよかつたものだ。が、今日では、さうはゆかぬ。わたしは働かなければならぬのだ。一字でも多く、金にかへ得られる文章をば、一枚でも多く書かなければ

ならぬところまで来てゐるのだ。しかもされば、もう一ケ月の後にはわれわれ親子三人が、その日の食料を買ひに出る金もなくならうとしつゝある矢先なのだ。いくら周圍が氣になるからと云つて、いくら氣がちれていけないからと云つて、書かずにゐては、みすみす干乾しになるばかりではないか？　さう思つては、つとめて机へ向つてゐる。さうしてやりかけた仕事をつゞけようとあせる。が、あせればあせるほど、氣がしぶる。考へがちゞこまる。ますます周圍が氣にかゝる、ますます仕事とは關係のないことばかり頭に浮ぶ。

そこで、わたしのやりかけてゐる仕事といふのは、いつたいどういふ仕事かといふと、それは、まだわたしの父母の生きてゐた時代の、小石川區宮下町七番地の家の中で、もがき苦しんでゐたわたし自身をば臆面なく小説の形式の下に、詳細に描寫しつくさうと企てゝゐるそれなのだ。要するに、自傳の一部にすぎないものだから、何も人まねに強ひて小説らしい形式をとつて、フローベル流にデッチあげなくてもよささうなものなのだが、そこがわたしのまだ本當に徹底しきれないところなのだと見えて、やりかけると、どうしても、そのまゝすなほにその時代の光景が、フウワリと、丁度この日記を書くやうな調子で、紙の上に現はれて來てくれないのだ。それでは、過去の記憶を思ひ出すのに骨が折れるのかと云ふと、決してそんなことはない。それはまざまざときのふあつた出來事のやうに目の前に彷彿するのだ。が、たゞその空想を、その如實に眼前を去來する、なまなましい空想をばいざ紙の上へ落さうとする間際になつて、一字一句のクラシカルな文字の約束のために、スッカリその空想の出口が封じられて了ふわけなのだ。つまり、形式が適當でないのであらう。さうしてそれにも拘らずその適當でない形式に拘泥しすぎるからなのであらう。併し今日のわたしの頭ではさうした形式に拘泥しないことがどうも藝術的でないやうな氣がしてゐる。今日いかなる他人の小説を見ても、それぞれに或一定の形式に拘泥してゐない小説といふものは一つもない。もちろん小説は人生をその眞實のまゝに描き出すところに藝術的價値があるのだから、形式はどうでもかまはないやうなものだが、さてその眞實を本當に表現し得られる形式が見出だされないかぎり、眞實は却つてウソになる。小説とは、そこで、要するに、さうした形式を見出だす努力にすぎない事になる。さもなくば、小説はウソを本當らしく書いて見せる、單なる遊戯にすぎなくなる。わたしはどうかしてそこへ落ちて了ひたくないのだ。さうして小説を書かうとすると、過去のあらゆる小説の形式がすぐ現はれて來て、わたし自身の眞實をぬりつぶして了ふのだ。それゆゑわたしはこの世に存在するあらゆる小説の形式を本當に脱却し得た、新しい、わたし自身でつかみ得た、眞實そのまゝの形式にぶつかりたくて、かくもがきとほしてゐるわけなのだ。そこへ行くと、かうした日記は實にウソだ。わたしはこの日記を書くについて、全く形式といふものを無視してゐる。心に浮んで來るほどの事を、そばからどしどしと紙の上へたゝきつけてゐるからだ。それが藝術であらうとなからうと、そんな事は決して顧慮してゐないのだ。眞實と思ふことをば、そのまゝ眞實に紙の上へ記してゐるだけだ。が、しかしこれは小説でない。これは單なる感想録だ。さうして感想録もやはり人間の眞實心を紙の上へぶちまけたものである點に至つては、

少くともわたし自身にとつては、小說と同じだけの價値がある。たゞしそれはわたし自身だけにとつて、同じ價値を生ずる、といふまでの事であつて、要するに單なるわたしの主觀內の沙汰であるにすぎない。然るに、主觀的價値は、それだけではまだ價値をなさない。何となれば、價値はそれが客觀的の地位に立つて、はじめて、存在するものだからだ。從つて、小說と感想とは、わたし自身にとつて同價値だといふことは、それがやはりわたしのこの感想錄內だけの話であつて、社會では決してさうは認めてゐないのだ。小說と感想との間には、社會的には大きな溝渠が設けられてゐる。社會では小說を藝術と認めてゐる。社會では感想を藝術とは認めてゐない。さうして社會ではその作者の眞實心がそのまゝに表現されてゐるものを一番藝術的な藝術と認めてゐる。わたしから見ると、社會の方がどうも矛盾してゐるやうに思ふ。何となれば、小說といふ型にはまつた文章が、必ずしもその作者の眞實心がそのまゝに表現されてゐるとはかぎらないからだ。いや小說は決してその作者の眞實心がそのまゝに表現されてゐないものであると云つた方が本當だ。小說はむしろ讀者の眞實心をばいかに引出さうかともくろんで書かれてゐる文章であると云つた方が適切なやうな氣がする。從つて小說ははじめから商品として製造されてゐるものだ。そこまで考へると、社會の認定は大して矛盾したものでない事が領かれる。何となれば現代の社會はすべてブルジョアジイの組織の下に成立してゐるからだ。ブルジョアジイとは、いふまでもなく、商業取引の目的を中心として組織されてゐる社會のことだ。さうして社會の下にあつては、何よりも第一の要件は、まづ商品としてそのものが價値があるかないかといふ事を考へなければならぬのだ。そこで小說と感想とを考へて見る。なるほど、小說はたしかに商品としては立派に價値がある。さうして感想はほとんど商品としての價値が全くない場合の方が多い。小說と感想との間に橫たはる社會的溝渠は、つまりさうしてつくられたものにすぎぬのだ。又今日藝術といへば、このブルジョア社會の需要に應ずべく、商人が市場へ持ち出しつゝあるところのそれを指して云ふ意味だ。藝術の價値はその市場でさだまる。いかなる批評家も、みなその市場を標準として、公然或は暗默の間に物を云つてゐる。感想だつて同じことだが、殊にこのフランスなどではクレマン・ヴォテルの如き極端な例がある位だから、日本もブルジョアジイとしては、フランスなどよりズッと後れてゐるから、そのうちには、感想も又小說と同程度に、立派に商品となつて了ふ時代も來るであらう。併し今日ではまだその間によほど大きな溝渠がある。つまり、感想も一つの認められたる商品的形式を得ると、それさへもう人間の眞實心をそのまゝには表現され得べき性質のものではなくなつて了ふにきまつてゐる。パスカルのパンセイは決して商品ではなかつたらうが、クレマン・ヴォテルのは、市場へ賣り出す商品として以外には、全く意味のないことばかりしきや表現されてゐない。

あゝ、とう／＼またけふもこんなネゴトを書いて、一日くらして了つた。

＊　＊　＊

どうしたんだか、こん晩はどうしてもねむられない。もう十二時す

ぎだけれど駄目だ。

妻も子供も心地よげによく眠つてゐる。羨ましい。本をよまうかしらんと思ふ。が、本をよむべく神經が何だかすこし興奮しすぎてゐるやうに思ふ。飜譯をやらうかと思ふ。が、それもどうも氣がすゝまぬ。やつぱり、日記をつゞけることにする。どういふものだか、かうした日記さへつけてゐれば、わたしは一番氣がラクなのだ。なぜであらう？

考へて見ると、わたしはほとんど半生の間、自分の愛するものへあてゝ、かうした日記のやうな手紙ばかり書いてくらして來た人間だつたのだ。さうしてさうでない時には、きつと酒をのんで氣焔をあげてゐるか、コツコツ本をよんでゐるか、旅行に出てゐるか、放蕩につかつてゐるか、さもなくば、書けもせぬ小說を書かうとして、むづかしい顏しながら、同じ文句を何遍も〳〵書きなほしてばかりゐるのだ。結局、本を讀んでる時と、こんなやうなヘラ〳〵文章を書いてゐる時だけが、一番自分には氣の置けぬ時だつたのだ。

二十代にはほとんど毎日のやうに妹へあてた手紙ばかり書いてゐた。わたしの心の持つてゆきどころは、その時分それより外になかつたものだからだ。その間には、友人へあてゝもよく書いた。併し妹へあてゝ書くやうには、決して何もかにもぶちまけるやうな手紙は書かなかつたものだ。妹が洋行した後、その時代の手紙が、妹の殘して行つた荷物の中から出て來たが、例の麹町九丁目の家をたゝむ時辻君と二人でみんな燒いて了つた。その時、辻君は「燒くのは惜しいなア」などゝ云つてくれたものだ。一人の妹は洋行し、も一人の妹は嫁に行つてしまつたので、わたしはもう人生に全く用のない人間のやうな氣がしたので、そこで家をたゝんで、放浪生活をはじめる事にしたのだが、その時はまだ、金ができたら、まづアメリカの妹のところへ行かうと思つてゐた。で、その金を待つ間に、今度は人の奧さんに夢中になつてしまひ、その奧さんへあてゝ盛んに又かうした手紙を書いたものだ。ところが、その奧さんは利口な人だつたのですこしはわたしを好いてゐてくれたけれど、生活を犧牲にしてまでいてゐてくれたわけではなかつたので、また一層ヤケの上にヤケを起して、小遣錢さへ手にはいると、忽ち酒と賣女のゐるところへばかり赴いてゐたものだ。そのあらくれた自暴自棄のとばつちりが、とうとう今の妻の懷にまで及ぶことになつたわけだ。で、アメリカへはゆかず、とう〳〵フランスへ來ることになり、それが因緣で、一度かへつた日本をば、またとび出すことになつた始末だ。わたしの一生は、―要するにメチヤ〳〵なのだ。さうしてかうした日記でもつけてゐないと、とても心のやすまるひまはないのだ。とても生きてる瀬がなくなるほど氣がイラ〳〵してたまらなくなるのだ。

どうかして落ちついた氣持になりたいと思ふ。どうかしてフロオベルがエデユカシオンサンチマンタルを書いたやうに落ちつきと根氣とを得たいものだと思ふ。

フロオベルと云へば、麹町の家をたゝむ前、その全著をわざわざフランスからとりよせたが、それに手をつけぬうちに、放浪生活へ這入つてしまつたものだ。さうしてそれは記念のために藤井伯民にやつたが、先生も恐らくヒドイ貧乏の結果、よし賣らぬまでも、まだ讀破す

るだけの餘裕は得なからうと思ふ。それでも併しあんな放埒な生活ばかりしてゐた私の手元にあるよりは、藤井のところへ行つてゐる方がどの位よかつたかしれぬと思ふ。

それからそれといくら考へて見たところではじまらぬ。過去の追憶なンだ、それが藝術的の價値がないかぎり、何の役にも立たぬものだ。すくなくとも、藝術の上で生かしてからでなくては、自分にも他人にも決して何の興味も生ずる筈のないものだ。よさう、よさう。さうしてあしたからみつちり小説の方にセイを出さなくてはいけない。

もう一時だ。ねよう。

――十月一日。

きのふのエーマニテの外國文學欄に、Les Véro: inés de la Poésie Soviétique といふ題をかゝげて、カルル・ラデツクが、ちかごろ自殺したエツセニーンとソボルとの二詩人について、自分の思ふことをばコマ〳〵と書いてゐた。ソヴイエツトの詩人が必ずしもコンミユニストでないために、そこに往々かうした自殺の行はれる原因があることを指摘したものだ。さうしてチエホフの生きてゐた時代と異つて、單に社會の觀察を主とした、傍觀者としての藝術家が、決して安穩に生存をつゞけられるものでないことをば、極力痛言してゐた。

エツセニンもソボルも、わたしはまだ一度も讀んだことはない。併しエツセニンがイサドラ・ダンカンの最後の良人であつたことだけは知つてゐる。さうしてこのラデツクの文章によつて、このソヴイエツト詩人が果していかなる程度のそれであつたかをほゞ推察することができた。

たとへいかなる動機からであるとはいへ、コンミユニズムを信じてゐる詩人が、ネルヴアルのやうに首くゝりをして自殺するといふ事がわたしにはどうもよくのみ込めなかつたが、この文章でさうしたわたしの疑ひはやゝ氷解した。エツセニンはやつぱりコンミユニズムがレーニン、トロツキイのやうには信じきれなかつたものだ。

――Essénine est mort parce qu'il n'avait pas de raison de vivre. Ame du village, il avait perdu tout lien d'avec la campagne, mais n'avait pris nulle racine dans la ville. On ne peut prendre racine dans l'asphalte. Et lui ne connaissait rien à la ville que l'asphalte et le cabaret. Il chantait comme chante un oiseau. Il n'avait pas d'attache avec la société et ce n'est pas pour elle qu'il chantait. Il chantait parce qu'il voulait se réjouir, conquérir de femelles. Et lorsqueà la longue il en a eu assez, il cessa de chanter.

――エツセニンは生存の理由がなくなつたので死んだ。村落の出でありながら、かれは田園との一切の關係を失つた。しかも都會のうちに何等の根をも植ゑつけなかつた。アスフアルトのうちに人は根を植ゑつけることはできぬ。さうしてかれは都會に於いてたゞアスフアルトとキヤバレエとの外には何物をも認めなかつたのだ。かれは鳥の唱ふやうに唱つた。かれは社會と接觸をもたなかつた。さうしてかれの唱つたのは社會のためにではない。自ら喜びたいがために、女性を手に入れたいがために、かれは唱つたのだ。さうしてやがてそれに飽きはてた時に、かれは唱ふことをやめたのだ。

——十月二日。

実はきのふまた銀行から千フランひきだした。銀行にはあともう二千フランしきやないといふ。出して来た千フランでは今月一杯さゝへることは到底むづかしい。さうすると、あとの二千フランで、今年一杯食ひつなぐことは恐らく不可能であらう。

——たべるのに困りさへしなければ……

わたしの叔母は、生きてゐた間、いつも口ぐせのやうに、さう云ひつゞけてゐたものだ。十八九になるまで、生粋の江戸の、[illegible]たるなかで、突然として生活と戦つた経験のある彼女には、生きるについては、まづ食べなければならぬ人生の一大事をば、骨と心に深く刻みつけられてゐたものであらう。

一生をたゞ堅実なる家婦として、叔母は全く無教育の人であつたにも拘らず、叔父の許へ嫁いでから死ぬまで、一度もたべる心配などはせずに済んだ。[illegible]よかい叔父の生活振が、いかなる点から見ても、全く非のうちどころのない、質実に正義と潔白との上に、常に[illegible]してゐたからだ。

若し人間が質実と正義と潔白との上に立つて、それでその日の糧に困るやうな生活に苦しむ事情があるとしたら、それはその人の生活能力がわるいのではない。その人の生存する社会組織がわるいのだ。

叔父夫婦の一生に思ひいたると、わたしは甚だしく慚愧にたへぬ気持が湧く。叔父夫婦のそれとくらべて、わたしの半生の生活態度は、あまりに質実心が欠けすぎてゐた。正義と潔白との念に於いて、わたしはあまりに私欲の念にかられすぎてゐた。

若し質実と正義と潔白との上にその生活法を立てなかつた為に、人間は必ずその日の糧に困る境遇に陥るべき性質のものであつたならば、わたしの今日の境遇は、わたしの陥れる生活法の結果として、まさに当然のことであらねばならぬ。

嘗て国木田独歩が私に向つて、

——月三百円以上の収入がなければ、人間には本なンぞ買つてよめるやうな余裕がでる筈はない。と、一杯機嫌で、例の気焔をあげてゐたことがあつた。

わたしは黙つて、その言葉を叔父に告げて見た。

——その国木田とかいふ人は、きつと乞食になる稽古をしてゐるのだ。と、叔父はにがくしげに答へた。

国木田独歩のやうな天才も、叔父の処世観から見ると、その日常生活はそれよりほかに批評のしようがなかつたものであらう。叔父はまた尾崎紅葉のことについても云つてゐた。紅葉はその[illegible]を書いてゐたほどの時代に、よくわたしの家へ写真をうつしに来たことがあつたさうだ。わたしの叔父は写真師であつた。

——紅葉といふのはまるで太鼓持のやうな男だ。と、それが紅葉その人についての忌憚なき叔父の人物評であつた。紅葉、独歩の文学の理解すべく、叔父の魂にはあまりに文学がなさすぎた。あまりに頑固至極なるひからびきつた徳川末期の形式道徳がこびりついてゐた。

——十月三日。

すばらしく大きな雷雨があつて、急にさむくなつた。秋だ。

また秋だ。しかしクロ・ド・キヤアタの秋はわたしたちには初めてだ。下の家主さんの一族も、けふをかぎりとして、ニースのその本宅の方へ引きあげる。イヴオンヌのともだちが一時に三人までゐなくなることになる。アンリ、マギイ、それからクロデイン。クロデインはイヴオンヌと同年なので、殊に彼女とは仲がよかつた。この二ケ月の間、松の木の下で、橄欖樹の下で、無花果の木の下で、朝から晩まで離れずによく遊んでゐた。そのクロデインがゐなくなるのだ。あしたからイヴオンヌはさぞ淋しいことであらう。

また秋だ。なんべんくりかへした秋であらう。さうしてくりかへすたびごとに、だん／＼意味のふかくなる、だん／＼身にしみる程度の増し來たる、何といふ不可思議微妙の秋であらう。

——死なば秋つゆのひぬまぞおもしろき。

それは紅葉の辭世の句だ。有島さんも、もう一度秋を見てから死にたい、と云つたさうだ。

わたしは死にたくない。ます／＼生きて働きたい。眞實と正義と潔白との上に立つて、さし迫る饑餓と悪戰苦鬪しつゝ、力のかぎり働きたい。

警官優遇論

馬場恒吾

警察に居る人は叫ぶ。
「警官は良民を愛す、だから良民は警官を愛すべきだ」
と。其理論から云へば、警察を嫌ふものは良民でないと云ふ事になる。此れは理屈である。其理屈の何處に缺陷があるかは、一寸判り憎いけれども、世の中が此理屈通りなつてゐない事だけは事實だ。誰れしも餘り警官を好まない。其心理狀態は隨分世間一般に擴がってゐる。其證據もある。

西洋の新聞では、種がないときには動物園に行けと云ふ諺がある。新聞の種切れのとき、動物園に行つて、色々の動物の樣子を見て、罪のない記事を一段か二段かく。それがヒユーマン・インテレストの記事として讀者は存外に請る。日本では種のないときに、何か警察のあら探しを書く。すると讀者は共鳴する。新聞で、警官橫暴の實例と云つたやうな題で、讀者から投書を募ると、投書が日本全國から來る。さう面白くもない投書でも、それを新聞に出すと皆んな喜んで讀む。これは警察に對して一般世間が何ういふ感情を懷いてゐるかを示すものだ。

私個人としてはかうした感情が、小兒の時から根強く心の中に植え付けられた。學校で習つてゐた漢籍の中に、地面に畫いた刑吏にでも、人は近よる事を好まぬとあつた。小兒心にも私は成程と思つた。

私は十二の時にから下宿にやられた。それは高等小學が一里半もあるので、自分の家から通ひ切れなかつたからである。まだ家にゐるときは祖母に懷かれて寢てゐたのであるから、知らない他人の家に下宿する事は淋しかつた。それに私の神經を最も苦るしめたことは、田舍家である所の其下宿の土間から上る二階に巡査が下宿してゐた事であつたがそれが何んとなく厭でたまらなかつた。巡査は別に惡い人でなかつた。只巡査であると云ふ事が、私の頭に強い恐怖觀念を起さした。私は土曜日には學校から直ぐに自分の家に歸り、月曜の朝下宿にはよらずに直ぐ學校に行く習慣にしてゐた。そして月曜の晩方下宿に歸る。雨など降つて淋しい日暮れ方になると、今朝出て來た自分の家が戀しくて堪らない。そして軒端に立つて、しく／＼泣いてゐた。下宿の神さんが心配して、

「何か悲しうて泣くんです。そんなに泣くと、二階のお巡りさんに叱

られますよ」

と云つた。其お巡りさんが同じ下宿に居ると云ふ事が、厭なのだとは小児の私にも云へなかつた。私は泣くのを見られたので、極まり惡いのを我慢して夕食の膳に付くのであつたが、其間も始終二階の巡査に睨まれてゐるやうな氣持ちがした。

東京の或有力なる警察官は、私に向つて、

『どうせ警察は人民に憎まれる。其覺悟でゐなければ、立派な仕事は出來ぬ』

と云つた。併し警官は本質的に人民に憎まれなければならぬものであらうか。私は此點に疑問を有つてゐる。

私が紐育に居るときはよく酒を飲んだ。或夜ホテルに寄つて十二時過ぎに往來に出た。誰れでも知つてゐる如く、紐育では男は蟇口と云ふものを持たぬ。銀貨も紙幣もゴツタ混せにヅボンのポケツトに詰込んで居る。私は其晩大分金を費つたやうに思つたから、往來に出ると、ポケツトから金を出して、いくら殘つてゐるか、街燈の下で勘定してゐた。すると暗がりから大きな巡査が近よつて來て

『君、金を盗まれたかね』

ときく。

『いや、盗まれはせんが、大分費つたから』

『それならよいが、此邊は質のよくない所だから用心しないといけないよ』

と云ふ。それから十分ばかり、其質のよくないと云ふ無駄話をして分れた。米國の巡査はきまつて大男の見るから人のよささうな連中ばかりである。劍は有つてゐない。革の紐の付いた一尺ばかりの棒を有つてゐる。それをぶら〳〵させながら、悠然と往來を歩いてゐる。だから少しも恐くはなくて、寧ろ愛嬌がある。私は前に云つた一寸した機會で、巡査を可愛いものだと思つた。日本でもさうした感情で人民と警官の接觸が出來たら、どんなに此社會の空氣がよくなるであらうかと考へられる。

紐育の警察がさうした平民的な氣分でゐられるのは、それが合衆國政府の警察ではなくて、紐育の自治的警察であるからでもあらう。市長選擧と一緒に警察部長が市民に依つて選擧される。だから警察官と云つても、平生國家の權力を笠に着て、市民に向つて、さう高飛車に出る譯に行かぬ。尤もかうした制度にも弊害はある。例の市政腐敗の源泉として有名なタマニー・ホールが警察と組んで、酒屋、賭博宿、淫賣窟などから賄賂を絞る。其報酬としてそれらに保護を與へるなどと云ふ事が間斷な噂の種になる。尤もさうした弊害は國家警察にだつて絶無とは云へない。

それは餘談であるが、紐育の警察が市民に親しみを有つてゐる原因は、それが市民の警察であるからばかりではない。それよりも重要なる原因は矢張警官、殊に巡査階級の生活が有福なる事であらう。彼等の收入は大抵一ヶ月百五十弗（三百圓）位になる。米國は物價が高いと云ふが生活必要品は日本よりは安い。殊に大戰中日本が成金になつて以來、日本の物價は世界無比に騰貴した、それ故に同じ額の金を有つて、日本と米國と比較したら、決して米國が暮しにくいとは云へぬ。尤も米國では一般の生活程度が高い。故に巡査百五十弗の月收で決し

て上流の生活をしてゐるとは云へないが、併し巡査は一般に有福であると他の市民から羨まれてゐる。電車の車掌運轉手などから見ると巡査は上流階級になつてゐる。かうして、巡査は懐が暖かであるが故に、自然何時でもニコ〳〵してゐて、あのやうに丸々と肥つてゐるのではないかと思はれる。

之に反して日本の巡査は惠まれざる生活の標本となつてゐる。東京府の警察を司る警視廳丈けに見ても、毎月百人位の新しき巡査が作られる。即ち一年には千二百人の新しき巡査が出來る譯である。然るに約一萬二千人の巡査が別に増加もしない所を見るに、新に巡査になる丈けの人數は、種々なる事情の下に退職しつゝある。即ち人員の一割は毎年新陳代謝する。それは巡査として生活が如何に安定せざるかを示す。その事情が必ずしも官廳が八ヶ間敷くて、無能なものをどし〳〵免職するからではなく、寧ろ巡査の方が生活の不滿足から他に今少しでも報酬のよい職業に轉じたいと願ふからである。全ての職業にあぶれたものが巡査にでもならうかと志す。その人々は機會さへあらば、他の職業に轉ずる。それが巡査の新陳代謝が急なる原因となつてゐる。警視廳管下の巡査の初任給は月四十五圓である。若しそれが五年間一日も缺勤する事なく勤めれば十圓の精勤加俸が付く。五年間一日も缺勤しない。それが奇蹟か天祐でなければ殆んど不可能である事は想像に難くない。四十五圓に十圓の精勤加俸と云へば、可なり魅惑的な獎勵法であるが、五年間一日も缺勤しないと云ふ條件は多くの巡査志願者に幻滅を與へるであらう。

巡査になるには先づ警察練習所で二ヶ月（中學、專門學校程度の卒業）若しくは三ヶ月の教育を受けた後に巡査として勤める。此練習所に居る間は寄宿に入れられて月三十二圓の手當を與へられる。その内から、巡査になつて後に穿く靴代、食料などを引かれて、手取り五圓になる。月五圓の小遣ひで二ヶ月を送る。練習所で儉約の美德を養成されると云へば云へないことはない。

それから初給四十五圓の巡査になる。此外に賄料、宿料、被服料など十圓餘りのものを支給せられる。被服料二圓七十六錢は、洋服丈けは官から與へられるので手袋シヤツ、靴下、そんなものを買ふ金である。洋服は冬服一着、夏服二着を與へられる。それを二年着よと云ふのである。出來合の服である上に、巡査は寒い夜を吹き晒しに立つ職責であるが故に、下にシヤツ四五枚を重ねるのさへある。だから身體がふくれて、此所彼所綻びる。それを男の不器用な手で縫つたのも見へる。笑ふ勿れ。彼等は二ヶ年待たなければ新しき服を貰ふ譯に行かぬから、其不器用な縫目は寧ろ敬虔の眼を以て見るべきであるまいか。

巡査になると月給手當合計五十七圓三十六錢を貰へる。其内五圓は強制貯金として取られる。六ヶ月以上になると此貯金の三分の一迄は借りられる事になつてゐる。三分の一は誰れでも借りる。或は三分の二若しくは全額をも、何んとかかんとか云つて借りるものさへある。借りなければ喰つて行けない社會だと彼等は述懷する。

獨身者ならば大抵巡査合宿所に行く。合宿所は所に依つて多少の相違はあるが、宿料、賄料として十八圓乃至二十二三圓を支拂はしめる。殘りが三十圓になる。それを自分は一文も費はずして、故郷の父

兒に送つたり、弟妹を教育したり、或は貯金するなど、特別に心掛けのよい者がある。さうした特別の事情のないもので、そして獨身で合宿所に居るものは割合のんきに生活しうるやうになつてゐる。

それが妻帶して家庭を有つ者になると全然趣きを異にする。巡査は固より産兒制限論者ではない。又其實行をするものでない。夫婦に小兒の二三人ある場合は普通で、非常に澤山小兒を有つた者が多い。尤も巡査當人以外に、家族一人增す每に三圓の手當を與へられる。人一人を月三圓で養つて行けるとは如何なる勘定から割り出されたかは知らぬが、巡査はそれで妻子を養つてゐる。それ故に彼等の妻は内職をする。それも上品な内職に限つて許される。併し上品な内職に限つて收入が少ない。

兎も角も五十圓で一家族が東京で生活する爲めには家賃十五圓以上を出す事は困難である。だから巡査の多くは市外に住む。六疊と二疊で十五圓内外の長屋に住む。尤も制服を着てゐる巡査は無賃で電車に乘る事が出來る故其方の心配はない。何か事件があつて、電車がなくなる時間になると、市外まで歩いてかへらねばならぬ。

家賃の問題にかへるが、市内に住んで巡査は三十圓前後の家賃の家を借りて、二階を他人に貸して、家賃の助けにする。二階六疊を十五圓で貸しておけば、自分等は矢張十五圓の家賃で濟む勘定になる。其代りに、下の四疊半の茶の間二疊の玄關に夫婦と小供四人位がごた／＼に寢てゐる場合を目擊する。

田舍の工場勞働者は月六十圓位を取る。東京の電車の車掌運轉手ならば八十圓以上になる。それに比して、巡査の手取り五十圓では滿足な生活が出來さうな筈がない。東京に於ける巡査が最下級の生活程度に追詰められてゐる現狀を見れば、誰れでもこれではならぬと思はずには居られない。

巡査にはボーナスをやる豫算がない。定員の缺けた俸給を皆んなのボーナスに分ける。初めは各警察署でさうしてゐたが、事故の多い署では定員一杯に人を容れて居る。從つて其署に勤めてゐるものは、年中忙がしい上にボーナスは貰へない。これではいかんと云ふので、今は警視廳に月給の餘りを集めて各署に分ける事にした。年一回五十圓位のボーナスになる。聊か心細からざるを得ない。

それでも、まだ勤務がらくであるならば、月給は少なくとも我慢すると云ふ事もある。然るに巡査の勤務は殆んど人力の堪へ得る限りを要求してゐると云つてよい。普通の場合として、巡査の日程は、日勤、晝夜勤務、公休と云ふ順序を繰り返す。初め一日は朝九時（夏期は八時）から五時、二日目は朝九時から、翌朝九時迄、そして其日は休んで、次ぎが日勤となる。即ち普通でも三日間に三十二時間、即ち一日の十一時間弱の勞働になる。然るに此普通の勤務時間で濟む場合は殆んどない。巡察とか非常召集とか、他署への應援とかで、寧日なく呼出される。御大喪當時には三十六時間ぶつ通して立番をしてゐた者さへある。大抵の巡査神經衰弱はになつてゐるとの批評も、全く根據のない事でもあるまい。

巡査が最も苦勞に感ずるのは交番の立番である。交番詰めは三人一組になつてゐる。規則として交番は決して明けられない。だから一人は必ず交番の前に立つ。一人は其管内を警邏に廻る。一人は休憩所に

居る。巡査も報告書の作製や、書類の整理で休む暇はない。それが一時間交代になる。例へば甲と云ふ巡査は一時間立番をする。次ぎの一時間は警邏に廻る。次ぎの一時間は休憩所に入ると云ふ順序になる。それを二十四時間繰り返すのである。三人の中一人が缺勤すると、一時間も休憩せずに、二十四時間勤めるのである。

晝の中は左程でもない。併し夜の立番は最もつらいと云ふ述懐を聞く。退屈する、睡くなる。殊に寒い時は足の先きが冷へ切つて痛くなる。だから交番の中で驅け足をしてゐる巡査の滑稽な姿を見る事がある。近頃出來てゐる六角塔の格恰をしてゐる交番は殊に慘めである。あれは奥行きが淺いから雨が吹き込んで、服がビショぬれになる。或交番では地面が低いが爲めに、水が交番の中に流れ込んで、巡査は水の中に立つてゐねばならぬ。足を水浸しにせぬ爲めに、交番の內側の棧に雨肱を掛けて器械體操流に宙乘りをして一時間を過ごした例がある。

交番に立番をする巡査が學校がへりの小兒に取巻かれて、立話しをしてゐるのを見ることがある。交番の立番が如何に苦るしいものであるかを知つてゐる私は、それを見ると涙ぐましい心持ちになる。何となれば、巡査は民衆からは餘りに親しまれない。そして親まれないと云ふ事を自覺してゐる。それが故に無邪氣な小兒を相手に話しをする事が交番に立ちつくす退屈な時の唯一の慰みである。其心持ちには同情せずには居られない。

尤も罪は巡査の服裝が故らにいかめしく作られてゐる所にもある。黒い服に赤い筋は如何にも惡い印象を起さしめる色だ。もし肩章の赤い筋を除いたならば、全體の印象が軟かになるであらう。それに金ぼたんに、白い劍を加へると益々服裝の險惡が著るしくなる。此服裝に對しても、一般の人民は漠然たる嫌惡の情を起す。只小兒は此服裝のいかめしき城壁を見ずして、面白い、若しくは優しいおぢさんたる巡査を見る。それ故に顏なじみになり、遊友達になる。小兒と遊ぶ事は餘り極端になりさへせねば警察でも八ヶ間敷云はぬ。

巡査がせめてそれ丈けの樂みを有つ事を聞くとき、吾々は彼等に對して云ひ難いなつかしみを感ずるのである。

立番の苦るしみは寒さが一番こたへるといふ。それには交番の設備に改善すべき點が多い。交番の中に火鉢を入れる事は禁ぜられてゐるそれ故に凍へてゐる手や足を溫める方法がない。それは例の六角塔の如きでは殊に甚だしい。交番によつては、立番する所と休憩所とが一緖になつてゐる所がある。そんな所では、交番と休憩所の堺目に火鉢を置けば、立番する者も幾分か火の氣の恩惠に預る事が出來る。交番と休憩所の距離が遠ければ遠いほど、巡査は苦しまなければならぬ。例へば立番してゐるときに、其管內から何か事變の訴へがある。立番してゐるものは交番を明ける譯に行かぬから、休憩所の巡査を起して事故のあつた所に往かしめる。（警察署へ電話をかける暇がない場合には、署から應援を求める）。休憩所が遠い時は、そんな場合に非常の不便を感じる。巡査の能率を上げる上から云つても交番の改築は必要である。

一時間の立番に續いて、一時間の警邏がある。受持區域の火事、泥棒、賭博其他の事故に目を配つて步くのである。それが相當の冒險氣

分で出掛けなければならぬ事は想像に難くない。賭博などは、それを發見しても、一度交番に歸つて應援を連れて、更めて押し込む時間がある。しかし盜賊の場合には相手の人數が多數である危險があつても、發見次第、こちらは單身で飛込まなければならぬ。さうした場合に巡査が身を犧牲に供した事實は屢々世人の目に觸れる。それは巡査の職務であるから仕方がないと云へばそれ迄であるが、吾々が蒲團の中に寢てゐる間に、巡査は斷へず、警戒して歩いてゐると云ふ事は、記憶に値する。

かうした二十四時間勤務は巡査の當然の職務として月給以外の手當は貰はれぬ。此勤務以外に、所謂非番と稱する巡査の休日に、巡査は巡察の爲めに一月に幾度か呼び出される。巡察とは夜半から夜明迄特別の警戒の爲めに、張り番、若しくは密行の仕事をするのである。それには別の手當がある。三時間巡察する場合には三十錢、六時間の場合は四拾錢貰へる。危險と疲勞の代價としては此金額は餘りに些少である。併しそんな金は要らぬから、巡察は御免蒙ると云ひ得る自由は巡査に與へられてゐない。

巡査は精勤してさへ居れば大抵二年に一度位昇給する。一度の昇給が二圓である。だから巡査になつてから五六年すれば四拾五圓の月給が五拾圓にはなる。併し五拾圓以上は特別の事情がなければ滅多に昇給されない。だから巡査の收入は手當を入れて六拾圓止りと云ふ事になる、それ以上の收入の道があらば他に轉職したいと云ふのが彼等の常識になつてゐる。

例へば警視廳に於ける自動車の運轉手は巡査である。所で彼等は普通運轉手としての免狀を與へられてゐない。これは陸軍の自動車隊の運轉手が免狀なしに、自動車を運轉してゐる例もあり、又運轉手としての技量にも缺けた所がないのであるから、別に規則的に咎める必要はないやうであるが、併し其免狀を與へない事情は巡査の待遇が他に比較してよくない事を物語つてゐる。免狀を與へれば、巡査は巡査を罷めて、普通の運轉手として市中に出る。さうすれば收入が非常に增す事が確かである。だから警視廳は巡査運轉手の足止め策として免狀を出さぬのだと云はれてゐる。

交番勤務の巡査が神經を刺激するのは巡査部長の監視である。巡査部長の役目は巡査が忠實に其務めを行つてゐるや否やを監督するにある。交番を明けずに、其所に立つてゐるや否や。警邏に時間通り廻つて來るや否や。それが爲めに巡査部長は密行巡査の如く、蔭にかくれて巡査の勤怠を注意してゐないとも限らない。警察關係の新聞には巡査の書いたらしい投書で、部長は拔き足して交番を覗きに來るよりは、寧ろ泥棒でも捉まへる方に熱心したらよからうと云ふやうな事が載せてある。尤もそのやうな事をする部長も、又それに對して反感を懷く巡査も、多數ではなく、寧ろ少數の例外であらう。併し巡査部長にして見れば、部下の巡査から始末書を取つたり、或はその譴責、賞與に値する行爲を發見する事が、自分の働き振りを見せる事になり、繼いては出世の緒にもなると思ふものもある。官僚的氣分の濃厚なる警察にさう云ふ空氣の漂ふ事は人の罪と云ふよりは寧ろ制度の罪と云ふべきものであらう。

巡査部長を三年すれば倉が立つと云ふものがある。だが巡査部長の

俸給と云つても大抵は巡査の俸給に比して十圓位多いのみである。生活の困難なる事は巡査と大差はない、併し巡査部長になれば、社會の秘密をよく知る。殊に資本家、實業家などの弱點をも知つてゐる場合がある。在職中にそれらの知識を利用するものはあるまい。併し警察官を罷めた後に、實業其他の方面で、相當の地位を得た者はある。それは彼等が知つてゐる事で脅迫がましい事をしたと云ふのでなく、さうした弱點を握られてゐる資本家、實業家が自發的に適當な處置を取る爲めであらう。併しこんなのは例外であつて多くの巡査部長はよく勤めて警部補、警部と進級する事を唯一の希望とする。高級巡査部長の月給は九十圓迄上る。それが警部補になるときは七拾二圓位に下落する。それでも巡査部長から警部補になる事は立身出世である。警部補、警部と云つても物質的には惠まれてゐない。其點から云へば警察署長以下は誰れも物質的には惠まれてゐない。東京府下の郡部の署長で百圓少々の俸給を貰つてゐるものは、署長としての交際費や體面費が嵩むので、到底喰つて行けないとこぼすものがある。其權力の大なるに比して、其懐の淋しさよ。其所に社會的の問題がある。

二三年前、三重縣の縣會で警官の俸給增加の議論があつたとき、或縣會議員は小學校教員と巡査は生活困難の爲めに思想が惡化して國を危くする惧れがあると叫んだ。併しそれは小學教員に限らない。東京で急進的思想の淵源と云はれる大學では、教授と講師に對する待遇が極端に薄い。それが爲めに其大學の思想が極端に走るのだと云ふ者がある。巡査の薄給は已に述べた。併し日本の警察は、服務規律が嚴格に行はれてゐる所であるから、表面に思想惡化の形跡は認められない。固より左傾などは思ひもよらぬ所である。只生活の苦しさは誰れも感じるのも同じである。警官だと云つて特別に其方面に無神經であり得ない。彼等が生活苦からイラ／＼する氣分は、それが學校教師の如く思想的色彩を濃くする代りに、其イラ／＼する心が人民に對する當りを强くする。それが一般社會に陰鬱なる影を映ずる結果になる。

これ迄は重に制服を着た警官の事を云つたが、警官には私服を着てゐる私服なるものがある。所謂刑事、高等係り、特高などで、これは官服を給せられざる代りに月五圓の服代を與へられる。一年に一着の背廣が買へる譯だ。其外の待遇は巡査と大體同じである。

私が新聞記者であつた頃、よく高等係りに訪問された。何々の會合へは誰れが出席して何んな事を相談したかと云ふ質問である。初めは餘りに取り合はなかつたが、段々懇意になつて、私は

『なんだつて、そんな新聞に出る位の事を聞き度がるのだ。別に秘密の種が取れる筈がないのに、僕らに聞く必要はないではないか』

と云つた。すると高等係りの述懐があつた。高等係りは普通の政治種を取つて歩く點に於て、新聞社の政治記者と少しも變らぬ。只新聞記者は政治家に向つて堂々と種を聞く。それが警察の高等係りと云へば何となく厭がられる氣持ちがする。殊に會合が一流の料理屋などで開かれるとき、新聞記者は別室會費と云つて社から五圓位の會費を貰つて、同じ料理屋の別室で、酒を飲みながら會合の終りを待つ。そして、話を聞くと社の自動車で歸つて行く。電車がなくなれば、自分の家まで自動車で歸る。それに引きかへて、警察の高等係りは別室會費がないから、料理屋の軒端に立つてゐなければならず、自動車がない

から、夜おそくなると、署へも、自宅へも歩かねばならぬ。そして翌日の新聞に出る記事位の報告を署にして置かなければ署長から無能だとか、怠慢だとか云はれる。それ故に記者諸君の跡を追つて、何か聞き出さうとすのも已むを得ないと云つた。

この述懐を聞いた後は、私は警察の高等係りには新聞に出す位の記事ならば、大抵正直に知らせる事にした。一體警察が高等係りなどと稱して、普通の政治的新聞種を集める必要が何處にあるか。或は全然不必要だとも云へる。併し、上官の命令に依つて、種を取りに出される高等係りは、新聞記者と同じ種取りの苦心を有つ。殊に費用と車馬賃なしの種取りは苦心の上に、屈辱の感じを受けねばならぬ。私は他人に迷惑にならぬ限り、そして自分の勞力で濟む限り、かうした警察の高等係りには出來る丈け親切にすべきものだと心掛けてゐた。

かうした高等係りとして老ひて行く人々がある。或署の高等係りで四十年勤續したと云ふので警視總監から特別賞與を貰つたと云ふ新聞記事が出た。其男は私の知つてゐる人であつた。其記事の出た後偶然に電車の中で會つた。吊り革にぶらさがつて、私は小聲で

「特別賞與つて、いくら位です」

「三十五圓」

「四十年で三十五圓?」

私はしばらく二の句が次げなかつた。

かうして警察の會計が一方では極めて貧弱に見へるが、他方には警視總監は機密費として東京府から一年拾五萬圓を取つてゐる。それが機密費である以上、何の方面に費はれてゐるか、それを局外から判斷することは困難である。普通の常識から云へば、警察の機密費は新聞社の編輯局費用と同じく、種取り中心に費はれさうなものである。それも政治種を取る爲めでなく、強盜、殺人の如き犯罪捜索の爲めに使用して、重大犯人の行衛不明の數を少なくすべきである。然るに現在の實際に於ては、警視總監は政務官であつて、内閣と共に更迭する習慣になつてゐる。歷代の總監は内閣の高等政治に關與する方が忙がしくて、純粹の警察事務を顧みる暇がない狀態である。だから總監幕下の各部長は各部に割據し各部の連絡が充分に行はれない傾きがある。それはまだ忍ぶべしとしても、總監の金と時間が貴族院懷柔と云つたやうな内閣の高等政策方面の爲めに頭に費やされる事があつては、それこそ警察の危機とでも云ふべき事態が生れる。それよりは寧ろ倫敦の警視總監が政治に超然としてゐる爲めに、十九年の勤續してゐた例を學ぶべきである。

警察が力の大部分を政治の爲めに費やすと云ふ事が本當の警察の任務を盡くす方面の力を削ぐ事になる。人も金も政治的活動の爲めに取られるから、普通の巡査や刑事の待遇をよくしやうと思つても出來ない相談になる。それのみならず、警察が政治上の爭ひで政府の味方となる爲めに、警察の方でも人民を敵視し、人民の方でも警察を憎む感情を懷く事になる。警察本來の任務はそれが憲法第九條の「公共の安寧秩序を保持する爲めに發せられる命令を行ふにある。だから政府と國民の間に公平な立場になつて、社會の安寧秩序を維持する事を勤むべきだ。社會が進歩すれば暴力暴行の代りに合法、合理が支配する。其暴力、暴行を壓さへて、合法、合理が通るやうにするのが警察の根本

的な任務でなければならぬ。それが政府若しくは政黨、政派の御用閥き化する時に警察は邪道に陷るのである。

日本では警察が政治の爲めに昔から惡用せられた。大抵の選擧干渉は警察の惡用を意味してゐる。松方内閣の大干渉のとき、後に島田三郎氏が議會で演説した所によると、福島縣の選擧では近藤と云ふ巡査が民黨の白坂と云ふ男を斬殺した。『而も其疵は後疵である。其首を半分斬放つてある。』斬り殺された者の同行者は監獄に入れられ、斬つた巡査の方は保釋になつてゐた。同じ選擧の時に警察用紙に書いて出された命令の中に『玆に連記してある所の暴人は、如何なる者と雖も決して拘引する勿れ、如何となれば是は政府の意中の人を擧ぐる所の暴漢なればなり』とあつた。今日になつてはそんな暴漢保護の命令を出す警察當局者はないだらうと思ふが、警察が人民の保安と云ふ事の外に、政府の政治的御用を勤めねばならぬと云ふ觀念は、現在に存在し且つ實行されつゝある。

今でも警察が選擧に際して政府に利用される例は無限に存在する。選擧の報告を政府黨の爲めに集めることは勿論、選擧取締規則を勵行すると云つて、反對黨には嚴格にし、政府黨には寛大にする。地方に行くと警官の暗示、默示に依つて投票が移動するほど、それほど選擧民の程度が低い所もある。併し同時に警察官が選擧に對する態度が段々に變化して、必ずしも政府黨を助けぬと云ふ傾向も見へる。尤も警察當局として、露骨に反對黨に好意を示す場合には、選擧最中でも轉任、免職の憂き目を見ねばならぬ故、さう露骨には行動出來ぬが、併し今の政府は永く持つまい。次ぎの内閣は反對黨になると云ふ見込みが付く場合には、警察官としては、餘り壽命の長くない現在の政府に忠勤を勵んだ爲めに、内閣が更迭して早速免職になる憂目を見るやうな事はし度くない。それよりは勇敢に反對黨の候補者に好意を示すか或は少くとも純粹に公平な態度で選擧に臨む。さうした傾向は大正十三年の清浦内閣が行つた選擧にも現はれた。清浦内閣が短命であるべき事は誰れが目にも映じた所であるから、警察當局者は自衞的に公平な立場を守つた。警官何を好んで、政治に干渉せんやで、彼等は寧ろ自分らの地位の安全を第一義としてゐる。それを無理に政黨政派的に利用せんとするのは政治家の罪が深いのである。

封建國家から民衆國家に移る過渡期に於て、一時警察國家が現はれる事は各國共に經驗する所である。其警察國家時代に於ては警察が政府の御用を勤めて人民を壓迫する以外に能事なきもの丶如き觀を呈する。日本の警察は段々改善されては行つたが、矢張其勢力と時間と金を政府の政治的御用の爲めに浪費しつゝある。そしてさうした餘計な忠勤を勵む爲めに、人民に反感を起されてゐる實狀である。

總括して見て、日本の警察の素質は決して惡くない。其清廉は世界的に有名である。元より少數の例外はあらうけれども、大多數の警官は上官の監視と民衆の反感を忍びながら、危險と過勞の伴ふ勤務をしてゐる。そして普通の勞働者以下の收入であつても彼等は所謂思想惡化の形跡はない。英國の巡査は勞働組合を作らんとして禁ぜられたが、日本ではそれは夢想だもされない事である。個人々々と話して見れば、警視も、警部も、巡査も、大抵は善良なる人々である。彼等が**時に民衆から憎惡の眼を以て見られるのは、彼等自身の罪ではなくし**

て、日本には頑固な守舊派と、利己的な政黨政治家が居つて彼等を濫用するからである。若し日本の警察をさうした守舊派と政治家の指揮命令から解放するならば、彼等は名實共に人民の味方となつて、人民と警官の間が今少しく人間味の豐かなものになり得るのである。同時に亦、政治的に費やされる無駄な費用を、普通警察事務に向ける事に依つて、彼等の能率をも増し彼等の生活も幾分か餘裕を生ずるのである。今日の警官がよく薄給に甘んじて、よく困難な職務に忍耐してゐるからと云つて、何日迄もそれを見捨てゝ置くのは吾々の利益でもなく、吾々の良心の許す所でもない。二十四時間交番に立ち續けてゐた巡査に强盜と格鬪して勝てと云つてもそれは無理な注文だ。六時間四十五錢で眞夜中を巡察する警官があるのに、吾々が警官と云へば憎惡の眼を以て見ることを不合理であるやうに思はれる。物質的には今少しく彼等の給料を増し、精神的には一般人民が今少しく彼等に好感を懷いてやらねば、吾々が警官の好意と努力と生活費を搾取してゐる立場になる。

尤も警官優遇論が世間の共鳴を得る爲めには、警察の方でも態度を改める必要がある。即ち精神的に警察國家の思想を捨てる事だ。警察國家の時代には、權力者が警察の力のみで國を治めんとする。それは人民は敵であるとの先入觀念から出發してゐる行動である。其結果が警察は猜疑と詮索の目で民衆を見る、只民衆を敵視するのみならず、時には部下をも敵視する。巡査部長が巡査の行動に探偵的の眼を向けるのが其例である。此氣分が警察内部を支配し、其結果として警察が人民に對する態度を支配してゐる間は、百の警察官優遇論も世間の同情を惹かない。警察は國家の爲めに人民を壓制する機關でなく、人民の爲めに社會の安寧秩序を維持する機關だと、から精神を入れ換へる事に依つて、警官優遇論が初めて實現の緒に就くのである。

資本主義末期の研究

（高橋龜吉著）之までこの種の研究はロシア革命の最高峰を中心にほとんど前後五十年間にわたつて發表されて來たがその多くが資本主義そのものの凝視にあらずして社會主義の理想郷を强調せんがための手段的副産的説明であつた、著者の事業はこれに反し資本主義の現狀そのものの研究であつて「事實」の生む「理論」の力强さを本書のうちに躍動せしめてゐるのは愉快である。資本主義末期の研究について、資本主義末期の一般的研究、資本主義末期における社會現象の研究、資本主義末期における農村經濟の研究、資本主義末期と日本經濟の研究、資本主義末期に於ける英國經濟の研究をその内容とする。（四六判五二六頁、二圓五十錢東京麴町内幸町一の三改造社）

ジューク一族其他

駒井卓

ジューク

リチャード・ダグデール（Richard Dugdale 1841—1883）は人道主義者であつた。父に早く死に別れたので僅かに夜學に通つたぎりで教育らしい教育を受けずにしまつたが、生れつきの社會問題に對する興味から、獨學の傍ら色々の慈善事業とか公衆衛生問題とかに關係して相當に人から重んぜられて居た。殊に監獄改良事業に一番深入りして二十七歳の時には紐育の監獄協會の委員に撰まれた。此監獄協會の仕事は一には服役中の囚人の處遇及衛生を改める事と、一は免囚になつてから彼等に種々の助力を與へて生業を得させるのであつた。それでダグデールも屢々刑務所を訪ねて囚人に會つたり等して其身の上を聞いたりするのを喜びとして居た。一八七四年の夏彼は紐育州内の十三の刑務所を視察する事を協會から依囑せられ、州内の刑務所を順番に訪ねて歩いて居た。最初數ヶ所の刑務所を訪ねた間は別に變つた事に出會はさなかつたが、終に乙と云ふ地方の刑務所を訪うた時、こゝに六人の囚人が居てそれが互に血族のあるのにぶつかつた。これが彼の名を不朽に傳へた有名な著書「ジューク一族」"The Jukes"に載せられた彼の驚くべき研究の緒口であつた。彼の此調査の發端に述べて居る處によると、此六人の囚人の中一番年老いた男は當時五十五歳で盗贓品の收受を謀つた未決囚であつた。そして其姪の十八になるのが父の犯罪の證人に引上げられて居た。それから此姪の叔父の四十二になるのは強盗の重罪犯、それから此男の妻の私生女の十二になるのは浮浪性のために感化院に送られる處であつた。尚此四人と血族のある兄弟二人の不良少年が居たが、其兄は十九、弟は十四で、二人でよその小供を高い處から突き落して瀕死の重傷を負はせた科で重罪未決に問はれて居た。

前に述べた通り此等六人の刑囚には血のつゞきがあつた。それからダグデールが調べて見ると此一族の名は其地方では當時も已に非常に有名で、州民に鳴り響いて居た。彼等一族の名は指彈さるべき名と相場がきまつて居た。

研究好きなダグデールは此事實に深い興味を覺えて、それからそれへと此一家の調査を進めていつた。そうすると間もなくちやうど芋の蔓を手繰るやうに後から後へと驚くべき犯罪者の一大家族が彼の前に現はれた。即ち前の六人の親族の者で年齢十五より七十五までの男が外

に二十九人見附かつたが・其中十七人は現に服役中の犯罪者で、又十五人は前科者であつた。そして彼等の犯罪は强盜殺人强姦竊盜毆打殺傷等種々あつた。ダグデールは此結果に大に力を得て更に大規模に此家系を調査する事に決心した。幸にして其地方に永く醫者をして居た八十四歳の老人を始め故老たちの助力を得て、終に七代に亘り七百餘人より成る多數の强盜殺人强姦竊盜毆打殺傷賣淫者を含む一大家系を得、一八七五年始めて世に發表し、後二年を經て一册の書物にし、之に其家系の假の名 "The Jukes" と云ふ名をつけ、其後に「犯罪貧困疾病及遺傳の研究」と添書して出版したのであつた。此書は其後弘く讀まれ、ジュークの名はかやうな問題を論ずる人々の口に繰返し繰返し上つたものであつた。

處が此假にジュークと名づけられた家系に關する事は此名が假名であつただけ、其後の事を探る手がかりもなく其儘に三十餘年も打過ぎた。

其中一九一一年の秋の某日の事紐育の監獄協會の總主事ルヰスと名づける人の妻女が協會の穴藏につつ込んであつた紙束を整理して居た處が、偶然右のダグデールの舊稿が其中から現はれた。之によつて始めて彼の所謂ジュークの本名が分りこゝに手がかりが出來て、紐育州コールド・スプリング・ハアボアの優生學資料調査所のエスタブルック(A.H. Estabrook)の手でダグデールの調べた續きの研究が始められた。かくて氏の滿三年に及ぶ苦心探索の結果『一九一五年に於けるジューク族』"The Jukes in 1915"が公にされた。此人の調査に上つた一族は前後九代に跨り總人數實に二八二〇人、中に二〇九四人のジューク族の血を受けたものを含む未曾有の浩瀚な系圖が出來上つた次第である。

紐育州の僻陬に山の多い地味の瘦せた訪ふ人も少いZの地がある。その中央部には五つの小さな湖が鎖の環のやうに並んでをるが、其三つは周りを切立つた斷崖の足溜りもないやうなもので圍まれてをる。此巖の大きな割れ目に極少しばかりの土地が處々飛びとび出來てをる。今はたゞ野獸の棲家になつてをるに過ぎぬが、これが其昔ジュークの先祖等の住つて居た處で、曾てはこの處に彼等が町の某銀行から强奪して來た九萬弗餘が隱されて居た事もある。所謂山寨である。

他の二つの湖は此三つより一哩餘距り、其周圍は稍土地肥え人家も相當にある。此附近にある巖は昔セメントを燒く材料に切り出されたもので、今もそこにトンネルが殘つてをり、セメント釜の碎けたもの等があるが、既に三四十年以來用ゐられずに打捨てた儘になつてをる。此セメント山はジューク一族に生活の資を供給した處でこゝに彼等の多くが勞働してゐた。彼等の狂暴な恐怖と云ふ事を知らぬ天性には此種の勞働が適してゐた者と見える。エスタブルックの調べた當時も或一人の老いた男は昔此山に働いてゐた時に爆裂のために散つた石のかけらが顔や頸や肩に喰ひ込んだのが其儘になつてゐるのを見た。彼等はこゝで日中働き夜になると前の巖の裂目の中の小屋に歸つて寢た。小屋は丸木造り又は石ころを積重ねただけで床もなく土の上に藁を敷いてそこに老幼男女がごろ寢をした。冬は眞中に一つ火を焚いて皆が

足をあぶり乍放射形に並んで眠つた。かやうにして此一族は生れ代り死に代りし乍ら百年許もこゝに棲んだのである。彼等の生活狀態は此長い間にも少しも改まる樣子がなかつた。ダグデールの此地に往つた時も全く此通りの狀態を見たのであつた。處が一八八〇年頃になつてポートランド・セメントと云ふのが多く用ゐられるやうになつてから、此セメート山は仕事をやめなければならぬ破目になつた。これを動機としてジューク等は住み馴れた小屋を後にして思ひ思ひの方角に散つていつた。それで今ではこの處に一人のジュークも殘らず、彼等の住家は全く跡形もなくなつた次第である。

ジューク一族がかやうな風にして此處に百年も獸に變らぬやうな生活をつゞけてをるうちに、彼等の數は幾倍にもなつていつた。怠け勝ちの勞働者、常習性の犯罪者、不良少年少女、賣笑婦と云ふやうなものがいやが上に殖えていつた。生れる子供は誰も彼も貧乏と犯罪と不節制との空氣の中に育てられた。若い娘たちは全く節操等云ふものを知らなかつた。それ等が近傍の若い者を引附けたので、自然父の分らぬ兒が後から後へと產れた。彼等は皆いゝ加減の父親らしい者の姓を被らされた。それでどうかするとジューク一族には名家の姓を帶びたものもあると云ふ事である。此性的の不節制は自ら花柳病の蔓延を呼んだ。病は次第に附近の良家の妻女の仲にも蔓つていつた。それで附近の町や村ではジュークと云へば犯罪不良の代名詞に使はれるやうになつた。しまひには町の工場等にも彼等の中の姓を持つたものは一切使用せぬと云ふ程になつたと云ふ程であつたと云ふ事である。

此恐るべき一族の血は最初たゞ一人の假名マクスと云ふ男と其娘の者とから出て居る。彼は一七二〇から一七四〇年の間に生れた男で、古のオランダ人の移住者の子孫である。其性快活で人に愛せられたが、酒飲みで怠け勝ちで働くかと思へばのらくらと日を過す職と漁とを生業とした男であつた。これが何處からか流れて來て、右のZなる地方の山の中に落ついたのであつた。彼には多くの子女が產れた。此子供たちの中の二人がこれもどこからか流れて來た一家族の五人の姉妹の中の二人と婚するやうになつた。此五人の姉妹は何れも十八世紀の後半に次々と生れた者で、ダグデールの著によつて世に名を轟かした所謂ジューク姉妹で夫々エダ、ペル、クララ、デリア、エフヰの假名を以て呼ばれた者である。

此中エダは一七五五年頃に生れた者らしく、後に『罪人の母のマガレツト』の通稱で地方に名の通つたあばずれであつた。結婚の前に娼婦となり一人の私生兒を生んだ。エダは天性怠惰で且黴毒に罹り晩年には上の救恤を受けて居た。其夫は怠け者の勞働者で竊盜を働いた事のある男であつた。二番目のペルと云ふ女も姉に劣らぬ淫亂の怠け者で結婚の前に四人も私生兒を生み、其中三人迄は黑人の子であつた。後曾て獨立戰爭に加はつて恩給を貰つて居た男と婚して四人の子女を設けたが、やはり救恤金を受けねばならない程に貧しかつた。其次のクララは姉妹たちと違つて比較的節制を守つて居たが、其夫となつた男は曾て人を銃殺した事のある者であつた。四番目デリアは淫賣婦で二人の私生兒を生んだが、後前に述べたマクスと云ふ男の男子の一人と結婚して五人の子を得た。一番末のエフヰに就ては何も分つて居ら

ぬが、たゞ其マクスの今一人の男子と結婚して四人の子を生んだ事だけが傳はつてをる。

要するに此五人の姉妹が總てのジューク一族の母になつたのである。彼等は恰も五粒の毒草の種子の如く前のZ地の五湖の岸に流れつきこゝに根を下して、之より出た蔓はいやが上にもはびこり、枝と葉は茂つて刈取る事も引拔く事も出來ぬやうになつてしまつたのである。かくして彼等が生れてより一世紀半に滿たぬ間に二千人に餘り、中より多數の惡黨低能の大酒飲娼婦を生んだ一大家族がこゝに出現した譯である。彼等の中に性慾に對する節制の著しく缺けた者の多かつた事はやがて多くの娘を妨くして母となし、自ら多くの子を産み、人數の殖え方が全體としてかやうに急劇であつた。それと交通の不便のために血族結婚が多く行はれ、甚しいのは父子兄妹すら相犯したやうな事實もあつた。それが彼等の生れ乍ら持つて居る惡い資質を代を重ねるにつれて一層濃くし又强くするやうな結果になつた。

メグデールとエスタブルックの二人が此恐るべき系統を出來るだけたんねんに調べ上げて、而も一人一人について性行其他を記述してをる事は彼等の著を見れば分るが、こゝにはとても此等を一々紹介してをる暇がない。たゞ此中の一小部分の最もよく分つてをるエダの子孫の一部を舉げるに止めておかう。讀者が若し興味がおありならば此二人の原著を參照されるやうに御願しておく。

先づエダの結婚前に生んだ私生兒の方から述べる事にすると、此男の子は割合に勉强家でよく働き酒も飲まなかつた。其妻になつたのが彼の從妹で母の妹なるベルの娘であつてこれも可なりの女であつた。此二人から三人の男子と三人の女子とが生れたが、此六人が揃ひも揃つてやくざ者になつた。卽ち男の子の中二人は竊盜を働き他の一人は酒癖が惡かつた。又女の子は三人とも娼婦となり而も皆救恤を受けねばならぬやうになつた。

エダは結婚後二人の男と二人の女の子を生んだが、其長男は怠惰で淫蕩で黴毒に罹り、從妹と婚したが、其八人の子女に盡く病毒を傳へ、或者は盲目になり、又白痴となり、女は多く娼婦になつた。又次男は百姓で兵役にも出で多少の土地等も得たが、從妹を娶つて生んだ四人の子の中女子の一人は娼婦となり一人は發狂し、男子の一人は素行治らず一人は乞食になつた。エダの女の子の一人は怠け者で娼婦となり同じ怠け者の黑人の混血兒と婚して九人の子女を得たが男は殘らず低能又は放蕩無賴の徒で貧民院や刑務所の厄介になり女は多く賤業を營んだ。

又エダの今一人の女子も怠け者で娼婦となり中黑の奴隷と婚した。エダの子孫は代を重ねるに連れて鼠算で殖えていつた。當り前ならば末擴がりのめでたい一族と云ふべきを、此場合には代を重ねるにつれて惡性劣質も亦自ら倍增しに濃くなつていつた。又其姉妹達四人の子孫も何れ劣らぬ多産であつたが、其中からやくざ者を出した事も姉と變りがなかつた。但し系統によつて多少分化的になりエダの私生兒より出た系統には犯罪者が多く、ベルの裔には性的の缺陷が多く、エフキの子孫には貧窮者を多く出した。

かくてメグデールの調べた一八七五年頃には其調査に上つた一族の

人數七〇九人、其中五四〇人はジュークの血を受け居り、一六九人は彼等と姻戚の關係を生じた者であつた。ダグデールは若し最初よりの一族を一人殘らず探し出す事が出來たら總人數は一二〇〇人に上つたであらうと云つてをる。此七〇九人の中にて一八〇人は何れも貧困の爲め救貧院に入り又は救恤に預つたもの、又一四〇人は刑に觸れた者で中にも六〇人は常習性竊盗であり、又ジューク一族の誰かの手にて殺されたる人の數は七人に上つた。又女の中五〇人は賣春婦となつた。彼の計算によれば一八〇〇年より始めて七十五年間に彼等一族の爲めに州の費した金は百三十萬弗に達したであらうと云ふ。

之より三十年の後エスタブルックの調べた處では、彼等の人數は此間に四倍に增して總計二八二〇人となり、其中二〇九四人はジュークの血統を引き殘り七二六人は婚姻等によつて他より入り來つた者であつた。此中三六六人は貧窮にして自ら支ふる事の出來ぬもの、一七一人は犯罪者にして十人の生命が彼等の手に失はれた。又一族中に二八二人の酒客あり二七七人の娼婦を出したかくして州の彼等の爲めに費した金を見積ると二百萬弗以上に上つたと云ふ。

イシュマエル

前世紀の前半と云へば、米國ではポトマック河の岸より起つて眞直に西の方ペンシルバニア、オハヨを貫き更にインヂアナを貫いてミシシッピー河に至つた大國道が始めて出來た時分で、之に沿うてオハヨー、ケンタツキーあたりの人々が數十人又は數百人づゝ隊伍を組んで所謂幌馬車に家財道具を積込んで家族は勿論家畜迄を引具して西へ西へと機會を見出す爲めに移り行つた時代である。彼等の多くは胸に大望を抱くがためにあらゆる艱難を厭はずたゞに西の方の新天地を望んで土人の襲擊や食物の缺乏や野火の脅威に堪へつゝひた走りに進んでいつたものであつた。けれども中には深い考へ堅い志もなく又何の準備もなしに家鄕を後にして漂浪の旅に出でたつたものも少くなかつた。彼等は荒野を旅する途上でも殊に町村等に着けば戸每に食を乞ふて歩いた。インヂアナ州の首府インヂアナポリスはかくの如き無宿旅行者の第一に當にした處であつた。そこの人達は性純朴で彼等無宿の旅人を懇ろに待遇してやつた。そのため旅行者の中の狡い連中はよい事にしてこゝに永く足を止める者が多くなつて來た。彼等は氣候がよければ旅をつゞけ、冬になれば又町に戻つて來て乞食の生活をした。かやうな者たちの中には地方の法律に從はず勝手放題な振舞をする者が少くなかつた。其仲間では男は遊惰にして女は無節操、子供は榮養不良で襤褸を下げてゐた。かやうな家族が當時四百許りもインヂアナポリスに止まつて居たと云ふから小さい町には可なりの目障りになつたに相違ない。それで町の方では捨てゝも置けず色々と工夫して彼等を救濟する道を講じた。それには救濟を乞ふ者が來ると、一人一人に就て其身許を調べ親族の有樣などを一々記錄した。處が月を重ねるにつれて同じ姓を名のる者が後へ後へと救濟を頼みに來た。そこで係の人も不思議に思ひしらべて見た處が、彼等の多數が皆或親族關係を持つた一大團體である事が分り、其中心になる一番ひどい家族の名がイシュマエルと云つたので、彼等貧窮者の全集團をイシュマエル族*と呼ぶ事になつた。

* The Ishmaelites.

處か其頃此町に住んで居た人の中に前のダグデールの著書なる『ジユーク族』を讀んで感心して居た人が一人あつた。それは町の教會の牧師マクロツク (McC ulloch) と云ふ人である。此人の日記が今殘つてをるのを見ると一八七七年の某月某日の條に

「男と小供二人、女の姉妹と其小供、男の母の盲なる者が十尺四方の室一つの中に同居せり。室には床一つストーブ一つある外に家具なし。予の見たるときは石炭も食物も盡き居たり。火なく石鹸なく手拭なきため汚穢極りなし。眞に貧困の極みと云ふべく、予は未だかくの如きを見たる事なし。予等は種々の物を持ち行きて與へたり」云々とあり。其二日の後の處には

「金曜日の處に記したるはジユーク族に似たる例なるが如し。予は町の委員の許にゆき調べたる處、彼等の名のイシユマエルと云ふ事を知りたり」とある。氏はこれよりダグデールの著書に刺戟せられて此一族を調査しやうと思ひ立つたらしく、一八八八年には其結果をパアローに開かれた慈善社會改良事業會議に報告してをる。

之に據ると、此一大族の中心なる家族は元メリーランドよりケンタツキーに移り、後一八四〇年頃にインヂアナポリスに漂泊して來た者である。その先祖はベンと名づける男があつたが、一七九〇年頃にはケンタツキーに來て居た事が分つた。其息のジヨンと云ふが一八二五年頃インデアナポリスに來て、こゝを中心にして前に述べたやうな乞食旅行をやつて居た。彼は混血婦人を娶つて三人の男子が生れたが、彼等はスミスと名づける貧家の三人の姉妹と婚して多くの子女を生み、其中十四人は生長して、一八八八年には已に六十人の孫三十人の曾孫が生れて居た。彼等の名は早くも一八四〇年頃より貧困者の登錄名簿の中に出て來てをる。そして其子孫から多くの殺人犯や賣春婦を出した。彼等には又病人が甚だ多く、子供等の死亡率が極めて高かつた。彼等の生活は乞食をしたり石炭殼を取集めたり、又こそこそ泥棒するのであつた。或者は空家を探して寢、或者は河原や樹の洞を家として居た。夏になると附近の町村にきたない車を押し乍ら漂泊して出で秋になると又元の町に還つて來る事或種の鳥の如くであつた。

かやうな仲間が互に不しだらな性的關係によつて互に結ばれ終に一の大きな集團となりインヂアナポリスを中心として一八八五年頃には其總數六千にもなつた。彼等に共通の特徴は第一は極度の貧困であつた。親も子も孫も皆町々をさまよひ乍ら食を乞うて步いた。或はでたらめの憐れつぽい身の上話をしたり、ひどいのは泥水で眼を洗つて眼を惡くして盲目のまねをしたり、手や足のかたわのまねをしたりして、働きを與へられてもするのがいやさに只救けて貰ふ工面をした。それと今一つは彼等の仲間には性的の關係がまるで無茶であつた。たまに牧師に式をして貰つて結婚をするものもあつたが、幾度でも平氣で離婚した。五回六回七回と正式の離婚をせずに次から次へと夫を換へ妻を換へる者もいくらもあつた。從つて賣淫は極めて普通に行はれた。それでインヂアナポリスは一時賣淫窟のために有名になつた。而も其大部分の主人も亦女も盡く此イシユマエル族のものであつた。或は母と娘たちと、又甚しいのは祖母と孫娘とが同じ家に賣女となつた。近親相姦する事も稀でなかつた。それで私生兒の生れる割合は前のジユークよりは甚しい位であつた。

それから此一族の特徴は前にも云つた漂泊する性であつた。一時かやうな生活をする者の數が非常に多く、「アメリカのジプシー」と云ふ名も出來た程であつた。彼等は未開の地の土人ばかりしか居らぬやうな地方までもはいつて居て、其平和な生活を脅かすものもあつた。彼等の漂泊の區域はインヂアナポリスを中心に四方に千五百方哩にも及んだと云ふ。春が來ると、彼等の一族は老も若きも親も子も孫も一所に、總ての持物を手押し車に積んで何處ともなくさまよひ出た。少し工面のよいのは途中で馬車馬の年老いて使はれぬやうなのを手に入れたり等し、晝は出でゝ食を乞ひ夜は小川の流れのそば等に宿つて旅をつゞけた。少しく氣に入つた處に來ると幾日でも止つて居た。時としては多くの車が列をなしてつゞいた。そして道で群と群とが出會ふと云ふやうな事もよくあつた。そうするとよくそこで新しい男女の組が出來た。冬になれば總ての車は逆にインヂアナポリスを指して歸つていつた。

かやうにして彼等の仲間は所謂牛は牛づれで牛の子をいくらでも遠慮なしに生みつゞけつゝ殖えていつた。後に周圍の狀況が變るにつれ、彼等の子孫は米國の所謂中西部に弘く擴がり、劣惡な種子は交通の便利になると共に廣く廣く米國の內地に散ばつたわけである。

ナ　ム

右述べたジューク族とイシュマエル族とは何れも敗殘者の大きな群で、又かやうな劣惡の天稟の遺傳の例に屢々引かれる者であるが、外にも同じやうな例がいくらかある。其中で假名ナム一族とカリカック一族はどちらも可なり名の知れた者である。

此四つの大家族は敗殘者の家族として恰も源平藤橘の類である。そして源平が武家として聞え藤橘が廟堂で權勢を振つたやうに、ジューク族は犯罪者を多く出した點で著しく、イシュマエルは極度の貧困で乞食の生活をしたものが大部分を占め、そしてこれから云ふナムは飮酒で懶惰に身を持ち崩したものの極めて多いことが特に目立つて居る。終のカリカックは又低能者を數多く出した系統である。

ナムに就ては前の優生學資料調査所のエスタブルックとカーネギー研究所のダヴエンポートの共著 "The Nam Family" と云ふがあり、カリカックにはニュージャーシー州ヴアインランド感化院長ゴッダードの著 "The Kallikak Family" と云ふのがある。此二著に從つて此二族の事を大略紹介する事にする。

ナム族と云ふは十九世紀の初期頃から紐育州の山中に住んでゐた農夫又は樵夫の愚鈍遊惰な一大族である。其先祖は昔ハドソンの谷の方より漂泊して來た一人の和蘭人と或インヂアンの酋長の娘との混血から出ると云はれてをる。最初の程はマサチユセッツ州の西方の山中に居て、此インヂアンの先祖より受嗣いだ土地等があつたので割合に都合よく暮して居たが、其中にジョセフと稱へる男の子供の代にな て八人の兄弟の中の五人迄が近傍の人と喧嘩をしたか何かゞ原因で離世紀の初め頃先祖の長く住んで居たマサチユセッツの山中から紐育州へと出て來た。そして其一人は或地の割合に肥沃な處を買求めてそこに落付いたが、他の一人は之より稍隔れた山の中の瘦せた土地に足を止めてこゝに新しい家をなした。殘りの三人兄弟は此二人のやうに

直に落附く事が出來なかつたと見えて、二人の居た附近をあちこち放浪して居たが、それでも終には初の男の買つた土地の附近に足を留めて動かなくなつた。

時がたつに連れ彼等の子孫がつぎつぎ生れたが、其中で才能あり勤勉な者は相當に出世して地方での有力者になつたものもたまにはあつた。

然し大多數は無智怠惰で且大酒を飲み常に貧乏に苦しめられて居た。それで子供が生れても教育を授ける事も出來ぬし又周圍の事情が總ての點で極度にひどかつたので大抵の子供ば不良の兒女となり生長すれば親たちよりも更に劣等になつた。從つて一般の人々からは益々遠ざけられ、其境遇は土地の瘠せてをる事にも促されて一代毎に下る一方であつた。それで其地方では彼等の住んで居た邊りをナム谷と稱へ一種の特殊部落をなすやうになつた。今でも此ナム谷に往つて見るとそこゝに數軒づゝかたまりをなして穢い小屋のあるのが見られる。その中をのぞいて見ると一室きりで床もなく古い毛布や襤褸切れを地の上に積重ねて其上に全家族が鮨詰になつて寢てをり穢い事此上なしである。

エスタブルック氏は此一大族の系統を詳しく調査して右の書物に於て發表した。氏の調査は最も古く前述べたジョセフ・ナム迄遡つた。彼は右のオランダ人とインヂアンの酋長の女との孫で米國獨立戰爭に參加し前云つたやうに八人の男女を得た。其中で子孫が事の分つたものは前述べた五人で其中一人甲は一七七〇年頃に生れ妻と共に紐育州に移住し一八三〇年頃に死んだ者で五人の子女を得た之が卽ちナム族中の一大系Aと名づけられた者をなした者の先祖である。又次の男も同じく紐育に移住したが之は生涯獨身で子孫を殘さなかつた。此男は無智であつたが正直で勤勉であつたそうである。それから三番目の男の子は父と同じに獨立戰爭に參加し恩給を貰つて居た。性質は無智で怠惰で大酒飲みで怒りつぽかつた。其子孫がエ氏の所謂B系をなした。

それから其次の子は兄弟の中ではましの方であつたので紐育州に移住して後割合によい土地を買つてそこに掘立小屋を建てゝ落着いた。それが一八一〇年の事であつたと云ふが、彼が死んでからも其子孫が同じ小屋に住み一八八〇年に至り、建てゝから百年後もたつ今から十五年許前にも尙それが倒れずにあつたと云ふ。此小屋に生れた男女は皆で隨分の數に上つたが、それ等が殆んど皆劣惡な連中になつた。此の系統をD系と呼ぶ。其次の男も紐育に移住しE系の先祖となつた。最後は女で親族の男と婚し之がF系の先祖となつた。之は低能の女であつたと云ふ事が分つてをる。

此五人の外に今一人此兄弟等と近親であるが、其關係の明かでないものでO系の祖となつたものがある。之を合せてナム族はつまり主に以上六人から出たもので其中の三人に就ては多少性質等も分つてをるが、他の三人は一向に分らない。何れにしても此等の子孫がナム谷を中心として盛んに殖えて終に劣惡なる一大族を此附近に生じた事前のジュークの場合とよく似てをる。

かくして一族中でエスタブルックの調査に上つた人數は八代に亘りて總數一七九五人此中八五二がナム族の血統で殘りは他家の出である。ナム全體をジューク全體と比べて見ると、犯罪者は彼より遙かに

少く又公の救恤を受けた者も少なかつたが、之は彼等の生活狀態がジュークより多少善かつたためではなく、其周圍の社會狀態の相違に基づくものであらうと云ふ。又ジュークに比べて著しく多いのは大酒飲みで男では九割迄女では八割八分迄がそうである。されば之が此族の一大特徵で、又彼等をして極度の貧窮に陷らした原因の一つも之にあつたに相違ない。女の操行は一般に甚しく亂れて居たが、附近に町がなかつたのでジュークの如く職業的の賣春婦となつた者は少くそれが爲めか、黴毒に罹つた者も割合に少かつた。エスブクツクはメグデールに倣つてナム一族のために社會の受けた損害を金で見積つて見たが、此損害高は三十五萬弗餘となりよほどジュークより少いが、これは前にも述べたやうに彼等の住んで居た周圍の社會狀態のジュークのと異なるためもあらう。然し之に彼等の飲んだ酒の價を、假に七百人の大酒飲が三十年間一年につき五十弗づゝ飲んだとすれば總額百萬弗以上になるからジュークのとあまり違はなくなると云ふ。

カリカツク

カリカツクの名はナムよりも良く聞えジュークやイシユマエルと同じ位に有名である。而もこれは最初同じ血統から出たものが途中で善惡兩統に分れたもので遺傳の力と云ふもののどれ程各人の將來に大きな力を持つてをるかを語るには誠に適當な材料である。

話は八歲の少女より始まる。米國ニユージヤシー州のヴアインランドの感化院に或秋晴れの日此少女デボラと名づけられた者が送られて來た。其際には此子はたゞ學校の出來があまり惡いからと云ふので連れて來られたのであつた。係の人が見ると身體は一人前に發育してをり大した缺陷もなさそうであつたが調べて見ると低能で殊に數の事が一向分らなかつた。それより此少女は長く此感化院に留かれて特殊の教育を授けられる事になつた。そのうち年も取り二十歲以上になれば手先きの事等は可なり器用にやるし人の應對も上手になつたが、精神上の缺陷は依然として著しく殊に數の事はまるでだめであつた。即ち加へたり減じたりするのには必ず指等を用ゐて實物と結びつけなければ簡單な事すら出來なかつた。

此ヴアインランドの感化院では院兒の一人一人について其家庭教育遺傳等を出來るだけ調べる事にしてあつた。デボラの場合にもやはりさうした。其結果が此世に名高いカリカツク一族の血統を明かにする事になつたのである。感化院の役員は先づ或手がかりを得て此子の母が施療院に於て此子を產んだ時に母子を世話した或婦人を訪ねた。之によつて此母の身分及其後の身の上の變動等も明かになり、それから又此母子の親族の者の所在地が分つた。そこでそこにいつてあちこち聞き糺して見た處が、小さな町の事でもあり直に色々の事が分つた。即ち此一族假名カリカツクは地方に聞えた代々低能兒を出す家であつた。それから遂に徹底的に此一族に就て昔より各代の各人に就て調査を試みる事になり、それからそれへと探索の步を進めていつたのである。そして必要に應じては或は都市の貧民窟にもゆき或は草深い農村にも入つて一族の人々の行衛を尋ねる等の事もあつたが、其到る處に精神の缺陷のある者の發見せられるのに係の人も驚きよりも寧ろ恐怖を感ずる程になつたと云ふ。

處が調査がだんだん進むにつけ係員に容易に合點の往かぬやうな事實が時々見つかるやうになつた。それは同じカリカックと云ふ名が少しも缺陷のない家族中に時々出て來た事で、最初の程は何かの間違ひか暗合だらうと云ふやうな風に考へて、それ以上に聞糺す事を見合せてをつた。處が同じやうな事が其後頻々と起つて來るので、しまひにはカリカックと云ふのは元々は缺陷のなかつた立派な血統でいつの頃よりか惡い血統が之に交つたので、こゝに善惡兩統を生ずるやうになつたのだらうと考へるやうになり、そこで此兩統が何時どこの處で起つたかをつき止めやうとした。

初めの間は此努力は度々思はぬ障碍にぶつかつた。然るにとうとう謎の緒を解くやうな事を何度も繰返した後に、終に次のやうな事が分つて來た。

それは此デボラと云ふ娘の祖父の又祖父にマルチン・カリカックと呼ばれた者があり、又今一つの善い血統のカリカックの先祖にもマルチン・カリカックと名づくる者があつた事が分つた。けれども後のマルチンの方が時代が古いので前と同一の人とするわけにゆかなかつた。それから色々と苦心したけれども此二人のマルチンの間の連絡をつける事がどうしても出來ないので數ケ月の間も其まゝ捨てられて居た。處が極めて偶然の事から此間の連絡がつくやうになり一切の謎が解ける事になつたのである。

分つて見るとかう云ふわけであつた。それはカリカックとは元々良い血統の家であつた。

此系統に或頃マルチンと云ふ男が生れたが不幸にして未だ若い十五歳の頃父に死別した。それから後彼は適當の家庭教育も受けられずに居たが、丁年に達する頃獨立戰爭に參加して戰爭の間に月日を送つた事があつた。此時に某地でよく若い軍人達の出入した居酒屋のやうなものがあつて、彼はそこにゐた低能の娘に關係を結んで子を産ませた。其母は此子に父の姓と名を共に與へてマルチン・カリカックと名乘らせた。これが即ち後のマルチンでこれこそ彼の低能女デボラの祖父の祖父であつた。

其後前のマルチンは家に歸つて妻を娶り多くの子女を擧げたが、此妻の血統は缺陷のない良質の系統であつたので、子々孫々迄永く濟らかな血を保存し得たのであつた。

これでカリカック家に善惡二樣の系統がある事の原因もすつかり分り、又遺傳の力の如何に強いものであるかと云ふ事も、若き男女の一時の過失が如何に其子孫に長く惡質の血を入れるやうになり得るかと云ふやうな事にも適確な例證が擧げられた譯である。

そこで續いて此マルチンの子孫を調査した結果を述べると驚くべき事に其子孫の總數四百八十人の中にありて百四十三人は命箔つきの低能者に屬し、缺陷なき精神を具へたものは僅に四十六人、殘りは常低何れとも明かでないものであつた。此等多數の低能者に加へて三十三の性的に正しからぬもの即ち多くは賣淫を營んだものがあり、二十四の酒亂者があり八十二人は夭死し外に八人は賣淫宿を營み三人は癲癇三人は罪人となつた。又血統を引いた者の他家に入つた者の親族を合せて總て調査した結果を見るも同樣に恐るべき多數の低能者等を出して居る。

ゴツダツドの著は此マルチンより始めて其子孫の一々に就て其性格等を記述してをるが、今は之を省き委細は原著に讓る事とする。

總じて老マルチンの正妻より出でたる子孫は當時迄に四百九十六人を算へたが、其總てが精神に缺陷なく、唯二人の酒を多く飲むものと一人の性的に不謹愼なものがあるだけである。彼等の中には醫師辯護士司法官教育家地主商人等あり、男女共に社會的に相當の地位を占め、中に一人の低能者なく又私生兒なく不節操の婦人なく男子には唯一人の性的に節制の足らざる者があつたきりである。其他癲癇の者も犯罪者もなく又娼家の主人になる者もなかつた。小兒の死亡も前の系統に比べて遙かに少く又大酒家は僅かに二人あつたきりである。

ペンシルヴアニアの一族

カリカツクに似て最初の一つが後に善惡兩統に分岐した例として割合に新しく調べられたペンシルヴアニアに住む一族がある。これは調査したのがキイ(Key)と云ふ前述の優生學資料調査所に勤める婦人であるが、之も亦調査に入つた人數千八百名以上に上る尨然たる一大族である。今此文の最後に之を手短に紹介する事にする。詳細は一九二〇年カーネギー學院の出版でキイ女史の"Heredity and Social Titness"と云ふ著に讓る。

此調査の緒口はペンシルヴニアニア州のポルクと云ふ處にある一感化院に居た四人の低能者より始まる。女史は此等の人々の血統を尋ねて一代づゝ先祖に遡り遡りし、又反對に枝道を一つ一つたどり下つて遂に此一大系圖を得たのであつたが、アメリカの如き廣い國でかやうな事が出來たのは、一つは此系統に屬する大多數の人々が此感化院の所在地よりあまり遠からぬ處にかたまつて居たによると云ふ。彼等は其祖先の此地方に來て以來人數は殖えてもあまり遠くはゆかず多くの者が其附近に止まつて居たのであつた。

此先祖と云ふのは二組の獨逸系の移民夫婦で十八世紀の後半に此地方に來て落附いた者であつた。其中の一組の假名アアロン・ルファー夫婦は當時已に三人の親であつたが、そこに四百エーカー許の地を得、之を耕して三十年間も割合に都合よく暮したのであつた。此アアロンと云ふ男は正直機敏で忍耐力進取の氣象に富み新天地の開拓者として誠に適當な人物であつた。之に反して其妻は快活な人づき合ひのよい女であつたが、明に低能で裁縫紡織の術もろくろく出來ず、殊に數量の事がまるで分らなかつたので、夫のアアロンが朝仕事に出る前に肉や野菜を一々分量を量つておいてやらなければならぬ程であつた。

此夫婦から七人の子が生れたが、此子供たちに優劣色々の違ひがあつた。先づ長男は所謂甚六でのろくてひつこみ思案の男で母と同じやうに數に對して特別鈍かつた。たゞ取得は辛抱強くて勤勉な質であつた事である。此男の妻は夫と正反對で計數の能は相當にあつたが、神經質で怒りつぽく極めて粗暴な女であつた。彼等の子孫は様々であつたが、其中で相當に良い系統と結婚した者の後は忍耐の力進取の性計數の能も皆普通以上であつた。之に反し惡い血統と交つたのは此等の性質に缺陷が見られた。

次の次男は兄と同じで數に關する能力が缺けてをり、進取の性も忍耐

耐力も乏しく且不正直な男であつた。其妻は可なりの働き者であつたが節操の缺けた女であつた。此夫婦の子は女一人だけで之は幸にも父母の缺點を傳へず、數量の頭も相當に發達してをり、又あまり引込み思案でもなかつた、其子孫は總ての點で中庸であり性的にも不謹愼の點がなかつた。

三男は兄弟中で一番優れた男で體も心も強く生涯に一度も病氣をした事がなく、讀み書きも勘定も相當に出來た。又妻が中々の働き者で計畫の才もあり忍耐力強く又器用な質で九十三歲になるまで體力も精神も旺んであつた。彼等の子孫は皆相當の人間になつた。殊に良い系統の出の者と結婚した者の子孫は進步改良の跡が著しかつた。又自分自身はさほど優良でなくても良い配偶を選んだ者の子孫は良くなつた。

四番目は女でアアロン夫婦の長女であつたが、之は相當の才能のある女であつたと云ふ事だけ分つてをる。然し早く他家に嫁いで遠方にいつてしまつたので其後どうなつたか分らない。從つて其子孫はキイ女史の調査に登つて居ない。

次の四男は長兄に似て正直鈍重の方であつた。長兄の妻の妹のやり手の妻を娶つたが、其子供は僻劣色々であり、其子孫からは薄志弱行の徒を多く出し隨分世間の厄介物になつた。

殘りの次女と五男は共に痴愚であつたので、父は態々此兩人の爲めに遺言して後見人を設けた程であつた。此次女は兄の一人の家に生涯厄介物となり結婚せずして終つたが、第五男は低能不品行の女と結婚した。此子は總て計算の才なく、其子孫は自分がやくざであつたので自らやくざの配偶者を得、自然此系統の者は盡く劣等で中には痴呆に近いものもあり、社會より救恤を受けた者が多くあつた。

此アアロン・ルーファの五男二女より出た系統の外に之等と密接に入れ交つた州の系統がある。其源は最初此夫妻と殆んど同時に同じ西ペンシルヴァニアに來た獨逸系の移民夫婦で假名トマス及びマルタリイルと呼ぶ者があつた。此夫婦は二人とも丈高くして力が強かつたが、トマスの方は浮浪の天性があり其妻と十二人の子供を捨て丶行衞知れずになつた。此子供等は兩親に似て丈の高く力が強かつたが、性質は極端な內氣でお人よしで頭が鈍かつた。此十一人の中四人は若い間に死に六人はそれぞれ良質の家と緣組したが、後の二人の姉妹の兄弟中で一番鈍であつたのが同じやうな男に嫁いだ。其子孫の中姉の方より出たのは配偶者によつて或は痴鈍のものが多いのもあり、或は變人物を多く出したのもあり、或は可なりの才能のある人が大部分のもあつた。又妹の方の子孫は頭の發達の著しく後れたものをたくさん出したが其中でも割合に優良な者と緣組したのは改良の後が著しく見えた。

尚此系統に就て面白い事は一族の中で割合に優秀の者は故鄕を後にして他國に移住する者多く、之に反して先祖の墳墓の地にいつ迄もつついてをるものには、劣惡なものが多い。それで此系統の中で割合に缺陷のない長男次男三男の子孫には今鄕里に止まつてをるもの僅かに三人、五十哩以內の地に移住してをるもの四十二人、其餘の二百人と云ふ多數は遠く隔つた國內の諸州に出ていつて居る。之に反して劣惡な四男五男の子孫はたゞ三人だけ遠いところに移住し十六人が五十乃

至八十哩離れた町に住んでをるだけで、其殘りは盡く先祖代々の地に殘つてをるのである。

結論

之を要するに右擧げた事實より見れば人間の種々の精神的缺陥が同一の系統に代々現はれる傾向のある事は否む事ができない。而も同じ先祖から血統でも、それが後に小の系統に分れてそれぞれ違つた種類の缺陥が各々に繰返して出て來ると云ふやうな事が稀でない。前のジューク姉妹等は此例である。かやうな事實の原因としては色々の事が考へられるので、一には境遇の力も大きな働きをするのであらうが、又遺傳の力が働いてをる事も間違ひない。此二つの力を互に明かに區別してどれだけが遺傳の力どれだけが境遇の爲めとする事は大抵の場合に出來ない事であるが、カリカツクやペンシルヴアニアの一族の如き例を見ると遺傳の力の強い事を認めないわけにゆかない。ペンシルヴアニアの一族の例に就ても之を研究したキイ女史によれば、元々同じ系統から出たものでも、代を重ねるに從つて良い者は益々良く悪い者は愈々悪くなる傾向がある。之には境遇の力も與つてをるに相違ないが、主に良い者は良い系統の者を選んで緣組する事が出來るが、悪い者は自ら悪い系統の者としか緣組ができない。かくして初めには割合に小さな違ひも代が重なるにつれて大きな距たりとなり、悪いものは加速度的に墜落して數代の後には社會の最下層にも沈淪するやうになるのであると云ふ。

一族中に劣つた個人の現れた時、幸にして若し良き系統の配偶者を得る事が出來ると、其系統はその一代限りで又良くなり得るやうである。然し元來は缺陥のない系統でも過つて他から悪い血がそこに混入すればそれが永久に汚される事もあり得る。前のカリカツクは此適例である。

個人としてはかやうに心がけて悪質の血を自分の家に移入する事を防げば、それで自分だけの系統を淸く保つ事も出來るし、又悪い資質を除く事も出來るであらう。然し問題を民族とかの社會とかの全體として考へる時は如何にすれば此悪質の種子を除き去る事が出來るであらうか。之は極めて大切な且實際上困難な問題である。何れにしても此問題を最も手際よく解決し得る民族なり國家なりがあつたらそれは必ず將來に於て地を嗣ぐ者となるであらう。

獨歩回顧

放庵末醒

自炊生活の貧乏書生が、忽然として近事畫報特派記者と云ふ肩書きになつて、柳原仕込みの冬外套を着て、新橋のステーションから出立する、日露戰爭が始まるか、時局如何と云ふ年の春、世に出た嬉しさに大股でプラットホームを行くと、うしろからいきなり腕をつかんで引留める、留められたのは二十四歳の頃の放庵、留めたのは三十そこそこであつたらう獨歩、近事畫報の主幹故、あちらへ渡つてからの心得を云ひきかす、其時始めて獨歩を見た、小男で、きびきびと埒をあける、それまでの狹まい交際範圍で、曾て接したことなき風格だと思つたが、其後ずる分と年も經、人も閲みしたが、やはりあの如き風格はあの人だけの持物であつたと思ふ。

戰を、待つて韓國に淹留する、此の驅け出しの特派記者は、畫報の外に記事をも送らねばならぬが、さてあの種を探ると云ふ仕事は、存外に取りかゝりの惡いもので、先づ領事館に行つて、領事に面會して何か種はありませんか、と、やつて、居合はす二三人の冷笑を貰つて歸る、と云ふやうな仕掛けでは、成績覺束なく、何でも小杉は無能だからと、召還の議も出たと云ふ、その時獨歩が、あれは今自身を探がして居るらしい、その內味が出るだらうからと、押えて置いたと云ふ其事私に取つて大きな分軌點であつた、と云ふのは、其後次第に記者馴れて、送る畫報の種も、どうやら小さな呼び物にもなり、從つて給與も多く、若いがまゝに仕事に費すと同じ程の精力を遊びにも傾けるチト世の中が面白くなると、此の戰爭が終つて歸れば、元の無祿の素浪人、待つて居るものは、時として餓を交ふる自炊生活と思へば、日本內地に張合ひなく、繪は怠けてばかり居た故、二三人の友人の方が上手になりさうで、大きな野心も抱けず、丁度其頃滿洲ゴロ支那豪傑の元締めをやつて居た人と懇意になり、仲間入りをして、つまり手下になつて、北京へやつて貰つて、何々親王の肖像でもかいて居る、酒だ國事だ、ピストルだ日本刀だと云ふ空氣、それへ向いて行く事にほゞ心をきめた、で、戰爭半ばで交代して內地へ歸る、慰勞金を手に入れたらすぐ取つて返して北京行きと思つて居ると、近事畫報社に於ておまへは役に立ちさう故、引續き編輯局詰め、月給何がし、と云ふ話あの畫報は面白かつたと賞める人などあり、どうやら舞臺が廻つて居て、支那荒らしの豪傑業よりは興ありげに氣がかはつた、放して置け

ば頭か、からだか、どちらかは支那で堅なしにしたであらうから、獨歩の拙挽は今の私を今のまゝにしてくれたと云ふもの、今の方が増しであつたと思へば、恩に被ぬわけには行かない。

若い者は、貶すよりは賞めるがいゝと見へる、若木は押えれば曲つてのび、傷くれば傷ごと育つ、最初手ほどきの師匠から、そこばく賞められて來た私の藝も、何となくこぢれて來て、ぐんぐんと進む友人に壓されると、いつそ他の道へ突つ走らうかなどゝ思ふ、まぢめな勉強心を失つた若い者の、からだの達者なのは始末にいけまい、そこへ獨歩が、おまへの筋はわるくないと云ふ、漫畫をやつて見ろと云ふ、新古文林と云ふ分厚な雜誌、あれも面白いやり方の雜誌であつたが、それへ毎月四十枚づゝの漫畫をかく、ずゐ分せつなく、窮すると薄美濃の上へ、目をつぶつて鉛筆で二三本を引いて、それから目をあけて何かの形にこぢつける、そんな事もあつたが、ともかく數をかけると馴れて來て、面白さも増すと云ふもの、漫畫でいさゝか有名になるとそれでいゝ氣になつて油繪の勉強に氣が向かず、油繪は性に合はないやうだと云ふと、獨歩が叱るやうな賞めるやうな文句を云つて聞かす彼れの坐談が又、精彩陸離たるもので、知らぬまに醉はされる、油繪にもいくらか天分あるかと思ふ、藝道のまぢめを、宗教の信條のやうに叩きこまれたのも其頃、どう考へても其以前には此の、まぢめ道を知らなかつた。

彼れの坐談の道場は、チマチマと片付いた小坐敷、サッパリとした衣裳を着て、食卓の上に氣の利いた小肴と灘の酒とを置く、口の驕つた人で、お治夫人もおかげで一かどの料理人となつたらう、聽講者は吉江喬松など年少の連中、だまつて聞いてばかりも居ず、たまには反對を申出す、少許の反對あつて光焰倍加し、元々信仰強からぬ後堅說は聽くに熱あれば說くに脂がのる、人間學と號して、談じ去り談じ來る何を說いたか、今に到つて記憶うろんではあるが、その面白さは、夜を深して歸る途々も、酒の醉と同然の昂奮に小躍をして歩いた事など稀ならず、カーラエルの英雄崇拜論、聖者、などの味ひに、水滸傳の臭味チトばかりあり、それらに彼れ一流の人生批評と精進向上の心熱を交へあざなふ、時々女子禽獸論現はれたが、是は彼れの失戀から來た反抗であつたらう。

彼れは人間學の大家ではあつたが、書籍の學問はどちらかと云へば少ない方であつたらう、その頃始まつた龍土會、龍土軒のフランス料理に集まる文人の群れに、いつも話しの中心にはなつて見えたが、當時イプセン流行の初め、柳田氏宅にその研究の會あり、その會の時、おれはイプセンなどはつまらぬと思ふと、例の如く一氣に遣つた處、拙い飜譯でしか讀まぬイプセン論は役に立たぬよと、柳田氏に返されて、腰を折られた形、少し氣の毒を覺えた事がある、書齋にも餘り書籍は見えず、その代り物覺えとさばきの早い人故、一度讀んだものは大抵必要だけのものを消化して置いたらう、沼波瓊音氏は、一幕の宮本武藏の脚本に、二ケ月の圖書館通ひをした、かくの如きは獨歩の極めて能くせざる處、文學者の創作に難き處、獨歩がモット長生きをするならば、今の花袋老が漢詩を作るが如き、文人の高閒が欲しい故、獨歩にもより多くの書卷入用であつたらうが、壽命と云ふもの、あらかた其人に備はると見え、必要だけの學問、必要だけの短篇、それが

終れば乃ち大休となつたわけか、夕日いさよふ妙本寺、芙蓉の花は美なるかな、と彼れの初期の新體詩にあり、醉ふて時々微吟した故、當人やや得意の一章と思ふが、美なるかなは餘り端的過ぎると素人考へでも思ふ、それが又彼れの直裁簡明なる文章の價値ある處かとも思ふ。

彼れの酒量は大きかつた、酒伴は春浪臨川の豪傑、あすの仕事ある故、今日は用心する、つき合ひ故餘儀なき客とも飲む、と云ふやうに殺した酒はのまず、飲むがまゝに醉ひ、醉ふ故に更に飲む、字の如くのへゞレケとなつて、茶屋の女中と車夫に抱かれて歸つて、更に一本の德利を命ずる、家庭の暴君、何か氣に障つて茶屋の不平を並べると治子夫人が茶屋へ電話をかけて、折角行つた内の人の機嫌を、なぜ損じて歸しましたと叱りつける、治子夫人は此の氣隨な夫によき妻君であつたが、此の暴君が又、存外固く處ありよき夫でもあつたらう、君歸かへれ、歸るが君の爲ならば、心おきなく歸れ君、君を留めて泣かすより、君を歸してわれ泣かん、と云ふ唄は、彼れを捨てゝ奔つた前の妻君にあてゝ作つたと云ふ、それを藝者が唄つて、これはおれが作つたものだと、云つても信用されなかつた、飲めば小六かしき氣焔ばかりあげて居るお客がはやり節の唄の作者とは思ひ得なかつたであらう此の拙稿をよむ人、旅などをして、田舍藝者が若し是を唄ふを聞きなば、依つて以て短命文人の唯一の餘技を偲ぶがいゝ。

彼れは好んで釣に出た、魚を釣るを樂むよりは、釣すると云ふ事柄を喜んだであらう、一竿の風月と、彼の短氣な性分とは、どうでもチヤンとは割り切れぬ話、所謂釣師から見れば、ホンの素人にしか掛はれまい、時々引出されて舟を同うしたが、私は元々釣は好まず、居るか居ぬか分らぬ水中の魚を、一筋の糸でだますか、だまされるかより先づ盃をあげて江山を眺めた方がよからうではないかと云へば、だから君は話せねえと、初めは釣をおろすが、やがて中りが稀になれば、竿に文句をつけ、場所に不平を云ひ、船頭を叱り出して、やがて盃中の物に捉はれ、江山の眺めもしばし、終に坐を開くに終る、さて彼の近事畫報も戰爭過ぎて以前の盛況を保ちがたく、大がゝりで始めた事業の句切れをつけるとて、矢野氏より雜誌發行權をスツカリ讓られた、素手で讓られたもの故、たやすくは纏らず、社員皆々鼻の下の問題となり、金策に奔走するもの、持ち持ちの相談、四谷あたりの借宅で、二階に天井板なき室、家根裏會議と稱して、毎日集まつた、今日明日が浮沈の分れ目と云ふ時、主人公獨歩忽然として姿を消して、誰れも行衞を知らず、大きにあはてゝ居る二日目に現はれた、古賀の沼へ釣に行つて居たと云ふ、此時の釣の獲物小さからず、此の氣を拔いた呑氣さに、連中各々心安くなり、おかげで仕事が緒についた、彼れの機略侮るべからずと、今以て感心する、唐末に陶雅と云ふ大將或時、軍中夜驚いて士卒多く壘を踰えて亡げ去る、左右の者あはてゝ陶雅に知らす、陶雅安臥して應ぜず、やゝあつて軍中自ら定まり亡ぐる者も皆歸つたと云ふ話があるが、此の大將別段一時に傑出した程の男でもないであらうが、多少とも人を率ふる者は、此邊の心得自ら出て來る事ありと見へる。

近事畫報社は獨歩社となり、櫻田本鄉町に城を構えて立て籠る、此時の同人窪田空穗吉江喬松鷹見思水滿谷國四郎の諸君、其外多數、ゴ

ダゴタと机を並べて、いろいろの雜誌を作る、其中今でも殘れるは後に鷹見氏が引受けた婦人畫報、婦人もの丶中では尤も古參の一つであらうか、上等ポンチと云ふのを企て丶何號か出して見たが、滿谷も私も、ポンチ畫はうまく行かず、結句損になつて廢した、窪田氏が婦人畫報を預けられて、其の任にあらずと辭退する、お安の腹から婦人雜誌記者と云ふ名目で出て來た人が、別にありますかと、例の諧謔一わたりあつて、押し付けられた、ともかく皆々車輪の働き、年月はどの位であつたか、しかとは數えられぬが、あの頃のあのやうな面白さは再び來らず、ながらふる者は老ひ、逝くものは逝きてかへらず、過ぎて見れば、はかなき次第なれど、二階の編輯室に、一隅に机をひかえ、小男がキチンと坐つて、黑目勝ちの目を瞬り、小鼻を少し張らして眉をあげ、短かき髭を撫す、獨步の風貌は今日見たやうにハツキリと目にうつつて居る、彼のよき血色、次第に赤味を加える程、咳入る事多くなり、肺を喰ふ蟲は、とめてもとまらぬ酒と煙草にますます其力を揮ひつ丶あつたらう、每朝熱あり、醫者に見せるを事の外に嫌ふ自身その自覺あり、斷案を惧れたであらう。

雜誌の發行、思ひ付き善しと雖も、要するに士族の商法に留まり、紙屋印刷屋の借りは彼れの肺中の蟲と同搖に多くなる、ちつともめげず、算段の限りを盡す、すべての手段の最極最良の方法は、赤はだかになつて、他の腹心に訴ふるに外ならず、彼れの簡單明瞭の性分は、此の手段について大分の役に立つたであらうが、高利貸しの金をまで用ふるに到つて、頽勢定まつたと云へやうか、いよいよの土壇場の時頼みがたきを頼んで、何とかならう何とかしてやらうと、花袋小杉故風葉居士、小波氏など骨を折つたが、どうにも埒があかなかつた、落城の悲運、或夜それこれで晩くなつて、花袋氏と私とが、獨步と編輯室に枕を並べてねる事になり、初手から七八分の酒あるに、更に盃をめぐらす、花袋氏は、早く此の難場から足を拔いて、製作をやれと云ふ、獨步は、此の仕事と自身とは不可分のもので、是れが終れば先づ自身も終りだらうと云ふ、さやうな心弱き事を云ふなと、醉泣きに二人で泣く、治子夫人も泣く、此時破天荒の事件あつて、其爲永く當夜のありさまを忘れずに居る、と云ふのは、夫人が枕もとへ、小皿にマツサを載せて、寢煙草の用心にした、それを羊羹だと、近目の花袋氏が思つた、大きに論じながら、マツチを取つてガサリと喰ひ割る、當坐おかしく思はず、あくる日となつて思ひ出して腹を抱えたが、それが萬朝報へ出た、外に心當りなければ、多分私の口から出たであらうすると又同紙上一口噺の投稿に出た、曰く、子供や、なぜ此處の羊羹を喰つてしまつた、はい、マツチと思つたので。

城は明け渡されて、獨步は西大久保に閑居する、忙がしさに馴れたものは、閑を得て寂莫を感ずるであらう、以前彼れは鎌倉に閑居したそれは未だ名をなさず、事業の興も知らなかつたらう、今心を傾けた事業に離れて、病は閑居の寂莫と共に增長する、かんしやくが多くなつて、貴君はその捨場となる、私などは一兩回其の舌鋒を受けた、君等は僕が、君の就職口の世話でもしさうなものと思ふかも知れないが、僕は決してそんな意志を持つては居ないぜ、と質向に來られた、是全く見通し、さやうに願つてもよろしいとは思つて居たに相違ないが、病熱は明察を冴え過ぎたものにする、一たまりもなく敗亡した、死は

近きにありと、自身も豫感はあつたらう、それ故製作を急ぐ心もあつたらう、少しも先へのばさうと思つたであらう、水戸の杉田雨人氏の別莊が、湊の海岸にあつたのへ、長い事行つて居た、別莊の名を頼まれて、青一蘆とつけた、山陽の水天髣髴青一髮から取つたと云ふ、取り處の詮議をすれば、唐人あたりのものから取りたく思ふ邊もある、そんな事に拘泥せぬ處に、彼れの生きた學問ありとも思はれる、此の青一蘆には後年私も家族を連れて行つて居た、崖の上から海を見下す門前は畑になり、牛久保と云ふ四五十戸の漁村、畑に芋の葉の動くを見れば、いやだいやだと畑の芋はかぶりふりふり子が出來る、と云ふ俗謠を思ひ出す、此の俗謠は彼れの渚と題する小著の短篇に收められ見よ其處に芋の葉が來る、と書いて漁村の小娘を現はしたと覺えて居るが、此の別莊での着想であつたらう。

彼れの最期は茅ケ崎の南湖院、眞山青果氏がわざわざ茅ケ崎館に逗留して、彼れの話し對手となつて居た、それこれで青果氏は他の獨歩の友人と、氣まづくなつたこともある、どうも此の、彼れは我れ一人の友人なりと、思ふわけでなく思ひ勝ちのもの、さうは思はせまいとする働きもあり、彼れ是れ等しく純情でも、時に行違ひとなり得るか私も後日獨歩の墓を建てやうと云ふ二三人の仲間になつて、自ら下圖をかいて水戸の大理石で刻ました處で、他の方面から餘が出て、それなりになつた、此の墓石は青一蘆の主人の杉田氏が引取つて、何十年かの後の自用にするとなつて納まつたが、こんな仕掛けから世間學を覺えて、人は次第に賢くはなるが、かゝる世間學は獨歩の人間學から云へば小乘ものであらう、其後獨歩の、墓石は、彼れの小説を劇に仕組んだ連中から建てられたと覺えて居るが、其の時新らしき墓の前で久しぶりで眞山氏と出會つて、ふと此の世間學の體驗を思ひ出したことである。

彼れの骨を茅ケ崎で燒いた夜、茅ケ崎館の夕飯の酒、厄介な狂醉なり、三四人裸で騷いだ、私もその一人、今になつて見れば泣くも居るも、どうで常態ならざる話、馬鹿氣た眞似をした若氣のあやまりだが當時跡口の惡さ、況んやあくる日の萬朝報に手ひどく攻められ、數年後に到つても、中村氏であつたか、彼等は踊ると云ふ題で此の一場の怪光景を寫された、どんな落付きのある人でも、獨り思ひ出して腋の下に汗を覺ゆることあるものだらうが、落付きのわろき私などに於ても、是ほどの冷汗の種は少ない、此時の酒は自ら求めた酒だが、元來世間のおとむらひに酒の出るのも如何なもの又酒ずきはおともらひには飲まぬがよろしいであらうか、私に一人の老友あつて、常陸の取手に棲む、大の酒ずき、此間其御が死なれた時、おまへの酒には隨分氣を揉んだ故、わしの葬式の時だけは一切酒ぬきにしておくれ、と遺言に及ばれ、自體孝心ではあり、酒は置かなかつた、村の連中内心舌なめずりをして行つたも少からす、忽ち目算ちがひ、お茶で追つ拂はれて、けゞんな顏をして居たと云ふ、此の母蓋し凡物ならざりしと云ふ、茅ケ崎の昔の狂態などを聞かさうなら、倅との往來を稱はれたかも知れぬ。

さて光陰箭の如く、三十八で死んだ獨歩の壽命から七八年も通り越して、放庵半禿となりながら、運動狂の病ひばかりは後へ引かず、早稻田のグラウンドで、久米田中の一黨文士チームと野球の試合ひをな

す、あの小豆色のユニフオームを着て、背の高い瘠せた青年が、小杉さんしばらくと聲をかけた、地下の亡友と瓜二つの顔がニコニコと笑つて其處にある、已がクラブのコートでは、二十歳近い伜と鎬を削つて、テニスのシングルに汗を絞るが、馴れた事とて氣にもならず、今眼前亡友のわすれがたみ虎雄青年と、かゝる處でめぐり合ふかと思へば、いつまで止まぬスポーツ騷ぎもうら恥かしきやうに感じられ、どうやら意外に長く生きて居た心にもなり、それからなつかしく故人を追想する、彼れ若し在らば、此のスタンドにこのこと出て來て、白くなつた短髯を撫して、伜と友人達の戰を見て笑ふだらう、今以て小說を作つて居るか、轉じて何等かの實際運動に向つて居るか、心池澄み亘つた高人となるか、氣力冴えかへつた人間學の大博士になるか、世間の仕事師になるか、賞むるものは不世出の文豪なりとし、簡單明瞭なる紳士なりとし、赤熱の感情家なりとし、嘘を吐かぬ男なりとした、又一方には、策士だと云ふもの、行儀が悪いと云ふもの、高慢だと云ふもの、いろいろあるが、獨步は馬鹿だとは誰も云はぬ故、愚の一德は欠いて居たらう。

去年九州耶馬溪に遊ぶ、同行は花袋老、柿坂の宿、森の宿などに三四日づゝ、花袋老も以前の如くには酒もいけず、有名な旅行家も、伜つて來たので山道は不得手となり、自然派文學の元締めが韻府一隅を手にして七言絶句を作り耽る、靜かな中老の姿、此の老と旅を共にすること、二十年ぶり程故、我れ人ともに星霜の推移を思ふ、獨步との交友凡そ花袋老ほどに因緣深きはあるまじく、貧を共にし、戀を共にし名を等うし、かくて細く鋭きもの先立ち、太く强きもの殘る、風貌性格相似ざるもの此の如くにして、交情の終始あるもの此の如くなるも珍らしいであらうか、逝きたるものに、切り子のギヤマンの碎けたやうな趣あれば、殘つたものに喬木の冬に向ふかたちあり、老ゆれば老ゆるで又其味測りがたければ、結句は死ぬもの貧乏の諺通りであらう、今まで生きたとてさまでの老齡にあらず、生かして置いて見たかつた、世もかはり人もかはる、そのかみ人間學の聽講生も、五十に近くなつたれば、凡物は凡物なりの生長あり、話して見たいと、時は思ひやる。

中產以下の社會と利殖金融

堀江歸一

貯蓄利殖の必要

今日資本主義の經濟組織が行はれて居るからには、資本殊に巨大の資本を所有し、之を運用し、又其運用を託されて居る人々は其れから生ずる利益を獲得し、途方もないと思はれる位の富の分配に與つて居るが、此圈外に居る人々に爲ると、辛うじて一身一家の生活を支へるに足りる所得を自己の勤勞に依つて獲得し、其一部分を勤儉の結果に依つて蓄積し、資本として之を運用して、以つて利殖の道を謀らなければならない。勤儉は犧牲であり、貯蓄は苦痛である、斯くて收め得た零碎の資金を利殖し、塵を積んで山を成す覺悟を立てた所で、得られる所、幾許であるか、資本家としての專制的權勢に依つて、暴利の獲得される手段が目前に見へて居ることを考へたならば、勤儉とか、貯蓄とか、利殖とか云ふことは、誠に馬鹿々々しく思はれる。其處で一足飛びに經濟組織を革新しやうとか、現代の資本主義を否認しやうとか云ふ極端なる議論を生ずるに至るのであるが、此事は姑く別問題として、茲に論じない。兎に角人は獨立の生活を營む可きもの、將來の生活なり、若しくは人生に起る波瀾なりに備へる爲めに、若干の貯蓄を爲す可きもの、其貯蓄金は最も有利に、又最も確實なる方法の下に、利殖す可きものと云ふ三個條は人間生活の要訣として、尊重されなければならない。然も確實なる方法を以つて、利殖することと、有利に利殖することゝは、其事自身に於て、大分矛盾した所があり、一攫千金的奇利を博しやうとすれば、不確實に流れるし、確實を專一にすれば、些細の利殖しか得られない。更に之を根本的に云へば、利殖に依つて若干の財產を作らなければならない人には利殖の元本たる可き貯蓄金其ものが仲々得られない矛盾があり、所謂金は敵の世の中で何時其敵に廻り合へるか分らないと云ふのは、笑止千萬の次第であるが、私共は成る可く人世を眞面目に見て精進努力する人々の爲に、現今の社會に存する資金利殖の方法や、其機關に就て、極めて通俗の又一般に亘つた說明を試みる。

利殖の機關銀行

利殖の機關としては、先づ第一に銀行預金が擧げられる。我國に於ては、銀行は特殊銀行、普通銀行、貯蓄銀行の三者に大別される。特殊銀行と云ふのは、特別法に依り、國家から或る特典を賦與されて居る銀行であつて、日本銀行、橫濱正金銀行、日本勸業銀行、日本興業銀行、北海道拓殖銀行、各府縣農工銀行、朝鮮銀行、臺灣銀行等である。此內日本銀行は一般公衆から預金を受入れないから、預金に依る資金利殖の點に於て、一般公衆と關係を持たないが、其他の特殊銀行に至つては、普通銀行と同樣に預金を取扱ふのであつて、此點に於ては、普通銀行と何等の

區別を存しない。普通銀行と云ふのは、從來の銀行條例——今回の議會に於て制定された銀行法——の下に成立して居る銀行であつて、世間一般に銀行と呼び、又銀行と理解して居るものであり、最も廣く公衆を相手として、預金を取扱ひ、利殖の機關と爲つて居る。普通銀行に就ては、色々の標準に依つて區別を付けられるが、東京銀行集會所に加入して居るものと加入して居らないものとに區別し、前者のみに就て云ふと、本店銀行四十、支店銀行三十八、合計七十八行であつて、其他の大小都會に於ける分を勘定すれば、我國に於ては隨分銀行の數は多いと云はなければならない。隨つて是等銀行の內には、大小の懸隔の在ること、著しいのであつて、拂込資本金を標準として、最大のものと、最小のものとを擧げると、

安田銀行　九二、七五〇、〇〇〇圓
廣部銀行　一〇〇、〇〇〇

と云ふことに爲り、此間に數十の大小銀行が相交つて、營業を行つて居る。而して是等數十の本店銀行の外に、他の都會に本店を構へて、東京市に支店を開いて居る銀行があり、又東京に本店を有する銀行であつて、市內に其れ〴〵支店を開設して居るものもあるとすれば、銀行間の競爭殊に預金を吸收する競爭の激烈なることは勿論である。競爭は進步の母であると云ふのは昔ながらの格言であつて、或る場合には其通りであるが、社會の事物には程度と云ふものがあり、競爭も餘りに其度を超へたならば、決して良好なる結果を齎すものではない。我國に於ける銀行の競爭の如き、既に此程度に達した嫌なきを得ないであらうか。之を一般的に云へば、小銀行が大銀行に比較して信用の劣ることは、已むを得ざる所であつて、銀行は其小なるに至れば、小なるだけ、預金に對して、高步の利子を付け、以つて、預金者を誘引するに勉めるし、又大銀行の內でも、所謂利鞘を薄くして、一方に豐富なる預金を吸收することに依つて、利益の增加を謀る營業振りを取るものは、預金利子を高くする。一時銀行間の競爭に依つて、預金利子の競り上げられた時代があり、此時代に於ては、預金者中少し利子の勘定の細かい人々は銀行に談判して、特別の預金利子を付けさせたり、又相當纒つた金額の預金をする場合には、三四の銀行に照會した上、最も高い利子を申出でる銀行に預金を爲し、其間暗々裡に銀行をして利子を競り上げさせ、以つて銀行を操縱することを得意とし、斯く三四の銀行を訪問して費す車代位は優に預金利子に依つて、償はれると云ふやうな奇談も行はれて居つた。斯る競爭が行はれて、際限なきに至つたならば、競爭に依つて、銀行業が進步する所か、却つて銀行業の品質を劣等にし、其內容を惡化する弊害の大なるものがある。蓋し銀行としては、預金利子が高ければ、高いだけ、之に酬ゆる利益を營業上に收めなければならず、其目的を果すには、預金に依つて得た營業資金は危險の多い方面に運用して、高步の利益を回收しなければならないことゝ爲る。此弊を防がうとする所から、先年來銀行業者の間に預金利子を協定することゝ爲り、東京の組合銀行で云へば、銀行を甲乙二種に區別し、目下の所では昭和二年二月上旬の改正に據る

	甲種銀行	乙種銀行
定期預金	年利五分五厘	六分
特別當座預金	日步一錢以下	一錢二厘以下

當座預金　同　五厘以下 六厘以下

と云ふことに爲つて居る。定期預金は銀行に依つて、其取扱ふ最低金額に高低の相違はあるが、小銀行であれば、五十圓から定期にする、三個月とか半年とか、一年とか期限を定め、其時に至つて、預金者は元利金の拂戻を受けるなり、利子だけの支拂を受けるなり、元利金を預け替へるなり、要するに期限前に拂戻せないと云ふ制限があるので、自然利子も高く爲る。尤も右の利子の内から、第二種所得税（利子の百分の五）と資本利子税（利子の百分の二）とが差引かれることを覺悟しなければならない。定期預金に期限のあるのが、預金者に取つて不自由には相違ないが、急場に差迫つて、何としても金の入用だと云ふ場合には、銀行に行つて、談判すれば、期限前でも引出せる、其代りに引出す時までの利子は特別當座預金の利子歩合で我慢しなければならない。

特別當座預金（以前は小口當座預金とも稱した）は普通銀行が一般公衆から貯畜金の預入れを受ける趣意の下に、取扱ふ預金であつて、當座預金と云つても、小切手取引の伴ふものでなく、預金の出入共に通帳を以つてし、一回十圓以上であれば、何程の金額でも、預入れを受け、又何時でも預金の引出に應ずる。一回の預入れを十圓以上と制限したのは。（以前は五圓であつた）普通銀行をして貯畜銀行の業務に干與することを避けしめる爲めである。

最後の當座預金は預金者に於て、預金殘高に對して、小切手を振出すを得るものであつて、預金者の方に此便利があるので、預金殘高に對する利子は極めて低く利殖の目的を達する方便とは爲らない。隨つて之に關する說明は本文に於て省約するが、要するに大都會に於ける普通銀行であれば、當座預金を以つて、銀行の重なる營業資金とす可き筈であつて、英米兩國大都會の銀行の如き、即ち其例とするに足りる。然るに我國の銀行業に於ては、所謂大銀行を以つて居るものであつても、貯畜的性質を有する定期預金や、零砕の資金を吸收することを目的とする特別當座預金に重きを置くのが年來の例であつて、幾年を經ても、此點に異なる所はない。我國銀行の店頭に集まる者が純然たる商業家や、商業使用人のみに止まらず、良家の内儀、下婢、乳母の如き社會到る所の階級を網羅し、所謂百鬼夜行の姿を呈するのも、銀行が零砕の貯畜金を吸收することを一の營業とするからである。

銀行と預金の取付

或は斯く普通銀行——就中普通銀行中の大銀行さへ、特別當座預金の名を以つて、零砕なる貯畜金を預金として受入れることは、預金者に取つては、利殖の上に便利であるかも知れない。然し其れは普通銀行が總て確實である場合に云ひ得られることであつて、我國の如く銀行の基礎必ずしも鞏固であると云へず、支拂停止の不祥事を頻出するやうであつては、預金者としては普通銀行に資金を預入れたゞけでは、意を安んずるを得ない。現に最近に於ても、鹿部銀行の取付から始まり、幾日かを隔てゝ渡邊銀行の支拂停止と爲り、續いて中澤銀行、八十四銀行、中井銀行、左右田銀行、村井銀行が殆ど將棋倒し同樣に支拂停止の已むを得ざるに至つたことの如き、預金者に取つては、如何に我國の銀行が信用

するに足らないかを示したものであつて、預金者としては現實に若干の損失を蒙るのみならず、將來に於ても、銀行に對する彼等の信用は容易に恢復しないであらう。

今度支拂停止の不始末を演じた銀行は何れを見ても、所謂札付き銀行であつて、或は例の震手案が無事に議會を通過したならば運よく助かつたものもあつたかも知れないが、其多くは先づ當然到着す可き運命に到着したと許するの外に云ふ可きものを見ない。然し銀行の内には相當立派な内容を持つて居りながら、一時の誤解に基く惡評や、爲めにする惡宣傳に禍されて、不時の預金取付を蒙り、爲めに窮境に陷ることがないでもない。三井銀行の如き、我國の銀行業界に於ては、堅固であると云はれて居る。然も二十幾年前或る日刊新聞紙上、十數日に亙つて、不利の批評を受けた爲め、預金の取付を受け、日本銀行に援助を仰いで、漸く事なきを得たと云ふこともある。新聞紙の勢力も強いと云へるかも知れないが、其批評必ずしも事實に的中して居つたのでもあるまい、其れが直に預金取付の原因と爲るが如き、即ち我國の銀行が風評に驚かされる人々——銀行の實狀を判斷する知識を持たず、思慮を缺ける人々から特別當座預金の形で、預金を受入れて居るからであつて、斯る有樣であつては、銀行は何時まで經つても、人氣評判に氣を病む人氣商賣同樣、弱い地位に立つて居ると云へる。銀行が人に金を貸す點から云へば狂暴無比であり、專制の暴君も亦啻ならざるやに思はれるが、十圓二十圓の預金を熊公八公から預かり彼等を得意先として崇め奉り、一朝彼等から預金の取付を受ければ、青菜に鹽の比喩の如くで如何ともする能はざるに至つては、弱者の悲哀を感ぜざるを得ないであらう。

我國銀行に破綻を生ずる所以

一時に數多の銀行が支拂停止をしたと云ふことは、我國銀行界に取つて、一大不祥事件であるに相違ないが、我國銀行は一列一體に不信用と云ふ次第ではない。大正九年の恐慌なり、大正十二年の震災なりで、我國の銀行業が隨分打擊を蒙り、所謂不良貸付に苦しめられるものゝ少なからざることは、世間公知の事實であつたが、其れにしても其或るものは兎に角一時の困難を凌ぎ得たのに、他の或るものが之に堪へられなかつたに就ては自ら原因がある。今回破綻を暴露した銀行に就て云へば、（一）其多くは規模の小なるものであり、少なくとも規模の大を以つて、許す可からざるものであること、（二）銀行の組織は表面上株式會社に爲つて居るが實質に於ては一個の富豪——其れも三井、三菱、安田、住友等に比較すれば、餘程小なる——を中心とする一家一門の少數者を株主として居ること、（三）銀行組織の中心と爲つて居る富豪は銀行業以外に、種々の事業を經營し、銀行の營業資金を專ら其れ等の事業に投入して居ること、（四）隨つて事業其ものが失敗すれば、銀行亦忽にして累を蒙らざるを得ざること、（五）富豪中心の銀行は其經營者を富豪の一家一門中に求める爲め、適材を擧げて、適所に就かしめるを得ざることの諸點は是等の銀行に伴ふ缺陷であつて、今日に至つて相次いで破綻を暴露したのも、亦偶然ではない。——預金者として銀行を選擇する場合には、機關銀行や、小銀行を避けなければならない所以

は自ら明であらう。是等の銀行は機關銀行であり、預金として吸收した資金は右から左に富豪に供給して、其事業經營の資本に融通する仕組に爲つて居るので、富豪たる事業家は世間の銀行に就て、資金の融通を仰ぐよりも、預金利子の下に、機關銀行をして吸收せしめた資金を利用する方が遙に負擔の輕いと云ふ點から、自ら預金利子を奮發すること〻爲る。機關銀行が多くの場合を通じて、銀行間の協定に反し、協定以上の高利を預金に付することを辭しないのは、多く右の機密が伏在するからである。預金者の方から云へば、低利よりも高利を預金に付する銀行に向つて資金を預入れることを有利とする道理であつて、是れが一般預金者に對する誘惑と爲り、銀行の何ものたるや、如何なる事業家の機關に供されて居るかを辨へず、一意高利と云ふことに惑はされ、銀行破綻の曉に、元利金を失ひ、所謂一文惜みの百知らずの愚を見る。高田商會の破綻と共に、永樂銀行が支拂を停止したり、最近には村井銀行の支拂停止が村井一族の諸事業の不振に端を發したことの如き、何れも此適例であるから、預金者は預金利子に於ける些細の高低の如きは、之を眼中に置かず、銀行の選擇を愼重にしなければならない。唯大銀行の本支店は日本橋京橋若しくは麴町の一部分(丸の內)に偏在し、他の廣い住居區域に存在しない(安田銀行の支店は隨分多くの所に在ることは世人をして大銀行に近づかしめるに就て、重大なる妨碍と爲る。私は此點に於て、大銀行の支店增設の行はれる一方に小銀行の合併丼に增資に對して、大に期待せざるを得ないのである。從來此點に就ては、我國に於て、種々の議論があり、增資合併の必要も認められて居るに拘はらず、常に議論倒れと爲るの趣きを免かれなかつた。新銀行法に於ても、或る期限を定めて、小銀行の增資なり、合同なりを促進する規定が設けられて居るが、隨分緩漫なるものであつて、是れのみで我國銀行の面目が一新されることは望まれない。私は倫敦に五大銀行が所謂ビッグ、ファイヴなる名の下に、營業して居る狀態を見て、感慨に堪へざるものがある。而して斯る狀態を期するには、公衆の自治に賴らざるを得ない。即ち公衆が銀行に預金をする場合には、少々位預金利子の高いことに、眩惑されず、機關銀行や、小銀行を相手にせず、更に進んでは銀行重役の人物殊に投機的性癖を持つ人か、健實を事とする人であるか、其銀行の取引先は重に如何なる流儀の人々であるか、其銀行の背景と爲つて居る財閥なり、富豪なりは如何なる地位を占めて居るかと云ふ諸點にまで、注意を及ぼすに至つて、始めて公衆の力に依つて、銀行制度が改善される道理であつて、單に政府の監督などに依賴して安んず可きではなからう。政府は現行銀行條例の下に、危險と認めた銀行に對しては、營業の繼續を停止する權能を持つて居るのであつて、是れが政府の銀行に對する監督權の重大なるものである。而して官報や、新聞紙上に揭げられる記事に據ると、大藏省から此種の命令を受ける銀行は時々あるが、何れも無名の小銀行のみであつて、聊かなりとも知名の銀行にして、斯る處分を蒙つたものはない。然らば知名の銀行は絕對に安全であるかと云へば、然らざることは、今回數多の銀行が相次いで支拂を停止した事實に依つて、明瞭である。若しも斯る銀行に對して政府が事前に營業を停止したなら

ば監督の效果も自ら發揮されたと稱するを得るが、事實は斯の如く爲らない、今回破綻した銀行の危險であることは、消息通や、早耳筋の間に喧傳されて居つた所であるのに、政府は彼等に對して、何事をも爲さず、突如の支拂停止に依つて、預金者を驚愕せしめたことの如き、卽ち政府監督の如何に無能であるかを表明して、餘りありとす可きであつて私が政府の監督に重きを置かざる所以である。

今度破綻を暴露した銀行を一瞥して、私の直に感ずることは、左の諸點であつて、將來銀行の良否を識別する參考にも爲らうと云ふ考への下に、左に列記する。

第一、日本屈指の富豪であれば兎に角、其れよりも段違ひの富豪――或は目星しい資産家位に過ぎない者が銀行業を經營し、公衆の信用を受けやうとするは途方もないことであり、寧ろ僭越千萬であること。

第二、其れも三井、住友、安田、三菱の如く、主人は若隱居同樣の地位に居り、相當の雇人を置いて、營業させるならば兎に角主人自ら銀行の頭取と爲つて、業務を經營するが如き、危險千萬の話であつて、表面は縱ら株式會社であつても斯る銀行は個人事業と異ならないこと。

第三、其れも創業の主人であれば、如何なる難局にも當り得やうが、二代目三代目と爲つては流石に唐樣で賣家札を書くまいが、銀行業を安心して託するを得ないのは、分り切つた次第であつて、今回の破綻亦已むを得ないと見られること。

第四、殊に中流富豪の癖に、專心銀行業の經營に沒頭せず、他に幾多の業務に關係して居り、是等の事業に銀行の資金を注入して、憚らざる有樣であつては、銀行業が事業界の不振と共に、苦境に陷るのは、當然であること。

私は今後銀行の良否を識別するに就て、世人が機關銀行や、小銀行に近づくの危險であることを今回の銀行破綻に就て、充分に記憶されることを望んで已まないのである。

郵便貯金

銀行にも危險千萬のものがあり、安全確實の銀行は預金利子が低い、利子の低いのを覺悟して、安全確實の銀行に預金をするのも一策であるが、斯る銀行は三菱とか、安田とか堂々たる門戸を張つて居り、本店には勿論の事、支店へも十圓とか、二十圓とか云ふ端したの金額を預入れるのは、具合の悪いとか、體裁の善くないとか云ふ考へがある。其れ等の人々に向く貯蓄機關としては、郵便局と貯蓄銀行との二者が擧げられる。郵便貯金は一口十錢以上二千圓までを限度とし、現金でも一錢二錢三錢の郵便切手でも、各府縣市の債券や、其利札でも預入れるを得るし、年金や恩給も貯金に振替へられる。利子は現今の所普通貯金に對して年四分八厘であり、据置貯金と稱し、三個年以上十ケ年以内拂戻さない條件の下に、預入られる貯金に對しては、年五分四毛であるが、同一月内の預入金中、十錢以内の端數には利子を付けず、又預入れた月と拂戻した月とには、利子を付けない。――是等は貯金者に取つては、有利の條件ではないが、何と云つても、貯金に對する保障の安全であることゝ、三等郵便局が全國津々浦々に行き渡つて居つて、何人が利用するにも不便のないと云ふことが郵便貯金の强味であると云へる。

貯蓄銀行

郵便貯金と相對して、利殖の機關と爲るものは貯蓄銀行であつて、一錢以上幾らでも預入れられるし、其一口の預金最高額にも制限はなく、利子は現今の所、年四分八厘であつて、之を月計算とし、毎月十五日前の預入れであれば、其月分の利子を付け、毎月十五日以後引出しであれば、其月分の利子を付ける。定期預金は一口十圓以上から取扱ひ、期限も三個月、六個月、一個年に分たれ、利子は六分五厘見當である。普通の貯金の外に、据置貯金とか積立貯金とか云ふ貯蓄の奬勵を加味した方法も行はれて居る。

兎に角貯蓄銀行の業務は中産以下の階級に居る人々の貯蓄金を取扱ふことを主眼とする。其貯蓄金は彼等に取つては、粒々たる辛苦の結果であつて、其大切であることは、他に比類を見ない。然るに我國に於ては、從來貯蓄銀行で支拂を停止したり、續いて破產したりするものが時々あつて、貯金者を苦しめること少なしとしなかつた。而して斯る貯蓄銀行が失態を演出した原因は如何なる邊に在るかと云へば、第一貯蓄銀行を取締る法律はありながら、隨分寛大であつて、取締の實效を擧げるに至らなかつた、第二銀行重役の貯金者に對して負ふ可き責任が徹底して居らなかつた、第三貯蓄銀行の營業資金運用に對する制限が不充分であつた、第四貯蓄銀行が普通銀行の爲めに、營業資金を調達する機關に供され、貯蓄銀行の看板で吸收された貯金が自由に普通銀行の利用する所と爲り、普通銀行の失敗と共に、貯蓄銀行亦其影響を蒙ることの諸點に外ならなかつた。斯くて現行の貯蓄銀行法に於ては、貯金者保護に必要ある規定を設け、第一、貯蓄銀行は預金總額の三分の一以上の金額を國債（此內若干は地方債社債株券でも宜しい）の形で、國庫に供託し、第二貯蓄銀行の預金者は斯る證券に對して、他の債權者よりも、優先權を持ち、第三貯蓄銀行の取締役は預金の辨償に就て、連帶責任を負ひ、此責任は退任登記後二年間免るを得ざることの外、貯蓄銀行の營業は大體左の數種に限られて居る。

一、國債、地方債、社債又は株式の募集引受若しくは買入れ、

二、國債其他第一項に掲げる有價證券を質とする貸付

三、不動產を抵當とする貸付

四、預金者に對し、其預金額を限度とする貸付

五、限期を定めて、一定金額の給付を爲す約束の者に對して、其給付金を限度とする貸付、

六、銀行への預ヶ金又は郵便貯金

七、銀行引受手形の買入れ

右の如く營業の科目を限つたゞけでは、貯蓄銀行の營業は必ずしも安全なるを得るとは云へない。若しも貯蓄銀行の貸付が或る一人又は少數の取引先に對し、又或る限られた種類の擔保品に對して、偏倚して行はれたならば、其人の營業上の失敗若しくは擔保品の價格下落に依つて、如何なる危險を生ずるか測り知るを得ないので、貯蓄銀行法は第十二條に於て、擔保として受入れる一會社の株式は該會社總株式の五分の一に限り、又一人に對する貸付金額は拂込資本金及び準備金の十分の一に限ることゝした次第である。今度の銀行破綻騷ぎで、渡邊銀行と同一資本系統に

屬する「あかぢ」貯蓄銀行も支拂停止をしたが、現行貯蓄銀行法は如何なる程度まで「あかぢ」貯蓄銀行の預金者を保護することゝ爲るか、實際問題として、吾人の注目す可き所である。

信託會社

信託事業は我國に於ては、創始の時代に居るものであつて、將來何處まで發展するか、今日の所では、何とも判斷するに難きものがある。動產不動產に關する信託は信託會社の職務として重要視す可きものであるが、我國今日の實際に於て、利殖と云ふ點から見て、信託事業の最も多く働いて居るのは、金錢信託であつて、一口の金額五百圓以上を二個年の期間に於て、或る人即ち委託者が信託會社即ち受託者に信託すれば、受託者は其運用に依つて得た利益の內から、手數料を差引いて、殘額を委託者に交付する。銀行の定期預金に於ては、其預金は銀行の資產と爲るが、信託會社は自己の財產と信託財產とを區別するに、銀行の定期預金に於ては、銀行は一定の利子を支拂ひ、預金の運用に依る利益は總て銀行の利得とするが、信託會社に於ては、委託された金錢の運用に依る利益は委託者に支拂ひ、會社は手數料を受取るに止まる。尤も我國に於ては、信託會社は豫め標準利廻りを豫告して置く例に爲つて居るが、其れにしても一流信託會社の利子豫想は六分七厘見當であつて、一流銀行の定期預金利子よりも大分の高率に當る。斯くて信託會社の設立以來銀行の定期預金にして、信託會社に奪はれたものがある。信託會社の內でも、安田信託とか、住友信託とか云ふが如きは、其れ其れの銀行と異身同體であるから、定期預金が、信託預金に移つた所で、一資本家の事業全體から見れば、大した痛痒はないが、信託會社を持つて居らない銀行や、多少或る信託會社と聯絡はあつても、資本家の系統の違つて居る銀行の如きに至つては、此狀況に對して安んずるを得ず、銀行業と信託業との兼營制度を主張したが、是れは金融機關の體系上行はれる可からざる所であつたので、更に彼等は手を替へ、從來一年を以つて期限とした金錢信託の期間を二年とするやうに政府を動かして、命令を改正させ、銀行定期預金の信託預金に移される勢を抑へることに努めて居るのである。

有價證券投資

確實なる銀行に幾萬幾十萬の金錢を定期預金にして置く、信託會社に同樣の金錢を信託して置くと云ふことは、利殖の方法として、最も簡單には相違ないが、此外に有力なる利殖法としては、有價證券投資と云ふことがある。有價證券と云つても、國債、地方債、株式社債券等が數へられ、其種類に依つて、利殖の目的物としての價値に幾許かの差違がある。國債は各種證券中、最も確實であり、賣買も容易であり、利子は四分又は五分であるが、所得稅は課せられない。今日四分利公債の時價は七十六七圓、五分利公債で償還期の遠いものであれば、時價は八十六七圓であるから、收入利廻りは五分四五厘から八九厘に當るし、右の市價で公債を買入れてから、額面で償還を受ければ、買入れた時の市價と額面との差を利する。斯くて世間には政府に向つて、抽籤を以つて、公債を償還せよと云ふ說が起る所以である。

我國の國債は無記名利札付であつて、毎半年に於ける利拂期には、其時の利札を截取して、日本銀行に就て、利拂を請求しなければならない譯であるが、取引銀行に於て、預金に受入れて與れる。所有證券が抽籤に當れば、元金の償還を受けること〻爲る。然し一々官報で當籤番號を見て、自分の所有に係る證券が如何に爲つたかを知るのは煩雜であるから、銀行の如き多額の證券を取扱ふ場合には兎に角、個人であれば、郵便局なり、取引銀行なりに證券を預け入れるのが宜しいし、信託會社に證券信託とするのも、亦可なりと云へる。

地方債や、會社の發行に係る社債も有價證券放資の目的物と爲り、國債に於けるよりも、利廻りは幾分か高い。然し地方債であれば、東京市債とか、大阪市債と云ふやうなものならば、賣買區域は廣く、賣却に自由であるが、縣債などの場合には、其區域の狹いことがあるかも知れず、社債に就ては、餘程之を發行する會社の資産又は營業狀態に注意を拂はなければならない。現に最近一二の襤褸會社の發行した社債が大分問題と爲つて居つた例もある。

社債券中、特色を持つて居るのは、勸業債券と復興貯蓄債券とであつて、兩者とも割増金付償還の特典があり、前者ならば一等五千圓以下、後者ならば一等三千圓以下各等の割増金が償還期に於ける抽籤に依つて與へられるので、相當の人氣を惹くやに見へる。然し何れの債券にした所で、抽籤に依つて、割増金を獲得しやうと云ふが如きは、萬々一の僥倖を望むものであつて、利殖の勘定の内に入れたならば、大なる間違である。其れよりも債券を利用して、利殖しやう、單に利子を受取るより以上に、利殖を謀らうとするならば、抽籤後に債券市價の低落した時に買入れて、抽籤前債券市價の騰貴した時に賣却し、賣買價格の鞘を儲けるのが、一番確實なる利殖法と思はれる。

有價證券投資中、最も多くの人の興味を惹くものは株式の購入又は賣却であつて、普通の投資法としては、現物を買つて、決算後に配當金を受取り、株式市價に値上りを來した際に、賣却して、賣買價格の鞘を益すると云ふことだけなれば、誰れでも間違なく行はれる、唯確實なる株式を選ぶこと、賣買を依頼するに就て、正直なる株式仲買店を以つてすることは飽くまでも氣を付けなければならない。近頃も岩井某と云ふ株式仲買店に何か不正の事件があつたとか、其前には廣瀨某と云ふ仲買業者が拘引されたとか、兎角面白からぬ出來事があるが、世間の評判なり、經驗ある人の手引なりで、確實なる仲買店を尋ね當てたとして、次に起る問題は何が確實なる株式であるかと云ふことである。株式の市價は一般に金融市場の狀況なり、經濟社會の形勢なりに依つて、常に變動して已まない、現に此間中金融の大分緩漫であつた爲めに、諸株式の市價は全體に騰貴し來つたが、三月に入つて、諸銀行に支拂停止を爲すものが續出し、經濟社會の形勢險惡に爲つて、株式市價に不利の影響を及ぼしたことの如き、右の例證を以つて見るを得るが、斯る一般的騰落の間に立つて、或る株式と他の株式との間に、市價に懸隔があり、一方は目覺しく騰貴するが他方の騰貴は著しくなく、寧ろ前者の下落することは些細であるのに、後者は大なる程度に於て、下落するのは、何故であ

るか之に對する判斷が卽ち優良株と、不良株との岐れる所以であるが、株式價格の高低を支配するに就て、最も直接の關係のあるのは、次期に於ける配當率の豫想であつて、此配當率と市場に行はれる利子步合との如何に依つて。株式價格は如何やうにも左右される。而して配當率は前期から當期に繰越された繰越金の多寡とか、配當平均積立金の多寡とか云ふ項目の金額に依つても或る程度まで動くが、更に大なる關係を持つのは、當半季に於ける營業の成績如何であつて、此點に於て各種の事業に於て、諸種の會社に於て、其れ〴〵異なつた見地から、配當率の見込が立つことゝ爲る。會社の株式に放資することの興味は此邊に繋がるが、素人が盲目滅法に放資をして、手を燒くやうなことも、斯る見込み違ひから生ずるのである。

例を紡績業に取つて云へば、或る會社は創業以來、年を經て、固定資本の勘定を隨分銷却して居るとすれば、其經營は樂であり、更に積立金として所有する財產も相當に大なるものであつて、其運用から大なる利益が擧げられるに於ては、此點に於て、株主としても安ずるを得る道理であるが、紡績會社の經營に於ける成敗は或る程度まで、原棉買付の如何に依り、又或る程度まで既製品買約の如何に依る。原棉の安値時代に、多分の買付をして、其終つた頃から、原棉の價格が騰貴し出し、此騰貴の勢に動かされて、內地の綿絲市價が騰貴し、上海其他支那諸地方の絲價も亦上進し、此上進した相場を以つて、多量の綿絲が輸出される勢とも爲れば、紡績會社に取つて、斯る結構の事はない。斯る兆候の現はれつゝある際、安値で紡績株を買入れて、相當の配當を受取り、高値の餘勢の續く間に、之を賣放つが如き、放資の上乘を得たものであるが、折角綿絲が製出されながら、支那に內亂が起つて、市場が騷いで居るとか、銀相場が低落して、綿絲の對支輸出が困難に爲るとか云ふ事情が起れば、以上の計畫は少なくとも一時は空望と爲らざるを得ない。是れが株式放資に伴ふ困難である。

然し之を全體から云ふと、或る株式を買つて見たり、賣つて見たりして、賣買値段の鞘を儲けることも、利殖の一法には違ひないが、餘りチヨコ〳〵立廻つた所で、儲けるより却つて損をすることもある。寧ろ自分が或る株式會社に信用を置き、其會社の內容も宜しい、事業も有望であり、經營者も誠實であると見込んだ以上は、何時までも其株式を所有して、配當を受取り、會社が增資に依つて、新株式を株主に分配するときには、之を引受けて、拂込を爲し、幾年かの後に次第に持株を殖し、餘力があれば、更に他の確實なる株式に手を擴げるのが、泰然たる態度の下に、資金を株式放下に依つて、利殖する道であると云へるであらう。

利殖の根本は誠實

世間には一攫千金とか、鷲掴みとか云ふ言葉があり、所謂成金者流の如きは、何れも之に依つて、產を興したのであつて、一割にも付かぬ利子に利子を生ませて、貨殖の道とするが如きは、甚だ手緩いやうに思はれるかも知れないが、成金者流の如きは、投機に成功して、一場の奇利を博したものであつて、彼等の多くは、此偶然の利益を守るに堪へず、幾年かの後には、却つて產を破つたり、破らないまでも、非常の逆境に沈淪する者の少な

からざるに反し、微を積み、細を重ねて、多年撓らざる底の考へを以つて、利殖に從つた人には誠に危氣がなく、確に其目的とする所に達し得られる、稼ぐに追ひ付く貧乏なしと云ふ昔からの諺は誠に世人を欺かないのであつて、成功の半面には、何としても勤儉とか、力行とか云ふ篤行が伴つて居らなければならず、同時に堅實なる方法の下に、利殖を謀ることは、勤儉力行の果實を大にして、之を成熟せしめる所以である。兎と龜との競走で、龜が最後の勝を制すると云ふお伽話は昔から人々の間に傳へられて居る。株式市場や、其他の投機市場に出入して、勝つた負けたで、取引を爭つて居る人には卽ち兎であつて、此兎の中で、運の好い人は大なる成功を收めて、此危險なる競走場裡を脫し去る、故今村淸之助氏とか、故小池國三氏とか云ふやうな人々は卽ち是れであり、又株式仲買人でなく、單に株式や、米穀其他の商品の定期取引を爲し、成功して、產を成した後に、投機と緣を絕つた富豪もあらうし、生涯投機市場の塵埃に埋められて居る人もあらう。然し中產以下の人々が利殖の早道、此處に在りと考へて、投機市場に出入するが如きは、絕對禁物であつて、財を失ふばかりでなく、身を傷けるが如き例は多々にある。急がば廻れと云ふのは、誠に世間の實情を穿つた言葉であつて、私は中產以下の人々の利殖に對しては、此言葉を薦めるのが、最も當つて居ると認める。

若し其れ中產社會の人が勤儉力行に依つて、貯蓄に從ひつゝある間に、死亡するが如き不祥事の起る心配があるとすれば、生命保險に加入して、此危險に應ず可きであり、生命保險にも、利益配當付の如きものがあつて、死亡の危險を保護すると共に、或る程度まで、利殖の方便と爲ることも、中產社會に取つて、便利とする所であり、不時の必要に際しては、保險會社に就て、比較的低利を以つて、資金を借入れる便宜もある。保險に加入してから、所得の狀態に變動を招き、保險料の支拂困難と爲つて、不利なる條件の下に、解約の已むを得ざるに至ることは、保險契約を締結しやうとする者の懸念する所であるが、此點に就ては、所謂自働的失效防止や延長定期保險變更の便宜手段があり、外國保險會社の如きは盛に此便法を利用して居り、保險契約者としては、別に右の點に關して配慮することを要しないのである。

要するに私は利殖の根本條件として、人間生活に於ける誠實勤勉を基礎とする必要を認め、一方に投機や奇利を排斥しやうとするものであることを切言して、此簡單なる說明を一先づ打切らうと思ふ。

上海騒擾記

井上紅梅

上海では毎年一月十日頃から二十日頃に掛けてピストル强盗が多い。それは支那正月が近づいて年越の苦し紛れに命掛けの仕事をする奴があるからである。今年はピス强の外に、工場監督、探偵、巡査、職工などの暗殺が頻々として行はれる。

支那街の戒嚴はずつと前から布いてあつたが、二月一日は舊の大晦日に當つてゐたので、その日は警察も手を弛めて夜間の通行を許した。

電車の罷工はずつと前に解決して休日の出勤は倍額の賃銀を支拂ふことになつてゐたので、お正月も滯りなく電車が運轉した。

爆竹は銃聲に紛らはしいので、これも前から禁止してゐたが、支那の習慣であつてみれば仕方がないと、租界警察では三元日の間、特に許した。只獅子舞丈けは群衆の集合を恐れて固く禁止したが、元日の午後武昌路の邊に忽ち此獅子舞が現はれたので、白人巡査は旗を抑へて群衆と小衝突を起し支那料理屋に逃げ込んだ。群衆と印度巡査の間に一二の負傷者を出したが大したことにもならず解散した。武昌路は俗に廣東街といつて廣東人の多く住むところであつたが、間もなく又一隊の獅子舞が路次の中から現はれ、今度は面當てのために虹口警察署に繰込んで獅子を舞はせた。もちろん獅子も旗も銅鑼も皆沒收されて群衆は追拂はれた。舊正月はいつでも淋しいが、今年は一層淋しい。門扉の上の赤い春聯の上に過激の文字が交つてゐるのは、外部から重ねて貼付けたものらしい。兎に角新年五日間の休業は春風駘蕩たるものであつた。

その間に浙江の西南では絶えず戰つてゐたが、聯合軍は龍游、蘭谿に破れて、二月三日(舊正月二日)には杭州を去る十哩ばかりの桐廬、富陽に退却の報が傳つた。

同じく六日頃には印度の英兵が上海に到着した。十日頃には聯軍が盛り返したような説もあつたが、十四日には臨安を失ひ、余杭の激戰があつて十五日南軍は愈々錢塘江の岸に現はれた。

十六日は英國の本國兵が上海に到着した日であつたが、其晩から翌日に掛けて、孫軍は杭州を棄て、松江に退いた。出發の際、杭州では多少の掠奪があつたが、重に停車場附近の小民家であつた。そして十八日には杭州は確實に南軍に手に入つた。そこで總工會は南軍杭州占領

祝賀のため十九日より向ふ三日間上海總罷業の命令を發した。先づ上海中央郵便局の各門がとざされ、蘇州河に臨んだ裏門だけあけて、そこに糾察隊の徽章をつけた郵便脚夫の一團が嚴重に見張りして通行を禁止した。それより前、局員は局長に向つて會議のため三階使用を申込んだが、局長はこれを拒絶した。もはや共産思想は局内に沁滲してゐるので、局員は出勤してゐるが何事も手を着けない。脚夫は自ら糾察隊を組織して「打倒孫傳芳」「打倒軍閥」「打倒帝國主義」の旗を掲げて裏門を嚴重に警戒した。中央局がそういふ風だから各支局は殘らず門をしめた。電車は午後からだん／＼へつて四時頃までには全部とまつた。午後七時にはバスも亦とまつて車夫の鼻息が馬鹿に荒くなつた。

上海總工會は、閘北の東横濱路にあつたが、既に閉鎖されてゐたので、今何處にあるか分からん。或は佛蘭西租界にあるといひ、或は西門外にあるといひ、租界警察も支那警察も眼を丸くして搜してゐるがいかにも神出鬼沒で捕捉することが出來ない。

するとその日も忽ち、上海停泊中の各汽船に糾察隊なるものが現はれ、宣傳ビラを配布して三日間停業を命じた。若しこれに背反したら容赦なく射殺すといふので船員は恐れて仕事をしない。怡和洋行や太古洋行はその前から停船してゐた。漢口九江事件があつて、英人の引揚を完了すると同時に停船した。招商局の船は聯軍に徵發されてゐるので積荷や船客を取扱はない。ひとり我が日清汽船のみが、長江筋を獨占してゐたが、此命令が出たので停船の已むなきに至つた。

大阪商船、大連汽船も碼頭苦力の罷工に遇ひ荷上げも荷卸しも出來なくなり、已むなく立往生してゐる。郵船のみは辛くもその厄を免れて日本行歐洲行を無事に通過してゐる。

新年の休みに四名の日本人は浙江の硤石に鳥打に行つたが十日も二十日も音沙汰がないので家族は心配して搜索願を出したが、此騷動の中に無事に歸つて來た。聯軍は退却中民家を荒し、到る處で射擊をしたので難を小舟に避け數日間飲まず食はずでゐたが、其地方の總商會の厄介になつて漸く歸ることが出來たといふ。

聯軍の敗兵は江蘇浙江境の松江附近に皆集つてゐるといふ。聯軍の損害は三千位に過ぎない。其他は自動的に背進して陣地を放棄したといふ。安徽と江蘇には南軍は未だ一指も染むことは出來ない。然るに「打倒孫傳芳」の旗が早くも上海に揚つた。孫傳芳は此抑へ難き憤怒に驅られたであらう今まで戒嚴令を布いて共産黨や國民黨の運動を取締つて證據歷然たる者のみを軍法に照して射殺した許某といふ男が西門外の活動寫眞館の前で捕縛され翌日銃殺されたのは、彼は南軍第何路司令許某といふ名刺と、數冊の過激文書を持つてゐたからである。ところがもうかうなつてみると、そんな手溫いことでは中々納まりがつかない。往來でも茶館でも過激な言辭を弄する者は片端から引捉へて其場で首をチョン斬つた。復業を拒む職工は勿論、宣傳ビラを拾つて見る者さえもつかまつた。僅か三日の間に九十名の首が斬り落された。

斬り落された首は耳から耳へと金串を通して一つ／＼電信柱に刺してある。遺族は泣きながら胴體を引取つた。往來には碧血が流れて、血腥い風が胸惡く吹く。これには流石の共産派も驚いた。

二十二日の夕刻には江南機器局前に繋いであつた建威、建康の二艦は、機器局襲撃の便衣隊に應じて忽ち發砲した。砲彈は佛租界五個所の外人住宅に落ちて支那苦力が一人負傷した。けれど取締が嚴重であつたので六十名の謀叛人は捉へられ、内三十名は斬罪に處せられた。

そこで租界外にある上海西部の紡績工場は俄におとなしくなり神妙に働き初めた。今まで偉張つてゐた惡職工は鳴りをしづめた。

ところが東部楊樹浦方面の紡績工場は怠業に繼ぐに罷業、罷業に繼ぐに怠業――或時楊樹浦の茶館で支那巡査が茶を飲んでゐると、忽ち後からポンと一發。彈は後腦から頸動脈を貫いて即死した。兇漢は巡査の携帶してゐた短銃と彈丸を奪つて悠々立去つた。或時は女工がしらの住所を襲つて、そこで夕飯を食つてゐる夫婦の職工を殺した。或時は工場内に住んでゐる忠勤職工が、日曜日に錢湯に入つて身體を洗つてゐると忽ち銃聲が起つた。裸體の浴客は悲鳴を上げて往來に飛び出した、忠勤職工は豫ねて自分が狙はれてゐるのを知つてゐたので、逸早く裏手のソフアーの下に隱れたが、兇漢は隅々まで檢分し、遂に彼を捜し出して銃殺した。

こんな事件が毎日二三件あつて大に忠勤職工の心膽を寒からしめたが、租界警察では一人も犯人を擧げることが出來ない。只一度日本人巡査の手に依て或る犯人を逮捕したが、その男の自白する處に據ると、銀十弗とピストル一挺を渡された。忠勤職工を打殺して旨く逃げおほせれば銀二百弗を支給され、革命軍の下士官に採用するといふ約定の下に兇行を演じたといふ。そこで教唆者の所在を尋ねるため暫く監禁して裁判を延期した。

租界内の法院では死刑の宣告は絶對に下さない。死刑の宣告を下すべき重罪犯人は支那側の手に渡す。支那側は再審して軍法を以て死刑に處す。

總工會の全罷業命令は孫傳芳の高壓手段に依つて目的を果さなかつた。そこで彼等は糾察隊を總商會に派遣して上海の全罷市を慫慂した。罷市とは不買同盟のことをいふので、こればかりは商人の力を借りなければ出來ない。總商會長傅筱庵は圓滿な好人物で、現在罷市の成り難き事情を述べてゐる時、租界警察は巡査を派遣したので、糾察隊は愴惶として逃げ去つた。

だら〳〵の罷業は一週間ばかり續いた。船は三日の罷業を濟ますとすぐに出帆した。電車もバスも五日目にはどうやら出揃つた。百貨店も一時に店を開いた。只郵便局だけは一週間完全に罷業した。そのあいだ水道ガス電燈をとめるといふ噂があつたが、工部局では早くも手を廻して白露人をやとつて萬一に備へた。

山東軍の江蘇入りは一般商民の反對を受けたが、孫傳芳はモウどうあつても張宗昌の來援を乞はなければならぬ危機に迫つたので、十七日頃から頻りに交渉を初めた。張宗昌は前から豐饒なる江蘇浙江に垂涎してゐるので喜んでこれに應じ、二十三日南京に行つて孫傳芳と會見し、先づ三萬の兵を江南に輸送した。彼れは北京政府から五百萬元の山東軍票使用の許可を得て、南京、鎭江、蘇州、上海に兵を割振つた。南京鎭江の住民は軍票の使用を恐れて皆戸を閉ぢた。鎭江では總商會の會議の結果、五萬元丈けを中國交通銀行に保證させてその捺印あるもの丈けを許した。上海では税關の二分五厘附加税を擔保に二百

五萬元の借款を申込んだが總商會はハネつけた。總商會は租界內にあるから如何ともしようがない。

山東海防總司令畢庶澄は二十四日上海に到着した。『わたくしは上海守備の任に當つてゐるのです。前線には孫軍を配備してありますが今度は負けません』

吳光新は淞滬商埠督辦に擬せられて上海南京間を行きつ戻りつした『今度は單なる勢力爭ひではない。人民のために闘ふのです』といつた。

孫傳芳は南昌戰以來不平で引込んでる盧香亭を天津から呼び戻して敵前に廻した。孟昭月の兵は全く戰意がないので前線からよび戻し武裝を解除し江北に送られた。周蔭人の兵は松江から退いて山東第八師が代つて守備の任に當つた。同時船や自動車の徵發が盛んに行なれた。浦東側に繫留してあつた海洋社のチャーター船は日本國旗を揭揚せず、支那人ばかり乘組んでゐたので一旦徵發されたが、事情がわかつて返還された。小蒸汽や舢板は手當り次第に徵發された。日清汽船が領事館前に着けることになつたのはテンダーの徵發を防ぐためである。支那人の小舟は徵發を免れるために一齊に日本國旗を揭揚した。

租界警の巡查は英人、日本人、印度人、支那人の四種で支那巡查が尤も多數であるが、その多數の支那巡查に罷業の空氣が漂つてゐるので如何にも役に立たなくなつた。工場內に暴動が起つても支那巡查はこれを鎭壓する力はない。日英、印度巡查に依つてやうやく制禦される。白晝往來で人が射殺されても支那巡查は見て見ぬ振りをしてゐる。兇漢が逃走してから巡查は被害者を助け起して病院に運び込むのである。

郵便局の罷業はいつまでも續きそうだつたが、日英の巡查は糾察隊を解散せしめ、强硬なる首謀者を拘引して郵便事務を强ひて扱はせた。そこで二十五日頃からボツ／＼配達するやうになつたが、此際紛失した郵便物は隨分少くなかつた。日本人は船まで郵便を出しに行き、到着の分は日本人俱樂部に送つて、郵務司の指揮の下に支分けをなし、各町內會の代表者はそれを受取つて個人に配達した。

外人支配の下にある租界內は此時甚だ不便を感じた。支那巡查支那探偵の恐怖は警察機能の支障を來たし、兇漢の逮捕も出來なければ陰謀者の檢擧も出來なかつた。然るに支那町の方では高壓的にドシ／＼處分したので探偵も巡查も安心して活動することが出來た。二十四日の晚には閘北の上海大學が檢擧され、過激宣傳文書ピストル彈丸等を押收し、學生六十名、附屬中學生三十名、中華女子大學寄宿生二十名逮捕され、即時に銃殺した。すると共產派は租界內に逃げ込んで盛んに活動し初めた。暴力團、鋤奸團といふ一層獰猛な暗殺團が現はれたのは其頃からである。租界警察は今は何とかしなければならない。そこで茶館內にうろついてゐる浮浪人を片端から檢束して臨時法院で取調べドシ／＼聯軍側に引渡した。聯軍側はこれを前線に送つて人夫に使つた。浮浪人は共產黨のお先きに使はれ易い恐れがあるからである。

伊吉利の兵隊は一月頃から續々到着したが、二月末には一萬一千の數に上つた。彼等の營舍は租界西部の末端、ゼスフヰールド公園であつた。彼等は部署を定めて駐屯し、時々市內を巡邏した。だが未だ大

じたことにもならないで、大馬路の競馬場で各國海軍を相手に一大競技會を開いたが、二十五日には愈々出動した。

上海の義勇隊は、英、米、日、葡、伊、スカンヂナビヤ支那隊を合せて總勢千五百名、大馬路競馬場で閱兵を行ひ、市中行軍をする積りであつたが、便衣隊の襲擊などといふ謠言が盛んにあつたので、民衆と衝突を避るために閱兵式だけ行つて市中行軍を見合せた。

日本の海軍は利根を眞先きに平戶、天龍、堅田、第十八驅逐艦、天津風、時津風、濱風、磯風などが次ぎ〳〵に到着し、千四百名の陸戰隊を上陸させた。亞米利加の軍艦も續々到着して之れも亦千貳百名の陸戰隊を上陸させた。そうして各々日を定めて市內行軍した。日本陸戰隊は虹口中央部のベビーガーデンから北四川路末端の新公園に入つて司令官荒木少將の檢閱を受けた。三月に入ると形勢ます〳〵逼迫したので五十鈴、川內の二艦が加へ陸戰隊の總數千五百名に上つた。罷業は一寸おさまつたようだが、暗殺團の活動は少しも滅じなかつた。五十萬の勞働者中工會に籍を置く者二十八萬七千餘であつた。十日には漢口で中央執行委員會が開かれ、蔣介石、張靜江に反對し、會議の結果、蔣を平委員に落した。出席委員三十三名中三分の二は共產派であつた。

十三日上海佛租界國民黨本部で孫文追悼會が行はれ右傾左傾の大衝突が起り毆擾を極め負傷者數人を出した。

十四日聯軍は宜興方面を奪はれ、白寶山、鄭俊彥、常州へ退却。蘇州、松江は無事ではあるが、畢庶澄の態度あやしく、又長江艦隊司令官楊樹莊は南軍に妥協したので、呉淞沖の軍艦は白日靑天旗を揭げた。

安慶は陳調元の妥協で南軍の手に入つたが、十五日には南軍既に秣陵關に迫り、南京は危險であるといふ報導があつた。そうして十七日から南軍の總攻擊が初まつた。蔣介石は黨內の軋轢を覂ひて統一を急いだのであるといふ。危險は日に〳〵せまつて上海は極度に緊張して來た。

租界と支那町の間は鐵條網を設け、彈除けの金網を張つたが今度は更に土囊を築いた。そうして路次といふ路次には皆鐵條網を張つた。彈除けの外に住んでる外人は甚だ心細くなつた。佛租界と支那街の境には永久的の鐵門を設けて嚴重に防備したが、その鐵門さえ心細くなつて、英租界と佛租界の境に更に嚴重なる防禦工事を施した。目的は敗兵の租界亂入を禦ぐのであつたが、それよりも一層恐ろしいのは共產派の租界攪亂である。これは防備の內側にあるので懷中から火事が出るようなものである。

英軍は重に舊英租界及びその以西の地を守つてゐるが、虹口にも來てゐる。日本陸戰隊は蘇州河以北の虹口及び北四川路を守つてゐる。北四川路は非常に厄介な處で、老靶子路以北は僅に一條の道だけが租界で足一步路次に入ると支那町である。それから先きは武裝した外人は一步も入ることが出來ないのである。その代り又武裝した支那人はこの一條の道路に出ることが出來ないのである。そして道路の兩側は支那町である。その支那町に約三千人位の日本人が住んでゐる。即ち鐵條網の外の外人である。筆者もその支那町の大陸里といふ處に住む一人であつた。

二十一日午後三時頃、パチン〳〵といふ音が盛んにしたので、寢臺をしてゐたわたしは起上つて二階の窓から覗くと、路次口の鐵柵門の外に平服を着た男が四五人小銃を下げて通る。あとから藍色の職工服の野次馬が大勢跟いてゆく。向ふの家の主人は煙草會社の技師でいつも朝早く出て夜遲く歸るのであるがその日は午後から歸つて來てゐた。

「何かあつたのですか」とわたしはきいてみると、

「けふは二時から三時まで上海全罷業です。便衣隊が警察を襲つて小銃を奪つたのです。橫濱橋の入口には糾察隊が詰てゐて通行人のからだを一々檢査してゐます。なあに大丈夫ですよ。もうぢき片附いて仕舞ひます」と非常に樂觀してゐる。彼れは夫婦の間に二人の子供と老人と五人暮しである。その中パチン〳〵と短銃の音が盛んに聞こえる。そこへ雜貨の小僧が自轉車に乘つて眞靑な顏をして來た。彼は注文してあつた澤庵と梅干を出し、

「わたしは浙賢ですから、かうやつて歩いてゐますが、北四川路の通りは皆戶をしめてゐます。廣東人の店は皆靑天白日旗をあげてゐます。氣をつけないとあぶなうがすよ」と彼は匆々立去つた。彼が行つて五分と立たぬうちに忽ちどしんと一發、素晴しい音がしてガラス障子がピリ〳〵と鳴つた。續いてドン、カツシユ。ドン、カツシユ。と小銃を亂射する音がする。今まで面白がつて見てゐた人達は此時悲鳴をあげて、家へ馳け込んだ。その日は晴れてゐたが太陽が黃いろい。わたしは窓の戶をピタリとしめて部屋の中を行きつ戾りつしてゐたが、どうも心が落ち盡かない。そこで殘つてゐた酒をのんでよく考へ見た。此路次は袋地で入口に鐵柵の鐵門がある。戰爭はその門の前の沿道で行はれてゐるのだから割合に安全である。なまじい出ると却つて危いと思つていよ〳〵籠城することにきめた。そこで寢臺を奥の方に引寄せ、寢臺の下に毛布を何枚も敷いてその上にころがつて本を見てゐた。

夕方になるとます〳〵銃聲が激しくなつた。

スポン〳〵と短銃の音。

ドン、カツユと小銃の音。

どん、ぶるん、づしんと大砲の音がする。大砲の彈が屋根に落ちたら堪まらないと思つて亞鉛のバスを持つて來て、寢臺の欄の上に載せ頭の方を禦いだ。飯を食ふことも茶を飲むことも忘れてゐた。そうして彈の音ばかり氣にしてゐた、よく聽くと、短銃がいつも口切りで、スポンと打つと、ドンと小銃で答へる。一齊射擊はたいてい十分間每に行はれ、向ふが打つとこつちが打つ。そのあいだに機關銃の音がコト〳〵コト〳〵聞こえる。大砲は二十分乃至三十分間の間隔で打つ。

室內にあかりをつけて置くことは非常に危險なことであるから初めからつけずに置いた。路次內の街燈は八時頃までついてゐたが間もなく消えて仕舞つた。わたしは黑暗の中で眼を開けて寢てゐた。そのうちだん〳〵彈の音に馴れてうと〳〵したが、トキ〲づしんといふ大砲の音に眼をさます。それでも可成りよく睡れて眼が覺めたときには夜があけてゐた。彈の音は絶えず呻つてゐた。小便はバケツに取つてゐたので室外に出る必要もなかつたが、その時のどが非常に乾いてゐてお腹がすいてゐた。

弾は裏口の方から來るので、表部屋から裏部屋に出るのが甚だ無氣味であつたが、浴室に入り水道をひねてみると水がとまつてゐた。浴室も居間も皆二階である。そこで階段を下りて流し場へ行つた。頭の上にヒユツ／＼と弾がとぶ。幸ひ老酒の瓶に水を汲み込んであつたので、室内で米を磨ぎ二階へ持つて行つて石油コンロの上へ掛けた。老酒の瓶に水を入れてあつたのは漬菜の押に使用してゐたのだが、その水が今度役に立つてお茶を入れることが出來た。わたしは椅子に腰掛けて机の引出しの中から梅干と澤庵を出して大急ぎで茶漬をかつこみ、すぐに又寢臺の下に潜り込んだ。一齊射撃がだん／＼激しくなるので起きてゐると無氣味で堪らない。午後三時頃、暫く銃火の音が絶えたので近處の媽連（支那人）は路次口へ門番と話をしてゐた。その話が南軍贔負の話であつた。便衣隊は悠々と鐵門の外に徘徊してゐた。忽ち一齊射撃が猛烈に起つた。便衣隊も亦一齊射撃を以て應じた。射撃の下に忽ち女の悲鳴の聲が起つた。悲鳴は五分間ほどつゞいてパタリと靜まつた。おしやべりの女は腹部に血を流して彼女の家にかつぎこまれた。

夕方から雨がしと／＼降つて來た。弾の音はトギレ／＼に聞こえてゐた。

翌朝目を醒ますと鐵門の外で盛んに話聲がする。その言葉は南方訛である。話の末に『萬歳』といふ聲がする。わたしは戰爭が濟んだことを知つて二階の窓から覗いて見ると通常の支那服の上に外套を疊んで肩にかけた男が小銃を提げて突立つてゐた。髮を帚ように延ばして眼玉の凹んだ瘦せこけた顔は廣東人によくある型だ。鐵門の外には人がぞろ／＼通る。わたしはもう大丈夫だと思つて往來に出た。鐵門には弾のカスリ痕がある。

昇平閣といふ茶館はわたしの家から十間と離れぬところにあるのだが、今度の被害を一番ひどく受けてゐた。これは北側の門側にある家で、道路の眞正面に當つてゐるので、大小の弾を皆その壁で受けた。茶碗大の穴もあれば飯碗大の穴もある。突き抜けてはゐないが深くゑぐれてゐる。大きな壁の全體蜂の巣のようである。ガラス窓は皆壊れてゐる。

弓なりの道を北の方に半町ほど進むと十字街がある。東橫濱路、斷金里、德恩里、ダラツク路などといふ。そこには日本人が澤山住んでゐた。山東軍はその十字街の南北に通ずる道路に大砲を据え、北は租界ダラツク路の境を固める印度兵と戰ひ、南は大陸里の便衣隊と戰つたのである。何故にこんなところが激戰地となつたかといふに、便衣隊が餘計な手出しをしたからである。

常州は十八日南軍の手に歸し、南京上海間の鐵道は不通になつた。松江も亦十九日南軍に占領され、周蔭人の兵は水陸に分れて退却、蘇州も二十日山東軍は撤退の止むなきに至つた。

そこで、畢庶澄は形勢の非なるを察し、二十一日朝、南軍司令何應欽との間に協定を結び、上海を砲火の巷となさざるために停戰令を出し、呉淞にあつた北軍海防隊二營を上海北停車場によびよせ、南軍と妥協する積りであつたが汽車の到着前に便衣隊は前記の十字街の西方踏切附近の線路を破壞したので、汽車はそこまで來ると脱線し前方の一車は顚覆し、同時に便衣隊の狙撃を受けたので海防隊は二途に別れ

一方は寶山路に入つて停車場方面に向ひ、一方は東横濱路を固めて側面攻撃を防ぐ積りであつた。ところが十字街の四ッ辻まで來ると北方に在つた印度兵は慌てゝ鋼装砲車を發砲した。そこで山東兵は大砲を据えて應戰し、印度兵を退散せしめた。此時便衣隊は南の方から盛んに小銃を發射した。海防隊は印度兵の背面攻撃を恐れて進むことが出來ない。そこで又大砲を南に向けて盛に砲撃したが、道路が屈折してゐるので敵を打つことが出來ない。約一晝夜の間十人ばかりの小敵を前にして空しく茶館の壁を射撃してゐたのである。

斷金路はその十字街の西南の長屋である。戰爭は眞ッ晝間初まつたので、主人はたいてい不在であつた。或る家では子供が四五人で留守居をしてゐた。山東兵はその家の二階に上つて南の窓に機關銃を据えた。子供はおもしろがつて手を叩いた。そうして二日の間山東兵の戰爭を手傳つた。山東兵は軍用鍋釜を空屋に据えてツップを作り飯を焚いた。そうして子供と一緒に飯を食つた。主人は戰爭が初まつて歸ることが出來ず、外で大に心配してゐたが留守中の女子供は案外暢氣であつた。二日目には水ギレになつた。これは山東兵も大になやまされた。午後四時頃日本陸戰隊の勸誘に應じ、千百四十名武装解除を受け、鄭船の舊事務所に引取られることになつた。出てゆくとき蒲團を借りてゆく者があつた。又泥だけの軍服をぬいて背廣に着換えてゆく者もあつた。斷金里では日本人の家が二軒やられた。

二十三日は丸で嵐の跡のようであつた。ダラック路の西洋館には洞穴のような穴が二つほど開いて大木が倒れ、柵の中に黑衣の支那人が蠟のような腕をにょきりと出して仆れてゐた。東横濱路の踏切には脫線した汽車が立往生して便衣隊が五寸幅位の大刀ふりまわしてゐる。道の傍には山東軍の鍋釜がツップを殘して鐵の竈の上に置かれてある。停車場附近の虬江路は大分燒けたそうだがそこへ行つて見る氣もしない。そこらにうろついてゐる人間はいつ强盜になるかしらんと思ふ險呑で堪らない。南京米の嚢を重さうにかついで來た奴があつたが、途中でそれを卸して通行人を喚び止めた。見ると新しい靴がシコタマ這入つてゐる。一足五十仙だといふ。紙屑拾ひまで赤い腕章をつけ、白い旗を押し立てゝ大手をふつて通つて行く。租界内は便衣隊の擾亂を禦ぐため一層嚴重に警戒され、大道のところ〴〵に土嚢を築いた。白晝邦人住宅に强盜が押入り陸戰隊の救助を求めたが、支那街だから手のつけようがなかつた。又月廼家花園裏手に放火し、燒失家屋十六軒の内、避難中の邦人留守宅三軒燒失した。

工部局は老靶子路以北の北四川路を放棄するつもりで、戸毎に立除きを勸誘したが晩になつて又取消した。

二十四日白崇禧の命令に依つて便衣隊の武装解除が行はれ、閘北方面は混亂し射殺される者が多かつた。

浦東日華紡績の門衞張某はしばらく行方不明であつたが二十四日同工場の門前に引きずり出され射殺された。又古參女工周某の屍體も他所に於て發見したので社員は不安を感じ家族七十餘を上海に避難させた。

二十六日南京の暴虐事件が傳はつたので、上海の居留民は非常に奮慨した。同時に非常な危險を感じた。蔣介石はその日午前、軍艦楚有にて上海に到着した。ハスケル路は危險を感じ工部局から立除きを命

じたので、午後十時頃子供を負ひ、包を抱へて避難する男女が多かつた。午後十時から午前四時まで支那人の通行を禁じ、要所と認むるところは外國人の通行をも禁じた。

二十七日午前二時頃大世界芝居小屋より發火し二時間許の間に家屋二棟を燒いた。午前五時渤海艦隊は砲門を開いて長江艦隊を砲擊し交戰一時間に及んだ。

けふは午前九時から閘北香山路總工會本部で各工會代表會が開かれ、午後二時には、西門公共體育場で國民黨江蘇省部主催の孫文二週年紀念を兼ね北伐軍歡迎市民大會が開かれるので何か一騷動なくてはならぬ日である、と豫想されたので租界內は異狀の緊張を來した。佛租界は先づ市內の通行を許すと宣言したので英租界の住民は顏色を變へた。そこで朝から英佛の境に土嚢を築いて通行を禁止し水も洩らぬ警戒振りであつた。又虹口では老靶子路以北に見切りをつけたので、此處を金城鐵壁と賴んで機關銃を北へ向け、蟻一疋通行させぬ勢であつた。これはカンカン司令官の考で、專ら英人を保護する積りである。老靶子路の北には多數の日本人が住んでゐて我が陸戰隊の大半は此方面に配置されてゐる。然るに彼等は我が陸戰隊の方に向けて機關銃を据えつけてゐる。まことに險呑千萬である。多數の邦人は非常に迷惑と恐怖を感じた。そこで植松大佐はダンカン司令官の了解を求め此方面は我が海軍に委ねることになつて午後四時頃やうやく自由に通行することが出來るやうになつた。此日は實にいやな日であつた。南京事件から豫想して、何かあるだらう。何かあるだらう。とみんな言つてゐた。そうして何もなかつたのは仕合せである。

巨人―印度の動き

古荘國雄

一、奇怪な印度人

三月十八日、上海の某新聞に次のやうな記事が現はれた。『奇怪な印度人三名が、印度兵に謀叛を煽動』といふ初號三段抜きの大見出であつた。

去る十五日楊樹浦のパンジャブ師團に印度人が入込み、印度兵に對し、謀叛を起し英國との關係を脫する事を煽動するらしい新聞を配布してゐたのを發見され捕はれた事件がある、支那の事局柄この事は外人間に大いに注目されてゐる、三人はアサシン、アモルシン及びダリツプシンといふもので昨朝英國警察法廷に廻され一應の取調べがあつたが、彼等が配布してゐた新聞の飜譯に手間がいるので、月曜日まで取調べは延期された、（――下略――）

南支の激變か今、世界の耳目を聳動してゐる。國民革命、蔣介石の活躍、共産、非共産の軋轢――さては南京事件等、目まぐるしい支那の形勢に今更ながら驚異と反感と憎惡の眼を光らしてゐる。そして印度の動き――支那に次ぐ世界の大國印度の狀勢には案外無頓着のやうである。

上記の怪印度人の記事は、勿論、世界各地において最近特に活氣を帶びて來た印度獨立運動の片鱗に過ぎない。支那に對して極度に面目を失墜した英國は對印度政策に非常な苦しみを感じるやうになつた。怪印度人が上海で怪文書を配つたなどといふ事は小事件である。印度の動きはもつと深刻である。だから大英國現在の惱みは支那よりも印度にある。南支の動亂して大兵を香港へ送り、シンガポールに送つたのは、實は印度の不安に備へる爲であるとうがつた觀察を爲す者もあるが、これも一考に價すると思ふ。

ただ印度の狀勢はなか〳〵表面に現はれない。これは英國官憲が長い間、大いに心を用ひてゐる爲である。更に國際通信其他世界における通信網の內情を驗べたら詳る事である『ガンヂーの病勢がつのつた』とか『回敎徒と印度敎徒の祭禮の日に大爭鬪を演じた』とか、こんな通信はよく世界の隅々まで行き屆く。けれども、印度人の排英運動に關する事項はめつたに外間に洩れぬのである。

しかし三億といふ偉大なる民族が、如何に無智であつたとはいへ、如何にお互に宗敎的の反目を續けてゐるとはいへ、時代の進運に伴つて或程度の自治を許されてゐるとはいへ、いつまでも外部權力の爲に壓伏されるものとは思はれない。試みに印度の四圍を見るがいい。佛領印度支那は世界大戰後のフランスの疲弊に乘じて、現在では殆んど獨立國の觀を呈してゐるではないか。フイリッピンもたへずアメリカに對して獨立を要求してゐるではないか。蘭領印度洋諸島においても解放運動は初まつてゐる。一轉してペルシヤを見よ、ペルシア政府は諸列國の內政干涉より獨立せんとしてあらゆる努力を續けてゐる。ア

フガニスタンにも分遣使節の有力なる指導の下に盛んな反英運動が起りつつある。アラビアではハッサン・カンが回教世界を統一して昔のアラビア帝國を復興せんと遠大な夢を描きつつある。シリア及びパレスタインの熾烈な自由解放熱は隣國のエヂプトにも感染してゐる。更に最近十數ヶ月における支那國民革命軍の進出振りは世界歴史においても比類なきほどの目覺しさであつた。それは新しき力の勃興である。舊き勢力に對する新しきものの反逆である。それが印度を刺戟した事は想像以上である。そしてロシア、支那、印度を縱斷したるアジア民族の動きが、如何に世界歴史を變革するものであらうか。これこそ現代における最も緊要な研究問題である。トロツキーはその著『英國は何處へ行く』において、英國は近く革命の危機に臨んでゐると述べ、英國革命の近因は、國内の共産派の策動に非ずして、英國の財寶を吸收したるニューヨークのウオール街にありと喝破したが、英國の危機は實にその財政狀態のみにあらず、至る處に暴露されてゐるのである。ひとり英國ばかりではない、舊き迷夢に捉はれたるものの悲哀は刻々と世界政局の上に現はれつつある。合衆國對メキシコ問題、ドイツ對歐洲列強の問題、それ等をここに詳說する暇はないが私は今更ながら急速なる時代の動きに驚嘆する。そして、權力崇拜思想の末路、彈壓政策の斷末魔、及び弱きものの强さを痛感する。そして特に著しいのは大英帝國の窮狀である。長い間世界を我もの顏にしてゐた英國勢力の失墜振である。英國の寶庫である印度、英國にとつては實に最後のものである印度が眞に目覺めて再躍する時、——現在南支を中心にして捲き起されてゐる以上の世界的混亂を見るかも知れぬ。大英帝國の愛國者と稱するイング僧正は『大英國の弔鐘』の中に述べてゐる。

『……基督教は不合理な禁慾道徳として排斥され、淫蕩は文學で是認され、社會では賞揚され、厳格な一夫一婦的家庭は破壞され、之とともに頽廢と無政府とを防遏すべく築かれた文明の堅柴は崩されて行く。避姙は、今の社會事情を以てしては、孰れの階級に對しても之を禁ずる事は出來ぬが、この知識の普及は男女の未婚者に不幸な結果をもたらしつつある。——』

これが英國の一面である。僧正は更にいつてゐる。

『印度の將來に關して、吾々は毎も彼等に對して、英國の統治が畢竟彼等被治者の利益なる事を宣言して來たが、將來は彼等をして彼等自治の事を處理せしむべきであらう……』

イング僧正のみならず、印度を解放せよ。印度を獨立せしめよといふ聲は各方面の英人が唱へ初めてゐる。一方印度國内においては解放運動の女傑サロヂニー・ナイヅー女史が、高らかに印度解放の歌を歌ふ。

　尊き預言者の尊き言葉を聞け
　『汝等こそ帝王なるぞ!!
　汝等こそ主權者なるぞ!!』
　古き預言者の古き言葉を忘れよ
　旣に時代は轉回した

　子供よ、われ等の子供等よ!!
　東の空は明け初めた
　汝等の望むべき時と
　鳴り渡る月のシムバル——。

遂に長き夜は明けた
吾等の苦しみも消え去つた
吾等が耕した廣野に
匂高き微風がそよぐ
やがてすべての穀物は熟し
樂しい收穫の時が來よう
その穀物こそ吾々が
汝等の眠りし間に蒔きしものぞ。
吾等の手は弱く小さかつた
されども吾等は心を盡した
輝かしい汝等の黎明を
吾等は痛ましい暗の中に夢みた

ほのぼのと明け行く朝の喜びに
ただその爲に吾等は働いた
吾等の盡きぬ悲しみの泉は
汝等の種子にたへず水を與へた
汝等の樂しき目覺めを見、
汝等の喜び合ふ日を見んと
吾等は夜もすがら苦しんだが
今ははやその苦惱も去つた
見よ、さはやかな黎明の色——

ナイヅー女史はガンヂーの信奉者である。印度の解放運動は、ガンヂーの流れを汲む非協動派と、その反對派がせめぎ合つてゐる。或は極端な急進派や、英國政府追隨派などがその中に割込んでゐる。一方には印度教徒と回々教徒、基督教徒とゾロアスター教徒、其他印度國内にある百千の宗教各派の信者の間にほとんど信じられぬ程の暗鬪、明鬪が行はれてゐる。印度人の間に存する宗教上の爭ひは、南支における共産派、非共産派の軋轢以上に深刻なものである。それは印度人がその地形上、世界に比類ない宗教的な人種であるからである。しかし前記のサイツー女史の如きは各派の爭ひの上にあつて、印度民衆から無限の尊敬と愛慕を受けてゐる。ガンヂー失脚以來、最も英國の痛手であつた非協動運動は一時下火となつて、外觀はいかにも平穩に見えてゐたが、最近における印度國情の變化は著しい。近着の外誌にはデリー市における新築の印度中央議會前に印度總督アーウイン氏に對して、印度兵と英本國兵が嚴そかな儀式を行つてゐる寫眞が現はれてゐる。靜かにこの寫眞を眺むれば、英國及び印度の運命に對して、言ひ知れぬ感慨を催される。私はこれから英國及び印度の過去、現在及び將來に筆を進めて見やう。レニンはかつて次のやうに言つた。

『ロシヤ、印度及び支那は各々巨大なる住民によつて構成されてゐる。そしてこれ等は近年異常なる速度をもつて自己解放運動に身を投じてゐる。この意味において世界鬪爭の最終的決定が如何なるものであるかは疑ふ餘地がないのである。この意味において、、、、、、、、、、、、、、、、、かつ保障されてゐる』

支那共産派の巨頭陳獨秀はかつて次のやうに言つた。

『——支那の革命運動は偏狹なる國家主義に向ふ努力を止め、一路世界、、に直往すべきである——
支那こそは、、主義が實を結ぶ美田であり支那民族こそは國家觀念に災される事なく直ちに、、、に入り得る惠まれたる大衆である——』

支那國民革命の異常なる成功、わけても、武力以外思想的背景の根强さを現はしてゐる現

時の支那事局を見て、陳氏の說や、レニンの豫言的言辭を回想する者もあるが、果して、ロシア、支那、印度を貫流する人種的脈絡を生じ、ひいては世界、、大旆の下に根本から奮鬪力を從へすやうな結果になるものであらうか。何れにもせよ、印度及び、印度人についての考察は、時代の潮流に乘つて、新しき國際的進出を企圖せねばならぬ日本にとつて、刻下の急務であると考へる。

二、ガンヂーまで

印度の運命を說く前に第一に記したいのは印度の偉大さである。今から九年前、即ち一九十八年に、印度には猛烈なインフルエンザが流行した。そして死者一千二百萬乃至一千三百萬人の多きに達した。しかも死者一人に對して患者十人の割合とすれば當時インフルエンザに罹れる患者は約一億二千五百人と見てもいい。流行性感冒のみならず、黑死病、赤痢其他によつて、衞生思想の乏しい印度人は夥しい死者を出してゐる。然し私はこれをもつて無智なる印度を憐れむ材料とするものではない。戰爭などとは比較にならぬ程の驚くべき死者を出しても、なほかつ數年のうちにはその大人口を復活し得る無限の增殖率に感嘆するのである。例を產業上にとつて見る。印度人口の五分の四は農業に從事し、三分の二は全面積の四分の一に棲み、人口五千以上の都市における居住者の數は總人口の約十分の一を占むるに過ぎない。印度は全くの農業國である。しかしながら農業生產力の標準と農村福祉の一般基準は、他の國における標準よりも遙かに低い。英國では一人當り耕作反別十七エーカー三であるが、印度では漸く二エーカー六に過ぎず、又、英國の農產額は印度の二倍乃至二倍半が往來して居り、印度の大豐作と言つても英國の普通凶作と比べて餘り大差はない。しかしこれとても決して印度の將來に對する悲觀材料ではないと私は思ふ。否、反つて印度の偉大さを物語るものである。これこそ廣大な地域を持ち、悠々迫らざる民心の現はれであると思ふ。表面印度人の教育の普及、向上を說きながらも、眞の意味の印度人の覺醒を喜ばないのが英國の印度治政上における傳統的精神であつた。印度人自身も、元來慣習であり一宗教的な、餘りに宗教的な人種である。その上、ガンヂー一派はあく迄も機械文明を排斥し、自給自足主義を高唱し、織物業においてさへも、文明の利器によらずして印度舊來のチヤルカ（糸つむぎ機）を奬勵したのである。農業においても工業においても、充分發達すべき要素を所有してゐながら、なほ前述のやうな幼稚さを示してゐるのは、かうした理由に基くものである。しかしながら、印度人の無教育な點及び產業上の幼稚な點は、反つて恐ろしい力ではあるまいか。幼稚にして長く虐げられたものの擡頭が、最近における著しい世界的現象ではないか。

印度の心あるものは數十年以前から英國の權力を離脫せんとして、絕間なき努力を續けてゐる。印度獨立の爲に悪戰苦鬪を續けた數ある愛國者の受難史は如何なる國の如何なる悲劇にも劣らず悲痛を極めたものである。が、表面上排英運動の最高潮に達したのは何と言つてもガンヂーの全盛期、即ち一九二一年頃であつた。その年英國は印度新統治法を制定し、翌年、印度に新議會を開設する事となつたが、これは血をもつても完全なる自治

を獲得せんとした印度人の滿足を賜ふに足らなかつた。印度事情に通じたフレデリック、ホワイト卿は『印度の政治的進化』において當時の回想を記してゐる。

『――一九二一年八月一日、予はボンベー市を下瞰するマラバールの丘にイ立して、ガンヂー氏の信徒等が、その外國製綿布を燒棄つるを見た。チヤウパッチの濱邊砂白き上には白衣を着た印度人の大群集が集つて、英國統治の消滅印度自治の到來を祝福した。空には貿易風季節の低き白き雲が、西方ヽ陽の光を受けてオレンヂ色と金色との光線に彩られ、脚下にはボンベー島の海岸に沿ふてボンベーの市街が長く列なつてゐる。五六ケ所には衣を積み重ねて燒く黑き煙が濛々と立ちのぼり、貿易風季節の空の灰白の色と相映じて一入黑く見えて非協同運動はこの時その最絶頂に達したのである。全印度の老若男女はガンヂーの口先き一つで動いた。後方の陸上には無智な男女數百萬人が、ガンヂーを拜して豫言者と仰ぎ、ボンベーに立のぼる黑煙を見て自治到來の徵候としたのであらう。ガンヂーは八月一日をもつて印度救濟の日であると約束し、外國製の綿衣の燒ける臭は外國統治者の燒け滅ぶる臭であると示してゐたのである――』

印度獨立運動の第一線に立つて、世界の視聽を集めたマハトマ・ガンヂーも、歐洲大戰當時、ロンドンに在る頃はむしろ忠實な英國の味方であつた。しかし彼は英國政府の印度に對する邪惡を發見した。英國と印度の全然相容れぬ國民性、英印の兩文明は永遠に融合し難き事明白なるにも拘らず、英國はあくまで印度を英國化せんと試みた。更に、重税を課して印度人を貧窮に陷れ、印度人間の階級及び宗教上の爭ひを利用してこれを離間し、國民的統一を妨害した。印度國民主義者に對する非人道的壓制や、トルコのカリフ問題においで印度七千萬の回教徒を欺いた事や、アムリッツアに空前の印度人虐殺を行つた事など、印度人ならずとも耐え難き義憤を感ずるほどの事實であつた。ここにおいてガンヂーは蹶然、排英主義の先頭に立たんと決心した。そして彼は次のやうに言つた。

『經驗は私を聰明にした――。現存の印度政府の制度は全然邪惡である。それを終止せしめ、若しくは更改せしむる爲に、特別な努力を捧げねばならない……』

『……拒非といふ事は事物の受諾といふ事と同じく一の理想である。背理を拒非する事は、眞理を受け入れる事と同樣に必要である。凡ゆる宗教は、吾々の上に二つの相反する力が働いてゐる事。そして人間の努力は永遠の拒非と受諾との系列の中に成立する事を教へる。邪惡との非協同は、正義との協同と同樣なる一つの義務である――』

ガンヂーは實にこの熱烈なる理想の下に排英運動の第一線に立つたのであつた。彼は英國のもたらせる文明を非難し、印度を蹂躙するものは實に英國と近代文明であると叫び、文明の所産なる工場や鐵道や、法律家、醫師などは悉く印度人を窮乏に陷入るるもので、就中、鐵道は惡疫の傳播を扶け、食糧の缺乏を激成する。鐵道の便あるが故に、糧食は盛んに甲地より乙地に、乙地より丙地に轉貿され、地方住民は當然得らるべき穀物を手にする事が出來ぬ。印度人はよろしく西歐文明の覊絆から脫れねばならぬ。印度は世界を救ふ

べきものをこそ存すれ、世界より學ぶべき何物も持たない。印度の精神文明は決して滅びぬ、ローマは滅亡し、ギリシヤも同じ運命に陥り、エヂプト歴代の王朝は倒れ、日本は歐化し盡して舊態を止めないが、ただ印度の文物のみが依然として既存し、いさゝかも動搖を來さぬ。故に印度の文物に滿足して自ら立つべき途を選ばねばならぬ。それには先づ經濟的自立策が必要である、その第一策としては印度の民衆が工場生活を捨てゝ手車紡績に就き、自らの手に織れる綿布を纏はねばならぬ。これがいはゆるスワラジ即ち『自治』の第一歩なりと言ふ。西洋文明排斥である。印度國粹主義である。そしてこの主義を實現せんが爲に、ガンヂーは徹頭徹尾暴力を排して『精神の力』『愛の力』をもつて進み、無抵抗の抵抗をもつて敵に當らんとした。これが彼の唯一の武器であつた。事件が起れば之を法律に照して處斷するのが文明國の共通制度であるが、かゝる場合ガンヂーは自ら斷食して其犯罪者の反省を祈り、決して暴力をもつて罰してはならぬと考へた。かゝる宗教的見解が東洋人の精神に合致して、彼は印度の大衆より『マハトマ』(偉大なる靈の人)とさながら神の化身の如く尊崇されたのである。ガンヂーの説く所は右の如く非協同、非暴力であつたが、その非暴力は次第に惡化して遂に各所に暴動が續發するに至つた。入獄志望のガンヂー派は我も〳〵と監獄に押寄せる。多數の非協同運動者達は頭にガンヂー帽を冠り、胸に花の徽章を附け隊伍を組んで高らかに印度國歌を歌ひ、マハトマ萬歳を叫んで市街を練り歩く。そしてガンヂー派の示威運動中最も世界の注目を惹いたのは、一九二一年、英國皇儲ウエルス殿下のボンベイ上陸の際であつた。若き太子に對しては何等直接の暴擧は行はれなかつたが、各都市においてハータルが行はれた。ハータルとは一切の經濟上社會上のボイコツトといふ意味である。底氣味惡い『服喪の日』――これが極めて效果的に行はれて美々しく飾られた街頭には旗のみ翻つて戰慄の人影は少なかつた。ベナレスにおいてはハータルの代りにあらゆる人々が觀祭休日を行つた。これはすべてガンヂーが命令したものである。かくの如くにしてガンヂーの無抵抗の抵抗は嚴肅に行はれるかと思はれたが、大衆の動きには昔も今も豫期外の結果が生ずる。ボンベイにおいてハータルを行ひ、靜かに屋内に止まつたかと思はれたガンヂー派は、歡迎行列の開始と同時に、輸入綿布を燒き拂り、市内各處に大演説を開いて排英の氣勢をあぐる事となつた。市中には忽ちにして警官、軍人對民衆の衝突が起り、五十餘名の死者と無數の負傷者を出し、一名の米國人もその餘波を蒙つて慘死するといふ騷ぎになつた。これに似た騷擾はマドラスにも起つた。更に一ケ月を經て、チヤウリ、チヤウラ事件が突發した。それは警察官がガンヂー派の商店見張りをなすを禁止せんとして、大衆の襲撃を受け、警察署は燒打され、逃げ惑ふ警官は慘殺されるといふ騷ぎであつた。ガンヂーも暴擧の續出に困じ果て、例の斷食を始めて、暴徒の反省を促し、今後の反政府運動は單に非納税の一事に限る事としたが、非納税の結果は再び政府の權力が非納税人の上に及び、次々にその土地を沒收されるので、又復騷擾を惹起し、國内至る處に暴擧は擴大され、停止する氣配は見えなかつた。そこで政府は遂に最後の手段に訴へ、一九二

二年ガンヂー檢擧を決行するに至つたのである。ガンヂーは體刑六年の宣告を受け、直ちに服役した。そして病弱の爲、間もなく出獄したが、この事件を一轉期として、英國の脅威であつた非協同運動は實質的に消滅した形となつた。ガンヂー引退後の非協同派は徒らに內紛を事とする政黨的色彩濃厚な集團となり果てた。

三 ガンヂー以後

ガンヂーの理想は人間社會を永久に亘つて結合せしむる愛と善とであつた。この理想は彼自身にとつても餘りに高遠なものであつた。いはんや普通の印度人に、彼の思想がそのまま受入れらるる筈はなかつた。彼の理想は印度特有の冥想的、宗教的な偉大な所産であつたが、それが現實に直面しては慘ましい結果となつた。餘りに高遠な理想の下に組立てられた政策が世界の現狀、特に智力と武力と財力とを背景とする巧妙なる英國の對印政策に接して失敗に歸したのは自然であつた。かくして印度の解放運動は暴力手段（非暴力の暴力をも含む）をもつては到底成功し難いものであると一般に考へるやうになつた。民衆には武器なく、紀律なく、結合力なく、相互信認の觀念に乏しきをもつて、政府と戰つて勝つ事は不可能であると悟るやうになつた。故に一九二二年ガンヂー入獄後は、ガンヂー腹心の部下達が何れもガンヂーと絕緣し、新たなる解放戰線に進む事となつた。ガンヂーと絕緣した彼等は、現行印度議會（一九二〇年一月開院式を擧行）にその勢力を集中して、漸進的に印度自治運動に志すに至つた。そして、印度憲法を否定し、極端な排英運動に精進してゐた面影は消滅し、議會において同派の議員連は、徒らに議事の妨害などを試み、わづかに反抗的の氣勢をあぐるのであつた。印度には現在數多くの政黨政派があるが、主要なるものは極左派の非協同派と、非協同派から分立した自治黨と、保守的な自由派であるガンヂーの衣鉢をつぐ極左派は表面一致してゐるやうであるが內部には個人的の暗鬪や政見の衝突が激烈である。第二の自治派はガンヂー派から分離したもので一九二五年までは故ダス氏（ベンガル人）が率ゐてたが、ダスの死後アラハバッドのネール氏を首領にしてゐる。彼等はガンヂーの消極政策たる非協同主義が、政治上到底不可能にして非協同運動を進むる結果は徒らに流血の慘事を見、成功覺付かない革命の一路におもむくものであるといふ事を悟つたのである。且つ、印度の自治はガンヂー派の無抵抗では達せられない。又アイルランド式の暴力叛逆でも達せられない。自治の目的を達する爲には滿身の勇氣を揮つて、印度憲法によつて設けられたる政治機關によるべしと主張したのがダス氏及びその一黨であつた。第三の自由黨は印度國民自由聯盟を略して自由黨といふのである。この派は實力はあるが、組織は餘り完備されてゐない有識階級の政治意見を代表したもので、諸州の立法會議にも中央における上下兩院にも相當多くの議員を有し、印度各省の長官や行政大官は多くこの黨派の中から出してゐる。印度の政派の大體は以上の如きものであるが、印度の政黨は英米其他の文明諸國における政黨の例を以て見るわけには行かぬ。自ら政黨と稱する小團體、大團體は存してゐるが、双互の間に劃然たる分界線がない。これは印度の國民性にもより、現在の

制度にもよるものである。現在の制度では、政府は如何なる議會の決議に接しても、其地位を動かさるる事なく、議會を政權を取り得るものではない。だからその爭ひは自然違法問題となり、雜然たる異分子は雜然として政府攻撃を行ふのである。政府と政黨との主要爭鬪は自然人種の優越といふ問題に歸する。そして議會における論戰は可なり猛烈に行はれるのであるが、政府當局は印度人相互の間に存する軋轢反目を巧みに操縱して、絶えず局面を有利に展開したのであつた。ガンヂー最盛時、ガンヂーが印度救濟の神と仰がれた時代にあつても、印度四階級の最高位を占むる波羅門の有力者達はガンヂーが卑賤の出であるといふ理由をもつて、ガンヂーを忌避してゐた、彼の唱ふる四海平等の敎へは、波羅門階級を敵視するものであるとして非難した。ガンヂー以後においても、こうした階級的迷信的の思想から印度人自身の不利を招く場合が非常に多い。例へばボンベイの蚊の問題である。ボンベイには蚊が多い。蚊は傳染病の媒介をする。だから蚊を撲滅するには印度敎徒や、パーシ敎徒が宗敎上の儀式に用ふる水瓶を取拂はねばならぬ。政府がこれを斷行しやうとすれば、迷信に固まつた土人は狂氣の如く怒り、神聖なる水瓶を取拂ふのは何事ぞと恐ろしい勢で政府に反抗する。かくして惡疫の豫防は斷行されない。又、ボンベイ附近に航空隊が設けられ、飛行機がパーシ敎徒の墓地なる『沈默の塔』の上空を飛揚したといふので敎徒から強硬な抗議が持出され、以來その附近の飛行は中止となつた。この墓地は屍體を土中に埋葬せず、地上に放置して野鷹の食ふに任すのであるが、敎徒はここを靈地と崇め、妄りに近づく事を恐るるのである。印度にはまた『サテイ』といふ婦女殉死の驚くべき風習がある。夫が死亡した場合、その屍骸の上で妻をも活きながら共に燒き殺すといふのである。死の恐怖に超越し、猛火の上に笑つて坐する女性の姿はむしろ崇嚴な感じを起さしむるものであるが、蠻風と言へば恐らく世界第一の蠻風であらう。しかも現在においても、この蠻風が印度各地にひそかに斷行されつつある。

更に、女兒殺害といふ弊風もある。印度人は年頃の娘を持つ事を非常に忌み、女兒が生れると多くは殺害して後の煩ひを絶つといふ有様である。この弊風も政府の取締などでは根絶されない。彼等は男の子は親が育て、女の子は神が育てると確信してゐる。女兒殺害とともに早婚の惡風がある、印度マヌ法典の規定によれば二十四歳の男子は八歳の妻を、三十歳のものは十二歳の妻を迎ふべしとあり、印度の女性は幼弱にして人妻となり、母となり、幾多の辛苦をなむる上に肉食を禁ぜられて營養不良に陷り、死期を早むる結果となつてゐる。現在においては十二歳以下の女兒の結婚を法律をもつて禁止してゐるが、實效は見えぬらしい。かくの如く、印度はその氣候風土の變幻極まりなきとともに、民族としての思想風習においても、外間の想像を許さぬほどの神秘と不可思議を所有してゐる。二億一千萬の信者を有する印度敎を初め、七千萬の信徒を有する回敎、一千萬の佛敎徒、四百萬の基督敎徒、三百萬のシーキ宗徒、百萬のジエーン派、十萬のパーシ派等無數の宗派に分れてゐる。世界人口の最高位を占むる支那及び印度は、新しき思想主義の處女地であるが、その動きには全然相違したものである。

この印度獨特の宗教的境地が、長く英國に幸して、印度統治上重大な破綻を生じなかつたと見るのが至當な觀察であらう。英國は印度統治の初期において、クライヴなどいふ若き俊秀の力によつて、巧みに印度の民心を收攬し、其後治政上に幾變轉を見たが、原則として官吏は一定の年限を定めて本國に歸し、更に鋭氣潑剌たる新官吏を送るといふ方法を取り、非常な成功を收めたのであつた。そして世界大戰を機會とした時代の變化は、印度に或程度の自治を與ふべき機運を生じ、印度議會を開設したのである。議會開設に前後した猛烈な排英熱もガンヂーの沒落を見るに及んで一時終熄の形となり、印度の自治運動すべて議會に集中されるといふ結果になつた。印度人の向上を計り、印度人の教育に專念し、印度及び印度人の幸福に他意なき如く見せて、その裏面にはあくまで印度の進化を防ぎ印度人の懶墮を助長し、印度における諸派を互に離間して、溫情と、威壓を織り交せ、分けて治めるといふ傳統的政策に成功したのが英國であつた。しかしながら、印度對英國の關係はいつまでも舊き治者被治者の關係を持續し得べきものではない。名のみの自治によつて、永久に僞瞞さるべきものではない。ガンヂーの排英運動はつまづいたが、ガンヂーの高遠な理想が印度人の上に及ぼした感化は絶大である。巨人ガンヂーの實際運動は流血の慘事をもつて終局をつゞけたが、彼によつて、印度の民衆は政治上及び經濟上の狀態を著しく自覺したのである。偉大なる印度には民族的自覺が急速に來るものではない。それは支那における同樣である。支那における現在の國民革命は、內部的疾患や、諸列強との關係において、或は失敗の形となるかも知れない。失敗の結果とならぬまでも、過去十ケ月間に見るやうな進展振りは今後しばらく休止するかも知れない。しかし新たなる次期の革命運動が起る場合を想像しなければならない。現在より以上の大勢力が支那全土を風靡するといふ次の時代、或は次の次の時代を豫想しなければならない。印度に就てもこうした考察が許される。幾多の解放運動は明滅したが、英國の羈絆を脫して、眞の印度獨立を目ざす運動は連續するであらう。そして、失敗は次の成功の機緣となり、遂にはガンヂーの大理想に到達し得る日が來るであらう。

既に一九二五年九月、印度議會における諸派は相連合して印度自治領案なるものを議會に提出した。これは大戰中、印度兵出征の代償として、同時に英國の疲弊に乘じて提出された印度治政上の改革案より、更に一歩を進めたものである。印度を英國の自治領、カナダ、濠洲同樣の制度に改めよといふのである。即ち

（一）印度省の印度統治に對する最高監督權は植民省（或は自治領省）の自治領土に對する關係に準ずること。

（二）印度政府は印度立法府に對し、責任を負ふものなること。

（三）財政に關しては、國防その他、一二項を除きすべて立法府の監督下にあるべきこと。

（四）中央及び地方議會は悉く民選とすること。

（五）地方における二元政治を廢止し中央と地方の關係に就ては地方自治の範圍を擴張すること。

（六）文武官吏の任用に關し、印度に對して

平等的に門戸を開放すること。

(七)印度自治領に對して憲法改正の權限を認むること。

大體以上の如きものであり、この提案は中央立法議會において可決された。ただし、その施行は印度總督の權限に屬し、提案が通過しても直接の効果は期待されないが、かくの如く、印度各派が一致して自治領待遇を要求するに至つたのは、英國に對する有力なる大示威運動である。英國の自治領なるものは實質的にほとんど獨立國の觀を呈してゐる。英國が快よく印度にそれを許す雅量を持たない事は明かである。しかもなほ、印度に漲る自治要求の聲と、英國における勞働黨其他の主張は長く現在の對印政策を守固し得ざる狀況に進んでゐる。前記のイング僧正はかゝる狀態にある大英帝國の危機を痛烈に叫ぶのである。

「――要するに我等が最大の缺陷は、眞の意味の英帝國政府が存在しないことである。皇帝は名儀上の主權者に止まり、英國議會は帝國の名を冠するけれども、帝國の各部に對して何等の管轄をも有してゐない。從つて自治領相互の間、或は本國政府と自治領との間に紛糾を生じた場合には、何等これを裁斷する機會がなく、いはゆる帝國議會は非常の際にあつて各自治領の一兵卒も、一シルリングの金も動かすわけには行かぬ。從つて將來事變の生じた場合には、甲植民地は進んで自發的に出兵するであらうが、乙植民地は中立を宣言する事もあり得やう。彼等はまた現に南阿が印度人を排斥しつつあるやうに、本國人の自由入國を拒否する事も出來る。――これ等の事情を考慮すれば、英帝國の維持は法外な費用を要する一種の道樂であるとも言へやう。即ち英帝國の機關は全く支離滅裂で、其存在はただ一片の好意によつて繋がれてゐるのみである――」

步一步と合理的印度解放の要求を爲しつつある印度議會は、最近、南支に對する大部隊の印度兵出兵に對し一致して反對した。かくの如く内部的爭鬪熾烈なるにも拘らず、英國に對する反抗においては次第に協力するといふ傾向を示しつつある。更に、印度内部に近時著しく力を延した非讃派の策動がある。勞農ロシアの手も益々印度に浸入しつつある。ガンヂーの後繼者時に、サロヂニー・ナイズー女史などによつて叫ばるる印度覺醒の叫び、婦人向上の運動は次第に効果を示してゐる。隣接する諸國の進步及び解放運動、支那の激變、更に、世界にみなぎる弱小民族解放の機運は、印度及び印度人に異常な刺戟を與へ、印度はまさに更新の時期に臨んでゐるやうに見える、無論前述のやうに、各宗派間、各階級間における抗爭は甚だしく、三億の民衆中、文字を解するものは五歳以上の全人口中わづかに八パーセント强に過ぎないのであるが、工業勞働者の間には次第に教育の必要を感ずるものが增加してゐる。社會制度の改善とともに、教育の普及に、婦人の向上に、印度の眞の愛國者達が努力してゐる事は非常なものである。かくて、印度刻下の問題は、あくまで議會に力を注ぎ、合法的に印度の自治を實現するか、或は、英國の疲弊に乘じて、新しき排英運動に全印度の力を集め、自治領の域より更に進んで全く英國の羈絆を脱するといふ大運動を起すかにかゝつてゐる。

四、印度の將來

長くタイムス紙の外報部長として令名あり、印度通の最高權威と目さるるサー・ヴアレンチン・チロル氏はその著『印度統治の槪觀』において、

『英國が過去百五十年間、廣大なる印度を支配し來りたるは稀有の事實であるといはねばならぬ』

と述べ、更に

『印度は一日も早く白人の羈絆から脫したいと思つてゐるが、これぞロシア赤化主義の目ざす處で、反英病に罹れる印度人を煽動し、益々その病熱を昇騰せしめやうといふのがロシアの肚である。ガンヂーはかつてソヴイエトロシアの國賓としてモスクワに招かれたけれども、固辭して應ぜなかつたが、チヤウリ・チヤウラの暴動の事を想へば、印度農村地方は既に赤化主義に毒されて、ひどく充血してゐる事が判る。印度の革命運動や、殺人陰謀は、自治黨の出現と密接な交渉を有するとともに赤化主義とも自ら一脈の相通ずるものがある。自治派はそんな事は絕對にないと打消してゐるが、事實はその間の事情を雄辯に物語つてゐる。一九二四年一月二十五日ゴピナツ、サカイといふものが、カルカツタの市街で白晝公然一人の英商人を殺した事を初め、殺人罪はしばしば行はれた。同年三月には爆彈製造所が發見され、八月には怖ろしい爆彈騷ぎが起つた。武器と革命煽動の小册子は密輸入され、ダスの如きは殺人犯と殺人とは別物なりとて、サカイは法の制裁を免かれる事は出來ぬが、彼の志は稱するに足るといふ奇怪なことを公言して憚らぬといふ風であつた。カルタツタ知事は特別治安警察法を發布して不穩分子を檢擧したが世相は益々惡化の一方であつた——

『英國の印度統治は悉く自由主義に出たとは言はれないかも知れぬ。しかし英國の統治は印度人の協贊を得て今日に至つたもので、決して武力一方で行つたものではない。英國の印度統治には武力以外に大なる強き所がある。土人王國は英國の統治下に心を安んじ、英國直轄の印度においても、保守派のものは革命の危險に渉獵するよりも、むしろ永く現在の統治下にありたいと希望してゐる。印度人民の宗教上、階級制度上、人種上の爭ひに乘じて、英帝國の存續を計るは利己的であるとの譏りを免かれまいが、かりに即今英國にして印度より手を引かんか、國內の爭ひは益々增長して殆んど歸するところを知らぬであらう。

『現行印度憲法は理想主義の所產であつて、やがて印度が自治領に達する一つの段階である。自治派が騷ぐとも、現行憲法を根本的に變更して別種の制度を布くやうなことがあつてはならぬ。印度は今や新時代に入つたのであるから、英國は益々確乎たる志をもつて印度に臨み、よく勢力の權衡を保つて、既往の如く、將來も印度に對する義務を果すべきである。東西兩洋綜合の任に當るものは英國の外になく、又それを實現すべき地は印度を措いてこれを他に求むる事は出來ない……』

これは現在の英國民の輿論を代辯したるものと思つても差支ないものであらう。まことに明瞭なる代辯である、しかしながら。英國が印度から手を引けば印度に名狀すべからざる不

幸の淵に沈むと豫言したのは餘りに英國本位の考察ではあるまいか。東西兩洋綜合の任に當るものは英國の外にないといふ見解も英國嫌ひなスターリンならずとも、多少滑稽味を感じる言葉ではあるまいか。私はチロル氏の說を讀んで英國の現狀が如何に窮迫してゐるかを知る好材料であると思ふ。印度不安の問題が如何に英國民を脅威しつゝあるかを看取する。明後一九二九年に至れば勅選委員會が任命されて、印度憲法改正問題といふ重大事を審議する事となつてゐる。現狀のまゝ印度關係が續いて、その日に到達すれば、恐らく印度は現在の英國自治領と同じ待遇を受けるといふ結果になるものと思はれる。しかし、印度自身が果してその時を持つのであらうか。英國から「自治」を與へられて、そのまゝ平靜に受け入れるであらうか。最近某の英誌を見ればメストン卿が『英帝國の將來』と題して注目すべき論文を發表してゐる。彼は言ふ。

「――我々は東方の偉大な民族に、決して、英國流の生活樣式思想を强ひてはならぬ。我々はただ彼等が、彼等の好むまゝに進み行く爲の助力をすればいい。印度の議員選擧や、投票箱が、決して、印度民衆の人生觀や、宗教心を變へるものでないといふ事を知らねばならぬ」

印度を完全な自治領にすべしといふ機運はかくの如く各方面から唱へられてゐるが、もし自治領となつたとしても、カナダ濠洲の英本國關係とは、格段の相違を見るといふ事は明かに豫想される處である。そしてそれは英國にとつて重大なる危機をはらむものである。危險なる先途を豫想しても、なほかつ印度に自治を許さねばならぬといふのは確かに英國の悲哀であり、時代の變遷の結果であるが、それにも增して印度の危機が間近に迫つてゐるやうに思はれる。アフガニスタンを經てのロシア印度の交通に英國が惱みぬいてゐる現狀を見れば思ひ半ばに過ぎるものがある。更に上海其他におけるロシア、支那印度三國人の策動には根强き脈絡を有してゐる。私の机上には"The Constitution of the Federated Republic of India"といふ印度革命派の祕密文書がある。この內容を詳細に紹介する自由を持たないが、印度革命派と對露、對トルコ其他の關係及び彼等今後の豫定などには深甚の考慮を費さねばならぬ事項が多い。

私はまた最近、ホワード・サーストン氏の書いた「印度魔術の種明し」といふ一文を讀んだ。これは文字通り印度の魔術についての面白い記述である。印度は世界一の魔術國である。印度の魔術師は世界の隅々までも流れ渡つてゐる。印度の國情がどんなものであるか、印度對英國の關係がどんな狀態にあるかには無頓着なものでも、奇怪を極めた印度人の魔術師の手並を知らぬものはあるまい。サーストン氏が種明しをしてゐる數々の面白い魔術の中に、特に面白いのは、觀衆の眼の前で種子をまいた植物が、見る〳〵うちに生長してほとんど一尺餘りにも達し、觀衆の度膽を拔くといふものである。そしてこれが單なるごまかしに非ず、極めて科學的な方法で演ぜられるのである。支那人の魔術には、鮮かに人目をくらますものが多いが、印度人の魔術には至極異想的なものや、科學的なものが多い。この對照がいろ〳〵の意味で面白いものである。そしてこの植物の魔術は印度の運命を暗示するやうな、趣きを持つものである。無智

と思ひ過ごされた印度人が、眞に急速に覺醒する日はないものであらうか。互にせめぎ合つてゐる印度の各派の有力者達が世界の新傾向に刺戟されて、翻然、印度の爲に立つ日は來ないものであらうか。ナイヅー女史は高らかに歌ふのである。

「印度教徒、わが母!!
吾が尊崇する花瓣は汝の頭を飾る。
祆教徒、わが母!!
吾が希望の火焔は汝を圍む。
回教徒、わが母!!
吾が愛の劍は汝を護る。
吾が信仰の歌は汝に奉仕す。
印度にあるもろ〳〵の教へに
吾等は勇ましく歸依し、守護す。
おゝ女王！　おゝ女神！
吾等は限りなく稱へまつる!!

印度婦人解放の戰士ナイヅー女史は、ガンヂーズムの信奉者である彼女はガンヂーの失敗を繰返さない。カンヂーは英國の教育を拒非し、その結果は第二の自治運動を行ふべき子弟が初等教育も受けられぬといふ矛盾を生じた。ナイヅー女史は何よりも先に印度人の教育、わけても印度婦人の教育の必要を說く。彼女の美しい詩、力強い印度解放の歌は、町から村へ、里から里へと、異常な流行を來してゐる。交通機關の不備な印刷文明の幼稚な印度にあつては、かくの如き詩人の詩が豫想外に宣傳の能力を發揮するものである。印度幾百萬の農民達は今や、彼女を印度最高の女性として尊敬してゐる。彼女の現在までに爲し遂げた大業は印度の女性に、かすかながらも婦人解放の第一階梯を悟らしめた事である。この點ではガンヂーも遠く彼女に及ばなかつた。氣候風土、宗教慣習の爲に印度は餘りに怠慢であつた。ガンヂーもこの點を次のやうに指摘してゐる。

「私は世界中の何れの國においても、不幸なる印度のやうに、牛の境遇の酷い處を知らないのである。しかし吾等はこの牛虐待に對して英國人を非難してはならない。自己防衞の爲に、貧乏を辯解してもならない。吾等に價する怠慢が牛の悲慘なる狀態の唯一の原因である──」

しかし、印度婦人の覺醒は、續いて印度人全體の怠慢を改むる機緣ともならう。更に最後に特記したいのは、南方支那において世界の視聽を集むるほどの大活躍を行つた一露人が、或機會をねらつて、印度入りを爲さんと志し、或は現在においてもその企圖を廻らしてゐるといふ點である。これは英國官憲の力によつて、無論あらゆる防止の策がほどこされ絕對に印度擾亂の動機を與へまいと努力するであらうが、某露人自身が印度に入り難い場合はその代理者をもつて目的を遂せしめんと志してゐる事である。それが單なる印度啓蒙運動となるか、或は更に、具體的な排英運動の策動であるかは豫想の限りでないが、印度の不安はかかる意外な方面にも充分に醱酵しつつある事を考へねばならぬ。ある論者は言つてゐる。「印度の運動は純粹な印度人から生ずるものではない。白人と印度人との混血兒から起るものである。純粹の印度人は寧ろ平和を愛好するにあつて依然として大なる進步はない。ただ白人間には殊別せられ黑人間にも齒せられない境遇にある混血兒がその政權慾を逞しくして社會的地位を保たんが爲に年中煽動運動をやつてゐたのが、民族運動

又は革命運動と命令され、煽動された所である。——ただ英國の恐るる所はその混血兒は甚しい二重人格者で到底信じ難い所から、印度人が外國、今日では主として露國のボルシエビキ運動を誘引し易い事である」と。これも一種の見方かも知れない。しかしこんな觀察を文字通りに受け入れても、印度に不安なしといふ保證には決してならない。それどころか、こうした一種の觀察者があればあるほど印度將來の不安は多大であると私は思ふ。列強が支那に對して長い間これに類した觀察を下してゐた爲に現在の醜状を暴露したものではないか。

アメリカがメキシコに對して餘りに侮蔑的であつた爲に、近來の外交的不面目を味つたのではないか。弱小民族と輕侮し、高壓し、縱探し、横暴の限りを盡した結果は現在の如き世界時局の新しき混亂を生じたのではないか。印度の將來は重大である。しかもそれが、支那の事局と緊密な關係を有する事において更に注意を要するのである。（昭和二年四月四日記）

濠洲遠征後の感想

高石勝男

高石選手は人も知る世界水泳界に五指を屈する日本唯一の世界的選手である。彼が持つ日本水泳界の記錄は五十米に二六秒八、百米に五九秒八、二百米に二分一六秒八、四百米に五分三秒四、二百米リレー、四百米リレー、八百米リレー（世界記錄）と、この何れもが日本最高記錄、世界記錄の保持者である、今度の遠征によつて濠洲の各地に覇を唱へること實に十有幾回、花々しき成績を遺して、濠洲水泳協會から感謝の意味を以つて銀の記念大カップを贈られ、目覺しき活躍をみせた中にも、シドニーに於ける、チャールトンとの對戰は、確に歴史の一頁を飾つた一大記錄であらねばならない。高石選手が長中距離に强いチャールストンに八百、四百で破れた事は問題でない、高石が過去二年を費やして努力を重ねた二百二十碼にチャールストンを破つた事は彼が短距離で世界に覇を唱へる事の確證であることを何人も否むまい。米のワイズミュラーに對して日本に高石ありといふ事は世界の定評であつた。彼は遂にその存在を確實ならしめたのである。

私の胸にパッと燃え上つた血の焔、これは昨年の十一月上旬のことでした。突然濠洲の水泳協會から吾が全日本水泳聯盟に對し、私と立敎大學の齋藤巍洋君二人を指名した招待狀が舞ひ込んで來たのでした。

私の水泳筋肉や神經が一齊に動き始めました。日頃憧れぬいてゐた濠洲の天地、そこには私が日も忘れやらぬ大剛チャールトンの姿が彷彿として浮び出されるのでした。この前の巴里に於けるオリンピック大會の千五百米で彼チャールトンは十六歳の若年を以て世界的選手の譽れ高き瑞典のアルネボルグを背後に殘して優勝し、私は亦第五位に蹴落されたのでありました。チャールトンの名が世界的に雷名を馳する樣になつたのはこの頃からでした。

今日世界的水泳界の三羽烏と指を屈せられるのは、アメリカのワイズミュラー、瑞典のアネボルグ、濠洲のチャールトンです。そのチャールトンを目指して遠征に門出し樣とする私の胸底は、目下自分のコンデションがグッドであるか、バッドであるか等考へる餘裕もなく只一途敵地へ乘り込んで彼大チャールトンと一騎打して過ぐる日の雪辱戰をと樂しみ勇み立つてゐました。

旅裝もそこ〱に十一月の十八日、日本郵船の三島丸で神戸埠頭を拔錨して南へ南へと下りました。

常夏の南國……椰子の葉影で椰子酒飲めばよ　椰子の葉影にゴリラ啼く……よく唄ひあかした歌など思ひ出し、早や廣原に小羊を追ふ牧童を描き、心はいつしか憧れの地に飛んでゐました。

日本郵船の好意で作つて頂いた船中のスヰミングパスで退屈を紛らはしながら、香港、マニラと過ぎ、早くも赤道直下を越えることになりました。これを通過する時は、どの船も赤道祭を行ふ習慣があるとみえ、私の船も夕方からテエブルや椅子をデッキに運び出し乘客一同寄つて飲み喰ひ且つ踊り廻つたのでしたが。こんな社交的智識を持たない私達は遠くから傍観してゐました。恰度この翌日、船が鳥島を通過すると聞かされ、果してどんな壯觀がみられ樣かと樂んで、時機の至るを待ち倦んでゐると、小さな無人島に、何億といはうか、無數に殆んど形容も出來ない位に島全體を埋めてゐる海鳥が、船上に高鳴る汽笛の音に、驚いてパット飛び立つた美觀壯觀には、全く度膽を拔かれました。飛び立つ海鳥の羽音、空中を飛翔する唸り、一時に風を呼んで太陽を覆ひ、薄色を迫らす光景は正に孫悟空の魔力に出會つた樣なものでした。誇り大きな夢をみせられた樣なものでした。

こんな生きた夢をみてゐる間に船はどし〱南行して十二月八日、長い航海の末先づ最初にタインスランド洲のタウンスビルに上陸しました。

着くと早速、この小さな町で第一回の競泳をしましたが全く競泳など幼稚なもので、實際のこと、競泳などといふ感は起らず、猛烈な彼等にコウチをした樣なものでした。齋藤君はバックストロークで悠々優勝し、私は百、二百で勝ち、齋藤君のバックを眼て珍らしがつたり驚いたりしてゐた位で、目ぼしい選手は一人もなかつたのでしたが、決してこんなとで私達の氣は緩みも得意にもなつてはゐなかつたのです。ここは田舍のことだから奧地へ進み次第強敵に出會ふのであることを豫期してゐた私達は益々自重せざるを得なかつたのです。

次にロックハンプトンでやりました時は偉いハンデキャップを付けられ、百碼で十秒から十二秒位、二百二十碼では四十秒も付けられるのですから、堪つたもんではありません。

それからバンダバークを經て十七日にブリスベンに着きました。此處では市長が盛大なる市民歡迎大會を催して呉れ、在留邦人も出席して非常な盛會でした。十九、二十日と二日間競泳を行ひ濠洲で大變評判なグリヤーといふ選手と四百米競泳をしましたが約二十碼も勝ち尚同氏は二百米が得意だつたんだ相でしたが病氣の爲め二百には出ませんでした。別に恐る可き相手ではない樣でした。齋藤君はブレストとバックをやりましたが樂に勝つてゐました。

更にイプスウヰッチ、ツーウンバを經て二十六日ウオーリキに着きました時、大正天皇の崩御を知りました。この時私達は日本臣民として以後の競泳を中止して歸國し樣かと思ひ、領事館に相談しました處、歡迎會などは遠慮すべきだが、競泳は體育であるから、續行してもよからうといふ返事を受けましたので異境に哀悼の意を表し、悲痛な心意の下に續行いたしました。

賣名的レースを嫌ひ、常に己が片田舍に引き籠り練習に專念してゐ

ると聞くチャールトンが、今私の來濠を知り、勇躍身を起して既に乘り込んで一ケ月も前から猛烈な合宿練習を敢行してゐると情報を得てゐる、シドニーへ私達一行の到着したのは十二月三十日のこと、それから豫定せるプログラムの順序とあつて、ウエリントン、バザース、ニューカッスルの三ケ所で泳ぎ、いよ／＼八日十二日十五日の三日間、當市に開かれるニューサウスウエルス州水泳選手權大會に、大剛チャールトンを始め濠洲に於ける最強チームと顏を合せることになつたのでした。

　今私が茲で決して弱音を吐くのではありませんが、斯く決戰の日が迫るにつれ、私の心をいため起すものは、我が現在の實力や、コンデションに就てでありました。實際申すと私は無我夢中で濠洲へ飛んで來た樣なものでした。愈々目捷に迫る決戰を控へて、靜に自分を考へてみると餘り自分のコンデションは善くなかつた。第一八百米を泳いだのは、關西學院との對抗戰の折り一度泳いだだけで、秋行はれた神宮競技大會には水泳だけなく、ついこれといふ目標も挑戰もなかつた爲め、練習を怠つてゐた矢先招待を受け改めて練習する餘暇もなく、足下から取び出した水鳥の如く來濠し、航海中船の練習などは問題でなく、亦シドニー到着までの間といふものは殆んど百、二百の短距離競泳ばかりで、ミッチリ長距離などを練習する機會もなく、連日のレースとて休養する折もなく、あまつさへ言語の不通から氣疲れはする、大切な體力は減る、その上、私の要求などは入れられず、其地其地に着いてみれば萬事プログラムは先方の勝手通り出來上つてゐてどうにもならず、苦しみの爲めに旅行をしてゐる樣な羽目をみ、シドニーへ着く迄に二度許り日本が懷しくなり、いつそのこと歸つて終はうかと迄考へました。旅行は常に餘りアチラの言葉に得意でない私達二人限りなので、不自由な目には毎度會ひ、終ひには競泳をやるより、アチラの人の顏をみる方が遙に疲れをみせました。

　こんな狀態で、ヤレ／＼とシドニーへ着き少し悠くり休養と練習してチャールトンに對する宿望を遂げ樣と思へば、とても思ひもよらず、萬事競泳の種目は先方で決定しをり、兎や角いつた處で詮方なく、斯うなるからには、自分の萬全を盡して、男らしく戰ふ可しと、私は數日數夜、彼に勝つ可き方法を考へ闘らしてみました。

　彼れチャールトンの得意は云ふ迄もなく、千五百、八百の中距離である、彼の名が世界三羽烏の一に列せられたのも、中距離の力に依るのであつて、この世界的の強者が、最も得意とする八百八十碼で弱輩な私が對戰して勝ちたいといふのであるから一樣尋常な作戰では勝算覺束ないのであります。それにチャールトンの實力に就ては一片の情報もなく、大會當日までは敵すらみせず彼の力を知るに全く機會のなかつた私は、遂にこの一途を選んだのです。

　彼は巴里のオリンピック大會で千五百米を二十分六秒の世界記錄を作つて世界の中距離に於ける第一人者とまで噂されてゐるが、それから既に三年の星霜は經つてゐる。であるから強くなつてゐるか弱くなつてゐるか、そこが問題であるのだが、彼にはスピードがない、私が衝く可き點は只此の一點のみである。スピードのない弱點に乘じ自分がスタートからドシ／＼馬力をかけて彼をリードしたなら、案外調子を亂して彼は實力を發揮し得ず、私の戰略の爲めに陷つて吳れるか

も知れない、勝てる見込のあるは只この一片あるのみである、私は出來るだけ愼重に練習し、出來るだけ米の御飯を食べました。日頃の力を養成するには何んといつても米の御飯を食べないことには丹田に力が入らない。濠洲人は大食しないとみえ、どこの宿へ泊つてもお菜ものは一皿宛しか與れない、人並以上の大食家を誇る私達に、どうして滿足出來ませう、そつと故國を立つ時贈られたかき餅をつまみ出して、空腹を忍んだことさへあつたのですが、幸ひシドニーには、日本の米も澤山あり、大學專門學校を卒業した智識階級の日本人も多く從つて私達に對する理解力も強く、萬事便利で、殊に、日本人會から二人の先輩を私達の爲めに選んで一切を引受けて與れたので、初めてホット出來た土地でした。

試合前彼の地の諸新聞は、自分と、チャールトンとの一騎打ちに關し仰々しく書き立てたので、在留日本人は勿論のこと濠洲人の總ては大會場へ押し寄せ、定刻前、すでに立錐の餘地もなく滿員で入場を斷られた群衆は場外に黒山の樣に溢れてゐました。新聞でシドニー始まつて以來の人出だと云つた相ですが、本當かも知れません。

チャールトンと對戰の第一日は、八日の八百八十碼でした、百十碼もある大きなドメーンプールは汐水で、平常五十米のプールで泳ぎ馴れてゐる私達に取つては實際泳ぎ憎く不利なコンデションでした。それに日本でのレースはいつも晝間擧行されるのですが、彼地は夜行はれるのでプールには何千燭光の電燈が煌々と照らし、愈々開會の挨拶が終るや出場選手の一人一人をアナウンサーが紹介し、何處の産で目下何歳過去の戰績まで說明して人氣を煽るのでした、出場選手は六名、チャールトンの外目ぼしい選手はケリーといふ選手だけです、

パッとスタートするや喧々囂々大に聲援の交響樂裡は私はどし〱猛戰通り泳ぎました、約四百碼邊まで馬力をかけて泳いでゐましたが、チャールトンはとみますと實に意外、恐る可き彼れの實力は、私の豫期を裏切つて、直ぐ私の背後に迫ひついてゐるのです、「しまつた」彼は強いんだ……、然う思つた時は、もう私の負けでした、この頃から彼れチャールトンはグン〱馬力をかけて私を追ひ拔き、へたばつた私を殘して遂に約六七十碼の大差で勝ちました、私はこのレースで何百碼位は彼に續けたでありませうが、無理して若し中途からプールを上る樣なとにでもなると醜態この上もないことなので、グングン現はれる差も諦めて悠つくり二着にゴールインすることを餘儀なくされました。チャールトンは弱くなつた所ではなく、巴里の時よりもグッと強くなつてゐたのです。而もアルネボルグが一昨年、ストックフォルムで作つた十分三十七秒四の記錄を破つて十分三十二秒といふ素晴しい世界新記錄を出し、堂々世界第一人者の貫錄を遺憾なく發揮して勝ち誇つたのでした。實力のあつた彼にかういふ策戰に出でたのは負けるまでにしても私の大失敗といはねばなりません、全く實力ある點に於て私達の比ではなかつたのです。

私の夢が醒めて頭の中がスウーとした樣な氣がしました。遂に私は第一戰に於て慘敗してしまつたのです。

これから四日目の十二日、第二回目の對戰を迎へました、それは御承知の通り、四百四十碼の競泳でしたが、私はレース前からこの競泳を投げて終つたのです、諦り勝たうといふ野心を棄てたのです、八百

八十碼にあれだけの實力を持つ彼に、四百四十碼にも到底勝てる見込がなかつたのです。口にこそ應援諸氏の爲め健闘を誓つてプールに立ちましたが心中は殘念ながら既にレースを抛げてゐました、で今度は以前の戰法と反對に、彼に付いて泳ぎました所彼れは猛烈なスピードを出しましたが、私も猛然と追ひ三百五十碼邊で彼に追ひついたので、これならと識らず野心が出てか、あとの五十碼で焦り、ラストへピードを早く出し過ぎ、再度十一碼程負けて私の再敗となりました。

彼は四分五十九秒八で泳ぎ切りましたが、このレコードは一九二三年アメリカのワイズミユラー氏の作つた世界レコード四分五十七秒には僅二秒八の懸隔があるのでした。

重なる連敗に私の面目玉は飛んで終ひました。

私の聲價は一も二もなく地に落ちて終ひました。熱心に應援して頂いた邦人諸氏の爲め私は會はせる顏もなく、遙々海越え目指す彼を迎へてヤレ嬉しやと思ふも束の間、この慘敗に會ふて、この儘どうして故國に歸れ様、私は幾夜か悲憤の涙に咽び泣いたのです。

既に二度戰つて二度負けた。三度戰つて三度負けた時、その時こそ當に私の全敗の時なんだ。それにしては後一回がある。三度目の勝負といふことがある。そうだ私は今一度チヤールトンと戰はねばならない。

斯う決心が決まつて、更に三日目の十五日、今度こそ私の得意とする二百二十碼で、而もプールも五十米の慣れた場所に於て第三回目の決戰を迎へることになつたのです。

實はチヤールトンとしては、八百八十、四百四十碼の二つに連勝した以上、この上私と競泳する意思なく、殊に、私に有利な短距離で二度顏を合せるのを嫌つたのでしたが、私の挑戰に對し、世論が彼の自由を許さなかつたのでした。高石がチヤールトンの爲めに、八百八十、四百四十碼を務めたのであるから、今度は高石の爲めにチヤールトンは二百二十碼をやる可きであるとなし、到頭三度目の日を迎へました。この日齋藤君はバツクストロークで勝優したので、私としては愈々以て是が否でも勝たねばならないレースとなり、自分の責任も重い上にも重くなつてゐました。スタートに就くや比較的自信を以て飛び込み、猛烈に頑張り初めからリードして百五十碼邊で彼をみると、私が二碼程勝つてゐたので、よしこれなら勝てた……瞬間的に直感し、敢然ラストヘビーに移り、遂に約八碼の差で、チヤールトンを破り、全敗に終らんとする汚名を留めずようやく雪辱の一戰を贏ち得た次第でした、この時程無心に嬉しかつた時は嘗てなかつたでせう。難船しかけた船が、やつと救助されたのです。私も初めてホツと吐息を吐いたことでした。

このシドニーに於けるカーニバル選手權大會こそ實質内容に於て、濠洲随一の大會であり、廿六日濠洲の首都、メルボルンに開かれたカーニバル全濠洲水泳選手權大會は、名こそ全濠洲選手權大會でありましたが、シドニー程のものではなく、私は八百八十碼自由型に出て約三十碼の差を以て勝ち、濠洲ナショナル八百八十碼選手權を獲得しました。このタイム十一分六秒四で、ボー、ルベヤーの作つた八百八十碼ヴイクトリア州記録を破つたものでしたが、シドニーでチヤールトンの作つた十分三十二秒には遙かに及ばないものでした。

斯くして私は前後十六回、齋藤君は十七回の競泳回數を重ね約三ヶ月の遠征を終つて歸國したのでしたが、濠洲といふ處は、私達が想像してゐた程水泳に強い國ではなかつたのです。只彼れチヤールトンを除いて以外は決して恐る可きスキーマーは居りません。前回の萬國オリンピツク大會ではアメリカに次いで世界第二位を贏ち得た濠洲も今は恐る程の敵ではなく、將來はいざ知らず、今度觀せられた一般的の實力では、早や明年に迫る第九回目の萬國大會には恐らく日本選手の方に有利でありませう。

而し一體に濠洲の現選手は若手であるから將來の強味は到底測知出來ない。テニスのアンダーソン、パターソン、水泳のチヤールトン、曲飛のイブ選手等世界的大選手を擁する點が全土に漲るスポーツ熱の旺盛な點からして將來の濠洲は、世界の注目を惹くに至りませう。

日本と、現在の濠洲に於けるレベルを比較してみるなら、絶體に日本の方が勝つてをりました。泳法などに就ても我々は彼等から學ぶ可きものは何ものもなく、只、今迄、弱い者と許りレースしてゐた自分の力といふものを明確り知らずにゐましたが今度、初めて自分より強いチヤールトンと戰ひ、自分の力も稍見當が付きました。次回のオリンピツク大會で吾がリレーチームが世界に覇を唱へ樣とするには、新井、佐田、野田の新人諸君に大いに努力して貰はねばなりますまい。

濠洲には、パツクの選手らしいものはなく、齋藤君は終始樂な試合をしてゐました。彼等は不器用で踝の使ひ方など吾々の泳ぎ方を感心してをり、彼等には捲き足が出來ないので、立泳ぎをやつてみせると大喝采で何處へ行つても見せて呉れと大人氣を博したのも滑稽でした。

私達が旅行中、最も閉口したのは、大陸横斷の汽車旅行で、お腹をペコ〱に空腹して終つた事でした。日本の汽車旅行のつもりで、汽車辨を食べ樣としたが、驛へ着いても、……ビール正宗、サンドウイツチ、辨當……とやつても來ず、そうかと云つて車內には食堂車もなくこれはどうしたことかと、全く眼を白黑させ眞劍に間ごついたのでしたが、どうすることも出來ず、怪しげな顏をしつつ、一心不亂に乘客の行動を監視してゐるうち、大分私達をヂヤパニース、スキーマーと知る馴染が出來、辨當は規定驛に食堂があるからと教へられ、ヤレ有難やと食堂驛の發見に努力したが、容易に發見出來ず實にひもぢい思ひをしたのには困りました。それからレースで閉口したのは、水泳迄も可成り普及されてをるのにも拘らず、競泳のルールや設備など、日本の樣に組織立つてはをらず、濠洲ルールといふ樣なものを即座に作り、否應なしに從はされたのには驚きました。巴里のオリンピツク大會で、ダイビングに優勝したイーヴ選手を生んだ處だけあつて、曲飛は可成り發達してゐました。コンナーといふ十一歳の少年が、四十呎の高い跳込臺から、見事なフオームで平氣に飛び込むのには一驚しました。日本の一流選手のダイビングでもこの十一歳の少年に及ばないでせう。

尚旅行中、競泳を知らない熱狂的な日本人に、敵に樣子を探られてはいけないと窓のない室へ入れられて悲觀したり、面白いこと、辛い日にも遭つて一月三十一日シドニーへ歸り、此處から丹後丸に便乘して幾多の思出を殘し、二月二十四日神戶に上陸無事歸國することが出來ました。

私達がメルボルンの選手權大會を終へ、一小邑に泳ぎました折り人口一千人に滿たぬといふ小さな町だのに九百人からの觀衆がプールのスタンドを埋めたのには如何に濠洲人のスポーツに對する熱が強烈であるか、今日のこの有樣こそ將來濠洲の運動界を雄辯に物語るものではなからうか、と、深く考へさせられた唯一のものでありました。

著書署名の奇

露伴學人

人の心の持方といふものは、勿論のこと其の時代時代で移り變つて行くものであるのに異しむべきことは無い。然し隨分と變れば變るもので、今人は片々たる零細の書、然程の勞力苦心の費されたものでも無いものを著はしても、何の某の著であるとして、嚴めしく著者の名を署するのである。それは責任を明らかにするのだと云へば、誠に立派な心の持方だとも評へる。然し古の人は責任を免れようといふ如き卑劣な心事からでは無く、むしろ自然に著書に署名などするといふ形式を心に浮べ無かつた爲なので有らうか、支那日本の古著述には著者さへ分明しないものが多い。極めて古いものは何も著述をしようといふ意識から成立つて居らぬのも有つて、自然に其の門弟子や何かの手に依つて編撰されたものが多いのだから、それも其筈であるが。先秦諸子などは、中々立派なものでも、誰の手から成立つたものかさへ分明しないのが十に九であつて、道德經五千言が老子の手によつて世に出たといふやうに分明してゐるのは却つて少い。しかも其の道德經さへ、老子其人が分明しないで、後の學者の論議の種子になつてゐるのなどは、隨分長閑な談である。署名などはまるで問題になつてゐないところが、極めて古い時の常例であつた。

漢の頃になつては、司馬遷の史記だとか、班固の漢書だとか、これ等は自叙によつて分明に其の著者の誰人であるかを示してゐる。が、漢時代でも隨分奇妙な、――今日の人の情から云へば隨分奇妙なことをして署名の實を擧げてゐるものが有る。

越絶書といふものが有る。これは呉越の事を書いたもので、中々古くもあれば面白くも有るものである。然し其の著者がぼんやりしてゐるので、隋や唐の時代では、傳説によつて、これを孔子の御弟子の子貢即ち端木賜の著はしたものだとしてゐたのである。それは、越絶書の外傳本事の文中に、或は以て子貢の作る所と爲すとあるから起つたことである。子貢の著述だとすると、大に古いもので、刮目して研究すべきものであるが、それは間違である。それから又、子胥の作ではないか、呉子胥の作だとも云はれた。呉子胥は人も知つた豪傑である。しかし是亦外傳本事に、一説に蓋し是子胥の作る所なり、とあるのから出たまでのことで、子胥の作では無いのである。書中の外傳記呉地傳第三に、漢の秦を併すより今に到るまで二百四十二年、句踐、瑯邪に徙るより建武二十八年に到るまで凡そ五百六十七年、と有るのを考へると、建武は後漢最初の光武皇帝の時の年號で有るから、後漢の初、

西暦紀元五十年頃の著述でなければならぬのである。子貢や子胥の作で無くても隨分古いものである。

此の越絶書は誰の手によつて成つたものかといふと、隋唐の頃までは前に云つた通り、子貢だとか子胥だとか云はれてゐたのだが、明の楊升庵が考へはじめてから、胡侍だの田藝蘅だのに考へられて、遂に清の朱竹垞の頃には、漢の袁康、吳平の二人の手によつて出來たものだといふ事が定說になつたのである。どうしてそれが分つたかといふと、奇妙な式によつて著者の署名が爲されてゐたことを看破したからである。越絶卷の十五の、敍外傳記の章に、かういふことが書いてある。

上略、百歲一賢、猶爲比肩、記陳厥說、略有其人、以去爲姓、得衣乃成、厥名有米、覆之以庚、禹來東征、死葬其鄕、不直自斥、託類自明、寫精露愚、略以事類、俟告後人、文屬辭定、自於邦賢、以口爲姓、承之以天、楚相屈原、與之同名、德配顏淵、伏質自容、年加辛酉、懷道而終、下略

これは即ち今の謎である。去を以て姓と爲し、衣を得て乃ち成る、といふのは、去の字の下に衣の字を得せしむれば、袁の字になるのである。厥の名に米有り、之を覆ふに庚を以てす、といふのは、庚の字の下に米の字を置けば、即ち康の字である。禹來つて東征し、死して其鄕に葬るとあるのは、禹が死んだ處は會稽であるから、會稽の人といふことである。後の六句に自ら著述の意を敍したのである。文の屬せられ辭の定めらるゝは邦賢に自る、とあるのは、文を屬し辭を定めるのを、同郡の賢者、即ち同じ會稽の人にたのむだのである。其人は口を以て姓と爲し、之を承くるに天を以てす、とあるから、口の下に天の字、即ち吳といふ姓で、楚の相の屈原、之と名を同じうす、とあるのは屈原の名は平であるから、即ち平といふ名の人である。これで袁康といふ會稽の者が創め出して、同郡の吳平といふ者に筆を加へ文を點して貰つて成就したもので有ることは明らかである。探偵小說に、奇妙な文辭を解釋して寶物の埋藏處を考へるといふことが有るが、そんな事は殆に二千年も古臭い謎で、越絶書の著者は地下で笑つて居ることだらう。が、後漢の初から明の時まで、此謎を解き得ないで、崇文總目なども、越絶書を子貢、撰或は曰く子胥なりなどと、記してゐたのはおもしろい。宋の陳振孫は隨分精核な讀書家であつて、子貢や子胥の撰では無いと看破り、建武二十八年に記事の及んでゐるところを見て、蓋し戰國後人の爲す所にして、而して漢人又之に附益する耳と評したのは、流石に直齋先生である。が、珍珠船の胡先生も亦實に目の確のきれた人である。それは吳平は即ち吳君高であると、古い謎の中に名のみの有つた漢時代の人の字まで調べ出したからである。漢の王充の論衡の卷の二十八の按書篇の、今人必ずしも古人に劣らざることを論じた條に、東番の鄒伯奇、臨淮の袁太伯、袁文術、會稽の吳君高、周長生の輩、位は公卿に至らずと雖も、誠に能知の雙殊、文雅の英雄なり、伯奇の元思、太伯の易章句、文術の咸銘、君高の越紐錄、長生の洞歷は、劉子政、楊子雲も過ぐる能はざるなり、と云つて居るが、其の越紐錄といふのは越絶の謂であつて、君高即ち吳平である、と說いてゐる。如何にも然樣であらう。王充に然樣に評された吳平は、たしかに當時の大文豪であつたに相違無く、それで文屬辭定、自可擬

の、邦賢の二字も浮泛の辭で無いことが合點される。して見れば越絶書は袁康といふ者が多く舊事を知つて居て、そこで意を創めて、吳平に筆を執つて貰つて出來たものであるといふことに疑無いのである。吳越の事を專らに記した者には、越絶のほかに趙曄の吳越春秋があるが面白くて明暢なのは吳越春秋の方が勝つて居ると自分は思ふ。然し古色の多いのは何と云つても越絶の方が優つてゐるので、前人は越絶に左袒してゐる。

越絶のやうな奇異な式を取つて著者の名を記した者は越絶ばかりかといふに然樣では無い。まだある。同じ漢の代の書に參同契といふものがある。參同契は仙道の書で、此書の如何なるものであるかといふ事を談り出すと、とても其の關聯するところが洪大で、一朝夕には何樣することも出來ないものであるから、姑く擱くが、たゞ佛者の參同契では無いといふことだけを斷つて置く。佛者の參同契は仙家の參同契より遙に後の者で、眞の參同契に摸擬したものである。さて其の參同契の著者も丁度おもしろい事には越絶の著者と同じ會稽の人であるが、これは仙人の事でも有り隱者の事でもあるから、且又秘奧の義を書いた書でも有るから、明らさまに著者の名を記さぬのが相應はしくもあらうし、然りとて又肯て盡く其書の何人に出たかを晦まして信を遐かしめぬやうにするのも不本意なので敢てした事であらう。が、滑稽なのは、後の其書を讀む者が名を記したところの隱辭を、それと氣がつかずに、無理に無茶苦茶に讀んで牽強附會の解釋を下して、解し得たつもりで居た者の有つたことだ。元來が非常に幽澀に書くべき性質の者では無く、潛心熟讀して、そして辛くも解悟することの出來るやうに書いたものであるから、然ういした過失の生ずるのも無理も無いことであるが、解つた者から見れば實に馬鹿々々しいことである。擬其書の末には、かう記してある

上略、委時去害、依托邱山、循遊寥廓、與鬼爲隣、化形而仙、淪寂無聲、百世以下、遨遊人間、敷陳羽翮、東西南傾、湯遭厄際、水旱隔幷、柯葉萎黃、失其卒榮、吉人乘負、安穩長生。

如何にも仙人の語で、越絶のよりは、ずつと勝れてゐる。何となく幽玄詭秘の香がして奇異である。たゞし虛心にして讀み味へば、さまで疑惑することは無い。時に委して害を去り、邱山に依托し、循遊寥廓、鬼と隣を爲すの四句は、委の字に鬼の字を隣らせて、魏の字となる。形を化して仙たり、淪寂として聲無し、百世而下、人間に遨遊すの四句は、百の字の下部を人の字に傍はすれば、即ち伯の字である。敷陳羽翮、東西南傾は、陳の字の偏のみ遺留させ、湯厄際に遭ひ、水旱隔幷は、湯の字の水偏を去つて易の字となり、阝と易とで陽の字と爲るのである。柯葉萎黃し、其華榮を失ひ、吉人乘負して、安穩長生すは吉といふ字の下に人といふ字を置きて、それに華の落つるが如く幾點かを加へれば、造の字となる。十六句を合して、魏伯陽造となるのであつて、參同契の書、魏伯陽の造るところたるを示してあるのである。勿論參同契の書は、全體が英靈篤志の人には知らせたくも有り、又凡根薄志の徒には知らせたくも無い仙家の秘を記したものであるから、すべてが隱語では無いが、明らかなるが如く明らかならざるが如く、希微幽渺の調子を以て記されて居るので、此の十六句も讀破出來ぬほどの者は、何處を讀んでも歯が立たぬやうなものである。で

はして置いて誰か其名を露はすことを悩さずに居ようやである。

あるから斯様なことをして置かれても致方が無い。宋の陳顯微などは參同契の解を撰して居るが、此處を正解し得ないで、無理こじつけに解を下してゐるところは、隨分奇なものである。それも其筈で、大抵の者は參同契其物の性質をさへ見誤つて、易理を說いた者だなぞと思つてゐた位であるから是非も無い。たゞ越絕と參同契と、同じ漢代のもので、同じ會稽の人の著で、同じやうな式を取つて著者の名の示してあることを面白いとまでに此處には談ずるに止めて置く。

日本の書で、此の式を用ゐて著者の名を示したのには通語がある。通語は保元から南北朝までの史事跡を、やゝ古い體の漢文で明和初年に野史氏が記したものだ。中々面白いもので、日本外史が史記の文を學んだものなら、逸史は左傳、通語は國語といふやうに評したいやうな氣のするものである。どこにも著者の名は署されてゐないで、書の性質が性質だから恐らくは越絕書の眞似をしたのでも有らうか、卷末に辭が載せてあるばかりだが、其辭がまた無理無く巧に出來てゐる。

櫟泉三箇、左獲右淵、理値遂人、得一整禾、屈直委心、寄半行對、奢者不久、板木作士、水鷲樹春、自古爲都、欲求其郡、從和仲、欲知其國、問長沮。

といふのである。櫟泉三箇、左獲がり右淵れば即ち中井である。假を理し人を遂ひて貴字となり、一整の禾を得て、禾に貴で積である。直を屈し心を委すれば悳字、それに行の字の半を寄せれば、德である。即ち中井積德である。あとは大阪、浪速、東成、津の國である。中井先生もおもしろい洒落をしたものである。

古と今とで人の心持は異なる。今の世に通語ぐらゐの好い辭を著

メーデーを司會して

北林太吉

紺碧に晴れた五月の空に閃亂せる紅黑旗の槍尖の林、洪水の如き民衆、ゆくりなくも僕は昨年のメーデーを此處に追想する。

輝に充ちしメーデーに、僕は如何に思惟し如何に行動せしか、

僕は日記を繰る。

五月一日、水晶のやうな空。一切の準備は滯りなく完了してゐた。工場から町からあらゆる辻からあらゆる道から民衆は雪崩れうつて來た。

全世界の勞働者の心臟に通ふ血は、亦た此處に、あらゆる爭鬪墻壁を潰流せしめて、資本主義への抗議に其の歩武を揃へしめた。

僕は感激した。

五月の太陽が未來を幻想せしめた。

僕は立つた。

全世界のあらゆる勞働者の胸の言葉を資本主義に向つて强く鋭く高く宣言した。

そして、吾々がかくの如き宣言を心を以つて支持することによつてのみ、此の五月の太陽を、歡喜と幸福をもつて迎へうる日の來たることを熱說した。

吾々が街頭に流れ溢れる時は迫つた。

吾々を巡る佩劍の林壁をあくこととなく盪ることなく細路より辻より大道より滾々として流れ出づる民衆に潰流せしめん日のメーデーを空想した。

然り、吾々の流れはあまりにも淸冽に過ぎた。

滔々たる民衆の潮が全市街に充ち溢れそして補倒し行く勢ひには遠きそれではである。

歩武は市街の騷音に弱く消されゆく。

歌唱は壁を搾つことなく路傍に轉落する。

槍尖は友を呼ぶことなくあわたゞしくも離脫して行く。

細りゆく流れ、肥りゆく佩劍。

上野の森が綠の森が夕燒の空に映えて見える。

僕は限りなき憂鬱に沒落した。

今日一日を脈搏ち續けた血がもう已に此處に退き、再び、爭鬪と亂爭の昨日を明日に始めるのだ。

然し、明らかに吾々は今日を持ち得た。吾々は明日への可能を確信せざるを得ない。亦、可能ならしめなくてはならない。希望は胸を埋めた。僕は力強く、民衆の胸へ萌えた今日の芽を明日も亦育成せしめゆくことを希望して、一九二六年のメーデーの解散を宣した。

此處に、間斷なき數々の抗議の累積の滿潮峠は資本主義メカニズムのあらゆる層へ細胞へ再び新たに……………………

……………………細流して微流していつた。

一九二七年のメーデーにそは正確に反映するであらう。

上野の森に佇みながら、よりよきより多きその反映を深く願望した。

再びメーデーはめぐつて來た。

私の此の願望を具現した輝けるメーデーであることを。

今年のメーデーよ。光輝あれ。

秋水の遺した文書

堺 利 彦

幸徳秋水のゆかりの人に頼まれて、私は先頃から、秋水が其人の手に殘して置いた、若干文書を處理する任務に當つた。そのついでに、その文書の內容を書きつけて、『改造』に載せて貰ふ事にした。

(其 一)

己丑歲晩

落魄多年衰褐寒(東海端)。京城風月托身安。世間貧福何(不)須說。時(俗)事浮沈且莫歎。三四早梅知己色。百千窮鬼旅(故)人看。破窓守歲繙書處。一穗寒燈照眼丹。

試　筆

春水汲來注硯池。新詩欲寫下毫遲。故園昔日東窓底。阿母展箋映小兒。

兆民評　我家幸有讀書兒

幸 德 傳拜

(これは秋水がまだ中江兆民先生の家の玄關に居た時のものと思はれる。傍點と評は兆民先生の附したもの。括弧內の字は兆民先生に依つて本文の如く直されたもの。秋水の毛筆の字體はまだ頗る幼稚。)

(其 二)

臨別贈約翰遜翁二十韻

工人有君子。名曰約翰遜。華髮年六十。獨居避世喧。清貧自適意。斷絕利害根。讀書樂古道。深探政教原。身生西洋國、不入耶蘇門。衆妙嗜老子。無我說釋尊。地隔三千里。慇懃屢寄言。雖未見其面。早感交情温。埠頭迎我日。歡喜揭衣奔。相見如骨肉。往來日夜繁。祝融忽下禍。炎焰焦乾坤。繁華一朝盡。灰塵日色昏。劫後難久住。去向何處村。北山猿鶴笑。東海風浪翻。世途値險惡。蛟鬪鯨鯢吞。此別恐永別。思之暗消魂。人生似幻夢。苟歡乍無痕。惘然把臂立。一語說加餐。四海皆兄弟。別離又休論。達人能達觀。萬象是一元。

西曆一千九百六年六月　秋 水 幸 德 傳

(これは秋水が米國桑港で大震災に遭つた後、日本に歸らうとする時、深い交りの無政府主義者ジョンソン翁に贈つたもの。原書は二句を一行にキチンとペンで書いてある。字體は甚だ流麗。)

(其　三)

昨日は令夫人態御持たせ被下難有奉存候實は頃日來間斷無く抜痛候より夜間寐らざる事屢々にて折々詩句を思ひ付事有之何分韵礎を忘却し困却候より御無心申上候次第に御坐候病中二首を得申候一夜を隔て

殘燈吹餘已。涼月半窓明。病客夢方覺。陰虫三五鳴。

西風終夜度庭區。落葉撲窓似客呼。夢覺尋思時一笑。病軀雖有兆民無。

御一笑被下度候

殘一年半は物が物故餘り實行不宜と察居申候樣子如何哉奉伺候

秋　水　兄　　　兆　民　生

(これは兆民先生が最後の病中、『殘一年有半』を著はした時の手紙。詩の句點は堺が附けた。『兆民無』の圈點は原文のまゝ。最終の『奉伺候』の下方に『拜』の字かと思はるゝ草書が一字あるけれども ハツキリ讀めない。『兆民生』の上方にも何か一二字あるが、讀めない。封筒の日付は十月廿六日午前。書體は老蒼枯淡。)

(其　四)

爾來御無音仕候〇同盟會には不相變御盡力相成候旨乍蔭拜承仕候生も聊微力を展候考に御坐候間追々御示教相願度奉存候〇此者は小生舊門生にて幸徳傳次郎と申萬朝報に執筆罷在極て溫厚之性に有之御訪問申上度旨紹介×仕候御清閑之際を以て御面示被下候はゞ大慶の至に御座候

二日　　篤　介

鳥　尾　樣

蒲　團　下

(これは兆民先生が秋水を鳥尾中將に紹介したもの。『紹介』の下に『之』の字らしい草書が一字あるが、讀めない。最終『御座候』の下にも『拜』か『白』かと思はれる草書が一字ある。)

(其　五)

筆硯御榮福奉賀候陳著兆民先生一部御惠投被下難有拜讀仕候處先生之面目精神は忽焉として前に在るやを覺え特に卷首の小影を見て聲咳に接するの感あるのみに無之候先生を知るの深きにあらざれば爭でか先生をして活躍せしむることを得んやと存じ候

思へば昔僕も一度は佛學塾に入らんとして五番町に赴きたる事も有之候亡友刈谷富春と與に之を作りて先生の退去を送るに擬したる事も有之候二松學舍翹楚集を讀みて先生之所謂漢文が異樣出色なるを驚きたる事も有之候學科の參考として理學鈎玄を繙きたる事も有之候初期の議會開場中所謂國粹宴に陪して俗物退治の咒の爲に火鉢に尿せられたるを見たる事も有之候僕の不健康なるに滿腔の同情を寄せ特に小石川に招ぎて懇ろに淺川博士を紹介せられたる事も有之候最後に途上にて逢ひたる節久しく逢はぬ併し新聞では(詩を見るから)いつも逢ふてるわしも癒け出したら寄らう一ト晩緩くり逢はうと車上にて語られし事も有之候

曾て幾許時ぞや先生の貧は舊の如く寄ても貰はず僕の健康も舊に復せぬに早くも幽明隔絶して夢ならでは先生に逢ふ事ならぬ事と相なり申

候悲む可き限りには候はずやされど身は番町に臥しながらも心ばかりは先生の告別式に臨み候事は假令ひ先生之說に從ひて無靈魂なりとするも尙ほ且つ之を諒せられん事を信じ候先生の病は一年有半には滿たざりしかど先生の名は千秋に不朽なるべしされば其言行の眞を傳へて千秋に感化を與へしむべきは勿論復死者の責に候是に於て平鐃著は出でたり兎を搏つの獅子は亦全力を用ふと申候事誠に理の當に然るべきに御座候御禮かたぐ早々不具

六月四日　　式　　病腕

秋水老兄侍史

(これは野口寧齋(一太郎)氏の手紙『式』は一の字『病腕』とあるは、氏の手が病の爲め筆を持つに不自由であつたからである。この手紙の封中に、今一通の手紙の斷片が卷きこんである。それは次の如く讀まれる。)

……論天情僊なるものあり歌うて云く

中江篤介兆民君。逝矣不同衰暮雲。唯物無神乃所學。一年有半遺奇文。天才畢竟資豪宕。俠骨眞堪解糾紛。弟子崇師豈阿好。撰斧幾篇欲同焚。

(論天情仙とは寧齋氏の別號であつた。句點は堺が付けた。)

(其　六)

幸德君足下、未接謦咳、忽見惠高著、乃廢一夕之課、瀏覽卒業、照背、、、、、、、、書古雅、語無俗態、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、而今安在、、、、、、、僕不幸終不獲一謁、常頗恨之、今因此書粗知其豹斑、實足下之賜也、僕尤所感在足下厚於先師、今日人情如薄紙、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、請自今文詩往復、或及時事、傾蓋如舊、茲布數語鳴謝、壬寅六月一日、曉窓挑燈泝筆、頓首

信夫粲　再拜

秋水先生　硯下

(これは信夫恕軒氏の手紙で、支那式の詩箋の、赤と青と二枚に書いてある。同じく支那式の封筒の裏に『小石川大和町▲第三番▲士信夫粲發』とあるのも面白い。句點は堺。)

(其　七)

(『これは惡魔(ドストエフスキー)幸德秋水譯』と題した十枚ばかりの原稿で、その原文が『世界文壇の珍品』であると同じく、この譯文原稿も亦た實に珍品である。譯文は次號に掲載して貰ふ事にした。)

×　×　×　×　×　×　×

右七文書の中、其一と其二は私の友人吉川守邦氏の手に保存され、其三、其四、其五、其六、は8氏の手に保存され、其七だけはまだ私の處理中に屬してゐる。

猶ついでに記す。大正二三年の頃、中央公論の瀧田樗陰君が秋水揮毫の漢詩の一幅を私の處に持つて來て、その眞僞の鑑定を求められた事がある。勿論それは眞物であつたが、その時、瀧田君は或人から無

理に頼まれて、それを近間で買つたと云ふ事だつた。然るに其後、大正八九年の頃、私は××××君から頼まれて、同じく秋水の漢詩の一軸を、小泉三申君に百圓で賣りつけた。それから、、、、、、、形になつて、その後又、××××氏所有の軸が吉川守邦氏の手に移された。それから一昨年には又、田武九平氏(長崎縣諫早刑務所無期囚人)の所有なる、同じく秋水漢詩の軸を、武田君の留守宅なる老母の病氣療養費に充てる爲、大原社會問題研究所に買取つて貰つたが、その價は既に前記通り相場の倍額に登つてゐた。世の中の移り變りの面白さの一つである。

怪物・鈴木商店

石山賢吉

（一）

潰れる、潰れる、と噂された高田商會は、果して潰れた。鈴木商店は、それよりもモット酷く、危險の噂が以前から傳へられて居るにも拘らず、一向其噂が實にならない。

さて、どうしたのだらう。

噂なんて云ふものは、當にならぬものだ。と云つて仕舞へば、それまでだが、噂も噂によりけりで、儲けた方の噂は、餘り當にならぬものだが、損した方の噂は、大槪確なものだのに、鈴木商店のみはそれの例外をなして居る。我々は疾から、變だ々々と想つて居た處、本年の議會に震災手形法案が提出されて、一切の疑問が氷解した。

（二）

鈴木商店の借金は、實に大きい。

近年、日本も發展して、各方面の數字が滅切り大きくなつたが、それにしても一商店の借金が四億五千萬圓とは驚く。最近銀行が一度に七つ潰れた。その爲め、財界が動搖した。然し、是等の銀行がどれだけの金を預つて居たかと云へば、皆んな合はせて一億三四千萬圓に過ぎない。鈴木商店の借金に比較すれば、三分の一に當らない。七銀行の預金が少い譯ではない。鈴木の借金が大きいのである。大銀行になつても、二億圓以上の預金を持つて居る銀行は少い。三井三菱、住友安田、第一、十五、三十四、川崎、山口位なものだ。十行ない。更に、三億四億となると、一層其數が減り、四億五千萬圓以上になると、安田と三井のみになる。安田の總預金額は六億二千萬圓。日本一の大銀行だけあつて、流石に其預金額は鈴木の借金より多いが、次の三井となると、四億五千萬圓で、鈴木の借金と同額である。即ち鈴木商店は

日本で飛ぶ鳥を落す勢ひの三井銀行の預金と同額の借金をして居るのである。これでは、我々が小心者でなくても、其額の大きいのに驚かざるを得ないではないか。

新聞を讀むと、どの新聞でも『貸も貸たり、借も借たり』と書いてあるが、全く其通りだ。日本にこれだけ大きな借金をして居る者は他にない。イヤ、日本と云はず、外國にもないと云つて居る人があるが、そうかも知れない。

（三）

一體、鈴木商店は、どうして、こんなに大きな借金をしたのだらうか。鈴木商店の借金に驚く人は、何人も次に此疑問を起すのであるが、それは勿論鈴木商店が發展したからではある。鈴木商店が一箇の砂糖商であつたのは昔の事で、今は日本屈指の大貿易商となつて居る。自然、資金が多く要り、借金も多い筈である。然し、それだけでは借金が多過ぎる。鈴木商店よりズット規模の大きい三井物產でもそれだけの資金を必要として居ない處を見ると、鈴木商店の借金には、貿易商としての發展以外、他にも原因がある事を思はなければならぬ。然り。それは確にそうである。鈴木商店の借金には他にも大きな原因がある。それは即ち色々の事業に手を出した事であるが、其事業を列記すれば左の如くである。

（一）直營會社

株式會社日本商業會社
株式會社浪華倉庫
豐年製油株式會社
南滿洲物產株式會社
帝國汽船株式會社
日本金屬株式會社
再製樟腦株式會社
支那樟腦株式會社
帝國樟腦株式會社
株式會社神戸製鋼所
株式會社日沙商會
日本輪業株式會社
米星煙草株式會社
クロード式窒素工業株式會社
太陽曹達株式會社
大陸木材工業株式會社
東工業株式會社
帝國人造絹糸株式會社
帝國炭業株式會社
沖見初炭礦株式會社
大日本酒類醸造株式會社
合同油脂グリセリン株式會社
日本冶金株式會社
樺太漁業株式會社
東京無線電機株式會社

日本エヤーブレーキ株式會社
紡機製造株式會社
第一窒素工業株式會社
太田川水電株式會社
南朝鮮製紙株式會社
內國食品株式會社

（二）投資會社

大正生命保險株式會社
新日本火災海上株式會社
帝國麥酒株式會社
東洋燐寸株式會社
東京毛織株式會社
佐賀紡績株式會社
天滿織物株式會社
大日本鹽業株式會社
日本拓殖株式會社
旭石油株式會社
國際汽船株式會社
日本樟腦株式會社
日本教育生命保險株式會社
宜蘭殖產株式會社
東洋製糖株式會社
日本製粉株式會社
大日本セルロイド株式會社
南洋製糖株式會社
東洋海上火災保險株式會社
東亞煙草株式會社
信越電力株式會社
第六十五銀行
帝國染料株式會社

（三）直營事業所

薄荷工場
香料製造所
七飯農場
大邱操綿工場
永同操綿工場
阿緱農場

即ち直營會社が三十一、投資會社が二十三、直營事業所が六、合計六十ある。此外に、私の知らない關係會社も二つや三つはあらうから夫等をも合はせれば、其總數は六十幾つかになる。實に夥しい數である。鈴木商店は是等の會社に巨額の出資をして居る。其出資は自店の金ばかりではなく、他から借りて居るに相違ない。鈴木商店は大金持であるとしても、大貿易を營んだ上の事だから、自店の金だけで、斯かる多數の會社に出資が出來る譯がない。即ち事業出資の爲めの借金が可なりある筈である。

…………………………………………

……………………………………………
……………………………………………。

(四)

關係會社の方は暫く別として、鈴木商店のみで、どれだけの借金があるか。

鈴木商店の內部組織は、株式會社鈴木商店と鈴木合名會社の二つになつて居り、合名の方は決算を發表しないから、鈴木商店自體の正確なる借金は分らないが、株式會社の方の決算を見ると、其大體を知る事が出來る。

最近發表された株式會社鈴木商店の決算左の如し。

▲負債之部

資本金	八〇、〇〇〇、〇〇〇円
法定積立金	五五〇、〇〇〇
別途積立金	四、〇〇〇、〇〇〇
前期繰越金	五、一三九、六七六
借入金	二一、六四二、四四〇
輸出前借	五、九三四、九四一
支店支拂手形	一三、〇五五、八八四
支拂手形	二三、六三五、三一〇
引受爲替	三五、〇七六、三三四
取引先及諸債務勘定	六、七九一、二四八
假勘定	一、一四四、〇八六
當期利益金	九四二、五二五
合計	一九七、九一二、四四八

▲資産之部

未拂込資本金	三〇、〇〇〇、〇〇〇
有價證券	四五、四八〇、〇三一
什器及不動産	三、六一七、二四八
商品	三二、七三一、七八〇
受取手形	四三、七五三、二五三
取引先及諸債權勘定	二八、六七五、七九二
銀行預金及現金	一三、六五四、三四二
合計	一九七、九一二、四四八

此貸借對照表は昭和元年十二月末現在であるが、之に依ると株式會社鈴木商店は昨年十二月末に於て一億七百萬圓の借金をして居る。此內から銀行に關係のないらしい負債―取引先及諸債務勘定と假勘定を除いても、尚ほ九千九百三十四萬圓の借金がある。切り上げ計算にすれば一億圓の借金である。

此外に決算に現はれない銀行債務がある筈だ。それは、鈴木商店が受取つた手形を臺灣銀行其他から割引して貰つたものである。……………………………………
……………………………………………。

次は、鈴木合名會社の借金である。合名會社は今云つた通り決算の發表がないのだから、推測を用ゐるより外ないが、此會社は投資會社だから、先づ鈴木家が直接間接の關係事業に對して、どれだけの出資をして居るかを調べて見る。

鈴木家の直營會社は前記の如く三十一會社あるが、此内私に內容の分らないのが七會社ある。それを除き、他の二十四會社に就て、拂込資本金を計算して見ると、概略九千萬圓になる。分らない七會社の拂込資本金を一千萬圓と見れば、其總計は一億圓である。此出資は全部鈴木ではない。他の出資もある。そして其割合は一樣でない。殆ど全部、鈴木で出資して居るのもあれば、それほどでないのもある。平均したら、鈴木の出資割合は六割位であるように見受けられる。六割とすれば、六千萬圓である。

次は、投資會社である。投資會社の出資計算は、株式の見積方に依つて違ふが、之を時價（鈴木商店の整理騷ぎで株式の暴落しない前の時價）に計算すると、概略四千萬圓位になる。鈴木商店や鈴木合名會社の方では、勿論、これより高く積つてあるに相違ない。七千萬圓にも、八千萬圓にも積つてある事と思ふ。之を直營會社の分に合はせれば、其合計は一億三千萬圓乃至四千萬圓である。

金子直吉氏が新聞記者に說明した處に依ると、鈴木合名は出資會社、鈴木商店は貿易商會、二者の間に劃然たる區別がしてあると云つて居るが、これは組織の理想を語つたものに過ぎなく、實際はそうなつて居ない。即ち貿易商會の鈴木商店も他會社に巨額の出資をして居るのである。

此次第は、右に揭げた鈴木商店の貸借對照表を見れば、直に分る。即ち貸借對照表の資產之部に有價證券四千五百四十八萬圓と書いてあり、貿易商會の鈴木商店が他會社に是れだけの出資をして居る事を明示して居る。鈴木商店は、初めは個人組織、それを合名組織に改め、近年になつて合名會社と株式會社の二つにしたものだ。此組織の分離は大正十一年であつたようである。其時は、合名會社を出資會社、株式會社を貿易商會にする理想だつたんだらうけれども、さて實際やつて見ると、そうはならず、貿易商會の方を現在の如きゴチヤ〳〵組織にしたものであらう。これは勿論借金の便宜手段である。舊合名會社の借金を株式會社と分擔するに就て、所有々價證券を株式會社に分けてやつたものと思はれる。

そんな由來は兎に角として、現在では、鈴木家の株式は、合名會社と株式會社の兩方で持つて居るのだが、其一方の株式會社の株式所有額が四千五百萬圓であれば、他の一方の合名會社の株式所有額は七千五百萬圓か八千五百萬圓の筈である。

…………………………………………。

…………………………………、…………

…………………………………、…………

……………………………………………

…………………………………………………

…………。

此外、鈴木合名會社は土地家屋を所有して居ると云ふ事だ。私は其額が何程であるかを詳にして居ないが、度胸のいゝ鈴木一家の事だから、思惑で、土地にも可なりの投資をして居るものと察せられる。

……………………………………………

……………………………………………

……………………………………………………
………………………………………………。
…………………………………………………。

（五）

鈴木家の當主岩次郎氏は、鈴木家の何代目の主人であるか、私は之を知らない。從つて、鈴木家が如何なる家系のものであつて、又如何なる由來のものであるかも、私は知らない。唯、當主岩次郎氏は親爺の名を繼いだもので、前代も矢張り岩次郎と云ふ名であつた事は知つて居る。是れは人事興信錄に書いてあるからである。人事興信錄に依ると、前代岩次郎氏は明治二十七年に死んだらしい。其時の鈴木商店は、神戸に於ては、相當の商店であつたらしい。然し工面は餘りよくなかつたと云ふ事だ。日淸戰爭が始まりさうで、財界が恐怖に襲はれて居た時だから、其打擊を受けたものであらう。

そこで前代岩次郎氏は自己の信賴する番頭に後事を託して死んだ。其番頭が今日實業界の怪傑として、世上の注意を一身に集めて居る金子直吉氏である。

金子氏は土佐の生れ、家貧しうして幼少より鄕里某商店の小僧となり、刻苦精勵、主用の傍ら苦學す。神戸鈴木商店頗る君の爲人を偉とし、其店員となす。是れより其手腕大に現はる。——是れも人事興信錄の抜き書であるが、思ふに、金子氏が小僧となつた鄕里の某商店は、神戸の鈴木商店と取引があり、其關係からして其人物を知られ、望まれて鈴木商店の店員となつたものであらう。

前代岩次郎氏の死んだ時は、妻君のおよねさんが四十三歲で、悴の岩次郎氏が十七歲、番頭の金子氏が二十八歲であつた。

金子氏は、岩次郎氏が幼弱だから、未亡人のおよねさんを盛り立て店主となし、自分は其下に働いた。そして大に儲けて、鈴木商店の名を揚げた。丁度其時は、戰中戰後で、經濟界に波瀾があり、金子氏が天賦の商才を發揮するには、持つて來いの時機であつた。

金子氏は、其儲けた金で住友から製腦所を買收して樟腦の精製業を開始したり、大里に製糖工場を建設したりした。すると又製糖工場の建設が大に儲かつた。

どうして儲かつたかは、誰も知つて居る事だが、其工場を大日本製糖會社に賣つたからである。

賣つた價格は六百五十萬圓、建てた資本は何程であつたか知らぬが、傳へられて居る處に依ると、百五十萬圓位であつたと云ふ。さすれば、差引五百萬圓の利益があつた譯だ。其後間もなく大日本製糖が破綻したので、賣つた金は全部現金で這入らず、年賦になつたのもあるけれども、兎に角鈴木商店は此工場を賣つて大に儲かり、それを資本にして更に又大に活躍した。

（六）

これからの鈴木商店は、其活動の範圍が極めて廣い。鈴木商店の實權者たる金子直吉氏が多方面の人だから、其活動の範圍も廣くなるのだが、そのうちにも最初最も力を入れたのは、臺灣であつた。是れは

住友製糖所の買收が緣をなしたのであるが、日露戰爭の結果、臺灣が我が領土となるや、金子氏は臺灣事業發展の爲めに臺灣に渡つた。そして後藤新平氏に知られた。

金子氏は誰とでも知り合になり易い人らしい。そして知り合になれば、必ず相手方を感動させる人らしい。殊に後藤氏の如き前途を達觀した太ッ腹の政治家には最も氣に入る特質を持つた人らしい。それで後藤氏とはだいぶ親密の間柄となり、臺灣發展に可なりの便宜を與へて貰つたようである。

金子氏は臺灣で樟腦の外、砂糖をやつた。鈴木商店の本業が砂糖なんだから、之を見逃さぬのは、當然である。其結果、創立されたのが北港製糖會社である。此會社は後ちに東洋製糖に合併した。鈴木商店が現在東洋製糖の大株主であつて、同社の賣捌者であるのは、是が爲めである。

同時に又鈴木商店は砂糖の販賣權を擴張した。鈴木商店が日糖から支那輸出の一部を委托され、朝鮮、九州北海道及關門地方の代理販賣を受けて居るのは、大里工場讓渡の交換條件ではあるが、鹽水港製糖や東洋製糖の製品販賣を引受け、更に多くの砂糖會社から年々多量の外糖買付を依賴されつゝあるのは、皆な臺灣發展の産物である。

鈴木商店が臺灣に發展し、更に内地に發展しつゝある際に歐洲戰爭が突發した。

是れで又鈴木商店は大活躍をした。

…………………………………………

此大打擊のあとでも鈴木商店は尚ほ盛に活動した。商賣を手廣くしたり、會社を建てたり……。鈴木商店が大正十年以後に建てた會社で私が知つて居るだけでも八つある。合同油脂、クロード式窒素肥料、東京無線電機、帝國樟腦日本エーヤーブレーキ、紡機製造、帝國人造絹絲、豐年製油などがそれである。此外、私が設立の年月を詳にしない會社で、此期間に創立されたものが二つや三つあるに相違ない。さすれば、少くとも、大正十年以後に造られた會社は十位ある筈、一年に二つ近くの割である。

臺灣銀行の鈴木商店に對する貸金は、大正九年以後の財界反動時代に一度收縮されたが、其後、鈴木商店の活動と、他銀行の貸金を肩替りした事に依つて增加し、現在は、前記の如く三億五千萬圓位あるのである。

（七）

以上が鈴木商店の今日に到れる經歷の概要であるが、之を見たら何人も鈴木商店の活動が劇しい事と、其活動の範圍が手廣い事に驚かざるを得まい。

單に直系會社の數を聞いたゞけでも、ビックリする。更に其種類を見れば、一層ビックリする。鑛をやり、石炭をやり、船をやり、介口

をやり、其他、樟腦、漁業、肥料、化學製品から人造絹絲、エーヤーブレーキから紡績機械、無電機械の製造までやつて居るのだから、實に其種類の種々雜多なるにビックリせざるを得ない。日本の商工業から、鈴木商店の營業科目と關係事業を除いたら何が殘るか。――鈴木商店は實に日本に於ける有りと有らゆる種類の事業を經營し、關係して居ると云つても、過言であるまい。

鈴木商店の實權者は、大番頭の金子直吉氏であるから、同商店の關係方面が廣くて、其事業が種々雜多であるのは、金子氏の性格が然らしめたものである。

金子氏は如何なる血を享けて生れた人か知らぬが、實に事業好きの人である。氏は創造もするが、眞似もする。自分で考へた事、人から聽いた事、何であらうが、彼であらうが、苟も儲かりそうな事であれば、何でもやると云ふのが氏の主義である。

氏は根氣がいゝ。そして度胸がある。單にこれだけでも事業家としての素質は充分であるのに、氏は酒を飲まなければ、煙草ものまず、遊びも一切しないと云ふ堅人だから、人に信用される素質が充分備はつて居り、是が又氏の事業家としての資格を向上させて居る。

氏の趣味は事業であり、氏の道樂は事業であり、氏は事業の外に何物もなく、滿身事業欲に燃えて居る。それを絕大な根氣と度胸で押し進めて行くのだから、何事も企てて成らざるなしと云ふ有樣である。

氏の根氣に就て逸話がある。

氏は嘗て臺灣に渡つて、時の政務長官後藤新平氏を訪ねた。處が、幾度訪ねても後藤氏は會つて吳れない。それでも氏は根氣よく後藤氏を訪ねた。後藤氏も亦根氣よく會つて吳れなかつた。

或る朝早く、金子氏は總督府を訪れた。そして後藤氏の出勤を待ち構えて居た。出て來た後藤氏をつかまへて名刺を出したけれども、後藤氏は素氣ない態度で奧へ消えて仕舞つた。すると、金子氏は其跡について行き、長官室の次にある應接室へ無斷で這入つて、重ねて面會を要求した。後藤氏は依然肯みなかつた。金子氏は應接室で根氣よく待つた。そのうちに活動の疲れが出て眠くなつた。グッスリ寢込んで眼を覺すと、最早夕方に近かつた。

ひけ際に、晝寢から覺めた金子氏を見出した後藤氏は、自身が變つた性格だけに、『こいつ、なか〳〵面白い奴』と感じた。そこで、急に、感情が變つて、會つて話をしてやつた。是が金子氏が後藤氏の知遇を得た始まりである。

金子氏は、雄辯でないが、冷靜な態度で人を諄々と說く。其處に、一種云ふに云はれぬ底力を持つて居る。それと云ふのは、滿身事業欲に燃えて居るからであらう。

其底力に魅せられて、誰でも金子氏に說き伏せられて仕舞ふ。日本銀行の某局長は剛腹を以て聞えた人だが、金子氏だけには、してやられたと云ふ。是れは局長自身の述懷である。

金子氏は、人を取り入るに待合政策などを以てしない。何處までも眞面目に、純理論で行く。玆に金子氏の偉大さがある。それだから大きな借金が出來るのである。

待合へ連れて行つて、女をどうとかする。そんな事は小細工である。大人金子氏に對しては、何の用もなさない。

然し、偉大なる長所を有する金子氏には、偉大なる缺點がある。それは氏に組織的の頭腦が缺けて居る事だ。氏は會社を造つても、それをよく盛り立てゝ行く事が出來ない。商賣を大きくしても、それを旨く收拾する事が出來ない。組織的に配下を率ゐて行く事が出來ないから、斯う云ふ結果になるのである。要するに、氏は、舊式の事業家である。近世の分業組織を程よくやつて行くには、不適當の事業家である

歐洲戰爭前までの金子氏は大成功であつたが、歐洲開戰後の金子氏は大失敗である。事業が大きくなると金子氏の缺點が大きくなつて、旨く行かないものと思はれる。

鈴木商店は、震災問題以來、借金經營の內容が明になつて、今や整理に着手されて居る。整理の結果はどうなるか。勿論、…………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

…………。

（八）

それに付けても大箆棒なのは臺灣銀行である。戰時に浮かれて居る一商店に三億圓も貸すなんて、何を標準にしたものか。銀行當局者の心理が分らない。それも、ある金を貸したのなら未だしもだが、ない金までも貸したのだから、其非常識に呆れざるを得ない。讀者の御參考までに、臺灣銀行が鈴木商店へ極度に貸した大正九年上期末の貸借對照表を御覽に入るれば、左の如し。

▲負債之部

資本金	六〇、〇〇〇、〇〇〇円
缺損補塡準備金	五、七〇〇、〇〇〇
配當平均準備金	九六〇、〇〇〇
特別積立金	一、〇七〇、〇〇〇
支拂未濟配當金	二四、〇二五
前期繰越金	一、三二三、三〇六
新株募集差金	一、二四六、九一五
銀行券	四三、四四九、三四四
支拂手形	二七〇、五六四
定期預金	一一一、〇九一、五〇八
當坐預金	四二、三六五、八五四
小口當坐預金	一九、五六三、五九七
通知預金	三七、九一二、〇九二
別段預金	三三、二六六、〇〇五
借入金	七〇、九九三、〇〇〇
コールマネー	七六、四一〇、〇〇〇
賣渡爲替	二六、四〇四、八五五
代理貸付保證	一一、九四三、一八三
支拂承諾	一九三、〇三八、七九〇
信託預金	二一、四五二、二九〇
信託金	三〇、二九七、四三〇

他店借	五六、四一一、六二四
假受金	一二、二二〇、一四二
當期純益金	二、九七四、九四一
合計	八六〇、三八九、四七二

▲資産之部

拂込未濟資本金	一五、〇四九、六〇〇
政府貸上金	一、〇〇〇、〇〇〇
貸付金	五九、三七二、九三〇
利付爲替手形	六一、九一二、七八五
當座貸	三四、五一三、三九九
コールローン	二、二三〇、〇〇〇
割引手形	一九七、三一七、七七〇
荷付爲替手形	一三、六一一、三七八
買入爲替	一三八、三六一、九七二
代理貸付	一一、九四三、一八三
取引先支拂承諾	一九三、〇三八、七九〇
預ケ金	二〇、五四二、九七八
他店貸	一〇、七四九、六一一
國債證券	二六、一八七、一七九
外國債證券	二五、一九五、五二九
株券及社債券	七、七七六、六九七
地所	三、〇七六、五〇二
建物	一、七九四、一六五
什器	六〇、八〇一
新築費	三四八、五六六
假拂金	一五六、二〇八
地金銀	一六、七四三、八四一
金銀在高	一九、四一六、五八一
合計	八六〇、三八九、四七二

(以下十六行欠)

臺灣銀行は、そう云ふ危い貸方をしたのだから、財界に反動が起ると、どうにもしようがなくなつて、大正十年に政府から五千萬圓低利資金を融通して貰つた。それでも足らぬので、最近又政府から二千萬圓を融通して貰ひ、政府融通の合計は七千萬圓に上つて居る。それ位だから、……………………………………。

其貸し増しは消極的なもので、他銀行の肩替りが多いと、大藏省側では辯解して居るけれども、それは半分嘘で、積極的の貸し増しも可なりに含まれて居る。其證據に、鈴木商店は前記の如く大正十年以後に會社を十も造つて居り、其資金は悉く……………………………………。

斯様な次第だから、臺灣銀行は政府救濟の整理銀行がでありながら一向其資産が收縮しない。大正十五年末の總資産は八億九千萬圓で、大正九年上期末のそれより三千萬圓増加して居るのである。……。

南京暴虐事件の眞相

池田桃川

一

三月二十一日の午後五時頃、遠雷のやうな砲聲が、殷々として、南京城民の耳を掠めた。砲聲は、三分乃至五分位の間隔を措いて、ぼうんぼうんと、春の夕雲の上を亘つて聞えてくる。城民は、愈々南軍の南京攻撃が始まつたのを知つた。

當時、わが在留邦人は、敗退する山東軍の暴行を懸念こそすれ、靑天白日の下に、滿地紅く燃ゆる南軍に、聊かの暴行あらうとも思はなかつた。然るに事實はすべてを裏切つて、終に第二の尼港事件とも言ふべき慘事を生じたのは、抑も亦誰の罪であらうか。

砲聲は、二十一日の夜を通じて響き亘り、春の夜の夢も破れ勝ちであつた。二十二日になると、どうやら山東軍の敗れたらしい様子が、落ちてくる軍兵の落ちつかぬ態度や、城内一帶の只ならぬざわめきで知ることができたが、戰鬪は尙猛烈に續けられ、機關銃は、豆を煎るやうに手近に聞えた。城内は終に危險不安を感じたので、先づ婦人子供を領事館に送り、主だつた男子達は、前田洋行（三名）と板垣醫院（十名）とに夫々集まり、最後の避難の準備をした。領事館では、愈々危險となつたら、三臺の自動車で收容すべき用意ができてゐた。日暮頃から雨が降り出し、風さへ出た。この嵐の夜に響く銃聲の物凄さに、城民は、終夜寢もやらず、不安と恐怖に包まれた一夜を明かした。

二十三日午後四時頃になつて、さしもに烈しかつた砲聲銃聲が、パツタリ止んだ。戰鬪が止んだと知ると、城民の不安は雲の如く湧き、色んな噂をし合つてゐるところへ、五時頃になつて、山東軍の敗兵が雪崩を打つて退却してきた。燈のつく頃、市街戰が起つたが、愈々危險が身に迫つたので、兩避難所に集まつてゐた在留邦人は、領事館から特派せられた各二名の巡査に護られ、徒歩で領事館に避難した。の時既に、自働車の支那人運轉手はどこかへ姿を隱してゐた。

二十四日午前四時半、南軍は、西門と西華門から、步武堂々と入城し、完全に南京を占領するに至つた。これは、第二軍、第六軍、第四十混成軍より選拔した決死隊の一個師約千八百名であつた。

二

二十四日午前五時五十分、青天白日旗をかざした南軍の騎馬隊約三十騎が、鼓樓の坂を上つてきて、領事館門前を通りかゝり、わが守備隊の水兵に、

「山東軍は隠れてゐないか」

と尋ねた。當時領事館には、荒木大尉の率ゐる十名の水兵が守備してゐた。そんなものはゐないと言つて手を振ると、彼等は、アリガトウと言つて、すた〳〵と行き過ぎた。領事館では、信頼せる南軍に好意を表する意味に於て、それまで築き上げてあつた土嚢を除き、機關銃をしまひ込み、すべての武器防備を撤退して、やれ〳〵とホット一安心してゐた。

ところが七時頃になつて、三名の南軍兵士が入つてくるなり、丸腰で門内に番してゐたわが一水兵の兩頬を毆りつけ、銃劍で突き掛つた。劍先は幸にその水兵の外套の一部を破つたばかりであつたが、該兵は、突き損じたと見るや、直ちに銃口をその水兵につきつけて、立打ちの構への姿勢を取つた。南軍兵士からこんな暴行を受けることが意外であるし、その間の動作は、殆んど一瞬間的の出來事である。アツといふまもない。勿論抵抗しようと思へば、丸腰であつても、おめ〳〵支那兵如きに毆らるゝわが水兵とも覺えないが、平生上官から「命令あるまでは打つな、切るな」と堅く誡しめられてゐる彼等である。思はず握拳を堅め涙がはら〳〵と落ちたが、上官の命令には、いかなる辛棒も忍ばねばならないのが辛かつた。水兵が怯ると見る間に該兵士等は、玄關の方に突進してきた。丁度そこへ、警察署長木村三畝氏が出て來た。兵士等はものも言はず銃口を向け、署長のポケットを探し、時計財布を奪ひ、應接室と食堂とに二發の實彈を打ち込み、散々威嚇して、館内に殺到した。署長は阻止しようとしたが、この時はもう七八十名の南軍兵士が亂入してゐたので、多勢に無勢、どうしようもない。領事の室へ行かうとして、中庭に出た瞬間、銃聲一發、署長はそこへドツと倒れてしまつた。やられたと思ふ意識が、はつきり頭に浮ぶところから考へれば、死んではゐないことが分つた。異樣な肉體の衝動に、抱へられないやうな重味と、たとへようのないけだるさは感じたが、それを感じるのは、まだ慥かに生きてゐる證據だと思つた。目をあけてみると、便衣隊らしい四五人の支那人が、館内へ駈け込むのが見えた。銃聲が又二三發聞えた。

不圖、右腕の感覺の異常なのに氣がついた。見れば、肱のあたりから血が流れてゐる。勇氣を出して起き上り、左手で右肱をかゝへながら、二階へ上り、「やられましたッ」と叫んで、領事の室によろ〳〵と轉がり込んだ。

領事森岡正平氏は、足部の動脈硬化症で、一ヶ月程前から、床に就いてゐた。その室は、西洋室で、一方を床あげして、疊十枚を敷き、領事は窓の方に寄つて寢てゐた。中央の廊下に近く、金庫が据えてある。寧子夫人は、側に附き切りで、甲斐々々しく看護してゐた。

領事は、署長の肱から滴る血潮を眺めると、もう駄目だとつぶやくように言つて、靜かに目を閉ぢた。板坂醫師は直ちに署長の傷の手當をした。

三

事務室の窓をあけ、南軍の中隊旗を眺めてゐた駐在武官陸軍少佐根本博氏や小學校訓導山本大二郎氏等の側へ殺倒した兵士等は、少佐の身體検査をして、ポケットから、金入、時計等を奪ひ、眼鏡まで外し銃の臺尻で腰をどやしつけながら、金庫をあけろと、尚も臺尻で叩きつけた。その金庫の中には、先帝陛下の御眞影と、重要書類が入つてゐる。

「あけろッ、あけないと打つぞ」

「鍵がないとあかない」

「その鍵を出せ」

「俺は武官だ、鍵はもつてない」

「あけないと打つぞ」

横暴なる彼等は、天井に向つて發砲したり、臺尻でところ構はず毆つたり、又ポケットをさがしたりしてゐたが、彼等の一人は終に銃劍で少佐の右胸部を突きさした。散々叩かれてゐた少佐は、當時これをちつとも氣づかなかつた。

少佐は、領事の身の上が氣に掛るので、鍵は領事の許に在る、領事のとこに取りに行くからと騙して事務室を出て、裏梯子を上つて彼等を撒き、領事の室に行つて見ると、木村署長がやられて寢てゐる。少佐も毆られて腰が立たないので、そこへ寢た。

その時はもう四五名の兵士がこの室にきてゐた。彼等は領事を見ると、直ぐ、

「金を出せ」

と怒鳴つて、狙撃の態度をとり、夫人にも迫つて、ある限りの金を奪ひ、尚も

「金だ、金だ、出さぬと打つぞッ」

と言つては、狙撃しようとする。

「金は皆とつたじやないか、その外に欲しいものがあるなら、何でも持つて行け」

領事が言ふても、彼等は、執拗に、尚も金、金と連呼してゐる。板坂氏が木村署長の傷の手當をしてゐる間、兵士等は、領事の春子夫人を脅し、帶を解かせ着物をぬがせて、所持品を奪ひ、それを悉く彼等のポケットに賍ひ込むと、今度は板坂氏に迫つて、現金、時計、胴帶まで奪つた。板坂氏は、外套、上衣を脱ぎ、カラーを取つて机の上に投げ込み、ワイシャツ一枚となつた。彼等兵士は、

「金のある所へ案内しろ」

と脅迫する。

「俺は知らぬ」

と言つても、承知しない、金だ、金だと騒ぎ廻る。仕方がないので板坂氏は別室の妻子の許へ行き、信玄袋から金を取り出して與へた。彼等は、生子夫人の指環までもぎとり、再び領事の室に引つ返して

「金庫をあけないと、打つぞ」

と怒鳴つては、領事に筒口を向ける。けなげな春子夫人は、身を以て領事を庇ひながら、自らその筒先の前に立つた。

「金庫を開けたけりや、そとへ持つて行け」

領事がそう言つても、彼等は、外へ持つて行つてあけたら、分け前

が少なくなるので、持つて行かうとはしないで、矢張り、鍵を出せとかこれをあけろとか怒鳴り、果ては口々に、演説口調で、帝國主義の打倒を叫び、不平等條約の撤廢を主張し、日本を罵り、守備兵の腑甲斐なさを嘲り、果ては、領事に向つて一發を放つたが、幸にも、その彈丸は頭上、春子夫人の腋下を通過して、微傷だも負はなかつた。そして尚も狙撃しようとするので、木村署長がそれを遮ると、彼等は銃劍で署長の胸元をグサと突き差した。署長はそこにバッタリ倒れて人事不省に陷つた。かうして、彼等は、益々兇暴となり、領事の布團を剝ぐやら、敷布を引きめくるやら、散々な凌辱を敢てした。夫人は、一方領事を庇ひ、一方殘忍なる彼等を宥める如く、諭る如くして夫君の安全を圖つた。この危急の場合に處して、少しの取り亂した樣子もなく身命を投げ出して、病める夫を護つた春子夫人の態度は、涙ぐましいほど立派なものであつた。夫人は、福本日南氏の息女である。暴虐極まりなき彼等南軍の兵士等も、この女丈夫の落ちついた態度には、少なからず鋒先をにぶらされたやうに見えた。

これ等の兵士は、十五六歳から四十歳位まで〻、頭には、靑天白日の徽章をつけた帽子、或は毛のついた防寒用帽子をかぶつてゐるが、その裏には、孫文の寫眞と、孫文の遺囑とを張りつけてゐた。服はだぶ〳〵した灰色の服で、赤襟のもの、赤ネクタイのもの、腕に赤い腕章をつけたもの、この三通りの區別は所屬軍隊を示すものである。足には黑或はカーキー色の卷脚絆を卷き、殆んど全部草鞋を穿き、腰に豫備の草鞋をさげ、手には日本の三八式或は三十年式の小銃を携えてゐた。言葉は多く湖南語である。一日二十元で傭はれた決死隊だけあつて、どれもこれも獰猛な顏つきをした命知らずであつた。

四

板坂氏は、別室に引き取つて、どうかしてこの危急を軍艦に知らせたいと色々その方法を考へてゐるところへ、和田巡査部長が入つてきて、

「領事はやられた」

と悲痛な面持で言つた。この時はもう、やられることを寧ろ當り前のやうにさへ思つてゐたので。

「領事もとう〳〵やられたか、今度は自分達の番だ」。

と思ひながら、二人が相携へて廊下に出てみると、領事は夫人に支へられよろめきつ〻出てきた。

あ〻領事は無事だ。

と思つたのも束の間、見渡せば、わが帝國領事館は、數百の兵士の無賴漢のため、塵埃の如く蹂躪せられ、館内は四離八散の姿である。かくの如く重圍同樣の孤立狀態に陷つては、到底助かる望みはない。子供は泣き叫び、銃聲は絶えず響く。領事等の頭には、尼港の慘虐事件が幽靈の如く浮んだ。四人は互ひに手を取り、死なば諸共だと悲愴な決心を極めた。どこまで執拗だかわからない兵士等は、尚も四人の後を追つて、金を出せと迫る。入れ代り立ち代り、強迫にくるが、今はもうやるだけの物は皆やつてしまつてゐる。本統に一物もない。

「出さぬと打つぞッ」

筒口を向ける。

打たば打て、死んだらそれまで…

領事等は、もう度胸をきめてゐるから、怖ろしくも何ともない。

不圖下を見ると、雨水桶の上に根本少佐が倒れてゐる。左胸部が眞紅だ。

「やツ、根本少佐がやられてるツ」

人々は口々に、

「根本さん、根本少佐」

「早く、水を、水をツ」

と呼び叫んだ。少佐は少し口を動かした。

「やツ、生きてるぞ」

「しつかりしろツ」

と、更に口を揃へて叫んだ。

これより先、少佐は、領事の危急を目撃し、それを皆に傳へようと領事室から廊下へ出ると、兵士が、前後兩方面から今にも撃ちそうに、銃を構へて狙つてゐる。少佐は進退谷まつたので、廊下の隅から、欄干には手も觸れず下へ飛びをり、雨水桶の上に落下して、そのまゝ人事不省に陷つた。それからどれ位の時間が經つたかわからない。

「根本のおぢいーさーん」

と頻りに呼ぶ聲に、不圖氣がついてみると、それは板坂氏の長男で光君と呼ぶ十二歲の少年であつた。少佐は、まだ生きてゐると自覺はしたものゝ、全身の痛みと、言ひようのないけだるさのため、又昏々と眠るともなく、醒めるともなく、夢幻の境をさまようてゐた。

暫らくすると、領事館のボーイが、戸板を持つてきて、少佐をその上に乘せ、自動車用の幌でその上を掩ひ、館の裏手の窪地(塵芥場)に運んで行つた。少佐は最後まで脊廣を着てゐたので、金のある紳士と目され、打たれ叩かれ、つけ狙はれてこんなに酷い目に逢つたのであつた。早くシャツ一枚にでもなつてゐたなら、その要撃の手は、幾分緩められてゐたかも知れなかつた

少佐の負傷は、銃劍で突かれた傷だ。その外に、臀部にも一個所あつた。臺尻で叩かれた時、受けた傷であらう。自身には少しも覺えがなかつたそうである。

事務室で、圓庫をあけろと迫られて、頑強に抵抗してゐる間に、醫師須藤理助氏も、所持品全部及現金二千六百弗を奪はれ、裸にされてしまつた。そして、不圖氣づくと、今まで泣き叫んでゐた婦女子の聲が、パッタリ聞えなくなつたので、須藤氏は、これはてつきり皆慘殺せられたのであらうと直感し、何とかしてこの有様を軍艦及母國へ知らせたい。皆死んでしまつては、生きた證人がなくなる、今その使命を果すべきものは自分一人である、自分はどうしても死んではならないと思つたので、金庫の鍵を探してきてやるからと言つて兵士を騙しその室を出た。が、どの室を眺めても、道具一つないので、身の隱しどころがない。と丁度廊下の隅に石炭箱を見つけたので、石炭を掘り素裸のまゝその中に身を隱した。暫らくすると、一暴徒が來て、蓋をあけた。その途端、中から眞黒な須藤氏がニユーッと現はれた。不意を喰つて、該暴徒がタジ〳〵となる隙に、須藤氏は、その兵士の胸倉をつかまへ、

「その着物をぬげ、不服言ふとつかみ殺すぞッ」

と窃鼠は、凄じい權幕で恐迫した。軍人上りのがつしりした氏のそのいかつい顔と、炯々たる眼光とにおびえたものか、その者は、
「俺が裸になつては困る、外の奴を引張つてくるから、そこ放せ」
と言つて階下にをり、領事館の馬丁を連れてきたので、馬丁の着てゐた服を貰ひ、やつと石炭箱から出ることができた。

五

この時、領事館内には、兵士に交つて無數の無頼漢入り込み、机、家具の類は勿論、疊表、疊の緣、電燈の紐、藥品、領事の懐爐、食鹽注射器、消毒器、ロック氏液、リンケル氏液、窓の硝子まで外して運び去る始末に、館内は眞に一空、何一物もなくなつてしまつた。猛り狂つた彼等は、書記生淺賀正美氏の芳子夫人を捕へ、その指環を拔かうとしたが、すぐに拔けなかつたので、ナイフで指を斬らうとした。夫人は驚いて、辛うじてぬいて與へた。又醫師松崎熊吉氏菊枝夫人は、四五名の兵士の劍先に脅やかされ、一室に連れて行かれ、その命ずるまゝに帶を解き、着物をぬいで、裸となつた。そして、揚句の果てには、パンツまで外されてしまつた。又或る夫人は、貴重品を隱してゐると言はれ、、、、搜索された。すべてが隱忍自重の時であると、男も女も、涙を呑んで彼等のなすまゝに任してゐたが、そんな凌辱を與へられたある夫人の夫君は、もし彼等が最後の暴行を敢てするに於ては、差し違へて死ぬとまで覺悟してゐた。

かくして、暴虐の限りを盡すこと約四時間半、兵士等は、最後に、ガソリンを持ち出して、燒打ちするゝと放言した。板坂氏は、領事に向ひ、避難するやう勸めたけれども、領事は、
「自分は死んでもこゝを離れなない」
と頑硬に言ひ張つて、どうしても動かうとしない。板坂氏は、せき立てるやうにして、切りに勸告し、やつと三度目に、領事も腰をあげ一同裏手の空地に集まつた。兵士等はそこへも追つかけて來て、水兵達には、

日本海軍はいくさは出來んのか。
日本の兵士は飾りものか。
打てるなら打つて見ろ、臆病者の日本軍人。

など色々の惡罵を浴せかけ、在留民には、

帝國主義者の一分子。
外國へ金泥棒に來た洋鬼子。

などゝ言つて散々嘲り、綾野矢柄と呼ぶ七十六歳の老人の信玄袋から、老眼鏡を奪ひ取り、それをかけ、何と思つたか、得意らしい顔つきをして歩き廻りながら、尙も金庫の鍵を要求して已まない。そして書記生早崎眞氏を捕へ、兩腕を引つ張り、後から、銃の臺尻で叩き乍ら、事務所の方へ連れて行つた。一同の顔は急に曇つた。早崎書記生は皆の犧牲となつて殺さるゝものと思つたからである。が次の瞬間には、我々はかうして一人々々殺さるゝに相違ない。早崎書記生は、その血祭りであるまいかとの不安が、津浪のやうに、人々の心に充ちた。皆は、ひそかに最後の決心をした。誰も、物を言ふ者がない。時々、子供が火のつくやうに泣き出す。婦人のすゝり泣きの聲が聞える。悲痛な皆の顔に生きた色はなかつた。

十分計り經つと、殺されたと思つた早崎書記生が、意外にも、南軍の一將校と、英語で何か話しながら歸つてきた。奇異の感に打たれて二人の樣子を見てゐると、その一將校は一枚の名刺を出した。それには第二軍黨代表第六師政治部主任揚杰、と書いてあつた。楊氏は日本士官學校の出身で、日本語も自由である。楊氏は、兵士の暴行に遺憾の意を表した後に、在留邦人の生命を保證し、此際いかなる便宜をも計つてあげるから安心するようにと、丁寧な挨拶をした。一同は地獄で佛に逢つたやうな急に明るい氣持ちになつたが、そこへ又第六軍師團長戴某といふ將校がやつてきて、楊氏と同じようなことを述べた。而しこの戴氏の人相は頗る獰猛な顏つきなので、一同は疑心暗鬼を生じこの手で一杯喰はされ、油斷した暇に殺られるのではあるまいかと晴れた心が又暗くなつた。今後掠奪は決してさせないと言明して置きながら、附近の金陵大學あたりで、尙盛んに掠奪してゐる所より見れば、彼等二人の保證も決してあてにはならない。あてにならないと言つても、それをどうすることも出來ない。不安と焦燥とは、一同の面上に黑くこびりついてゐた。下關の日本軍艦に手紙を持たせて使ひにやつたボーイは、とう〱歸つて來なかつた。

この間、荒らせるだけ荒らし盡した兵士の一部は、庭に持ち出したピアノを彈いてみたり、ぶらんこに乘つたり、テニスコートの棒を靑龍刀で切つたりして、威脅しながら呑氣に遊んでゐた。

午後四時頃になつて、下關方面から砲聲が擧がつた。一同は、これは敗退する山東軍を、南軍が破擊するものであらうとか、南軍の橫暴に對する各國軍艦の砲擊だとか、色んな想像をして話し合ひ、その原因如何に由つては、自分達一同は、悉く虐殺されねばならないと、又更に心配が殖へてきた。その中に砲聲も已み、夜になつた。婦人達は、この闇を幸に、下關へ避難したいと泣いて訴へるけれども、それはより以上の危險である。一同、支那ボーイが買つてきた只一片の饅頭を食つたきり、その夜はそのまゝ馬小屋に寢ねばならなかつた。

百三十餘名のわが避難民は、馬小屋の藁の中で、犬の如く寢た。橫にはなつたものゝ、誰一人眠るものはなく、目は冴え、頭はハッキリして、神經は昂奮し、いつ何時、尼港事件のやうな慘狀が突發するかも知れないと思ふと、時計一つないこの闇の夜が、とても長い地獄の道を行くやうに思はれ、死滅の黑幕が、今にパサリと、我等の頭上に落ちかゝるかと感ぜられた。

何におびえてか、火のつくやうに泣き出す赤ン坊。

黑髮を藁で結んで、すゝり泣く若き婦人。

默々として石の如く默する男子。

蠟燭の火は、鬼火の如くゆらりと搖れる。

南京在住十年、二十年、粒々辛苦して築き上げた根底を、僅々數時間の裡に、根こそぎ破壞せられ、鐚一文に至るまで奪はれて着のみ着のまゝとなつたわが避難者諸君は、今、極度の不安、失望、焦燥、恐怖の裡に、悲しきこの一夜を馬小屋で明かさねばならなかつた。

無一物となつた上、堪へられぬ侮辱を蒙つた鬱憤。

故鄕の山河は春であるといふに、この一夜の死の如き冷さ、寂しさを、いかに泣いたであらう。夜更くるまゝに、彼等の頰には潸然として、悲痛限りない淚がいつまでも流れてゐた。

六

二十五日午前八時十五分、下關に碇泊中のわが第二十四驅逐艦檜の左舷上に、百四十名の海軍兵が整列した。司令吉田中佐は、河田大尉と共に、その前面に立つて一場の訓示を與へた。その訓示は時局險惡となり、南京城内及下關在住のわが在留民を直ちに軍艦に收容すべき時機となつた。それ故これから上陸し、在留民保護の任に當る。各員は國際關係を顧み、いかなる辛抱にも堪へ、一時の感情に動かされて無謀の行爲があつてはならぬ。と云ふ意味であつた。かくして、一同は八時半、生泰恆煤炭公司碼頭に上陸した。南軍からは、租界地でないといふ理由を以て、一旦は抗議を申し込んだが、結局、危害を蒙りつゝある同胞救助の名義で上陸が承認せられた。

陸戰隊では、早速同盛京煤號貯炭場の電話を以て、わが領事館にかけて見たが、通じないので、三星洋行から、估衣廊の孫傳芳顧問たる岡村中佐留守宅にかけたところ、幸にも通じたので、そこの劉といふボーイに頼み、わが領事館に於ける避難民の安否を調べて貰つた。これを快諾した劉の返事は一時間五分後に來た。それに由れば、劉は領事及根本少佐に逢つて、領事館は掠奪されて一物もないこと、署長及根本少佐が負傷せること、日本人は南軍より絶對外出を禁止せられてゐること、この三事を聞いてきたと報告した。この報告に一足先立つて、吉田司令は、三十名の決死隊を率ゐ、危險區域を突破し、領事館の避難民を救助せんと、城內へ向つた。電話の返事を聞かないで出かけたので、吉田司令は、避難民生死のほどを知らず、避難民も亦、陸戰隊の來援を豫知する筈はなかつた。

吉田司令は、阿蘇山の燒印のある木劍を打ち振り、腰に短銃をつけ發火信號を携へ、その偉大な體軀で、附近の雜兵を追つ拂ふやうな一杯の元氣で、行進した。桃、檜、濱風の三艦は、岸に近づき、司令の進む方向に大砲の筒先を向け、邪魔立てしたら一擊ちだぞと示威したので、附近の兵士、人民は、蜘蛛の子散らすやうに、逃げ隱れてしまつた。司令等は、意氣揚々と進んで行つた。

儀鳳門に行く途中で、南軍の一將校と、紅卍字印を捲いたものとに逢つた。日本領事館の樣子を尋ねてみたが、さつぱり分らないと言ふ。そして

「こんなに澤山の陸戰隊を率ゐて行つては困る、少數ならば、自働車で送り屆けてもよい」

と言ふので、司令は、先任將校一名と兵四名、及び三上通譯を隨へその自働車で城内へと疾走した。路傍には死體が轉がり、武裝解除せられた山東兵が、ぎつしり詰つてゐた。

生か、死か。

司令の心配は、胸も張り裂けるばかりであつた。正門前に着くのも待ち遠しく、車を下りて一歩館內に入つてみると、庭一面に、帳簿の紙片やら、木片、布片などが散亂してゐる。もしやと胸轟かせ乍ら、

「領事はどこだ」

と怒鳴り、館下の一室の戸を、どんと押すと、嬉しや、そこには百餘名の生きた日本人が、一塊となつて屯してゐるではないか。

「おゝ、生きてゐたか」
司令は木劔で地上を突いた。
「よく生きてゐてくれた」
更に力強く、木劔を突き立てた。
喜びに蘇つた避難民の目は、燃える計りに輝いた。婦人子供は、聲を擧げて泣いた。男も泣いた。司令も涙をこぼした。逞しい水兵等は、拳で目をぬぐつた。歡喜のあまり、感情の最高潮に達した一同は只泣くより外はなかつた。
一同は、申し合はせたやうに、起ち上つて、泣き乍ら日本帝國の萬歳を三唱した。嬉しいのか、悲しいのか、何が何やらさつぱり分らず只もう胸が一ぱいになつて、涙が止め途なく流れる計りであつた。

七

吉田司令は、それから、先づ抑へて置いた自働車で、在留民一同の無事なる旨を陸戰隊へ傳へる使を出し。一方、直ちに淺賀書記生と共に程潛氏を訪問して、南軍の暴行を訴へ、一同の救助を依頼した。それに對し程氏は、
今回の暴行は、全く下級兵士等の無智的行爲であつて、革命本部の意志でない、色々損害をかけたのは誠に遺憾に堪へない
と言つてお詫びを言つた。次に座に在つた楊杰氏に、領事館の現狀を見て、遺憾の意を表するよう勸めたら、これもすぐ承知し、避難用の自働車も提供してくれることゝなつた。
そこで再び領事館に引つ返して、下關引上の用意に取り掛つた。

一同は茲で始めて心から蘇生の思ひをしたのであつた。
御眞影を收めてあつた金庫の鍵は、裏口の煙筒の、腐蝕した穴から領事が、、入れて隱してをいた。この鍵を渡せば、彼等兵士等は開けて物を奪ひ、安心して引き取るだらうし、從つて、避難民一同の生命も無事に保つことは出來るが、御眞影を收めてある上からは、たとひ避難民一同が犠牲になつても、この鍵だけは渡してはならぬと、誰も氣づかぬ間に、その煙突に隱されたのであつた。この鍵一つで領事も板坂氏も、その他の者もどれ位心を痛めたか知れなかつた。
避難準備と共に、問題の金庫は二時間もかゝつて、水兵の手に由つてあけられ、無事に、御眞影を奉戴し、重要書類を持ち出すことができた。

八

城内鶴家橋に在る松岡醫院の院長松岡熊士氏は、これまで同じ城内の須藤醫院に副院長を勸めてゐたが、今度獨立して開業することゝなり、三月二十一日開業し、まだ一人の患者の脈も見ないまに、今度の厄災に遭つた。
二十四日の午前六時頃、數名の南軍兵士が入つてきて、こゝを司令部にするから出て行けと命じた。松岡氏は、自分は日本人だ、貸すことは出來ぬと云ふと、兵士等は、洋鬼子と罵りつゝ金を出せと迫り、同氏のポケットを捜して財布、時計を奪つて行つた。大丈夫と思つてゐた南軍の様子がどうも變なので、近くの寫眞師田坂信雄氏に電話をかけ、連れ立つて領事館に向つた。約一里の途中は、進軍兵のあとに

ついて、一緒にせつせと歩いたので、別に危險なこともなかつた。皷樓醫院の前まで來ると、「須藤理助」と書いた名刺が散亂してゐるので、不審に思ひながら、すぐ坂上の領事館に行つてみると、馬車や車で、ドンドン荷物を運んでゐる。この時までまだ二人は、領事館が掠奪されてゐるとは思はなかつた。正門を入ると田坂氏はスルリと通過したが、松崎氏は南軍兵士に捉まへられ、外套、眼鏡、現金、その他身につけてゐるものを皆奪はれてしまつた。館内に入つてみると、床板があるだけで、何一つないがらん洞である。方々の室を、南軍の兵士が、出たり入つたりしてゐる。赤い腕章をつけた便衣隊が、無頼漢を指揮して、殘つたがらくた道具を持ち運んでゐる。裏口から領事公館に入ると、そこにボーイがゐたので、皆どこにゐるかと聞いたが、知らないと言ふ。裏手へ廻ゐると雨水桶（雨水をこれに貯めて飲用に使ふ）の上に、根本少佐が、眞蒼な顔して、仰向けに倒れてゐる。一目見たゞけで、死んでゐると思つた。一名の邦人も目當らない所から考へれば、避難民全部虐殺されたに相違ないと直感し、始めて身の危險を感じ、蒼皇として館を出で、皷樓醫院側で田坂氏と一緒になり、同氏の懇意な北門橋の南京昭像館に行つて、支那服借用を頼んだが、この際外國人に便宜を與へると、自分達が危ないからと言つて承知しそうにもない。そのうち、南軍兵が、入つて來そうだと言はれたので、二人は裏口から逃げ出し、風のそよぎにも心をく身となつたことを痛感しつゝ、戰々恟々と五丁ばかり歩いて洪武街の裏手を通つてゐると突然後ろから、止れ！と聲がかゝつた。ハッと思つて振り向くと、一人の兵士が、裝塡しながら近寄つてきて

「お前達は何國人だ」

と聞いた。松崎氏か、

「日本人」

と答へると、それを「高麗人」と聞き違へたらしく、

「高麗人なら許す、日本人なら許さんぞ」

と怒鳴つたので、急に高麗人になつた氣持で、虎口を脱し、賓來館（日本旅館）の近くまで來ると、附近は掠奪の眞最中である。震旦大學の門内には、二名の佛國宣教師の屍がころがつてゐる。こゝで始めて二人は、南軍の掠奪を意識的に知つた。「南軍は決して暴行せぬ」といふことが、先入主となつて、堅くそれを信じてゐたので、現在領事館あたりの掠奪を見ても、只ぼんやりと、これは何かの事情だらうと考へ、掠奪行爲とは知らなかつた。

そうして、尚も多數の軍兵等と一緒になつて、西華門方面に向つて歩き、頭條巷なる知人李氏宅に辿りついて、救助を頼んだ。李氏は、服は貸してあげるが、隱まうことは許してくれと言ふので、厨で支那服に着替へ、そこから二丁程ある阿片館に隱れた。阿片館は花園の中に在る。草屋根で、二室あり汚い所である。

隣の室では、二人の勞働者らしい奴が、こんな話をしてゐた。

「南軍の兵士等は、なぜ外國人を虐殺するのかい」

「そりやお前、あいつ等は素手で俺達の國へやつてきて、ウンと金儲けして歸るからだよ」

「ふうン、成程」

「まるでお前、體裁のいゝ泥棒だよ」

「怪しからん奴等だな」

「虐殺されるのは當り前だ、日本の領事館では針金を鼻口にさし込んで、皆殺しちまつたさうだよ」

「酷いことをやつたな」

「泥棒だもの、そんな目に遭ふのは當り前だ」

これを聞い二人は、半信半疑ではあつたが、身の毛が生立つ思ひをした。

そこへ潜伏して、やれ〳〵と一安心してゐるところへ、松崎氏の支那人書生宣君が尋ねてきたので、二人は吃驚した。聞けば、領事館から方々尋ね廻つて、そのあとを追つてきたのであることが判つた。宣君は、

「今表の方で、二人の日本人がこゝらに入つたらしいと言つて、二百元の懸賞で捜してゐます、危険ですから私とこへお出でなさい」

と勸めるので阿片館を出て、二丁程の同君宅に行つた。それが四時頃であつた。同君から始めて、領事館に避難せる在留邦人の無事なる由を聞いたので、饅頭や握飯を作つて、同君達に運んで貰つた。領事館では、領事が宣君に下關へ使ひを頼んだけれども、軍艦不安内のため、使命を果すことが出來なかつた。夕方砲聲を聞いた。日本軍艦二隻沈沒の情報を聞いて、二人は、自分達の運命もこれで終りと觀念しせめて一切の事情を誰かに知らせて置きたいと思ひ、書生許君に密書を持たし、蕪湖領事館に使に立たせた。があとで、その使ひも、船便ないため、果たせなかつたと聞いた。

翌朝十時頃になつて、領事館から、避難するからすぐ來いといふ知らせの支那人ボーイが來たので、用意して置いた握飯、牛乳一打、煙草二百本、菓子等を携へ、領事館に馳せつけたのであつた。

九

南京に於ける唯一の日本旅館寶來館は、二十四日の午前六時半頃、かねて懇意にしてゐる中山事務所から、この家は檢査濟みだから、闖入してはいかんといふ意味の張り紙をして貰つたので、先づ一安心してゐると、七時頃になつて、頻りに開門々々と呼ぶ聲が聞える。放つてをくと、南軍兵は、槍で突き破つて進入し來り、主人鈴木萬太郎氏に金を出せピストルを出せと迫つた。有金を與へると、次から次に、入り代り立ち代り、金、金と叫んでやつて來る。その間に彼等は階上階下の室に侵入し、手當り次第掠奪を始め、當時旅客として、邦人二名と、支那人の娘四人を預かつてゐたが、それ等の荷物も勿論盡く奪はれてしまつた。四番の室には、鈴木氏の大事な骨董品が一ぱいある兵士等は、こゝを開けろといふ。鍵がないと答へると、それじや打ち壞すぞと言つて、銃劍で突き破り、大小幾百の骨董品は、見る〳〵うちに彼等のポケットの中に入れられ、又は小脇に抱へられて、影も形もなくなつてしまつた。

館内の一同は六番に集まつた。料理人福田林一君の妻女榮子は、着物をぬがされて長襦袢に腰卷姿となり、外の者も大抵着物を脱がせられてしまつた。ことし五十九歳の鈴木老人は、ふんどし迄ぬがされ、これこそ文字通り、身に一絲もつけない素つ裸にされた。老人は一枚の座布團を前に當て、また一枚を脊に當て恥かしさと寒さとを防いだ。

當時は混亂、恐怖の裡なので、人も我も、それを何とも思はなかつたが、軍艦に收容されてから、その時の格好を眞似しては大笑ひをした。頭の禿た爺さんが、左手で背に座布團を負ひ、右手で前を抑へて歩き廻つた格好は、それが眞劍であつたゞけに、あとで考へたら、天下の奇觀であつた。

女中榮子の左の藥指にはめてゐた指環をぬき取らうとしたが、容易に拔けさうにないので、氣を苛立て、腰の短刀をひきぬき、その指を根本から切り落さうとした。女中は必死に抵抗しつゝやつとそれをぬき取つて渡した。

その間にも、五六十名の兵士等は、ピストルや小銃を向けて脅しつゝ、二百元出せば助けてやるとか、張作霖を助ける日本は、我々の敵だとか、帝國主義を打倒せとか、口々に散々惡罵を放しながら、室にあるものは、疊表から、火箸、便器、痰壺に至るまで持ち去り、身につけたものは、外套、上衣などは勿論、シャツから一本の手拭に至るまで悉く奪ひとり、尙も、支那の國權を侵す洋鬼子とか、泥棒とか罵り、小銃、ピストルを打ち放す。

そうこうしてゐる間に、兵士及暴徒等は、

「愈々虐殺だ、下へ下りろッ」

と叫びながら、一同を階下のボーイ部屋に連れ込んだ皆は愈々自分達の最後が來たと觀念して、彼等のするまゝに任してをいた。身に寸鐵どころか、僅かに局部を隱すだけ布片を纏ふてゐるのみでは、切られても、擊たれても、どう仕樣もない。茲に於て彼等の殘忍性はむら／＼と發揮し、死に物狂ひにいやがる女中榮子（料理人の妻女）の腰卷を引つ外さうとしたが、殺されても恥づかしめを受けまいと覺悟してゐるので、中々思ふ通りにならない。振端放された彼等は腹立ちまぎれ、

「よしッ、片つ端から虐殺だッ」

と叫び、まづ女中を引き据え、胸元に金口を突つつけて引鐵を引いた。天祐にも、その時彈丸は打ち盡してゐて、一發も殘つてゐなかつたので、引金はかちりと音したゞけで、女中の命は、裝塡するまで延ばされた。が更に天祐なことには、彼が、新たに裝塡しようとしてゐるところへ、運よくも一將校が驅けつけ來つて、これを制止したので一同やつと虐殺から免かるることが出來た。

一同は領事館へ避難したいから、護送してくれるやうにと賴んだ。將校は、あとで警察署長を寄越すからそれ迄待つてをれと言つて出て行つたが、出て行く時に、側に來合はせてゐた一巡査に、この者達に着物を貸してやれと命じて、どこかへ行つてしまつた。

三十分程して署長がやつてきた。一同は、苦力の汚い着物をきせられ、囚人のやうになつて、同館を出かけたが、途中も暴徒や、學生達に、渡せ、殺せと脅やかされ、生死の巷をさ迷ふ氣持ちで、やつと領事館に着いたが、館内には一ぱい紙片が散らかつてゐた。一同こゝで始めて、領事館もやられたことを知つた。

一方鈴木老人は、衣類を求める爲めに階下に下りて行くと、門前では、驢馬五六頭で、掠奪した荷を運んでゐる。甚だしいのは、日本國旗を風呂敷にしてゐる。近所は人の黑山である。老人は、前の支那人宅に飛び込み、一枚の着物を貰ひ、一丁程離れた警察署へ、救助を賴

みに行つた。署長は顔馴染なので、すぐに名刺を呉れたが、歸途、六七名の南軍兵に捕へられ、督辦署裏の小練兵場へ連れて行かれた。彼等は老人に向ひ、

「南軍と北軍とはどつちがいゝと思ふか」

と尋ねた。

「勿論、南軍がいゝと思へばこそ、逃げ隠れもせずして、こゝに居たし、客もとめ、使用人も使つてゐたんだ」

老人がから答へると、彼等は老人の着衣を剝ぎとり、又もとの素裸にしてしまつた。老人は愈、殺られるなと思つたので、

「殺すなら殺してもいゝ代りに、俺の死骸の在りかだけは、日本領事館に知らしてくれ、頼みだ」

と言ふまもあらせず、一兵は、銃劍で、咽喉目がけ、ぐつと突き出した。多少柔道の心得ある老人が、頭をひよつと下げると、劍は上を流れて、禿頭の皮を四五分すり剝いた。兵士が再び劍を取り直さうとしたその時、一靑年將校が、打つな〳〵と叫んで、そこへ驅け込んできた。そして、流暢な日本語で

「あなたは日本人でありますか」

と話しかけた。そこで、今までの一什始終を話し、領事館に連れて行つてくれと頼むと、將校は、連れて行く譯には行かぬから逃げてくれと言つて。彼の穿いてゐたカーキー色の半ヅボンと、スリー、キャツスル五十本入の煙草一罐を呉れた。

南京に古い老人は、顔馴染の支那人が多い。老人は、一人の車夫から、一枚のながい着物を貰ひ、又一人の乞食から虱だらけのヅボンを惠まれ、附近の鉄力屋の主人から馬掛兒一枚を與へられ、更に誰とも知れぬ人から、帽子一つを投げて貰つた。こゝで變な恰好の支那人となり、車夫と一緒に自宅に行つてみると、まだ掠奪の眞つ最中である。仕方がないので引つ返し、車夫の宅へ行き、煎餅などを噛つてゐるとさつきの乞食が來て、こゝは危險だから自分の内へ來いと言つて、引つ張つて行つた。乞食は、煮しめたやうなハンケチに、二十仙銀貨二枚を包んでやつた。乞食にしては、四十仙は大金である。老人は、涙乍らにその好意を謝し、それを受け取り、(老人は、今でもそれを大事に持つてゐる)九時頃迄そこに寢てゐたが、どうも、そこも危險なので、車夫と乞食とを頼み、知人なる郭民巷の孫公館に連れて行つて貰つた。そこで、そこの使用人を領事館にやり、救助方を依賴すると、今下關に避難するところだ、すぐ來いとの返事に、飛び立つ思ひで出かけようとしたが、孫氏は、

「どうも途中が危險だ、私が妙案を授けるから、その通りにしてお出でなさい」

と言ふ。どんな妙案かと思つてゐると、そこの十八九になる息子が變裝してボーイ姿となり、老人は、假盲目、假啞となり、この危險區域を突破しようといふのである。而し假盲目では、歩くのが大變である。そこで、脇腹をポンと押したら、目をあけてよいといふ合圖と極め、孫公館を出かけた。

假盲目、假啞となつた、鈴木老人は、顔にハンケチをかけ孫少年に手を引かれ、とぼ〳〵と、探るやうな足どりで、歩いて行つた。これが分れば、老人は兎も角もとして、孫少年は命はない。全く、命がけの仕事であ

る。命がけの親切である。果然、途中で一隊の南軍にでつくはした。

「どこへ行くか」

「鼓樓の側まで行きます」

「何しに行くか」

「北軍から酷い目に遭ひましたが、南軍が來たのでやつと安心して自宅に引き上げる所です」

「その連れは誰だ」

「親爺です」

「よしッ、通れ」

幾度かういふ危い尋問を受け、やつと領事館に着いたのが四時半、一同引上の最中であつた。領事は手を取つて、

「來ないのは君一人だからと言つて、大變心配してゐた、よく無事で來てくれた」

と喜び、外の人々とも堅い〳〵握手を交して、お互の無事を祝し合つた。

十

程落氏が寄越すと言つた自動車は、中々來なかつた。そのうち、居留民の無事なることを下關に報告に行つた使が歸つてきて言ふことには、

英米の軍艦は再び砲撃を開始するから、上陸中の日本陸戰隊は、直ちに城内から立ち退いて貰ひたいと申し込んできたが、日本軍艦の方では、司令が上陸中だから、歸つてくるまで待つてくれと返答してあります云々。

そこで、もう寸刻も猶豫は出來ないと、自動車を待たないで出發することゝし、足の病氣で歩けない領事は、戸板にのせて舁ぎ、子供は背負ひ、いざ出發しようとしてゐるところへ、程氏の送つた自動車も來るし、初めに婦女子を送つた自動車も歸つて來るしで、三臺の自動車、三臺の馬車で、一同無事下關へ避難することが出來た。途中は、武裝解除した約三萬の山東兵で、辛うじて車の通る位であつた。

十一

最後に特筆大書すべきことは、今度の掠奪行爲が、全く計畫的に行はれたといふ事實である。その先導は、共產黨員であつた。彼等は、事前に、在留外人の在所及財產を調査して置き、占領と共に、かねて示し合はした通りに事を運び、馬車、驢馬の用意までして荷を持ち出し、時を計つて蔣代表や師團長が宥めに來るなど、後になつて考へてみると、いかにその掠奪が、計畫的であつたかゞわかる。

かくて、婦人子供を合して、合計百三十五名の南京在留邦人避難民は全くの無一物となつて、四臺の自動車、三臺の馬車に分乘し、二十五日の夕刻、下關に避難し、六時十五分三艦に收容され、上海から出迎ひに行つた軍艦大龍に乘り換へ、二十八日無事上海に着いた。負傷者二名あつたが、幸に木村署長も、根本少佐も、經過頗る良好である。下關で、後藤三等兵曹が、流彈に當つて即死した外、一人の死者もなく、一人の落伍者もなかつたのは、海軍の手柄であると共に、居留民館幹事諸氏の骨折りの賜物であるが、倘たの根本を探つて見れば

領事も居留民も、出來る限り隱忍自重をして、一時の感情的昂奮に驅られ、輕擧盲動しなかつた大國民的訓練に基くものと言つてよからう。政府當局はこの南京避難居留民の沈着にして國策的態度に出でたことを、有意義に終局するよう、勵まねばなるまい。政府の對支方針と彼等の避難民の態度は、不言不語のうちに、ぴつたり合つてゐる。政府は、よもや、これを泣き寢入り的に葬つて、彼等避難民諸氏の折角の自重を、無意義に終らしめるようなことはあるまいと思はれる。（醫師須藤理助氏が三十年間に蒐めた五百六十面の硯や約二千點の陶器銅器の失はれたのも、金で償はれない大きな損失であつた。）

終りに、避難民諸氏の中十年以上の在留者及在留年間を紹介して參考に供する

藥種業綾野茂（二十年）○商業米山龜松（二十年）○雜貨商篠崎達二（十七年）○雜貨商吉村傳助（二十七年）○雜貨商名越律五郎（二十二年）○寫眞師田坂信雄（十五年）○醫師須藤理助（三十年）○醫師板坂留一（十年）○軍服商藤井利四郎（二十年）○醫師有安長藏（十一年）○醫師津田福光（十年）○旅館業鈴木增太郎十七年）○輸出入業廣瀨美濃藏（二十年）○旅館業鈴木萬太郎（四十年）

長篇小說

地妖

((2))

三上於菟吉

妖蛇はじめて蠢動する事

深酷な呪咀の炎焔に眞暗に魄を焼かれて死んで行つた叔父右門の葬式を、いゝかたばかり濟まして三日目の夕方、姉娘の淸乃が慰さめに來てくれた合壁の船大工のかみさんと、上りがまちで話をしてゐると、

「御免。」

ど、錆びた聲で訪なふ人がある。

船大工のかみさんはちよいと聽耳を立てて、

「おや、お船頭だ。」

と、呟やくと、

「それじやあ、私はおいとましますよ。あとでちつとお話においでなさい。」

と、歸つて行く。

入れちがひにはひつて來た四十男、目の鋭どい、口の大きい、顏こそ日に焼けてゐるが、でつぷりとした恰幅——ふと織の袷に市樂の半纏、八反の平ぐけといふ隙さぬなりで、後ろ手に入口の障子を閉める。此の男は港屋持船七艘の中でも、江戸川丸といふ大船の船頭、いろ〱な評判もあるが、押し切つての剛腹ぶりで、すばらしい巾利だつた。

「まあ、源太親方。」

と、うつすりと美くしく化粧つた淸乃がかすかにひそめた眉を、相手が氣がつかぬうちになつかしげに伸べて、膝を突いて迎へるのを眺め下して、

「お嬢さん。とんだことでしたね。わしもすぐにお悔みに出なけりやあならなかつたが、お店の用が重なつて、つい今まで無沙汰をしました。ちよいと手が空いたので早速出向いて來ましたよ。」

「まあ、御深切な——長らくの煩ひで、どうせこんなことゝ覺悟は極めてゐましたものの、やつぱしゐる人がゐなくなつて見ると、淋しくつてなりませんの。どうぞ、お上り下すつて——」

と、反らさず迎へられて、源太船頭は上へあがる。

佛前へ若干の寸志。香奠を捧げて、荒くれた太い指を組むやうにして回向をすると、膝から印傳皮、鎖ぐさりの莨入を抜いて、莨を吸ひつける。煙を吐きながらジロリと見まはすやうにしたが、

「お妹御はどうなさつたね？　見えねえやうだが――」

「あの子もあんな氣弱な性なものですから、看病づかれもありませう。昨日から頭痛がするとか言つて、あちらで臥つてをりますの。」

と、済乃は何氣なく答へる。

何氣なくは答へたが、さてこそいよ〳〵やつて來たな――と、彼女は思つた。妹菊枝の戀人済吉が、店の用事で地方まはりの歸るさに、駿府で行衛不明になつた時、乘つてゐたのは此の男の江戸川丸だつた。前後の事情、胸に觸れる直覺から推して、この源太船頭が、港屋の若主人の菊枝への横戀慕をかなへるために、手を下して済吉を溺れ死させたのではあるまいかと、彼女はとうから疑ひを抱いて、どうしてもその疑ひを捨てることが出來ないのだつた。

――あの目の凄さ…どんなことでもしかねぬ男だ――よし、今日こそいい機會、妹のために出來るだけは探つてやらなければ――

源太船頭はさうした氣持を知るはずもなかつた。

「そいつあ、いけねえ。一てえにお妹御はやさしすぎるからの。まあこの港堀で、姉妹小町といつちやあ、随分名高いもんだが――いいや、ほんたうだ――だが、美くしいに變りはねえが、お前さんは花なら白椿、しやんとした張りがあつて、妹御は、さて、何かな？やさしく、かほそいところは一重ざくらかな。さぞ淋しがつてゐなさるだらう――」

「ええ、もうあの子は泣いてばかり。」

と、済乃はしんみりと。

「でも、叱つては見ますものの、それも無理はありません。たつた一人の親父に死に別れて、あの子の頼りは私だけになつてしまつたのですもの。その私もかよわい女の身ですし――」

「ウム、さぞなあ、心細いこつたらうよ。が、この上は泣いてばかりゐる時でもねえ、あんたが心棒になつて行かなければ――」

少しうなだれて、白い細い頸を見せた済乃のすがたに、源太の瞳はじつと吸はれた。

「しかし、まあ大船に乘つた氣でゐなせえよ――港屋の店にゐなさる限りは、大旦那若旦那も、決して惡かあしめえから――」

「でも、いつまで此處にもかうして御厄介になつてゐられますことか――姉妹二人だけになつて見れば、お店のお情にすがつてゐるのも心苦しうございますし。」

「ハ、ハ。女は氣の狹え。そんな小量な旦那方でもねえよ」

と、源太船頭は笑つたが、ふと、聲をひそめて、

「實はな、孃さん。わしは今日、さる人からの話もあつて、ちつと相談があつて來たのだ。」

「まあ？　どんなことでせう？」

と、清乃はさも信頼に充たされた目で相手を眺める。
源太は一膝乗り出した。
「菊枝さんのことなんだ。」
と、清乃を見返して、
「叔父御さんの墓土も乾かねえのにと、お前さんに武家かたぎを出されちやあ、ちつとしにくい話なんだが、さう言つちやあ何だが、あんた方も別に大した貯へもなさうな身の上、さぞ頼りないことでもあらうし、善はいそげといふこともあるから、耳にだけは入れて置かうとやつて來たのだが――お前さんも薄々氣がついてゐるかも知れねえ、若旦那が、菊枝さんにゾッコンなんで、わしから何とか話がして貰ひてえといふわけなんだよ。」
――さも言ひ憎さうに、その實さげすみ切つた言葉を、元の清乃ならいざ知らず、今の彼女は眉根もうごかさずに聽いた。却つて望外な歡びに打たれでもしたやうに、
「若旦那が菊枝に――まあ、そんなことは、私思ひもかけませんでした。だつてあんまり身分の違つた話で、おたはむれとしか聽えませんわ。」
「どうして冗談どころか――お前さんは知らねえでも、菊枝さんに訊いたら、乾度思ひ當ることが澤山あらうといふものなんだ。しかし何分菊枝さんは、ああいふ大人しい娘、今迄若旦那に、色よい返事をしたこともなかつたといふが、叶はねえことに一ばいほむらは燃えるもの。若旦那は、このごろ全く可哀想なくれえにヂレ込んでゐなさるんだぜ。」
「でも、どうしても信用が出來ませんね――大河、新川、川すじ切つての港屋さんの若旦那、どんなお孃さまでも粹なひとでも、望んで叶はぬはずはありませんのに――うちの菊枝のやうな尾羽打枯らした浪人の娘を――」
「それが、昔からも言つてゐる通り、思案の外といふものだ。」
と、源太船頭はニタリとして、
「それに、さう言つちや何だが、若旦那はなか〱色事師で、隨分今までもいろんな肌にさはつて來て、あの年で、どうしてその道じやあヒケを取らねえ旗頭さ――だから、ソレ、菊枝さんのしほらしい手入らずめいた初心いところが、却つて御意に召したんだらうさ。だが、そんなことは兎に角として、たとへすぐに港屋の御新造に直らねえまでも、お情をうけただけでも、どんな言ふ目でも出る身になれるんだ。先様の氣の變らねえうち、何とか話を進めた方がいいと思ふが――」
「それが若旦那のお氣のまぐれでないとすれば、ほんたうに夢のやうな話だけど――」
と、清乃はすつかり話に引き込まれたやうに呟やいて、
「まさか、親方、私をかついで、あとで笑はふとなさるんじやありますまいねえ？」

「何を、莫迦な——あんた方をかついだつてどうなるんだ。そりやあだしぬけに聴いたら、夢のやうにお思ひのも尤もだが、源太がわざ〳〵出て來たほどのことなんだ——安心しなせい。」

と、船頭は言つて、莨を吸ひつけたが、また鋭どい目付になつて、清乃を見て、

「だがなあ、姐さん、それにつけても、菊枝さんの氣持ひとつの話になるが、あんたの見込みじやあ、あの子はうんと言ひなさらうかね?」

清乃も聲をひそめて、

「そのことだけど、親方。」

と、擦り寄るやうにして、

「外ならぬ親方だからお話ずるけれど、ここにひとつのもつれがありますのでね——そのもつれさへ解けてしまへば——」

清乃の語調は、いつかガツタリと町家風になつてゐた——と、言ふよりも、寧ろ傳法にさへなつてゐた。

「何だね。そのもつれと言ふなあ?」

清乃は奥の小間にゐる妹にさも聴かせたくないといふやうに、いよ〳〵こゑを低めた。

「別のことでもないが、清吉さんのことなんですよ。お店の——」

じつと、伏目に見上げた清乃の目に、その刹那源太の顔を流れた穆かならぬ色がすぐに映つた。が、それが思ひなしにすぎなかつたのか、忽ち相手は平然と煙を吹いて、

「清吉か? あの江戸川で死んだ清吉のことかね?」

と、落付いた調子。

「ええ、お店の清吉さんのこと——」

「清吉か? は、はあ、成程、さうか。」

と、源太船頭ははじめて氣がついたといふやうに、銀煙管をポンと叩いて、

「そ。れじやあそこらの奴等の噂が本當だつたのかね? 清吉が菊枝さんに惚れて、戀煩ひもしかねぬといふ評判が立つてゐたが——」

清乃は伏目に見上げつづけてゐる。

「それが噂だけでなかつたとすれば、ちよいと困るな。あんたの口からあの子が見す見す傷ものだと聴いては、若旦那に知らねえ顔もしてゐられねえし——」

「そこは大丈夫ですよ。親方。」

と、清乃は狽てたやうに打消して、

「何しろ兩方とも、年の行かない同志ですもの、大膽な、大それたことをするはずもありませんわ。それに、叔父と來ては、それはやかましい人でしたから——ですけど、そんなつまらないことをしてゐないだけに、なか〳〵あきらめ切れないと見えましてネ——」

「だが、そんなに清い仲なら、いつまでこだはる筈もあるめえが——」

「そりやあ、親方、娘氣といふものを御存知ないからさう思ひになるんです。娘たちといふものは、夢のやうなはかない戀であればある程、いつまでも忘れ兼ねるものなのです――菊枝は、だから清吉さんの幻を、いつまでもいつまでも抱きしめてゐたいんでせうの。」

「は、は、は、娘ッ子といふものは、妙な氣質を持つてゐるものだなあ――」

「でネ。」

と、清乃はつづけた、

「何より困つたことには、あの子は今でも、清吉さんは死んだのじやあない、此の世にまだゐる人だと、思ひ込んでゐるらしいのです。」

「何だつて！清吉がまだ生きてゐると考へてゐるッて！」

筒走しつたこゑで、船頭が叫ぶるを、清乃は押へた。

「大きな聲はいけませんよ。菊枝が醒めてゐると聽えますから――」

と、たしなめて、

「あの子はたしかに清吉さんは生きてゐると考へてゐるんですよ。實は昨晩も二人でいろ〳〵行末のことを話した末、叔父もなくなつてしまつて見れば、二人ともめい〳〵に、どんな緣でもあり次第、身をかためなければ立ちゆくまいと言つたのですが、あの子はそれだけは厭だ――私はこの目で、清吉さんの死骸を見ないうちは、どうしてもあの人がなくなつたとは思へない――と、さう言つて哭くんですの。もつとも、だしぬけにああいふことになつて見れば、未練も執着も募るのもわかりますけど――」

「あの男の死骸を見なけりやあ、本當に出來ねえと――さう菊枝さんが言ふのかね？」

嘲るやうに、源太船頭は、冷たい微笑で口角を引きゆがめた。

清乃はその横顏を見つめて、

「一本氣に、あの子はさう思ひつめてゐるのです――だから、私はそれがもつれだと言ふんですわ。あの子をどうにかして諦めさせることさへ出來れば、どうにもなるでせうが――私に言はせれば、全く二度とない、勿體ないお話なんですもの――」

「そんなことなら、この源太が、いくらでも證人になつてやるが――清吉は、關宿の荒瀬で、たしかに流されて死んだのだから――」

と、船頭は斷言した。

が、その時清乃は、ふと、氣がついたやうに、

「おや、もう大分暗くなりましたこと。灯をつけませう。」と白い素足を見せて立つと、行燈をさげて來て、灯をつける。

艶やかな黒髮といみじき對照を示す頰の白さが、頸の白さが、たぐひなくなまめかしい

彼女はほつそりと、しなやかな手で燈心の加減をすると、勝手元へ立つて手早くとゝのへて來た八寸の膳――海苔を肴に、銚子を火鉢の銅壺に入れて、

「親分はたしかお飲けになるお口でせう。何もありませんけど、お茶

がはりに――」

源太船頭は、酌をしようと、銚子を取つた清乃をほれ〴〵と眺めて

「いやもう、惚れ入つたなあ。お武家の娘御にも似合はねえ――と、言つては叱られるかも知れねえが、どうしてすばらしい氣の利き方だ――」

「ほ、ほ、ほ。どうせ野暮そだちの私なんか、粋一方の親方の目で御覽になつたら、じれッたくつてなりますまいが、勘忍なさいましよ。おや、コボれまして？馴れないんだから御免なさいね。」

婉笑一閃。源太船頭は、まづ飲まざるに醉ふたのである。

「全く豪勢なもんだ。」

と、猪口に脣をつけて、さもうまさうに舌なめずりをして、

「浪人衆の娘御なんぞ、一たいどこがよくつて、若旦那が魂を打ち込んだものかと、菊枝さんを遠目で見るたびに嗤つたものだが、清乃さん、あんたのこの心意氣を見ちやあ、荒くれ男のわしだつて、心そこからまゐつちまうよ。は、は、は――いや、恐れ入つた。」

「あれ、いやですよ、親方。そんなつまらないお世辭をおつしやつて、若しお花さんの耳へでもはいると叱られましてよ――さあ、お重ねなすつて――」

寧ろ、仇めきすぎる清乃のとりなしに、思ひがけなくうけに入つた源太船頭は、すすめられるまゝに盃を重ねる。

いつとなし、彼女は話を元に戻して、

「それにしても、貧しい上に頼りもない、菊枝の身には二度とない幸運ですから、どうにかして親方のお力添で、話をまとめて頂きたいのですが、あの子に清吉さんがもうない人だと、はつきりとあきらめさせるには、どうしたらいいでせうねえ。」

「なァに、そんなこたあ何でもない。」

と、源太は強いられる盃に、一層舌をなめらかにして、

「あの男が、艀から激しい流れに落ち込んで、渦に呑まれる有さまを、チヤンと見屆けたこのわしが、くはしくあの子に話したら、それでも信用出來ぬとは、よもや言ひ張りはしない筈だ。お前さんたちは知るまいが、何しろ關宿の三叉と來ては、利根河、江戸川切つての難所だ。あの大利根の流れから、江戸川が分れる荒瀬――まるで瀧のやうな勢でぐわう〳〵と渦を卷いて落ち込むのだ。河童と言はれる舟子どもでも、あの中へ一度はいつたら、浮びつ子はねえと言はれてゐる難所――そこへ清吉はどんぶりと、逆さになつて落込んだのだ。ことさら雪解の水が殖えて、すさまじい流れの勢――暗夜のことなり、どうにも助かるわけはねえ。あの男が若し二度と、此の世にすがたを現はせば、そりやあ人じやあねえ、幽靈よ。」

ズバリと、不敵に言つて、源太はぐいと乾す。

「でも、親方が御覽になつてゐたとすれば、水には馴れたお人のこと、どうにかして、助けてやれなかつたものですかねえ？」

と、何氣なげに清乃は口を挾む。

源太船頭は、例の鋭い目で、濟乃を一瞥して、
「そりやあこつちの生命を捨てて、どうでも助けてやらうとすれば、どうにかなつたかも知れねえが――しかし、濟乃さん」
と、彼は彼女のそぶりを見て、くみし易いと見たものか、
「それならお前さんは、濟吉が助かつて此の世にゐたら、菊枝さんと緣組みでもさせてえと言ふのかね？　若旦那を袖にしても――え？　若旦那が思ひ込んだ娘を、お店の手代の青二才に呉れてやつたら、青二才にも菊枝さんにも仕合せが來ると思つてでもゐるのかね？」
と、無遠慮に突込んで來る。
濟乃は冷たい微笑を見せた。
「親方にも似合はない――妹の前で、お腹の底を言ふわけには行きませんが、だれがそんな馬鹿げたことを考へるものですか？　そんなことを言つたら、思ひやりのない女とおさげすみなさるかも知れないけれど、私にすれば妹の、戀より想ひより、一日も早く、この貧しさから浮み上つて、世間並みの暮しがしたいのは山々ですよ。何もキラを飾つて見たいとも、榮耀榮華をしたいとも、大それた望みはありませんけど、せめて世の中の女なみに、樂しい日の目が見たいと思ふのが無理でせうか？　若い日は二度ないのですもの――それには、菊枝でも、若旦那に可愛がつていたゞければ、つながる私だつてこんな貧乏ぐらしから切り抜けるだけのことはして頂けませうからねえ。」
源太船頭は大きな口を歪めて薄ら笑ひを洩らした。
「お前さんは話がわかつて、正直に言つてくれるから話が早い――」
と、酌をする手を、だしぬけに、骨つぽい手で握つて、
「どうだらう？　濟乃さん、眞實こんな暮しに飽きが來たら、菊枝さんは菊枝さん、お前はお前で、わしの相談に乘つてはくれめえか？」
と、のぞき込むやうにする。
濟乃は執られた手を振り振はうともしなかつた。
「相談とはえ？」
「わしはお前に惚れ込んだのだ――わしの口とばかしは言へねえ。お前の氣つぷと仇なすがたが迷はしたんだ。」
「ほ、ほ、ほ、調子のいい。」
と、濟乃ははじめて擦り抜けて、
「世の中を知らない私たちはすぐ本氣になりますから――」
「本氣になる？　こつちは百倍も本氣なんだ。荒くれた船頭でも、惚れた女にやあどんなにでも柔しくするのが男なんだ。決して一生不自由はさせねえ。泣かせもしねえ――ゾロリとしたなりをさせて、贅澤な暮しをさせるつもりだ。ねえ、濟乃さん、厭かえ？」
と、蛇のやうに赤らんだ目で、執拗く船頭はからみついて來る。
「もしそれが本氣なら――」
と、濟乃は言ひさして、また笑ひにまぎらして、
「でも、お花さんといふお妾が、つい目と鼻にゐるあなたが、そんなことを仰有つても、いかに世間知らずだつてだれが本氣にするもので

すか。」

「お花がゐるから？」

と、また盃を煽りつけて、

「お花が邪魔なら、追ん出すさ。」

「あんなに思ひ込んでゐるお花さんが、やみ〳〵追ひ出されて出て行くと思つていらつしやるの？

と、清乃は新らしい銚子をすゝめて、

「近所の人達もよく噂をしてゐますわ。あなたが、浮氣をしてお歸りのたびに、あの方がどんなにおすねになるか――ほ、ほ、今のやうなことがあの方の耳にはひつたら、私、殺されてしまうかも知れません。もう、およしなさいましよ、つまらないことを仰有るのは――」

「あいつが、お前を殺すかも知れねえつて？馬鹿くさい。」

と、源太船頭は酒氣を吐いて、

「あいつが下らなくジタバタすりやあ、あべこべに踏み殺してやらあ。」

「まあ、お強いこと、ほ、ほ、ほ。」

と、凄艶な含笑を浴せかける。

源太は煽られ、唆られた。激しい毒血の狂奔が、あらゆる理性を押し流した。清乃の美は、これまで此の種の粗剛な魂がしみ〴〵味はつたことのない魅惑を持つてゐた。

「ウム、殺してやるとも。殺せなくつて？」

と、呻いたが、急に奥歯を噛みしめるやうにして、すさまじい目で睨むやうにみつめて、

「清乃さん、お前さんは強い男がずきか？一度思ひ込んだら、どんなことでも遣り抜く男が――」

「それは私は弱い女ですもの、強い男を頼りにする外、此の世で望みはありませんわ。」

と、清乃はまじろぎもせず答へる。

「そんなら言ふが、この源太は、お花はおろか、どんな奴でも、邪魔だと思や、今夜にもバラす位は平氣な男なんだ。」

と、壓しつけるやうに聲をかすめて、

「お前も清吉が生きてゐるのが有難くもねえやうに言つてゐたが、あの男が消えたのだつて、おれの指一本の働きよ。な、わかつたか？指一本の？」

太い、こはばつた人指ゆびを、彼は清乃の鼻のさきへ、刧やかすやうに突き出した。

「人間なんて、脆いもんさ。な、船旅慣れねえ青二才が、夜深の船から用を足してゐるところを、フム、この指一本――別に骨も折れねえものよ。若旦那から随分たんまりさづかつたが――あいつが恨むなら、おれや若旦那を恨むより、當の菊枝さんを恨むがいいさ。菊枝さんに思ひつかれたればこそだ。は、はは。」

「まあ、そんなら、親方が――」

と、濟乃が、さすがにサッと青ざめて叫ぶのを、源太船頭はおつかぶせて、

「今になつて見りやあ、お前のためにもよかつたんだ。だから妹御にやあ、お前からうまく言つて、一日も早く若旦那に望みを叶ひさせて上げたがよからうぜ。若旦那にあの子をやりせえすりやあ、ことによれば、なあ、あの港屋の大身代も、おれ達のままになる日が來ねえものでもねえ。」

じつと、濟乃は源太を眺めて、さて、ほころびるやうに笑つた。

「親方、あなたはすごいねえ。」

「どつちがすごいか——右門さんの娘さんも、あんまりすごくなくもあるめえ。話がさうときまつて見りやあ、さあ、固めの盃だ。」

「あい。」

——受けて飲み干す盃は、濟乃に取つて、恐らくいかなる毒藥にもまさつてゐたかも知れぬ。しかしながら、復讐の女鬼としての彼女には、それが有毒であればある程、臭苦であればある程、こゝろよいものであるにも違ひなかつた。

×　　×　　×

欲情の奴隷が、淺間しい希望を抱いて、微醺の頰を夜風に吹かせつつ、さもこゝろよげに歸つて行つたあとで、その足音がすつかり遠のいたのを聽きすますと、濟乃はかどを鎖す早々、妹が臥つてゐる小間へ駈け込んで、床の上に泣きくづれてゐる菊枝の兩手を摑みしめた。

「これ、菊枝。聽いたかい？みんなみんな聽いたかい？」

菊枝は荒々しく手をゆさぶられて、答へるすべもなく、たゞ、呪はしさに、痛ましさに泣き入るばかり。

「お聽きだらうね？お聽きだらうね？これ、哭いてゐる時ではないよ。ふた親のかたきは私にまかせてお置き。お前は戀人のかたきを生かして置いてはならぬ——ね、もう何のためらふところもないよ。叔父さまが言つたお言葉を、私たちは忘れてはならないのだ。呪ひを持つ女は蛇になる外はない。もう人間ではゐられぬ運命なのです。蛇になつて、黄金や力でわれ〳〵を虐なむ人達の皮肉に食ひ入る外はない。お前は港屋の人鬼息子に身をまかせなければならないのだよ。お前はあの男の心の臟を嚙みやぶる蛇になるのだよ。私はあの穢らはしい奴が、手を握るにもまかせて置いた。さした盃も呑んでやつた。あの穢らはしい奴の仕末は、私の手でつけてやる。お前はあの人鬼息子を呪ひ殺してやればいい。港屋を滅茶滅茶にしてやればいい。何を哭くことがありますか。樂しいことではないか？うれしいことではないか？子供のころ、罪のない人形の手足をもいでさへ面白かつた。況して、わたし達をこんなみじめな目に逢はせ、親を殺ひ、戀人を奪つた奴等の、五臟六腑を嚙み破る、蛇となつて、あいつ等ののた打ちまはつて苦しむさまを見てゐたら、どんなに樂しいだらう。うれしいだらう。私はお前の戀人の死にざまをすつかり聽き出してやらうと思へ

ばこそ、あの犬よりも狼よりも浅間しい奴に、生れてはじめて――どんな男にも觸れさせなかつた、この唇さへ汚さしたのだよ――お前はもつと氣丈にならなくては駄目です。何の、恐ろしいことも、悲しいこともあるものか。人間はどんなことでも出來るのだ。鬼にもなれば、佛にもなれるのだ。神にもなれゝば、蛇にもなれるのだ。私達を、神にも佛にもしないのは世間なのだ。穢らはしい、畜生同然な奴ばかりが巾をきかしてゐる世間なのだ。それだから、私たちは、鬼になり、蛇になる外はない。さあ、しつかりおし！菊枝。」

キツと、妹も顔をふりもたげた。

あの浅間しい源太船頭さへ、一重ざくらにたとへた菊枝は、さすがの姉さへ、ゾツと魂に悪寒を感じて身ぶるいをした程すさまじく變つてゐた。黒髪の根はさか立ち、目尻は釣り、瞼が卸けて、唇は異樣にねぢれながらわなゝいてゐた。

「ええ、私も蛇になりますわ。もつといやらしいものにもなりますわ。清吉どのが、溺れ死にをなすつた苦しみにくらべれば、何にでもなりますわ。」

「さう〳〵、それでこそ妹だ。何も怖ろしいものはない。非業で死んで地獄に落ちた、父上や母上や清吉どの、さては呪ひ死にに死になされた叔父上の血の池地獄、針の山の苦しみを、あいつ等に生きながら嘗めさせてやりませう。どんなに面白いだらうね。うれしいだらうね。どんな權力でも黄金でも防ぐことの出來ないのは、女の思ひだ。執念だ。飛ぶ鳥を落すお旗本衆も、川すじ切つての問屋も、私たちの怨念だけは防ぎ切れない。ね、ソラ、この鏡を御覧。」

と、清乃は圓鏡を取つて、妹と並んで、青ざめた頬と頬とを擦りよせて映しながら、

「どんなに私たちは美くしいだらう？御兩親は、私たちにこの思ひを遂げさせるために、かうも美くしく生みつけて下すつたのだよ。この美くしささへあれば、私たちはどんな望みでも叶ふのだ。今夜のあいつの意久地もないザマを御覧なさいな。あれも私が美くしかつたからだ、賢こかつたからだ。まるで蛇のやうに美くしく、賢こかつたからだ。」

清乃はパタと鏡を投げて、ヒシと妹を抱きしめた。

「私たちはからだは二つでも心は一つだ。私たちは頭が二つある蛇だ。分かつたかい？菊枝。」

菊枝は答へるかはりに、これも力をきはめて姉の軀にからみついのである。（つゞく）

五月の朝

地上の美

森田恒友

○野茨、

或る年の初夏、それは大分以前のことである。利根川の河原に畫架を持ち出して、扨て畫材もがなと其處此處をぶらつき歩いたが、とりとめもないあの靑草原は、美しと感じながら、扨て描かうとすれば捉へどころに窮して、とう〳〵草原へ寢ころんで、行々子の鳴く音を聞いては宿へ歸る日が幾日か續いた。でも私はあきらめて畫室へ歸る氣にならなかつた。

一日靑草の上に、初夏の光りを浴びながら、ぼんやり前の草原を眺めて居ると今まで氣もつかずに歩き廻つた其處にも此處にも、緑の中に野茨の白い花が咲き亂れて居ることに氣がついた。見入つて居ると、それは何とも言へぬ野花の美しさだ。その美しさに見入つて、私は數日間タブローの都合の爲めにのみ自然を見、それに捉はれて居たことを悔いた。そして靑草と野茨との、地上の局部の美しさにも眼が注がれるやうになつた。どんなにかそれが自分にとつて嬉しいことであつたか。

○卯の花

之れも今からかなり以前のことであつた。私は秋田縣下の或る學校に圖畫敎師として赴任した時だつた。當時の若い私は、未だ自然のさま〴〵の味ひを知らぬ時だつたが、ああゆふ寒國の常として、五月の初めになると、さま〴〵の花が一時に咲き出した。同時に家々の周圍も道端もが忽ち緑になつた。地上は百花と萬緑とに一時に飾られたその澤山の花の中で、今も私の心に深く印されたものは、家々を圍らす垣根を眞白に飾つた卯の花であつた。私は今も種花の中で、雪柳といふ細かい白花の風情を好くが、殆んど家毎に圍らす垣根が純白の細かい卯の花に飾られた美しさは、當時の私にあまりに意外の美しさであつた故か、今も卯の花と言へば、その垣根の卯の花の美しさが先づ念頭に浮び出す。私は數日間の學校の往復に、その兩側の垣根の白花をどんなにか珍らしくも美しくも稱したことだつた。

○筍

之れは、去年丹波の山中の村に住む一友を訪ねた時だつた。その村の村長の家に藏する蕪村の一作を見ようとて、その友と共に、村の道を、その村はかなり細長い村であつたが、村の中の道をぼつ〳〵歩いて行つた。時に農家の庭に牡丹の咲き殘るのがちらりと見える外、大體いろ〳〵の花は末の頃であつた。

私達は靑葉の茂る村中の路を歩いて行つたが、或るうす暗い、ひどく藪の生かぶさつた路を通ることになつた。その藪を透いて靑葉の光りがちら〳〵と射す中に、私が思はず足を止めた程、其處には幾本かの偉大な筍が、によき〳〵と伸びて居た。其の黑ずんだ筍

の五六尺に伸びた大きな感じは、斜に射す青葉の光りの中に一種不思議な、美しさと、恐ろしさとを併せ現じた感じだつた。單に色の調和から言へば、緑と黒との調色は、上品なものだが、此の時の緑の中の偉大な無數の筍の黒い感じには、一種の恐ろしさが現じられて居た。それを私は面白い畫材感として見たのだつた。

昔巴里に居た時の初夏。ルクサンブールの公園などを散歩すると、うす暗い青葉の樹下に無數に點ぜられる人が、皆黑衣を着けて居り、それがひどく上品な調色の畫材に感じたことだつたが、其の感じには何の恐ろしい氣とか、大きな感じとかは絶無だつたが、此の丹波一村の路傍の筍には、その色調以外の、別趣な感が強く現ぜられたことを見て、私は思はず驚いた心で足を止めたのだつた。

東洋の自然には、突然として、そういふ感じに出遇ふことが折々ある。此時の筍の感じは、全く青葉の、美しい中に一種の憂鬱を含む初夏の自然で無ければ現じないものであることを知つた。

○けし

私はけしの花が好きで、年々秋になると、庭の一隅に、日當りのよいところを撰んで二三種のけしを蒔くが、さて春も暮るゝ頃になり、そろ〳〵花を樂しまうとする頃になると、兎角虫がついて、よい花を見得ない。唯ひなげしのみは、年々さしたる虫もつかずに、ぞつくりと伸びて、なよ〳〵とした美しい花が五月の庭を飾つてくれる。今年も去冬の嚴寒の爲めに、他のものは消え失せた中に、ひなげしのみは優しい葉すがたを伸ばしつゝある。

初夏の多くの花の中に、ひなげしは最も可憐な感じの花ではある。

初夏の農家の庭などに、あの大きなけしの花の咲き誇つて居るのを見ると、如何にも美しい。が、ひなげしの可憐さもよいものだ。初夏の庭にひなげしの咲いてくれることを、私は毎年どんなにか樂しみ待つて居る。（終）

ボート

富田碎花

五月に入れば、ホテル・モデルンの食堂は腰高窓の玻璃越しにキタイスカヤの大通りの人通りが眺められる露臺の方まで出張つて、もうそろ〳〵夏の献立表だ。凍氷の碎片の浮いた紫水晶を想はせる色をした露西亞特有のスウプが、とてつも無い大きな容器に盛られて卓子の上へに運ばれるやうになる、それが咽喉佛のあたりを撫愛して胃袋へと送り込まれるのが快いほどの氣候になつたのだ。——冬から一足飛びに初夏になつてしまふ大陸的氣候とでもいふのであらう。窓の下では花賣の支那人が、可憐な鈴蘭の花束を並べたりしてゐるのだつた。

少し早い目に晝食を濟ました私たちは——その一人は、今夕、モスクワ行の列車に乘り込んでこのハルピンを發たうといふ氣忙しさのなかだつたが、そこは旅ずれのした極樂トンボのお揃ひとあつて、街へと飛び出したものだ。街衢はもう若干埃つぽい風が立つて、——來往する群衆のうへには眩い五月の太陽の

光が舞踏してゐる、店舗の陳列窓にすつかり季節物の装ひを凝らして人目を眩惑し、煽動してゐるのに氣附く。この大通を一直線に行き詰めればスンガリイ江岸の堤防だ、やや爪先上りに十數歩を運べば、もうそこには蒼茫とした江水の流れとそしてとても大らかな景色の展開があるのだつた。

休日でも無いのに、何といふその人出だつたらう！ みんな呑氣さうな消閑者の群だ、男も女も、老人も子供も。さうした人たちを競つて呼び迎へてゐる江岸に繋いである遊山ボートの舟夫たちの喧騒には脅かされもするほどだ。なかには艶やかな装ひをした露西亜娘がたつた獨りで さつさとオールを操つて江心へと漕ぎ出してゆくのなども見えたりして。

私たちのボートの舟夫は純粋のスラヴ型の屈強な青年だつた、補綴の當つた襯衣一枚になつて懸命に漕いでゐる、その汗ばんだ懸命な顔つきは眞に美事なものだつた。動くたびに波打つ豐かなブロンドの頭髮、陽に焼けた顔面の皮膚の色、一點の曇りも、邪氣も無い、人の良好さうなその眼眸は惚れ惚れとさせるのに充分だつた、恐らくは歐露の方からでも革命の惨禍に追ひ立てられて、かうしたところまで流れて來てゐる多くの人たちのうちの一人でもあらう、而も彼れら一流のニイチエウオ主義！ が骨の髓まで滲み込んでゐるやうな。

時として、長く、船跡を殘して下流の方に向つて、けたたましい外輪の廻轉する音を立てて航行してゆく汽船などがあれば、きまつてその低い舷に並べてつくられた客室の窓々からはどれもこれも呑氣さうな支那人や、朝鮮人や、露西亜人の顔がいまさらしく物珍らし氣にのぞき出してゐるのだつた。靜かな江水もかうしたやうな時だけは波が立つ、そして遊山ボートのやうな小さな存在はその安定が失はれさうになつて今更ながら慌て立てるのだつた。いかにも驚愕するやうな叫びを上げたのは私たちよりも少し前方を漕いでゐた中年の母親を大將にした家族づれの一團だつた。それには五六人の子供たちがギッチリと乘つてゐた。然しその騷ぎも靜まつて此度はみんなが聲を揃へて唄ひ出す、ルパシカ姿の少年は、小ましやくれた手つきでバラライカを忙し氣に搔き鳴らす、皆が唄つてゐるのは露西亜の民謡でもあるだらう、少年が顔を眞赤にして奏でるのはその伴奏でもあるだらう。大江の水は音も無く流れ來たり流れ去る、堤防のある江岸には相變らず人だかりがしてゐる様子だが、もう喧騒はここまでは聞こえては來ない。私たちを包む自然は、いま、寂然としてゐる、その沈靜を破るものは、ただ私たちの動かすオールがクラッチに當つて立てる律動的な音響だけではないか、——かへつてそれが四邊の明るい寂しさを一層増すよすがとさへなるのだつた。無器用につくられたオールではあるが水面に跳飛を立てることさへしないほど靜かな流れなのでもある。

舟夫に代つて 私たちも 交互に漕ぐのだつた。やがて對岸の、盛夏になれば水浴場が開かれる、場所まで來た、さすがにその季節には早いのでまだ踊り場が去年撤退されたままになつてはゐたが、そろそろ修繕をするためなどに職人たちが忙しく働いてゐるバラック建の食物店や飲みもの屋などがいくつもいくつも砂原の楊柳の間に見えたりしてゐる、ま

た或る入江になつた水溜りには、水着一枚になつたとても素晴らしい體格の露西亞婦人が水浴してゐたりする、さうかと思へば怪し氣な葦簾張り式の掘立小屋のなかから、例のこの邊に跳梁跋扈する魔性の女が異國人である私たちに頓狂な聲で誘惑を試みたりする、見るとも無くのぞき込めば、荒削りの板木のテイブルのうへにはラムネの空瓶などをころがして、そこにはこれも水着一枚になつた斷髪の、見るからにそれと合點される様子をした女たちが卑し氣に笑ひ立てゝゐるのだつた。

　この邊まで來てしまへばさすがにさう遊びの人も多くは入り込んではゐない、額には心持ち汗ばみを覺えさせるほどの静かな五月の陽光を浴びながら私たちは芽を吹き立て終つたばかりとも思はれるさう丈高くない楊柳のの間をくぐつて、砂原のうへをサクサクと跫音を立てながら、砂洲の水際へと置き捨てゝ來たボートの方へと戻つて來るのだつたが、偶然、その途中で、枯枝などを拾ひ集めて火を起して茶を沸してゐる先刻の母親や子供たち連れの一團を見出した。あたりには例のバラライカや手風琴が投げ出してあつたり、新聞紙の包みからはパンや、果物なども轉がり出てゐた、その或るものは忙しさうに、或るものはまたボンヤリと天空を仰いでゐたりした。

わが五月

中條百合子

五月は爽快な男兒。ぴち〱若い體ぢゆうの皮膚を裸で、旗のやうな髪の毛を風にふき靡かせつゝ、緑の小枝を振り廻し駈けて行く五月。新鮮に充實して淨き官能の輝く五月。

近い五月は横丁の細道にもある。家の塀について右へ一つ、もう一遍右へ一つ曲ると、其處に五月の慎しい寶が人目にかくれ横はつて居る。右も生垣、左も生垣、僅か三尺ばかりの小道がそこを貫いて居るのだが、五月になると、小徑は緑の王國だ。高いところに樫の若葉、要の葉、櫻、楓、地面に山吹や野茨が蹴り出て緑のヴァリエーションをつくる。其處へふつさり幹を斜に空から後期印象派風の柳が豐富な葉を垂らし、快晴の午後二時頃人聲もしないその小道を行くと、何と云はう――様々な緑、紅緑、黄緑、碧緑、優しい銀緑色の清純な燦ばしさ、重さ、燦めきが堆圓となつていちどきに感覺へ溢れて來る。静けさに満ち渡る崇嚴――。

　あらたふと青葉若葉の日のひかり

北方の五月は黄昏がながい。もう太陽は河の彼方に沈んだ。燦めきのない殘光が空中にあつて、空を建物を人物の色彩を不思議に鮮かに浮きたゝせる。市街は、和蘭陀の陶器繪のやうに愛らしく美しい。ねつとりした緑の街路樹、急に煉瓦色のこまやかな建物の正面。車道を辷るシトロエンが夢のやうなレモン色だ。女の赤い帽子總ての色調を締める黑の男性散策者。

　人は心を何ものかにうばはれたやうに歩く。……歩く。葉巻の煙、エルムの若葉の香、多くの窓々が五月の夕暮に向つて開かれて居る。

　やがて河から霧が上る。街燈が鐵の支柱の

頂で燦きを閃めかせ始める。ほんの一とき市民の胸を掠めるぼんやりした哀愁の夜が、高架鐵橋のホイツスラー風な橋桁の間から迫つて來た。

さういふ黄昏、一つの池がある。ふちの青草に横はつて池を眺めると、水の上に白樺の影が青く白く映つて居た。花咲かぬ水薑も浮いて居る。白鳥が一羽居る。むかふの丸木橋の下に居たが、こちらへ向いて泳いで居た。眠たい水が鋼色にひろがる。青草に横はつて池を眺めると、今は樹間をこめる紫つぽい夕暮の陰翳まで漣とともにひろがり、白鳥ばかり眞白に、白樺の投影の裡に伸びた。

をどり

齋藤茂吉

街路樹の葉が日一日と大きくなり、アムゼル鳥が朗かなこゑで啼きはじめて、その木かげに白い糞をおとすころには、僕の心はいつもいふにいはれぬ憂鬱に襲はれた。

僕は、むかし日本に渡つて來た何々聖者のやうに耶蘇の『法』を傳へようといふやうな信仰もなく、從つてさういふ燃えるやうな烈しい心も持つてゐなかつた。さればといつて、西洋人が東洋國に向つてなしたやうに、反對に東洋の學問を西洋に移植しようなどといふ抱負は微塵もなかつた。僕は、美しい五月の日光が石を敷つめた街上を限なく照らす日にも、教室の一隅の卓のうへで、神經細胞のことをいろいろといぢつてゐたに過ぎず、たまたまカフエに居るやうなことがあつても、薄暗い隅の卓に凭つて、兩手を頬腮のところに當てては憂鬱してゐるのであつた。僕が神戸を出帆するとき、友は餞別に「宮本武藏」といふ書物を贈つた。僕は船が門司に碇泊中ひとりで巖流島をおとづれて、宮本武藏に打たれた佐佐木巖流の身のうへを考へた。それであるから、維也納に來て、かうしてカフエの一隅に憂鬱してゐる時などにも、ひどく佐佐木巖流に同情するのであつた。

さういふ僕が、五月の或日曜に維也納生れの娘と、その妹とに案内してもらつて、維也納から汽車に乘ると一時間ばかりで着く、Laxenburg といふところに行つたことがある。

その日は天氣が好くて、透明な澄んだ空から、太陽が無障礙に光を放射してゐる日であつた。朝は割合に早く汽車に乘つたのであるが、停車場から汽車を降りて歩くと、もう額に汗のにじむのをおぼえた。

ふたりの姉妹は腕を組んで足を揃へて歩いて行く。ふたりは切りに維也納訛の獨逸語を使ふが、馴れ切つてゐるので、細いそのこゑがどうもいゝ氣持を起させるのを僕は意識してゐる。姉娘は僕にも腕を組んで歩けといふ。娘は時々踏替をしては僕と歩調を揃へた。

このへんは水が豐かで、沼と古城をめぐる濠とを通ずる幾條かの小川には、水が渦を卷きながら滿ち足つてながれてゐる。さういふ流のほとりを通つてゆくと一めんの草野のところに出た。その草野から、恰も鈴を振るやうに蟲の音が湧きあがつてくる。これは蟋蟀のこゑである。娘は、あれは Grill のこゑだと

教へて呉れた。

蟋蟀のこゑは、大きく朗かで、初夏の日光に照らされた、花原の中で一齊に鳴くその感興は東洋國の秋の夜に、諸ごゑに鳴くが、何がなし寂しい蟋蟀のこゑとは趣が違つてゐた。伊露こゑ幽かにして晩て思深し、などといふのとは著しい氣分の差別がある。僕は暫らくそこに佇立して蟋蟀のこゑを聽いた。

三人は渡船で濠を渡つて、そして古城を見た。濠には白鳥が泳ぎ、鯰に類した魚が澤山に住んでゐた。

古城は石と土で建てた窮屈な部屋が幾つもある。これは何處の古城を見てもその趣は同じである。併しその窮屈な部屋はやはり『籠る』感じで、氣を落付かせるだらうと思はれる。それから罪人を攻める部屋とその爲掛がいろいろあつた。これも亦何處の歐羅巴の町の古い城にも存在するもので、あらゆる工夫をして、出來るだけひどくいぢめる樣に出來てゐる。善人なほよく往生す、況んや惡人をやなどといふ言葉は、僕には分らない。この世に罪人として終る人と、さうでなく、富み榮えて終る人と、一しよにこの古城にゐたのである。歐羅巴に來てから、古への牢獄の名殘をいろいろ見たが、どうも僕には變な氣がしてならない。此處には實に深い井などが掘つてあつて、それは數十尺の高いところから罪人をその中におとす仕掛になつてゐるのであつた。

三人は二たび古城を出で、渡船で濠を渡つた。そして草野のところに來て、持參して來た、辨當をひらいた。草野にはもう一めんに小花が咲いてゐる。草野は齊々と手入がしてあつて、また日本のやうに露つぽいことなどはない。三人はまばゆい日光を浴びながら辨當を食べた。そのとき妹娘がひよいと立つて草野のなかに行つたかと思ふと、いゝ格好をして踊り出した。

舞踊は暫くつゞいた。僕は不思議にしてゐると、『うちの妹は踊子なんですよ』から姉娘が說明してくれた。つまり妹は、渡世にしてゐる踊をば、舞臺のうへでするかはりに今日は五月の花野のうへでしたのであつた。僕は歐羅巴にゐるうち、かういふ光景をただ一度此處で見たに過ぎない。

なるほど妹のパツスの中には藝人の免狀があつて、Mitgliederkarte der internationalen Artistenorganisation (I.A.O.). Nr3228. などといふことが書いてあつた。姉は少しも踊を知らずに父のもとで働いて居り、妹は所謂寄席の踊子だと謂つても、うら若い身空で獨立して生きてゐる。僕の寂寥の心はそのころから幾らかづつ色合が變つて行つた。

それから半年程たつて、妹娘は今では伊太利領になつたヒューメに行くといふので、姉娘と一しよに僕も停車場まで送つて行つた。かういふことは、同期の留學生で誰一人知るものはないのであるから、これを架空のものとして取扱つて貰つてもかまはない。

割符帳

──田園小説──

ペドロ・アントニオ・デ・アラルコン作

笠井鎭夫譯

ブスカペアタス爺さんはロタの菜園勞働者組合に這入つてゐた。

私がこれから語らうとする事件が起つた頃には、彼はもう腰が曲りかけてゐた。それもその筈だ、何せ、年はもう六十だつたし、コステイリヤの濱續きの菜園を耕すこと前後四十年にも及んでゐたのだから。

あの年、彼はその菜園に、記念橋の欄干の擬寶珠程もある見事な南瓜を作つてゐたが、それが最早内も外もオレンヂ色になりかけてゐたからには、六月も半ばを過ぎてゐたことがわからう。ブスカペアタス爺さんはそれ等の南瓜を、その恰好によつて、熟し加減によつて、はたまた自分がつけてやつた名前によつてさへ、一つ一つよく見覺えてゐたが、中でも、「煮て食へ」と言はんばかりに、最もよく實の入つた大きな、色艶の好い奴四十個のことは何處から何處迄も知りぬいてゐた。そうして明暮、物やさしく打ち眺めては、鬱ぎ込み、

「もう直き別れにやならんのオ」と叫びながら日を暮らすのだつた。

到頭、或る午後のこと、身を切る思ひの決心をした。そして今迄それ程面倒を見てやつたいとしくてならぬ南瓜の蔓に生つた最も目星しい奴等を指し乍ら恐ろしい宣告を下した。

──明日は此奴ら四十だけ切り取つてカディスの市場へ持つて行くことにしよう。此奴らを食ふ人はほんに仕合せ者ぢやなア・

斯う言つてから、彼はのろい歩みを運びながら家へ歸つた。さうして、明日息女を嫁入らせる父親の苦悶を嘗めながらその夜を過ごすのだつた。

──可哀さうぢやなア、わしの南瓜は！──と時々溜息をついて、到頭寢つくことが出來なかつた。しかし、後でまた思ひ直して言つた。

──ぢやが、奴等と別れなえでわしはどうしようといふんぢや？考へて見りや、そのためにわしはあれ等を育て上げたんぢやなえか！い、いなんぼ内輪に見積つても十五ドゥロの金にやならア・・・

こんな具合だつたから、翌朝彼が畑へ行つて、その四十の南瓜が夜

の間にすつかり盜まれてゐるのを見出した時の、彼の驚き、怒り、絶望が如何許りであつたかは思ひやるべしだ。

長談義は止すとして、私は唯だ、彼がシエーキスピヤーの描いた猶太人のやうに悲劇的發作の絶頂に達し、かの名優ケンブルが非常にうまく演つたといふシヤイロツクの、

——おゝ、若し俺が貴樣を見つけ出したら！

貴樣を見つけ出しさへしたら！

といふあの恐ろしい言葉を繰り返した。とだけ言つて置かう。

ブスカベアタス爺さんはやがて冷靜に熟考した結果、此處ロタでは自分に見出される危險なしにあの南瓜を賣り出すことは到底不可能であるし、また、此處では南瓜は非常な安値を呼んでゐるのだから、可愛いあの品は最早ロタに存在する筈が無いと見當をつけた。

——わしの南瓜はきつとカデイスへ行つとる、これに間違えは無え！（と彼はその熟考から推斷した）恥知らずの、極惡の、泥棒め、きつと昨夜の九時か十時にわしの南瓜を盜みやがつたに違え無え、そして南瓜と一緒に十二時の「荷船」に乘つて逃げやがつたな。ようし、そんなら、わしは今朝の「一時間船」でカデイスへ出かけてやらう。その小鼠めをひつ捕へて、わしが手塩にかけて育てたあの息女共を其奴から取り戻すことがわしに出來なかつたら不思議ちゆもんぢや！

斯らいひ乍ら、彼は實を捥ぎ取られた南瓜の蔓を愛撫してゐるかのやうに、或ひは無くなつた南瓜を計へてゐるかのやうに。或ひはまた、彼が起さうと考へてゐる或る訴訟の爲の一種の「證據書類」を作成してでもゐるかのやうに、なほ約二十分間も、その災害の場所に留つてゐた。が、遂に凡そ八時頃波止場へ向けて出發した。

「一時間船」、即ち毎朝正九時に客を乘せてカデイスに向つて出る見すぼらしい帆前船はもう出帆するばかりのところだつた。これと同樣、「荷船」の方は果物と野菜を積んで毎夜十二時に出ることになつてゐたのだ。

客船は俗に「一時間船」と呼ばれてゐる。その譯はこれだけの時間で——若し風が追手である日には時として四十分で——アルコス侯爵の昔の城下（譯者註、ロタのこと）からエルクレスの舊都（譯者註、カデイスのこと）との間の距離三レグアを橫切るからなのだ。

……………………

だから、あの日ブスカベアタス爺さんがカデイスの市場の或る青物店の前に足を止め、伴れて來た退屈顏の巡査に向つて次のやうに言つてゐたのは午前十時半のことだつた。

——旦那、此等は皆わつちの南瓜で御座えます！ ぢやから、その野郎を引つ捕へて下さえませ！

斯らいつて小賣商人を指してゐた。

——なに、わしを捕へる！（と小賣商人は驚きと怒りとに滿ちて答へた）戯談いふない、此の南瓜はわしのもんぢや、わしが買うたもんぢやぜ……

――そんな事ア、お前さん、市長さんに言うたらよからう！

――お前の言ふ事はどだえ無茶ぢや！

――何が無茶なもんか！

――何だ、此の泥棒め！

――何を、此の悪漢め！

――こら〳〵、行儀知らずども、人間はそんなに、お互に禮を失するやうなことがあつてはならん！君達はもつとおとなしく言葉をきかにやいかん！――と巡査は口論者の各々の胸を拳固で一つ突きながら、極く靜かな口調で言つた。

此の時にはもう可成りの人が駈けつけて來てゐた。間も無く、公設市場の警察を引き受けてゐる取締役――眞實の名前でいへば「食料品審査官」――もやつて來た。

今迄職權を振つてゐた巡査は司法權を上官殿にゆづつた。すると此の偉い官憲は出來事の一部始終を聞き取つてから威嚴のある口調で小賣商人に尋ねた

――君は一體此の南瓜を誰から買うたのぢや？

――ロタのフラ爺さんから買ひましたので、へえ……――と尋ねられた者は答へた。

――はゝあ、其奴に相違なえ……（とプスカペアタス爺さんが叫んだ）、やりさうなことぢやて、其奴の畑が瘦地で作物がろくすつぽ出來んもんぢやから、お隣りの畑に盗みに這入りやがるんぢや！

――ぢやが、昨夜南瓜四十個を盗まれたといふ君の言ひ分は假りに認めるにしてもぢや、（と取締役は年取つた菜園男の方へ向いて尋ね續けた）、此處にある此等こそ君が作つたものに相違なえといふことを何故に君が證明する？

――や、これは驚いた！（とプスカペアタス爺さんが答へた）、何故ちゆて、旦那、若し旦那にお孃さんがお有りなら、その一人一人をよく御存じでござんせう。丁度それと同じやうに、わつちは此奴等を一つ一つ見分けがつくんでござんす。此等はわつちが作つたに違え無えことがおわかりになりませんか？ぢや、御覽下さえ、これの名前はレポロンダと申します、これはカチゴルデタ、これはパリゴナ、これはコロラデイリヤ、それから、これはマヌエラちゆ名前でござんす、だつて、旦那、此奴はわつちの一番末の息女と瓜二つぢやつたんですものオ……

斯ういつて老人はさめ〴〵と泣き出した。

……よし、そりや皆よくわかつた……（と食料品審査官は答へた）、しかし法律上からいふとな、これは自分の南瓜ぢやと君が言ひ張つただけぢやまだ十分でなえんぢや。同時に、その物の先在に就いて官憲をして納得せしめ、且つまた、それと同一物であるといふことを君が證明するの必要があるんぢや。あゝ、諸君、何も笑ふ事は無え。……吾輩はこれでも法學士ぢやぞ！

――それぢや、今直ぐ、此の南瓜がわつちの畑で作られたに相違な

えことを此場を動かずに皆さんに證明して見せますぢや！――とブスカペアタス爺さんが言つたので居並ぶ連中は大いに驚いた。

さうして彼は手に持つてゐた包を地上に抛り出して、そこに蹲み、遂に足を折つてどつかと坐り込んだ。それから包んでゐた布の結び目を落ちつき拂つた態度で解き始めた。

例の取締役をしてゐる町會議員、小賣商人、及び急にぐるりに輪を作つた連中の驚きは極度に達した。

――此の男、一體、そこから何を取り出すんぢやらう？――と誰も彼も不審に思つてゐた。

丁度その時、別の新しい彌次馬があの人だかりの内に一體何事が起つたのかと見にやつて來た。すると例の小賣商人がいち早く彼を見つけて叫び出した。

――フラノ爺さん、好いところへ來て呉れんさつた。實は此の人がな、わしが昨夜あんたから買うた南瓜――今此處でお互の話を聞いとる此の南瓜はな、元來此の人のものなのを誰かに盗まれたと、斯う言ふんぢやがな……一つあんたから何とか返答して上げて呉れんさえ……

この新來者は蠟よりも黄色くなつた。そしてその場を立ち去らうとした。しかし居並ぶ連中がそれを妨げた。そして取締役自身も彼に止れと命じた。

ブスカペアタス爺さんはと見れば、彼は既に推定の泥棒と向き合つて言つてゐた。

――今に面白えものを見せてやるぜ！

フラノ爺さんは冷靜を取りかへした。そして言つた。

――お前こそよく考へて物を言へい、何故ちゆて、若しお前が證據の證明が出來なえなら、――また出來る筈も無えが、――わしはお前を讒言者として刑務所へぶち込んでやるからさう思へ。此の南瓜はわしの手から出たもんぢや、わしが今年になつてカディスへ持つて來た一切の南瓜と同樣、エヒドのわしの畑でわしが作つたもんぢや。さうで無ねちゆ證據は誰にも出せりやせまえが。

――まあ、待て、今に出して見せてやるから！――とブスカペアタス爺さんは繰り返し乍ら、布を解き終つてそれを引つ張つた。

その時、南瓜の蔓から捥ぎ取られた、汁を出してゐるまだ緑色をした蒂が幾片か地上に散らばつた。同時に此の年取つた百姓男は兩足の上に尻を据ゑたまゝ、笑ひながら町會議員と彌次馬連に向つて次の演說をしてゐた。

――皆さん、皆さんはいつか稅金を納めた事アありませんか？そして收入役が持つとるあの緑色の帳面な、そら、どれそれの受領證が贋物であるか、本物であるかを後で比べて見ることが出來るやうに、――臺紙は殘し、受領證だけちぎつて渡すあの帳面を見た事アありませんか？

――お前さんの言ふのは、「割符帳」ちゆもんぢや――と取締役が與

両目に数へてやつた。

――ぢや、わつちが此處へ持つて來とるんがそれでござんす。わつちの畑の「割符」……即ち、此の南瓜が盗まれる前にくつついてゐた蒂を此處へ持つて來ました。皆さん御覧下さえ、此の蒂は此の南瓜のでござんした……これ、この通り、誰も疑ふ事ア出來やしません。それから此の蒂はと……皆さんもう見とられますな……これ、この通り此の南瓜にくつついてゐたんで御座んす。此のもつと幅の廣え奴はあの南瓜のに相違ござんせん。……それ、この通り、ピッタリぢや。それから此奴は此の南瓜のですし、其奴は其處にあるその南瓜のもの、此奴はあれので御座んす……

斯ういひながら、彼は一つの蒂即ち軸を、南瓜が引きちぎられたとき殘した穴に嵌めて行つた。蒂のあのでこぼこした氣まぐれな端が、南瓜の傷痕とも呼んでよい白味を帯びた小さい凹みへぴつたりと合ふのを見て見物人は驚いてしまつた。

だから、居並ぶ人々は固よりのこと、巡査達や町會議員までが蹲み込んで、あの、珍妙な比較を試みてブスカペアタス爺さんの手傳ひをし始めた。そして皆は子供のやうに面白がりながら異口同音に言つた。

――や、これは！　これは！　疑ふ餘地も何も有りやせん！　諸君見給へ！　此の蒂は此處へ來るんぢや……そつちの奴は其處へ嵌まるんぢや……あれは此奴のぢやし、これはあの南瓜のぢや……

斯うして大人達の高笑ひは小供達の口笛と女達の呪詛とに合し、また年老ひた菜園男の勝利の歓喜の涙を誘つた。それと同時に、巡査達は既に己が罪を認めた泥棒を刑務所へつれて行かうといらだつて彼をこづき廻してゐた

巡査達は斯ういふ仕事には好んで從事したこと、フラノ爺さんは前に小賣商人から受け取つた十五ドゥロの金を彼に返し、小賣商人は直ちにそれをブスカペアタス爺さんに渡したこと、及び爺さんが頗る滿足の態でロタへ向けて出發したことは更めて言ふ迄もない。

唯だ一言いひ添へて置きたいのは、彼が大滿足のうちにも途々斯んなことを言ひながら歸つて行つたことである。

――わしの南瓜は市場で何ちゆ美しい顔をしとつたらうなア！　しまつたことをした！　今晩煮て食つてその種を取つとく爲めに、あのマヌエラだけは持つて歸るんぢやつたになア！

一八七七年十月作

西鶴について

正宗白鳥

（一）

ダンテと、最初に彼れの評傳を書いたボッカッチオとは、人となりが全然異つてゐた。その一人は嚴肅で脱俗的で、他の一人は輕快で享樂的であつた。しかも、ボッカッチオは、詩人ダンテの精神を深く理解し「フローレンスの他の凡ての罪惡が、萬能の目から見逃されるにしても、ダンテを追放したことだけ のために神の怒りを免れないだらう」と云つたほどで、筆によつてダンテを世に傳へたばかりでなく、フローレンス市民のためにダンテ講演を續演したのであつた。

ボッカッチオは、伊太利散文の父と云はれてゐる。その名作「十日物語」は、歐洲文壇に於ける浮世物語の元祖であるらしい。當時の伊太利人氣質がそこによく寫されてゐると、文學史家によつて折紙がつけられてゐる。優美閑雅なところも、天眞爛漫で、むしろ露骨に過ぎるやうなところも、北歐と異つた南歐の世相人情を現はしてゐて面白いと云はれてゐる。外國の古典は概して讀みづらいものであるが、この「十日物語」は今日の日本人でも可成りな興味と親しみを寄せて讀み得られるのである。同時代に、この物語の感化を受けて作られたと云はれる英國の詩人チヨーサーの「カンターベリー物語」が、學究以外の日本人には讀み得られないのとは、自ら作風が異つてゐるのだ。さればこそ、ボッカッチオの名は、早くから日本の文壇に傳へられた。森田思軒が、「國民之友」創刊當時（明治二十二三年頃）に、「十日物語中の一篇を譯さうとして果せなかつたので、その代りにこれを撰んだ」と、ある飜譯小説に附記してゐたのを、私は少年時代に讀んだことがある。尾崎紅葉の「鷹料理」「三箇條」「冷熱」などの、彼れの作中でも話の筋が氣が利いてゐて面白い短篇の幾つかは十日物語の飜案なのだ。上田敏氏は二十餘年前に私に向つて、「日本でも小説と云ふものばかりでなしに、物語と云ふ種類の面白いものが出るといゝ。西洋なら、ボッカッチオのデカメロンと云つたやうなものが」と話したことがあつた。

西鶴とボッカツチオとは、たびく比較されるやうになつた。島村抱月氏が、この東西の名高い物語作者を、簡單に比較したことを私は覺えてゐる。自然主義勃興當時、モウパッサンが盛んに擔ぎ上げられるとゝもに、西鶴は日本のモウパッサンとして推讃されるやうにつた。當時迄近松秋江氏は、「西鶴をボッカツチオなんかに比べるのは當を得てゐない。抱月氏の考へは古い」と、私に云つてゐたが、私自身も、さうだらうと漠然思つてゐた。ところが、去年の春頃であつたか偶然ある新聞を汽車の中で讀んだ時に、その文藝欄に於て、本間久雄氏が、西鶴をモウパッサンに比較する文壇の常套的見解を非難して、時代から云つても作風から云つても、西鶴はボッカツチオと並べて論ぜられるべきものだと說いてゐるのが、私の心に留まつた。一人の作家が他國の誰れに似てゐようと、似てゐまいと、どちらでもいゝ譯だが、文壇の思潮の推移はさういふ比較論によつても察せられるのである。

日本最大の小說作家井原西鶴も、明治初年に文壇に復活して以來、新人の新しい目によつていろくに鑑賞されるやうになつた。紅葉や一葉によつて、文章が眞似られて以來（たとへば、一葉が、××するいゝぞかしを頻用してゐるのも、西鶴の眞似らしい。それから、「白川橋より大津への屎桶籠に、乘つたりや勘六」といふやうな西鶴の語調を、「たけくらべ」などに於て得意らしく模倣してゐる）抱月氏の理窟つぽい心理的研究、花袋氏の人間味に富んだ研究、あるひは、秋江氏の直感的觀察など現はれて、西鶴が傑れた作家である所以が次第に明かにされるやうになつた。最近には、新進の日本文學研究者片岡良一氏が、纏つた「井原西鶴」の評傳を著してゐる。今までに斷片的に世に現はれた西鶴に關する史實や、彼れの著作に關する諸家の見解を綜合し整理し、且つ自己の忠實なる研究の結果を系統的に述べた一篇の好著述である。私はこれを通讀して得るところが尠くなかつた。片岡氏の引用してゐる明治以來の諸文士の西鶴觀のうちでは、田山花袋氏の所說が最も光彩を放つてゐるので、私は、氏が從來「文章世界」その他の雜誌にをりく發表してゐた斷片的西鶴論にはつねに注目してゐたのであつた。氏は先日も、「日本文學講座」（？）の雜錄欄に於て、西鶴に論及して、彼れはボッカツチオの比ではない。モウパッサンよりも傑れてゐると、無雜作に云つてゐたやうであつた。

西鶴と近松と芭蕉とを、日本文學史上の三尊として、私も早くから敬意を寄せて長い間仰見てゐたのであつたが、その實、西鶴の著作には、そんなに深く親しんではゐなかつた。今日の若い文學者とても、この日本最大の小說家として定評のある西鶴の作品をどれだけ熟讀してゐるであらうかと、私は疑つてゐる。紅葉の小說でさへ、現今の青年には、違つた世界の話を聞かされるやうで、あの洒落れた文章の妙味などまるで分らなくなつてゐると、先日ある人が私に話した。元祿の遊女生活の描寫の妙味など、なほ更味はへよう筈がない。

古典を讀んで、そこに現代の人間を見たり自己の影を見たりするの

は、藝術的興味は深い譯であるが、雑誌小說を讀んで樂むやうに手つ取早くは行かない。私は、近松物は少年時代から愛誦して、そこに溢つてゐる情緒と文章美とに心醉してゐたが、西鶴は讀みづらかつた。帝國文庫本によつて努力して素讀したゞけであつた。その後、露伴紅葉共編の「西鶴文粹」といふ抄錄本を得てからは、これだけは、二十年間にたび／＼熟讀した。そして、成程西鶴は讀めば讀むほど味ひの深いものだと感じるやうになつた。ことに、「置土産」と「萬の文反古」とを面白く思つてゐた。

（二）

ところが、去年の初夏、「日本古典全集」中の「好色一代男」が出版されたので、はじめてこの作家に接したやうな氣持で、首尾を通じて讀耽つた。日本無類の獨創的名文家であると感歎するとゝもに、惡洒落の、所謂「粹業者」見たいなところに、一種嫌惡の感じに打たれるのを免れなかつた。徳川末期の文學に對して不快を感ずる讀者は、日本の浮世草紙の元祖である西鶴の好色本に、後世の軟文學に通じてゐる惡洒落氣分の萌芽の存してゐるのを認めなければなるまい。現代の青年には紅葉の洒落が分らない、あの文體や創作態度が、いや味でキザに感ぜられるのは、時代の變遷として止むを得ないとすると、私などが西鶴の「好色本」に對してある種のいやみを感じるのも當然なのであらう。

私は、去年の暑さを輕井澤で避けてゐた間に、英譯のボッカッチオの「十日物語」を讀んだが、それは朗かな氣持のするものであつた。その戀愛物語には、セルヴンテスのドンキホーテ中の挿話にある戀愛奇譚を思出させるやうな優雅と素朴とをかねた風趣があつて、南歐美人の面影をも連想さゝれたが、男女の自儘な享樂振りが西鶴の好色本に似通つてゐるところが多いやうにも思はれた。文章には「一代男」ほどの含蓄がなくつて平淡な叙事に過ぎないやうに思はれたが、それは英譯で讀んだためなので、原文はどんな風韻を帶びてゐるのかも知れない。「一代男」は、性慾生活の描寫に於て深く入つてはゐるし、作風も獨創的であるが、「十日物語」も、物語の新體をはじめたほどあつて、なか／＼面白いのである。猛烈な病魔の襲來を山荘に避けた男女が、優美の微風に吹かれながら浮世話に耽つてゐる光景に比べると、西鶴の惡洒落の色話は、腐つた匂ひを嗅がされてゐるやうな感じがした。モウパッサンの「ベ、ラミー」などの性慾生活描寫には、惡洒落のかはりに近代的憂愁といつた感じが流れてゐて、しめやかに我々の胸に觸れるのである。

私は、續いて刊行された「古典全集」本によつて、「好色一代女」「俗つれ／＼」「胸算用」などを讀み、また有朋堂本によつて、「好色五人女」「西鶴織留」「萬の文反古」などを讀み、博文館本によつて、「二十不孝」や「置土産」をも讀んだ。多年斷片的に見てゐた西鶴の作品の重なものを、今度は略々一貫して讀通したので、自分は西鶴を卒業した氣にな

つてゐる。……兎に角、西鶴がえらい作者であることは、私も認めなければならなかつた。そして、最も感心したのは、やはり「置土產」であつた。この晩年の作品には、惡洒落がなかつた。いやみがなかつた。藝術と人生とが渾然として融和し、一種の宗敎と云つてもいゝやうな氣持が籠つてゐる。「十日物語」の作者がダンテの傳記を書いたのだから、「置土產」の作者にも、あるひは高僧傳が書けたかも知れない。

(三)

私は、かつて「色里三所所帶」と題する好色本を、ある知人の家で見て、ところ〲拔讀みしたことがあつた。これは西鶴の作として眞僞を疑はれるものであるが、私はこれを純然たる春本であると思つた。それから、この頃はじめて、「一代男」と「一代女」との完本を手にすることを得たので、古典全集その他の西鶴本には削除されてゐる所を捜して讀んで、「これだ〲。此處が西鶴の西鶴たる所以だ」と、今まで自分の迂濶であつたことを感じた。西鶴はかういふところを中心として物語を作つたので、自から「轉業書」と云つた所以である。さういふ閨房裡の手管については、彼れは人さま〲の描寫を試み、技巧を廢してゐる。それで、西鶴の浮世草子が、市井の讀者に歡迎されたのはかういふ點にあつたのに極つてゐる。當時世間に知られてゐた遊女などを寫實的に書込んだことが、無論讀者の興味を唆つたのに違ひないが、敍事が春本の域に達しなければ、當時の讀者は滿足し得なかつたに違ひない。「古典全集」本に收錄された挿繪などはさすがに簡素で、後世の浮世繪ほどの肉臭をも宿してゐないのか、原作と不調和で、むしろ不思議なくらゐだ。

西洋の昔の肉感小說については、私は何等知るところがないが、支那の小說は隨分際どい敍述に富んでゐる。私は昔唐本の「金瓶梅」を見たことがあつたが、その挿繪は春本仕立てゞあつた。

小說と名づけられる種類の文學は、人生世相の眞實を描かなければならないとすると、性慾生活を寫すには、閨房裡の消息を傳へなければ徹底を缺く譯である。食通がいろ〱の料理を鑑賞する如く、性慾專門家の世之助は、いろ〱に性慾を鑑賞したのである。「くらべ物無き富士の雪も是れはとながめたばかりなり、吉野の花も夜までは見られず、姨捨山の月も世間に變つて毛が生へてもなし。是れを思ふに、人間遊山の上盛りは色里に増すことなし」(一代男)といふやうな、遊廓讚美の作者の感想は隨所に挿まれてゐるが、日本古來の風流の目標とされて、芭蕉の如きはそれに同化することを自己修養の極致としてゐた雪月花も、西鶴によつては、たゞ性慾に味ひを加へる香料とされてゐた。「しばらくして扇に心を附け、この袖笠の公家は、佐野の渡りの雪の夕暮で御座んすかなどゝ問ふより……」(一代女)雪の夕暮から「袖打拂ふ雪の肌に」と、痴話が轉じて國家禁制の描寫となるのである。芭蕉などの見地から見ると、西鶴の好色本は、雪月花の神聖を冒瀆してゐるのだ。

風流を香料とした「人間遊山の上盛り」である色里の樂しみを寫した彼れは、また「ある時吉野の奧山を見しに、其處には花さへ無くて殿の峰入より外に哀れ知る人影も見えざりき。遙かなる岫傳ひに一つの庵片庇に結びて、晝は杉の嵐、夜は割松の光見るより、何の樂しみも無かりしに、廣き世界なるに、都には住まで、かゝる所にはと尋ねしに、野夫打笑ひて、淋しきも噂を便りに忘るゝにと語る。」(一代女)を聞いて、「さもあるべき、捨て難く止め難きは此道ぞかし」と評語を下してゐる。芭蕉なら、山奧の庵の淋しい夫婦住ひを見てからは觀じなかつたであらう。今の文學者でも、から單純には批判を下さなかつたであらう。西鶴は、島原や新町での豪奢な大盡遊びに、性慾の樂しみを見たのみならず、賤が伏屋にも、性慾を生活の根本として見たのである。「賤の長明が孔子臭き身の取置きも、門前の童にいつとなく戲れて、方丈の油火消されて、心は闇になれることもありしとなん」(一代男)と、方丈記を讀んでも、そこまでいやらしい考へを及ぼさなければ止まなかつたのである。人間を研究したら、究極はそこへ落ちるのかも知れないのだが、色と慾との奴隷になつて生きて死ぬるのを人間といふ生物の眞相とすることに、無限の淋しさを覺え、さういふものを離脫したら、あとに何者も殘らないのだらうかといふやうなことに惱みを感じてゐる我々は、性慾謳歌に安んじて笑つてゐる「浮世草紙」の書振りには、屢々不滿を感じさゝれる。西鶴が筆を執りながらエヘラ／＼と笑つてゐるのが、私にはいやみに思はれる。

「一代女」の最後の一章「皆思謂の五百羅漢」には、近代の文藝鑑賞家の喜びさうな意味深長な筆致が見られる。色に疲れた一代女が五百羅漢を見渡しながらの回顧の感には、しみ／＼と讀者の心を動かすところがあるが、彼女が「此時身の一大事を覺えて」池に入水せんとするのは、作者が人生をから觀じた上で、作中の人物をから動かしたのではなくつて、當時の常套的佛教思想によつて趣向を立てたのに過ぎないやうに思はれる。色則是空は、地口同樣にあつかはれるくらゐに常套になつてゐたので、いろ／＼な作り物語に取入れられてゐたのである。西鶴が一代女の生涯を描きながら色則是空を痛感したとは思はれない。「死は時節にまかせ、今までの虛僞本心に歸つて、佛の道に入れと勸め、殊勝に思ひ込み」と、文章が續けられてゐるのは、いかにも常套的である。西鶴にも似合はぬことである。彼れは、「一代女」の色慾生活を、面白可笑く興じて書きこそすれ、苦々しく思ひながら書いたのではない。現代の批評家の口調で云へば、彼れは人生の眞實を描いたのではなかつたか。「人間は色と慾で動く生物」であると、眞相を見詰めたのが西鶴であるとすると、一代女の今までの生涯は虛僞である筈はない。今までの生涯が本心でなかつた筈はない。「五人女」の主人公が、「こちやこれがすきにて身に替えての脇心。女道はかつてしろしめさるまじと云ふかと思へば、いやりの御合點。文珠樣は衆道ばかりな夢覺めて、橋立の松の風吹けば、塵の世ぢや物と、なほ／＼やむ事のなかりし」と云ふのが、作者の眞の女人觀でなければならない。「一

代女」の悟りらしい言葉は、色に疲れた老女の妄想として、西鶴はむしろ冷笑をもつて取扱つていゝ譯なのだ。「憂欝なる牡牛」であつたモウパツサンと、元祿の享樂兒西鶴とは自ら面目を異にしてゐなければならない。

今、德川時代文學研究の大家藤村作氏の「上方文學と江戸文學」を披いて見ると、西鶴が下戸であつたことが證明されてゐる。「井原入道西鶴は風流の翁にて、机の菊醉を遁し、釣舟に四季のものを咲かせ、哥行引曲をさとりて、俳諧の通達ある事浦山の賤の子も乳房を離してこれを訪ふ。下戸なれば飲酒の苦をのがれて、美食を貯へて人に喰はせて樂しむ。おもへば一代男。——幾秋を生て居やらば下手であろ。——湖梅」（西鶴十三回忌追善句集「心葉」より）といふ、門人の追善の句と詞書とは、西鶴の人となりを研究する上に、有力な資料の一つである。

「此道の作者西鶴といふ男出生して、春は花の朝、秋の月の夜毎に伊丹諸白を引かけ、二人機嫌の醉興のあまり、寄太鼓をたゝき、戀の湊を引舟に乘つて色道のよしあしを悉くおしはかり」といふ「元祿太平記」の記事と相照らして見て、私は思當るところがあつた。

「西鶴は近松に比してづつと野暮な男、女にもてなかつた男であつた」らしく、田中花袋氏は評してゐるし、藤村作氏は、元祿太平記の所説を「成心あつての誹謗的記事」とし、むしろ門人の所說を受入れるのが穩當であるとして、彼れを下戸として扱つてゐる。そして、彼れは、「酒と色との歡樂の世界に……立交つて、常に素面の醉はない眼を光らせて、周圍の人と事とを冷靜に觀察し、そこに漂ふ甘美な歡樂の氣分を味つてゐたであらう」と想像してゐる。

十返舍一九は案外無口な生眞面目な男であつたと云はれてゐるが、あの好色本の作者も、あるひは、「野暮な男で、しかも酒も飲めなかつた」のかも知れない。

しかし、「元祿太平記」の記事に、西鶴誹謗の意味を認めるのは、他の作家や他の世人に對してなら兎に角、あの幾つかの好色本の作者に對してだけは、可笑しく思はれる。「太平記」の記者は、あるひは誹謗せんためにあゝ書いたのかも知れないし、門人はさういつた世評に對し亡師を辯護せんためにあゝ書いたのかも知れないが、若しさうだとすると、どちらもが、西鶴を知らない凡俗の見解を持つてゐたことになるのである。西鶴の「浮世草紙」は、痴男痴女を戒めるため、あるひは諷刺するために書かれたのではない。むしろさういふ世相を謳歌してゐるのだ。前に引用した二代男の一節にある如く、富士の雪よりも吉野の花よりも、姨捨山の月よりも、人間遊山の上盛りは色里にますことなしと斷じてゐる彼れではないか。人生の極致を色の樂しみに於て見てゐる彼れではないか。釣舟に四季のものを咲かせたり美食を貯へたりするのは、價値の薄い些末な樂しみだつたのだ。伊丹諸白を引かけ、寄太鼓を叩いて、色の湊に突進するこそ、彼れの人生觀から見て、生甲斐のある次第で、それをもつて誇つていゝ譯であつたのだ。

(四)

去年の初夏の頃、「一代男」を讀みながら、妙所々々にしるしをつけたが、ことに面白かつたのは、卷の四、信州追分遊女のあたりであつた。「形見の水櫛」「女郎に爪商の事」「夢の太刀風」など、味はひの深い短篇であつた。百姓二人が「美しい女の土葬を掘返し、黑髮爪を拔つ」のを、何のためかと聞くと、「上方の傾城町へ每年賣りに行く……女郎の心中に髮を切り爪を放ち、先へ遣らせらるゝに、本のは手管の男に遣はし、外の大臣へ五人も七人も、貴樣ゆゑに切ると、文などに包込みて送れば、もとより人に隱すことなれば、守袋などに入れて深く忝ながること可笑しや。兎角目の前にて切らせたまへ」と云ふ。「今まで知らぬことなり、さもあるべしと死人を見れば、わが尋ぬる女」であつたことなど、モウパツサンなどの喜んで取扱ひさうな材料である。かういふ遊蕩生活の裏面、遊女の內幕について、作者の目がもつと光つてゐさうに豫想してゐたのに、案外さういふところは少かつた。遊女の遣繰りの苦しさなど、經濟上のことも「二代男」には可成り出てゐないではないが、痛切な人間味を感ぜられるやうなところは少い。「惣じて男、座敷では口賢く粹のやうに見えて、床には散々取亂し、大方は震ふなり。物に馴れたる奴は、一座はさも無くて、床の所作しとやかに、格別なるものなり。皆目の野暮太郎は、醉うて振らず……」(二代男)と、遊女買ひの態度を敎へて、その實例をところどころに書いてゐるのは、源氏物語の雨夜の品定めに持出された女の標本をいろいろに書いたのと似てゐる。

女の嫉妬と執念は、いかなる時代の作品にも取扱はれてゐて、情的生活を寫す上は、その嫉妬と執念をいかに表現するかゞ、作家の技倆の見せ場であつて、曲亭馬琴の如き道學先生も、そこになかなかに力を入れてゐたのであるが、西鶴も讀者を面白がらせるのを主とした享樂生活の描寫の間にも、流石にそれを忘れないで心を注いでゐる。全體女の嫉妬と執念とは、最も世の中を暗くするもので、浮世の享樂生活者にもそれが神秘な凄味をもつて感ぜられることがあるらしい。それで、西鶴はその嫉妬執念を現はすために、神秘的象徵的手法を用ひてゐる。寫實に妙を得てゐる彼れも、女性の嫉妬執念だけは手におへなかつたのであらう。「心中箱」(一代男)「七墓參詣に逢へば昔の」(二代男)「反古尋ねて思ひの中宿」(二代男)など、その例はいくつもあるが、そのうちで最も傑れて、表現に才氣のほと走つてゐるのは、「夢の太刀風」である。世之助は最上の寒河江に衆道の舊知を尋ねて、貧しい宿に、合せ砥を枕にして眠つてゐるところへ、いろいろな馴染の女が異樣な形して現はれて、世之助に喰ひつくのを、枕脇差で刺殺して、自分も氣絶したが、生氣に返つて見ると、そこらは血だらけで、起請誓紙が散々に斫破られてゐた。……(西鶴は必しも女にもてなかつた野暮な男でもなかつたらしい)「一代女」は、西鶴の好色本中、最も結構の整つたもので、情趣に富み、感傷的な筆使ひさへ見られるのである。

紅葉山人はこの小説の趣向を極めて拙く摸倣して處女作「色懺悔」を著し、續いて「伽羅枕」「三人妻」の如き名作を出し得るやうになつたのである。日本の文壇でも自國の古典の研究が盛んになつて、西鶴によつて啓發される作家が將來出現するかも知れないが、もはや、あの文體がそのまゝに摸倣されることはあるまい。西鶴の文章の摸倣者は、紅葉や一葉などをもつて打留めとしていゝのであらう。「伽羅枕」は「一代女」をお手本としての習作であるが、兎に角、二十餘歳の若年で、このくらゐのものを書上げたことによつて、紅葉の文才の凡庸でなかつたことは分るのである。無論「伽羅枕」は彩色を施した造り花であり、「一代女」は生きた草花のやうな感じがするが、しかし、西鶴もこの作品に於ては最も技巧を弄してゐる。多分、作者自身最も創作に油の乘つた時のもので、自分でも得意になつてゐたのであらうが、自由奔放で、この女主人公は女裝した西鶴であるやうな感銘を受けた。「物越衣裳つき」から、顏形、足の「親指反つて裏透き」てゐるところまで、微細に鋭利に觀察を施し、元祿盛時の女人風俗史の資料としても最も重んぜられるべきものであるが、私には、この小説が、他の批評家の云つてゐるほどに女性の眞相を描いてゐるやうには思はれない。「一代女」は多情な女であつたが、低能ではなかつた。浮世の波に漂つて淪落の巷にさ迷ふやうにもなつた女ではあるが、眞の戀らしいものが、何處にも出てゐないのが不思議である。元祿期の男女といふと特別あつかひするやうなのが、明治批評家の常套になつてゐるが、私は首肯し得られないのだ。「古代は緣付の首途には親里の別れを惜しみ、泪を袖に浸しけるに、今時の娘さかしく成りて、仲人をもどかしく、身拵へ取急ぎ、駕籠待ちかね、尻輕に乘り移りて、悦喜鼻の先」に現はれると、西鶴の女裝した一代女が、當時の世相に對して皮肉を云つてゐるが、そこに多少の時勢の變遷はあるにしても、「松にからまる蔦かづら」である舊日本の女性の本性が元祿時代だけは沒却されてゐた譯がない。「世間寺大黑」の一章に、「灰寄せの曉も別れと思へば、悲しも遲たてき。羽白小袖の坊主臭きも身に添ふ移り香の親しくも成りぬ。末々は淋しさ忘れて、最前は耳騷ぎし鉦鐃鈸の音も聞き馴れて慰む態と成れり。人燒く烟も鼻に入らず。無常の重なるほどお寺の仕合せを嬉しく……」と、境遇に安住するのは女らしいが、さういふ性質をもつてゐる女が、一人の男子を愛着して安住しようとするところがないのは不思議である。「我れ色里に勤めし時、數多の客にも馴れて悪からず、此人に逢ふ時は更に身を遊女とは思はず」(諸艶大鑑)と眞心のきらめきはありながら、一人の男から他の男へ移つてゐるの心には何の跟跡も留めず、別の女が前の女のやうに、たゞ色慾の遊戲をしてゐるに過ぎないのだ。

私は思ふ。西鶴は、ある一人の女の一生を如實に書かうとしたのではなくつて、境遇の變化の筋立てだけは順序を追つて、その一章々々には、自己の見聞から得來つたいろ〳〵な女の行動を當嵌めたのではあるまいか。……そして、この一代女に假裝してゐる女が、相手の男

の行動を見てゐる目は、どうしても西鶴自身の目である。女自身かどうしてあゝ冷靜に男を見てゐられようかと、私は疑つてゐる。

とに角、「一代女」は、文章が絢爛で筋立ても面白い。しかし、西鶴の作中女子を描きて妙を盡してゐるのは、「五人女」であらう。ことに、現代の讀者には、島原や新町の遊里の女子、「高橋」「三笠」などよりも、町家の子女、お夏、おさん、おせん、お七などの方に一層多く現實的の親みが感ぜられるのだ。昔の遊里生活に附纏つてゐる惡洒落いやみと云つたやうなものゝないためか、私には好色本中、「五人女」が最も快く讀まれる。

私は年少の頃、近松の「歌念佛」を愛唱した。最近「五人女」の「淸十郎物語」を讀んで、この作者が「歌念佛」の作者よりも傑れてゐるといふ批評に、たやすく同感しかねるほどに、昔の懷しい記憶が殘つてゐる。「小舟つくりてお夏を乘せて花の淸十郎に艪を押さしよ」と云つた調子の、近松の甘美な唄は、今なほ、日本の藝術のうちの棄て難いものゝ一つとしてゐる。歐洲の詩歌は、言語の關係で、とても充分に味はひ得られないとすると、自國に傳つてゐる優れたる詩歌の美には、たとへ時代にそぐはないところがあるにしても、私は棄て難い愛着を覺えてゐる。よくも惡しくも、日本の文字をもつて近松以上の唄を唄つた作家が他に有るであらうか。

しかし、おさんを取扱つた二人の作物はとても比較にならない。近松の膚淺な理想主義は、色道讃美の西鶴の半分ほども、おさんの心身を活躍させ得なかつた。

（五）

私は作者が縱横に才筆を揮つた所謂「轉合書」である「好色本」を棄て、絢爛の極平淡に達した晩年の名著「置土產」を讀むに及んで、この作者に對して、はじめて帽を脱がうとする氣持がした。

西鶴が「一代男」を出してから、遺稿の「置土產」が門人によつて公にされるまで、僅か十年ほどの歳月が經過してゐるだけである。彼れはその間に、好色本の外に、「武道傳來記」や「武家義理物語」のやうな武家物を書き、「懷硯」や「新可笑記」のやうな隨筆雜話集をも著はし、「日本永代藏」や「世間胸算用」のやうな町人物をも出してゐる。かういふ風に內容に變化のある作品を著した文豪は、後世の文學研究者批評家に取つては、甚だ都合のいゝ研究題目となるのである。馬琴のやうな作家では、二十年前の作品でも三十年後の作品でも、作風にさしたる變化がないので、馬琴論を草する評家は、自家の批評眼を發揮するのに不便である。近松でもさうだ。彼れの人生觀の變化とか思想の一轉機とか、區分けして、評家の意見を立てるのに不便である。

その點で、外國の偉い作家のうちでは、シェークスピアなどは、最も評論家の據つて立つに便利な作家なのである。處女作から最後の「あらし」まで、順序を立てゝ作者の心的狀態を跡づけようとすればなし得られるやうに出來てゐる。……しかし、作家――殊に昔の作家――

か、一から二といふやうに、創作上の階段を經て、僅か三年か五年の間に、人生觀の變化や、思想の轉換を試みつゝ進むものであらうか。私は疑つてゐる。ブランデスの巧妙なる沙翁論に、私は無條件に贊同するのを躊躇してゐる。

そのブランデスの沙翁論には、沙翁の厭世觀が一作ごとに濃厚になつて、「リア王」に至つて、つひにどん詰りに達したと說いてゐる。近代歐洲の批評家の巨頭である彼れブランデスは、犀を燃して、古今を絕した戯曲とされてゐる「リア王」を硏鑽して、"World Catastrophe"の悲劇だと大袈裟に斷定を下してゐる。「リア王」が果して世界終局の悲劇であつて、人生のどん詰りがそこに現はれてゐるか否かは兎に角、彼れの口吻を借りてわが西鶴を批評すると、「置土產」に至つて、色慾生活のどん詰り、すなはち、人生のどん詰りに達したのである。「置土產」は西鶴の世界に於ては、やはり、"World Catastrophe"の淋しい物語なのである。一つは金ピカの時代物であり、一つは袢纏着の世話物であるといふ外形的相違はあるにしても、どん詰りの氣持は同じ譯である。そして、沙翁は、このどん詰りの心境から步を轉じて、最後の「あらし」に於ける如き、寬仁大度の境地に心を安んじるやうになつたのだが、西鶴は、「置土產」に於て、どん詰りそのまゝで、そのどん詰りのうちに自から安立してゐる心境を見せてゐる。私が帽を脫がうとするのは、作者のこの態度である。

「人には棒振蟲同前に思はれ」の一篇を、私は昔から好んでゐる。淋しいながら沈返つた境地が思浮べられる。「置土產」中の絕章である。「大名の若子樣のお慰みに」買はれて行くやうな高價な金魚を飼つてゐる金魚屋、その金魚の餌になる棒振蟲を、一日がゝりで取集めて賣りに行つて、錢二十五文に賣つて、「明日また持つて參るべし」と、下男どもにお世辭を云つて歸る男。その男が昔は贅を盡した大臣の某であつたことを見つけた昔友達。昔友達の同情を斥けて、「女郎買の行末かくなれる習ひなれば、さのみ恥しきことにもあらず、いかな〳〵おの〳〵の御合力は受けまじ」と云つて、これきりの二十五文を惜氣もなく投出して、舊友に一盃の茶碗酒を振舞ふその男。「蘆垣に秋を過ぎたる朝顏の、末葉もかれ〴〵になりける蔓を搜して、その實を一つ一つ取つて、又來年の詠めを娯つてゐる」露の命の人の世を知らぬ顏なる七十あまりの婆さん。「窓より親の面影を見て、父樣の錢持つてもどらしやつた」と叫ぶ子供。同道して來た昔友達の一人を目賢く見つけて、「お三人の中にも伊豆屋利兵衞さまこれへ入らせ給ふまじ」と、勤めの身であつた昔、只一度假なる枕物語をした男には會ふまいとした女房。かういふ人々の面目が、短かい一章の間に、簡潔に暗示的に描かれてゐる。私は、在學時代に島村抱月氏主宰の下に催された文學合評會に加はつてゐたことがあつたが、その時「西鶴」が課題になつたので、問題が六ケしくつて批評の言葉に窮して、「隻幅の中に萬丈の波瀾を藏す」と云つたやうな妙な評語を用ひて誤魔化したことを、今思出した。「置土產」のこの一篇には、しかし、その幼稚な評語が當らな

いことはない。
かの昔友達は、舊知の零落を憐んで、一口いくらの救助金を出合つて、かの家へ持たせ遣はしたが、はやかの男は在郷へ立退いて、家は空家となつてゐた。「色々穿鑿すれど、其行方知れず」三人の昔友達はこれを歎き、「おもへば女郎狂ひもまよひの種」と云合せてやめた。「世は定めなし。異なことがさはりとなりて、其頃の薄雲、若山、一學、三人の女郎の大分損といひ終りぬ」（をはり）

「人には棒振蟲同前に思はれ」と云ふのは、西鶴自身が、人間をさう思つてゐたのかも知れない。この棒振蟲賣りが、「明日また持つてまゐるべし」と云ふのは、彼れが明日の日に大した希望を寄せてゐないことが知られる。それでも、彼れは、「さのみ恥しきことにもあらず」と云つて、陋巷の窮生活に安んじてゐるところがある。そして、友達の憐憫をうるさがつて山野に身を隱したのも面白い。

西鶴は、色慾世界のはじめから終りまでを見盡したのであつた。そして、人生はかういふものと見定めて、そこに安んじて、無用な焦慮煩悶反抗激怒を心に起してゐない。陋巷に道を守る古聖賢の如く、あるひは芭蕉の如く、悟道の域に達したと云つてもいゝだらう。

「あたご颪の袖さむし」の一篇も、なか〳〵味ひが深い。昔全盛を極めた大臣が、零落して世を隱れた貧しい生活を立てゝゐながら、ある日愛宕參詣を思立ちて出掛けた途中、ふとした出來心から、吝な遊びを企て、「物まゐりの精進をうち破りて、木綿寢道具にわびながら、太夫に逢ふ心地して、又下向にもたはぶれ、御初穗の殘りをありぎりに取らせ、山崎よりの舟賃なくて、ひろひ草鞋の歩行路。中食無しに歸つた。

「棒振蟲」の友達は、舊友の末路を見て、世の無常を感じて、女郎狂ひを思留まり、「あたご颪」の隱居は、神詣での途中、遊女屋の壁のこぼれから内を覗いたり、場末の宿が色町めいてゐるのを感じたりしたのが緣となつて、昔の夢を追ふやうになつた。「これほど懲りた身でもやまぬものは好色」と、隱居はわれとわが身を笑つてゐるらしいが、作者も、この「棒振蟲」の隱居に對して微笑をおくつてゐる。

西鶴は、春本見たいな浮世草紙を書いて賣出さうと企てゝ以來、人間を色慾によつて躍動してゐる「棒振蟲」見たいに觀じて人生を寫して來た。色戀の世相がさま〴〵に描かれてゐても、眞に美しく可憐な詩となつてゐる戀物語は、「八百屋物語」一篇だけだと云つてゐる。女や戀を詩化し美化して、「永遠の女性」といつたやうなものを求めてゐる「神曲」や「フアウスト」に比べて、わが古典の「一代男」や「一代女」は、一見甚だ見窄らしく見えるのである。迷妄を脱して見たら、つまりは人生の眞相は西鶴の見たとほりなのであらうと、私は思ひながらなほ飽足らない思ひのされるのを如何ともし難い。

それで、私は、この「わけ知りの聖」に、東西文人中の一聖者として帽を脱しながら、その後に追隨する氣にはなれない。……森鷗外はかつて、「妄想」？と題した感想文のうちに、自分は人生の途上、いろ

いろな傑れた文人や哲人に出會ふと、立留つて脫帽して敬意を表することはあるが、後から隨いて行かうとは思はないと云つてゐた。私も同感である。

（六）

「金を單に金として、物質として見てゐる間はまだ理解が淺い。金は靈物である。生命であり力である」と、田山花袋氏は斷定して、金を色と同じく人間の本能として取扱つた西鶴を極度に推賞してゐる。西鶴に對する氏の見解は凡庸でない、學究的でない。昔はたゞ渡世の便利のために運用されてゐた金も、次第に人間の本能となつて働くやうになつた。「死よりも強い」のは、色慾ばかりではない。現代は金が「死よりも強く」なつた。それであるのに、金が魔神として現代の人間を征服してゐるのに關はらず、今日の文學は、金についてあまり書かれてゐない。貧乏については書かれてゐる、富者の專横については書かれてゐる。しかし金その物については殆んど書かれてゐない。今日の所謂私小說といふものゝうちでも、色慾の本能の跋扈については、西鶴の域に迫るくらゐに立入つて書かれてゐることがあつても、金については、書きつ振りがみんなお上品である。人心に喰入つてゐる金錢本能の露出が見られない。……さういふことを考へると、西鶴が數百年の昔に、金と人との關係をあれほどに書いたのは、色慾をあの如く取扱つたにも勝つて、人の心を見透す目が鋭烈であつたことの證左となるのだ。同じ時代に大阪に生れながら、詩人近松は、西鶴に比べると、金についてまるで書いてゐないやうなものだ。

「本朝二十不孝」の「今の都も世は借物」だの、「親子五人仍書置如件」だのは、新聞なら特別大見出しで掲げらるべき雜報であるが、さういふものよりも、日常平凡な浮世話を集めた「胸算用」に於て、人の心に喰入つた金の力金の執念の深さを見せてゐる。「鼠の文づかひ」や「亭主の入替」をはじめ、一つとして屑がない。

それから、「萬の文反古」は、昔から私の愛讀してゐる書翰集である。「武道傳來記」や「男色大鑑」も、西鶴研究者の見のがすべからざるものであるが、私は好まない。

西鶴が作者として名を成したのは好色本によるのである。長い間惡名を背負はされたのも好色本のためなのである。「胸算用」などが後世に傳つて今なほ重きを置いて讀まれるのも、背景に好色本があるからである。しかし、私は思ふ。好色本なら西鶴以外にも書き得る人が、あるひはあつたかも知れないが、「胸算用」を書く作者は滅多にあるものではない。……少くも現代の文學意識のある作家は、理想主義や詩的空想を脫却して、金その者を、それがある如くに書くことは出來まい。……あるひは、文學者はそんな者を書かないのが本當なのかも知れない。

色を描いて閨房の敍述にまで筆を運ばせなければ滿足しなかつた西鶴は、人間が自分で氣づかない、あるひは氣づいても隱して置きたい

心裡の金の力を暴露剔抉した。文學上の外道に立つた魔才と評すべきものかも知れない。阿彌陀西鶴といふ評語をさういふ意味で解していゝのかも知れない。……その冷徹無慘な態度は、馬の物云ふ國を書いたスキフトに似通つてゐるのであらう。輕快なボッカッチオや憂鬱なるモウパッサンとは根本的に似てゐる所はない筈だ。

私は數年前、大阪の寺町を捜して、ある寺の境内で、粗野な石に無雜作に刻まれた「仙皓西鶴」といふ四大文字を見て、感慨に耽つたことがある。(昭和二年三月二十四日)

文藝的な、餘りに文藝的な

芥川龍之介

一　正宗白鳥氏の「ダンテ」

正宗白鳥氏のダンテ論は前人のダンテ論を壓倒してゐる。少くとも獨特な點ではクロオチェのダンテ論にも劣らないかも知れない。僕はあの議論を愛讀した。正宗氏はダンテの「美しさ」には殆ど目をつぶつてゐる。それは或は故意にしたのであらう。或は又自然にしたのかも知れない。故上田敏博士もダンテの研究家の一人だつた。しかも神曲を飜譯しようとしてゐた。が、博士の遺稿を見れば、イタリア語の原文によつたものではない。あの書き入れの示すやうにケエリイの英吉利譯によつたのである。ケエリイの英吉利譯によりながら、ダンテの「美しさ」を云々するのは或は滑稽に墮ちるのであらう。（僕も亦ケエリイの外は讀んだことはない。）しかしダンテの「美しさ」はたとひケエリイの英吉利譯だけ讀んでも、幾分か感ぜられるのは確かである。

……

それから又神曲は一面には晩年のダンテの自己辯護である。公金費消か何かの嫌疑を受けたダンテはやはり僕等自身のやうに自己辯護を必要としたのに違ひない。しかしダンテの達した天國は僕には多少退屈である。それは僕等は事實上地獄を歩いてゐる爲であらうか？　或は又ダンテも淨罪界の外に登ることの出來なかつた爲であらうか？……

……

僕等は皆超人ではない。あの逞しいロダンさへ名高いバルザックの像を作り、世間の惡評を受けた時には神經的に苦しんだのである。故郷を追はれたダンテも亦神經的に苦しんだに違ひない。殊に死後には幽靈になり、彼の息子に現れたと云ふことは幾分かダンテの體質を――彼の息子に遺傳したダンテの體質を示してゐるであらう。ダンは實際ストリンドベリイのやうに地獄の底から脱け出して來た。現に神曲の淨罪界は病後の歡びに近いものを持つてゐる。……

しかしそれ等はダンテの皮下一寸に及ばないことばかりであらう。

正宗氏はあの論文の中にダンテの骨肉を味はつてゐる。あの論文の中にあるのは十三世紀でもなければ伊太利でもない。唯僕等のゐる娑婆界である。平和を、唯平和を、——これはダンテの願ひだつたばかりではない。同時に又ストリンドベリイの願ひだつた。僕は正宗氏のダンテを仰がずにダンテを見たことを愛してゐる。ベアトリチエは正宗氏の言ふやうに女人よりもはるかに天人に近い。若しダンテを讀んだ後、目のあたりにベアトリチエに會つたとしたならば、僕等は必ず失望するであらう。

僕はこの文章を書いてゐるうちにふとゲエテのことを思ひ出した。ゲエテの描いたフリイデリケは殆んど可憐そのものである。が、ボンの大學教授ネエケはフリイデリケの必しもさう云ふ女人でないことを發表した。Düntzer 等の理想主義者たちは勿論この事實を信じてゐない。しかしゲエテ自身もネエケの言葉の僞りでないことを認めてゐる。のみならずフリイデリケの住んでゐた Sesenheim の村も亦ゲエテの描いたのとは違つてゐたらしい。Tieck はわざわざこの村を訪ね、「後悔した」とさへ語つてゐる。ベアトリチエも亦同じことであらう。けれどもかう云ふベアトリチエはベアトリチエ自身を示さないにもせよ、ダンテ自身を示してゐる。ダンテは晩年に至つても、所謂「永遠の女性」を夢みてゐた。しかし所謂「永遠の女性」は天國の外には住んでゐない。のみならずその天國は「しないことの後悔」に充ち滿ちてゐる。丁度地獄は炎の中に「したことの後悔」を廣げてゐるやうに。

僕はダンテ論を讀んでゐるうちに鐵假面の下にある正宗氏の双眼の色を感じた。古人は「君看双眼色　不語似無愁」と言つた。やはり正宗氏の双眼の色も、——しかし僕は恐れてゐる。正宗氏は或はこの双眼も義眼であると言ふかも知れない。

二　近松門左衞門

僕は谷崎潤一郎、佐藤春夫の兩氏と一しよに久しぶりに人形芝居を見物した。人形は役者よりも美しい。殊に動かずにゐる時は綺麗である。が、人形を使つてゐる黑ん坊と云ふものは薄氣味惡い。現にゴヤは人物の後に度たびああ云ふものをつけ加へた。僕等も或はああ云ふものに、——無氣味な運命に操られてゐるのであらう。……

けれども僕の言ひたいのは人形よりも近松門左衞門である。僕は小春治兵衞を見てゐるうちに今更のやうに近松を考へ出した。近松は寫實主義者西鶴に對し、理想主義者の名を博してゐる。僕は近松の人生觀を知らない。近松は或は天を仰いで僕等の小を歎いてゐたであらう。或は又天氣模樣を考へては明日の入りを氣使つてゐたであらう。——しかしそれは今日では誰も知らないことは確かである。唯近松の淨瑠璃を見れば、近松は決して理想主義者ではない。理想主義者では——理想主義者とは一體何であらう？　西鶴は文藝上の寫實主義者である。同時に又人生觀上の現實主義者である。（少くとも作品によれば）しか

し文藝上の寫實主義者は必ずしも人生觀上の現實主義者ではない。いや、「マダム・ボヴァリイ」を書いた作家は文藝上にも又ロマン主義者だつた。若し夢を求めることをロマン主義と呼ぶとすれば、近松も亦ロマン主義者であらう。しかし又一面にはやはり逞しい寫實主義者である。「小春治兵衛」の河内屋から雁次郎の姿を抹殺せよ。（この爲には文樂を見ることである。）そのあとに殘るものは何でもない、人生の隅々へ目の屆いた寫實主義的戲曲である。成程そこには元祿時代の抒情詩もまじつてゐるのに違ひない。が、この抒情詩を持つてゐるものをロマン主義者と呼ぶとすれば、——ド・リイル・ラダンの言葉に僞りはない。僕等は阿呆でないとすれば、いづれもロマン主義者になる訣である。

元祿時代の戲曲的手法は今日よりも多少自然ではない。しかし元祿時代以後の戲曲的手法よりもはるかに小細工を用ひないものである。から云ふ手法に煩はされないとすれば、「小春治兵衛」は心理描寫の上には決して寫實主義を離れてゐない。近松は彼等の官能主義やイゴイズムにも目を注いでゐる。いや、彼等の中にある何か不思議なものにも目をつけてゐる。彼等を死に導いたものは必ずしも太兵衛の惡意ではない。おさん親子の善意も亦やはり彼等を苦しませてゐる。

近松は度々日本のシエエクスピイアに比せられてゐる。それは在來の諸家の說よりも或は一層シエエクスピイア的かも知れない。第一に近松はシエエクスピイアのやうに殆ど理智を超越してゐる。（ラテン人種の戲曲家モリエエルの理智を想起せよ。）それから又戲曲の中に美しい一行を撒き散らしてゐる。最後に悲劇の唯中にも喜劇的場景を點出してゐる。僕は炬燵の場の乞食坊主を見ながら、何度も名高い「マクベス」の中の醉つ拂ひの姿を思ひ出した。

近松の世話ものは高山樗牛以來、時代ものの上に置かれてゐる。が、近松は時代ものの中にもロマン主義者に終始したのではない。これも亦多少シエエクスピイア的である。シエエクスピイアは羅馬の都に時計を置いて顧みなかつた。近松も時代を無視してゐることはシエエクスピイア以上である。のみならず神代の世界さへ悉く元祿時代の世界にした。それ等の人物も心理描寫の上には存外屢寫實主義的である。たとへば「日本振袖始」さへ、巨旦蘇旦兄弟の爭ひは全然世話ものの中の一場景と變りはない。しかも巨旦の妻の氣もちや父を殺した後の巨旦の氣もちは恐らくは現世にも通用するであらう。まして素戔嗚の尊の戀愛などは恐れながら有史以來少しも變らない、、である。

近松の時代ものは世話ものよりも勿論荒唐無稽である。しかしその爲に世話ものにない「美しさ」のあつたことは爭はれない。たとへば日本の南部の海岸に偶然漂つて來た船の中に支那美人のゐる場景を想像せよ。（國姓爺合戰）それは僕等自身の異國趣味にも未だに或滿足を與へるであらう。

高山樗牛は不幸にもこれ等の特色を無視してゐる。近松の時代ものは世話ものよりも必ずしも下にあるものではない。唯僕等は封建時代

の市井を比較的身近に感じてゐる。元祿時代の河庄は明治時代の小待合に近い。小春は、――殊に役者の扮する小春は明治時代の藝者に似たものである。かう云ふ事實は近松の世話ものに如實と云ふ感じを與へ易い。しかし何百年か過ぎ去つた後、――即ち封建時代の市井さへ夢の中の夢に變つた後、近松の淨瑠璃をふり返つて見れば、僕等は時代ものの必ずしも下にゐないことを見出すであらう。のみならず時代ものは一面にはやはり世話ものと同時代の大名の生活を描いてゐる。しかもその世話ものほど如實と云ふ感じを與へないのは封建時代の社會制度の僕等を大名の生活とは緣の遠いものにしてゐる爲である。九重の雲の中にいらせられる御一人さへ不思議にも近松の淨瑠璃を愛讀し給うた。それは近松の出身によるか、或は又市井の出來事に好奇心を持たれた爲かも知れない。しかし近松の時代ものに元祿時代の上流階級を感じられなかつたとも限らないのである。

僕は人形芝居を見物しながら、こんなことを考へてゐた。人形芝居は衰へてゐるらしい。のみならず淨瑠璃も原作通りに語つてゐないと云ふことである。しかし僕には芝居よりもはるかに興味の深いものだつた。

三　模倣

紅毛人は日本人の模倣に長じてゐることを輕蔑してゐる。のみならず日本人の風俗や習慣（或は道德）の滑稽であることを輕蔑してゐる。僕は堀口九萬一氏の紹介した「雪さん」と云ふフランス小說の梗概を讀み、（「女性」三月號所載）今更のやうにこの事實を考へ出した。

日本人は模倣に長じてゐる。僕等の作品も紅毛人の作品の模倣であることは爭はれない。しかし彼等も僕等のやうにやはり模倣に長じてゐる。ホイツスラアは油畫の上に浮世繪を模倣をしなかつたか？　いや、彼等は彼等同志もやはり模倣し合つてゐる。更に又過去に溯れば、大いなる支那は彼等の爲にどの位先例を示したであらう？　彼等は或は彼等の模倣は「消化」であると云ふかも知れない。若し「消化」であると云ふならば、僕等の模倣も亦「消化」である。同じ水墨を以てしても、日本の南畫は支那の南畫ではない。のみならず僕等は往來の露店に言葉通り豚カツを消化してゐる。

しかも模倣を便宜とすれば、模倣するのに勝ることはない。僕等は先祖傳來の名刀を揮ひながら、彼等のタンクや毒瓦斯と戰ふ必要を認めないものである。しかも物質的文明はたとひ必要のない時にさへ、おのづから模倣を強ひずには措かない。現に古代には輕羅をまとつた希臘、羅馬等の暖國の民さへ、今では北狄の考案した、寒氣に堪へるのに都合の善い洋服と云ふものを用ひてゐる。

僕等の風俗や習慣の彼等に滑稽に見えるのもやはり少しも不思議ではない。彼等は僕等の美術には――殊に工藝美術にはとうに多少の賞讚をしてゐる。それは唯目のあたりに見ることの出來る爲と言はなければならぬ。僕等の感情や思想などは、必ずしも容易に見えるもので

ばない。江戸末期の英吉利公使だつた Sir Rutherford Alcock は灸を据ゑてゐる子供を見、如何に僕等は迷信の爲にみづから苦めてゐるかと嘲笑した。僕等の風俗や習慣の中に潜んだ感情や思想は今日でも、——小泉八雲を出した今日でもやはり彼等には不可解である。彼等は僕等の風俗や習慣を勿論笑はずにはゐられないであらう。同時に又彼等の風俗や習慣もやはり僕等には可笑しいのである。たとへばエドガア・ポオは酒飲みだつた爲に（或は酒飲みだつたかどうかと云ふ爲に）永年死後の名聲を落してゐた。「李白一斗詩百篇」を誇る日本ではかう云ふことは可笑しいと云ふ外はない。この互に輕蔑し合ふことは避け難い事實とは云ふものの、やはり悲しむべき事實である。のみならず僕等は僕等自身の中にもかう云ふ悲劇を感じないことはない。いや、僕等の精神的生活は大抵は古い僕等に對する新しい僕等の戰ひである。

しかし僕等は彼等よりも幾分か彼等を了解してゐる。（これは或は僕等には寧ろ不名譽なことかも知れない。）彼等は僕等に一顧も與へてゐない。僕等は彼等には未開人である。しかも日本に住んでゐる彼等は必ずしも彼等を代表するものではない。恐らくは世界を支配する彼等のサムプルとするにも足りないものであらう。が、僕等は丸善のある爲に多少彼等の魂を知つてゐることは確かである。

なほ又大手につけ加へれば、彼等も亦本質的にはやはり僕等と異つてゐない。僕等は（彼等も一しよにした）皆世界と云ふ箱船に乗つた人間獸の一群である。しかもこの箱船の中は決して明るいものではない。殊に僕等日本人の船室は度たび大地震に見舞はれるのである。

堀口九萬一氏の紹介は生憎まだ完結してゐない。のみならず氏の加へる筈の批評も載つてゐないのである。が、僕はそれだけにも、ふとこんなことを考へた爲にとりあへずペンを走らせることにした。

四　代作の辯護

「古代の畫家は少からず傑出した弟子を持つてゐる。が、近代の畫家は持つてゐない。それは彼等の金の爲に、或は高遠な理想の爲に弟子を教へる爲である。古代の畫家の弟子を教へたのは代作をさせるつもりだつた。從つて彼等の技巧上の秘密も恐く弟子に傳へたのである。弟子の傑出したのも不思議ではない。」——かう云ふサミュエル・バットラアの言葉は一面には眞實を語つてゐる。天賦の才はその爲にばかり勿論生まれて來るものではない。しかし又その爲に促されることも多いであらう。僕はこの頃フロオベエルのモオパスサンを教へるのにどの位深切を盡したかを知つた。（彼はモオパスサンの原稿を讀んでやる時、連續した二つの文章に同じ構造であるのさへやかましく言つた。）しかしそれは何びとにも望むことの出來るものではない。（弟子に才能のある場合にしても）

今日の日本は藝術さへ大量生産を要求してゐる。のみならず作家自身にしても、大量生産をしない限り、衣食することも容易ではない。

しかし量的向上は大抵質的低下である。すると古人の行つたやうに弟子に代作させることも或は幾多の才人を生ずることになるかも知れない。封建時代の戯作者は勿論、明治時代の新聞小說家も全然この便法を用ひなかつたのではなかつた。美術家は、——たとへばロダンはやはり部分的には彼の作品を弟子に作らせてゐたのである。かう云ふ傳統を持つた代作は或は今後は行はれるかも知れない。のみならずそれは必ずしも一時代の藝術を俗惡にするとも限らないのである。弟子はテクニイクを修めた後、勿論獨立しても差支ない。が、或は二代目、三代目と襲名することも出來るであらう。

僕はまだ不幸にも代作して貰ふ機會を持つてゐない。が、他人の作品を代作出來る自信は持つてゐる。唯一つむづかしいことには他人の作品を代作するのは自作するよりも手間どるに違ひない。

五　川柳

「川柳」は日本の諷刺詩である。しかし「川柳」の輕視せられるのは何も諷刺詩である爲ではない。寧ろ「川柳」と云ふ名前の餘りに江戸趣味を帶びてゐる爲に何か文藝と云ふよりも他のものに見られる爲である。古い川柳の發句に近いことは或は誰も知つてゐるかも知れない。のみならず發句も一面には川柳に近いものを含んでゐる。その最も著しい例は鶉衣(?)の初板にある横井也有の連句であらう。あの連句はポルノグラフイックな川柳集——「末摘花」と選ぶ所はない。

安どもらひの蓮のあけぼの

かう云ふ川柳の發句に近いことは誰でも認めずにゐられないであらう。(蓮は勿論造花の蓮である。)のみならず後代の川柳も全部俗惡と云ふことは出來ない。それ等も亦封建時代の町人の心を——彼等の歡びや悲しみを諧謔の中に現してゐる。若しそれ等を俗惡と云ふならば、現世の小說や戯曲も亦同樣に俗惡と云はなければならぬ。

小島政次郎氏は前に川柳の中の官能的描寫を指摘した。後代は或は川柳の中の社會的苦悶を指摘するかも知れない。僕は川柳には門外漢である。が、川柳も抒情詩や敍事詩のやうにいつかファウストの前を通るであらう、尤も江戸傳來の夏羽織か何かひつかけながら。

六　詩形

心より詩人わが
喜ばむことを誰知るや。
一人だに聞くことを
願はぬ詞を歌はしめよ。

お伽噺の王女は城の中に何年も靜かに眠つてゐる。短歌や俳句を除いた日本の詩形もやはりお伽噺の王女と變りはない。萬葉集の長歌は暫らく問はず、催馬樂も、平家物語も、謠曲も、淨瑠璃も韻文である。そこには必ず幾多の詩形が眠つてゐるのに違ひない。唯別行に書いただけでも、謠曲はおのづから今日の詩に近い形を現はすのであ

る。そこには必ず僕等の言葉に必然な韻律のあることであらう。(今日の民謡と称するものは少くとも大部分は詩形上都々逸と変りはない。)この眠つてゐる王女を見出すだけでも既に興味の多い仕事である。まして王女を目醒ませることをや。

尤も今日の詩は――更に古風な言葉を使へば、新体詩はおのづからから云ふ道に歩みを運んでゐるかも知れない。又今日の感情を盛るのに昨日の詩形は役立たないであらう。しかし僕は過去の詩形を必ずしも踏襲しろと言ふのではない。唯それ等の詩形の中に何か命のあるものを感ずるのである。同時に又その何かを今よりも意識的に摑めと言ひたいのである。

僕等は皆どう云ふ点でも烈しい過渡時代に生を享けてゐる。従つて矛盾に矛盾を重ねてゐる。光は――少くとも日本では東よりも西から来るかも知れない。が、過去からも来る訳である。アポリネエルたちの連作体の詩は元禄時代の連句に近いものである。のみならず数等完成しないものである。この王女を目醒ませることは勿論誰にも出来ることではない。が、一人のスウィンバアンさへ出れば――と云ふよりも更に大力量の一人の「片歌の道守り」さへ出れば……

日本の過去の詩の中には緑いろのものが何か動いてゐる。何か互に響き合ふものが――僕はその何かを捉へることは勿論、その何かを生かすことも出来ないものの一人であらう。しかしその何かを感じてゐることは必ずしも人後に落ちないつもりである。こんなことは文芸上或は末の末のことかも知れない。唯僕はその何かに――ぼんやりした緑いろの何かに不思議にも心を惹かれるのである。

七　プロレタリア文芸

僕等は時代を超越することは出来ない。のみならず階級を超越することも出来ない。トルストイは女の話をする時には少しも猥褻を憚らなかつた。それは又ゴルキイを辟易させるのに足るものだつた。ゴルキイはフランク、ハリスとの問答の中に「わたしはトルストイよりも礼儀を重んじてゐる。若しトルストイを学んだとしたらば、彼等はそれをわたしの素性の為と――百姓育ちの為と解釈するであらう」と正直に表情を話してゐる。ハリスは又その言葉に「ゴルキイの未だに百姓であることはこの点に――即ち百姓育ちを恥ぢる点に露はれてゐる」と註してゐる。

中産階級の革命家を何人も生んでゐるのは確かである。彼等は理論や実行の上に彼等の思想を表現した。が、彼等の魂は果して中産階級を超越してゐたであらうか？　ルッテルは羅馬加特教に反逆した。しかも彼の仕事を妨げる悪魔の姿を目撃した。彼の理智は新しかつたであらう。しかし彼の魂はやはり羅馬加特教の地獄を見ずにはゐられなかつたのである。これは宗教の上ばかりではない。社会制度の上でも同じことである。

僕等は僕等の魂に階級の刻印を打たれてゐる。のみならず僕等を

拘束するものは必ずしも階級ばかりではない。地理的にも大は日本から小は一市一村に至る僕等の出生地も拘束してゐる。その他遺傳や境遇等も考へれば、僕等は僕等自身の複雜であることに驚歎せずにはゐられないであらう。(しかも僕等を造つてゐるものはいづれも僕の意識の中に登つて來るとは限らないのである。)

カアル・マルクスは暫らく問はず、古來の女子參政權論者はいづれも良妻を伴つてゐた。科學上の産物さへかう云ふ條件を示してゐるとすれば、藝術上の作品は――殊に文藝上の作品はあらゆる條件を示してゐる訣である。僕等はそれぞれ異つた天氣の下やそれぞれ異つた土の上に芽を出した草と變りはない。同時に又僕等の作品も無數の條件を具へた草の實である。若し神の目に見るとすれば、僕等の作品の一篇は僕等の全生涯を示してゐるのであらう。

プロレタリア文藝は――プロレタリア文藝とは何であらう？ 勿論第一に考へられるのはプロレタリア文明の中に花を開いた文藝である。これは今日の日本にはない。それから次に考へられるものはプロレタリアの爲に鬪ふ文藝である。これは日本にもないことはない。(若しスウイツルでも隣國だつたとすれば、或はもつと生まれたであらう。)第三に考へられるはコムミユニズムやアナアキズムの主義を持つてゐないにもせよ、プロレタリア的魂を根柢にした文藝である。第二のプロレタリア文藝は勿論第三のプロレタリア文藝と必ずしも兩立しないものではない。しかし若し多少でも新しい文藝を生ずるとすれば、それはこのプロレタリア的魂の生んだ文藝でなければならぬ。

僕は隅田川の川口に立ち、帆前船や達磨船の集まつたのを見ながら今更のやうに今日の日本に何の表現も受けてゐない「生活の詩」を感じずにはゐられなかつた。かう云ふ「生活の詩」をうたひ上げることはかう云ふ生活者を待たなければならぬ。少くともかう云ふ生活者にずつと同伴してゐなければならぬ筈である。コムミユニズムやアナアキズムの思想を作品の中に加へることは必ずしもむづかしいことではない。が、その作品の中に石炭のやうに黑光りのする詩的莊嚴を與へるものは畢竟プロレタリア的魂だけである。年少で死んだフイリツプは正にかう云ふ魂の持ち主だつた。

フロオベエルは「マダム・ボヴアリイ」にブルウジヨアの悲劇を描き盡した。しかしブルウジヨアに對するフロオベエルの輕蔑は「マダム・ボヴアリイ」を不滅にしない。「マダム・ボヴアリイ」を不滅にするものは唯フロオベエルの手腕だけである。フイリツプはプロレタリア的魂の外にも鍛へこんだ手腕を具へてゐる。するとどう云ふ藝術家も完成を目ざして進まなければならぬ。あらゆる完成した作品は方解石のやうに結晶したまま、僕等の子孫の遺産になるのである。たとひ風化作用を受けるにしても。

八　國木田獨歩

國木田獨歩は才人だつた。彼の上に與へられる「無器用」と云ふ言

説は當つてゐない。獨歩の作品にどれをとつて見ても、決して無器用に出來上つてゐない。「正直者」、「巡査」、「竹の木戸」、「非凡なる凡人」……いづれも器用に出來上つてゐる。若し彼を無器用と云ふならば、フイリツプも亦無器用であらう。

しかし獨歩の「無器用」と云はれたのは全然理由のなかつた訣ではない。彼は所謂戯曲的に發展する話を書かなかつた。のみならず長ながとも書かなかつた。(勿論どちらも出來なかつたのである。)彼の受けた「無器用」の言葉はおのづからそこに生じたのであらう。が、彼の天才は或は彼の天才の一部は實にそこに存してゐた。

獨歩は鋭い頭腦を持つてゐた。同時に又柔かい心臓を持つてゐた。しかもそれ等は獨歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。從つて彼は悲劇的だつた。二葉亭四迷や石川啄木も、かう云ふ悲劇中の人物である。尤も二葉亭四迷は彼等よりも柔かい心臓を持つてゐなかつた。(或は彼等よりも逞しい實行力を具へてゐた。)彼の悲劇はその爲に彼等よりもはるかに靜かだつた。二葉亭四迷の全生涯は或はこの悲劇的でない悲劇の中にあるかも知れない。……

しかし更に獨歩を見れば、彼は鋭い頭腦の爲に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の爲に天上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」、「竹の木戸」等の短篇を生じ、後者は「非凡なる凡人」、「少年の悲哀」、「畫の悲しみ」等の短篇を生じた。自然主義者も人道主義者も獨歩を愛したのは偶然ではない。

柔い心臓を持つてゐた獨歩は勿論おのづから詩人だつた。(と云ふ意味は必しも詩も書いてゐたと云ふことではない。)しかも島崎藤村氏や田山花袋氏と異る詩人だつた。大河に近い田山氏の詩は彼の中に求められない。同時に又お花畠に似た島崎氏の詩も彼の中に求められない。彼の詩はもつと切迫してゐる。獨歩は彼の詩の一篇の通り、いつも「高峯の雲よ」と呼びかけてゐた。年少時代の獨歩の愛讀書の一つはカアライルの「英雄論」だつたと云ふことである。カアライルの厭世觀も或は彼を動かしたかも知れない。が、更に自然なのはカアライルの詩的精神に觸れたことである。

けれども彼は前にも言つたやうに鋭い頭腦の持ち主だつた。「山林に自由存す」の詩は「武藏野」の小品に隣らざるを得ない。「武藏野」はその名前通り、確かに平原に違ひなかつた。しかしまだその雑木林は山々を透かしてゐるのに違ひなかつた。德富蘆花氏の「自然と人生」は「武藏野」と好對照を示すものであらう。自然を寫生してゐることはどちらも等しいのに違ひない。が、後者は前者よりも沈痛な色彩を帶びてゐる。のみならず廣いロシアを含んだ東洋的傳統の古色を帶びてゐる。逆說的な運命はこの古色のある爲に「武藏野」を一層新らしくした。(幾多の人びとは獨歩の拓いた「武藏野」の道を歩いて行つたであらう。が、僕の覺えてゐるのは吉江孤雁氏一人だけである。當時の吉江氏の小品集は現世の「本の洪水」の中に姿を失つてしまつたらしい。が、何か梨の花に近い、ナイイヴな美しさに富んだものであ

る。)

獨歩は地上に足をおろした。それから——あらゆる人々のやうに野蠻な人生と向ひ合つた。しかし彼の中の詩人はいつまでたつても詩人だつた。鋭い頭腦は死に瀕した彼に「病牀錄」を作らせてゐる。がかう云ふ彼は一面には「沙漠の雨」(?)と云ふ散文詩を作つてゐた。

若し獨歩の作品中、最も完成したものを擧げるとすれば、「正直者」や「竹の木戸」にとどまるであらう。が、それ等の作品は必しも詩人兼小說家だつた獨歩の全部を示してゐない。僕は最も調和のとれた獨歩を——或は最も幸福だつた獨歩を「鹿狩り」等の小品に見出してゐる。(中村星湖氏の初期の作品はかう云ふ獨歩の作品に近いものだつた。)

自然主義の作家たちは皆精進して歩いて行つた。が、唯一人獨歩だけは時々空中へ舞ひ上つてゐる。……

饒舌録（感想）

谷崎潤一郎

芥川君の「文藝的な、餘りに文藝的な」と云ふものを讀んだ。それに對して別に應酬する意志はないし、さう云ふことをしてゐたら際限はないが、ただ少しばかり感想を述べさせて貰はう。芥川君が必ずしも私に對してのみ物を云つてゐるのでないやうに、私も芥川君にばかり答へるつもりはない。むしろ一般の人に讀んで貰ひたいのである。

ぜんたい小說に限らず有らゆる藝術に「何でなければならぬ」と云ふ規則を設けるのは一番惡いことである。藝術は一個の生きものである。人間が進步發達すると同時に藝術も進步發達する。豫め「どうでなければならぬ」と云ふ規矩準繩を作つたところで、なかなかそれに當て篏まるやうに行くものでない。たとへば昔の作劇術には時と所とが一致しなければいけないと云ふやうな規則があつた。しかしそんなことは結局行はれずにしまつた。日本でも平面描寫とか、主觀を交へてはよくないとか、シチ面倒臭い議論があつたが、それもさう云ふ約束を破つた優秀な作品が現はれると、もうそんなことは滅茶苦茶になつた。「話」のある小說ない小說もつまりはそれで、實際人を動かすやうな立派なものが出て來ればいいも惡いもあつたものでない。自然主義の全盛時代にたまたま反自然主義の傑作が出ると、例の規則違反で以て何とか彼とかケチを附けられたこともあつたが、此れは日本の文壇の惡い癖で、後世になれば物笑ひの種である。(さう云へば近頃は、ブルジョア文學だと一も二もなくケナされる傾向がないこともない。)

しかしながら現在の日本には自然主義時代の惡い影響がまだ殘つてゐて、安價なる告白小說體のものを高級だとか深刻だとか考へる癖が作者の側にも讀者の側にもあるやうに思ふ。これは矢張り一種の規矩準繩と見ることが出來る。私はその弊風を打破するために特に誇大にして「話」のある小說を主張するのである。芥川君も云つてゐるやうに、恐らく日本ほど告白體小說の跋扈してゐる文壇はないであらう。小說と云ふものはもともと民衆に面白い話をして聞かせるのである。源氏物語は宮廷の才女が、「何か面白い話はないか」と云ふ上臈

院の御仰せを受けて書いたものだ。シエクスピアの時代、近松西鶴の時代、春水種彥の時代も皆さうであつた。近松は「國姓爺合戰」が大當りを取つた時「野も山も國せんやく〳〵にて御座候」と喜んでゐる手紙がある。あまりギゴチなく考へずにさう云ふ無邪氣な心持ちもあつて欲しい。然るに今の文壇で面白い話は通俗的で、通俗的エコール低級と云ふ風に見る。そんな風潮であるからして實際にも高級なる通俗小說が極めて少い。告白小說必ずしも惡くはないが、さう云ふものは全體の文藝作品の一分か二分を占めるくらゐな比例であつて然るべきである。作家の一生に一度はさう云ふ作品を書く、と云ふくらゐな程度が當り前である。兎にも角にも餘りに窮屈な文壇ではある。のんびりとした氣風のないのは獨り文壇のみではないが、此れも國民性の然らしむる所か。

から云つたからとて私は作者に安易な道を執れとすすめるものではない。誤解をされる恐れはあるが、一と口に云へば今少し昔の職人肌であれ、名人肌であれと云ふのだ。藝術に精進する意氣込みは今の作家より昔の名人上手の方が遙かに嚴格であつたであらう。

○

構造的美觀は云ひ換へれば建築的美觀である。從つてその美を恣にするためには相當に大きな空間を要し、展開を要する。俳句にも構成的美觀があると云ふ芥川君は茶室にも組み立ての面白さがあると云ふだらうが、しかし其處には物が層層累累と積み上げられた感じはない。芥川君の所謂「長篇を築築と組み上げる肉體的力量」がない。私は實に此の肉體的力量の缺乏が日本文學の著しい弱點であると信ずる。

失禮ながら私をして忌憚なく云はしむれば、同じ短篇作家でも芥川君と志賀君との相違は、肉體的力量の感じの有無にある。深き呼吸、逞しき腕、ネバリ強き腰、――短篇であつても、優れたものには何かさう云ふ感じがある。長篇でもアヤフヤな奴は途中で息切れがしてゐるが、立派な長篇には幾つも幾つも事件を畳みかけて運んで來る逞しさ、――蜿蜒と起伏する山脈のやうな大きさがある。私の構成する力とは此れを云ふのである。

源氏物語は肉體的力量が筋骨に現はれてゐないけれども、優麗哀切な日本流の情緒が豐富に盛り上げられてゐて、首尾もあり照應もあり、成る程我が國の文學中では最も構造的美觀を備へた空前絕後の作品であらう。しかし馬琴の八犬傳になると、支那の摸倣であるばかりか大分土臺がグラついて來る。德川時代の歌舞伎劇の中には隨分複雜な筋を弄した作品もあるが、ただ徒らに込み入つてゐるだけで、事件の發展が自然でなく、幾何學的にシッカリ組み合はされてもゐない。そのいい例は圓朝の牡丹燈籠である。剪燈新話の牡丹燈之記は至極短篇ではあるが、あれはあれだけで纏まつてゐて、非常に氣品の高いものである。が、それからヒントを得たと云はれる牡丹燈籠は餘計な筋

が這入つてゐるために興味の中心が幾つにも分れて統一がなく、場面場面の面白さが主になつて、怪談としての感銘が薄く、氣品もいやしくなつてゐる。芥川君の擧げた諸作家――鏡花、白鳥、弴、正雄、春夫、浩二、寛等の諸君のうちで、構成的才能を多分に持ち合はせてゐるのは鏡花氏だけではないだらうか。（里見君の「多情佛心」はまだ讀んでゐないので何とも云はれぬ。）そして明治になつてからの此の方面での最大の作品は恐らく紅葉の「三人妻」であらう。　あれだけ立派に組み立てられた、完成された小說は日本古來の文學中にもその類が少い。

なほついでながら、西鶴は短篇作家であるけれども、ちやうどアラビアン・ナイトのやうに澤山の挿話から成り立つてゐる長篇を讀むやうな感じがある。もう十何年も前に讀んだので忘れてしまつたが、日本永代藏や本朝櫻陰比事の如き、話の種が滾滾として盡きず、無盡藏の感があるのには驚かされる。（幸田露伴博士の說に、本朝櫻陰比事の作者は西鶴ではあるまいと云つてあつたやうに思ふが、それにしてもあれだけ多くの筋を考へ出すことは容易でない。）

○

私には芥川君の詩的精神云々の意味がよく分らない。芥川君は、「話」らしい話のない小說とは最も詩に近いものであり、純粋なものであり、西洋で云へばジユウル・ルナアル、日本で云へば志賀直哉氏の諸短篇のやうなものだと云ふ。さうして純粋であるか否かの一點に依つて藝術家の價値は極まると云ふ。同君は又、「『話』らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない。……。第一僕の小說も大抵は話を持つてゐる。」とも云ふ。「僕も亦今後何個月もふらずに『話』らしい話のない小說ばかり作るつもりはない」とも云ふ。しかしながら、又、「僕はアナトオル・フランスの『ジヤン・ダアク』よりも寧ろボオドレエルの一行を殘したいと思つてゐる一人」でもある。さうして芥川君自身はと云へば「頗る雜駁な作家である」と云ふ。「『話』らしい話のない小說は……あらゆる小說中、最も詩に近い小說である、」と云ひ、「僕の詩的精神とは最も廣い意味の抒情詩で」あり、さう云ふものなら何にでもあることは否定しないが、同時に通俗的興味のないものだとも云ふ。しかしスタンダアルの諸作の中には、詩的精神が漲り渡つてゐるとも云ふ。自分自身を鞭つと共に私を鞭つてくれると云ふ芥川君は「僕等は誰も皆出來ることしか出來ない。僕の持つてゐる才能はかう云ふ小說を作ることに適してゐるかどうか疑問である。……僕の小說を作るのは小說はあらゆる文藝の形式中、最も包容力に富んでゐる爲に何でもぶちこんでしまはれるからである。」と云ふ。私は斯くの如く左顧右眄してゐる君が、果して己れを鞭つてゐるのかどうかを疑ふ。少くとも私が鞭たれることは矢張り御免蒙りたい。

畢竟するに、詮じ詰めればおのおの體質の相違と云ふことになりはしまいか。言辭粗雜、或ひは禮を失したかも知れぬが、そこは平素の心

安だてに敎して頂く。

○

「雜駁なことは純粹なことに若かない」のは勿論である。しかしゲエテが古今の大詩人である大半の理由が雜駁なことにあると云ふのは、少しく見當違ひではないか。ゲエテの偉いのはスケールが大きくて猶且純粹性を失はないところにある。包容力の大きいのと雜駁とは違ふ。われらがゲエテに頭が下るのは「箱船の乘り合ひ」の如くあらゆるものが抛り込まれてありながら、毫も雜駁な騷々しい感じを與へず、それぞれ整然と收まるべき所に收まつてゐる端正な姿にある。いつたい獨逸文學は思想の重みが勝ち過ぎて柔かみが乏しく、何處か窮屈なトゲトゲしい氣持ちがあるので、どうも私には肌に合はないが、ひとりゲエテにはその風がない。頓に悠々たる大河の如く、入江となり、奔湍となり、深淵となり、湖水となりして、千變萬化しながらも、全體としては極めてゆるやかに、のんびりと流れつつある。その文章は秋霜烈日の氣を裏に藏しつつ、春風駘蕩たる雅致を以て外を包んでゐる。紅葉山人のやうなのどかさと流麗さがあつて、而もストリンドベルクの如き鋭さと激しさとを底に隱してゐるのである。バルザックは惡魔的であるけれども幾分か鬼面人を嚇するやうな氣味合ひがあり、ドストイエフスキーは深刻であるけれども焦燥の嫌ひが多分にある。ただゲエテのみは焦らず騷がず、天の成せる陳寶をそのままそこへ投げ出して、森嚴なる容貌に微笑を湛へてゐるやうである。品格に於てはトルストイと雖も到底及ばない。われわれの如き群小の徒は大山岳に打つかつた如く、筆を投じて浩歎之を久しうするばかりである。

○

いつたい東洋では、小說は外の文學に比べて卑しいものとされてゐたので、そのために發達しなかつたのは惜しいことである。小說を單に婦女子の讀み物とせず、書く方でも此れを男子一生の仕事とし、士君子が此れに携はるのを恥としなかつたならば、さうして西洋のやうに政治問題や社會問題をテーマとして取り扱ふやうな風潮にあつたならば、隨分立派な人物が優れた作物を遺してゐただらうと思ふ。さしづめ日本外史や靖獻遺言の著者などは、きつと小說を書いたであらうし、又その方が、あの漢文の歷史よりは人心に訴ふるところも多く、壽命も長かつたであらう。日本外史は日本流の漢文としてはなかなか名文だらうけれども、私はちつともいいと思はない。同じ場面の描寫でも、平家物語の和文の方がずつと纎細で生き生きとしてゐる。山陽ほどの才人が何のために骨を折つて、わざわざ支那の借り物の漢字ばかりで書いたのであらう。おまけに日本流の漢文にしたとは尙更をかしい。ほんたうの英語ではむづかしいから、ジヤパニーズ・イングリッシユにしたと云ふやうなものである。そのくらゐならなぜ一步進めて國文で書かなかつたのか、考へて見ると無駄な努力をしたものではある。

こんな馬鹿馬鹿しい精力の濫費が、山陽以外にも澤山あつたに違ひない。そこへ行くと國文で書かれた藩翰譜や讀史餘論はさすがに立派で、今日になつても猶光輝を失はない。その文章の簡潔にして明確な點は森鷗外氏の歷史小說を想ひ出させる。鷗外氏やバアナアド・ショウのやうに、白石や徂徠のやうな人物が創作に從事してゐたら、可なり異色のあるものが出來たかも知れない。返す返すも惜しい氣がする。

一〇

むかしむかし更級日記の作者菅原孝標の女は、十二の頃上總の國の國府にゐて、「つれづれなるひるま、宵居などに、姉まま母などやうの人人の、その物語かの物語光源氏のあるやうなところどころ語るを聞くにいとどゆかしさまされど我が思ふままにそらにいかでかはおぼえ語らむ。いみじく心もとなきままに等身に藥師佛をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかに入りつつ、『京にとくあげ給ひて、物語の多く候ふなる、あるかぎり見せたまへ』と身を捨てて額をつき祈り申すほどに云云」と云つてゐる。それから後年都へ上つて、漸く人からいろいろの物語を借りて讀むことが出來た。さうして「源氏の五十餘卷、櫃に入りながら、ざい中將、とほぎみ、せりかは、しらら、あさうづなどいふ物語ども一袋とり入れて得て歸る心地の嬉しさぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして人もまじらず几帳のうちに打ち臥して引き出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ」と喜んでゐる、「夢にいと淸げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが來て、『法華經五の卷をとく習へ』といふと見れど、人にも語らず習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、我は此の頃わろきぞかし、さかりにならば形も限りなくよく、髮もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顏宇治の大將浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。」などとも云つてゐる。かうして見ると文學少女の心持ちは昔も今も變りはないが、小說が讀みたさに等身の藥師佛を造つて祈ると云ふのはさすがに平安朝である。それにあの時代の物語類は教育のある上流社會の讀み物として、さう卑しまれてはゐなかつたやうだ。從つて小說道も一時は非常に進步してゐたに違ひなく更級日記の作者が讀んだ「とほぎみ」、「せりかは」、「しらら」、「あさうづ」など云ふ作品は後世に傳はつてゐないけれども、隨分その數も多かつたであらう。今に殘つてゐる「堤中納言物語」の如きは實に氣の利いた好個の短篇集で、腕に覺えのある作者でなければなかなか書けるものでない。「月にはかられて夜深く起きにけるも、思ふらむ所いとほしけれど、立ち歸らむも遠きほどなれば、やうやう行くに、小家などに例おとなふものも聞えず、隈なき月に、ところどころの花の木どもも偏へに紛ひぬべくかすみたり。」と云ふ「花櫻折る少將」の書き出し、「春の物とて詠めさせ給ふ晝つ方、臺盤所なる人人、『宰相中將こそ參り給ふなれ。例の御にほひ、いとしるく』などいふほどに突居給ひて、……」とある「この

ついでにの書き出しなど、いきなり事件の中心へ筆を落してゐる心にくさ、志賀君や里見君の短篇に似た鋭さがある。かう云ふ調子で發達して行つたら、日本の小說道は大したものになつたであらうに、鎌倉時代以後却つて反對に衰へてしまつたのはどう云ふ譯か。現世的、享樂的な王朝時代の佛教が衰へて、禪宗や宋學が這入つて來た影響であらうか。（つづく）

韮

齋藤茂吉

南かぜふき居るときに青々と灰のなかより韮
萌えにけり

雨かぜのはげしき夜にめざめつつ病院のこと
氣にかかり居り

百鳥のさへづりかはす山なかにおのづからに
して死ぬるけだもの

はやりかぜにかかり臥ればわれの食ふ蜜柑も
苦しあはれ寂しき

髪おちてひとりこやれば口ひげの白くなれる
をつまみつつ居り

狂人まもる生業をわれすれどかりそめごとと
人なおもひそ

帝都著名病医院案内

淋疾 梅毒 尿科

佐藤診療所

神田區錦町二の十 小川町下車明治書院裏 電話神田(25)二六九一

醫學博士 佐藤恒祐

耳鼻科 咽喉科

菊池耳咽喉鼻科病院

日本橋區本町一 日本銀行裏門前

電話大手（一四〇〇番 三九〇三番）

院長 ドクトル メヂチーネ 菊池循一

眼科 整形科 ソコヒ 斜視科 トラホーム

丸ビル眼科

東京驛前 丸ビル四階

（眼整形の規定書は御申込み次第進呈）

醫學博士 内田孝藏

血壓亢進症 糖尿病 心腎臓病

倉上內科

醫學博士 倉上由一

東京市赤坂區青山北町四丁目六六 電話青山二二七六番

（入院應需）

腦脊髓 神經科

佐多病院

虎の門 芝區明舟町十九番地 電話青山六九五二番

醫學博士 佐多芳久

神經衰弱 腦精神病

青山腦病院

外來午前 入院隨時

ドクトル 齋藤紀一 醫學博士 齋藤茂吉

東京青山南町明治神宮前・電青山六五一・六五三

府下松澤村松原玉川電車下高井戸行山下降

内科・小兒科 外科・耳鼻科 眼科・皮膚科 婦人科 X線科

東京醫專 博濟病院

市電 東大久保拔辨天、新宿一、二丁目下車

省線 新宿より徒歩十五分（電話四谷一五一二）

内科 神經科 腦脊髓病科

小峰病院

院長 醫學博士 小峰茂之

入院外來隨時

府下滝の川町大字西ケ原 電話（小石川八一〇番 王子一四〇番）

（鐵筋コンクリート耐震、耐火式構造）

（專門） ぢ 脱肛

北見醫院

（入院應需） 院長 北見藤太

本郷區神明町車庫前 電小石川三〇九三番

小兒科 X光線科特設

瀬川小兒病院

（入院應需）

神田駿河臺 お茶の水 電話神田(25)四四一 四四二

醫學博士 瀬川昌世

内服で治るワキガの藥

理想的内服藥の發見

不具者同様になる痛ましい手術によるか一時的の防臭劑を施すかに過ぎなかつたワキガ患者の眞劍な要求こそ内服藥による合理的療法であらねばならん

ワキガの病原　單にワキガと申しましても事實この位厄介な病はなく、ポカ〳〵暖かにでもなるとこれ位嫌な感じを與へる臭はない。一體ワキガは皮膚の毛細血管系統に積血するのが其原因であつてそれが皮脂腺から分泌する汗液の分解作用によつて發する臭氣であります。

ワキガは傳染か　世にワキガは傳染するかのやうに思はれてゐるがこの病は決して傳染するものではなく遺傳病で持つて生れた體質であります。醫學上も之が一番有力です。論より證據素人にも判り易い例を二三述べて見ませう。ワキガの人の耳垢は普通の人と違つてゐる即ちワキガの人は十人が十人耳垢が飴色で軟かいこれはワキガが腋窩ばかりでなく體質である證據です。次にワキガが傳染するものであれば病の發生時期は一定せぬ筈です。然るに女子は十四五歳男子は十七八歳[illegible]これも成熟期になると此病の體質のある方にワキガが出て來ます。判りよく言へば女子は破瓜期男子は聲變りのする頃が一番多い。次にワキガに罹つてゐる人は生みの親が見ればすぐわかる兩親のいづれか矢張りワキガである筈です。此れ等の事實から見てもワキガは持つて生れた體質である卽ち遺傳であることがよく素人にも判ります。

體を治すが肝心　前にも申し述べましたやうにワキガの病は體質からですからこれが根本の治療としては先づ體を治すことが必要でせう。然るにこれ迄は單に皮膚の外面から一時の防臭法としてホルマリン、サルチール酸などの塗布藥が多く用ゐられてをりますが、これ等は凡て病を治す目的の藥ではなく惡臭を一時防ぐといふ意味から製劑されてゐるのでありますから眞に、ワキガ病の治療藥ではなくホンの一時の臭氣止めにしか過ぎなかつたことがおわかりになりませう。どうしてもこの病は内服藥で體を治すことが一番肝心であります。

期待されたる内服藥　内服藥は其作用する處は身體全部であつて外用藥の如く一局部だけの治療藥でないとはどなたも御存じの如く、ワキガの方が本劑を服用すると其有效成分は病原に作用しどんな重症でもだん〳〵惡臭が減退し尚も連服すれば惡臭は出なくなります。本劑の偉效につきましては一昨々年二月の婦人俱樂部講談雜誌實業之日本等の各誌へ詳細報道されましたこと御記憶と思ひますが兎に角本劑がワキガの病を治すことに於ては全く不思議と思ふ程の力をもつて居ります。中にはワキガは治つても身體に害はないか再發はせぬかとおたづねの方がありますが本劑で全治したものは勿論あと起ることはありません又副作用の伴はぬことは本劑を服用すると體の工合頭の工合までがよくなる程ですから安心を願ひます。

何の病も同じこと殊にワキガの病は根本的の治法をしないで姑息なことをしてゐては日の經つに從つて病勢は募つてだん〳〵ひどくなります。少しでも輕いだけ治し易い一日延ばせば一日だけそれだけ人知れず惱まねばならぬワキガと氣づいたらすぐ手當をなさい。乞ふ外用塗布藥の無效に目覺めた方は速かに有效確實な合理的内服藥たる本劑を試みられよ。

藥の名は「黎明湯」と申します。「黎明湯」の價は輕々症用三圓五十錢輕症用五圓五十錢重症用十圓五十錢頑固重症用廿圓 送料各十八錢海外四十五錢。東京市本郷區本郷二ノ六(電車通)天仁堂藥房(振替東京六三六三〇番)へ藥價送料拂込み又は郵便爲替にて御送金次第送藥す。電話小石川一三五二番

高畠素之著

マルキシズムと國家主義

（最新刊）

マルキシズムと國家論の關係は、今世界の學界に於て最も魅惑的な研究題目となつてゐる。階級關係と國家、國家による國家の廢止―自滅、それらは如何に考察さるべきか。世界唯一の無産階級國家たる勞農露西亞が、果して國家形態を廢止し得たか。その獨裁政治は强烈なる國家主義に基くものではないか。高畠氏は**マルキシズム**の理解者として本邦隨一、而も必ずしも**マルキシズム**をそのまゝ信奉するものではなく、絶えず批判的見地に立ち、かの所謂「國家社會主義」は氏の得意の壇場にして、國家の本質たる支配關係の究明、國家を單位とする無産階級革命の主張は國家社會主義理論構成への學究的企圖として、**マルキシズム**に重大なる修正を促すものだ。

四六判二七二頁
定價壹圓
送料拾八錢

レーニン著
茂森唯士譯

レーニニズム

マルキシズムを實踐によつて發展せしめしものはレーニンである。マルキシズム最近の展開はレーニニズムの研究を要請する。

價 一・二〇
税 ・一六

ブハーリン著
富士辰馬
横田千元譯

唯物史觀

唯物史觀は革命的世界觀だ。吾々がそれを把握することによつてのみあらゆる社會現象は釋然と氷解する。本書は極めて平易明快。

價 三・五〇
税 ・二八

ブハーリン著
富士辰馬譯

世界經濟論

金融資本主義の國家トラストへの進出と、帝國主義の諸形態とを明示し資本主義の世界經濟への轉化を各國別について力説す。

價 二・〇〇
税 ・二二

東京市麴町區内幸町幸ビルデイング一階
（振替口座東京八四〇二番）

改造社

永年難治の習慣も忽ち改まる

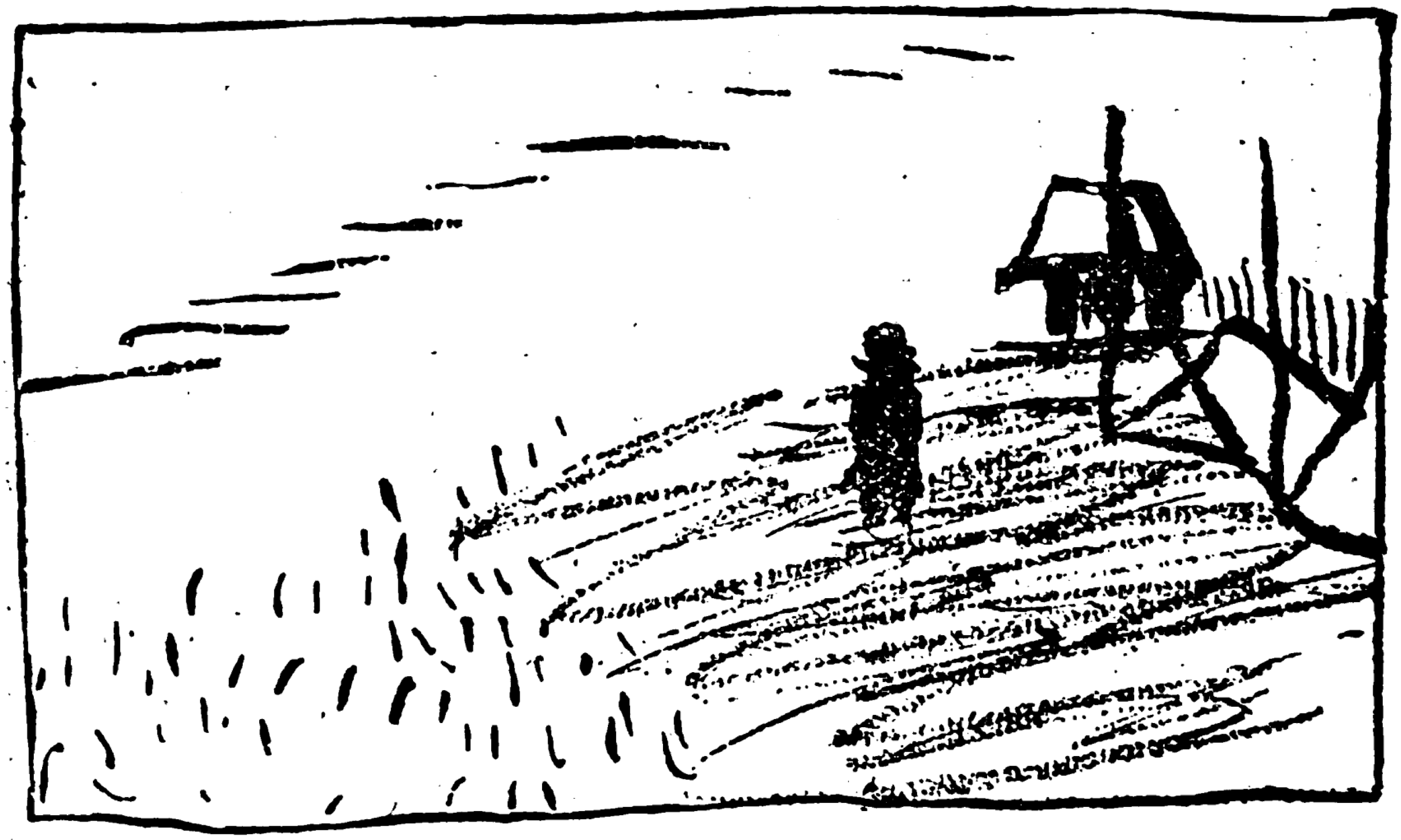
簡易な禁煙方法

驚くべき『カロット』の効力

三月五日の讀賣新聞はポー梨の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。

煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものではない。

所が茲に面白い一つの禁煙方法がある。『カロット』を口にすれば煙草を用ふるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく、適量の朝鮮人參の精氣を含んで居るから、根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き精凉な甘味は輕い刺戟と快感を長く口中に殘して之れを口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて煙草を吸ふ氣にはなれない。殊に口中の惡臭又は食後や夜中に口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する效力がある。但しこれは眞劍に煙草をやめようとする人でなければお勸め出來ない何故なら、再び煙草がまづくて吸ふ氣になれないからである。これは實業之日本社あたりでも實驗してこの效力に驚いてゐるのでもわかる。煙草の害を知りつゝ、永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病、消化不良その他禁煙したら乾度治り肥つて來ると感じてゐる方は是非之のカロットを試みられるが良い。大倉男爵と大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。



戯曲

腐れかけた家

野上彌生子

人物

塚本 圭一　地主
龍子　地主の妻
芳子　地主の妹
牧田 喬　龍子の從弟
近藤 濟　塚本家の支配人
平井 治助　村長
その他

場所

東北の農村

時

現代　八月下旬より九月上旬へかけて

第一幕

丘陵の中腹にある塚本家の邸宅。古風な、ペンキの剝げた洋館の一部が、後に

くつついてゐる東北風の大きな母屋や藏と共に舞臺の左寄りに見えてゐる。洋館の中からはピアノの音がしてゐる。前は芝生と雜草の入り交つた廣い庭になつて、左手の森の方へ續いてゐる。正面にはカンナや葵の植わつた花壇がある。その側に自然木をその儘支へに利用した木の卓があり、同じく木株を利用した腰掛が二三ある。その腰掛の一つに芳子がかけて編物をしてゐる。美しいけれども瘠せた淋しさうな十九の娘。單衣に赤の入つた帶をしめてゐる。稍離れた下手に召使の老婢が奈良漬にする瓜を蓆の上に並べてゐる。東北の八月の透明な暑くない午後。

芳子　今年はお兄さんのシャツを皆んなほぐしつちまつたから、大急ぎで編まなけりや追つつかないわ。何んとか云つてるうちすぐ寒くなるのだもの、ねえ。

老婢　あなたは本統にお兄樣思ひでゐらつしやいます。外の者にはどうしてそんな根氣はございませんですよ。

芳子　根のいゝのは婆やも負けやしないぢやないの。——よくまあ次次に色んなものを乾すと思ふわ。この間の杏がすんだかと思ふとまた瓜だから。

老婢　皆んな同じことでございますよ、お嬢樣。一年ぢう旨しい食べ物を家に絕やすまいといたしますには、あなたがさうやつてお寒い時の用意に編物をなさるやうに、それだけの手數を惜んではなりません。——それは季節のことでございますから、何か要ると云へば汽車で町に買ひにやつたつて半日もかかれば買つて參りますやうなものゝ、あんな店ざらしの埃つぽい漬物や、ブリキ臭い罐詰物なぞ旦那樣方に差し上げる氣には婆やにはなれませんですからね。

芳子　さう云へば婆やが送つて吳れた乾杏や榲桲の砂糖漬は、寄宿舍でも評判がよかつたものよ

老婢　あれもこれもあなた皆んな亡くなつたお母樣の御傳習でございますよ。斯う申しますとまた婆やの愚痴が始まつたとお笑ひになりませうが、御先代の時分までは斯んなことは何一つ手落はございませんでした。尤もあなたのお母樣つて方が人一倍丹念な方でもあつたのですが、先づ梅を漬ける、桃の砂糖漬をする。李や杏を乾す。生薑や辣韮を漬け込む。頓てこの奈良漬で瓜を割つたり乾したりの騷ぎがすむと、今度はそろ／＼秋の生りものゝ圍ひにかゝると云ふ鹽梅でございました。その外にだつて、それ澤庵だ、お菜漬だ、味噌焚だつて、一年ぢう何か知ら漬けたり煮たりしてゐない時はないやうでしたから、忙しいことも忙しうございましたが、それだけ樂しみも多うございました。全く今では何もかも昔話になつてしまひましたよ。奧樣なんか婆やが杏の少しも乾したり、ほんの四五十本奈良漬でも漬けようとするのさへ、餘計なことのやうに思つてゐらつしやるのですから。——あの方はピアノをポン／＼鳴らす暇はあ

つても、瓜の乾加減はどうかと一言聞いて下さる氣はおあんなさらない——

芳子　だつて婆や。お姉さんは東京の方だし、お兄樣と結婚した後だつてずつと東京に住まつて、田舍の生活は丸つきり知つてゐらつしやらないのだもの。都合でこちらで暮らすやうになつたからつて、もとのお母樣がなすつた通りのことをさせようと望むのは、望む方が間違ひだわ。

老婢　さう申せばまあそれまでですが。

芳子　殊に奧だつて今ではお兄さんとお姉さんと私とたつた三人きりで、お客樣と云つても殆んどないし、使つてゐる者も以前の半分とない位だから、昔見たいに大げさに何か拵へたり仕舞ひ込んだりする必要はないのよ。若し必要があれば婆やなんかにやきもきさせるまでもなくお姉さんから進んでなさるわ。あんな氣の寬い、いゝ方だもの。

老婢　それはあなた、正直なところ、奧樣は我儘もお强いし、時々肝癪もお起しになるが、根はさつぱりした靨のない方だつてことは婆やだつて存じてをりますよ。たゞ東京は東京、田舍は田舍でございますし、殊に斯う云ふ古いお家の仕來たりと云ふものは何より大切でございますからね。

芳子　お姉さんがこわさなくたつて、そんな昔の仕來たりなんか、もうひとりでにこわれかけてゐるぢやないの。

ピアノの音が止み、洋館の窓が開いて、龍子の上半身が現はれる。二十九。細面の美貌。蒼白い顏の色と大きな黑瞳に特色がある。芳子よりは華美な派な柄の單衣を着てゐる。

龍子　よつちやん、——お兄さんが歸つてゐらしたのぢやない。

芳子　いゝえ。どうして、

龍子　さうかと思つたから。——（龍子はこの言葉と共に庭に出て瓜を見つける。）婆や、斯んなものをまた此處へ擴げたのかい。

老婢　お晝からはこちらが一番日當りがよろしいものですから、ちよつと乾さして頂かうと思ひまして。

龍子　幾ら日當りがよくたつて、瓜を乾すのにわざ〳〵座敷の庭先へ並べなくたつていゝぢやないかね。さつさと片附けてお仕舞ひ。——本統にお前たちのすることつたら、庭の中も納屋の前も見境ひがないのだからやり切れやしない。

芳子　向藏のところだつてよく乾いてよ、婆や。私がこちらの端を持つて行つて上げるわ。

芳子蓆の一方を抱へ、運ぶのに手傳ふ。

龍子　打つちやつて置きなさいよ、よつちやん。そんなことあなたが手傳はなくたつて誰か呼べばいゝわ。（拜走つた高い聲で呼ぶ）伊助——やを——たま——皆んな何をしてゐるのだらう。——何處にゐるのだらう。——呼んだ時すぐと返事をしたためしがない。

老婢　若い者たちは裏の坪で籾乾をしてゐますのでせうよ。——お孃

樣、相濟みませんね。

　芳子と老婢、瓜の皿を持つて去る。

龍子　厭になつちまふ。明けても暮れても斯んな風で暮らすなんて。──東京を引き上げてから丸二年とたゝないのに、もう十年もこの山の中に燻つてゐるやうな氣がするわ。十年どころぢやない、惡くするとこのまゝ此處でお婆さんになつて、此處で死んで仕舞ふかも知れないのだもの。考へただけでも悚つとする。──いゝえ誰がそんな事を我慢されるものか。さうとも、初めから田舍に來る約束で私たちは結婚したのではない。田舍の家は田舍の家、私たちは私たちで東京で暮らす筈だつたのだもの。今考へると、私は何故田舍へ歸るなんて御免だと、强情を張り通さなかつたのだらう。一つは田舍の本統の生活が、私には分つてゐなかつたのだわ。厭だとは思つてゐても、何處か小說や詩の中にあるやうな美しい暮らし方でもあるやうに考へてゐたのが、間違ひの原因だつたのだわ。

　支配人の近藤洒三登場。五十年配の髭面の男。シャツに卷ゲイトルで山でも見廻りに行つて來たやうな樣子。

近藤　旦那樣はまだ町からお歸りではございませんか。

龍子　やがて歸つてゐらつしやるかと思つてゐるのだけれど。何か用事。

近藤　はい。只今村長の上原の奴にちよつと逢ひましたら、彼奴怪しからんことを申してゐますので──恐らく奧樣はまだ御存じなからうと考へますが、旦那樣にはもう申上げてあると云ふ話で──

龍子　一體何の話。

近藤　それがその誠に不屆き千萬な申條で。──恐らく實行は致しますまい。恐らく口で云つて見るだけで──

龍子　ちえつ。あんたの恐らくが出だした日にや限りがない。要點を仰しやいよ。──要點だけ。

近藤　それはその、村外れの並樹を村會の決議で伐らうとしてゐるのです。

龍子　並樹つて、宅が生れた時お父樣が記念にお植ゑになつたのだと云ふあの桂のこと。

近藤　はい、勿論その桂の並樹で。──話に聞くと、何んでもあの樹はさうやたらには生えない樹ださうで、殊に彼處に植ゑ込でんからでも、あれで三十四五年からたつてゐますから、伐るとなれば恐らく大した金目でございますよ。

龍子　でも何のために急にそれを伐るつて云ふのです。

近藤　村役場と小學校を改築するに就いて、適當な財源がないから、と斯う申すのですが、なあに、恐らくこれを口實に塚本家からうんと寄附金をせしめようとする腹だと私は睨んでゐます。恐らくこの想像は──

龍子　呆れた根性ね、でもそんな權利がどうして村長だの村會だのつてものにあるのです。お父樣がお植ゑになつたのなら當然うちの所有

有ちやないの。

近藤　ところが御先代の還暦のお祝の時でございましたか、あの並樹も周りの土地も悉く村へやつてお仕舞ひになつたのです。行く行くは公園にでもさせるお積りで――

龍子　――でも、それなら尚のこと大事に保存しなけりやならない譯ぢやありませんか。それを伐るなんて、亡くなつた人の立派な感情を踏みにじるやうなものだわ。

近藤　全く仰しやる通りなんで。――この問題に限らず代々の旦那方の御恩を思へば、幾ら當節だからと申して彼奴等が斯んな不都合なことが云へた義理はないのです。分けても御先代は、村の事にはどれほど骨を折つたか分らない方でございますからね。やれ堤防が切れた、ほら河の橋が落ちた。何がどうした、斯うしたと云ふ度に悉く身錢を切つて世話を燒いたものでございますよ。誠に失禮なことを申すやうですが、塚本家が昔のやうになくなつたと申すのも、――それはまあ貴族院なんぞへずつとお出でになつて、物入も嵩めば、餘儀ない關係筋から斫られた點も十分ございませうが、村のために捨てた金だつて決して馬鹿には出來ないのです。それを思へば恐らく――

龍子　あの村長つて人は、初めから村の者なの。

近藤　左様でございますとも。それもあなた、手前同様ほんの水飲百姓の小倅だつたのでして。尤も子供の時分から中々喰へない奴で、親爺の手許は早く飛び出してゐましたのですが、それが六七年前何處で何をして儲けたのか恐らく天道様より外には誰も知らない金を持つてひよつくり歸つて來ると、田地を買ふ、町の銀行株を持つ、家を新築する、終に今では村長さんで大きな顏して納まつてゐると云ふ譯でございますよ。――それも人の運で大に結構だとして、たゞ私の癪に障るのは彼奴が何かと云ふとこの塚本家に楯をつくことなのです。今度のことに限らず、百姓たちが小作料のことなぞで今までにない小理窟をこねたりするのは、皆んな彼奴の仕業だと云ふことを私は知つてをります。自分だつて田地持の端くれの癖に、彼奴は百姓共を唆して、流行の小作爭議位やらせ兼ねない奴でございますよ。

龍子　あんた知らないだらう。この春よつちやんが女學校を卒業して歸つた時、あの上原が長男の嫁に欲しいやうなことを云つて來たのは。

近藤　驚きましたなあ、そんなことがあつたのでございますか。何んと云ふ思ひ上り方だらう。身の程を辨へないにも程がある。――併し一體誰がそんな取次をいたして參つたのでございますか。

龍子　お仲人は驛長さんなの。

近藤　道理で。――あの風來者の幇間でもなければ。眞逆地著の人間がそんな馬鹿げたことを申して參る勇氣はございますまいつて。

龍子　だからそんな問題でも根に持つてゐるのぢやないかと思ふわ。

でなけりや、何も特別この家に楯を突く必要はないのだもの。さうぢやない

近藤　それも幾分手傳つてはゐませうが、根本は、恐らく何んでございますなあ──近頃東京の雜誌なぞでよく申します階級意識と云ふ奴で。小金が溜つて、村長までなつて威張つて見たところで、御當家の前ではもとの水飲百姓の上原に過ぎないのが口惜しいのでございますよ。恐らくそれから何もかも始まることなんで、──併し皆が皆驛長見たいな幇間ばかりぢやございません。村會の奴等の中には昔からのことを忘れない者も少しはあつていゝ筈ですから、私は奴等に談じてやる積りでございます。塚本家とこの村の義理合と云ふものを考へて見ろ。お前達にしろ、お前達の親兄弟にしろ、或は祖父祖母にしろ、どこの土地に生えた米を食つて生きて來たと云つてやります。小生意氣なことをするならしてもいゝから、先祖代々の胃の腑の中に詰め込んだものを吐き出してから、その上でやつて吳れと云つてやります。

　芳子が歸つて來る。

芳子　お兄樣が歸つてゐらしたやうだわ。

近藤　左樣でございますか。では私はちよつとお目にかゝつて。

　近藤去る。

芳子　どなたか御一緒のやうよ。

龍子　お客樣。

芳子　下の坂をお兄樣と上つていらつしやるとこなの。洋服を着た若い方のやうだわ。この邊の人ではなさゝうよ。

龍子　──珍しいことね。たまにお客樣だと云へば、小學校の校長さんか、お寺の和尚さんか、驛長さんか、あの村長位に極まつてゐるのに。

　塚本圭一、三十四五の中肉の善良らしい男。稍陰鬱な表情。鼠つぽい夏の洋服で下手から現はれる。

龍子　お歸りなさい。──どなたかお客樣ですつて。

塚本　あゝ、汽車で珍しい人に出逢つてね、無理に引張つて來たのさ。──誰だか當てゝ御覽。

龍子　出し拔にそんなこと仰しやつたつて分りやしないわ。──どうしてゐらつしやるの

塚本　吹き井で顏を洗つてる。

龍子　でも誰だらう。眞逆東京の知つた方ぢやないでせう。

塚本　今に來るから待つた方が樂しみだよ。

龍子　勿體ぶつてどうでせう。──ねえ、よつちやん。

　牧田稔、二十六七、都會の良家に育つた靑年らしい溫雅と快活を備へた風貌、白ズボンに黑のアルパカの上着をきて、採集用の大きな胴亂を肩から吊してゐる

龍子　まあ！　──稔さんだつたの。──まあ、よくねえ。──まるで夢見たいだわ。

牧田　暫くでした。

龍子　二年ぶりね。――さう〳〵これは妹です。――よつちやん、東京の牧田の從弟よ。

芳子。初めて。

牧田　初めて。

龍子　孟さん、宅は先刻實に勿體ぶつてね、誰を連れて來たか中々云つて呉れなかつたのよ。乾度珍しいお客樣だとは思つたけれども、眞逆あんたが來ようとは思ひもつかなかつたわ。

塚本　勿體ぶつただけの價値があつたぢやないか。

龍子　えゝえ、大ありだわ。――叔父樣も叔母樣も御機嫌でせうね。さう、結構ね。――だけども孟さんは何處へいらつしやるところだつたの。どうして宅と出逢つたの。

塚本　それが全く偶然なんだよ。今日は銀行で手間取つて、ぎり〳〵に停車場に驅けつけると云ふ騒ぎでね。周章てて汽車に飛び込んで不圖氣がつくと、二つ三つ先の腰掛にかけてゐる若い人が何んだか孟君らしい。眞逆とは思つたけれども、後の恰好があんまりよく似てゐるので行つて見たら矢張りさうぢやないか。何處へ出掛けるのだと聞いたら、Y――温泉に加納博士が來てゐられるので行くところだと云ふのでね、それならちよつと家に寄つて行き給へ、次の停車場で輕便に乘り換へれば一時間半とはかゝらない。實際此處まで來て寄つて行かないのは、門口を通り過ぎると同じぢやないか、と云つて、やつと連れて來たのだ。

牧田　あの乘換驛から斯んなに直ぐだとは僕は知らなかつたのです。

龍子　幾ら知つてゐたつて、宅に逢はなけりや寄つて呉れやしないでせう。どう。

牧田　弱つたなあ。

龍子　皆んなさうよ。東京の人達つたら。私が斯んな田舍で暮らしてゐたつて、可哀想に、どんな樣子か見て來てやらうと云ふ親切氣のある人は、兄姉たちにも親類にも一人もゐないのだから。今度は孟さんが皆んなの代表でゆつくり逗留なさいね。大學なんかどうせ九月になつたつて本統の授業はないのでせう。殊にあんたは學生さんぢやないし、もう堂々たる助手先生なんだもの。

牧田　子供の時から、僕はあんたにかゝつちや叶はないんだ。

龍子　冗談はよしてさ、Y――温泉なら此處から四時間もあれば行けるのよ。ねえあなた。

塚本　四時間あれば十分さ。

龍子　だからどうしても行かなきやいけないのならいつだつて行けるわ。――でも温泉には博士だけ。それともお家の方も御一緒。

牧田　皆んな行つてる筈なんです。

龍子　奥さんもお孃さんも勿論いらしてるのね。――まあ、それぢやあなた、孟さんを此處で横取りしちや悪かつたのよ。

塚田　どうして。

龍子　だつて孟さんは未來の奥さんのところへ行くとこなんですもの。

牧田　そんなことはありませんよ。皆んな出鱈目です。

龍子　いゝえ、隱したつて駄目、私東京にゐた時分に叔母樣から聞いたことがあるのですもの。ダンスなんか上手で少しハイカラ過ぎるけれども、孟の今後のためには惡くない縁談だからつて。——さう云へば、よつちやん、いつだつたかの寫眞畫報に寫眞が出てゐたぢやないの。

芳子　さうでしたか知ら。

龍子　あら、覺えてゐないの、洋服でラケットかなんか持つて。——活潑さうな美しいお嫁さんだわ。

塚本　そりや氣の毒だつたな、そんな幸福な旅行だと知つてゐりや決して連れて來るのぢやなかつた。——併し孟君もいかんよ。さう云ふお目出度い話があるのに秘密にして置くから斯う云ふ手違ひを生ずるのだ。

牧田　困るなあ。實際まだ何んにも極まつてる譯ぢやないんですから。殊に僕自身としては、結婚なんかよりもつと大事な仕事がうんとあるんですからね。

龍子　ぢやまあそれとしといて、折角來て下すつたのだから、此方で暫く遊んでから温泉へ行くことになさいよ。少しは待たしてあげるのもいゝわ。

　近藤現はれる。

近藤　上原がお目にかゝり度いと申して參つてゐますが。

塚本　すぐ行くから部屋に通しておいて呉れ。

　近藤去る。

龍子　並樹のことでせう。近藤から聞いて腹が立つたわ。何んて人だらうとおもつて。

塚本　仕方がないよ。これからは色んな事が起きて來るのだ。孟君、君は植物で畑違ひだから讀んだことはないだらうが、エマスンの友達でソローと云ふ文學者の書いたものゝ中にね、斯う云ふ意味が云つてあるのだ。米國の鐵道の枕木の下には、一本々々に愛蘭土の勞働者の死體が横はつてゐる。この死體が目を醒まして立ち上つて來た時が怖ろしい。——と。僕は大學を出て東京で語學の教師をしてゐた間は、幾ら新聞雜誌で勞働問題や、社會問題が八釜しく論じられてもそれ程には感じなかつたが、田舍に歸つて斯んな家で暮らして見ると、ソローの警句を痛切に感じるよ。日本の枕木も身動きをし始めた。いや、もう立ち上つて叫び出したのだ。——十年前には臺所口から身をこゞめて入つた男が、今では對等の客になつて座敷で威張つてゐる。而して僕を成敗しようとしてゐる。彼奴も一箇の枕木なのだからね。——君もいゝ序だからよく觀察して行き給へよ。研究室の檢微鏡の下の世界とは、また別趣の面白い現象がうんとあるから。

塚本去る。

芳子　ぢや、私も。――お客様のお部屋を掃除するやうに云つておかなければ。離室の方になさるでせう。

龍子　さうね。それから此方に麥湯でも持つて來るやうに云つて頂戴。

芳子編物を纏めて去る。引き違へに女中が藥罐とコップを載せた盆を持つて來て卓の上に置いて退く。

牧田　何か心配なお客ですか。

龍子　いゝのよ、氣にしなくたつて。(コップに麥湯を注いで與へながら)絶えず何か知らごた〱してゐるのですから。――田舍の人つて、私は呑ん氣な人の善い者かと思つたら、まるで大違ひね。慾張りで、狡くつて、横着なんだもの。私もう懲々だわ、斯んなところで暮らすのは。本統に東京のことを考へると、何んでもいゝその儘飛び出しちまひ度いやうな氣のすることがしよつちうよ。

牧田　併し、斯んな立派な土地や山を持つて、先祖代々の邸に住まつて、誰に頭を下げるでもなければ、束縛を受けるでもなく、自由に好きなことをして暮らされるのだから、餘り不平は云へた義理ぢやないなあ。正直に云ふと、僕はあなたの田舍が斯んないゝ處だとは思はなかつた。單に景色が美しいばかりぢやなく、廣々とゆつたりして日本離れがしてゐる。僕は東北の旅行が初めてのせゐか、それを最も強く感じて自分までいゝ氣持ですよ。――人間だつて東京近邊の者なんかよりは朴訥で、あなたの云ふ人の惡さうなところは別にないらしいぢやありませんか。

龍子　初めてのお客様は、申合せたやうに孫さんと同じことを云ふから笑止しくなつちまふ。皆んな見掛け倒しですよ。えゝ、さうですとも、何もかも――あんたが重苦しいづう〱辯や、毛むくじやらの顏に騙されて、この邊の者を朴訥な氣のいゝ人間のやうに考へると同じに、私たちを何不足ない大地主樣で、この上なしの仕合者だと思ふのは、此處からずつと見下ろした田地だけでも、悉く銀行の擔保に入つてゐると云ふことを知らないからよ。家だつてさうだわ。もう半分腐りかけて倒れるばかりだし、藏と云ふ藏は殆んど空つぽだし、――

牧田　さう云へば斯う云ふ宏大な家は、昔の集合家族制度の標本的な遺物ですね。――一體建てゝから何年になるのだらう。

龍子　そんなこと分かるものですか。村の年寄り達だつて知らない位なんですもの。――尤も西洋館の方だけは、お父樣が第一期の貴族院議員で出てゐらした時、東京の大工を連れて來て建てたのだと云ふから分つてゐるわ。

牧田　それだつてもう、四十年から經つ譯ですね。

龍子　ですもの、母屋は想像されるでせう。斯うやつて外から見てゐる分にはまあ我慢出來るわ。田舍で空氣の美しいお蔭で、白壁なんか何十年たつてもまつ白だつて云ふのですから。――でも一見家

の中に入らうものならそれこそ大變、壁はぼこ／＼だし、根太はゆるんでゐるし、屋根は腐つて雨は洩るし――一つにはあんまり廣過ぎるのと古いので、少し位修繕したのでは追ひつかないで駄目だからひどくなるばかりなの。それでも今はまあ極樂よ。その內に明けても暮れても雪が降る。吹雪が續くで、いつが晝だか夜だか分らないやうなまつ暗な家の中に、蟲のやうにぢつと凍えてることを考へて見て御覽なさい。殊に昨年は初めてだつたし、雪の重味であの古い家が變な軋み聲を立てゝ鳴るのを聞くと、本統に怖くなつて夜もおち／＼眠れなかつたわ。お仕舞ひにはとうとう病氣にまでなつたのよ、喬さん。――私は東京のことを考へてはよく泣いたわ。而して私が斯んな思ひをして雪の底に寢てゐるなんてことは誰も知らないのだと思ふと、猶更悲しい傍から口惜しくなつたわ。――ねえ、さうでせう。東京の方では私が此處でどんな目に逢つてゐたつて、矢張り兄姉ぢうで一番仕合せな結婚をしたやうに思つてゐるのね。

牧田　そりやさうですとも。塚本さんはあんな立派な方で、殊にあなたに對してはどんな親切な夫よりも親切だと云ふことを皆んな信じてゐますから。

龍子　それだけは嘘ぢやないわ。あの人はいゝ人で、私にだつてこの上なくよくして呉れてよ。――でも、さあ、何んと云つたらいゝか知ら、兎に角塚本もこの田舍に歸つてから變つたわ。妙に陰氣になつて臆病で。東京にゐた頃のやうなからりとしたところがなくつて――二人で夜なんか默つて坐つてゐると、私不意にむら／＼つとして、思ふさま小突き廻してやり度くなつたり、また急に可哀想なやうな情ない氣がして、一緖に聲をあげて泣き度くなつたりするの。一つは家がいけないのね。あの古つぼけた部屋や、まつ黑な天井や、苔でも生えさうな冷たい壁の中には、先祖から何百年と經つて來た變な淋しい、無氣味な空氣が詰まつてゐて、あの中に住む者の身體にいつとなしに浸み込むのぢやないかと思はれてよ。宅ばかりぢやないあのよつちやんがさうなの。氣がつかない。

牧田　何んにも別に。

龍子　顏だつてあんなに可愛らしいし、氣だても優しくていゝ娘なのだけれど、とても內氣で陰氣臭いつてないの。――私あの人達を見てゐると、今に段々自分もあんな風になつて行くのぢやないかと思つて怖ろしくなるわ。私ならそれまでに氣がちがつてしまふに違ひないから。――

牧田　馬鹿々々しい。默つて聞いてゐれば、あなたと云ふ人は何を云ひ出すか知れないんだ。

龍子　冗談ぢやなくてよ、私どうかすると本統に氣がちがひさうな時があるの。その時には私ピヤノへかじりついて、何時間でも滅茶苦茶に彈つかき廻してやるわ。だつてさうでもしなけりやとても我慢出來ないんですもの。するとね、村の人たちは私が日本一の惡者でお引きずりで、贅澤で、ピヤノでも彈くより外に暮し方を知らない

やうに云ふのです。何んと云つたつて、そんなことは構やしないわ。どうせあんな人たちにこちらの氣持が分かる筈はないんですから。でも口惜しいのは塚本までが妙に私のピヤノで氣兼することなの。汗水垂らして田畝で働いてゐる人たちに對して、あまり氣樂らしく見えやしないかつて譯なの。まあそれがあの人の立派な點かも知れないけれど、一方から云へば、その氣の弱いところへ百姓たちがつけ込むのだから自烈つたくて腹が立つわ。ですから私はわざと云つてやるの。ピアノを彈いたからつて、何も村の人たちの仕事の邪魔になりはしまいし、殊に私のピアノは實家から持つて來たので、百姓たちの執念の籠つたお米で買つた譯ぢやないから遠慮が要るものですかつて。——當り前だわ、そんなことまでびく／＼してちや堪らりやしない。こちらで遠慮するほど向ふぢやつけ上つて來るのですもの。奥に來てゐる村長の話だつて、爺さんなんか聞けば吃驚するわ。先代が公園にさせる積りで、土地までつけて村に寄附した並樹を伐らうとしてゐるのよ。

牧田　併し此處から斯うやつて眺めてゐると、あんたの云ふやうなことや、また塚本さんの云つたやうな心配事なんかありさうには思はれませんね。如何にも美しくつて、豐饒で、平和さうぢやありませんか。そんな厭な話や不幸な事は、何處か遠い別世界のことに過ぎない氣がする。

龍子　ふん、そりやあんたが仕合せだからだわ。Y——温泉や加納さんのお爺さんのことで一杯になつてゐるからだわ。それこそ私たちとは別世界にゐるからだわ。

牧田　龍子さん、それだけはよして下さい。先刻云つた通り僕はまだそんなことを問題にしちやゐないのだから。

驛長が制服で下手から入つて來る。六十を四つ五つ過ぎた位の老人。小男で、禿げてやつと一と摘み殘つた灰色の毛髮を綺麗に撫ぜつけてゐる。いつも一杯やつてゐるやうな赤い顏。

驛長　これは奥樣、——今日は誠に結構なお天氣で。——實は先刻御主人のお歸りを驛でお見受け申しましたので、お差閊へなかつたらちよつとお目にかゝり度いと存じまして。——裏門から誠に失禮ですが、斯う云ふお邸になると、手前共と違つて表まで廻ればすぐ二三町から違ふ譯ですからな、老人の無精でつい——

龍子　まあ、お掛け下さい、宅は丁度人が見えてゐまして。

驛長　いや、少しも急ぎません。この頃は驛も閑で極く呑氣にやつてゐますから。

龍子は新たなコップの一つに葡萄を注いで驛長に與へた序に、上手の森の方へ避けてゐた爺を呼ぶ。

龍子　爺さんも如何。

驛長　やあ——これはお珍しいお客樣のやうですが、たしか先刻御主人と——

龍子　東京の私の身内の者です。

驛長　左樣ですか、それは〳〵ようこそ。――私は平井と申しまして（彼は大急ぎでポケットの紙入から名刺を出して卓の上に差出しながら）當驛に勤務いたしてをります者で。御當家には何かと御厄介を願つてをります。どうぞ宜しく。

牧田　（同じく名刺を出して）私は斯う云ふ者です。

驛長　ほゝう。大學の植物研究室にお勤めと申しますと、いづれ博士で大學教授と云ふ譯でございますな。いや、誠に御名譽なことだ。奥さんお樂しみでございませう。

龍子　何んだか分かりはしません。

驛長　どうして、それはもう何より確かです。實は牧田さん、打ち開け話をいたしますと、私も初めから鐵道畑の者ではなく、これでも昔は東京の最も名譽ある學校に勤務いたしたことがあつたのでしてね。

牧田　はゝあ。

龍子　平井さんはね、一と頃學習院へ出てゐらしたのだつて。

驛長　はい、學習院でございます。丁度乃木將軍閣下があゝ云ふ御變でお亡くなりになつた直ぐ後で、元より斯う云ふ無學者ですから、教官なんて云ふ譯ぢやございません、ほんの生徒課の端役に過ぎないのでございましたが、併し何んですなあ、學校に勤める以上は何んと云つても學習院だとつく〴〵思ひますなあ。外のことはさて置き、たゞ生徒だけの例で云つて見たつてこれが恐くたゞの子供ぢやない。ちつと呼ぶ名前が一條！　徳川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　と來る。でなければ岩崎！　三井！　安田！　――と斯うでせう。而も鍛冶屋の小伜を呼ぶやうに呼び捨てですから豪儀なものです。馴れないうちは自分で呼びながらぶるぶるつと胴震ひがした位で。――實際ああ云ふ氣持はよその學校では決して味はれませんよ。あなたなんかも大學にゐらつしやれば、將來まあ申分のない御身分と云ふものですが、併し機會がおありでしたら學習院だけには是非とも一度はお勤めになつて見ることですなあ。且つあなた方は私なぞとは違つて入るとなれば教官先生で、授業のラッパが鳴る、教室に入る、すぐ出席簿で、一條！　徳川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　――とやられる譯ですからね。

牧田　大變だな。

驛長　それに學習院教官の大禮服と云ふのは御承知か知れませんが、これがまた素破らしいものでして。

牧田　いや。知りません。

驛長　普通の文官の比ぢやないのです。御承知か知れませんが、學習院教官は宮内官ですからね。從つてその大禮服も式部官たちの着るやうな。金モールのぎら〳〵する程くつ付いたあの種類の奴で――いやあれを着た氣持は特別ですなあ。――尤も私は殘念ながらその資格がなかつたのですが。

女中の一人が下手から入つて來る。

女中　お風呂が沸きましたので、お客樣にお入り下さいまし。

龍子　孫さん、入つていらつしやい。

牧田　僕なら急ぎはしませんよ。この邊は殆んど東京の秋だから汗も出ない位だ。

女中　あの、それから——晩のお支度に鷄でも拵へさせませうか、お孃樣が伺つて參れと仰しやいました。

龍子　さうね、ぢや拵へて置きなさい。私も直ぐ行つて見ますからつて。

驛長　これは御用事のところを失禮いたしましたな。ではいづれ私は出直して參ることにいたしませう。

龍子　左樣ですか。奥のお客さんも頓てお歸りだとは思ひますが。

驛長　なに、どうせ只今は驛の方も隙で極く呑ん氣にやつてゐますから、また伺ひます。——牧田さん、あなたもどうか何んです、御散歩のお序に驛の方へお立ち寄り下さいませんか。大に東京話でもいたしませう。全く今日はあなたにお目にかゝつたお蔭で久しぶりに學習院時代を思ひ出して非常に愉快でした。ざつと二た昔になりますからな。あの頃私が一條！　德川！　近衛！　前田！　島津！　毛利！　岩崎！　三井！　安田！　と呼び捨てにした連中が、今では悉く天下の公侯伯子男でなければ、日本一の大金持で威張つてゐるのですから、自分まで斯う肩身が廣いやうな氣持でしてね。——いや、また長くなりさうだ。どうもどちらへ上つても私は長つ尻でいけないつて、よく家内から叱られる譯でして。はつはつはつは。あゝ、さう申せば家内も久しく御無沙汰いたしてゐますが、いづれその内伺ひ度いと申してをりました。何とぞあしからず。——では奥さん、御免下さい。牧田さん、失禮いたしました。

驛長去る。

牧田　驚くべき存在だ。一體何の用事で來たのだらう。

龍子　用事なんか本統はめつたにありやしないのよ。たゞあんなお饒舌をしちや、村の重だつた家を順々に廻つて歩くだけなんだわ。

牧田　併し、あれは傑作ですね。（驛長の口眞似で）一條！　德川！　近衛！　前田！——

龍子　お止しなさいよ、馬鹿々々しい。——でも、今日はあれでまあいゝ方なの。どうかすると三大節の度に貰ふ打物の寸法まで聞かされるのだからやり切れやしない。——ねえ、孫さん、村の者は皆んな意地惡で、何に限らず私たちに楯を突かなけりや現代的ぢやないと思つてゐるし、さうでない者と云へばあゝ云ふ人達だし、その中にどうして生きて行けると思つて。これでも私は幸福な申分のない身の上だと云ふの。私の泣言や不平は皆んな我儘な暇潰しのヒステリだと云ふの。

牧田　その點は同情しますよ。併し——

塚本が和服になつて上手の洋館の方から來る。

龍子　村長との話はどんなことになつたの。

塚本　うむ。それはまあゆつくり話さう。――驛長が來たつて。

龍子　えゝ。例の學習院で爺さんすつかり當てられたとこなの。

牧田　正直に云ふと、僕はあの人は氣が狂つてるのぢやないかと思つた位です。醫學上で何んとか云ふのですね、外の話は當り前で、或る特別の事になると急に斯う發作的にクレージになつて來るのがありませう。

塚本　なに、あれで何處までも健全で、大眞面目で、且つ非常に得意なのだ。

牧田　さうだとすれば日本も頼もしい譯だなあ。――あゝ云ふ人物が存在する以上は、あなたの心配するやうな枕木の幽靈なんてものは、少くともまだ當分この邊には出現しさうもないやうに思はれますね。

塚本　いや、僕は專門家でないから思想界の複雜な現象に就いては斷言は出來ないが、現在の日本と云ふ國は世界のあらゆる思想の吹き溜りだと思ふ。僕が子供の時から雪に親しいから、この比喩が特にぴつたり來るのかも知らないが、まああの雪を見給へ。雪の吹き溜りと云ふものは廣い、平な場所にはめつたに出來ない、乾度山の陰とか、野原の果とか、家の垣根とか云ふところだ。日本は地球上の位置からすれば、太平洋と云ふ廣漠たる空間のまん中に立つてゐる一つの垣根で、思想の吹き溜りには持つて來いの場所だから、世界の最も古い思想から世界の最も新しい思想が堆積してゐる。丁度それと同じ理論がこの北日本の果にも應用される譯で――

牧田　ぢやこの田舍が日本の思想の吹き溜りだと仰しやるのですか。

塚本　まあさうだ。田舍は何處でも同じだが。――人間の例を擧げて見れば一層明瞭になる。昔から土地を一歩も離れたことのないやうな連中は、雪が土にしがみ付いてゐるやうに自分の田舍にしがみ付いてゐるのだし、また村長とかあの驛長とかの手合ひは、散々世間の荒い風に揉み拔かれた末この吹き溜りに吹きつけられたのだ。だから學習院の下役を勤めたことを一生の名譽としてゐる善良な貴族崇拜者と無意識的な社會主義者と、決して一緒に存在される筈のないものが隣り合つて並んでゐる。――人事ぢやない。僕だつて結句同じ吹き溜りの仲間かも知れない。

龍子　厭な人、譬へにことを缺きはしまいし、何もわざとそんなことを云はなくたつて。

塚本　いや、つく〴〵そんな感じのする時がある。

龍子　なら私云つてあげる。あなたのは同じお仲間だつて吹きつけられたのぢやなく、自分から好んで吹き溜まりの中に飛び込んだ方だわ。勝手に求めて苦勞してゐるのだわ。それも自分だけではなく、あんなに厭がつた――泣くほど頼んだ私を無理矢理引つ張つて來て一緒に投げ込んだのだわ。あなたの仰しやる吹き溜まりの中に――底のない雪の穴の中に。

塚本　さう云はれるとお前には濟まないか、併しあの時は已むを得なかつたのぢやないか。親爺の死後、五六年も僕は家を打つちやつておいた。人が善いだけで無能な近藤に任せきりで、何がどうなつてゐるのか皆目知らなかつた。正直に云ふと、知るのが怖ろしかつたのだ。

龍子　それでいよ〳〵歸つて來てあなたが御自分でやつて見たとして、近藤に任せてゐた時よりも何かよくなつたことがあるの。却つてわるくなつた分でも善くなりはしないのでせう。さうでとも、私たちは歸つて來てい丶事なんてこれつぼつちもありはしない。村人たちは私が田舍のところを知らないからつて馬鹿にして、自分たちで勝手な眞似をするし、村の者は村の者で、あなたの穩かな氣質につけ込んで失敬なことばかりしてゐるのぢやありませんか。

塚本　それは仕方がない、一つは先刻云つた通り時勢だ。一つは僕が無能で威嚴がないからだ。

龍子　あなたがそれだから餘計附け上るのだわ。あの人たちの狡いのや汚い根性が、時勢のせゐばかりにされるものですか。――でも、どちらだつて構やしない。私はそんなことを議論する積りはないのだから。たゞ私の堪らないのは、そんな中で自分が暮らさなけりやならないつてことだわ。今も爺さんにさんざこぼしたとこだけれど、考へれば考へるほど厭で厭で、もう一日だつて我慢出來ないわ。ねえ、また東京に歸りませうよ。――爺さん、あんたも諦めて下さい。私を可哀さうだと思つて下さい。

爺　――

塚本　心配し給ふな、爺君、この人は斯うなるとまるで赤ん坊なのだから。――今更そんなことが出來るか出來ないか、考へて見れば分かるぢやないか

龍子　出來ますとも。あなたがたつた一つ決心すれば、明日にだつて出來ることですわ。

塚本　何を決心するのだ。

龍子　皆んな捨てゝ仕舞ふのよ。持つてゐるものを皆んな。山も田地も斯んな家屋敷も何もかも。

塚本　――

龍子　あなたは二た言目には自分の物だか銀行の物だか分らないつてこぼしてゐながら、そんな田地や山に何の未練があつて。屋敷だつてさうですわ。二十近くもあつて腐れかけてゐる部屋や、幾つあつても皆んな空つぽの藏を、どう云ふ譯で大事に保存して置かなけりやならないの。思ひ切つて投げ出して仕舞へばそれで私たちは自由になれるのですもの。あなたは今一度學校へ勤めたつていゝわ。さうなれば私どんなにでも質素に暮らして見せてよ。女中なんか要らない、私ひとりで働くわ。えゝ、働きますとも。斯んなところで斯んな厭な思ひをして暮らすことを思へば、何んだつてしてよ。――本統に一旦その氣にさへなりや、明るい、暢々した、思ひ通りの生

活が待つてゐるのに、いつまでも此處に愚圖ついて、百姓たちを相手に怒つたり爭つたりして暮らすなんて馬鹿々々しいわ。ね。ですから決心して頂戴。今一度東京に出ると約束して頂戴。――丁度いいから喬さんに證人になつて貰ふわ。

塚本　お前の考へるやうに、さう物事が簡單に片附く位なら、僕は今日まで苦しみはしない。

龍子　さう。――ぢや矢張し駄目なのね。――私がこれまで云つたつて、私の云ふことより、あなたには田地や山や家屋敷の方が大事なのね。不斷一つぱし偉さうなことを云ひながら、自分で働いて食べるよりどんな不快な思ひをしても懷手をして樂をしてゐ度いのだわ。地主樣の地位を捨てるのが惜しいのだわ。昔通りにあんな百姓たちを支配して威張つてゐたいのだわ。どの田地の小作料は安い高いの。もつと負けろの負けないの、俵の目方が缺れたの缺れないの、狡いの狡くないの、胡魔化すの胡魔化さないのつて、そんなことで爭つたり喧嘩したり憎み合つたりして、あなたの所謂吹き溜まりで一生埋もつてゐる積りなのだわ。

牧田　龍子さん、そりや餘り非道すぎる。――

龍子　何故。いゝえ、本統のことですもの。宅はそれが好きなんですもの。ですから好きな通りしてりやいゝ。――たゞ私まで御相伴は御免だわ。そんな吹き溜まりの底なんかにどうしたら生きてゐられるものか。考へただけでも息が詰まりさうだ。――　あゝ、誰でもいい、私を引つ張り出して頂戴。此處から引つ張り出して、――引つ張り出して。――(卓に凭つて哭慟する。)

(幕)

第二幕

牧田の部屋になつてゐる離室、すべての造りが舊家らしいがつしりした立派さを持つてゐるが、襖の一部分は剝げ、唐紙は煤けた儘である。前面と上手の二方が庭。第一幕の舞臺面に現はれた洋館を、下手の廊下の端に見るやうになつた位置である。部屋の中には牧田が既にセルを着て、机代りに使つてゐる紫檀の卓を前にして坐り、周りに顯微鏡や新聞紙や書用紙を擴げて採集した植物の標本を作つてゐる。第一幕から二週間過ぎた日の同じく午後。塚本が下手の廊下から入つて來る。これも黑つぽいセル。

塚本　勉強なら邪魔だな。

牧田　なに構はないんです。この間から押しつ放しにしてたからちよつと覗いて見ただけで。(急いで散らかつたものを片附けながら)

子さん今日は如何ですか。先刻採集の歸りに例の並樹のところで町のドクトルの自動車と出逢つたから、またうちに來たのかと思つて吃驚しましたよ。

塚田　どこか奥の村の病家へ行かれたらしい。――あの院長が自動車を乘り廻すやうになつてから、我々田舎に住む者はそれでも大助かりだ。去年の冬龍子が病かつた時分には、まだ町の方も自動車が今程でなく、一々汽車で往診して貰ふ始末で間だるつこくて弱つたものだが。

牧田　併し幾ら便利になつたからつて、あんな自動車にさう度々來て貰ふやうなことがあつては困りますねえ。僕に云はせれば、龍子さんは半分は自分で求めて病氣してゐるのだ。今度の病氣だつて此間のヒステリが原因なんだから。――本統なら僕は從弟としてあの人を辯護しなきやならないのだけれど、あれでは辯護の仕樣がない。御承知の通り大勢の兄姉の末つ子で、亡くなつた伯父伯母がこの上なく甘やかしたので、龍子さんには子供の時分からあんな我儘な激しいところがあつたのです。その癖、正直な、曲つたことの嫌ひな美しい性質なんだけれども。――要するに我儘です。それだけは辯護の餘地がありません。僕はあなたがお氣の毒だ。

塚本　それは寧ろ僕から君に云ふべきだと思つてゐる。偶然僕に出逢つて斯んなところへ引つ張つて來られたお蔭で、まつ直ぐにＹ――溫泉に行つてゐれば何んにも知らずにすんだごたごたの中に捲き込まれたのだから。

牧田　いや、僕はあなたに此處に連れて來られたのを色んな意味で感謝してゐるのです。いゝものも隨分採集出來たし、それに靜かで、――涼しくて自然は立派だし、あなた方は皆んな親切にして與れるし、――すつかりいゝ氣持で。斯んな樂しい夏を送つたのは生れて始めてだと云つてもいゝ位です。實際斯んな美しい田舎を少し位面倒な人事問題があるからつて、あゝ蹴なして厭がる龍子さんの氣が知れない。あの人は何處までも都會人で、田園の生活と云ふものにてんで興味がないのですね。それはまあ已むを得ないとして、自分の嫌ひなものは悉く無價値だと信じ込んでゐるのは非道い。――女は一般にさう云ふ傾向らしいけれども、兎に角我儘な偏見だ。

塚本　併しね、喬君、君の意見は要するに二週間のお客樣としての意見で、實際この土地に住むとなれば、君だつて龍子に近い考へ方に變つて行くに相違ないよ。

牧田　――それならば、あなたは根本に於て龍子さんの考へを否定しないのですか。

塚本　さう云つてもよい。龍子としてあゝ考へるのは無理もないと思つてゐる。――それは君が云ふまでもなく土地は立派で、關東や關西地方に比べれば十分ゆとりがあるし、景色も雄大で美しい。この中で金と米と時間に不自由のない大地主樣で、周りの自然に釣り合つた悠々とした氣持で暮らすことが出來たら確かに惡い生活ぢやな

い。現に僕の家なぞでも代々それで暮らして來たのだらうが、併しそれは文字通り昔話で、さう云ふ地主の生活はもう存在してゐられなくなつたのだ。丁度封建制度の崩壊で、大名や武士の階級が六十年前に滅びてしまつたやうに、滅びようとしてゐる。嚴密に云へば僕の親爺の代位で精神的には滅びてしまつて、今はたゞ制度の形骸が殘つてゐるに過ぎない。それも外から滅ぼされつゝあると云ふよりは内から漸次崩壊してゐるのだ。杏君、この意味が君に分るかい。

牧田　――

塚本　僕自身を例に取つて説明すればよく分かるだらう。詰まり僕がさあ何んと云ふかな、一種の傳統的の地主魂を失ひつゝあることだ。昔の地主たちのやうに頑張れないことだ。おれの土地の米を喰はしてやるのだと云ふ氣位になれないことだ。小作人たちをものを云ふ機械だと思へないことだ。彼等の額の汗が無視されないことだ。彼等は炎天の田の中で泥だらけになつて働いてゐる時に、自分たちは懐手をして家の中に坐つてゐられる、而かも收穫となれば四分六分だ。この二分の權利が果して正しいかどうかに就いて疑惑を持ちはじめたことだ。――僕はこの前君に枕木のことを話したが、この幽靈は外から我々の戸を叩いてゐるばかりでなく、いつの間には我々の心の中に忍び込んで内からも我々を脅やかしてゐる。寧ろその方がこたへ方が深刻だ。

牧田　あなたの氣持はよく分かります。またあなたのやうな性格であなたのやうな地位にゐれば、自然さう云ふ風に考ふるのも無理とは思はないが、併しそれでは餘りに苦し過ぎやしないかなあ。もつと呑ん氣な考へ方をしてもこの世界では十分許さるべきだと信じますが。――尤も僕は社會主義じみた書物なんか一冊も讀んだことはなし、從つて委しいことは元より分らないのだが、高等學校の寄宿にゐた頃、大學を出たら大に社會運動をやるのだと云ふ男が同室に居て、議論だけは毎晩聞かされたものです。その男は僕が檢微鏡を覗いたり、日曜日になると胴亂をかついで出掛けたりするのを、時代に無感覺な閑人だと攻撃するので、僕はその度に云つてやりました。――僕の畑のことで話して見ても、この地上にはあらゆる種類の植物があらゆる生態を持つて生存することを許されてゐる。同時に彼等は悉く薔薇ぢやない、單に綠色の細胞に過ぎない隱花植物もあれば、踏みにじられるためにのみ存してゐるやうな菌類や苔類もある。而かもそれ等の菌類や苔類は決して美しい薔薇でないために、同じく薔薇は菌類や苔類でないために、その特殊性に依つて各自の生存價値が發揮されるのぢやないか。それで面白いのだ。人類のことだつて恐らく同じだ。然るに君の議論は地上の植物を悉く薔薇にしなければならない。寧ろ薔薇になる權利を持つてゐると主張するやうなものだと。――勿論どちらも高等學校の寄宿舍臭い無責任な議論に過ぎないのですが、併し僕は植物の一研究者としてこ

の根本の理論だけは今でも疑ひませんよ。――すべてが薔薇ではありえないと云ふことは。

塚本　それは或はさうかも知れない。併し當面の問題はすべてが果して薔薇であり得るかあり得ないかではなく、即ち實現の成否ではなく、吾自身が薔薇になり得る權利があると意識し出したことだ。云ひ換れば薔薇が自分か薔薇であつて、彼が何故若であるかを考へ始めたことだ。――これが僕を氣の弱い、無能な、意久地のない旦那にして仕舞つた。その癖彼等と仲間になつて自分で鋤鍬を取る勇氣もなければ、體力もない。それどころぢやない、彼等のつけ上つた小生意氣な態度や、昔を忘れた横着な言動が一々癪に障る。この野郎と思ふ。親爺たちなら斯んな時には毆りつけてやつたのだと思ふ。併し僕には決して毆れない。却つて自分で讓歩して彼等の蟲のいゝ要求を滿足させるやうな結果になる。それでゐて毆つた親爺たちの三分一も偉い旦那だとも、情深い地主樣だとも思はれる譯ぢやないのだからね。

牧田　さう云へば、あの並樹の問題はその後どうなつたのですか。

塚本　僕は遠慮なく伐つて吳れと云つてゐるのだ。

牧田　併し惜しいなあ、あれまでになつてゐるのを伐るのは。この邊でこそ桂の樹は珍しくはないが東京なんかでは非常に稀ですからね。植物園に一本と、その外ではA――侯爵の庭に一本、あの長い藻のやうな枝を垂らして立つてゐるのを或る機會に見たことがあつたが、樹はさう大きくはなかつた。それが此處のは並樹で、一町から續いてゐるのだから素張らしいものですがね。

塚本　どうも仕方がない。僕に金がないのだから。――君に話したか知らないが、村ではあの並樹の代償として僕から三千圓取らうとしてゐる。詰まり三千圓出せば伐らないで置いてやると云ふ譯だ。

牧田　それは彼等の態度も氣持よくはないが、併しそれであの立派なあなた自身に取つても思ひ出の深い並樹が助かるとすれば、三千圓は高價過ぎないのぢやないですか。僕なら買ひますね。それが僕の場合で僕に金があるとすれば。

塚本　金があるとすれば――さうだ、問題はそれだけだ。ところで僕は最初云つた通り金がない。三千圓は愚かその十分の一、百分の一の金を出す餘裕もない。いや、五圓札一枚使ふのだつて滅多た使ひ方は出來ない位僕は貧乏なのだ。

牧田　――

塚本　何故そんな顏をして僕を見るのだ。不審、君は僕の貧乏を本統にしないのかい。

牧田　龍子さんもよくあなたと同じやうに貧乏だと云つてこぼしてますね。併しあなた方が二人で揃つて幾ら貧乏だ貧乏だと云つたところで僕は信じませんよ。要するに程度問題なんだから。――古びたつてこれだけの家に住んで、何千俵と小作米の上つて來る田地を目の下に見下ろして、あれだけ召使達を使つて、絹夜具にくるまつて

限つて、それで貧乏話をするのは矛盾の最も甚だしいものだと云ひ度くなる。

塚本　尤だ。而かも事實は怖ろしい貧乏なのだ。正直な比較が、村の中以下の農家の方が寧ろ僕等より內福な位だと云ふことが本統に分つたら君も驚くだらう。

牧田　ぢや僕に露骨な質問を許して下さい。あなたの程度の地主階級の收入は一體どの位なものなんですか。僕には見當がつかないから従つてあなたの貧乏だと云ふ意味が飲み込めないのです。

塚本　昔に比べれば四分の一もないのだが、それでも小作米から山林の雜收入を合せれば年に四萬圓位の金はまだ入つて來る。

牧田　――年收四萬の金があつて、それで貧乏云ふとなら――

塚本　待ち給へ。計算はまだすまない。――勿論それだけの金がそつくり僕のポケットに納まつて仕舞ふのなら申分はないさ。併しさうは行かない。僕はその中から租稅と銀行利子だけで、三萬六千圓から拂はせられる。

牧田　あなたの話は僕には分らなくなるばかりだ。

塚本　併し僕の家の借金なんか筋がいゝからこの程度ですんでゐるのだが、同じ地主仲間で僕の知つてゐる男なんか銀行以外の借金の利子を毎月二千圓近くも拂つてゐるよ。皆んなさう云ふ狀態なのだ。この邊の古い家と云ふ家が。――餘つ程賢く立ち廻つてゐるか、さもなけりや、昔から蟲のやうに吝嗇にやつて來た家でもなけりや金なんかありやしない。若君、君にも僕が並樹の買へない理由がやつと分つたらう。三千圓と云へば、僕の手に辛うじて取り留める一年の生活費に近いのだからね。その家に住んで、內實は兎に角表面は代々の村の旦那で、何か金のことになれば一番に絞られる、昔から家についてゐる交際がある。――とてもそれ位の金でやつ行けやしない。毎年足りないから足りないだ。而して段々マイナが殖えて苦しくなつて行く。――

牧田　若しあなたの云ふやうな事情が本統だとすれば――いや、僕はもう疑はないんですが、併し何とかならないものですかね。旨く整理するとかどうとかして。

塚本　整理する。――併しどう整理しようと云ふのだ。そりや買手があれば賣つてもいゝさ。それで借金を返して餘つた金で氣の利いた株でも買ふ。斯んな怪物のやうな古ぼけた大きな家の代りに、明るい住み心地のいゝ家を建てる。さうなりや同人も一人か二人で澤山だ。で、花でも植ゑたり、書物でも讀んだりして暮らせりや理想だが、併し誰が買つて呉れるだらう。そんな纏まつた――百萬近い金の要る買物を。――先刻も話した通り最も可能性のある仲間の地主連は皆んな僕と同樣に困つてゐるんだし、町の金持連は今更そんな古風な買物に手を出すものはなし。

牧田　――僕は初めてあなたの田舎を顯微鏡で見せられたのですね。

塚本　――龍子に云はせりや、自分は二年間毎日それを覗かされたと

云ふだらう。それで肝癪を起して、拳銃を放り出すやうに、あの女は何もかも僕に放り出せと云ふのだが。——

喬　あの時の調子には僕も驚きましたよ。まるで無茶なんだから。——尤も龍子さんにしても、半分夢中で腹立ち紛れに云つたんだとは思ふけれども。

塚本　併し本統を云ふと、僕の現在の苦しい境遇を脱するにはそれより外の方法はないのだがね。龍子の云ふ通り投げ出して仕舞ふ。一切のあらゆるものを銀行の處分に委せる。而して無一物になつてこの田舍から出て行く。——さうすりや小作爭議もなければ、村の者との不快な感情の葛藤もなく、殊に租税の納入期の度にみじめな姿で銀行に泣きつきに行つたり、利子の拂込で借金の上に借金を重ねたりする心配が悉く消滅する。初めて人間並に自由になるのだ。——それで龍子もあの時云つたやうな謙虚な氣持で新たに生きて行く決心さへつけば、僕等は今一度意義のある立派な生活が始められる。百姓たちから横取りした米を食はないですむだけでも、確かに非常な愉快だ。——喬君、僕が斯んな生活を夢想しなかつたと思ふかい。龍子なんかに云はれるまでもなく、僕はこの二年間に五十遍位もそれは考へたことだ。而かも僕には實行する勇氣がない。

牧田　誰だつてその衝に當れば同じでせう。そんな大問題が、龍子さんの考へるやうにさう無造作に決心される譯のものぢやないから。

塚本　さうだ、あの女は斯んな場合になると單純以上で、反對に僕は複雜以上だ。——第一僕はあれだけの土地や山林を、原價の五分の一にも當らない値で擔保流れにして仕舞ふのが惜しい。いや、斯んな云ひ方ぢや僕の氣持は云ひ現はせない。それは、僕の實行を妨げる重要な原因は、もつと根本的な、寧ろ運命的な心理だ。僕はあの先祖傳來の土地や田地をあらゆる爭ひと不快の根源として呪つてゐながら、一方ではそれに對して激しい愛着を感じてゐる。而かも、これは東京に出てゐた時分までは意識しなかつた感情で、田舍に歸つて二年間この家で暮らしてゐる間に、自然に僕の胸に浸みついた所有慾だ。僕は先刻君に買ひ手がないから賣り度くも賣れないのだと云つたが、それも確かに事實に相違ないが、どうかして偶然有利な買ひ手が現はれたとしても、僕は直ぐ思ひ切つて賣つて仕舞へるかどうか自信がない。似たやうな感情はこの腐れかけた家に對しても空つぽの藏に對しても、やくざな召使たちに對してもある。それ以上驚くべきはあの小作人たちに對してさへある。

牧田　さうだとすれば、あなたの所謂地主魂は容易に滅びて仕舞へない譯ですね。あなたの感ずる愛着は結局その氣持に過ぎるのだと僕は思ふ。

塚本　さう云はれても仕方がないだらう。——全くそれは自分ながら不思議な感情だ。この古い家に根を下ろして、この田舍を世界にし

て百姓たちを相手が一生修羅を燃やして過すことを考へると怖ろしくなる鄙に、この家とこの生活が變に自分にぴつたりしてゐる感じを拒めない。着ふるして、臭くなつて、氣にすれば一瞬間も身につけてゐられないやうで、それで我慢すれば何より着心地のよい古シヤツだ。自分のエレメントに附着してゐる氣持だ。——斯うして僕は年一年と貧乏になり、意久地がなくなり、これ等の柱や壁が古い屋根の下で歪んだり裂けたりしてゐるやうに、家と云ふ振り落されない重味のために壓し潰されて仕舞ひさうな氣がする。

牧田　龍子さんの病氣であなたも神經を使ひ過ぎたんですね。さう云ふ風な考へ方をするのは。——斯んないゝ空氣と日光の中にゐりや僕ならどんな心配事だつて傍からぐ綺麗に消えて仕舞ひさうに思へますよ。實際この頃の空の美しさは素敵だ。丁度東京の十一月上旬と云ふ氣候ですね。飽くまでまつ蒼で、澄み通つて、それで本統の秋の天ほど冴え切らないで、どこか豐富な夏らしい潤ひが殘つてゐるのだから申分がない。僕け胴亂をかついで出る度に、何んと云ふ美しいさだ、と思はず立ち留まることがよくありますよ。而して一としきり探しものすますと、彼の岡の芝草の上で休むのです。丁度あちらの芳子さんの部屋を見下ろすやうになつた崖のところで——

塚本　大きな胡桃の樹が二本並んでるところだらう。

牧田　さうです、あの胡桃の傍です。——これで僕は東京にゐると夕バコなんか喫み度いとも思つたことはないのですが、彼處で、胡桃の樹に凭つかゝつて、芝に足を投げ出しながら休んでゐると、奇妙に一本欲しいやうな氣がして——(立つて違ひ棚から吸ひさしの袋を持つて來る)これは僕が生れて多分三度目に買つた煙草なんです。——彼處でこれをつけて、煙の中からあの美しい空を凝つと眺めてゐると恍惚りするほど幸福な氣持になるのです。——どうです。

塚本　僕は昨年久しぶりに雪の中で暮らして咽喉を惡くしたから、成るたけ喫らないやうにしたのだが(一本吸ひつける)——さう云へば君は來た時とは別人のやうないゝ血色になつたよ。毎日歩き廻るのが矢張りいゝのだね。

牧田　殊に頸と手頸が斯う云ふ色になつたので、兵隊のやうだと芳子さんは笑ふのです。——さう云へば、芳子さんと此の煙草に就いちや面白いことがありましたよ。僕は芳子さんには上の山の休み場所を秘密にしておいたのに、二三日前當てられつちやつたんです。何でも爺やと二人してすぐり摘みかなんかに出掛けたんですね。すると芝の中へ吸殼があつたもんだから——

塚本　あいつもね、考へると可哀想だから何んとかしてやらなきなやらないのだが。——打ち明けたところ、この田舍で今の狀態ぢや、結婚させようにも適當な家と相手が殆んどないと云つてゐるのだからね。と云つて今少し上の學校をやらせようとするには、先刻話し

た通りの御様子で僕の手許が苦しい。それも常人がどうしてもやり度いと云へば、僕だつて一人きりの妹のことだ、どんな工面でもしてやるが。併し本來そんなたちぢやなささうだから、矢張り家庭を持たせてやり度い。——加納家との問題が君にないのなら、貰つて呉れないかつて云つたかも知れないよ。

牧田——

塚本　併しそれはもう初めから諦めてゐるのだが、その代りお願ひがある。どうかあいつの問題を考慮に入れておいて呉れ給へ。いづれ芳子からも君のおつ母さんへ頼ませる積りだが、君の友人あたりでよささうなのがあつたら世話をして貰ひ度い。性質の悪くない男なら誰でもいゝ。慾は云はないから。——僕の口から云ふのは變だが、君も見る通りあいつは素直な氣の善い奴だから、どうかして幸福にしてやり度いのだ。僕はこの儘この家と共に朽ちるかも知れないが、あいつだけは明るい世界に出して仕合せに暮させてやり度い。——

近藤が下手の廊下から入つて來る。

近藤　旦那、失禮ですか。

塚本　何だ云へ。構はない。

近藤　この間の約手のことで、町からやつて參つたのですが

塚本　今日は金はないと云へばいゝぢやないか。

近藤　中々澁とい奴ですから。

塚本　兎に角一兩日中におれが出向いて片をつけるから、それまで待つやうにさせて置け。幾ら云つてもないものはないのだ。

近藤　では何とか申して見ませう。——それから先刻驛長に逢ひましたら、この輕便鐵道の敷設十周年記念が丁度來春の三月になりますさうで——

塚本　その話なら分つてゐる。

近藤　左樣でございますか。

近藤去る。

塚本　この通りだ。喬君、どうかすると約手まで不渡になりかねない僕に、鐵道十周年記念のお祭騒ぎをやらせようとする。——この輕便と云ふのは亡くなつた親爺が敷かせたやうなものだから、僕は借金してもそれを記念する義務があると奴等は信じてるのかも知れないよ。

芳子が入つて來る。

芳子　お兄さん、こちら。

塚本　ゐるよ。

芳子　お姉さんがちよつと入らして下さいましつて

塚本　熱は。

芳子　昨夜からもうずつと平熱ですわ。

塚本去る。

牧田　お姉さんが起きつちまはなけりや、芳子さんが大變だ。

芳子　私なんにもしやしないんですもの。——お姉さんも、でも、今

日は起きますつて――さうそ忘れてゐましたわ。花が採つて來てあつたのに、持つて來ませうね。昨日の洗濯ものも乾きました。

芳子去る。

牧田　（熱情を抑制し得ぬ者の如く、庭に下りて歩きながら。）すべてが奇蹟だ。二週間前あの汽車で塚本さんと偶然乘り合すことがなかつたなら――一緒に誘はれてこの田舍に寄り道する氣にならなかつたなら――僕はあのひとの存在さへ知らないですんだかも分らない。實際東京をたつまで、斯んな感情が斯んな思ひも寄らない場所で突然自分の中に起らうなんて夢にでも考へたらうか。決して――決して。――それにしても先刻あのひとの結婚の話が出た時には面喰つた。僕は今少しで皆んな打ち明けて仕舞ふところだつた。また打ち明けて仕舞ひさへすれば卽座に悅んで許されたのだつた。――併し僕はあのひとの大事な心臟を人手に貰ひ度くはなかつた。貰ふならぢかに手渡しに貰ひ度い。それにあのひとが本統にどんな氣持を僕に對して抱いてゐるかは、塚本さんにも分つてゐる筈はないのだから。――若し何とも思つてはゐないのだとしたら――あの優しさや親切は、あのひとの生れつき美しい性格の現はれ以上に意味がないのだとしたら――兄の承諾を先に得るのはそれを楯にあのひとの愛を強奪しようとするに等しい――

芳子が桔梗の花と、外に一つの新聞紙の包を載せた盆と共に疊んだ浴衣を持つて歸つて來る。

芳子　あら、お庭でしたの。――このお寢卷、糊が利きすぎて居心地惡いかも知れませんわ。

牧田　有り難う。（芳子が床の間の花瓶を廊下へ持ち出して桔梗を生けるのを眺めながら。）あなたが採つて來たんですか。

芳子　え〻。

牧田　獨りで。

芳子　い〻え。

牧田　ひとり。――僕も行つて見度かつたな。

芳田　――

牧田　その新聞紙は何です。

芳子　大變なもの。――屹度お笑ひになるわ。

牧田　どれ。（新聞紙の中から色んな殖物が現はれたのを見て驚きながら。）へえ。斯んなものをどうしようつて云ふんです。

芳子　あなたの眞似して押して見ようかともつて序に採つて來ましたの。これは。

牧田　つばめおもと。

芳子　ぢやこちらは。

牧田　それは破れ傘と云ふ奴です。傘の破れた形に似てるから。

芳子　さう云へば似てますわね。

牧田　芳子さん、あなたは斯んな採集なんかに興味があるんですか。

芳子　興味つてほどぢやないんですけれど、あなたがあ〻してお採り

になつたものをきちんと整理してゐらつしやるのを見ると面白さうですもの。だつて私なんかしよつちう其處いらで見てる癖に、葉つぱや草で、本統の名前を知つてゐるのは殆んどないと云つていゝ位ですから。今にこれが押せたら、あなたの眞似して名前や採つた日を書き込んで、記念のために取つて置ますわ。

牧田──どういふ記念に。

芳子　──

牧田　それを云つて聞かして下さい。

芳子　──あなたに名前を教へて頂いた記念に。──

牧田　それだけなんですね。

芳子　──えゝ

牧田　──あなたは東京へ出度いと思つたことはありませんか。芳子さん。

牧子　何故。

牧田　例へば何か今少し勉強するとか、──でなくとも──

芳子　本統は私東京へ出られたら、たつた一つ勉強し度いと思ふことがありますわ。

牧田　何がやり度いのです。

牧田　姆媽の養成所へ入り度いと思ひますの

牧田　姆媽の養成所へ。──幼稚園の先生にならうと云ふのですね。

芳子　いゝえ

牧田　ぢやどうして姆媽の學校なんか志望するのですか。

芳子　皆んな話さなきや分りませんわ。云はゞ私の夢なんですから──若し出來たら私この村に托兒所見度いなものを拵つて、百姓たちの子供を預つてやり度いと思ひますの。學校に出る位になればまあいゝのですけれど、百姓の小さい子供たちはそりや可哀想なんですから。──手のない家だと、赤ん坊なんか朝お乳を飲ませた後は、ほら、あのお飯櫃入れを御存じ。

牧田　圓い、藁で拵つた奴でせう

芳子　あの中に入れて、這ひ出せないやうに蒲團やぼろつ切れで詰めをして、家ぢう田畝へ行つて仕舞ふのでせう。ですから晝休みにでも母親がお乳を飲ませに歸るまでは幾ら泣いてもひもじくなつても。誰一人見てやるものはないのですわ。

牧田　ぢや、一緒に行きませうか東京へ。──僕から話せばお兄さんは屹度承知するに極まつてゐます。

芳子　だつて、あなたはY──温泉へ入らつしやるのでせう。

牧田　いや、行きません。止めにしたのです。

芳子　まあ。──どうして。

牧田　それよりも僕と東京に行くことを決心して下さい。而してどうしてもその美しい計畫を實現させ度いと思ふなら養成所もいゝでせう。如何にもあなたらしい優しい夢だ。──併し若し僕のためにそ

れを捨てることが出來たら、どうぞ捨てゝ下さい。

芳子　――

牧田　斯うなれば何もかも云つて仕舞ひませう。僕は東京を立つまでは、Y――温泉に行く積りだつたのです。寧ろ行かなけりやならない事情になつてゐたのです。而して行きさへすれば、一二年前から話のあつた加納家との婚約が纏まる筈だつたのです。云はゞ、僕はこの暑中休暇をあの家族と一緒に過すことに依つて、その問題に最後の判をつくところだつたのです。――正直に云ひますよ。僕は相手の娘は非常に好きでもなかつた代り、嫌ひでもなかつた。今一歩深く僕の腹の底を打ち割れば、この婚約が自分の將來に有利な條件になると云ふ意識も確かに僕を左右したのですが、併し此處に來て一週間たゝないうちに僕の決心はすつかり別なものになつたのです。

芳子　――

牧田　先刻も僕は考へて不思議な結果に驚いたのだけれども、あの汽車でお兄さんに出逢つたこと。誘はれて偶然此處を訪ねたこと、而してあなたを見たこと――それが東京を立つまでは夢にも知らなかつた僕の新しい運命に僕を捲き込んだのです。さうだ。運命といふより外に言葉はない。二週間前僕があの夜行列車に乘らうとする氣を起こした時から、運命は塚本さんと僕を出喰はさせてあなたのとこへ連れて行くことを計畫してゐたのです。――芳子さん。僕と一緒に東京に行くのなら屹度塚本さんが許して與れると云つた。僕の先刻の意味が分りますか。

芳子　――兄はあなたが好きで、あなたを信じ切つてゐるのですから。

牧田　ぢやその愛と信用を塚本さんは具體的に示すことを望んだのだ。加納家との問題がなかつたら、あなたを貰つて欲しいのだ、と先刻云はれたのです。

芳子――

牧田　僕はもう少しで何もかも云つて仕舞ふところだつた。加納家のことは最早や僕の氣持には痕跡も留めてゐないと云ふことだけ云つても。塚本さんを安心させられたのだけれども。我慢して默つてゐた。その前に僕はあなたに逢つて――

芳子　いゝえ。――

牧田　――

芳子　温泉へいらして下さい。

牧田　――芳子さん――

芳子　いらして下さい。

牧田　何故泣くのです。若し僕を何とも思つてゐないのなら――

芳子　いゝえ、それ位なら――それ位なら私なにも斯んなに――

牧田　ぢや何があなたの承諾を妨げるのですか。云つて下さい。これ以上僕を苦しめないで下さい。

芳子　私はたゞ兄が可哀想でならないのですわ。

牧田　それはまた如何してでせう。お兄さんは僕たちのことが極まれば、誰よりも悦んで異れる筈ぢやありませんか。

芳子　元より悦んで異れますわ。本統にどんなに悦ぶか知れませんわ。私だつて――餘んまり仕合せ過ぎて夢見たいなんですけれど。――喬さん。

牧田　――

芳子　私が斯んなことを考へてゐるのを非道いと思はないで下さいね。私はお姉さんがいつまでもこの田舍にゐて異れるやうにはどうしても思へませんの。何だか東京に歸つて仕舞ひさうな氣がしてなりませんわ。若しそんなことになれば、この古い家に兄は獨りぼつちになるのですもの。誰も親身に世話をする者もなければ、話し相手もなく、それに村のことだつて段々厭なことがふえて來る中で、どんなに淋しく悲慘に暮すでせう。それを思ふと、私まで兄を見捨ててこの田舍を出る氣にはどうしてもなれませんの。

牧田　併しそれはあなたの想像に過ぎないのだから、――

芳子　いゝえ、多分想像だけではすみませんわ、乾度兄に取つて悲しい日が來ますわ。――私は小さい時母に別れてあの昔風な婆やに育てられたせゐですか、物事をいつもさう云ふ風に考へる癖があつてそれがまた自分で怖ろしい位當りますの。何か悲しいことがありさうだと思ふと、乾度悲しいことがありますわ。反對に嬉しいことがありさうだと思ふと、また乾度嬉しいことがありますわ。――二週間前あなたが入らした日にもはつきりそれを感じましたの。何故と云ふことなしにあの日は朝から樂しみでしたの。何か思ひがけない事がありさうでなりませんでした。さうしたら兄とあの坂道を――

牧田　それでゐてあなたは二人の――若しさう云つてよければ――新しい幸福を育てようとはしないのですか。お兄さんのためなら僕をどんな目に逢はせてもいゝのですね。

芳子　勘忍して下さい。

牧田　殊に龍子さんが果してこの家を出るかどうか分かりもしないのに、あなたが今から餘計な心配をする必要がどうしてあるだらう。皆んな馬鹿げた話だ。そんな下らない妄想のために、運命に擇ばれた幸福を誤つことを、芳子さんあなたは怖れないのですか。――お願ひだから今一度――

芳子　もう仰しやらないで。――この上私に切ない思ひをさせまいとお思ひになるなら、何んにも仰しやらないで頂戴。而して――初めの豫定通り溫泉へ入らして頂戴。

牧田　何んですつて。

芳子　あなたは矢張りさうなさらなけりやいけないのですわ。それで後々までお仕合せになれるのですもの。――私のために皆んなの羨むやうな立派な運をお捨てにならないで頂戴。私は――あなたにそ

れだけ思つて頂いたのでも勿體ない位なのですから。——この思ひ出を大事にしてあなた方のお仕合せを一生祈つてをりますわ。

牧田　あなたのその言葉が、僕に對してどんな侮辱だか分つたら——

芳子　——そんな怖い顏をしないで。——

牧田　僕はあなたが憎らしい。自烈度い。可愛い——（發作的に、緣側に並んで掛けてゐた彼女を抱く。）

芳子　（奥の方で。）よつちやん。——

芳子　（驚いて牧田から遁れながら。）はい。

芳子　よつちやん。——よつちやんつてば。——どこ。——

芳子　はーい。

芳子急いで去る。牧田は緣側を離れて庭の一本の松の樹の根方に部屋を後にし兩手で頭を抑へて蹲む。舞臺三分間その儘。下手の廊下から龍子が入つて來る。右手に婦人物らしい青い洋封筒の手紙を持つてゐる。顏色の蒼白は一幕目よりも著しくなつてゐるが、病後の割には動作は敏活である。それが却つて病的に見える

龍子　おや——（松の側の牧田をやつと見つけたやうに。）そんな處で何をしてゐるの、喬さん。をかしな人。

牧田　もういゝんですか。起きても。（この言葉と共に立ち上りながら。）無理をするとぶり返しますよ。

龍子　大丈夫。私本統は病氣でもなんでもないんですもの。それだのに家ぢう大騷ぎして。——自動車で町のお醫者まで呼んだりして。

牧田　そりや非道いや、龍子さん。熱が四十度近くもあつて、しつきりなしに痙攣を起したり、囈語を云つたりしたあなたが、病氣でないなんてどうしたら云へるんです。殊に皆んなのあれだけ親切な介抱をそんな風に云ふなんて、罰が當る。

龍子　さうね、それだけは惡かつたわ。言葉が過ぎたのだわ。お腹の中ぢやこれでも私ずゐぶん有難いとは思つてゐるのよ。宅でも、よつちやんでもあんたの見た通りなんですもの。——でも本統を云へばもつと打つちやつて置いて呉れゝば尚有り難いんだわ。何んにも構はないで、凝つと一週間も默つて寢せておいて呉れりや、私の病氣なんかひとりでに治つちまふのだから。——でもそんな事もうどうだつていゝわ。まあお上んなさいよ。

牧田　何か用事なんですか。

龍子　東京の姉からこの手紙で、（部屋の中に卓を挾んで坐つた牧田に封筒の儘示しながら。）あんたをいつまでも引き留めておいちやいけないつて云つて來たんです。私もそのことは氣になつてゐたんだから、明日にも出掛けることになさいね。——私もこの通り快くなつたんだし、あんただつて斯んな山の中にこの上ゐたつて仕方がないでせう。

牧田　——

龍子　どうしたの、そんな顏して、默つて。——

牧田　僕は東京へ歸るのです。

龍子　——まあ、呆れた。溫泉の方はどうする積りなの、それぢや。

牧田　あちらには行く必要はないのです。——多分加納の方ではもうゐないんだから。

龍子　私が寢込んだりしたのがわるかつたのね。でなきやあんたも今少し早く行けたのだから。——まつ直ぐ東京へ歸つたのか知ら。

牧田　さうらしい

龍子　何か便りでもあつて。

牧田　——

龍子　それぢやあんたも早く歸つた方がいゝわ。そして行き違ひになつた譯をよく話すのだわね。——だけども、あんたいつ此處を立つ積り。喬さん。

牧田　今夜すぐ立たうかと思ふ。何時の汽車がよかつたのか知ら。

龍子　たしか、此處を九時過に出るのが本線の終列車に聯絡するのよ。

牧田　おや、それと極めた。

龍子　——喬さん。

牧田　——

龍子　私も歸るわ。

牧田　——とうとう、そんなことを云ひ出したんですね。——とうとう——

龍子　何んでもいゝから一緒に連れて行つて頂戴。——斯う見えても私はしんは疲れてやしないのだから、途中でまた不快くなつてあんたの厄介になるやうなことは、大丈夫なくつてよ。

牧田　僕はそんなことを問題にしてやしない。——併しまあ考へて御覽なさい、龍子さん。あんたが今度病氣したのだつて、僕が來た日に下らないヒステリを起こして逆上したのが原因ぢやありませんか。それにまた僕が東京に歸ると云へば一緒に行かうなんて、そんなことを云ひ出された日にや、僕をきつかけにあらゆる惡いことが起こるやうで、塚本さんに對して僕は申譯がない。少しは僕の立場も考へて下さい。——でなくとも、僕の一生の幸福はあんたに踏みにじられて仕舞つたんだ。

龍子　それはどう云ふ意味。——喬さん、加納さんの方が手違ひになつたこと。

牧田　そんな事ぢやない。

龍子　だけど。それ以外にあんたに不平を云はれることはない筈だわ。——それだつて私はあんたに何度も注意した積りよ。私の病氣なんか構はないで早く溫泉へいらつしやいつて、——自分で勝手に愚圖ついてゝ、今になつて幸福を踏みにじられたもないもんだわ。

牧田　そんな事ぢやないつて云つてるぢやありませんか。

龍子　大丈夫よ、私東京に歸りさへすれば。——加納さんの奧さんと妹とは同級であんなに親密な間柄なのだから、どんな行き違ひが出

來たつて、私よく話して貰つてあげるわ。

牧田　澤山です。そんな餘計な世話を燒いて貰はなくたつて。――併しその話はよしませう。あんたには何んにも分かりやしないのだ。

龍子　まあ。分からないのは喬さんの方ぢやありませんか。餘計な世話を燒いて貰ふまいなんて。――それ位なら幸福を踏みにじられたの何んのつて不平を云つたり、怒つたりすることはないぢやないの。さうですとも。一體あんた何をさうぷり／＼してゐるの。今日に限つて。

牧田　僕はあなたに怒つてるんだ。あなたの我儘に怒つてるんだ。自分一箇の感情のために皆んなを苦しめて、その上この家から飛び出さうなんて考へてゐるあなたに怒つてるんだ。

龍子　皆んなを苦しめて。――あんたはそれだけ考へて、私の方の苦しい氣持はてんで察しようともしないのね。斯んな田舍で私がどんな辛い不快な思ひして暮らしてゐるかつてことは、あんたにだつて分かり切つてゐる筈ぢやありませんか。ようこそ今日まで我慢されたんだわ。――

牧田　ヒステリの繰り返しはよしませう。兎に角僕はあなたと一緒に東京に歸ることだけは御免です。斷じて。――歸るならあなたは勝手にひとりおで歸んなさい。

龍子　よござんすとも。結構ひとりで歸つて見せてよ。そんなこと云はれて誰が、一緒に行つて呉れたつて行つてあげやしない。――その代りあんたは明日にでもなさいよ。私は今夜立つのだから。

牧田　そんな亂暴な話はない。僕は初めから今夜立つことに極めてゐるんぢやありませんか。

龍子　だつて私が今夜にしたのだから、一緒が厭なら別な時にする外はないわ。

牧田　まるで氣狂ひだ。

龍子　――本統に私氣が狂ふのかも知れない。滅茶苦茶に淋しくつて自烈たくつて、腹が立つて、堪らなく悲しい。――

牧田　龍子さん。あなたはまだ病氣が快くならないんだ。この際今少し落着いて身體をよくする決心をしなけりや、取り返しのつかない結果になりますよ。それで旅行なんか思ひも依らない。――どうしても東京に歸つて見たけりや、もつと先になつて、此方が暇になる時分避寒がてら行くことにしたつていゝぢやありませんか。僕は今はもう冷靜なんだから、あなたも眞面目に聞いて下さい。

龍子　有り難う。あんたがさう云つて呉れる氣持はよく分かつてよ。でもね、喬さん。今度だけは私を留めないで頂戴。どうしても行つて見度いのだから。――行つて見なけりやならないことが出來たのだから。――

牧田　――

龍子　あんたに隱したつて仕方がないから皆んな話すわ。私が今夜ど

うしても行かうと決心したのは、二週間前あんたにこぼしたやうな氣持からだけぢやないのです。それだつて勿論消えやしないし——消えるどころぢやない、もう我慢に我慢し抜いてゐるのだけれど、それと一緒に外の譯があるのです。——蕗さん、あんたは岡村の久雄さんが朝鮮から歸つて、病氣で入院してゐるつてこと知らなかつた。

牧田　久雄さんが。——ちつとも知らなかつた。一體岡村の家は同じ親族でも變に孤立してゐて、不斷どことも往來しないからそんな時いつでも分らないんだ。

龍子　そりやあの家が親類ぢうで一番貧乏なためだわ。——この姉の手紙だと、久雄さんは胸でも悪くしてゐるらしいのね。

牧田　向ふでも可なり亂暴な生活をしてゐたやうな噂だつた。併し久雄君の病氣とあなたと何の關係があるのです。よしんば久雄君の病氣が輕くないにしたところで、云はゞ親戚の一人に過ぎない間柄で、あなたがわざわざ、而も今夜急に立つて見舞に行く必要はない筈ぢやありませんか。

龍子　さう考へるでせうね。あんたは何んにも知らないのだから。

牧田　——

龍子　蕗さん、私は塚本の方から貰はれなかつたら、岡村に片附いてゐたかも知れないのよ。——假令塚本からの話があつたつて、あの時まだ丈夫にしてゐらした塚本のお父樣が貴族院議員でもなく、塚本家が大地主でもなかつたら、でなくとも、岡村の家に今少しお金があつて、親類の中でも幅の利く地位であつたら、私は多分塚本姓に變つてやしなかつたでせうよ。

牧田　それは初耳だ。併しあなた自身の感情はどうだつたのです。それさへ極まつてゐれば、どちらだつて自由になつた筈ぢやありませんか。

龍子　誰でもあんたのやうに云ふのね、斯う云ふ問題になると。——でも考へて御覧なさい。女學校を出たばかりで、夢と現實の見境もつかなけりや。どう生きて行かうと云ふ確かりした信念もない年頃の娘に、間違ひのない選擇がそんな場合つくと思つて。戀でもしてゐるのでない限り、決してはつきり極められるものぢやないわ——甘やかされた、氣苦勞のないお嬢さんに出來上つてゐればゐるほど、それは六ケ敷い注文ですよ。私にしたつて、どちらの方が好きだと云ふ氣持があつたのなら、例へば久雄さんを愛してゐるものなら、決して塚本に來やしない。どんなにだつて頑張つたわ。また私が厭だとさへ云へば、少し位の無理は家の人だつて通して呉れたに相違なかつたのだから。

牧田　そりや勿論だ。併しそれ位冷淡でゐられたのなら、今になつて——

龍子　何故そんなことを云ひ出した、と云ふのでせう。でもその時は冷淡と云ふよりは無頓着だつたと云ふ方がいゝのです。相手に無頓

當であつたばかりでなく、自分の心の底に本統はどんな氣持が隱れてゐたかさへ分からなかつたのだわ、──たゞこれだけは忘れませんよ。丁度式の前で、暇乞に親類廻りをして岡村の家へ行くと、どこかへ出掛けようとしてゐた久雄さんに玄關でぶつつかつたの。多分今でもあの通りでせう。昔風で、うす暗くつて、正面に伯父さんの好きな何んとか云ふ坊さんの書いた額がかゝつて、古つぼけた衝立が立つて。──久雄さんはその儘引つ込むでもなければ、出て行くでもなく、間の衝立を楯に取つて突つ立つたきりものも云はないのです。私はそれを見ると、何故とも知らず許して下さい──さう云つて謝まり度いやうな思ひで一杯になつて。──若し母が一緒でなかつたら乾度あのひとの前に膝をついて謝まつつたわ。──否さん、私が今病氣してゐる久雄さんに逢ひに行かうとする氣持は、矢張りこの氣持ですよ。私はあの時云へなかつたことを、今云つて謝まり度いの。私のために少しでもあんたの生涯を傷つけたことがあるなら、どうぞ許して下さい──つて。

牧田　それで分らなかつたことが分りますよ。久雄君が何故あんな無茶な生活をしたか。何故人生の希望を捨てたやうな考へ方をするやうになつたか。──併しあなたが彼に對してさう云ふ感情を持つてゐるから、僕は却つて彼に逢はないことを勸め度い。あなたは乾度失望するに相違ない。

龍子　何故。

牧田　つまり久雄君は昔の久雄君ぢやないから。あなたのイリュージヨンに殘つてゐる久雄君と現在の彼は別人なんだから。忌憚なく云へば、一個のやくざ者に過ぎませんよ。

龍子　どんなやくざ者だらうが、もつとわるい惡者だらうが、そのひとが自分を愛して與れたつてことを女は一生忘れるものぢやないわ。──いゝえ、久雄さんのよくない噂が耳に入つたり、親類ぢうであのひとの惡口を云つたりすればするほど、私は段々辛い氣持になつたのだと云つてもいゝの。自分の罪をはつきり感じて來たのです。あのひとが可哀想で、濟まない氣がして──

牧田　それなら塚本さんに對してだつて同じぢやありませんか。今までのやうに單に田舍の生活に堪へないと云ふだけでなく、さう云ふ別な意味があなたの上京に加はるとすれば。

龍子　──

牧田　龍子さん、あなたはそれで濟まないとは思はないんですか。久雄君に感ずる罪を塚本さんには感じないんですか。

龍子　あゝ。

牧田　あなたがこの田舍の生活を呪ふ氣持だつて、前よりは僕にも少しは分つて來た。いや、僕はあなたから散々聞かされた不平以上のものを今日は塚本さんに聞いた。見たところこれ程美しい、これ呑氣さうな田舍が、あらゆる苦しい問題で蔽はれてゐるのを知つた。それだつてあなたは厭がつて身震ひしてりやすむのだが、塚本さんは

自分で矢面に立つて戰はなけりやならない。あなたはそれに對して同情はないんですか。久雄君に對してそれだけ道德的であり得るあなたなら、夫の現在の窮境と苦痛に對して無關心でゐられる筈はない。——それとも自分さへ逃げ出して逢ひ度い人に自由に逢ふことが出來りや、塚本さんや——あんな若い芳子さんを、何等の慰めもない今の淋しい境遇に打つちやつて置いても平氣なんですか。

龍子　よつちやんの話なら別だけれど、——塚本には、少くとも塚本のさう云ふ點には私同情はしなくてよ。しませんとも。——先に話した通り、今の境遇が本統に厭なのなら、宅は明日にでもそれを捨てられるのですもの。一と思ひに投げ出せば自由になれるんですもの。それを私が幾ら云つたつて決心がつかないんぢやありませんか。自分で求めて苦しんでるのぢやありませんか。——あんたなんかには分らないのよ。塚本が斯んな場合どんなに愚圖で思ひ切りが悪いかつてことが。とても堪らないんだから。——大嫌ひ。

牧田　あなたの考へるやうに、世間のことがさう簡單に片附くものぢやありませんよ。塚本さんにしたつて——

龍子　もう澤山よ、塚本のことなら。——何んにも云はないで頂戴。黙つて頂戴。——聞くほど肝癪が起るばかりだから。——

牧田　併し僕としては、あなたのそんな不合理な云ひ分を知らん顔して通させる譯には行かない。

龍子　なら仰しやい、幾らでも好きなほど。而して私だけを惡者にして、うんと塚本に同情しておあげなさいよ。さうすりや氣が濟むのだらうから。——但し私はそんなことを聞いてる暇はない。

　龍子去る。

牧田　——とうとうあのひとの豫感が當つた。

　近藤が入つて來る。

近藤　旦那は此方ではございませんでしたか。

牧田　いや。

近藤　それでは、と、洋館の方へでもゐらつしやるかな。

牧田　あつ近藤君、（行かうとする支配人を呼び留めて。）郵便の時間表がありますか。

近藤　はい。持つて參りませうか。

牧田　さうですね。本線の終列車に聯絡するのは九時何十分だか、それを正確に知り度いのだが。

近藤　それならば九時五分でございます。——それに乗りますと町に十時三十分に着きますので、本線の終列車に丁度間に合ひます。————ですが、お立ちでございますか。

牧田　都合に依つたら今夜歸り度いと思つて。

近藤　それは、それは。折角御滯在になつても斯んな田舎で、何のお慰みもございませんでしたでせう。——これで來月になりますと獵砲打位は出來ますのですが。

牧田　鳥は澤山ゐますか。

近藤　昔のことを思ふと比べものにはなりませんな。それでも、つい七八年前までは、この後の山あたりで、時に依ると雉子なんか面白いほど取れたものですが、當節はそんな話をしたつて若い者は本統にしない位でございますよ。昔と違つて、百姓たちまで何か一と理窟こねなけりや承知しない世の中ですから、鳥の仲間も段々狡くなつて何處にか旨く隱れるものと見えます。

　塚本が入つて來る。

塚本　――近藤か。

近藤　これは、――先刻から實はお探し申してゐましたのですが。

塚本　何だ。

近藤　例の並樹の一件で。村長の奴も少しは考へたと見えまして、幾らと云ふ金額は云はないことにするから、兎に角都合のつく範圍で引き取つて呉れまいか、と云ふ腹らしうございます。先刻ちよつとやつて參りまして――

塚本　その話ならもうすんでる筈だと云つて呉れ。

近藤　はい。

塚本　それ以上何か云つて來ても相手になるな。――兎に角おれはそんな話はもう澤山なんだから。

近藤　ではその積りにいたしまして。――牧田さん、何かお荷物でも括りますやうでしたら、御遠慮なく仰しやつて下さいまし。

牧田　いづれ。

　近藤去る。

塚本　喬君、いよ／＼立つのか。

牧田　少し急だけれども、今夜立ち度いと思つてるんです。

塚本　龍子から聞くと、加納博士の方が行違ひになつたさうで濟まなかつた。僕が餘計なおせつかいをしたばかりで――

牧田　違ひます。そんなことは決してないんです。龍子さんが誤解してるんです。――僕は初めからY――溫泉に行く必要はなかつたんです。

塚本　ぢや、それはそれとしておいて、――君が東京へまつ直ぐに歸るんなら、實は龍子も行き度いと云つてゐるので。

牧田　それだけはいけません、僕は一緒に歸ることは御免です。龍子さん自身にその理由は誰よりもよく分つてる筈なんだ。僕は先刻此處で直接拒絶つたのです。それにあなたにそんなことを云はせるのは狡猾だ。――恥を知れば決してそんな眞似は出來ない譯です。

塚本　いや、龍子は君と一緒に歸るとは云つてやしない。反對にあの方でも何か肝癪を起こして、歸つても君とは行かないと云つてる位で、これは僕一個の希望なんだ。君にしたつて、同じ歸るんなら下らない事に拘はらないで一緒に行つて呉れてもいゝぢやないか。

牧田　そんな事をしちや、僕はあなたに濟まないんです。

塚本　どうして。

牧田　これは龍子さんにも一番に話したのだが、僕が來たために次々

騒な騒ぎが持ち上るんですからね。今夜でも僕が東京に歸ると云へば龍子さんも東京へ行くのだと云ひ出す、それぢゃ幾ら僕でも平氣にお伴をして行く譯には行きませんよ。

塚本　君の氣兼ねが單にそれだけの原因だとすれば——

牧田　——

塚本　まだ何かあるのかね。

牧田　——それだけです。——いや、それだけぢゃありません。兎に角、僕は龍子さんの考へてゐることや、しようとしてゐることに賛成出來ない。我儘な間違つた行爲だと信じてゐるんですから、それを助けるやうな地位には幾らあなたの希望でも立ち度くないんです。

塚本　あれが我儘でないとは僕だつて考へない。併し一旦斯うと云ひ出した以上、あれは決してそれを枉げる女でないことは君も知つてゐる通りなんだ。

牧田　と云つて、その我儘を通させるのは、結局その行爲を是認することになるんだからいけませんよ。斯んな時には、失禮ですがもつとびし〱やつてやる方が、あんな人には爲になります。自分がどんな無茶をしようとしてるか分らないんだから。

塚本　若し狀態が斯う云ふ狀態でなかつたら、僕だつて君の注文に負けはしない。どんな厳しい夫にでもなつて見せるが、現在では殘念ながらその役目は僕には勤まらない。寧ろ意識して勤めない決心なのだ。

牧田　！…

塚本　君の植物に就いて話せば、白樺やまたはあの並木の桂などの種類を南の熱い國に持つて行つたつて育たないと等しく、柑類やバナナは雪の降る土地では實らない。龍子なんか丁度それだと僕はつく〲この頃考へる。柑類やバナナに取つて熱と日光が必要であるやうに、龍子には東京の中流階級の空氣と養分が必要なんだ。多勢の親類や友達が必要なんだ。銀座の舗石も、帝劇の廊下も、音樂會も、三越も必要なんだ。

牧田　さう云ふ生活なら、龍子さんには限らない。あなたにだつて、——また芳子さんにだつて必要ぢゃありませんか。——これから世の中に出ようとする若い人にはより一層必要なんだ。それをあの人は自分さへよけりや他のことは考へようともしない。自分の我儘な行爲のためにどんな可哀想な犧牲者が出來るかといふことを夢にも考へない。——

塚本　併し、僕等は兎に角土地の樹木だ。——どんな苦痛や淋しさでも、龍子が此處で感ずる程には感じないですむやうに生れついてゐるよ。この腐れかゝつた屋根の下で、雪に埋もれて暮らしたつて平氣だが、龍子だけにはさうは行かない。且に生理的に云つてもあれをこの冬此處に置くことは危險だ。去年は殊に初めての寒さで、常八は氣がついてはゐないが確かにルンゲを冒されかけたんだからね。と云つて、やつと起きたばかりの者をひとりで旅行させられはしな

い。だから君に序に連れて行つて貰へりや大に助かる譯なんだ、

牧田　さう云ふ譯ならば僕だつて厭とは云へないのですが、併しその前に僕は龍子さんに約束させて置き度い。春になれば乾度歸ると云ふことを。――僕の責任としても、それだけは念を押した上でなけりや。

塚本　喬君、そんな約束が役に立つと思ふかい。

牧田　ぢやあなたは――

塚本　僕は、いつ歸つて來るとも龍子に聞きはしなかつた。そんなことで押問答したり氣を廻したりするのが、この頃の僕には變に面倒臭くおつくうなんだ。これは決していゝ傾向ぢやない。僕の生活力が衰へ、その燃燒が鈍つて仕舞つた證據に相違ないのだが、事實だから仕方がない。この儘行けばぢりぢりと自滅するに相違ないこの家を、どうすることも出來ず手を拱いて見てゐるやうに、或は並樹が伐られりや伐られるに任せおく外はないやうに、龍子のこともなるやうにしかならないと思つてゐる。諦めてゐると云ふよりはもつと意久地なく投げ出したまでだ。

牧田　年取つた人たちがよく云ひますね。子供でもあつたら、と。――今日までは何等の實感もなかつたその言葉に、僕は初めて深い意味を感じますよ。

塚本　僕等に子供があつたらと云ふのかい。

塚本　さうすりや龍子さんだつて、物の考へ方が今少し違ふ筈ですからね。

塚本　その時はあるかも知れない。併しそれにしても僕は子供があつて呉れりやよかつたとは思はないよ。

牧田　――

塚本　どうするのだ、子供の將來は。――斯んな時代に生れて來る子供の將來は。僕の肩にさへ背負ひきれない重荷を、僕の子供にまでおつ付けるのかい。――いやおつ付け度くなくても、その家に生れて來りや否應なしに縛りつけられる重荷だ。僕がこれから一生それで藻掻き通すやうに、彼も同じ苦痛に生きて行くのだ。寧ろ彼の時代はもつと怖ろしいかも知れない。――もう澤山だ。斯んな腐れかけた家をしよつて生きるのは僕だけで澤山だ。――同じ意味で、龍子も強ひて此處に留まる必要はないのだから、兎に角連れて行つて呉れ給へ。荷物なんかいゝのかい。何か手傳はせることでもあれば芳子を呼んでさせ給へ。

牧田　――

塚本　(廊下へ出ながら。)芳子はゐないか。――おい。芳子

芳子　(奥の方で)はい。

　　芳子廊下に現はれる。

塚本　喬君が今夜姉さんと一緒に東京へ立つのだから手傳つておあげ。

芳子　はい。

塚本去る。

牧田　――

芳子　お召は大きい方の鞄になさるでせう。

牧田　芳子さん。――(芳子が疊み直さうとした先刻の洗濯物をひつたくりながら。)よくそんな事がしてゐられるんですね。

芳子　――

牧田　あなたはさうやつて僕の着物を鞄に詰めて、平氣で左樣ならを云ふ積りなんですか。

芳子　――(泣く。)

牧田　泣いてゐるよりこれから奧へ行つて打ち明けて仕舞ひませう。今ならまだどうにでもなるのです。僕は龍子さんに賴みます。どうか僕等のために東京に歸らないで呉れと、――あのひとは若しかしたら納得して呉れるかも知れない。――いや、屹度して呉れるに相違ない。さうすれば、あなたはお兄さんのために此處に殘つてゐる必要はないのだから。――

芳子　いゝえ、他の時ならだけれど、今日のお姉さんは多分誰だつて留めることは出來ませんわ。

牧田　――そんな事が、あなたにどうして分かるのです。

芳子　何んだかそんな氣がしますもの。――今朝まではそれでもお姉さんはいつもより機嫌がいゝ位でしたわ。お晝過ぎ東京から手紙が來たので――さうですわ、あの手紙がいけなかつたのですわ。それを見るとお姉さんは床の中で長い間泣いてゐらして、而して急に起きると云つて起きたと思ふと、とうとう私が心配してゐた通りになつたのです。ですから――

牧田　それまで分つてゐるのなら、あなたにだけ話します。想像の通りあの手紙がいけなかつたのです。あの中にあつた一つの報告が、この二年間龍子さんの胸に燻つてゐた火藥に最後の火をつけたのです。而して僕等の幸福を破壞しようとしてゐる。――併し芳子さん、僕を信じて下さい。僕はそんなものは撥ね返して見せます。今一度あなたを迎へに來ます。あなたさへ待つてゐて呉れるなら――

芳子　――

牧田　屹度待つと云つて下さい。――呉れるんですね。

芳子　――(點頭く)

牧田　――

その時龍子が廊下から來て、部屋に入らうとして愕然として立ち留まる。併しその儘默つて去る。

(幕)

第三幕

塚本家の母屋の一室。無裝飾なたゞ廣い部屋のまん中に五尺四方もある位の爐が切つてある。これは家族の平常用の爐で、部屋も召使たちの爐邊の如く板敷ではなく疊であるが、その

爐は古くぼか〳〵してゐる。芳子がセルの上に袷羽織をはをり、同じく冬支度のやうな絆纏を着た老婢が、薄暗い電燈の下で爐に火を起さうとしてゐるのを手傳ひながら編物をしてゐる。第二幕の出來事──龍子が牧田と共に東京に立つた日の夜。雨が降つてゐる。

芳子　どうしてよく燃えないのか知ら。

老婢　灰が濕けてゐますので、──何しろ九月に入つたばかりで、奧の爐を燃すなんてことは、滅多にないことでございますよ。

芳子　夕方から急に寒くなつたと思つたらこの雨だもの。お姉さんや牧田さん風邪を引かなきやいゝがと思ふわ。ねえ婆や。

老婢　それよりも婆やはお米の方が心配でございます。今の大事な時に斯んな陽氣ぢや實入りが半分から違ひますから。全く田舍で作の悪いほど情けないことはございませんよ。百姓も難儀なら旦那方もお困りなさる。餘計な八釜しい事の起きるのも乾度斯う云ふ時に限ります。──尤も奧様見たいに東京に行つてお仕舞ひになれば、作が好からうが悪からうが苦勞知らずでゐらつしやられませうが。──

芳子　婆やまで何を云ふの。他の者が云つたら窘めなきやならないのに。

老婢　そりやあなた、婆やだつて心得てはゐますが、奧様もあんまりでございますからね。昨日まで病い〳〵で寢てゐらしたものが、起きるとさあ東京だつて、何もかもおつ抛り出して行つてお仕舞ひになる、あれぢや幾らなんでも旦那様やあなたに──

芳子　よしなさい、そんな話。それよりか今一度暖かになつて。豐年になつて吳れなきや困るわね。食べるものや着るものに不足がなければ、誰も八釜しいことを云ひ出しはしないし、皆んな仲よくして行けるのだから

老婢　その通りだつたのでございますよ、昔は。──また昔話になりますが。──同じ百姓が、同じ土地で同じやうに働いて、當節は何故斯うせち辛くばかりなりますのですか、婆やなんかには譯が分りません。

芳子　おや、燃えて來たぢやないの。ぢやお兄さんをお呼びして──（立つて上手の唐紙い開けて）やつと火が起きましたわ。入らつしやる。

褞袍を着た塚本が次の部屋から出て來る。芳子が座蒲團を持つてついて來て、正面の爐邊に兄を坐らせる。

塚本　斯うしてるとすつかり冬だな。雨よりは吹雪の音でもして來さうだ。

芳子　餘り急に寒くなつたので、お姉さんたち風邪でも引きはしないか知らつて、話してるとこなの。

塚本　──

老婢　お茶でも入れて參りませうか。

塚本　茶もいゝが、酒はなかつたか

老婢　さあ、奥の方の御酒は、ちつとも召し上らないから切れた儘だつたと思ひますが。
塚本　葡萄酒でもいゝ。熱い湯で割つて飲んで見よう。
芳子　ぢや婆や、急いで持つて來るといゝわ。
　老婢去る。
塚本　何んだかぞく〳〵して、汽車の途中どころぢやない。こつちが風邪を引きさうだ。
芳子　――（編み棒を動かしながら涙を落す。）
塚本　芳子。
芳子　――
塚本　何を泣くのだ。
芳子　――
塚本　斯んなことになつてお前も心細いだらうが――
芳子　いゝえ、――それよりもお兄さんがあんまりお淋しさうで――
塚本　おれは構はない。併しお前はおれとは違ふのだから、これから先どう云ふ風にやるかと云ふことも、この際よく考へて見る方がいい。而して何か希望があるなら遠慮なく云て呉れ。おれもいろ〳〵思つてはゐるのだが。
芳子　私のことなら心配しないで頂戴、お兄さん。別に希望なんて何んにもないわ。この儘お兄さんのところに一生置いて貰へれば――それだけが私のお願ひなの。
　老婢が盆に葡萄酒の瓶と湯呑を載せ、薬罐を下げて來る。
老婢　ひどい風になりました。
塚本　――暴風雨になつちまつたね
芳子　――汽車も斯んな晩は厭でせうね。
塚本　――乗換えがなきや樂なんだが。――婆や、薬罐は熱いのか。
老婢　沸つてをります。お注ぎいたしませうか。（塚本のついだ葡萄酒の上に熱湯を注ぎながら。）――急に寒くなつたり、斯んな大暴風雨になつたり、この様子だと今年は碌な年ぢやございますまいよ。
芳子　本統にひどくなるばかりだわ。――あれは何處でせう。あのどう〳〵云つてるのは。
塚本　樋の腐れたところが何處か溢れてるのだ。（奥の方で召使たちの騒ぎ出したのを聞きつけて、）洩り出したな。
　近藤が急いで入つて來る。
近藤　飛んだ大雨になりまして。――屋根やが幾ら云つても愚圖々々して來ないものだから、どうも大分方々が――
塚本　少し位いぢつたつてどうにもならないのを見込んでゐるのだよ。
近藤　誠に不都合ですが、仕方がございませんから、ひどく洩るところは盥をあげろと申しておきました。
塚本　まあいゝさ。濡れて困る程の部屋ぢやどれもないのだから。
近藤　ですが、雪の來るまでには一つ思ひきつて修繕いたさせ度いも

のでございますな。昨年位の雪ならですが、この冬でもうんと降られますと、恐らく危い場所が出來てをります。

塚本　眞逆潰れもしなからうぢやないか。——兎に角そんなことを氣にし出した日にや、一日だつてこの屋根の下には住んでゐられないんだから、まあ行くとこまでこれで行くのだ。

芳子　おや。

老婢　どうなさいました。

芳子　此處も洩つて來たやうよ。

近藤　こりやいけない。——何か持つて來させなきや。(下手の入口から奧に向つて、)おい、おい。こちらにもバケツか何か持つて來て與れ。

老婢　皆んなあちらの部屋で騒動やつてるんですよ。私が取つて來ませう。

老婢去る。

近藤　お孃樣こちらへ入らつしやらないと濡れます。

芳子　大したことはなささうだけども。(編み物を抱へて兄の右に移りながら、)——ねえ、近藤さん、お姉さん方は頓て町に着きなさる頃か知ら。雨具の用意を何んにもしてゐらつしやらないのだから、どんなに困つてゐらつしやるかと思つてよ。

近藤　左樣ですな。あれで本線へ移つてお仕舞ひになれば平氣でせうが、あの乘換えが全く厭でございますからね。斯う云ふ時には誰も閉口いたします。

老婢小さい盥を持つて歸つて來る。

老婢　驛長さんがお出でございますよ。

塚本　驛長か來た。——この雨の中を何の用事だらう。

驛長か入つて來る。第一幕目の時と同じ制服、同じ態度。但し晩酌の影響で一層よい顏色になり、また一層上機嫌である。

驛長　今晩は。——恐ろしい降りですね。お孃さん、今晩は。——やあ、これは近藤君、今晩は。——婆やさんにはもう挨拶した筈だが、まあ今一度云せはて貰つて、ねえ、婆やさん今晩は。——

塚本　まあ、こちらへ。

驛長　こりや上座で恐縮ですな(主人の與へた上手の爐端に坐りながら。)奧樣もお客樣も一時にお立ちで、急にお淋しうございませう。ちつとも存じませんで。驛でお話を伺つて喫驚いたしました譯でて。——そんな事なら家内もちよつとお見送りいたさせなきやななかつたのですが。

塚本　從兄が歸るに就いて俄に思ひ立つたことなんです。

驛長　お連れとしてはそりやもうこの上なしで。——全く今度はお一人でなくて運がよろしうございましたよ。不斷なら兎も角ですが。幾ら奧樣のやうな確つかりした方でゐらしても、今晩のやうな不意な事故の生じた場合には、御婦人はお一人旅ではどうしても。

塚本
芳子
近藤
老婢　}——

驛長　——實はその、大した事でもないのですが。

芳子　何かあつたのですか、汽車に。

驛長　いや、お孃さん、それ程御心配なさるには及ひません。ほんのちよつと脱線いたしただけです。

塚本　脱線した。——一體何處で。——乘客には異狀はなかつたんですね。

驛長　ございません。でゝから　様もちよつと喫驚りはなさつたでせうが、まあ御無事ですんだのですから、御安心下さい。丁度A——驛に入らうとした時やつたので、例の轉轍機の過失らしいのです。

近藤　A——驛なら半分と云ふところですかな。

驛長　さうです。當驛と町の約中間です。

芳子　それで直ぐよくなるのでせうか知ら。

驛長　三十分近く遲延したらしいのですが、乘客の中には本線の乘換えに遲れないために、A——驛から自働車で町へ行つた者も大分ある樣子ですから、多分こちらの奥樣方もそのお仲間ではないかと思つてをります。

塚本　番君が居て呉れてよかつた。

芳子　本統に、お姉さんだけだつたらどんなに困つたか知れないわ。

近藤　夜も殊にこのどしや降りの中で、そんな目にお逢ひになつちや奥樣も恐らくどうも。——

驛長　斯んな時に限つてまたやるんですからね。あの轉轍機と云ふ奴多分御存じでゐらつしやいませうが、斯う云ふ工合ですからな。（以下大きな金火箸を取つて爐の灰に線路の圖を引き、その金火箸を轉轍機にして話す。）これが上りのホームの線として、これが下りのホームの線とすると、上りの時は轉轍機をこちらの方へがちやんと落す。——いや違つた。こりや下りの列車だ。これが上りのホームで、これが下りのホームとすると、こちらへ落す譯だ。さうです。反對です。だから下りの場合にはこれが上りのホームで、これが下りのホームとすると、こちらの線路を塞げばいゝので。——はて、違つたかな。いや今度は違ひません。これが上りのホームで、これが下りのホームだから——どうも私が拙い。（急いで灰の上の線を掻き交ぜながら。）兎に角そんな譯で、若い者が寢ぼけ半分にやると、ともすれば僞挫るのでして。停車場構内に生じた列車の事故の十中八九は、悉くこの轉轍機の過失に原因すると云つてもいゝのです。それに此處だけの話ですが、A——驛の驛長はこれが利く方でしてね、（左手の人差指と拇指で仕方をして見せながら。）人間は頗くいゝ男ですが、日が暮れりやもう醉つ拂つてるんだから、どんな事が起きたつて本統を云へば不思議はない位なん。——りや私だつて飲らない譯ぢやありません。正直に云へば、大いに好きですが、酒で

しくじつたと云ふことはこれでも學習院時代から一度もありません。斷じてありません。これだけは誰の前でも自慢いたしますよ。

塚本　葡萄酒で何んだらうが、平井さんに一つあげるといゝ。

芳子　婆や、そこにコップがあつたでせう。

老婢右手の岩丈な板戸の戸棚を開けてコップを二つ取り出し一つを驛長のために、一つを近藤のために注いで、それから去る。

驛長　これはどうも、何んだか催促がましいことを申したやうで恐縮ですな。

塚本　熱いのでなくて張り合ひがないだらうが。

驛長　いや、結構です。熱い方は家で飲るだけもう飲つて參つたので、この上は頂けません。――實は何んですよ。Ａ――驛の椿事を直ぐお耳に入れたものかどうかと大に迷ひましてね。幸ひお怪我がなくてすんだのだから。夜分わざ〳〵氣懸りな話を持つて參るにも當るまいかと云ふ氣があつたものですから。――併し歸つて家內に相談いたしますと、そりやいけませんよ、お怪我がなかつたのだから態らお知らせしたつて御心配なさる道理はないし、運惡くお怪我でもあつたのなら尙ほのこと內證には出來ない譯だし、どちらにしたつて今夜これから出掛けていらつしやい、と云はれて見りやその通りで。全く女と云ふものは男の及ばぬ細かいところに氣のつくものでしてね。

近藤　いや、評判ですよ。驛長さんの奧さんのえらいつてことは。それに娘さんのやうにお若いんだから恐らく申分なしで。

驛長　若いどころぢやない。もう駄目です。すつかりあれも婆さんになつちまひましたが、それでも貰つた時にや私と十三から違つてたんで、近藤君の云ふ通りよく娘のやうだと云はれちや、あれが極り惡がつたもんですが、もう駄目です。すつかり婆さんになつちまひました。併し此處だけの話ですが、塚本さん、家內に就いては一つだけ私の自慢し度いことがあるのでして。――

塚本　はゝあ。

驛長　あれで家內は支那料理の名人ですよ。

塚本　それは知らなかつた。

近藤　私も初めてゞ。

驛長　これも學習院時代の昔話で、すぐ近所に私を大變贔屓して下すつた教官のお宅がありまして、家內もお心安くお出入りを願つてゐたのですが、その內に懇意な奧樣方が一週に一度、教官のお家に支那人の先生を呼んで支那料理の稽古をすることになりましてね。家內もお手傳ひに上つてるうちいつとなし覺えたと云ふ譯です。

塚本　直傳ですね。

驛長　仰しやる通り直傳の北京料理で。それも先生がたゞの先生ぢやなく陸軍少將で袁世凱の股肱の家僕と云ふのですから豪儀ですよ。――

塚本　――

驛長　つまり支那の陸軍少將が、袁世凱の沒落後日本へ逃げて來て、支那料理の先生になつた次第です。さう云はれて見ると何處となく違つたところがありましたよ。色の小白い、堂々とした大男でしてね。大きな肉切り庖丁を器用な手つきで使ひながら、ちよつとそれを頸のところへ當がふ眞似をして、（火箸でその仕方をしながら、）「この首、斯う見えて三萬圓の懸賞ついてゐます」と云ふのが口癖でした。

近藤　偉いもんですなあ。

驛長　それで陸軍少將の隱し藝にしちや素敵もなく旨い料理でしたからね。家內は今でもよく云ひますよ。張さんの拵つたやうな兒豚の丸煮が今一遍食べられりや、いつ死んでも不足はないつて。―

近藤　奧さんも拵えようと思へば出來るんでせう。

驛長　さう云ふ兒豚つてものは特別の兒豚を選ぶので、田舍ぢや駄目だと云つてますがね。尤も、ものに依れば町から材料を買つて來さへすりや出來ないことはないので、ちよつとしたものはうちでもよくやつてゐますよ。――ところでこれはまだ內證の話なんですが、どこから洩れたか女房の支那料理のことを聞いて教はり度いと云ふものが二三ありましてね、村長のとこの娘とか、郵便局の若いかみさんとか、學校の唱歌の先生とか云つたやうなまあ連中ですが、――お孃さんも何んなら一つ如何です。

芳子　有り難う。

驛長　實は牧田さんのゐらつしやるうち、この支那料理で晩飯でもあげて大に東京話を伺ひ度いと思つてゐたので、今となつちや誠に殘念です。家內からも、それならそれのやうに早くなさればいゝのに、あんたは何んでもそれだから出來ることまで取り逃がす、と小言を云はれたやうな始末です。

塚本　牧田君も大學の方がおひ〳〵始まるので。

驛長　左様でせうつて。立派なところにお勤めになつてゐればゐるほど樂は出來ませんですよ。併しこのことは牧田さんに初めてお目にかゝつた時にもお話したのですが、あゝ云ふ方には是非學習院つてものゝ味を一遍知らしてあげ度いと思ひましてね。勿論大學も結構です。所謂最高の學府で、この教授先生におなりになれば申分はない筈ですが、學習院の味はまた一種特別です。いつも申す通り生徒だけのことを云つて見ても、これが悉く、たゞの子供ぢやありません。ちよつと呼ぶ名前が一條！　德川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　と來る。でなければ、岩崎！　三井！　安田！　と斯う云つた工合で、こつちの氣位まで何んとなく違つて來ようつてものですからね。

近藤　その話だけは何度聞いても偉いもんですよ、平井さん。

驛長　自分でもこの話だけは何度自慢してもいゝ話だと信じてゐるのです、近藤君。實際自分のこの口で、一條！　德川！　近衞！　前田！　島津！　毛利！　岩崎！　三井！　安田！　と呼び捨てにし

た者が、廣い日本にも何人ゐませうかつて。――鐵道大臣だつてこの點ぢやおれには叶はないんだ、と私は女房に自慢してやるのです。さう云へば近藤君は學習院の教官の制服を知つてゐますかね。

近藤　見たことはありませんね。

驛長　御主人は御存じでせう。

塚本　知つてます。

驛長　白の略服を御存じですか。

塚本　いや、そんなものは知りません。

驛長　多分さうかと思ひましたよ。學習院の教官の制服と云ふと皆んな黑いのだとばかり考へてゐて、夏の略服があるのを知らない人が多いから實に不思議です。白地に黑の縁のついた、海軍士官の服にそつくりの中々意氣なものでして、あれを着るとちよつと劍でも吊つて見度い氣持になりますな。黑いのよりは若くも見えます。私なんぞが着ても確かに五つ六つ若返るつて、女房がよく云つたものですが。――

芳子　――おや。

塚本　どうしたのだ。

芳子　――自働車ぢやないか知ら。

塚本　自働車。

芳子　――私の氣の迷ひか知ら。――雨ではつきりしないけれど、何んだかそんな音がしたやうだわ。

塚本　病院の自働車にしても、斯んな暴風雨の中を今時分やつて來ることは先づない筈だが。

近藤　さう申せばもう何時でせうか。

驛長　(左の手頸を覗いて)じやあ、こりや大變だ。もう十一時になりますよ。今夜こそ長つ尻をしない約束で出て來たのだが、これはどうも。――

　　この時、問題の自働車の警笛がはつきり聞こえる。

芳子　矢張り自働車ですわ。――あら、うちに留まつたのぢやない。

塚本　――裏門だ。

　　戸を叩く音と人の呼ぶ聲が雨の中に聞こえる。

聲　(とんとん)。――(とんとん)。――開けて下さい。――開けて下さい。

芳子　牧田さんの聲だわ。

塚本　近藤行つて見ろ。

　　近藤急いで去る。

芳子　――

　　芳子續いて去る。

驛長　それでは私もこれで失禮させて頂きます。――いづれ何んでせう。脫線騷ぎでけちがついたので、改めて御上京のお積りで引つ返していらしたのでございませう。

塚本　そんな事かも知れません。

驛長　これでお出先に故障があると、後々まで厭な氣持のものでございますからね。一度お歸りになつて、明晩にもまたお立ちと云ふことになればそれに越したことはございません。――ではどうかよろしく申上げて頂きます。お目にかゝつて御挨拶を申上げます筈ですが、お疲れのところを却つて御迷惑でございませうし、それに先刻も申しました通り今晩こそ長つ尻をいたさない約束で參りましたので、――あなただけの話ですが、家内は怒るとよく閉め出しを食はせますのでしてね。

塚本　いや、結構です。どうかお引き取り下さい。

驛長　左樣ですか。ぢやお言葉に甘へまして。いづれ家内も明日伺はせます。お孃さんの支那料理のお稽古のことも、その時あれにお聞き下されば委しく説明いたします。どんな風な料理が出來て、どんなに旨くて、費用は幾ら々々と云ふ事まで、喫驚りするほど細かに話します。

驛長去る。

塚本　堪らない、――我慢出來ない奴だ。――併しあんな男でもおれよりは確かに幸福だ。龍子は――

濡れて死人のやうにぐつたりなつた龍子が、芳子と牧田に支へられて下手に現はれる。

龍子　――大丈夫よ、もう倒れやしないから。

芳子　だつて危いわ。しつかり掴まつて頂戴。

龍子　先刻は自働車から急に下りたので、くらくらつとしただけですよ。

牧田　――歸つて來ました。

塚本　汽車が飛んだことだつたね。併しまあ怪我がなくてすんで何よだ。――龍子は直ぐ寢た方がよくないかい。

芳子　その方がよくてよ、お姉さん。

龍子　いゝのよ、大丈夫、もう何んともないの。

芳子　ぢや着換だけでもしなけりや風邪引くわ。――持つて來ませう。

龍子　行かないで。――よつちやん。行かないで私の傍に居て頂戴、――而して私が何故歸つて來たか聞いて頂戴。――あなた。

塚本　――

龍子　私の代りによつちやんを東京にやつて頂戴。

芳子　――お姉さん。

龍子　――私はそのために歸つて來たのです。

塚本　出し拔けに何を云ひ出したのだ。

龍子　初めからのことを話せば、汽車が脱線した時でも私は引き返さうなんてことは夢にも考へはしませんでしたの。孫さんに自働車を見つけて貰つて、どんなことをしても町まで驅けつけようとしたのだけれど、驛を離れるか離れないにまた自働車がパンクして――

（泣き出す。）

牧田　矢張し寢た方がいゝでせう、龍子さん。その話は明日にでも落ちついてから十分出來るのだから。

龍子　いゝえ、止めないで話さして。——皆んな話して仕舞はないうちは、幾ら眠れたつてこの屋根の下で私が眠れると思つて。——私たちは代りの自動車が驛から來るのを、眞つ暗な百姓屋の軒下で三十分近くもびしよ濡れになりながら待つたのです。その時だつて、私は引つ返さうなんてことは夢にも考へはしなかつた。——自動車さへ來て吳れて全速力で驅けて行けば、結構間に合ふと信じてゐましたの。早く代りの來ないのが自烈つ度くてならなかつたのです。手繰り寄せるやうな思ひで待つたのです。でもそれ程にしてやつと今一度乘つた自動車が何の役に立つたでせう。——何んにも、——何んにも——なりはしなかつたのです。

牧田　M——の溪流に添つた新道が、この雨で崩れて自動車が行かないのです。

塚本　——あの溪の新道は、急に大雨になると危いのだ。

龍子　それだつて私たちの前に出た二臺の自動車は、二臺とも通つて行けたのですもの。あの道はそれまでは無事でゐて、私たちが通らうとする間際になつて崩れたのです。もう一里足らずで着くと云ふところで。——目的の町の灯が、向ふの雨の空にうす赤く映つてゐるのまでまざ〱と見えてゐながら、私たちは進むことが出來なかつたのです。何かゞ私たちを、——いゝえ、私を留めたのですわ。汽車の脫線したのも、初めの自動車がパンクしたのも、今また道が崩れたのも皆んなその爲だつたのですわ。——ねえ、あなた。さうでせう。さうだと云つて頂戴。私にはつきり信じさせて頂戴。

塚本　お前が引つ返して來たのは、それを信じたからぢやなかつたのか。

龍子　——信じました、その時は。——どうしても通れないと分つた時は。——それだつて、姊さんの打ち明け話を聞くまでは、その儘この家に引き返して來ようとまでは決心がつきませんでした。

塚本　——

牧田　塚本さん、僕は本統は芳子さんを貰ひ度かつたのですが、芳子さんは拒絕したのです。僕はそのことを龍子さんに話して仕舞つたのです。——芳子さんは、龍子さんが田舍の生活に堪へ切れないで東京に歸るだらうと察してゐたのです。而してあなたを孤獨にしないために自分の幸福を犧牲にしようとしたのです。

塚本　僕のために犧牲にするには、芳子、お前の幸福は餘り大き過ぎる。

龍子　いゝえ、犧牲にはさせません。——よつちやん、今云つた通りで、私はよつちやんのために歸つて來たのだから、安心して姊さんと一緒にいらつしやい。

芳子　お姊さん。——

龍子　姊さんが溫泉に行く途中この家に寄道したのが運命であつたの

なら、私が今夜まつ直ぐ東京に行かれなかつたのも多分運命ですわ。それを私は今夜はつきり感じたのです。而して自分で堅く決心したのです。どんなことがあつたつて、二度と東京に歸らうとは思ふまい。――この田舍の家を見捨てまい。――塚本の傍を離れまいと。――あなた、私を許すとし仰やつて頂戴。

塚本　お前は特別に僕から許されることはない筈だ。僕は承知の上でお前をやつたのだから。

龍子　私はあなたに嘘をついたのです。――今夜の私は、この田舍よりもこの家よりも、何よりも先にあなたを見捨てようとしたのです。――あなたの知らないよその男の人に逢ひに行かうとしたすのです。

この瞬間、表の方に當つて激しく戸を叩く音が聞こえ、豪雨と疾風の間に異常な喧騷が起こる。

戸を叩く音　(とんとん)。――(とんとん)。――(とんとん)。――(とんとん)。――

塚本
牧田
龍子
芳子　――

近藤と老婢駈け込んで來る。

近藤　小學校が潰れかけたのださうでございます。――例の改築問題の起つてゐる二階建の方ださうで、

塚本　村の者は大勢來てるのか。

近藤　十四五人ばかり。――後を固めないと危いから材木を出して貰ひ度いと申して參つたのです。

塚本　要るほど持たしてやれ。――それから焚き出しの用意をさせなきやなるまい。

老婢　大釜の方で炊かせませう。――昔と違つて、斯んなことでなければあの釜もめつたに使ふことはないのですから。

老婢去る。

近藤　併し村の奴等も蟲がよすぎて癪に障ります。この頃の仕打を考へて見りや、斯んな時だけ勝手を云つて飛び込んで來られた義理はない譯で。――それならそれのやうに、不斷から小生意氣な眞似をしなきやよろしいのですが。

塚本　まあい〻、早く行つてやれ。おれも後から樣子を見に行く。――

――(近藤の出るのを待つて、)龍子。

龍子　――

塚本　お前はこの屋根が今の小學校のやうに潰れる日が來ても、――僕には寧ろこの方が潰れないのが不思議な位だが――今夜引つ返して來たことを後悔しないのだね。

龍子　あなたさへ許して下さるんなら。

塚本　ぢや、その話はこれ以上する必要はない。お互ひに忘れて仕舞

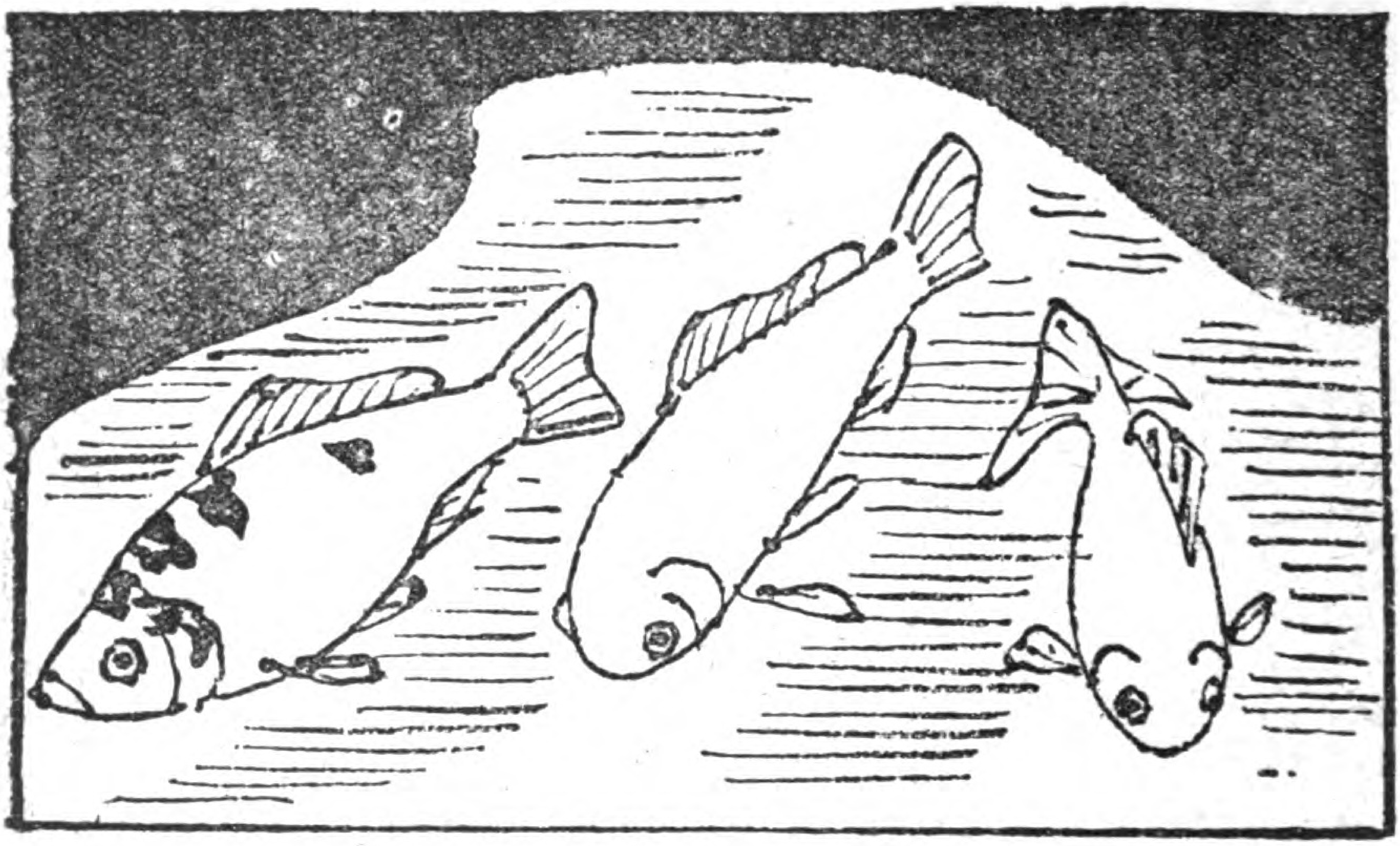
はう。——高君、君達は明日の晩立ち給へ。幸福に暮らし給へ。而して、時々はこの田舎の斯う云ふ生活の中で朽ちて行く僕等を思ひ出して呉れ給へ。

牧田
芳子 ｝——

塚本　近藤があの調子だから僕は默つてゐただが、實際今夜がすむと村の者が後で云ふことは極つてゐる。僕が並樹を買はないのがいけないと。それがまた新しく攻撃されるのだ。何かそのために今夜の暴風雨か起こつたり、學校が潰れかけたりしたやうに云ひ兼ねない。——併し何を云つたつて、彼等が悪いんぢやない。寧ろ彼等が云ふのぢやない。悉く枕木の叫びだ。あの幽靈の唸り聲だ。

鞆子　あゝ私はその中で一生住むために歸つて來た。——

（終）



彼と彼の內臟

江口渙

松木が呼吸を引き取つたのは、午後の二時少しすぎでもあつたらうか。

病勢が急變して突然危篤に陷つたために、やうやく保釋を許された松木が、昏睡狀態のまま市ヶ谷刑務所を出て、永年住んでゐた社會運動社へ擔荷ぐるみ自働車で運び込まれたのは、昨日の夕方近くだつた。刑務所の醫師は、社會運動社へ歸る途中、自働車の中で大丈夫死ぬだらうと云ふ見込の下に、「殺人未遂、爆發物取締規則違犯」と云ふこの重大犯の容疑者を、特に獄から出したらしい。それが意外にも一晝夜近くももつて、無論、その間意識は遂に一度も回復しなかつたが、かうして社會運動上の同志や友人の大勢と、そしてそのためにわざわざ横濱から驅けて來た母親や義弟達に圍まれながら、疊の上で靜かに眼を瞑る事が出來たのは、むしろ奇蹟と云つて好い程だつた。

凡てが終つた時、みんなは力の脫けた體を機械的に動かして、一と先づばらばらと次の間の方へ立つて行つた。そして、女達と義弟と私だけが後へ殘つた。

「湯灌は如何しませう」

母親は變に遠慮らしく私を見た。社會運動者と云ふ者の生活には、かう云ふ際にも矢張、何か特殊な習慣があるとでも思つてゐるらしい。

「さあ。一層の事、アルコールで綺麗に拭き取つたら如何でせう」

「はあ。結構ですとも。」

安心の色が母親の顔に動いたので、私は早速看護婦をはげまして屍體の處置に取り懸つた。先づ全身を殘りなくアルコールで拭いた。そして物の洩れ出す怖れのある箇所へは、手落なくぎつしりと脱脂綿を詰めた。口と鼻とへ殊に澤山入るのに驚きながら、それでも火箸でぎゆうぎゆう押し込めた時には、これでは呼吸が詰つて松木が苦しくはないだらうかと云ふ、極めて非科學的な杞憂さへも、一瞬間風のやうに私の心を掠めた。

腦を犯されたためか、最後まで半分程開け通してゐた瞼は、死んでも容易に閉ぢなかつた。それを松木の親戚だと云つてはゐるが、怖らく若い頃の愛人であるらしい品の好い中年の婦人が指先で頻りと軟かく撫で降した。

するとそれまでみんなのする事を、押し默つたままじつと見詰めてゐた母親の唇から、突然、甲高い調子で言葉が迸つた。

「ああ。あ。ほんとうに好く死んでくれた。好く死んでくれた。これでね。あたしもやつと安心してあの世へ逝けるよ」

他人行儀に枕頭から二尺も離れてきちんと坐つてゐる母親の膝の上には、上向きに重ねた兩手が、矢張、きちんと乘つてゐる。そして、若い時の小粋さを思はせる面長な顔を嶮しい程青白ろくさせながら、皺のある眼を大きく開いて、再びしげしげと死人を見詰めた。

「こんど生れ變つて來る時には、どうぞ眞人間に生れておいで。もう、もう、こんな苦勞は二度と再び懸けないでおくれ」

二度目の母親の言葉は、前とは違つて言葉と云ふよりも、むしろ溜息が物を云つてゐるのかと思はれる程、それ程力弱いものだつた。そして、もつと何かを云ひたくつて、然も云ふまいとするかのやうに、しばらく唇だけをぴりぴりとさせてゐたが、とうとう口を噤んで終つた。無論、最初から最後まで遂に一滴の涙すら見せない。

母親は間もなく二人の息子を促して、少しの躊ひもない物腰で社會運動社の玄關を出て行つた。その凡ての樣子から推し計つて、お通夜などはてんからする氣がないばかりか、かうして臨終に來た事さへむしろ迷惑であるらしかつた。

鼠色に凍ついた雪曇りの空が、露地向ふの屋根の上から寒々と覗いてゐる椽側に出て、手を昇汞水で消毒してゐる間にも、私は松木の母親の見せた態度と言葉とについて頻りに考へさせられた。殊に「好く死んでくれた」と云ふ言葉と、「眞人間に生れておいで」と云ふ言葉とが、睡眠不足で痛み切つてゐる私の神經へ、一と際、苛々しい棘となつて突き刺さつた。

やがて疲れた體を休める可く、人氣のない二階へ一と先づ引き揚げようと思つた私がとんとんと勢好く梯子段を登つて行くと取つ附きの六疊の硝子窓に引いてあるレースのカーテンを後にして、男と女とが向合つて坐つてゐるのが眼に入つた。女は體を前屈みにして頻りにしくしく泣きつづけてゐる。

見ると男はこの村の長老の山座氏だつた。女の方はもう相當に歳をとつた、そして、私の少しも知らない顏だつた。肉附の好いためか、きちんと坐つた膝が、短く堆く盛上つてゐるのと、男物を直したらしい飛白の銘仙の羽織を着て、田舍じみた小型の丸髷に結つてゐるのとが先づ私の眼を引いた。婦人は手巾を眼に當てて、頻りに頭を動かしてゐる。

これも多分松木の親戚の人だらうと思つたので、私は、褞袍に包んだ膝を、早速、その前まで運ばせて、更めて叮嚀に挨拶をした。

「この度はどうもお氣の毒な事でございまして――」

そして、後は何時もの通り口の中で吃つた。

「どうもいろいろ御親切に有難うございます」

婦人は一旦言葉を切ると、慇懃に頭を下げた。だが、やがて靜かに顏を上げて、再び話しかけた次の言葉は全く私を不思議がらせずには置かなかつた。

「こちら樣でもこんどは松木さんが、ほんにお氣の毒な事でございまして」

おやつと思つた私は、思はず顏を向け直して山座氏を見た。

「君。この方は伊藤慶太郎君のお母さんだよ」

「ああ。さうか。僕は又松木君の親戚の方かと思つたものだから。」

「いいや。伊藤君のお母さんだ。實は僕も今お母さんから聞いて魂消てるとこなんだが、伊藤君が三四日前に突然亡くなられたんださうだ」

「えつ。伊藤君が。何時。如何して」

事があまりに唐突でもあり、又、意想外でもあつたので、私は思はず高つ調子な聲を出した。

「はあ。この二十三日の日ですばい」

「病氣は何です」

「いや。それがまだ解らないんだ。第一、病氣で死んだか何んで死んだか、それさへ一向解らないんだ。今、武井君達が××刑務所へ訊き糺しに行つたから夕方までには解るだらうけど」

山座氏は鐵縁の眼鏡の裏から覗かせてゐる眼を不安らしく瞬かせて私を見た。そして、鐵無地の古つぽけた筒袖羽織に包んだ小柄の體をがつしりと胡坐の上に置きながら、伊藤の母親に代つて更に詳しく說明して聞かせた。

つまり一月二十三日の夕方とかに、伊藤慶太郎が服役してゐる××刑務所から、本人が死んだから屍體を引き取りに來いと云ふ電報が、熊本の田舍にある彼の郷里へ突然屆いたので、すつかり驚いた母親は直ぐ樣その夜の急行で飛んで來たのだ。そして、息子から度度名を聞かされてゐた社會運動社へ行きさへすれば、とにかく一と通りの樣子は解るだらうと思つたので、東京驛へ着くなり直ぐその足で取り敢へずここを尋ねて見たのだと云ふのだ。

「こちらへ來さへすれば、なんもかんも解つとるどと思ふち、お伺ひ

しましたばつてん」

「そりや、さうでせうとも。ところが肝心なこつちが何にも知らなくつて、まるで狐にでも訛されてゐるやうです。大體、今日死んだ松木が伊藤君の受人になつてゐるんですから、在監中に何事かあれば、第一にここへ知らせて來なけりやならん筈なんですが。假令、松木が未決へ入つてゐても、とにかく住所はここなんだから」

山座氏が體に不似合な太い聲で力強く憤慨の言葉を洩らすのに對して、伊藤の母親は何も云はずに、唯、がてんがてんをして見せた。肉附きの好い丸顏を頻りと竪に動かす度に、小型の丸髷が頭の上でがくがくした。

伊藤慶太郎が、　へ宣傳ビラを撒いた罪で八ヶ月の禁錮を喰つて××刑務所へ入つたのは、去年の五月の半時分だつたらう。だからもう二ケ月足らずで立派に出て來られる體なのだ。それを考へると私には母親の氣持が尚更一倍傷ましくつてならなかつた。

「さうですかね。そいつは驚いたな。あんな丈夫な男が」

何んと云つて慰めて好いか解らなかつた私は、唯、幾度かこんな言葉を繰り返すだけだつた。

故人に就いての話が、三人の間にしばらく取交された後だつた。母親はバスケットやコートや襟卷を取り纏めて、俄かにそわそわと歸り支度をし始めた。

「では、これから中野の親戚へ行つて參りますけん」

「それよりもどうです。夕方になれば死因もはつきり解りますから、それまでお待ちになつては」

「ええ。でもまあだ、他にいろいろ用事もあるますけん。では、明朝早う又參りますたい」

「何なら今夜ここへお泊りになつたら如何です。中野とこことをいちいち往復しては大變だから」

山座氏が情味の籠つた言葉でどんなに親切に引き止めても、母親はなかなか聞き入れやうとしない。そして、とうとう歸る可く立ち上つた。然も一旦立ち上つた後で、何か思ひ出したらしく、又更めて山座氏の眼を見詰めた。

「では、慶太郎の葬式もどうか松木さんのと御一緒になさつて下はいますごと、何も彼もよろしうお願ひいたします」

「さあ。日取の都合で松木と一緒にやれますか、どうか。然し、とにかく吾々の仲間ですから、お葬式は一切こちらでお引き受けします」

力強くかう答へた山座氏の顏に、如何したのか、その瞬間、平生の穩かさに似ず不愉快さうな影が險しく走つたのを、私は見逃す譯に行かなかつた。

社會運動社の階下の八疊では、松木の遺骸と、遺骸に捧げられたささやかな草花とを前にして、お通夜に集つた人々の雜談がそろそろ賑かさを加へ始めた頃だつた。塀の外の露地の上に幽むやうな下駄の音

が入亂れて聞えたと思ふ間もなく、荒々しく格子が開いて「唯今」と云ふ聲と一緒に四五人の人がどやどやと玄關へ入つて來た。

「おい。變死だぞ。變死だ。」

から投げつけるやうに鋭く呼びかける武井の聲が先づ聞えた。そして、その亢奮し切つた聲のひびきが、まだほんとうに消えない裡に、それ等の人達は建て附けの惡い堺の襖をがたがたさせて、一度にお通夜の部屋へ入つて來た。みんなは烈しい寒さのために、鼻の頭を赤々と光らせてゐる、

「何？變死だ？」

山座氏が直ぐ樣鋭い聲で訊いた。

「ああ。變死ださうだ。」

「如何したんだ。監守か何かにどうかされたのか」

印刷工の大島が續いて口早に訊き返した。そして、その返事がまだ相手の口から出ない裡に、私を始め瀬戸物の大火鉢を圍んで椅子にかけてゐた七八人の嶮しい視線は、肉附きの好い武井の白い圓顏へ、不安に充ちた閃きを期せずして一度に鋭く投げたのである。

「とにかく刑務所では、極力自殺だと云ひ張るんだが、それがどうも怪しいんだ。何しろ屍體はもうとつくに埋めて終ふとるんだもの」

「何？もう埋めたつて」

「うん。次の日に假埋葬にして終ふたさうだ。」

武井は黒い學生マントを肩から脱すと、急いで部屋の隅へ投げ出して、又後を續けた。

「所長がゐなくつて監守長に會つたんだが、その話では、監房の窓の格子へ帶を懸けて首を釣つてゐたといふのだ。時間は二十三日の午前十一時頃ださうだ。さうして遺書も立派にあるんだから、明かに覺悟の自殺だと云ひ張るんだ。それなら是非屍體と遺書とを見せてくれつて云つて强硬に懸け合つたんだけど、屍體は裏の共同墓地に埋まつとるし、遺書は遺族以外の何人にも斷じて見せる事は出來ないと云つて、どうしてもきかないんだ。それなら遺書は誰に宛てたもので、何通位あるかと訊いても、それさへ所長の許可を得なければ云ふ譯に行かないと云つて、云はないんだ。」

「そりや、餘程をかしいな」

山座氏は、一寸、嶮しく眉をよせた。

「第一、伊藤は後二ヶ月足らずの辛抱で立派に出て來られる體なんだからな。今頃ひよつこり自殺するなんて如何も少し變だね。おまけに誰にも見せずに慌てて埋めて終ふなんて、益々變だ。」

「そりや變だな。全く變だ。」

勞働爭議で幾度か入獄の經驗をもつてゐる大島は、火鉢にかけた兩脚を踏ん張ると、やや反り身になつて、同意を求めるかのやうにぎろりと私の顏を見た。私は唯、默つて首肯いた。

「もつともこれがこの先、十年も十五年もあるのなら絶望的に自殺しないとも限らないが、もう直き出られるのに突然死ぬなんて變だね」

すると、山座氏も大島同樣、如何にも不安さうに眼を輝かした。
「それに當人があの通り頭が時時變になる男だらう、何かのはづみにかつとなつて、又、無茶苦茶をやつたのを、、、、、、、が懲罰とか何とか云つて、どんな事をしたかも知れないからな」
「さうだよ。全くさうだよ。それにね。伊藤の監房は、俺も近所へ一度入つた事があるが、變にがらんとした二階の隅つこで、とても寂しいところなんだ。あんなところで何されたつて解りつこないよ」
かう云つて、更に××刑務所の中の樣子を委しく說明して聞かせた大島の言葉は、みんなの險しい想像を、益益險しくさせるばかりだつた。

この突然の伊藤の死は、果して刑務所の云ふ通り覺悟の上の自殺であるか。それとも何か外部的な物理力に依る變死であるか。そしてそれが偶然であつたか。故意であつたか。その夜、お通夜に集つた人人の話題は、松木に對する追憶よりも、伊藤の極めて疑はしい死因についての憶測にばかり集中され勝ちだつたのは云ふまでもない。

今年でやうやく三十一になつたばかりの伊藤慶太郎の半生は、謂はば勞働と放浪と酒と反逆と牢獄との暗い險しい生活の連續だつたと云つても好い。然もその一面、詩人としての好い素質を備へてゐた彼は、それ等の生活のどん底から摑み出して來て、血とともに怒とともに敵に向つて投げつけたやうな相當優れた幾十編かの詩をすらも持つてゐた。

だが、ここ二三年前からの彼は永い間の不規則極る生活と、ひどいアルコール中毒とのために、極度の神經衰弱症に冒されてゐたばかりか、時には發作的に精神異狀を呈する事さへ珍しくなかつた。現に、美人の婦人記者と或る避暑地で心中して天下を驚かした有名な小說家武島氏から、さんざん小遣と酒代とをせびり通した揚句、まだくれ方が足りないと云つて武島氏の玄關先で突然、兇器にあばれ出したので、彼の尾行刑事が驚いて取り鎭めに行くと、いきなり刑事を短刀で突き刺した事さへもあつた。然も、そのために二ヶ月ばかり、彼は武島氏の出費で郊外の或る精神病院へ入院する事になつた上に、平塚とかへ轉地療養までさせて貰つたりした。

平生の彼はひどく押し默つた男だのに、一旦、酒を飲んで好い氣持になると、亢奮的なゼスチュワアで頻りに身の上譚をしたものだ。

中學三年の時に癩病の血統と知りながら、近所の娘さんと熱烈な戀愛に陷つた事や、二人の結婚を兩親が極力反對したために、思ひ切つて心中しやうとして、然も失敗に終つた結果、十七の年にぶらりと鄉里を飛び出したのが永い放浪生活の第一頁であつた事や、放浪中何度もぽん引きに引つ懸つて北九州の炭坑の監獄部屋へ賣られた事や、後ではわざと自分の方から引つ懸つて取れるだけの前借を取つて置いて、さていよいよ運ばれて行くとなると、その途中で汽車の窓から身を躍らせて遁げた事や、汽車が大概の速力で走つてゐても田圃の中へ飛び込みさへすれば生命に別條のない事や、一時はさういふ飛び遁げ

を職業にしてゐた事や、それからそれへと絲を引いて、くどい程こまかく話して聞かすのが好きだつた。

伊藤の放浪の足跡は、實際、九州から香港、上海、朝鮮、北海道にまでも及んでゐた。そして、福岡、上田、宇都宮、××と云ふ風に、刑務所は前後四ヶ所も渡つてゐた。さう云ふ歴史と性格とをもつた彼が、思ひがけない變死のために、何時の間にか、もう、共同墓地の土の下へ假埋葬にされてゐるのかと思ふと、私の心は耐らない程の暗さに押し潰されない譯に行かなかつた。

やがて、どうしたはづみか話題が松木の母親と伊藤の母親との比較へ移つて行つた時だつた。私が晝間から棘のやうに鋭く神經へ突き刺つたまま、いまだにぬけないあの不愉快な言葉「ほんとうに好く死んでくれた」とか、「こんど生れ變るなら眞人間に生れておいで」とか云つた言葉を引いて松木の母親を非難し出すと、山座氏は私をなだめるやうな調子で、穏かに口を開いた。

「あのお袋と松木との間はもう十何年も音信不通と同様だつたし、それに親から見ればこんな運動へ入つた事自體が、既にいやでもあり、心配でもあつたらうから。死んでくれてほつとしたのがほんとうかも知れんさ。だから、あれはあれで、まあ仕方がないとして置くさ。ところが伊藤のお袋と來たら、別な意味でまるで困つたお袋なんだ。」

山座氏の顔には晝間二階で見せたのと同じやうな險しい影が、又又さつと通りすぎた。

「何しろあの經濟的に無能力な伊藤から、しよつちう金をせびり通したんだからな。無論、金は無からうけど食ふに困るやうな家ぢや無いんだぜ。それに伊藤も伊藤さ。せびられると、どんな無理をしてでも送らずにゐられないんだ。伊藤の奴、時時、銀行や會社をおどかしては金を取つて來たらう。無論、それで酒も飲んだらうが、しかし、半分位は何時でもお袋へ送つてゐたんだからな」

「さうか。道理で時時好くない事をして歩くと思つてゐたら。そんな譯があつたのか」

大島は如何にも凡てが解つたと云ふ風に、大きく頭で首肯いて見せた。

「こんど、伊藤が死んだについてもお袋の腹では、葬式の費用を全部吾吾に出さす事に決めてるんだ。悪く解釋すれば、今日ここへ寄つたのも、その談判をするためだつたと受取れなくもないんだ。無論、全部引き受けますとは云つたけど、ああ勝手に決めて懸られると、あんまり好い氣持はしないな」

かう云つた山座氏が眼鏡の裏の細い眼を不愉快さうに見据ゑた時、私に初めて先刻から二度も同じやうに顔を走つた險しい閃きの意味が解つた。

だが、伊藤のこんどの死因については最後まで誰にもはつきりとした決定を下す事が出來なかつた。唯、受人の松木にも全然知らせないばかりか、慌てて假埋葬にした上に、遺骨をさへ容易に見せやうとし

ない事から推して、その死因には十分疑ふに足るだけの餘地があると云ふのが、みんなの一致した意見だつた。

その結果、伊藤の母親や、掛りの辯護士は無論の事更に信頼し得る然る可き醫師をも加へて、大勢で××刑務所へ出懸けて行つて、埋めてある伊藤の屍體を受取つた上に、何處かの病院へ持つて行つて、死因を明かにするために徹底的な解剖をして貰はうぢやないかと云ふ事に相談が纒つたのは、火鉢を圍んでゐた人達が、すつかり忘却してゐた食慾を、遠くから聞えて來た支那そばの笛に、突然そそられ始めた頃であつた。

××刑務所の大廊下は、兩側に部厚な壁を持つてゐるせいか、夕方とは思はれない程、早くも暗さが漲つてゐた。

K大學の附屬病院へ屍體の解剖を頼みに行つて意外に時間を潰された私は、打ち合せた時刻よりは可なり遅れて刑務所へ着いたので、やや慌て氣味に寒々とした石段を飛び上ると、そのまま廊下の闇へ入つて行つた。

ところが、元來、さう云ふ場所に不案內である私は、廊下へ入るが早いか二三度續け様に面喰らはされた。何故なら一つ一つの曲り角へ來る度に、申譯のやうについてゐる暗い電燈の下で、見張りをしてゐるらしい監守達が、私の姿を見ると俄かに形を正して直立擧手の禮をしたからだ。多分、裁判所か何かからやつて來たお役人とでも思ひ違へてゐるのだらうと、考へただけでも、私は變に脊筋がくすぐつたかつた。そして、その度にひどく慌てて帽子を脫いだ。

やがて、教へられた重い扉のハンドルを引いて、所長の部屋へ入つた時、直ぐ様私はそこに異常な空氣の漲つてゐるのを、はつきり感じた。それは官廳らしい大型な角テーブルを中にはさんで、向かひ合つて椅子にかけてゐる人々の眼が、唇が、顏の色が、殊に周圍の壁に突き當つては鋭く跳ね返る聲と言葉が、そこに緊迫した神經と亢奮した感情との烈しい嵐の渦卷いてゐるのを、如何にも明らさまに物語つてゐたからだ。

私は一と通り輕い挨拶をすますと、監守長のすすめてくれた曲木椅子へ、みんなからは少し離れて腰をかけた。

見るとテーブルの正面には、所長が黑脊廣に包んだ大きな體を、廻轉椅子の上へ重さうに乘せてゐる。傍に焚いてあるストウブが燃えすぎるせいか、肉附の好い顏が赤赤と一面汗を光らせてゐる。そして、所長と向き合つた入り口に近い方には、長椅子の上へ山座氏と伊藤の母親と野瀬辯護士と武井とが互に肩を喰つ附け合つて窮屈さうにかけてゐた。

「とにかくここで最も明白にして頂かねばならぬ事は、何故、伊藤庄太郎の死んだ事を受人である松木の處へ第一に知らせて下さらなかつたかと云ふ事です」

私の入つて行つたために、一旦途切れた山座氏の言葉が再び所長の

顏へ投げつけられた。

「それはその松木さんが去年の秋以來行方不明になつて居られたものですから」

所長は相手を不必要に怒らせまいとするらしく出來るだけ慇懃な態度を保つやうに努めてゐる。

「そんな莫迦な話があるもんですか。現にこの二十五日まで市ヶ谷の刑務所にちやんと未決でゐたぢやないですか」

「いや。それがこちらではつい解らなかつたものですから、御遺族の方へお知らせしたやうな譯なのです。それによしんば解つたところで刑務所に居られたんでは仕方がありませんからな」

所長は變に語尾を濁すと、一寸、口を噤んだ。

「さう云ふをかしな事を云はれると、私達の方で益々そこに何か隱さにやならん重大な秘密がひそんでゐるものと解釋するやうになるのは、むしろ當然ぢやないでせうか」

「いや。何も秘密なんか少しも無いのですが」

「それなら何故かうまで慌てて埋めなければならん必要があつたのです」

「まあ。さう惡意にばかり解釋せずに置いて頂きたいんです。それは」

所長が變にたぢたぢしてゐるのを見ると、好く好く耐らなくなつたものか、今までじつとしてゐた監守長が遂に横から口を出した。

「假埋葬の事につきましては、誤解のないやうに私から一應事情を申上げたいと思ひます」

監守長は椅子からついと立ち上ると、殊更一歩前へ出た。そして、兩手をテーブルの角へ突いて、變に鯱鉾張つた樣子をしながら、一と亙りみんなの顏を見渡すと、いささか演說めいた切り口上で說明し出した。

「今まで囚人が死んだ場合、直ぐ電報で知らせてもなかなか引取人が來ないために、屍體が腐敗して困つた事が度々ありましたので、現在では死後二十四時間以內に引取手のない時は、必ず假埋葬にする規則になつて居ります。で、こんどの場合もこちらでは單に規則通りにしましただけの事なので、別に深い意味があつた譯ではないのです。それから變事を發見しました當時の模樣につきましても、序手に私から申上げて置きませう」

再び言葉を更めると監守長はその雄辯を一層雄辯にして次の說明へと移つて行つた。

何處の刑務所でも監房內の囚人に對する巡視は、必ず三十分毎に行ふ事になつてゐるさうだ。現に二十三日も午前十一時と十一時半とに規定通り廻つたところが、前の時には平生と何の相違もなく極めて平靜にしてゐた伊藤が、十一時半に行つて見ると、何時の間にか監房の東の窓の鐵格子へ、帶として給與してある細紐をかけて、見事に縊死を遂げてゐた。そこで俄かに大騷ぎを始めた監守達は、早速劍附して、

注射をしたり人工呼吸を行つたり、一時間近くも出來る限りの手當をした。が、とうとう呼吸を吹き返へさす事が出來なかつたと云ふのである。

更に監守長の推測に依ると、房内筆記のために貸與してあつた小型の机か、窓とは反對の側にある入口のところに、ひつくり返つてゐた事から考へて、伊藤は一旦その机の上へ乘つて咽喉に紐を懸けた後、足で後へ蹴飛ばしたものらしい。そして顔を右の方へ向けたまま、胸を窓の下の羽目板へぴつたりつけて、ぶらりとさがつてゐたと云ふのだ。

「何しろ窓が相當高うござんすので、机へでも上らなけりや、一寸、手が出せませんよ」

「他處行きらしく硬張らせてゐた頬の筋肉を、何時の間にか愛想の好い微笑に變へてゐた監守長は、最後に一と言から附け足すと、又、一歩退つて靜かに腰を卸した。

すると所長が、又、入れ代つて立ち上つた。

「卸した時にはまだ體に温か味がありましたので、怖らくやつてから十分とは經つまいと思ひまして、出來るだけの手當は加へたのですがどうも殘念な事をいたしました」

思ひなしか聲には微な潤みをさへ帶びてゐた。そして、老人らしく濁つた眼を自分の正面にかけてゐる伊藤の母親の顔に注ぐと、兩手をチヨツキの下できちんと重ねて、謝るかのやうに心持頭を下げた。それに對して母親は口の中で何か一と言小聲で云ふと、そのまま一寸腰を曲げてお辭儀をした。

「あなた方の方では唯今の說明だけで十分だと思つて居られるかも知りませんが」

こんどは野瀨辯護士が口を開いた。太い咽喉から迸り出る強い聲が部屋中の空氣をびりびり慄はす程だ。そしてそのぐいと大きく後へ引いた黑脊廣の、がつしりとした肩の形が、如何にも精力家らしい感じをはつきり現はしてゐる。

「私どもの方ではまだ諒解しかねる點もござ〻いますので、凡ての疑問を科學的な方法で徹底的に解決したいと思ひまして、この際、屍體を解剖に附したいと存じますから、前もつてその事を一寸お斷りして置きます」

そして、鼠色の毛絲のチヨツキが盛上つて見える程肥つた體を、ぐいと私の方へ向けると、

「K大學の方は無論、引き受けてくれたでせうねえ」

「え〻、あなたの名刺を見せたら直ぐ引き受けてくれました」

「さうですか。それは好かつた。あそこは僕からの依賴なら必ず大丈夫な筈なんだ。で何日？」

「それがね、今日は駄目、明日は日曜だから明後日の午前中にしてやると云ふのです」

「ああ。さう。さうですか」

二度程ゆつくり首肯くと、再び所長の方へ向き直つた。

「では、月曜の朝、早く屍體を受取りに參りますから、どうぞそのお預りでゐて下さい」

辯護士が更めて何かの云ひ渡しでもするかのやうな調子で言葉を切つた時、先刻から極力我慢し切つてゐたらしかつた所長の顔には、もう困惑を通り越した不愉快さが、苦苦しげな表情となつて溢れてた。

「解剖なり何なり、あなた方の好いやうになすつて下さい。こちらは一向かまひませんから」

そして、その言葉の終らない裡に、ぢろりと險しく監守長を見た。

「序に遺書も早く見せた方が好いだらう」

「はつ。では、みなさん。どうかこちらへ」

監守長は早速所長の傍を離れた。そして、机の上から焦茶の表紙の書物を一冊取り上ると、左脇の書棚の前の邊まで行つて、電燈の光の眞下で開いて見せた。

異常な緊張のために赤く輝くいくつかの顔が、忽ち書物の傍へ吸ひ寄せられた。そして、はつと一度に呼吸をのんで極度に見詰められたその瞳が斜に開かれた書物の上へ一齊に注がれた時だつた。表紙の眞裏の白い處へ、爪か何かで丹念に刻み附けられた無數の文字が電燈の直射を強く跳返して痛い程くつきりと浮かび上つた。

「…………、、、來たが、如何せん持つて生れて來た病氣には何うしても打ち克ち難い。一昨年の怖ろしい發作を思ふにつけて、今また再發せんとする兆候を正視するに僕は堪へないのだ。××××、、、、、、、決して斯ういふものでないこと丈けは僕も充分に知つてゐる。だが、やがては理性も失はなければならぬ病氣の事を思へば、僕は遂に自決の道を選ぶよりほかに致し方がなかつたのだ。諸君よ。兎も角も僕は逝く」

みんなは默つて讀みつづけた。一字を拾ひ、又一字と云ふ風に異常な緊張を視力へ集めて、注意深く讀み進んで行く裡に、傷つき易い私の神經は何時かしんしんと痛んで烈しく腦髓を嚙むのであつた。

「諸君よ。兎も角も僕は逝く」……讀み終つた時、その言葉が殊に底深く私の心の上を流れた。その瞬間、私の眼に鉛色の空氣に充された監房が、冬空の僅かに覗く鐵窓が、そして、その鐵窓からぶら下つてゐる煉瓦色の筒袖に、煉瓦色の股引の伊藤慶太郎の後姿が、不氣味な寒さと薄暗さとを伴つて突き刺すやうにはつきりと浮かび上つた。そして、何かしら陰慘極る重々しい感じが氷のやうに冷く體の中を通ると同時に、脊椎の一と節一と節が寒々とした燐光を放ち始めたのを私はまざまざと感じた。

不圖氣がつくと遺書を書きつけた表紙裏の初の三分一位が、細長い半紙でもつて隱されてゐる。

「これは如何したのです。この紙は」

私が張り附けてある紙片の端を摘み上げやうとすると、監守長は慌

てそれを手で遮つた。
「そこは困ります。そこは、規則で見せられない事になつてゐますから」
「如何してです。」
「見せると少し困る事が書いてありますので」
「つまり、發賣禁止と云ふ譯ですか」
「まあ。さうです」
「然し、刑務所の中でだけなら見せたつて好いぢやありませんか」
「いや。それだけは困ります。私達の責任になりますから」
かう云つて所長が後からもどかしさうに言葉をさしはさんだ時分には、もう監守長は書物を扇形に開けたまま、手早く下へ伏せてゐた。そして、私達がその事で何も押問答をしてゐる間に机の抽斗から大型な西洋鋏を取り出すと、その部分だけを手早くぢよきぢよき切り取つて終つた。
「この書物も洋服や何かと一緒に明後日お渡ししますから」
と云ふ所長の聲を後に殘して、その室を出た私達が、うす暗い廊下に立つてゐる監守達から前と同じく直立擧手の禮をされながら、ぞろぞろと玄關の石段を下りて門の方へ歩きかけた時だつた。敷詰められた玉砂利を靴の底で寒さうに踏んで行く山座氏を、私は闇の中で省ながら、かう云つた。
「ほんとうに自殺だらうか」
「さうさなあ。文句から考へれば伊藤の遺書らしくもあるが、どうも筆跡が變だね」
「さうだ。筆跡がまるで違ふ」
それは實際だつた。伊藤の筆跡は決して巧者なものではなかつた。が、それでももつと丸味のある、そして、何處か藝術家らしい風格を具へたものだつた。決してあんな不樣なものではない。あれでは全くの金釘流だ。
「爪楊子で書いたものだと刑務所では云つてゐるのだが、それにしても大分違ふね」
「全くだ。どう考へても少し變だ」
私が再び聞えよがしにかう云つた時、一間程前の闇から野瀬辯護士の聲が聞えた。
「君、何も彼にも解剖すりや解るよ。彼等が如何に隱さうとしたつて、科學の前には決して隱せるもんぢやないからな」
野瀬辯護士の確信に充ちた大きな聲は、私の不安と危惧とを一掃するかのやうに、如何にも力強くあたりへ響いた。
唯、母親だけは先刻もさうであつたやうに今も亦、みんなから少し離れて一人默々として歩いてゐた。
私達が大勢の私服や正服の警官達に圍まれながら、赭土だらけの棺桶を、K大學附屬病院の解剖室へ運び込んだのは、霜をふくんだ朝の

微風が、針のやうな鋭さでしんしんと顳顬を脅かして止まない時分だつた。

混凝土で塗潰された解剖室の床は、一面に水でもつて洗はれて、窓から流れ落ちる外光を小氣味好く射返しながら、私達のズボンの影や靴の影を鮮かな幾條もの縞を織り混ぜて湛へてゐた。その中を私は消毒劑特有な刺戟性の鋭い匂に頻りと眼鼻を刺されながら、葬儀社の運轉手や、病院の小使などに手傳はせて、解剖臺の傍まで用心深く棺桶を運んで行つた。

それは決して柩ではない。文字通りの棺桶だつた。眞新しい杉の板を圓く組んで青々とした竹の箍を幾つも丹念にはめたところは、まさに大きな、そして可なりに長めな樽のやうでもある。然も桶は思つたよりも軽かつた。殊に、底の周圍の隅のところへ手を懸けて運ぶせいか、一足毎に安全を缺いてぐらぐらと搖れた。その度に伊藤の體も一緒に搖れては内側のあちらこちらへ當ると見えて、變に鈍く重い音が私の鼻の先で屢々不氣味に低くひびいた。

間もなく蓋が開けられた時、凡てが私に意外だつた。死んでからもう九日も經つと云ふのに、屍體は至極綺麗であつて、少しの屍臭をさへも發してゐない。そして、伊藤の特長であるところの、幅の廣い大きな肩や、太くて鋭くとがつた鼻や、殊に入獄以前よりは遙かに肉の引き締つた頬の邊には、むしろ死後の安らかさが現はれてこそ居れ、何處にも苦しんだやうな跡は見えない。否、顏を斜に前へ伏せて、兩膝を捕へてくの字に高く立ててゐるところは、まるで居睡りでもしてゐるやうだ。殊に、私が一番怖れたのは、死んだ後でも尚あの不愉快極る煉瓦色の獄衣を着てゐるであらうと云ふ事だつた。が、それも何時の間にか眞新しい紺の紡績の縞の單衣に變つてゐた。私は何と云ふ事もなく、一人でほつと安心した。

「君。ほんとうに自殺だらうか」

私と向ひ合つて伊藤の死顏をしげしげと見てゐた畫家の大槻が、やがて不安さうにかう囁いた。

「どうして」

「鼻へ詰めた脱脂綿を見給へ。あのどす黒いのは鼻血ぢやないか。……

……自殺に鼻血が出るだらうか」

「さあ」

私は返事に窮した。そして、再び更めて死人を見詰めた。、、、、、、、、、、、、、、ゐる脱脂綿には、安らかな表情の凡てを裏切るかのやうに、、、、、、、、、、、、、、、、、。それが、ぞんざいな齊せ方をした着物の襟の間から一寸ばかり覗いてゐる、、、、、、、、、、とともに、一寸言葉で云へない程の凄惨な感じを、如何にも生々しく漲らせてゐる。

「血かしら。血なら一寸變だね」

折角の安心を直ぐ様覆へされた私は、再び異常な不安に烈しく心を打つた。そして、尚、幾度も伊藤と大槻との二人の顏を見較べたので

あつた。
それから五六時間の後だつた。私と大槻とは解剖室と隣り合つた長方形の室の中で、伊藤のための執刀者である解剖主任のY博士と、靜かに向き合つて座つてゐた。
右手の窓に沿つて排べられてある大型の机の上には、徑三尺もあらうかと思はれる大きな硝子製の盥の中に、、、、、、、夥しい量と種類が、ホルマリンの溶液の中で、染みながら如何にも生々しく游いでゐる。圓いのや、偏平なのや、細長いのや、或は太い紐のやうに無闇にぐるぐるもつれたのや、樣々な形をした　　く濁つた色に彩られて、窓から流れ落ちる夕日の光に　　冷く漂はしながら、雜然と横たはつてゐるところは、不氣味と云ふよりも、むしろ不愉快な毒々しさをさへも見せてゐた。
「これが、、、、すか」
「ええ」
博士は金口の煙を鼻からゆるく吐きながら物軟かに首肯いて見せた。
「隨分、澤山あるもんですね。これで一人前ですか」
「ハツハツハ。一人前です。いや。まだ向ふに隨分もあります」
博士が微笑と一緒に振り返つて眼で指差した方を見ると、成程もう一つ向ふの机の上にも、ずつと小型ではあるが、同じやうな硝子器の中に、綺麗に洗はれた灰色の一と塊が、恰も蒸し燒きにされた雞のやうな形にころりところがつてゐる。
「あれが腦ですか」
「ええ」
「隨分、大きいものですね」
、、、、、、、、、と云ふ物を生れて初めて目のあたりに見た私は、異常な興味にそそられたと云ふよりも、むしろ驚嘆に近い氣持で思はず眼を見開いた。そしてそれ等の如何にもグロテスクな塊の一つ一つを、次から次へとしばらく一心に眺め廻した。
「おい。君。、、、、は後でゆつくり見せて貰ふ事にして、取り敢へず解剖の結果を報告していただかうぢやないか」
眼の前の內臟にばかりひたすら眺め入つてゐる私の感心癖に、もどかしさを覺め始めた大槻は、とうとう横から催促した。
「ええ、さうしませう。それで、先づ全體を一と通りお話をした上で、又、御質問がありましたら、局部局部について出來るだけ詳しい說明をする事にしませう」
私に代つてから答へた博士は、話の絲口を見附けるかのやうに、しばらく眼を擧げてぢつと天井の隅を見詰めた。が、間もなく煙草を一と吸ひ大きく吸ふと、徐に口を開いた。
「先づ外部に現はれてゐる徵候の方から先にお話しませう。第一、頸部に索溝があります。索溝と云ふと、つまり繩が喰ひ入つて出來た

溝の事です。その索溝が頸の前半にあつて、後方に無い事索溝の上部に表皮脫落帶がある事、これが縊首に依る自殺の外部的な何よりの特徵です」

「ぢや。矢張、自殺ですか」

「ええ」

博士は大きく首肯いて又後を續けた。

「他殺の場合には索溝は頸の全周にあるものですが自殺の場合には一部にしかありません。又、索溝の上部に表皮脫落帶のあるのは、ぶら下つた時、體の重みで紐が辷つたために、皮膚が摺り剝げた結果です。それからもう一つ索溝の上下に血紅色が見えてゐます。その部分を切開しますと皮下出血がありました。つまりこれです」

かう云ひながら、つと椅子を離れた博士は、背後の本箱の硝子戸を開けて、細長い紙片を一枚取り出すと、それを私達の直ぐ眼の前へ出して見せた。

見るとそれは薄く、そして、細長く剝ぎ取られた、、、、、、、、ぺたりと平たく張り附けられた標本用のカタローグだ。黑い線を引いた部分には、もう番號や、日附や、獨乙語の說明書さへも丹念に記入してある。、、、、、、、時の間にかもうこんなにまで標本らしい標本になり切つたのかと思ふと、私はそのあまりに慌々しい變化に對して驚くと云ふよりも、むしろ不思議な可笑しさをさへも感じた程だ。

―ここが表皮脫落帶で、これが皮下出血の滲んだところです」

いちいち指で差し示して說明した後で、それを又もと通り本箱へ入れると、博士は再び自身の席へ歸つた。

「それから、左の第三肋角の皮膚の下に、多分、カンフルかと思はれる注射が一本してあります。」

「さうですか。刑務所でも、直ぐ注射をしたが駄目だつたと云つてました」

「さうでせう。死後やつたものと見えて、全然、吸入して居ません。が、とにかくやる事だけはやつてあります。それでは次に內部の方の說明をしませう。內部から見た場合も、矢張、窒息に依る、殊に縊首に依る死だと云ふ事が好く解ります。第一、全身の血管の何處にも血液が凝固してゐない事、肺の中に炭酸瓦斯が多くて酸素が少い事、臟腑の漿膜面に點狀の出血がある事、この三つが窒息者の特長です。殊に、肺の中に多量の血液が溜つてゐるのが、縊首に依る窒息の特長なんです。これ御覽なさい。この通りです」

博士は硝子器の中に雜然と入れられたその樣々な、、の中から、最も

指先、、、、、、、、、、、、、した。

恰も石鹼の水を一杯含んだ海綿のやうに、無數のこまかい泡と一緖に後から後からと不氣味に、、、、、、、、、、。

「それから肋骨の下の部分、つまり季肋骨が左右とも折れてゐました。」

「えつ。肋骨が折れてますか」

話頭が、突然、思ひがけない方向へ轉じたので、私は思はずはつと呼吸をのんで鸚鵡返しに訊き返した。何かそこに怖る可き秘密が隱されてゐるのではあるまいかと思つたからだ。だが、博士は私のさうした不安などには頓着なしに、矢張、前と同じ冷靜さで、更に自分の說明を進めて行つた。

季肋骨の骨折は左が五枚、右が三枚である事や、右は中央に近い處が淺くしか折れてゐないのに、左は根元から深く折れてゐる事や、前に云つた頸部の索溝も、矢張、左が深くつて右が淺いばかりでなく、表皮の脫落も左の方がひどい事から推定して、この縊死者は縊死する時その前方に近く何か堅固な障害物があつた上に、紐を結びつけた何物かと、その障害物とが同一平面にあつたために、首が紐にかかると同時に、體が自然と移動して、障害物へ近づかざるを得ないやうな狀態に置かれてゐたばかりか、ぶつかる瞬間に鼻を打つまいとして、本能的に顏を右へ向けた結果、顏も體も幾分左を正面にして障害物へぶつかつたものと斷定する事が出來ると云ふのだ。

「つまり、縊死者の體が時計の振子のやうな工合になつてその障害物へぶつかつたものと思はれます。然も、餘程の力でぶつからなけりや、これだけの骨折が出來る筈がありませんよ」

博士の斷定の一つ一つが、××刑務所で聞かされた監守長の說明と如何にもぴつたり合つてゐる。然もその合ひ方が、否、解剖學的な裏附け方が、あまりにも確實なのに私はすつかり驚嘆させられて終つた。そして博士が、一寸、言葉を途切らせた間を見て、監守長から聞いた通り、伊藤が首を釣つた際に机に乘つたらしい事や、机を後へ蹴飛ばした事や、窓の下に堅い羽目板のあつた事や、その羽目板へ顏を右に向けたままぴたりと喰つ附いてゐた事などをいちいち詳しく說明すると博士は自身の檢討とすつかり符節が合つてゐる事に深い滿足を覺えたらしく、幾度も大きく首肯いて見せた。

「精神に異狀を呈してゐたやうな痕跡はありませんか」

こんどは大槻が私に代つて質問を發した。

「ええ。腦髓には何の異狀もありませんが」

「でも、入獄前に、時々、氣が變になつた事があるんです。現に一度なんか精神病院へ入院した事さへあるんですが……」

「さあ。それは神經衰弱の結果でせう。ひどいのになると發狂と往々混同される事がありますからね。だが、この方の腦髓は至極健全です」

「ぢや。撲られたり蹴られたりしたとか、干乾しにされたために、口惜しくつて首を縊つたと云ふやうな形跡は見えませんか」

「さう云ふ形跡も見えませんね。營養はなかなか好い方ですし、食物も相當多量に取つてゐたと見えまして、胃の中にはまだ澤山殘つてゐ

ました。然し食後四五時間經つたために大部分は溶解して何を喰べたかは解りませんが、唯、海草類と思はれる物だけが、僅かに痕跡を止めてゐました。」

「ぢや。矢張、わかめのおつけを喰はされたんです。刑務所ぢや好くわかめ汁を喰はすんですから」

「ハアハツハ。さうですか」

博士は刑務所と云ふ未知の世界に對して特殊な興味をそそられたものか、突然、氣輕な調子で高く笑つた。だが、その笑が間もなく消えると前よりも一倍嚴肅な表情に返つた。そして一寸何事かを考慮した後で、再び靜かに口を開いた。

「では、最後に解剖學上から見たこの方の體質について簡單な説明を試みまして、終りにいたしませう。この方の體質は私達の言葉で云へばつまり胸腺淋巴體質と云ふ體質に屬してます。然もこの方の場合はその體質の特徴が殊に顯著のやうです」

そして、更にその詳しい説明をして聞かせた。つまり胸部の中央邊に胸腺と名附けられる一つの腺がある。その腺は普通の人間の場合なら十六七歳前後から徐々に無くなり二十五六歳になると殆んど完全に無くなるものださうだ。ところが伊藤のは、三十を越しても極めて顯著に殘つてゐる。然もその殘り方の著るしさは相當珍しい例の一つと云ひ得るさうだ。その上、扁桃腺が隨分大きくなつてゐる事と、小腸の内面にある濾胞と稱する黄褐色の突起が、普通人に較べて餘程肥大してゐる事と。この二たつがこの方の、著るしい特徴として指摘し得ると云ふのである。

「かう云ふ體質を持つてゐる人は、一體に神經質で、物事に感じ易いと云ふよりも、むしろ感じ過ぎる程なんです。殊に」

博士は一寸言葉を切ると、最後の斷案を下さうとするかのやうな嚴肅さで、じろりと私の眼を見詰めた。

「殊に、かう云ふ體質の人は病的現象の襲來に對して、精神的の抵抗力が弱いのです。從つて精神的に生命が脆い體質だとも云へるのです」

「ぢや、病氣などに對しても、病的な恐怖を感じると云ふやうな事もあり得るのですね」

「ええ。さうです。」

「その結果、自ら進んで自殺するやうな場合もあり得る譯ですね」

「まあ。さう云ふ場合もあり得ませうね」

「さうですか。それでみんな好く解りました。遺書の内容と明かに一致してゐます。お蔭樣でやつと初めて安心しました。」

「さうですか。矢張……」

かう云ひかけた博士は、つと立ち上つて再び手を硝子器の中へ入れた。そして、胃や腸や肺や心臟や、樣々な色と形の多數の、、が一面、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、ゐる中を、しばらく下か、、、、、、、、、　何かを搜してゐ

るやうだつた。が、やがて切り開かれた腸の一片を取り出した。

「胸腺の方は何處かへもぐり込んで一寸見附かりませんか、これが小腸の内部で、この黄色いのが臚胞です。臚胞がこの位大きい人はあまりありませんよ」

そして、その小腸の内部をひつくり返して見せてくれた。成程ぬるぬるとした膜の上には、うす濁つた黄色いものが、下手が絞つた鹿の子のやうに、一面氣持惡く盛上つてゐる。

「こんな物が人間の氣質とそんな深い關係があるんですか」

「ええ。重大な關係があるんです」

靜かに首肯いた博士に對して、その場合私はどう云ふ言葉で私の心持を云ひ現して好いか、一寸、見當に困つた程だ。最早それは單なる感謝と云ふやうな、そんな手輕なものではなかつた。むしろ驚歎と云はうか、驚愕と云はうか。凡ての疑問を如何にも見事に氷解させてくれたばかりか、更にその體質から結果された性格的な傾向をさへも、かうまで的確に指摘してくれた事に對して、科學の力の偉大さを今更のやうに心から驚嘆せずにはゐられない氣持で心が一杯だつた。そして、私は出來るだけ恭しく、博士の前に、科學の前に、胸の底から湧き出すやうな深い感謝の言葉を何度も繰返したのであつた。

だが、私の感謝と驚嘆とはさう長くは續かなかつた。それは物軟かい挨拶と一緒に、白い手術衣を着たY博士の姿が扉から外の廊下へ吐き出されて間もなくの事だつた。、、、、、を片附る可く、隣室に通じる引戸を重く引いて、何の氣もなく足を一歩解剖室へ踏み入れた時、私は、忽ち一種名狀し難い不氣味なショックに烈しく打たれて、思はずそこに立ちすくまない譯に行かなかつた。からだ。

夕方近くなつたためか、水に洗はれた混凝土の床は、寒々とした光を薄く射返して如何にも解剖室らしい感じを強く漲らせてゐた。その中で、純白に塗られた鐵製の解剖臺の上で、唯、、、、、、、、、、、繃帯をシップのやうに卷かれただけの、、。それは、、、、、、、まつてゐた時の彼よりは、遙かに人間らしくない感じに充された彼だつた。否、單に人間らしくないばかりではない。、、、、、――、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

無論、臉も綺麗に縫つた上に、何處にも手落なく綿を一杯詰めてあるせいか、眼も鼻も頰も腹も、如何にも工合好く膨れてはゐる。だが、それでゐて矢張如何しても人間と云ふ感じがしない。

私は不圖、踵をねぢ向けて、敷居越しに隣の室を振り返つた。窓際にある机の上には、相變らず大型な硝子器の中に、、、、、、、、、、、夕日の光を一杯浴びて、、、、、、、、、、、、、、、、、。それを見ると私は、又新しいショックに打たれた。そしてし

ばらく敷居の上に突つ立つて、兩方の部屋を、解剖臺と机の上とを、彼と彼の内臓とを、代る代る見較べてたのであつた。然も見較べれば見較べる程、解剖臺の上の彼は尚更くして、單なる虚ろな、そして、不氣味な箱だと云ふ感じが、一倍強くするのであつた。

何時か私の心は耐へ難い暗さの中に落ちて行つた。人は環境が性格を創り、性格が運命を生むのだと云ふ。だが、その性格以前に環境、以前に、かうして全く先天的に「體質」と云ふものが存在して、それが性格を、運命を、生涯を殆んど全部決定するものであるとしたら、そして、「體質」そのもののには、環境も、職業も、個人の意志も、否、後天的に附け加へられた有らゆるものが大して役に立ち得ないとしたら、人間と云ふものはあまりにも宿命的なものであり、人生そのものも亦、紙に引かれた罫のやうに何んと云ふ決定的なものとなつて終ふ事か。然もその「體質」に結果されて、、、、かうして虚ろな細長い箱となつて解剖臺の上に冷く置かれてゐるのではないか。

さう考へて見ただけでも私は耐らなかつた。殊に、どんな體質が、私の性格を、運命を、生涯を先天的に決定してゐるのであらうかと考へたら尚更だつた。そして、出來る事ならその場から、否、宿命的な體質から、その體質の決定的な支配から、顏を覆ふて逃げ出したいやうな感じさへした。

やがて私が小使を勵ましながら、、、、、に、先刻の單衣を着せた後で、病院から寄附してくれた寢棺の中へ運び入れて、いよいよ蓋に釘を打たうとした時だつた。

「おい。一寸待つてくれ」

から怒鳴る大きな聲が、入口の方から聞えたと思ふと三四人の人が一度にせかせかと入つて來た。見るとそれは病院の事務員に導かれた伊藤の母親と親戚らしい若い男女と、先刻、博士の後を追つて外へ出て行つた大槻だつた。

「君。釘を打つ前に一寸顏を皆さんに見せて上げてくれたまへ。まあ。間に合つて好かつた。もう少し遲いと火葬場へ送つちまふとこだつたけど」

後の半分を獨語のやうに云つた大槻の言葉に對して、多分、その云ひ譯でもあるのだらう。母親は何か口の中でぼそぼそと二た言三言云つたと思ふと黑いショールを首から外して、みんなに恭しく頭を下げた。

「どうも遲くなりまして、矢張、自殺ぢやさうでございますてな」

「さうださうです。さあ。どうぞ」

私が床に置かれた寢棺の方へ手を差し延べて促すやうにかう云ふと、ややためらひ氣味にもう一度會釋をした母親は、足を落着きなく小刻みに運んで、息子の遺骸の方へ近寄つて行つた。そして、體を幾分前にかがめて寢棺の中を靜かに覗いたその時だつた。忽ち胸から押し出されるやうな不氣味に長く引いた聲か、「おおお」と一と聲その謎

とつた咽喉で鳴つた。と思ふ間もなく、如何にも苦しげに大きく呼吸を吸つたためか、肩が二度程高く波を打つと、こんどは體を棒立ちにさせて、再び「おおお」と長く呻いた。

「おおお。ほんに生きとるごつある。ほんに物ば云はうごつある。おおお」

　母親は幾度も長く咽喉を鳴らして、尚もしげしげと臥棺の中を見詰めてゐたが、とうとう袂の中から手巾を取り出して眼にあてた。そして、そのまま體をな弓りに深く曲げると、倒れやうとする自身を支へるためでもあらうか、右手を棺の縁へあてて、死人の顔の直ぐ傍まで自分の顔を近附けて行つた。

「おおお。ほんに何ぼうか逢ひたかッろう。ほんに何ぼうか逢ひたかッろう」

　それは言葉と云ふよりも、呻きに近いものだつた。然もその言葉がまだほんとうに終らない裡に、こんどは死人の顔を中心にして棺の周圍を廻り始めた。無論、前と同じやうに體を曲げて右手を棺の縁へかけてはゐる。が、最早それは單に體を支へるためではなく、無残に姿を變へて終つた自分の愛兒をいとおしんで、限りなく思慕し愛撫するかのやうに、一つ一つの指先を順次に濃かく働かせては棺の縁を靜かに撫でるためであつた。

　私はその時、不圖、松木の母親を思ひ出した。あの蒼ざめた冷たい顔を。ぢろりと見据ゑた險しい瞳を。殊に、私の神經へ錐のやうに突き刺つたあの言葉を。「好く死んでくれた」と云ふ言葉と。「こんど生れたなら眞人間に生れておいで」と云ふ言葉を又まざまざと思ひ返した。そして、こんなに嘆き悲しんでその死を惜んでくれる母親を最後まで持つてゐた點で、殊にどんな苦しい境涯にゐても金をせびられさへすれば、必ず送らずにゐられなかつたと云ふ程の深い愛情を、絶えず持つ事の出來た點で、その體質や生涯がどうであらうと、その點だけは、松木よりも伊藤の方が際立つて遙かに幸福であつたと云へやう。同時にかうして内臓の全部を見事に抜き去られた、謂はば肉と皮と骨から出來てゐる箱のやうな、息子の形骸に對してさへも、かうまで心から泣く事の出來るやうな母親も、お通夜どころか、ああしてろくろく挨拶もせずに歸つて行つた母親より、どんなに幸福であるか解らない。と云ふ事を、私は今更のやうにつくづく考へさせられたのであつた。

　伊藤の母親は、尚しばらくの間棺の縁をさすつては如何にもあはれに泣き續けた。低くかがめた頭の上で小型な丸髷が動く度に、白い手巾から辷る涙が、幾度も棺の内側へ落ちるのを、私は慰める言葉もなしに、唯、いたいたしく眺めたのであつた。

　やがて、伊藤の柩を載せた靈柩車が、母親や親戚の人達の乗つたもう一臺の自働車に衛られながら、火葬場へ赴く可く病院の門から電車通りへ慌しく消えて行つた時だつた。

凡ての責任を果したやうな安らかさで、何時か心のゆるみをさへも感じ始めた私は、緊張の後の疲勞のために妙に押し默つたまま、通用門へ眞直ぐに續いてゐる御影石の鋪道の上を、大槻と肩を並べて、唯、足だけを機械的に運ばせてゐた。すると大槻が何かを思ひ出したやうに、不圖、横から私の顏を見上げた。

「さう、さう。何時だつたかな。」

大槻はひどくゆつくりと話調を運んだ。

「俺や、大島や四五人で伊藤と社會運動社の二階でもつて大いに人生問題を論じた事があつたんだ。つまり人間は何のために生きてゐるかと云ふ問題さ。その時、他の奴等はみんな、俺達がこの世の中へ生れて來た以上、人生には何か目的があるに違ひない。例へば自己のためとか、子孫のためとか、乃至は社會のためとかと云ふ風にね。で、なけりやかうして毎日苦しみながら生きてゐるのは全く無意義だと云ふ事に意見が一致したんだ。殊に、大島なんかは、これがブルジョアの小倅なら、安女優を追つかけるとか、ダンスをやるとか、スキイに行くとか、季節季節でそれぞれ面白をかしく生きても行けやうが、工場で働く吾々勞働者にとつては、生きると云ふ事は、嫌でも應でも朝から晩まで働いて、やつと貰つた賃銀でかつかつ喰つて行くと云ふ事なんだから、實に不斷の苦痛ぢやないか。だからそこには何か大きな目的がなけりや間尺に合はないとまで云つたもんだ。ところが伊藤一人は考へがまるで違ふんだ。つまり人間は、唯、習慣で生きてゐるに過ぎないんだと云ふんだ。目的もなければ、意義もないが、唯、生れ落ちると自然に生きる習慣をつけられたんで、そのために唯、習慣でかうして生きてゐるだけだと云ふんだ。妙な風に徹底してゐる奴だと思つて、その時大いに感心したね」

「人間は唯、習慣で生きてゐるんだつて」

私は背の低い大槻の顏を覗くやうにして訊き返した。

「ああ。その習慣が無くなつたのが死だと云ふのだ。だから、嫌になれば何時でも習慣を廢止すればそれで好いんだつて云つてたよ」

「さうかな。ぢや、こんどいよいよその習慣を廢止した譯だね」

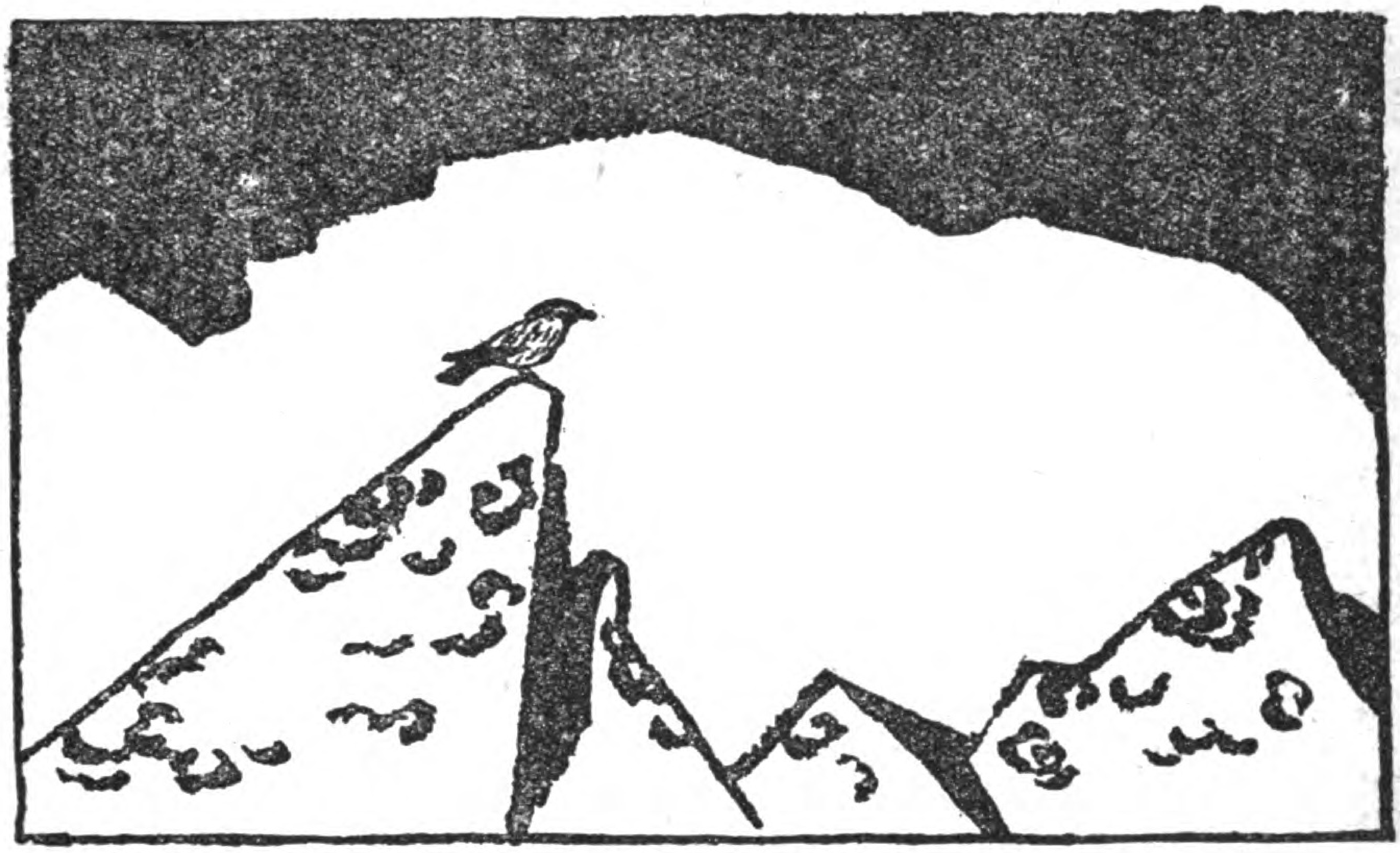
「まあ。さうなんだらうね。現にあの顏を見たまへ。一寸も死の苦痛とか、苦悶なんてものの跡が無いぢやないか」

「ハッハッハ。さう云へば、まあさうだけど。その習慣を廢止するまでには牢屋の中で、相當、苦しみはしたらうぢやないか」

「然し、いよいよ廢止する事にきまつた時には、きつと、やれやれこれで安心だと思つたら、案外ほつとしたかもしれないさ」

「ハッハッハ。ハッハッハ」

私は二度程、大きな聲で笑つた。それに誘はれて大槻も、矢張、同じやうに大きく笑つた。だが、二人の笑ひ聲が夕方の冷切つた大氣の中に消えた時、「諸君よ。兎も角も僕は逝く」と云ふ、如何にも伊藤らしく表現された遺書の最後のあの言葉が、又、寒々とした感觸をもつて私の心の裏を流れたのであつた。(一・三・一六)



酒盃

林房雄

これは戀物語だ。

なべて戀物語は退屈なものだ。――だから作者は、出來るだけ急速な速度を用ひることにした。

それからこれは、作者の獨創ではない。友人の手記だ。もちろん、幾分の小說家的潤色は加へた。敍述も手記の形はしてない。だが、話の筋は、どこまでも手記のそれに據つてある。

友人の本名はK・Y・――物語の中に川村康雄といふ名で出て來る靑年が彼である。

1

朝霧の中で花火の音を聞いた。

夜が明け放れると、街は祭日の群集で蜂の巢のようになつた。淡紅色の四月の空の下で、鐘が唸り、女達の單衣の裳がひるがへり、公園の木の間に子供達の風船が舞ひ、街角と廣場で、群集が爽かな汗をかいた。

M學院は丘の上にあつた。朝の食堂の扉からなだれ出ると、寮生達は新しいカラをつけて丘を下り、街と群集との中にとけこんでしまつた。がらんとなつた寄宿寮の一室で

川村は、木曜會の名簿を整理しながら、待つてゐた。

彼は時々眼をあげて、校門の向ふの白い坂を見た。自働車や、子供や、粹の日傘や、街路樹の鮮やか、明橙色の空氣をすかして見え、その上の層雲の美しい配列の中に、單葉の飛行機がぽかりと一つ浮いてゐた。それが、學院の禮拜堂の尖塔を横ぎり、窓框の外にかくれてしまつたころ、扉が鳴つた。彼は急いで名簿を本立てのかげに匿した。

「おはいり！」

小使が顔を出して、小さい名刺をさし出した。

近藤惠子。——その下に小さく、東京女子高等學院と讀まれた。

「通してくれ給へ。」

小使はしわくちやの顔をニヤニヤさせて廊下を歩いて行つた。川村は手早く名簿を本立てのかげからひき出して、机の上の油繪の額のうしろにしまひこんで、インキの蓋をきちんとした。

廊下を輕やかな足音が近づいて來た。扉のかげから、鉄色のリボンで飾つた黑いマントと、同じ色の帽子とが現れた。

「待つて？」

女は妖婦的に首を傾けながら、さう言つて帽子をとつた。短かく切つた巻き毛が現れた。眞紅な頬の色が眼を刺し、左の眉の間に、ヤ、大きい斑點が、星のやうに靑く置かれてあるのが見えた。

「ごめんなさい。脱ぎますよ。街は恐ろしい人出だつたわ。」

外套のボタンをはづしながら、惠子はそつと見上げるやうな眼をした。川村は、むき出された女の腕の刺戟から眼をそらしながら、椅子をすゝめ、自分はベッドの端に腰をおろした。

「どうしたの、だまりこんでるのね。あたしが怖いの？」

「怖いもんか？」

「きつとこわいんだわ。そんな人のところには、あたしもう來ないことよ。」

彼はベッドから立上つて、女の肩を抱かうとした。が、相手の身體に手が觸れないさきに手を下してしまつた。女は、顔を横にして、男のまつ毛を數へてゐた。

その時、廊下でばたばたと足音がした。そして空つぽだと思つてゐた隣の部屋で、誰かゞ歌を歌ひ出した。と、思つたら、窓の下から悪戯さうな聲が叫んだ。

「おゝい、川村。お茶を御馳走して貰ひたいな。——今で都合が悪かつたら、夜まで待たう。その美しい御婦人が歸るまで。」

川村は立ちあがると、窓のカーテンを音をたてゝひいた。

「何故、しめるの。」女は、眉根に鋭いしわをよせて、瞳を光らせた。

「ね、外に出ませうよ。街を歩きませうよ。」

*

公園には人が多かつた。

川村は、並木と小路の、出來るだけ人の少い方を歩かうと言つた。

惠子は出來るだけ人の多い道を歩かうと主張した。

木の根からは水氣がのぼり、杉の木の梢には、若芽の高い香氣が感ぜられた。歩きながら二人の肩が時々ふれ合つた。やがて道がつきて、街の屋根が見晴せる丘に來た。丘の中腹に草をしいて、帽子を脱いで風を入れた。そして、近く身をよせて座つた女の、豐かな肉體の感覺を避けるために、眼を空に向けて、煙草に火をつけた。女も默つて空の雲を見てゐたが、上衣のポケットを探つて、小さい紙卷を出してマッチをすつた。

「煙草をのむの？」

「えゝ、のむわ。」

女は學校の寄宿舍の話を始めた。……部屋に一つづゝ鍵があつて、イギリス風の禮儀がまもられてゐること、だからその禮儀に從つて、鍵のかゝつた部屋で煙草がのめること。

＊

その夜。消燈時間がすぎても、川村は起きてゐた。白いカーテンのかげに蠟燭の灯をゆらめかせながら、日記帳を開いた。日記には長い告白があつた。

彼は、新しい頁をめくつて、

「一九二四年四月三日――」

と書いた。書いて、十分ばかりも、街の騷音に耳を傾けるかのように、ぽかんと頰杖をついてゐたが、とうとう何も書かずに、ベッドの上に跳ね上ると、そのまゝ毛布をかむつてしまつた。

＊

一九二四年といへば、日本の社會主義運動が、漸くその地下流期を終らうとしてゐた時代である。假りに神話的な力をもつた神の如き存在があつて、當時の東京市の表皮を靜かに剝ぎとつたとしたら、彼はそこに、不思議な菌絲の成長を見たであらう。半秘密的な團體が、この近代都市のあらゆる部分に芽生え、その手をひろげ、秋の落葉の下の白い菌絲のように、新しい發芽のために互ひにその手を握り合つてゐるのを發見したに違ひない。

木曜會も、學生の間に芽生えた、さうした團體の一つであつた。

月曜日に、川村康雄は整理した名簿をもつて、木曜會の集合に出席した。

その歸途、葉をひろげ始めた銀杏の並木を歩いて、校門のそばまで來た時、うしろから呼びとめられた。ふりかへると、同級の森篤二郎が立つてゐた。

森は何時も綺麗に顏をそり、磨きのかゝつた靴をはいてゐる。然しその靴は、教室の階段よりも、劇場の廊下か、さもなければ二流どころの行儀のいゝカフエーの卓の下で、ことこと鳴つてゐる時の方が多い。――そんな調子の學生であつた。

彼は何時も小さなメフイストフエレスだ。古い表現を借れば、警句と皮肉を何時も麻のハンカチと一しよにポケットに用意して、冷笑を片頰にうかべて、周圍を見まわすことを得意にしてゐる。が、相手が

強く出ると、彼の皮肉はなよなよと萎んで、みじめなお追從笑ひかそれに代る。つまり張子のメフイストフエレスである。中味は空つぽだ——近代日本はこんな種類の青年を少なからず產み出した。

「よう、川村。昨日は素晴しかつたね。公園で。——紅くなるなよ。時に、あの令孃の唇の味はどうだつた？」

「……」

「默つてゐるところを見ると、まだなのだな。」と、鼻の上に小じわをよせ、右手のステッキを左の手に持ちかへて、川村の腕をとつた。「よしよし、急くな。默つて魚つりみたいなものさ。根氣よく待つものだ。少し位ひ浮標がぴくぴくしたからとて、あわててひきあげてはいけないぞ。……だが、意外だつた。君が近藤惠子孃のポン・アミだらうとは。」

「え。」

「驚かなくともいい、惠子は僕の從妹さ。戀人ではない。おい、來いよ。いゝことを敎へてやる。」

森はひとりではしやいで、川村をひつぱつて、校門のフルーツ・パーラーに連れこんだ。

「ボーイさん。クリーム・ソーダを二つ。勘定はこの色男が持つ。」

「冗談はよせ！」

川村は眞面目に抗辯して紅くなつた。

「怒るな。いゝことを敎へてやるといつたじやないか。つまり魚釣術さ。あの女は僕の從妹だから、彼女の弱點はよく知つてゐる。いゝかい。今度からあの女に逢つた時には、如何にも自信がありさうに話すのだぞ。知らないことでも知つてゐるやうに。そら、クリーム・ソーダだ。そんなむづかしい顏をせずに飲めよ。……でないと振られるぞ。それから如何にも熱情家らしく、そして充分に博學らしく、常に確固たる目的をもつてゐるらしく——さうさう、あの粗雜なる唯物論者、鈴木秀一のやうに。」

「僕も、失敬する。」

川村は、卓の上の帽子をつかむと、フルーツ・パーラーを飛び出した。陽のかげつた鋪道を、一丁ばかりも歩いた時、森が追ひついて來た。

「こいつ、いやに固くなりやがつたな。これも鈴木の惡影響だらう。思ひ出すよ！

　美酒に滿ちた盃を
　底までほさず
　この人生の祝祭を
　早くより見捨たものは幸ひである。

僕等の仲間から去つて、君が鈴木のグループにはいつた時、君はそんな詩を送つてよこしたな。見捨てたものは幸ひである、か——プーシキンもうまいことを言ふ。然し、僕は言ふよ。

　この人生の祝祭を、

早くより見捨てた奴は馬鹿野郎である！

とね。」

「見捨てない奴こそ馬鹿野郎だ。」

「おつと、こいつはほんとに怒らしてしまつた。ほいほい。おやあ、僕あ失敬しよう。戀は魚釣りだ。しつかりやれ。さようなら。」

＊

川村は、鈴木秀一を訪れた。

川村と鈴木と森とは、同じ中學を出た。仲のよい三人だつたが、鈴木が社會主義を始めてから、森とすつかり仲を惡くしてしまつた。一方が「粗雜な唯物論者」と言へば、一方は「世紀の道化者」とよびかへした。森と一しよに、長く頽廢的な學生生活を送つてゐた川村を、社會主義に導いたのも彼であつた。

彼は今、深川にあるC大學のセトルメントに住んでゐた。

セトルメントは深川の勞働者街の間にあつた。低い屋並みの間に、工場の煙突を背景にして、新築のバンガロー風の建物が、四圍の風景にやゝ不釣合な美しい均整を示してゐた。

木の香に滿ちた階段をのぼると、圖書室だとか、研究室だとか、資料室だとか、そんな木札のかゝつた部屋の間に、小さく仕切つた內海遊びの汽船の船室を思ひ出させる小部屋が並んでゐた。その中の一つが鈴木の部屋であつた。

「どうしたい。暫く來なかつたな。」

やゝ淺黑い、精悍な獸のような感じのする鋭い横顏を微笑させて、扉をあけた川村の方に鈴木がふりかへつた。

「おう、いそがしくつて。」

「何でいそがしいのか知れたものじあない。まあ、座れ。」

「え。……この前本を忘れて行つたらう。」

「それから、女の手紙も。――うかつな奴だな。人口問題の本の中に女の手紙を入れて歩く社會主義者があるものか。」

川村は耳の根まで紅くなつた。鈴木は快活に笑つて、机のひき出しから、本と水色の封筒とをとり出して、川村にかへした。

「近藤康子つて、森の從妹だらう。」

「君、知つてるのかい。」

「高等學校のころ――まだ森と喧嘩をしなかつた時分に、よく逢つたよ。森によく似てらあ。人生は芝居の舞臺だと心得てゐる。」

「さうか、知らなかつた。」

「女と遊ぶのはかまわないが、惚れては駄目だぞ。」

「……………」

「惚れるといふことは奴隷になるといふことだ。あんな女に惚れることは、折角僕等が見すてて來た階級の奴隷になることだ。昔の小ブルジョアに逆轉するぞ。遠慮はいらないから征服してやれ。鼻づらをとつて、自由にひきまわせるように馴らしてしまへ。でないと危險だ。川村康雄は元來フェミニストだからな。」

「からかふない。」窓の向ふの、屋根と煙突のシルウエットに眼をそらしながら川村はいつた。「そんな話はよさうよ。今日は、色々聞きたいことを澤山持つて來たのだ。」

2

土曜日の夜は舍監に叱られてしまつた。この頃、夜間の外出があまりに多すぎる。——さういつて叱られた。

なら、今度から晝間出ることに致しませう、と答へてやつた。

だが、あなたには、あたしと晝間の街を歩く勇氣があるか知ら。臆病な雄鹿よ。——だがこれは、あなたのことではない。あなたは、雄鹿のように臆病ではなかつた筈だ。

この次の日曜日、武藏野の林の間で遊びたいな。武藏野は初夏だ。晝間は空が深い。夜は木の間の薔薇色の暗だ。

遊ばう。——だが安心なさいな。二人きりでとはいはないわ。あなたは何時も二人きりになるのをおそれてゐる。良心的な戀人よ！だから、あたしは澤山の友達を誘つて行かうか。五人、六人。あなたも誰か誘つていらつしやいな。五人でも六人でも、あたしの方はこわかない。

日曜日の午前十時。省線S驛。第一プラットフォーム。——

五月三日　惠子

＊

「あら、ひとりなのね。えらいわ。」

その朝、指定された時間に、川村が指定された場所に行くと、惠子が初夏の盛装をして待つてゐた。

「ひとりじやない。まだ來るのさ。」

「たれが？」

「友達が——だつて、五人も六人も連れて來いと書いてあつたじやない。」

「だからほんとに五人も六人も集めたの——馬鹿ね。あたしは、ひとりよ。」

惠子は日傘をくるくるまわしながら、眉をよせ、流し眼で明かな嘲笑を示した。——馬鹿な、なんて馬鹿な。

「いつたい、たれが來るの。」

その時、山手線の電車がついた。中から鈴木の鋭い横顔が現れた。その顔を見ると、惠子は、あ、とかすかな叫聲をあげた。が、そのまゝ、パラソルで顔をかくすと、くるりと横を向いてしまつた。

「やあ、待たせたな。——なんだ、たれもゐないじやないか。」

「うん、君と僕きりさ。それからこの人。」

と、川村がふり向いた時には、惠子はプラットフォームの人波の中を、二三間離れて、日傘で顔をかくしたまゝ肩をゆすつてゐた。

「女か。——だましたな。」

「でも、女が來るといつたら、君が來ないだらうと思つて。……だが

もつと深山來る筈だつたのが、來て見たら、あの人一人なのだ。」

「たれだ？」

「……」

「鈴木さん、しばらく。」

その時、日傘をさつとすぼめると、かけるように近づいて、惠子が聲をかけた。

「やあ、しばらく。」

「ほんとに、しばらく。」

「あゝ、しばらく。」

下りの列車が着いた。降車客が三人の間をおしわけて、どやどや降りて行つた。笛が鳴つた。

「あたし、歸るわ。さようなら、鈴木さん。あたしは、間拔けな男が大嫌ひなのよ。」

動き出す電車の扉に、惠子はさつと消えこんだ。

列車の朱色の後燈標が視界から消えると、鈴木が口をきつた。

「どうしたんだい？」

「君はあの女を知つてるのだね。」

「知つてるよ、ずつと昔に。」

「ずつと昔に。」

「はつはつは。」鈴木は笑ひ出した。「馬鹿な、何を考へてる。女がゐなくとも構はない。武藏野に行かう。久し振りの郊外だ。行かう。」

だが川村は答へなかつた。いらいらと空に眼をむけてゐたが、突然いつた。

「僕あ、歸るよ。」

「おい！」

だが、川村の姿は人波の間を改札口の方に消えてしまつた。鈴木は口にくわえてゐた煙草の吸殼をひきちぎつてアスフアルトの上に投ると、靴のかゝとでふみにじつた。

＊

翌日、女から手紙が來た。

「あたしは、間の拔けた男性の感情を愛しない。鈍さと、露骨な聰明さと、神秘さと──たとへば鈴木秀一のような感情を好む。

昨日、S驛のプラットフオームで彼の顏を見た時は、あたしたちの戀にとつての致命的な瞬間でなかつたらうか？

あたしは、彼の顏を見た時、全身の知覺を失つたのではないかと思つた。あの時若しパラソルがなかつたならば、待合室の腰掛の上にあたしは蝙蝠のように吸ひついたかも知れない。

川村は從兄の友人だつた。あたしの少女時代に最も深い印象を與へた男なのだ。あたしは今でも彼を忘れることが出來ない。

だが、安心していゝわ。──あなたを愛してゐない、といふのではない。愛しているからこそ、こんな告白もするのだらうと思はれる。でなかつたらきつと、知らぬ顏をしてあなたからも離れるに

構ひない。さようなら。」

＊

川村は手紙を持つて鈴木に會ひに行つた。

電車の停留所で、偶然鈴木に出會つた。街には灯がついてゐた。空氣が暗く、街は窪んでゐるように見えた。

手紙を讀み終ると鈴木はいつた。

「君は女になめられてゐるのだ。」

「……」

川村は病人のように眼を輝かせて默りこんでゐた。

「何故、女を輕蔑しないのだ。君は君が生れた階級を見捨てて來た筈ではないか。見捨てて來た階級の女の前にひざまづき、愚弄され、そしてめそめそ泣き面をしてゐる。」

「……」

「女は馬鹿な孔雀だ。甘やかされると翅をひろげる。翅をひろげたら後にまわつて見てやれ。尻が丸出しだ。そいつを大聲で嘲つてやれ。それでも聞かなかつたら、高慢な頰をぶんなぐつてやれ。彼女は翅をすぼめるだらう。そしたらお尻もかくれるだらう。孔雀らしい孔雀が出來あがる。」

「電車が來た。」

「失敬。今夜はいそがしいんだ。」

鈴木は行つてしまつた。

＊

「どうした？」

「……。」

「まだ考へてゐるのか。困つた奴だな。」

「鈴木、君は惠子を知つてゐるのだらう。」

「知つてゐるよ。」

「僕より先きに知つてゐたのだね。」

「さうだ。」

「僕は惠子を君にあげるよ。」

「あげる？」

「惠子は君を愛してゐるのだ。――僕あ他人の女なんかいらない。」

「僕だつて、他人の女なんかいらない。」

「は、は、は、……冗談だ。あげるのじやない。つまり僕の手におへないのだ。僕あもう投げ出した。……どうだ、君一つ拾つて見ないか君なら出來る。」

「あの女と遊べといふのか。僕なら出來るよ。君みたいに、女に決して惚れないから。」

「……」

「それみろ、強さうなことをいつてもやつぱり惚れてるじやないか。さうならさうと、さつさと片つけてしまへ。片づかなかつたら片づくまで沈默をせずに默つてゐろ。……そんな話はよさう。そう、お茶が

さめる。飲め……」

「は、は、は、……惚れてるもんか。さつぱりと投げ出したよ。やつて見ろ。あの女が君の前にひざまづくところを見たい氣もする。やつて見ろ。どうだ、暇がないか。」

「暇はあるさ。女を買ふ暇があるのに、小ブルジョアのお孃さんの一人や二人を相手にする暇がなくつてどうする。」

「面白い、やつて見ろ。」川村は病人のように眼を輝かせて、泣き笑ひに似た微笑を右の頰にうかべた。壁の上の美人のポスターに眼をやつてゐたので、鈴木はそれに氣がつかなかつた。「やつて見ろ。成功したら君のために祝盃をあげよう。失敗したら、僕のために祝盃をあげる。」

「なんだと。……よし、やつて見せる。あとで何が起つたつて知らないぞ。」

「いゝとも。」

二人は喫茶店を出た。

・

示威運動の前夜であつた。

誰かゞ外から窓を叩いたような氣がした。寄宿舍のベットの中で、川村は眼をさました。窓をあけると、鈴木が立つてゐた。

「おい、寢せてくれ。スパイに追はれた。」

「早く、はいれ。夜警に見つかるとうるさい。」

鈴木は窓から飛びこんだ。

「いつたい、何時だい。」川村が聞いた。

「十一時だ。」

川村は起き上つて、彼のために床を作つた。鈴木は上衣を脱ぐと、ズボンの儘ごろりと寢てしまつた。

三十分ばかり經つた。――川村が大きく寢がへりをした。

「寢れないのかい、おい。」

鈴木も寢てゐなかつた。部屋の中は蒸し暑く、男の肌の匂ひがこめてゐた。鈴木は起上つて窓を開けた。鮮かな星空から、重い花の匂ひを含んだ夜氣が流れこんで來た。鈴木はしばらく窓に頰杖をついてゐたが、ふと思ひ出したようにいつた。

「川村、話してもいゝかい?」

「何を?」

川村はベットの中で、ちよつと頭を動かした。不氣味な豫感が頭をかすめた。

「話してもいゝだらうな。」

「……。」

「惠子は僕のものになつたよ。」

「えー」

深い、えぐりとつたような沈默が來た。川村の息づかいが急に荒くなつた。

「川村！」

返事がなかつた。ふりかへると、毛布を頭からひきかむつてゐる川村の姿が、暗の中に見えた。

「川村！」

やつと返事が來た。

「何もいつてくれるな。……氣が遠くなりさうだ。」

窓の外で夜の蟲が鳴いてゐるのがはつきりと聞えた。

「鈴木！」川村が突然叫んだ。「僕は君を殺してやる！」

彼は床の中にうつぶして、子供のようにすすり泣きを始めた。

鈴木は、顫へる夜具の表を、默つて見つめてゐたが、やがて靜かに立上つて、上衣をつけ、卓の上の帽子をとると、窓から出て行つた。

●

夜が明け放れた。クローヴァの芝生の上で學友達の口笛が聞えた。川村は床の中で死んだように動かなかつた。が、禮拜堂の鐘樓が九時の鐘を鳴らし始めると、彈かれたように身を起した。

上衣を着た。卓の奧からパンをひき出して頰ばつた。帽子を握つて、さつと扉の外に飛び出した。部屋は空になつた。が、再び扉が開いて川村の姿が飛びかへつて來た。そして、卓の中から、菓子の手紙の束を引出すと、滅茶々々にひき裂き始めた。最後に寫眞をひき出して、又二つに裂いた。四つに裂いた。マッチをすつて火をつけた。燃えあがる焔が青く指をなめ始めるまで、彼は手を離さなかつた。

焔が消えて、床の上に灰が殘つた。川村は丘を下つて市街自動車に乘つた。

廣場では演說は終つてゐた。旗と群集とが出發しようとしてゐた。警官の垣をくゞつて川村は行列に加はつた。

警官を滿載した自動車が何臺も走つて行つた。時々、襲擊があつた。格鬪があり、行列者が奪ひ去られた。金色の房のついた組合旗が警官ともみ合ひながら、嵐の中の帆柱のようにゆらいで、群集の彼方に消えて行つたりした。……川村には、それらのことが影繪のように眼にうつつた。

行列が日比谷公園に近づいた時であつた。右側の高いビルディングの根元の人垣の間から、散りこんで來る花瓣のように、一人の女が、路を横切つて斜に、行列の中に飛びこんで來た。

行列は急に活氣づいた。歌聲が高くなり、幾つも幾つも帽子が振られて空中に投げあげられた。色彩のある帶、紅緒の下駄、上氣した頰——どこかの團體の婦人部の人らしい女は、美しい花のように、汚れた工場服の腕の間にしつかりと組みこまれて、運ばれて行つた。その姿を見てゐるうちに、川村の視界はぼんやり霞んでしまつた。理由のわからぬ涙が頰を傳つて落ちた。

女を狙つて、警官隊が襲つて來た。旗が斜めに傾き、上衣の裂ける音がし、拳が亂れた。警官の手が女の肩にかゝつたのが見えた。熱い塊が川村の喉につきあげて來た。彼はがむしやらな矢のように鬪

の中に飛びこんだ。頰の上に拳が來た。身體が風車のようにひきまわされた。胸のあたりに強い打擊を感じた。……彼はそのまゝ氣を失つてしまつた。

3

秋が深くなつた。

並木道に落葉が鳴り、夕暮の色が透明に冷え始めた。

川村は、だんだん運動に興味と熱情を失つて行つた。——集會に出席せずに、一日部屋に寢轉んで、フランスの小說集を讀んだり、そうかと思ふと、長く使はなかつた銀金具のステッキを振つて、街の喧燥と、女達の五彩の裳の間を、影のように歩いたりした。

＊

木曜會の集會で、二人の靑年が出會つた。

「川村はどうした。一向出て來ない。」

「奴、昔の小ブルジョアに還元しつゝあるのさ。」

と、一人が答へて、首を振つた。

＊

川村は日記を書いた。

「復讐あるのみだ！

女の頰へは拳だ。それから靴だ。靴で女の顏の眞中を踏んでやる。

男の心臓にはピストルの彈丸だ！

復讐の喜びは原始人の喜びだ。

「眼には眼、齒には齒。」——これは單なる戒律の文句ではない。血の喜びだ。歡喜の詩だ。

だが……」

彼は筆を止めて、部屋の隅の、油繪の額の下から、保管を托されてゐる木曜會の名簿をひき出して來た。

一……

鈴木秀一

……

……

川村邦雄」

彼は自分の名札を拔きとつた。それを二つに裂かうとして、急に手を止めた。そして、窓きわに頰杖をつくと、じつと窓の外を眺めた。葉の黃ばんだ柳の枝の上を、秋の鳥が飛んでゐた。彼は、名札を裂く手を止めて、それをもとの場所にさし返へすと、ぱたりと名簿を閉ぢた。そして、また日記の頁に眼をやつた。そこに

「だが」

と書かれてあつた。

＊

ある盛り場の酒場のスクリーンの蔭で、森島二郎が川村を發見した。

「おい、ハムレツト――いや、若いエルテル。その酒に苦さうだな。それから眉の間のしわが深すぎる。」

「ね、明日の午後六時、僕の家に來給へ。もう君には、僕等の仲間に歸つて來る時が來てゐるらしい。六時からだ。いゝかい、親父もおふくろもゐない。そして若い女性も澤山集る。――さようなら。」

*

次の日の六時。――川村は、郊外のN驛で電車を捨てた。

蔦の葉で飾られた小さな門。木の香の生々しいヴエランダ。切拔き細工の姫と騎士の姿が窓硝子にくつきり浮出てゐる子供部屋。ピアノの音。――そうした小市民的な住宅地の間の道を二十分も歩いた時、小高い丘の上に、サイプレスの渦にかこまれた宏壯な邸宅が見え出した。――森の家である。二階の窓の一つに華やかな光が見えて、女の笑ひ聲が門のあたりまでひゞいて來た。

女中に案内されて、部屋の扉を開けると、異様な光景が眼にうつつた。

部屋の中には桃色の光が滿ちて、煙草の煙が青い霞をかけてゐた。小さな飾り卓を中に、家中から集めて來たらしい長椅子や、肱掛椅子や、土耳古椅子やが、ごちやごちやとならべられて、その上に若い男と女達がだらしなく身をのせてゐた。アメリカの活動寫眞に出て來る遊蕩紳士の客間の拙い複製だと思へば間違ひない。

「ヤあ、やつて來たね。君はやつぱり僕等の仲間たるべき人さ。生え拔きの知識階級さ。」ピエローのような、奇妙な部屋着をつけた森が立ち上つて來て、川村の肩をたゝいた。そして芝居がかつた口調と身振りで卓の上から酒盃をとりあげていつた。「客間の淑女並びに紳士。且つて吾々の仲間であり、今また吾々の仲間に復活した川村康雄のために祝杯をあげよう。」

拍手が部屋の中に一杯になつた。酒盃がかち合ふ音がした。川村はちよつと笑つて見せて、それから憂鬱にだまりこんで、卓の上から酒盃をとりあげた。

*

部屋の中は、とうとうダンスになつた。蓄音機がキイ〳〵鳴つた。川村は扉を開けて、隣の部屋に拔け出した。部屋はがらんと暗かつた。森の父親の書齋らしい。窓に重いカーテンがあつて、そのすき間から、青ざめた月とサイプレスの卷毛とが見えた。顏の半面を月光の中に浮上らせて、彼は庭の立木のシルウエツトを眺めてゐた。頭がちくちく痛んで來た。

急に部屋の中が明るくなつた。振り向くと、スイッチの側に、森の酔つぱらつた姿がにやにや笑ひながら立つてゐた。

「踊らうよ、おい。――美酒に滿ちた盃を底までほさず、この人生の祝祭を、見捨てた奴は、馬鹿野郎さ。さうだらう、おい。」

「……………」

「まだ、考へてゐやがる。思ひきりの惡いエルテルだ。よし、いゝもの

「を借してやらう。」彼は、部屋の隅の大テーブルの方にふらふらと歩きよつて、抽出からピストルを二挺ひき出した。そしてその一つを、がちやりと川村の足元にほうり出した。「さあ、拾へ。八歩の距離から宣言する。一度見捨てた筈の世界に戀着して、逡巡止まるところを知らざる男の心臓に鉛の彈を見舞つてやる。」

「うるさい男だな。」

「あつ！」とその時、森は奇聲を發して、ピストルを床の上にほうり出した。そして顔色を變へて、飛んで來ると、川村の右の腕をつかんだ。「實彈だ。ぶるぶるだ。親父の奴、ほんとに彈をこめてやがる。危なかつた、危なかつた！」

「實彈か？」

「二つとも實彈だ。親父がドイツの大使館にゐた時、持つて歸つた決鬪用の一組だが、彈がこまつてゐるとは知らなかつた。銃口からのぞいて見ろ。鉛の彈が毒蟲のように潜んでゐる。あいつが、肋骨と肋骨との間を貫いて、ましじぐらに心臓にとびこむ。」

「實彈が入つてゐるのだな。」

「さうだとも、ぶるぶるだ。おい行かう。鉛の彈なんか惡魔にでもさらわれろ！ 行かう。おい。」

「よし、行かう。」

二人は腕を組んで客間の方に出て行つた。

●

日が落ちると、市街の騒音は單調になつた。夕暮が街の屋根を黒く塗り、その上に冷々とした夜光をひろげた。郊外電車が、疲勞して鈍感になつたラッシュアワァの群集を運び始めた。

川村は、電車を捨てると、代々木の原の松林の中にはいつて行つた。林の間には、缺けた月があつた。乾いた風の中で、落葉が骨のような音を立てた。道が坂になつた。登りつめると廣々とした草原の夜景がひらけた。彼は薄暗をすかして前方をうかがつた。そして、原の眞中ほどのひよろ高い松の木の下に人影を發見した。彼は立ちどまつた。ポケットの中で、森の家の書齋から持ち出して來た二挺のピストルを握りしめた。

「川村か？」

松の木の下から、鈴木の聲がした。

「……………」

「川村か」

「さうだ。」

かすれた聲で答へて、川村は歩みよつた。

「手紙を見た。……川村。君は病人だ！」

が、川村は兩手をポケットに入れたまゝ默つて近づいて行つた。そして右のポケットからピストルをとり出し、對手の足元にほうり出すと、足早に五六歩飛び下つた。それから靜かに對手の胸を狙つた。銃身が半月の下で青く光つた。

鈴木の顔色は瞬間に蒼ざめた。彼は兩手を胸に組むと、激動をふりはらふように、横を向いて唾を吐いた。
「殺すのか？」
「殺すのだ！」
「何んのために？」
鈴木は漸く己れをとりかへしたらしく、射るような眼をあげて詰問した。
「殺すのだ！」
「何んのために？」
「……………」
鈴木は腕を組んだまゝ下を向いて、右足を大きく振つた。蹴飛ばされたピストルは、羽蟲のように風を光らせて、茨の繁みの中に落ちた。
「ふん。女のためにか！」
「……………」
「射てよ。遠慮なく射てよ。女のためにだ！………君に、君の故郷に完全に還元してしまつた。射て君は敵だ！」
長い沈默があつた。
「打て！」
尖光と斷音があつた。雜木林の梢に、こだまが鳴り渡つた。黑い影が草の上にのめつた。

鈴木は姿勢を崩した。そして本能的に走りよつた。身體を醜く曲げ、叢の中に髮の毛を亂して、川村が倒れてゐた。自殺者の前額からは、一筋の血が土の上に黑く絲を引いてゐた。

作者の結び

川村は自殺してしまつた。——この物語も終つたわけである。
ところが、實は少しも終つてはゐない。話はこれからだ、といつた方がより適當かも知れない。何故なら、川村康雄は死んでゐないのだから。——冒頭にも述べて置いた通り、この物語はK・Y・と言ふ實在の人物の手記に據つたものである。彼の手記が示す限りに於ては、彼は自殺してゐる。が、手記以外のあらゆる事實は、彼が死んでゐないことを明かに示してゐる。例へば木曜會の名簿の如きも、作者がこの物語の中で鈴木秀一の名で表した青年の名と並べて、彼の名を、今日に至るまで依然として記載してゐる。
この一見奇異に見えて、奇異でない事實が、作者をして敢てこの物語に筆をとらせた大きな理由の一つなのである。（終）

善魔

長篇「安城家の兄弟」の一部

里見弴

三の一

昌造は、鎌倉扇ヶ谷の奥にある鉱泉旅館、清風園に、仕事をもつて泊り込んでゐた。そこには、裏山からかけて何千坪といふ敷地に、三組四組の客が通せるほどの、可なりがつしりした母屋のほかにも、山の上、池のほとり、或はまた廣い芝生の片隅など、それぞ〳〵趣を變へて、八疊六疊か、六疊四疊半くらゐの離れが、ちらばらに五六軒たつてゐた。その一つで、岩とも土ともつかない、こんへんで謂ふどたんの洞門を潜り、不段をあがつて出る小さな山鼻いつぱいに、南粥ながら、樹木の多い崖を負ふて、さうひどく明るくもなく建てられた、蘇の寮といふのが、かね〴〵昌造の氣に入りで、あいてさへゐれば、いつも必ずそこに陣どることにしてゐた。

永年の習慣で、晝の光では、どうにも筆の進まない昌造としては、逗子のうちでも、仕事の妨げになるのは、ついその夏前に生れた四人目の男の子の泣聲くらゐのもので、田舍住居の、深夜の靜寂を擅にすることは出來たのだけれど、家庭の空氣のなかでは、兎角氣持にのんびりしすぎるものがあつて、仕事の忙しい時分になると、原稿紙や萬年

錢湯の風呂敷包を一つ擁えたきりで、きまつてうちを飛び出して了ふ風があつた。それには、逗子と鎌倉で、自動車なら三十分かゝるかゝらないで往き歸りが出來る、その隔りからして丁度お誂へ向だつた。宿屋の飯に飽きたりすると、夕方ちよつと食ひに歸つて、子供たちの寢つく時分から、そろ／＼また殘して來た仕事の方へ戻つて行くことも出來た。第一には、客を斷りよかつた。

或る夕方昌造は二十歳になるかならずの、不良少年と云はれる類の若者二人に押しかけられたが、さう締切ぎり／＼の仕事でもなかつたし、一人で食ふ飯のまづさに氣を腐らせてゐる矢先でもあつたので、通して、早速酒にした。一人は西山普烈で、

（作者註。――これは假に、いつぱし一役勤めてゐる人物）

もう一人は、前々から今度一緒につれて來るから逢つてやつてくれと頼まれてゐて、今夜が初對面の武富といふ若者だつた。話といつたところで近く封切されたフイルムの評判とか、女に關する蘊蓄とか、喧嘩の手柄話とかで、別段さう面白いわけもなく、そのうへまた、何もかもむきだしらしくみせて、その實なか／＼細心な注意な拂つて、とゞの詰りの無邪氣さを裝はうとするやうなこすいところもあつて、いゝ氣持にばかりも聞いてゐられなかつたが、然しそれでも、わるく老成ぶつたり、神經衰弱的な外潜りで、一生懸命傲慢がつてみたりする文學青年とは違つて、鼻ッ張りだけにもせよ威勢よく、からッとした感じはわるくなかつた。酒でも飲みながら、暢氣な氣持で聞き流してゐるぶんには、それほど迷惑な話し相手でもなかつた、一體にかうなつて來るやうな青年に限つて、才はじけたところがあり、意識しない警戒心もあつて、大抵は話がうまいものだ、武富といふのは、顏も體つきもいやに横平たくて、一見感じの冴々しない若者だつたが、たゞ往來ばたで見たとかいふ、氣違ひの乞食の話などは、そのまゝ速記さへすれば、立派に一篇のスケッチを成すだらうと思はれたほど、うまいつぼを捉えて、生々と目に見るやうに話して聞かせたりした、昌造には、假にもせよ、儲けさうな話の種でもあつたら、といふ下心もあり、だん／＼酒のために活氣づいて來る調子に引ッ張られて、それからそれへと、とめどなくお喋りが續いた。それに、若者たちは酒も強く、少しも醉態を見せなかつたから、いゝ加減に切りあげないと、といふ不安もなく、坂や石段をあがりおりして運んで來る女中たちの苦勞も忘れて、電話で二三本づゝ持つて來るやうに云つた銚子が、いつか部屋の隅に林立してゐた、仕舞にかゝりのお雪といふ女中が來て、昌造の耳のはたで、

「お客樣、お泊ンなるんでせうか」

と囁いた。

「どうして？ ……もうそんな時間かね？」

「えゝ、もう夙に十一時うちました」

「え？」

手を伸して、机の上から時計を引ッ攫つて、見ると、成程いつの間に

にかそんな時刻になつてゐた。「へーえ、驚いたなア！

「何時です？」

西山も覗き込んで「十一時半……。これアいけねえや。欣ちやん、もう汽車アないよ」

「さうですか！　もうそんな時間ですか！　ついうつかり、夢中で喋つてたもんだから……。困つたなア！　どうしよう？」

武宮も、そんな風に相槌をうつたが、昌造ほどにも醉つてゐない二人としては、どうやらそれが豫定の行動らしく、吃驚しながらも、どつしり腰を落ちつけてゐた。昌造は、然し、さういふ連中の、さういふやり方にもいゝ加減馴れてゐて、腹も立たず、大して可厭な氣もしなかつた。

「ぢア泊つて行くかね？」

「でも、仕事のお邪魔をしちアわるいから……。ねえ、おい、普烈！どうしよう？」

「どうするつて、逗子へ行つて、於菟でも叩き起せば起すんだがね、あいつも、今日あたり、横濱へ出かけてやアしないかと思ふんだ」

そんな聞かせを、眞顔で聞いてゐるより、泊めることにきめて了つた方が早かつた。

「泊つてけよ！　君たちの方にやア別に差支ないんだらう？」

「えゝ、それアいゝんですけど、加島さんが御迷惑ぢアないかと思つて……」

「それア迷惑でないこともないけれど、だつて、もうどうせ今夜は書けやアしないんだし、…その代りなんだぜ、明日は朝のうちに歸つて貰はないと困るんだ、お午頃やつて來る筈の人があるんだから」

いゝ心持に廻つてゐた酒のせいもあつて、さういふ昌造の顔つきが、ひどく嬉しさうに笑み崩れてゐた。

「ふ、ふ、ふゝん」

うしろで、お雪が、鼻で笑つた。西山は、敏捷くその方の顔色を讀みながら、にや〳〵して、

「誰か來るんですね？」

「さうさ、誰か來るのさ」

もう一度ニヤリとして、今度は女中の方へ、

「君、知つてるの？」

「いゝえ、あたしなんぞ、なんにも存じませんわ」

「いや、知つてる！　ちやんとさう顔に書いたる！」

「あら、いやアだ！　…ぢア、お泊りですね？」

度々の行交になんでも構はないから、早くきまりをつけてほしいといふ氣持が露骨だつた。

「あゝ、お泊りだ！」

昌造は振り向いて、「そいでね、床を敷きに來る前に、酒を……」

「あら、まだ召上るんですか」

「召上ることは召上るんだがね、君たちに氣の毒だから、一升瓶かな

んかで運んどいてくれたまい。さうすれば、こつちで勝手にお燗をするから。……ねえ、おい！　お雪さん！」

「はい」

背なかを向けたまゝで答へて、土間に下駄を爪探つてゐるのへ、

「まア、さう慍んなさんなよ」

「慍りやアしませんけど、今勘定してみたら、こゝにだけ十二本ありますよ。初のうちさげてつたのを入れたら、かれこれもう二十本はあがつてますものね。なんぼなんでも、あんまり俗ですわ」

客へもあてつける、といふ風な口の利きやうだつた。女將の姪だとかいふこの娘は、昌造の晩酌が二本になると、翌朝の掃除に、机の上に見出される原稿紙が、必ず白紙のまゝであることから、仕事中の給仕には、妻君以上の厳しさを以て臨むくらゐの好意をみせてゐた。昌造は、殊に、今夜はあんまり飲むまい、と思つてゐるやうな時でも、若い娘が、額に八の字などよせて、むきになつて制めるのが面白さにわざとしち諄くあとをねだつたりして、やき〳〵云はせた、だから、今夜の不機嫌などは、當然すぎて、内心氣の毒なくらゐだつたが、口ではちつとも負けてゐずに、

「客がほしがる酒を飲ませないなんて、そんな女中があるもんか。女將さんに云ひつけてやるぞ」

「お燗をなさるつて、第一お湯が沸いてるんですか」

「沸いちアゐないが、火は……と、ちよと待つてくれよ」

云ひながら、そばの長火鉢の、鐵瓶の下をつッ突いてみて、「ちつと怪しいな、序に火種も持つて來といて貰ふかな」

足音が、梯段を駈けおりて行つてから、武宮は、テカ〳〵脂の浮いた頭を、兩掌でブルンと撫でおろして、

「あゝ、酔つた！」

「まアいゝよ、飲めよ」

昌造は銚子を取りあげて、二人の盃を満たしてやつてから、「なんだつけな、いま聞いてた話は」

「それより」

と、西山は、ひと口にぐいとあけて昌造にさしながら、「明日來るつてのは、一體なんです？　矢つ張りエスですか」

「エス？　舊式なことを云ふ奴だな。君等の仲間ぢア、いまだにそんな符牒を使つてるのかい」

「符牒なんぞありませんよ」

武宮が、勝氣らしく、忽ち反撥して來た。「藝者なんてものは、土臺吾々の話題にのぼる機會がないもの、なア、普烈！」

「男と女が逢つたりなんかするのに、一々金をやつたりとつたりしなきアならないなんて、一體時代おくれでさアね。さういふところは、加島さんも、とても話せねえんだからな」

「それア俺だつて、たゞですむもんならすませたいよ。だけど……」

「チエー！」

「何がチエだい！　それが、君たちみたいな大した腕がないもんだから、つい……」

「加島さんなんか、やらうとさへ思やアいくらだつて、……第一、女の愛讀者から、ずゐぶん手紙が來るてぢやありませんか」

武宮もそばから、

「いま來た女中なんぞ、今夜の間にだつて合ひますよ」

「それとももう……」

云ひかけて西山は、ケツケツケと、喉頭を鳴らして笑つた。

昔日は兎も角、今ではもう昌造も、鵜の目鷹の目でさういふ機會ばかり狙つてゐる色餓鬼ではなかつた。駘蕩として何事もなかつたばかりでなく、さういふ青年らしい鋭さが、ピタリと胸板へさゝつて來もしなかつた。よしんばさうであつたにしても、それならそれで、また落ちついてゐられるところがある筈だつた。それだけに、彼等のしてゐるやうなこと、――例へば、西山は、或る米國人の商人の、、、で、三人も子供のある日本の女と戀になつて、大膽不敵にも、そこの納戸の戸棚の一つを寢臺に改造して、主人のゐる時ですら、そこにぢツと潜んで、腹がすけば勝手に麵麭でも齧つてゐる、といふやうな生活に對しても、格別贊成もしなかつたが、さうかと云つて嫌惡の感情ももたなかつた。たゞ、その、、、が血で書いてよこしたといふ手紙を見せられた時だけは、それが血だといふだけの理由で可厭な氣がしたすべつこい西洋紙の上に黒褐色に乾いて、ぼつてりついた個所の落剝したのか、折目からバラ〳〵と落れかゝるのを、大切さうに懷中によせてから渡されたが、汚い氣がして、よくも見ずに突き返したことがある。――兎も角昌造は、男女の關係などに就いても、彼等に感じられるだらうほどの新時代でもなかつたが、さうかと云つて、少しも自分で新しいと思ふやうなところもなかつた。

西山の、自分で云つて自分でてれたやうな笑ひ聲のおさまるのを待つて、

「然し」

と、昌造は、やゝ改まつた氣持で云ひだした。「然し、先刻の、男と女との關係に、金の問題をさし挾まないつてのは、冗談のけて、大へんいゝことだよ。まつたく、經濟なんて職業は、こゝ五十年と保つかどうか解らないくらゐのもんだ。さうなつたからつて、金の問題が少しもはさまらないつてわけにやアいきつこないにきまつてるんだから、結局同じやうなことの、たゞ表面が變るだけのことだらうけれどね」

そんな話になつて來ると、内容ではなく、たゞ話しての氣分だけで、すぐもう彼等は、別世界のことのやうに口を噤んで了つた。――歸納といふことにかけては、然全興味のない頭腦らしく思へた。

「まア飲めよ」

「もうありませんよ」

「さうかい」

銚子をとりあげて振つてみた。
「行つて、とつて來ませうか」
「うん。でも、もう來るだらう。……飯なんぞ、すつかり冷えちまつたらうな。あつたかいのがあつたら、取り變へといて貰はふかね」
「えゝ。でも、まだお酒が來るんならおんなじこつてせう。よござんすよ」
「然し、二人とも強いね。俺はもう少し酒に疲れて來た」
さうは云つても、昌造には、なアに、まだこんな奴等に負けるもんか、といふ氣はあつた二人とも、ひと干支以上も若く、血氣盛なのだけれど、酒ばかりでなく、何をしたつて、——いよ〳〵となれば、喧嘩だつて負けはしない、といふやうな、たわいもない競爭意識が、我ながら滑稽だと思ふそばから胸に湧いて來た。それには、先刻から二人してかはる〴〵喋つた喧嘩話の血腥さが、ほんの子供らしい自慢ばかりでなく、無意識にもせよ、一遍うんと昌造をおどしつけて置かうといふ、幾分計畫的な氣持をも含んでゐるやうな氣がしたと同時に、何が、子供のくせに生意氣な！　その術に乘るかい！　といつた風な反撥心をあほり立てられる因となつた態もないではなかつた。それは普段からでも、こつちで勝手にしてやりたい親切はそれとして、彼方に少しでも利用しやうとかゝるやうな、ずるい氣持がみえたら、すぐぴたりとつツぱねてやらうといふ心づもりはもつてゐた。實際、さういふ質の青年男女の、相手の隙へつけ込む出足の捷さには、その程度の心構へは必要だつた。
云ひつけた通り、一升瓶に酒が來て、隣の六疊の方では、男が背負ひ込んで來る寢床を延べる女中たちの、何が可笑しいのか、きやつきやと笑ひさゞめく聲が暫く續いたが、やがてみんなが、敷居際に手をついて、「お先に御免かふむります。おやすみなさいまし」を云ふと、どや〳〵歸つて行つた。若者たちは、ゆかたを重ねた丹前に寛ぎ、その間に昌造が、自分で火を熾して、燗をつけた。
母屋との緣が切れ、自分たちばかりの世界になつたことで、腰を据ゑた酒の味が、また新だつた。燒冶者の餅などを持ち出して、洞門の奧の、風流めかした離れも、いつか山寨に籠つた夜盜の、恣なる酒盛の席と姿を變へてゐた。西山は、鏡臺の横にひつかけてあつた昌造の手拭をとつて、向鉢卷をしたりして、この場の空氣がひどく嬉しさうだつた。横濱の血櫻義團のSだとか、淺草の某だとか、大阪では誰だとか、さういふ一方の頭梁たる男たちの噂には、それ〳〵いゝところもあつて面白かつた。博徒の親分のやうに、たよつて行けば、よく面倒もみてくれるといふやうな話から、シヤリを噛ます、ゲンコを嚙ます、などいふ隱語も敎はつた。それは、食物を與へる、現金を與へる、の意だつたところが、その儕の話があまり永びいたせいか、武宮などは、だん〳〵荒ツぽい氣持になつて來たらしく、昌造に對する言葉使ひにまで、卷舌のべらんめえ調子が混りだした。それに、流石に酒も廻つて來たのだらう、ギロリ〳〵目の玉を光らせてゐたが、西田

山の話のどこかがどう氣に入らなかつたのか、突然、

「なんでえ大きなことオぬかすねえ！」

と、一喝して、片胡座にぐいと坐り直した。ヂロリと見返した西山の眼からも、忽ち笑ひの影が消えたが、——と、思ひ返したやうに、昌造の方を向いて、

「欣ちやん、ちつと醉ひましたよ」

「巫山戯ンない！　これんばかりの酒で……おい、昔然！　てめえなんぞ、女のけつばかり嗅ぎ廻つてやアがるくせに、なんでえ、素人おどしの大きなことオぬかすねえ、大きなことオ！」

「さうか、大きかつたか！」

西山も、血の氣の退いた顏を天井へ向けて、ことさららしく嘯いてみせた。

先刻、隣の六疊の方へ着物を着更へに行つた時、疊の上へ取り落して、カタリと鳴つたものがあつた。昌造は、振り向いても見なかつたが、例の押入のなかの生活を始めてから、西山が、毛唐つて奴は、二言目にはこれですからね、と、拳銃を構へる手つきをしてみせて、こつちだつて一本のんでなきア、あぶなくつて仕樣がねえ、など丶、洋袴の下に、一尺たらずの突ツ張つたものを動かして見せたこともあるので、そのカタリといふ音が、短刀の鯉口でも鳴つたやうに思はれたのだが、その時分には、二人とも頗る御機嫌がよかつたし、ちつとも氣にはならなかつた。——が、かうなつて來てみると、それがちよいと可厭だつた。

「生氣地もねえくせに、喧嘩つてもなア……。ヘツ！　喧嘩のお談儀が聞いて呆れらア。何が喧嘩つてもなア、だい！」

西山は、相變らずそつぽを向いたまゝ、すまして煙草を喫してゐた。——しいんとすると、疊のすぐ下で、聲のいゝ蟋蟀が鳴いてゐた……。

困つた奴等だとは思つたが、昌造も、酒のはいつてゐるせいか、別段淺ましいとは感じなかつた。抜いたら抜いたでいゝと思ひ、一番馬鹿げてゐるのは、横から口を出して、結局こつちまで腹を立てなければならないやうな羽目に引ずり込まれることだ、と、目は放さなかつたが、唇は堅く結んでゐた。

「おい！」

武宮は、ぐいとひとつ顎をしやくつて、「喧嘩つてものは……どうだとかぬかしたつけなア。さア、どうするもんか、そいつを一つ教はらうぢやねえか！」

「うん教はりたけれア、そのうちゆつくり、手を取つて教へてやらア！」

「面白れエ！　そのうちと云はず、今こゝで、はえエとこやつてもらはうぢアねえか」

云ふと、すつぽり肌ぬぎになり、けつもくるりとまくりあげた。

急に昌造は可笑しくなつた。恐らく、あんまり型にはまりすぎてる

だからだらうか、眞夜中、山のなかの一軒家で、雨を呼び風を起さうといふ、一道の殺氣が、さらに身にこたへて來なかつた、ひよつとすると、これも、少し念の入つた狂言で、俺をおどしつけやうといふ肚かも知れない。——そんな氣もして來た。と、ヒヨイと出た惡戲氣から、

「おい、やれよ」

と、西山の方へ笑ひ顔を向けた。

「いやだ！　馬鹿々々しい！」

「なにヨウ！何が馬鹿々々しいんだ！」

武宮は、立ちあがると、西山の向鉢卷の結び目を掴んで、ぐいと前に引いた。それは、たわいなくぬけて、モシヤ〳〵に延した栗色毛が、ぼう〳〵と逆立をした。

「なぐるぞ！」

「なぐれ！」

ポカ〳〵ッと三つ四つ喰はせて、武宮はもとの座に歸つた。

「そんなこつていゝのか」

「なにイ？」

もう一度立ちかけた時に、はじめて昌造が口を出した。

「いゝやな。もうそれで澤山だアな。一體、そんなこと、面白くもなんともねえや。俺アもう眠くなつたから先に眠るよ。飲みたきア、あと勝手に飲んでくれ」

さう云つて、さつさと隣室に來て、着たなりで寢床にもぐり込んだ。別に考へもしずに、「面白くもなんともねえ」と云つたのだが、それが實感で、座談にも酒にも興が醒め果てゝ了つた。隣室からも、コトリともの音がして來なかつた。

（馬鹿な奴等だ。くだらねえ狂言なんぞして見せなきやア、自分たちだつて、まだ面白く飲めてたものを……）

憐むやうな、また、自業自得でいゝ氣味だ、といふやうな氣持で、そんなことを考へてゐるうちに、寢ぬくもりに酔が發して、間もなくぐつすり寢込んで了つた。

三の二

自然と目を醒まして、昌造は隣の部屋まで時計を見に行つた。九時すぎだつた。雨戸をすると、うらゝかな菊日和で、流れ込んで來る微風が、寢起の肌に、チリ〳〵と氣持よく滲みた。すぐ目の下に見おろされる池に、家鴨がたくさん浮んでゐた。うるさいほどの鳴聲も、馬鹿に機嫌がよささうだつた。

隣室の薄暗がりをすかすと、二人ともゆかた一枚の、胸をはだけ、夜具を踏みぬいぎ、手足をほッぽりだして、鼾もかゝない睡りの深さに起すのもちよつと躊躇された。澄んだ空のもとに、そろ〳〵もう色の變りだした向山の杉の森を眺めながら、ゆつくり煙草を一本のんだ。——お午頃そつちに着く汽車、と電話で前振のあつた今日の來訪

膝の上に、思ひはおのづと落ちた……。

　だしぬけに瑛龍から長い手紙が屆いて來たのは、その一週間ばかり前のことだつた。それを、昌造は、借家ながらひどく氣に入つてゐる逗子の住居の、川べりの松並を見おろす二階の書齋で讀んだ。

　ちよつと手紙が書きたくなつたから書きます。――こんな冒頭で、その、わるく凝つたりしない普通の半切に、變體假名の多い、この稼業の人としてはわりに達者な筆を走らせて、手紙が始まつてゐた。文章は、口の利きやうの通りで、ズバリ〳〵云ひたいことを云つて、嫌味がなかつた。

　瑛龍は、そこに、大體次のやうな意味を述べてゐた。――あたしは貴方が好きだ。貴方もあたしが好きではないかと思ふ。あたしは、だけど、いま爆烈彈のやうなものをもつてゐる。貴方に、それにさわられると、あたしはどこかへ吹さ飛ばされて了はなければならない。だから、どうか、一言もそれには觸れないでほしい。から云つたら、貴方は、なほ爆烈彈のことを訊きたくなるだらうけれど、それは、貴方が知らずにゐてもいゝことゝ思ふから、はたから貴方の耳にはいりさうになる時でも、それには耳を藉さないやうにしてゐてくれ。今のあたしは、ツンツルテンの着物を着し、からッ風の吹く街なかにでも立つてゐるやうな氣持なのだが、貴方がたへと、時に複數になつてゐたゞと一緒のお座敷だと、裾の長い、あつたかな着物を着て、火鉢の周りにかたまつて坐つてゐるやうな氣持になる。でも、こないだ、貴方から聞いたお君さんの話をいろ〳〵考へてみても、どうもこれは仕樣のないことだし、それだつて風邪をひくほどの寒さでもないが、貴方は、それだけのことを承知してゐて、なんにも聞かないで、これからも時々來てくれ、虫のいゝ頼みと思ふだらうけれど、きつとさうしてほしい。

　ずゐぶんへんなことばかり書いたが、よく讀んでくれゝば、あたしの心持はわかつて貰へると思ふ。すぐ返事がほしい。

　――こんなことが、ごた〳〵と、可なり書きにくさうに並べ立てゝあつたが、然し、昌造には、それでよく嚥み込めた。無論わるい氣のする筈はなかつたけれど、要領だけを押して行くだんになると、ずゐぶんに不徹底なことをいふ女だなア、とは思はれた。

　昌造が、すぐ書いて出した返事は、およそ次のやうなものだつた。

　手紙を讀んで、貴方の云ひたいことはよく解つた。貴方があたしを好きだといふのは嬉しい。あたしも貴方が好きだ。貴方がもつてゐる爆烈彈といふのは、無論前から好きだつた人のことゝ思ふが、その人との間のいろ〳〵の問題が、もし片づくあてのあるものとすれば、あたしは根氣よくそれを待たう、それについて、あたしは、なんにも知らうとはしまい。貴方もあたしに云はない方がいゝ。云へば、あたしだつて、なんとか自分の氣持を云ひたくなる。貴方が、容易くそれに影響されるかされないか知らないが、而もそれは貴方の問題なのだ

から、どこまでも貴方一人の氣持で、自分のいゝと思ふやうにした方がいゝ、結局、どうもしない方がいゝと思ふなら、それでも仕方がない。あたしは貴方が好きだが、今ならまだ、さうなつても大して苦しみはしない。然し、その反對の方へ進んで行く、その道のりに要する時間なら、あたしは、實に根氣よく、なんにも云はずに、默つてついて行ける自信がある。たゞ、あたしは、ちつとも金持ではないのだから、貴方に逢ふために要る金が拂へないやうなことになれば、自然逢へなくなるかも知れないけれど、然しそれまでの約束は堅く大丈夫だ。

──大體こんなことだつた。

すぐまた折り返しての瑞龍の手紙には、はゝア、だいぶ焦つてるな、と思はせられるくらゐに、反感が露だつた。──いつまでも默つて待つてゐてくれるとの返事は嬉しかつたが、あんまりほんとのことばかり書いてあるので腹が立つた。あんな手紙、げじ〳〵だと思つてすぐやぶいて捨てゝ了つた。あたしはどうせ、お金がなければ逢へない人なんだから、たんとお金をもつて逢ひに來てくれ。あんまりほんとのことは嫌ひだ。あの手紙、げじ〳〵。

さういふ勢だつた。

昌造は、然し、ちつとも、穏かなかつた。眞面目に、正直にほんとのことばかり云つて、それで怒るなら勝手に怒れ、といふ肚の底だつたが、然し先方の氣持もよく解ることは解つて、ちつと氣の毒でもあつた。

──ほんとのことが嫌ひといふのは、解ることは解るが、云ふまでもなく決していゝ癖ではない。貴方が、あの手紙をやぶかずに置いたら、いつかは、いゝ手紙だと思つて讀む時があつたらう。いくらあの手紙がげじ〳〵でも、貴方があたしを好きでゐる限り、あたしはげじ〳〵ではない筈だから、いつかう平氣だ。近いうちお金をもつて逢ひに行くつもり。

かういふ、大眞面目なやうな、巫山戯たやうな往復かあつてから、急に疊み込まれた仕事のために海風閣に出かけて來たのだが、手紙をくれるなら、ぢかにこつちに貰ひたいと思つて、電話でそれを云つた序に、──愛香さんなんかと、一度遊びに來ませんか。──えゝ、行つてもいゝわ。──いらつしやいよ。三平でもお伴につれたら來られるでせう？ ──えゝ、ぢア行くわ。明日……はちよつと都合がわるいけど、明後日……お午頃そつちに着くくらゐの汽車でね。ぢア、いゝこと？ 待つてゝくださいね。──そんな話になつて、今日がその日だつた。

……手紙にも書いてゐる通り、昌造は、瑞龍を好いてゐた。が、いつから、どういふところから、と考へてみると、別に何もなかつた。不意に、「貴方、あたし知つてる?」、聲をかけられて、ピタリと目と目を合せた、その瞬間からだ、とも云つて云へないことはなかつたが、同時にまた、今もつて、初對面の人にでもすぐもてるほどの好意しか

もつてゐないのだ、とも云へさうだつた。たゞ、漠然と好きなだけで、どこがどう、こゝがかうといふやうなものではなかつた。それだけに、あんなへんな手紙の往復のあとで、はじめて相見えやうといふ今日の方が、却つて、いやに改まつた初對面の感じは深かつた。ほんとに好きなのかどうかも、今日から將來にきまることのやうな氣もして、それがちよつと重苦しく、また樂しく嬉しかつた。

……どんなつまらないことでも、人に對して否といふ返事をしたがらない、——といふより、さうするだけの強氣を持ち合はしてゐない昌造だつたが、三十五年の半生を振り返つてみると、悉く自分流儀の、我儘勝手な方角へ進んで來た跡ばかりだつた。どの角にも、はたから昌造を押し出らせた者の影はなかつた。にも拘らず、彼くらゐまた自力を恃みがたなく感じてゐる者も稀だつた。一念の力を感じるだけ、その先をへし折る運命の、いかにじたばたするも及ばない、絶體の力に服さないわけにいかなかつた。これは、もつぱら、生後四十八日目に、早くも失はれた長女の命が、若い父親に遺して行つてくれた教に基くところだつたが、然しその後とても、人の力の、運命の前にいかに成すなきかを感じなければならない機會は、決してさう少くはなかつた。而も、それは、昌造を打し拉ぐ代りに、この世に在ることを許されてゐる凡てのものゝ有難味となり、從つてまた、總てに對する彼の熱意の原ともなつた。この世に在る限りのものなら、いかにそれが馬鹿々々しげに見えるものでも、めつたに冷笑の唇は引き歪めなかつた。たゞ自分の關心と才能のほかにあるものに對しては、嬰兒の無智をも恥ぢず、運命の冷淡をさへ學ばふとした。狹く弱い自力と思へばこそ、一事に熱しはしたが、いつ何時それに加へられるかも知れない運命の前には、だらしもなく、無力と謙虚とにまみれる心が失はれなかつた。つまり、猪突と鼠遁とが、常に共に棲む心だつたが、それが、こゝ二三時間のうちに現はれて來る瑛瓏を思ふと、掉ひ起ち、且また顫へ戰いてゐたのだ……。

……若者たちを起して、母屋に行つて鑛泉につかつてから、序に二階の廣間で、晩い朝飯をすませた。寢不足やら、宿酔の氣味もあつたかも知れないが、二人とも、昨夜の元氣に引きかへて、いやに大人しく、碌すッぽ口も利かなかつた

食後、欄干に倚つて前の芝庭を見おろしながら、

「どうだい、あすこへおりてつて、昨夜の續きの、喧嘩の極意つてやつを、二つ三つ實演して見せないか」

などと媚ひにかゝつたが、二人とも、苦笑ひをするばかりで相手にならなかつた。昌造も、もうやがて午近いので、そろ／＼歸つて貰ひたかつたので、それをいゝ幸に、強いて話をかり出さうともしなかつた。

突然、西山が、

「どうです、そこら、ひと周り散歩しませんか」

「何いつてるんだい。だから、昨夜ッから、今日は臨月だつて云つてるぢアないか」
「あ、さう〳〵！」
と、大袈裟に反りくり返つてから、ニヤリ〳〵笑ひかけて、「お客さんが來るんだつけな、お客さんが」
「さうさ。若いくせに忘れッぽい奴だな」
「ひとつ、歸りに逗子によつて、奥さんにさう云つて來てやらうかな、——加島さんが、急用が出來たからすぐに來てくれつて、さう云つてましたつて。ど、ど、どうです！」
「平氣の平ちやんだ。やつてくれよ！」
「なアんてね。……まアいゝや。これで、當分加島さんにやア、大きなこたア云はせねえから」
「いゝから、そろ〳〵もう歸れよ」
「いやですよ！　どんな女だか見てつてやるんだ！」
「いゝとも！　目をつぶさない用心でもしてな」
「加島さん、いやに今日は氣が強いんだな」
「なんでもいゝから、歸れつたら歸れよ！」
「いやだ！　いやだ！」
さうは云つても、次の間の違棚にあつた鳥打帽子を二つ持つて來ると、その一つを、籐椅子に腰かけ、欄干に頬杖をついて、ぽかんとしてゐた武宮のうしろから、スッポリ耳まで被せて「おい、行かう！」
丁度その時だつた、女中がドカ〳〵と駈けあがつて來て、
「お客樣、お見え下さいました」
「それ見ろ！」
と、まづ二人の方を、笑ひ崩しながら睨みつけて置いて、「いゝよ、こゝにお通しゝておくれ」
「はい」
立つて行かうとした時には、もう眞ッ先に三平が、いつものかん聲で、階段上の板場へ現はれて來たが、若者たちを見ると、「よー」とか「おー」とか、景氣よく聲をかけやうとした口もとを咄につぼめて、
「え、よろしいんですか」
と、小腰をかゞめた。
「さア、どうぞ！今この人たちは歸るところだつたんだ」
武宮が、
「ぢア、失禮します。どうも御邪魔しました」
西山の方は、難儀顏で、
「さいなら」
そこへ、勢よくはいつて來た瑛龍や愛香とすれ違ひに、不良らしくもない、横目にも見ずに、こそ〳〵と出た。
「こんちは」
「いらつしやい。……ちよいと失敬しますよ。今すぐ來る」
さう斷つて置いて、昌造は、二人の青年のあとを追つて玄關に出

た。靴の紐を結んでゐた西山が、ちよつと振り仰いで、「これから、二人で、於菟ンとこへでも行つてみようかと思ふんですがね、ほんとなにか、お宅に御用があつたら言傳かりますよ」
「有難う。別になんにもない」
「何かひと言くらゐ、あとから來た客のことを云ひだすかと思はれたのに、ひどく眞面目で、同じほどの丈格構を、二人並んでシヤンと立つて、
「ぢア、さよなら、御馳走樣」
「さよなら、失禮しました」
「失敬！　また遊びに來たまい」

三の三

しかけた仕事は成可く片づけたがらない癖のある昌造は、原稿紙、萬年筆、時計などを載せたまゝのと、食事に使ふのと、寸縮りの四疊半に、二月堂の食卓を二つも据え、それにまだ長火鉢まであつたから、昨夜の二人でもいゝ加減身動きがならなかつたところへ、今夜はまたもう一人ふえてゐた。それも昌造が、昨夜の寢不足や、いゝ具合に廻つた醉心地で、まづゴロリとなつたのをお手本に、續いて、うで蛸のやうに染つた三平が、鳥府のやうに押しのけて隅の方に丸くなり、瑛龍も二月堂の下に足を投げ出したのだから、どこにも、殆どもう疊の見えるところはなかつた。愛吞だけが、横坐りの片肘で長火鉢に凭れ、當時流行の絹糸で、手提袋を編んでゐた、その手元を明るくするために、電燈がつい鼻の先まで引きおろしてあつたが、どういふ加減か、それが、田舍家の吊ランプのやうな、たよりない、同時にしめやかな感じで、ほの暗くあたりを照したゐた。
　午後からの風が吹き募つて、六坪に足らぬほどの建物の周りには、木枯じみた葉摺の音が近かつた。床の間の隅のやうな、思ひもかけないあたりから、すうッと吹き込んで來る隙間風に、靜にたゆたひ棚引いてゐた煙草の煙が、忽ち亂れ飛んだりした。昌造一人では、多勢に無勢で、早く片づいて了つた飯のあとで、まだほんの宵の口ながら、風の音に、灯の色に、また編物の針の動きに、夜更の感じが深かつた。
「ねえ、ねえ！」
瑛龍が、横になつたまゝ、せつかちらしく、ヒラ〳〵と手頸でも招いて、「せゝんに見た活動寫眞に、そつくりこんなとこがあつたぢやないの」
なんのことやらわけが解らないので、誰も返事をしなかつた。
「ねえ、ほら、阿母さんがランプの下で編物かなんかしてゐて……」
「あゝ、さう〳〵。英吉利の片田舍かなんかで……」
「さうよ。そばに嬰兒が、……あれ、なんてましたつけ、からブラン〳〵する……」
「搖籃か？」

「えゝ、さう、振龍！　あんなかでスヤ／＼寝てゐるところで……」
「そいで、息子が戰爭に行つてるんでせう？」
「息子はこゝに睡つてますよ」
默込んだかと思はれた三平が、急に頓狂な聲をあげて、「それも、野良息子ばかり二人もね」
振龍が、それにはたゞ笑聲だけで答へて置いて。
「それでさ、あんたはね、白い、かうなつたやうな……」
と、わざ／＼枕から首を擡げて、兩鬢から肩へかけて、まくれあがつた形を手つきでみせながら、「へんな格構の帽子をかぶつてさ……」
「あら、あたしが阿母さんなの？」
「そらさうよ。だつて、編物してるぢやアないの」
「でも、あたしいやだわ、こんな息子ぢア」
「息子はねえ……」
「でも、あたしいゝわ、昌さんならいゝわ。ちいちやくつて、大人しくつて、あたしほんとに、こんな息子が一人ほしいわ！」
「平さん、お前さんだけ落第だぜ」
「駄目だ、あんな繼母は！　幼兒虐待だ！　馬鹿にしてやアがら！」
「ほんとに、昌さん、あたしの息子になつてくださらない？」
「よせ／＼！　斷つちまへ、そんなこと！　息子なんてつまんねえよ！」
「姐さんなら、ほんとに阿母さんになつて貰つてもいゝがね、どうもちつと年齢がねえ……」
「それアいゝよ、それア丁度いゝよ。何しろまだ、頭の毛も碌に生え揃はないんだから」
「うるさいのねえ、ひとが折角活動寫眞の話をしようと思つてれば……」
「あ、さう／＼、活動でしたね。息子が、……戰地で、……そいから、どうなるんです？」
「どうも、實に、長閑なもんだなア」
昌造が、うちから持つて來てゐた屑糸織のどてらの懐から手を出して、長火鉢の方へ膝行りより、煙草に火をつけながら、「おんなじ部屋で、二十四時間のうちに、かうも景色が變るもんかと思ふよ、昨夜だつて、暢氣にやア違ひないんだが、何しろ、大肌脱の荒事だらね」
「どうしてまたそんな人たちが、あんたンとこへ來るの？」
「どうしてつてこともないけど、わりに、あたし、好きなんですよ」
「あら、どうして？　可怕いぢアないの、およしなさいなね」
「なんにも可怕いことなんかありませんよ」
「だつて、匕首かなんか持つてたんでせう？」
「いゝえ、ぞれア、いつも大抵持つてるやうだから、カタンつて音かした時、そんなもんでもおつことしたんぢアないか、と思つただけの話でね……」
「それがつてのがね」

と、三平が憎々しく、「内心可怕い可怕いと思つてるからでれ　なアに、これがみんな商買の種とりだね、ビク〳〵しながら、一生懸命つき合つてるんですよ」

「あたしの目だから、よくは見えなかつたけれど、なか〳〵ハイカラらしかつたわね」

「それに、あの、片つぼの人なんぞ、ずゐぶんいゝ男だつたから、あたし、御親類のお坊ちやんでも來ていらしたんぢアないかと思つたわ」

「さうお、そんなにいゝ男だつた？　あら、惜しいことをしたわね。それならもつとよく見て置くんだつたつけ」

「うちの弟ンとこへ、時たま來る人でね……」

一言づゝ、ゆつくり〳〵押し出してよこすやうな調子で、愛香が、自分の見聞きした或る不良少年の話を始め、その尾から尾を引いて、四方山の世間話が、長閑に、靜に、暫くの間つゞいてゐた。

「寒い！　寒くなつて來た！」

むつくり起きあがると、三平は、隣室の押入をあけて、手當り次第に夜着を一枚引摺り出してきた。

「ちよつと、序にこゝにもなんか掛けるもの頂戴なね」

「へ」

持つて來たものを抛きあげて、長火鉢の上から、「御免なさい」と投げてよこした。

「まア、大へんねえ」

珠龍が、半身起きあがつて、それを自分の足の上に擴げながら、「あんたも一緒にこゝにおはいンなさいよ」

あとからもう一枚、自分の分を引摺り出した三平が、それをくるりとはをつて、よろけ込みながら、

「なんだ？　一緒だ？　勝手にしろい！　俺は一人だ、その方がよつぽどえらいんだぞ！　二人も一緒にねるなんて、木賃宿でするこつた！」

そのまゝコロリと、海老にならうとするのへ、

「おい〳〵！　あとをしめろよ、あとを！」

「いやだよ、しめないよ！　面白くないよ、これアどうも、ひどく面白くなくなつて來たよ……」

さう云ひながらも、足の先で襖はしめた。

躊躇はず、それだけ無感動に、昌造は枕をよせたが、手は夜具の上に投げ出してゐた。

「ちよつと、いゝものをあげるから、そこで二人で、大人しくお遊びさない」

云ひながら、愛香が、紙入から取り出して、ヒヨイと昌造の胸の上へ投げてよこしたのは、觀世撚を二つに折り、それにまた撚り合せて頭のわツかを通し、い、い、たんこぶで止るやうにして、次々に十何本か繋いだものだつた。それを、房のやうによせて置いて、元を隠し持ち、どれでも一本引くと、偶然最終の一本に當らない限り、する〳〵と延び

て行かない何本かゞ殘るわけになる。その數で、次に逢ふまでの日數を占ふ、といふ、ちよつとそのころ流行つた即席の遊び道具だつた。

「あ、これか」

その姿勢と場合とで、而も瑛龍を相手では、有繋に昌造も、その籤をもて扱つて了つた。馬鹿のやうに平に持つて、左の掌の平をパシャ〳〵と叩いてみたりしてゐた。

「あら、はたきぢやアないわよ。やり方知らないのね？」

「それア知つてるさ」

「ぢやアやつてごらんなさいなね」

その時、瑛龍が、

「ちよつと、愛さん、いま何時？」

わりに奥の方へかけた腕時計を、袖口から覗き込むやうにして、

「あら、もう九時よ」

言葉とはおよそ反對な、とは云へ落つき拂つた調子だつた。

「九時よ、ぢやアないことよ。ぢアもう間に合やアーしないわ」

瑛龍は、起き返るなり、手鏡を出して、顏や髮を映してみながら、

「ちよつと、平さん！あんた寢ちまつちア駄目よ。置いてつちまふことよ」

「へ、へえ」

「歸るの？」

「いやだわ、愛さん！　あなたと來たら、ほんとにじれつたい人ねえ！　平さんも駄目ぢアないの、起きなきア！」

「大丈夫ですよ！　こゝを半になつてから出て、丁度間に合ふんだから」

「それがお仕舞なの？」

愛香は、まだ籤棒を動かし續けながら、「あたしなんだか、山おく！の方へでも來ちまつたやうな氣がして、とても今夜のうちに東京に歸れるとは思へないわ」

「駄目よそんな暢氣なこと云つてちア」

「泊つてきませうか」

「あゝ、さうしないか。風が吹いてゝ、そとはとても可厭な晩らしいぜ。お泊んなさいよ、その方がいゝよ」

「だつて、それア駄目よ！　あたし、明日あたま結はなきやアならないんですもの」

「さう？　明日？」

愛香の目が、意味を含んだ笑ひを浮べてゐた。昌造は、見てならないものを見たやうに、慌てゝ顏をそむけた。

「あたま結ふんぢやア大へんだわね。ぢア歸りませうか」

「大船で乘り換へて、横濱でまた電車に乘り換へる氣なら、もう一つあとに、十時五十何分てのがあるんだがね」

「あゝそんなのとても大へんだわ！矢つ張りこれで歸りませうよ。……ねえ、愛さん、ちよつと平さん起して頂戴よ」

「いよ〳〵歸るんだとすると、もうあんまりさう暢氣にしちやアゐられませんよ」

急に起き返つてさう云つた昌造の聲に、三平も、丸めたやうな布團のなかゝら、蒼黄色い腕を二本、ニユツ突き出して、

「うん？ なんだい？ 歸るのかい？」

「さア、愛さんも、さつさと編物なんぞ片づけちまはなきア駄目よ！ほんとに仕樣のない人たちねえ」

「たうとう叱られちやつた」

昌造が電話で自動車を云ひつけたり、みんなそれ〴〵身仕度をしたり、遽にそこに慌たゞしい空氣が蒔き散らされた。

「あゝねむい！」

三平は、外套をはをり、帽子を被つてから、急にまた二月堂の上に、バタリと突ツ伏して了つた。

停車場で、三平は出札口に愛香は賣店へでも行つたのか、昌造と瑛龍が二人ツきりになつた時だつた。

「よウく解つたわ」

「ン？」

と、目を向ける間に、あゝ手紙のことだなと嚥み込めたので、「あゝさう！」

「前の手紙も、だん〳〵げじ〳〵でなくなつて來たわ」

「あ、さう！」

「でもね、一遍だけで澤山よ」

「何が？」

「あんまりほんとのことづて、あたし矢つ張り嫌ひだわ」

「あ、さう！」

昌造は、微笑の口もとを、外套の襟に埋めた。

來た當座、ずゐぶんプン〳〵させるな、と思つたきり、あとはなんとも感じなかつた香水の匂が、翌朝、母家で湯にはいり、飯をすませて歸つて行つた跡の襟には、いつぱいに充ち溢れてゐた。何も彼もそれだつた。昨夜着てゐたどてらなどは、一時間と身に着けてゐたら、間違ひなく頭が痛くなるだらうと思はれるほどだつた。

いつもの場所にきちんと据ゑられた仕事机の片隅に、觀世縒の占が載せてあつた。昌造は、取りあげて嗅いでみた。それにはまた、別の香水が匂つてゐた。何心なく引くと、する〳〵と延びて、房になつて殘つたのは、僅に三本だつた。

（明日、明後日、明々後日、……よし、大丈夫だ！ 今日から三晩で仕事を仕上げて、明々後日は、是が非でも行かう！）

その氣で、早速原稿紙を擴げたが、どこもこゝも、鼻の向けやうもない薔薇の匂だつた。うつかりペンでも把りあげたら、すぐ、薔薇、薔薇、薔薇……と書きさうだつた……。

その日の午後、昌造はひとまづ逗子に引きあげた。——どうにも居たゝまれなかつた。

創作「夢殿」について

中里介山

私が聖徳太子の研究に着手したのは明治四十五年に始まるのである。その以後我々の力で求められるだけの書物は讀みもし、味讀に至るまで一通りは巡禮をして歩いたつもりである。

それとても、私のは歴史研究の爲にやつたのではなく、創作の感興に驅られて辿り歩いたといふのでもなく、實は本心にやみ難き追求があつて、物にも心にも惱みきつて、道を求め歩いた結果が聖徳太子のお膝元まで計らず導かれて行つた次第である。

分け登り來つて、はじめて、その偉大斗殿なる人間的存在に驚歎し豫想せざる處の感動が大海の如くわが身を浸した。

傳教も偉大であり、空海も偉大であり、惠心も、法然も親鸞も日蓮も、その姿に於て優に世界人類のスノーラインを抜く處の高峻嶺ではあるが、聖徳太子に至るとそれ等の戸を打ち越えて、そこに佛と菩薩との位が明かに顯身的に現はされてゐるかの如く見ゆる。思想界のアルプスの壯觀偉觀は、これまた相當その險山難路に足に覺えのあるものでなければ味ひきれないかも知れない。斯くの如く私共の聖徳太子殿は、最初よりその偉大に渇仰して而して參入し得たのではなく嶮げな道をたどつて、辿りつくしてはじめて俄然として其の大殿が開かれたのである。

かりそめに、その地點に立つて、わが視野を恣にする時

ひんがしの野にかぎろひの立つ見えて
　かへり見すれば月かたむきぬ

といはうか。蒼涼として天に日月の併せてかゞやくのを見る。

そこに、また南路があり、北路があり、長江があり大河があつて、

さうして日月の蒼涼としかゞやく彼方遙かに呼びかはす聲、

おゝ、日の出づる處の國の太子よ

彼方の聲がいふ。

　我を呼ぶは誰ならん

此方の聲が答へる。

　雪山の雪、恒河の流れの上を見給へ

と見れば峡谷の上に豐滿なる肉體、三十二相の面に白毫がかゞやいてゐる。

おゝ、これは釋迦牟尼世尊

此方の聲が歡會の喜びに晴れ渡ると彼方の聲は重ねていふ。

わが昔なせしが如く……出離せよ、遠離せよ、解脱せよ、王位も妻子も珍寶も榮耀も所詮は火宅ぞかし……

さらいはれて此方は今更の如く、わが身の周圍を見廻した。塵海渺々として我が臺座の上まで洶湧し來るの波濤を見つめつゝ、

世尊よ、我は逃るゝ處なし。

敢てその座を動くことをしなかつた。

一國の太子として生るゝことは同じ、一は早く位をのがれて山に入り、一は其の位にとゞまつて最後まで人間界にある。釋尊と聖徳太子との相違はこれである。

聖徳太子六歳の時の傳說に斯らいふのがある。

ある時宮中に於て小皇子たちがいさかひをなされる。天皇がそれを聞し召して、笞を以て諸皇子たちを追ひ叱り給ふ。諸皇子皆怖れて逃げ惑ふうちに、聖徳太子のみは、衣を脱して天皇の御前に進む。天皇その何故に然るやを問はるゝと……太子合掌、天皇、皇后に對して首を低れて奏して曰く

梯を天に立てゝ昇るを得ず、穴を地に穿ちて隱るゝを得ず、故に自ら進んで笞を受くる也。

この一挿話には意味深い暗示がある。逃避せざるの生涯、これぞ釋尊と雖も及び難き聖徳太子の人間的包容であり、同時に如何なる詩筆も及ばざるの深刻なる悲劇である。

八人の訴を同時に聽き給ふといふ聰明がまた聖徳太子のすべての性格と事業とに通ずる。

一人を以て文明史のすべてを蔽ふといふやうな性格は日本の歷史のみならず世界の何處をたづねても二人とあるべきものではない。聖徳太子研究の豫備常識としても少くとも用明、崇峻、推古三朝の輪廓を知つて置かねばならぬ。こゝに日本上代史唯一の典據「日本書紀」から次の如く拔き出して見る。

用明

△磐余に池邊雙槻の宮を作る
△蘇我の馬子大臣、物部守屋大連
△酢香手姫皇女を伊勢神宮に奉仕
△元年—穴穗部間人皇女を皇后とす
△厩戶皇子生る
△當麻の君の先の事
△穴穗部の皇子、前皇后炊屋姫を、、んとす
△穴穗部皇子、三輪君逆を殺す
△二年、天皇病みて崇佛の心を起し給ふ
△守屋、勝海—對馬子の反目
△迹見赤檮、勝海を殺す
△鞍作多須奈、天皇の爲に出家し寺を造り佛像を造る
△天皇崩ず

崇峻

△大連、穴穗部皇子を立てんとす

△馬子等、穴穗部皇子と宅部皇子を殺す
△善信阿尼等百濟に行かんとす
△秋七月、馬子諸皇子と守屋大連を伐つ
△迹見首赤檮功を立つ
△守屋の臣捕鳥部の萬の勇と其の白犬
△櫻井の田部の連の犬
△八月即位、倉梯に宮つくる
△元年三月、大伴糠手の連の女小手子を妃となす
△百濟より佛舍利、寺工、太良未、鑪盤の博士、瓦博士、畫工を献す
△馬子戒法を學ぶ
△善信尼等學問の爲發道
△飛鳥に法興寺を造る
△二年秋七月諸臣に國境を見せしむ
△三年春三月、善信尼等歸りて櫻井の寺に住む
△尼と出家
△冬十二月二萬餘の兵を筑紫に出し三韓を討たんとす
△五年冬十月山猪を献ずるものあり
△是月大法興寺佛堂と歩廊とを起つ
△十一月天皇弑せらる
△馬子東漢駒を殺す
△天皇皇太子無し

推古

△冬十二月即位
△元年春正月法興寺刹柱を立つ
△夏四月、廐戸皇子皇太子となる
△四天王寺を造る
△是歳太歳
△二年春二月、三寶興隆の詔と寺を建つ
△三年夏四月、沈木漂流
△五月惠慈歸化皇太子の師となる
△慧聰來る
△秋七月將軍筑紫より來る
△四年冬十一月法興寺造竟る
△五年夏四月百濟王子に阿佐朝貢
△六年夏四月難金、鵲を献ず
△秋八月新羅、孔雀を献ず
△冬十月越國白鹿を献ず
△七年夏四月地震
△秋九月百濟、駱駝、驢、羊、白雉を献ず
△八年春二月、任那の爲に新羅を討つ
△九年春二月、皇太子初て斑鳩宮をつくる
△三月任那を救はしむ
△夏五月大雨
△秋九月新羅の間者を捉ふ
△冬十一月新羅征伐の議

△十年春二月來目皇子を撃新羅將軍となす
△冬十月百濟僧觀勒來る、曆本天文地理、遁甲方術の書を貢らす
△諸學生習業
△閏十月高麗僧、僧隆、雲聰來歸す
△十一年春二月、來目皇子筑紫に薨ず
△夏四月、當麻皇子を征新羅將軍となす
△秋七月、當麻皇子新羅を伐たずして歸る
△冬十月小墾田宮に遷る
△十一月秦造河勝、蜂岡寺を造る
△皇太子大楯靫を作り、旗幟に繪く
△十二月初めて冠位を行ふ
△十二年春正月始めて冠位を諸臣に賜ふ
△夏四月太子憲法十七條をつくる
△秋九月朝禮を改む
△秋九月、黄書畫師、山背畫師を定む
△十三年夏四月、鞍作鳥を造佛工となし佛像を造らしむ
△高麗王黄金三百兩を貢す
△閏七月褶を着せしむ
△冬十月太子斑鳩宮に居ます
△十四年夏四月丈六佛像成り、鳥秀工の名をあぐ
△寺毎に設齋せしむ、四月八日、七月十五日
△五月勅して鳥を稱す
△鳥、金剛寺(南淵ノ坂田ノ尼寺)をつくる

△秋七月、皇太子勝鬘經を講ず
△是歲、皇太子法華經を講ず
△十五年春二月壬生部を定む
△秋七月、小野妹子を大唐に遣はす
△是歲、諸國に池、溝を作り國毎に屯倉を置く
△十六年夏四月妹子大唐より至る、裴世清等同道
△六月唐客を難波津に迎ふ
△秋八月唐客入京
△九月唐客を難波大郡に饗す
△又妹子を唐客と共に遣はす、學者八人從ふ
△是歲新羅人多く歸化す
△十七年夏四月百濟の僧俗肥後に漂着
△秋九月妹子大唐より至る
△十八年春三月高麗王、僧曇徴法定を貢上す
△同、曇徴、彩色及紙墨碾磑を造る
△秋七月より九月、新羅任那使人來
△冬十月同入京
△十九年夏五月五日兎田野に藥獵す
△同、諸臣皆服色冠色に随つて各々髻華をさす
△秋八月新羅任那朝貢
△二十年春正月群卿酒宴
△二月皇太夫人改葬
△夏五月五日藥獵

△是歳百済人「芝耆摩呂」(白斑人)歸化す
△百済人味摩之歸化「伎樂部」を習はしむ
△廿一年冬十一月池をつくる
△同難波より京に至るまで大道を置く
△十二月、皇太子片岡に飢人に會ふ
△廿二年五月藥獵
△六月、犬上御田鍬等を大唐に遣はす
△秋八月大臣病む一千人出家
△廿三年秋七月犬上等歸る、百済使同伴
△十一月百済客を饗す
△高麗僧慧慈歸國
△廿四年春正月桃李實
△三月掖玖人三口歸化
△夏五月夜句人七口來
△秋七月新羅佛像を貢す
△廿五年夏六月出雲に大瓜あり
△是歳五穀登之
△廿六年秋八月高麗來貢
△是歳河邊臣を安藝國に遣はして舶を造らしむ
△廿七年夏四月近江蒲生河の人魚
△秋七月攝津國に人魚
△廿八年秋八月掖玖人二口伊豆島に流來
△冬十月檜隈陵修補
△十二月、天に赤氣あり
△太子、島ノ大臣等、天皇ノ記、國ツ記、臣連伴造國造百八十部幷に公民の本紀を録す
△廿九年春二月太子薨
△是歳新羅來貢上表
△卅一年秋七月新羅來朝佛像等を献ず
△是歳任那の地紛擾、師を出す
△冬十一月、磐金、倉下等新羅より歸る
△卅二年夏四月觀勒を僧正とす
△冬十月大臣葛城縣を乞ふ天皇不許
△卅三年春正月桃李花さき、三月霜降り六月雪、七月霖雨
△夏五月大臣薨
△天下大に飢え盗多し
△卅五年春諸國怪異
△卅六年三月天皇崩
△夏四月雹降る、春より夏まで旱りす

これは甚だ大まかな列擧に過ぎないが、それでも、この時代が最も多事なりし時代であることはわかる。即ち重臣の間には新舊思想の衝突がある。それが崇佛と排佛を機會として血を見るに至り並び立つこと能はずして大連の滅亡となり蘇我氏の天下となつた。延いて弑逆の事があり推古女帝の擁立となり聖德皇太子の攝政時代が來る。三寶興隆造寺佛像の事は云ふまでもなく、歸化があり來貢があり、遣外大使の派出がある。外交は多端にして新羅の反覆には屢々惱まされる、斯

作ら彼地の文物は滔々として我朝に流入し來り、目ざましい文化の勢は一代に溢れる。冠位は設けられ、憲法は制定せられ、朝儀は改められ、衣裳も定められ、造佛工や畫師の名あるものが輩出し。皇太子は經を講じて天皇及群臣これを聞き、外使を饗應し內臣には酒宴を賜ひ、伎樂も習練され、群臣おの／＼綺羅をかざりて髻華をさしつゝ藥獵の盛觀に至つては天下泰平の瑞祥さながらである。其他、池溝を掘り、國毎に屯倉を置き、人を海邊に遣して船を造らしむる等は內政の着々として充實し行くを看取すべく、修史の大事業もあつて文化のいよ／＼燦然としてかゞやくを見るべく、大臣馬子病むと聞きて出家するもの一千人とあるは、たま／＼權勢のほどを窺ひ知ると共に時代の安定のほどをも見るべきである。

斯くの如く、推古朝は日本上代史の花であるのみならず、日本の歷史には、明治の時代を別にして之と比ぶべく文化の時代はあるまい。明治の文化と雖も、その內容に至つては聖德太子中心の飛鳥朝時代とは比較にならないものがある。文化といふ文字は近ごろの文字のやうに聞えもするが、これが本當にあてはまる時代は日本の歷史に於て推古朝以外にはあるまい。

日本の歷史が憲法といふものを持つたのは推古と明治以後の外にはない。十七條の憲法と明治廿二年の憲法との內容の相違の如く推古の文明と明治の文明とは違ふ。彼は經典であり、これは散文である。事件の次には一應人物を調べて見なければならぬ。聖德太子時代は即ち推古朝ではあるが、やはり二代以前に遡つて、太子生誕の時代からはじめる、さうしてこゝには、やはり煩を避けて「日本書紀」の一書だけを擇ぶ　もとより事件人物が、これに限つたわけのものではない。これ以外の重要なる考證資料は數多きものとして、これはやはり豫備常識の一つとして我人共に是非記憶して置きたい處のものである。

用明

橘豐日天皇（用明天皇）
天國排開廣庭天皇（欽明天皇、用明の父）
堅鹽媛（用明の母）
渟名倉太珠敷天皇（敏達天皇、推古の父帝）
蘇我馬子ノ宿禰（大臣）
物部ノ弓削ノ守屋ノ連（大連）
酢香手姫皇女（伊勢神宮奉祀）
穴穗部間人ノ皇女（用明ノ皇后）
厩戸皇子（一）
來目皇子（二）
殖栗皇子（三）
茨田皇子（四）
石寸名姫（蘇我大臣稻目宿禰女）
田目皇子（更の名豐浦皇子）
葛城直磐村
廣子（葛城直磐村ガ女）
麻呂子ノ皇子（當麻公ノ先）

穴穗部皇子（炊屋姫皇后、、、、、）
三輪ノ逆（炊屋姫皇后の寵臣）
中臣ノ勝海ノ連（排佛ノ領袖）
豐國法師
白堤（逆の同姓）
横山（逆の同姓）
忍坂部ノ毛屎（大連に內通）
舍人ノ皇子（太子）
竹田ノ皇子
迹見ノ檮史（舍人、勝海を殺す）
物部ノ八坂太市ノ造小坂（大連ノ使者）
漆部ノ造兄（大連ノ使）
土師ノ八島ノ連（馬子ノ使）
大伴ノ毘羅夫（大臣を守る）
鞍部ノ多須奈（司馬達等の子）

崇峻

泊瀬部ノ天皇（崇峻天皇）
天國排開廣庭天皇（欽明、崇峻の父）
小姉ノ君（崇峻ノ母、稻目宿禰ノ女）
橘豐日天皇
佐伯ノ連丹經手

穴穗部皇子（誅せらる）
炊屋姫ノ尊
土師連磐村
的臣眞嚙
宅部皇子（誅せらる）
善信阿尼
泊瀬部ノ皇子（大臣方）
竹田ノ皇子（同）
難波ノ皇子（同）
廐戸ノ皇子（同）
春日ノ皇子（同）
紀ノ臣麻呂ノ宿禰（同）
巨勢ノ臣比良夫（同）
膳臣ノ臣賀施夫（同）
葛城臣烏那羅（同）
大伴ノ連嚙（同）
阿部ノ臣人（同）
平群神手（同）
坂本臣糠手（同）
迹見首赤檮（同大連を殺す）
春日ノ臣（同）
大臣ノ妻（大連ノ妹）
捕鳥部ノ萬（大連ノ資人）

櫻井ノ田部ノ連膽渟
大伴ノ糠手ノ連ノ女小手子（妃）
蜂子ノ皇子
錦名ノ皇女
僧　惠總（百濟ヨリ）
僧　令斤（同）
僧　惠寔（同）
恩率首信（同）
德率善文（同）
那率富味身（同）
僧　聆照（同）
律師令威（同）
惠　衆（同）
道　嚴（同）
令　開（同）
寺工太良末（同）
太文賈古子（同）
鑪盤ノ博士將德白昧淳（同）
瓦博士　麻奈父奴陽貴（同）
瓦博士　文陵貴（同）
瓦博士　麻帝彌（同）
畫工白加（同）
飛鳥ノ衣縫ノ造ヵ祖樹葉

近江ノ臣滿（蝦夷國境を見せしむ）
完人ノ臣鴈（東海道に）
阿倍ノ臣（北陸に）
善德尼（大伴ノ狹手彥連ヵ女）
狛夫人（同）
新羅媛善妙（同）
百濟媛妙光（同）
善　聰（漢人）
善　通（同）
妙　德（同）
法　定（同）
照　善（同）
智　聰（同）
善智惠（同）
善　光（同）
鞍部ノ司馬達等
多須奈（達等の子）
德齊法師（多須奈出家の名）
譯語田ノ天皇
記ノ男麻呂ノ宿禰（大將軍）
狹　臣（同）
葛城、烏奈良（同）
吉士金（新羅に使す）

吉士木蓮子（任那に）
東漢直駒（弑逆の臣轄井が子）
河上ノ娘（嬪、馬子ノ女）
物部大連（守屋）
蘇我ノ馬子ノ宿禰（大臣）

推古

豐御食炊屋姬天皇（推古天皇）
天國排開廣庭天皇（欽明、推古ノ父）
橘豐日ノ天皇（推古ノ同母兄、用明）
額田部皇女（推古の幼名）
渟名倉太珠敷天皇（推古の夫君、即ち敏達天皇）
泊瀬部ノ天皇（崇峻、推古の異母（?）兄）
馬子
厩戸皇子
穴穗部間人皇女（厩戸皇子の母）
惠慈　內敎の師、高麗僧）
覺哿（外典の師、博　士）
上宮厩戸豐聰耳ノ太子（聖德太子一名）
慧聰（百濟僧）
善德臣（大臣ノ男、法興寺司）
阿佐（百濟王子）

吉士ノ磐金（屢々新羅に遣はさる）
境部臣（征新羅大將軍）
穗積臣（同　副將軍）
難波ノ吉師神（新羅に遣はさる）
難波ノ吉士木蓮子（任那に遣はさる）
大伴ノ連囓　高麗に遣はさる）
坂本ノ臣糠手（百濟に遣はさる）
迦摩多（新羅の間諜者）
來目皇子（擊新羅將軍）
觀勒　百濟歸化僧）
陽古ノ史ノ祖玉陳（觀勒に就て暦法を習ふ書生）
大友ノ村主高聰（同　天文遁甲を學ぶ）
山背臣日並（同　方術を學ぶ）
僧隆（高麗僧　來歸）
雲聰（同）
土師ノ連猪手（來目皇子の殯を掌る）
當麻皇子（來目皇子の兄）
舍人の姬王（當麻皇子の妻）
秦造河勝（蜂岡寺を作る）
鞍作鳥（佛工）
司馬達等（鳥が祖父）
多須奈（鳥が父）
島女　同　姨）

小野臣妹子（遣唐使）
鞍作福利（通事）
蘇因高（妹子別名）
裴世淸（大唐使人）
難波ノ吉師雄成（迎接使）
中臣ノ宮地ノ連麻呂（掌客）
大河内直糠手（同）
船史王平（同）
額田部ノ連比羅夫（古禮辭任）
阿部ノ鳥ノ臣（客の導者）
物部ノ依網ノ連（客ノ導者）
乎那利（雄成別名）
倭漢ノ直福因（學生）
奈良ノ譯語惠明（同）
高向漢人玄理（同）
新ノ漢人大國（同）
新ノ漢人日文（學問僧）
南淵ノ漢人請安（同）
志賀ノ漢人請隱（同）
漢人廣齊（同）
道欣（漂着、高麗僧）
惠彌（同）
難波ノ吉士德麻呂（漂着者調べ）

船ノ史龍（同）
曇徵（高麗僧）
法定（同）
沙喙部奈末竹世士（新羅使人）
喙部大舍首智買（同）
膳ノ臣大伴（任那客を迎接す）
土部ノ連菟（新羅使導者）
大伴咋ノ連
蘇我豐浦ノ蝦夷臣
阿部ノ鳥子臣
河内ノ漢ノ直贄（新羅共食者と爲す）
錦織ノ首久僧（任那共食者と爲す）
栗田ノ細目ノ臣（藥獵ノ前部頭）
沙部喙奈末北叱智（新羅朝貢使、
習部大舍親智周智（任那同）
堅鹽媛（皇太夫人）
阿倍ノ内ノ臣鳥（誅）
中臣ノ宮地ノ連烏摩侶（同）
境部臣摩理勢（同）
芝耆摩呂（百濟歸化人）
路子ノ工（同　別名）
味摩之（百濟歸化人）
眞野ノ首

新漢
齋文
飢人（片岡山）
犬上御田鍬（大唐に使す）
矢田部造（同）
奈末竹世王（新羅朝貢使）
隋の煬帝
貞公普通（隋の伴使、高麗より獻）
河邊臣（安藝國に船を造らしむ）
倭ノ漢坂上ノ直（檜隈陵上に柱を立つ）
大柱ノ直（同）
島ノ大臣（馬子）
奈末伊彌買（新羅朝貢）
奈末智洗爾（新羅大使）
達率奈末智（任那大使）
僧惠齊（大唐學問者）
惠　光（同）
惠　日（醫）
福　因（同）
田中ノ臣（討新羅の議に答ふ）
中臣ノ連國（同　小德）
吉士倉ノ下（任那に使はす）
奈末知洗遲（新羅使）
達率奈末遲（任那使）
境部臣雄摩侶（大德）
河邊臣禰受（小德）
物部依網ノ連（同）
波多臣廣庭（同）
近江脚身ノ臣飯蓋（同）
平群臣宇志（同）
大伴連（闕名）（同）
大宅ノ臣軍（同）
阿曇ノ連（法頭）
鞍部ノ德積（僧都）
阿部臣摩侶（馬子ノ使）
僧　惠灌（高麗僧）
竹内皇子

たゞ、此の列名だけを一々讀み去り行く間にも推古朝の人物がいかに多方面に豐富であり、その文明がいかに文化的に複雜せるものなるかゞわかり、而して、これを統一せる背景、聖德太子の人格のいかに博大にして莊重に、その時代の文化燦然たる趣を想像することが出來る。

然るに此の光輝燦爛たる多士濟々たる飛鳥朝文明の眞只中に於て、聖德太子は一種異樣なる人物に直面して居られる。それは片岡山の飢たる人である。

この飢たる人のみが滿朝滿野の、聖徳太子に取つての唯一の渇仰であつたといふことは不思議である。飢たる人の正體は知られない、この飢たる人に對しての太子の思慕敬愛のみが知られてゐる。

これが他の傳說書と違ひ、「日本書紀」の如き國家的典籍のうち、殊に行を惜むべき推古朝内外の複雜なる事件人物のページの中に可なり多大の字數を占めてゐるといふことも不思議である。

いや、まだ一人この不思議なる飢たる人の外に太子の親愛を蒙つてゐる者がある。それは高麗の僧慧慈である。併し、これは太子の經文の師であり、立派な歷史的存在人格であるから敢て不思議はないが、片岡山の飢たる人の存在は全く捉まへ處が無いのである。書紀の記事によつて、その光景を略叙して見ると、

冬十二月といふから極寒い時、萬木は枯れつくしてゐたが冬日には親しむべき光がある。太子はお氣に入りの近習をつれて悠々と片岡山のほとりを散步遊ばされる。時に飢たる人が一人、道のほとりに臥してゐた。

「お前は何者ぢや」

太子が傍へよつて懇にお尋ねになると

「……」

返事がない。

「誰ぞ、飲食を持ち來りてこの者に取らせよ」

お附のものは畏まつて、この飢たる路傍の人に飲食を投げたが、飢たる人はかぶりつくやうにそれを貪り食つたか、それでも早や飲み食ふ氣力さへ無く病み衰へてゐたか、その邊は一向わからない。

飲食を與へて後の聖徳太子は、やをら自分の召してゐた衣裳をお脫ぎになつてこの飢たる人の上に着せて

「安らかに臥せよ」

と仰有つた。――飢たる人は斯くも情厚き皇太子の恩澤に對して感涙を流して謝辭を奉つたか、それでも、餘計な物ずきをなさる貴公子よと白い眼で見てゐたか、その邊もわからない。

太子のその時のお歌

しなてる、片岡山に、飯に飢て、
臥せる、その旅人、哀れ、
親無に汝なりけめや、若竹の、
君はやなき、飯に飢て、臥せる、
その旅人、哀れ

この悲傷哀痛、やる瀬なき憐に充ち滿ちた歌を「萬葉集」はまた變つた趣きに傳へてゐる。

小墾田宮上宮聖徳皇子、出遊竹原井之時見龍田山死人悲傷御歌

家有者、妹手將纏、草枕、客爾臥有、此旅人𢘟怜。

この歌は書紀のつきつめた哀傷悲痛とは事かはり、哀傷のうちにも官能味があつて、そこに人間的餘裕が見られるといへば見られる。なほ、ある書物には、この飢たる人が、太子の御歌に對して、返歌を口ずさんだやうにも書いてある。その光景に對しても相當に奇異の筆を傳へてゐるものもあるが、書紀には此の異人は全く無言のものとして取扱はれてゐる。書紀では飢たる人、萬葉では死にたる人になつてゐる

る。だが、その邊の考證は問題とするに足りない事である。人生最も徹底的の悲慘者たる行路病者、或は行き倒れ人と、文化爛然たる時代の權化の聖太子との對照を見れば足りるのである。さうして聖太子が、特に念入りに、此の行路病者、行き倒れ人に對して、注意を拂はれたといふ事實を看取すればよいのである。

だが、それとても單にそれだけの出來事ならば、それは我々が普通に見る、慈善とか温情とか稱すべき類のものであつて、太子の仁德を仰ぐべきではあるが、取り出でて國史の上に多大の文字を費すべきほどの出來事ではあるまい。然るに、逗留の後の太子は、わざ／＼お使者を以て飢えたる人を見舞にお遣しになると、其の者はすでに死んでゐたといふ。

それを聞かれた太子の悲歎は想像外のもので、さながら、顔回の死に對せし孔子の心情にも越ゆるものあるはいよ／＼不思議ではないか。書紀にも、やはり「皇太子大悲之」と記されてある。

これは全く豫想外である。名にし負ふ推古朝の權化、朝野の衆星は盡く太子を北斗としてめぐるのである。その數何ぞ限らん。權臣も將軍も、學者も、名僧も、藝術名譽の士も雲の如く群がるうちに於て、ひとり此の名も無き路傍の飢たる一人の爲に、太子が萬斛の涙をお濺ぎになりしは何故か。

崇峻天皇弑逆の御事は申すも畏し、一代の內外の事、盛大の裡にまた暗影の無しといふは人生にあらず、太子の傷心せらるべきもの何ぞ限らん。然し書紀にはそれ等の事件人物に對する太子の感情の動搖は一つも記されてゐないのに、ひとり此の無名の飢たる人の爲に多大の字數を拂ひ、最大級の哀悼をうつしてゐるのはいよ／＼不思議ではないか。

太子の飢人に對する哀悼の情はそれで止まるといふことを知らない飢人の爲にわざ／＼墓を築かせ給ふたといふことだけにも止まらない數日の後に至つて追懷はいよ／＼募るのみである。近習の者に向つて仰せらるゝやう、

「先日、道に飢てゐたものは、あれは凡人ではない、必ず眞人であらう」

そこで、またも使をお遣しになつたが、その使もいよ／＼非常の使ではない、墓を開かせて御覽になりたいとの御使である。

墓を開かせて御覽になつたが、誰も掘り返したあとは無いのに、肉身はいづこへ行つたやら、唯棺の上には太子が以前に脫いでおやりになつた衣裳が疊んで載せてあるばかり……

使者は立ち歸つて、この旨を申上げると太子はまたも使をお遣しになつて、その遺せる衣裳を取り來らしめて、御自分の身に御着用なさるに至つては、かりそめの同情や慈善の沙汰ではない。二世も三世もかけての戀人に捧ぐる熱情とかはりが無いではないか。

「書紀」に

時の人。大に之を異しみて曰く、聖の聖を知ること其れ實なる哉と愈々惶まる

とあるのは尤もの事である。この飢たる人の眞面目を我々は知りたい。「夢殿」に至つては、聖德太子一生涯の象徴でありまた秘密中の秘密である。」

今日、奈良の法隆寺に見る夢殿は、天平年間行信僧都が聖德太子あこがれの餘り發願主となつて、藤原不比等が院裁の下に立てられた八角寶形の夢のやうな建物。「聖德太子傳曆」には夢殿の事を敍して

此殿、寢殿ノ側ニアリ、御床蓐ヲ設ケ、一月三度、沐浴シテ入リタマフ、明旦、海表ノ雜事ヲ談語シ、及ビ諸經疏ヲ製シタマフ也。若シ義ニ滯ルアラバ卽チ此殿ニ入リタマフ。常ニ金人アリ、東方ヨリ至リ告グルニ妙義ヲ以テスル也。戶ヲ閉テ開カザルコト七日七夜、御膳ヲ召サズ、徒從ヲ召サズ、妃以下等之ニ近クコトヲ得ズ、時人大ニ異ム

この異しみは今に至るまで解けない。いつになつても解けない人生の夢ではないか。「傳曆」の記者が附言して

古人云、聖人夢ミズ、而シテ儲君聖性物ニ通ズ、知トシテ達セザルナシ、如來妙義、何ノ義カ徹セザラム。而シテ辭ヲ夢見ニ託シ鄙俗ヲシテ信ゼシム。

といふは功利的に註釋した淺露なる蛇足「思託傳」には

時ニ禪定ニ入ル、或ハ一日三日五日。時ニ世人禪定ヲ知ラズ。但、太子夢堂ニ入ルトイフ

は淡泊に過ぎて

「わが彼處に行きて祈る間、なんぢら此處に坐せよ」

の心事がわからない………

「夢殿」の創作に取りかゝらうとして筆をとるに先ち、ついこれだけの事を書いてしまつた。前言としては長過ぎるが、論文としてはモット書きたい。創作「夢殿」は詩であり戲曲であり小說であり美術工藝であり歷史であり政治であり宗教であり、人生及び靈界のすべてにわたる由々しき仕事である。任に堪へ得るや否やはわからないが、量としては每號の雜誌に載せるとして今後一ケ年位で完成するつもりではあるが、著者も著作以外に仕事がなかなか多い、論評及び讀者の寬量に待つて氣永に繼續したいつもりでゐる。從つて時々休載の已むを得ざることに至るかも知れないが、その邊はあらかじめ御諒解を得て置きたいものである。十年ほど以前この題で『日本及日本人』の增刊に執筆したことはあるが、あれは感想の一端で、これとは着筆も起稿も全然別なもの。

それと、もう一つ、この際、附言して置きたい事は、我輩の作物に對しても、近來文藝家批評家諸君が、いろいろと批評をして下さるがどうしたものか、毀讚共に我輩の心胸にピタリと來るものが一つも無い。それは諸君の藝術的見地と私共の藝術的見地とが根本に於て相違してゐるせいだらう。これは評するものも無益の勞力であるし、評せらるゝ方も有難迷惑である。完結までは批評といふことを一切止めていたゞきたいのが私共の希望である。

昭和二年四月　（武州御嶽山麓の道場にて）

編輯だより

◇世界は動く、今回の支那の動きは今までのそれと異つたものであることは獨鈷子が幾回も說いた通りである。「雨の日は休戰」「鐵砲玉の戰よりも電報戰」であつた支那の南北戰ではなくなつた。

◇蔣介石は新軍閥の統領となり了つた。これから小ブルジョア意識がそろ〳〵働きかけて國内の右翼を結成し、共產黨の理論的指導をお斷りする時機が切迫して來た。陳友仁や戴天仇がいくら國際的に働きかけても除謙等一派と、どう辻褄を合せるかが疑問だ。國民革命軍の分裂は必然性を帶びて來た。不知、大目的を達するまで結合して行けるかどうか。

◇鄧演達は「黨内に幾多不明の同志あり、頭腦混亂の同志あり」といつたが、それは誰を指す？　そして「軍事上の形式的統一は個人の權威によるか、將又黨の權威によるか」この一句では蔣を揶揄したものか？「中國國民黨は何處にありや」と問はれて「黨は被壓迫民衆の裡にあり」と答へ得る元氣あらば諷語を去りて堂々頭腦混亂の持主を指摘すべきである。鄧演達よ！

◇去るにつけても、今更支那を視察して南支那革命政府はボロージンの傀儡であると度胸よく觀察談をなす大政黨總務の時代錯誤はあまりに支那革命家を見縊り、國を誤り、人を誤るといふより、それを通り越して愛嬌がある。

◇張作霖の短慮？　北方支那政府とのソビエツトロシアとの國交斷絕？　かくして南方革命政府とソビエツトの關係が益親密になるだろう。そうしたら一番打擊を受けるものはどこの誰だらう？

◇『改造』四月號の福本氏の『若き學徒は如何にマルクス主義を防衛したか』に對してその駁論を執筆せんとする向が多いが、これは何れも六月號「社會科學」の『理論鬪爭批判』號に一任することにした。福本說を支持する側から六、七人、反對側から六七人位ひで堂々たる一大戰端が開かれなかなかの盛觀を呈するであろう。

◇「現代日本文學全集」は締切後讀者たらんとする方々が殺倒する狀勢を呈した。滿一ケ年經たたねば第二次の豫約募集は斷じてやらぬつもりであつたが、止むなく玆に第二次公募を發表することにした。そのかはり今回は斷じて締切後の讀者は受付けぬことにした。その内容も第一回に比し『藤村集』には創作も入れて載くことにした。また頁數も增加することにした。すべて讀者が多くなればなるほど頁數も增したい考である。菊池寬集などは菊判三六二頁漱石集は四〇〇頁以上になる見込である。それから第一次豫約讀者には菊池寬集から並製も特製に變更することが出來るやうにするつもりである。尚既刊獨歩集迄は第二次豫約全部が完了次第實費で裝幀の出來るやうにしたい。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	五拾錢	貳錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲半大號、他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和二年四月十八日印刷納本
昭和二年五月一日發行
(價五拾錢)
東京市麴町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング
編輯兼發行人　山本三生
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍
發行所　東京麴町區内幸町一ノ三 幸ビルヂング一階
改造社
振替東京八四〇二
電話銀座—四五五八
營業部—五〇四六
編輯部一七三三

徳田秋聲著（最新刊）

過ぎゆく日

四六判上製　定價壹圓八十錢　送料二十錢

本年度創作壇の最大力作「元の枝へ」其他「過ぎゆく日」「逃げた小鳥」「未解決のまゝに」外五篇を收む各篇既に定評あり。だが何と云ふ深さ、確ぶさ、朗らかさだらう。徳田氏の心境的藝術は、誠に芭蕉と西鶴を生んだ我日本にのみ生れ出づべきものである。芭蕉時代より我が純心境藝術の完成は今や氏によつて果されたと云つて敢て過言ではない。氏の如き平々坦たる筆致によつて、かく迄深くかくまで爽かに、戀を描き、女を描き、子を描き、己自身を描き得た文豪が歐米のそれにあるだらうか。氏の藝術は恐くは永遠を把持するものゝ一つと云ふてよからう。

橫光利一著（最新刊）

春は馬車に乘つて

四六判上製　定價壹圓八十錢　送料二十錢

本書は新感覺派の將、橫光氏の近業中快心の作のみを採錄したものである。此の一書を手にすることによつて氏が如何に、その新感覺的銳鋭の筆を以て現代社會に呼びかけたか、如何なる手法を以て現文壇に新時代を將來せしめしか、一目瞭然たるものがある。

一、春は馬車に乘つて　二、蛾はどこでもゐる　三、ナポレオンと田蟲　四、園　五、街の底　六、慄へる薔薇　七、無禮な街　八、街へ出るトンネル　九、妻　十、靜かなる羅列　十一、表現派の役者

廣津和郎著（最新刊）

秋の一夜

四六判上製　定價壹圓六十錢　送料十八錢

廣津氏の作品はどれも秋空のやうに澄明で、明快で、そして實に深い。胸に滲みいるやうな豐潤な美感と、チエホフのやうな温い人生觀、それが、見事に綾をなして、この絕品「秋の一夜」、「獵犬」外六篇を得た。誠に氏によつてのみ見らるる氣品と魄力と名人的冴とを兼ね備へた尊敬すべき短篇集である。吾々は一讀再讀して滋味ひ深さ作品に溺れて居る。今や氏によつてものされた新しさ靈と淸新なる美感の融合化に吾々は夢と現實の美しさ一致を見、更に生命の寂と藝術の深さを知り自ら高雅なる美の世界に飛翔し得るであらう。

岸田國士著（最新刊）

パン屋文六の思案

四六判上製　定價壹円五拾錢　送料十八錢

氏の明るさは誠に南歐の空と、青い海と白い雲、あの淡綠の山を覆ふ華やかしい紺青の空だ。今まで吾々はあまりに北歐的な陰鬱な藝術に惱まされすぎた。パリーよりもニースよりも明るいこの日本に朗らかな呼吸と明色のウイツトは如何にしても必要だ。今や氏によつてその明るい藝術境は拓かれ、玲瓏たる日本の呼氣は甦つた。ここに集錄するもの「麵麭屋文六の思案」外數篇皆氏の近業に屬し駿品のみ。

發行所　東京市麴町區內幸町 幸ビルデイング一階　振替東京八四〇二番　改造社

改造社出版圖書目錄

(1) 經濟及社會

著(譯)者名	書名	内容一班	版數	型 頁數	定價 送料
法學博士 穂積重遠著	離婚制度の研究	○離婚狀と縁切寺○縁切寺滿徳寺○クリスト教の婚姻非解消主義○イギリス其他各國の離婚制度の研究	1刷	菊上 九四〇頁	一〇・〇〇 内・三六
法學博士 河田嗣郎著	家族制度と婦人問題	(一)家族制度論○家族制度の性質と機能○外五項(二)婦人問題○女子勞働問題等を檢討す	7版	四六上 三五二	二・〇〇 ・二〇
京大教授 宮本英雄著	婚姻の基調	婚姻法の將來○夫婦間の貞操○寡婦の再婚○離婚防止○婚姻媒酌○家族制度と婚姻等結婚に關する研究	5版	四六上 二〇八	一・五〇 ・一八
法學博士 福田德三著	社會政策と階級鬪爭	(一)社會政策序論○「社會」の發見○外三項(二)階級鬪爭と其當事者等其他の深刻なる研究	30版	四六上 五七四	三・〇〇 ・二四
法學博士 福田德三著	社會運動と勞銀制度	(一)社會運動の理論的根據(二)勞働爭議の意義及種類(三)勞銀制度を博士一流に檢討す	15版	四六上 四二〇	二・五〇 ・二〇
法學博士 福田德三著	ボルシェヴヰズム研究	○マルキシズムとしてのボルシェヴヰズム○レニン國家論○ボルシェヴヰズム○「資本主義への降伏」等	10版	四六上 三九四	二・九〇 ・二二
慶大教授 小泉信三著	改訂 價値論と社會主義	○緒論○〔ロオドベルトス研究〕〔マルクス研究〕(三章)○追補河上博士との論戰記錄	8版	菊上 四三三	三・二〇 ・二八
商大教授 孫田秀春著	勞働法總論	○勞働法の基本觀念、研究方法の變遷、理想○勞働法の法源○勞働法の效力等勞働法概論	5版	菊上 五四〇	二・六〇 ・二六
ジノヴィエフ原著 富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	○組合運動の原則的諸問題○ロシヤに於ける組合運動○勞働組合世界的名文献の翻譯	4版	四六並 一六四	・九〇 ・一四
ニコライレーニン原著 茂森唯士譯	レーニニズム	○ロシヤ革命の國際的意義○ボリシエヰキーの成功の一根本條件○ボリシエヰーズム發達の諸期等	4版	四六並 三二四	一・二〇 ・一六

著者	書名	內容	版	體裁	定價	送料
經濟學博士 本庄榮治郎著	日本社會史	○日本社會史の觀念○氏族制度の社會○部落制度の社會○莊園制度の社會○分權的封建制度の社會等	27版	菊上 三六六	二・五〇	・二四
法學博士 河田嗣郎著	農村問題と對策	○農村問題と對策○農業改造方策○都會と田舍との分離○農民土地愛着心冷却の傾向等外數項の熱論	17版	四六上 三五四	二・〇〇	・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	23版	四六上 四一八	二・五〇	・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	嘘の効用	○嘘の效用○改造問題と明治時代の省察○役人の頭○小智慧に捉はれた現代の法律學○其他八項	42版	四六上 四四四	二・六〇	・二〇
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	新法學の權威が新しき國民はいかに法律を心得ねばならぬかを說いた法治國民への國民讀本	24版	四六上 四一三	二・五〇	・二〇
佛國蔵相カイヨー著 龜井貫一郎譯	民衆の苦悶	○大戰の間斷○世界的破綻○歐洲再生の力○佛國、一般財政經濟の混亂○佛國賠償問題と戰爭債務等	4版	四六並 二四〇	一・三〇	・一六
森戶辰男著	青年學徒に訴ふ	近時澎湃たる社會改造問題に關し政府者に對し巨砲を放つ。學生諸君は本問題の內容發展を本書で知れ	18版	四六並 一六〇	一・三〇	・一二
ウンターマン著 森喜一譯	哲學思想の史的考察	○著者はマルクス派學徒で古代より近代に至る哲學思想の史的考察と共に進化學說の變遷を語るもの	3版	菊上 三一二	二・〇〇	・二三
ヨゼフ・ディツゲン原著 山川均譯	無產階級の哲學	現代のブルジョア哲學に對し無產哲學の新提唱新時代學徒の必讀すべき文獻	6版	四六上 三八八	二・五〇	・二三
賀川豐彥著	生存競爭の哲學	生存競爭の原理を闡明し生存反動の哲理を說き生命力と愛の力が生存競爭を超越するを進化論的に證す	12版	四六上 三五〇	二・〇〇	・二〇
文學博士 高田保馬著	階級及第三史觀	(一)階級論○階級の本質○マルクス的階級概念外一篇(二)第三史觀論(三)經濟史觀より第三史觀まで等	6版	菊上 三八四	二・八〇	・二四
森戶辰男著	思想と鬪爭	○震災と主義者と反動勢力○國粹主義者と政治的殺人○大杉榮君の追憶○外四項	6版	四六上 三五六	二・〇〇	・二〇
細井和喜藏著	女工哀史	我國の工場及女工生活を知る世界的勞働記錄十五ヶ年の氏の血と肉とから成る本書を國民は一讀せよ	24版	四六並 四六八	二・〇〇	・二〇
トロツキイ著 茂森唯士譯	文學と革命	○非十月革命文學○革命の文學的同伴者○アレクサンドル・ブロック○未來派○詩の形○外四項	4版	四六上 三六六	二・〇〇	・二〇

著者	書名	内容	版	判型・頁數	定價・送料
帝大助教 平野義太郎著	法律における階級闘爭	○法律に於ける階級闘爭○資本主義的法律組織の下に於ける階級闘爭と階級闘爭とローマ法○外四章	9版	菊上 四三三	二・五〇 ・二六
法學博士 河田嗣郎著	農政四十三講	○農村問題解決の鍵鑰○小作爭議と農村破壊○外四十一項、農村問題を知らんとする人の必讀の書	5版	四六上 三九八	二・五〇 ・二二
法學博士 堀江歸一著	改訂増補 國際經濟と國民經濟	○世界平和と國民經濟並に國際經濟○世界經濟上より見たるゼノア會議○對外債務廢棄問題○外七項	9版	菊上 四三三	二・五〇 ・二六
法學博士 堀江歸一著	續國際經濟と國民經濟	○經濟組織の改造と政治の革新○政治的議會より經濟的議會へ○產業資金の供給○外九項	5版	四六上 二九四	二・五〇 ・二二
農學博士 小野武夫著	農村研究講話	○緒言○基礎的研究の必要及び其綱領○農村問題とは何ぞや○村落の研究○農家經濟の研究等	5版	四六上 三二八	一・五〇 ・一八
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册三）需要・供給・價値の一般關係	現代の經濟學書中、此書程、學としての生命と光の鮮かなるものはない。本篇は主として生產を解く。	新刊	菊上 四九八	三・五〇 ・二六
マーシャル著 商大教授 大塚金之助譯	經濟學原理（分册四）國民所得の分配	譯者は、晩年のマーシャルに親炙したる人、原理に流れつゝある血を共鳴移植したる名譯。	新刊	菊上 四〇四	三・七〇 ・二八
經濟學博士 本庄榮治郎著	近世農村問題史論	經濟史の權威たる著者が近世日本に於ける農村問題を史的に考察したる日本農政史の一方面である。	6版	四六上 三六〇	二・三〇 ・二二
京大講師 山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	○序論○利子禁止思想の歷史○中世寺院法と猶太人○中世寺院法と商業○中世寺院法と組合及び會社等	4版	四六上 二三三	一・五〇 ・一八
ブハーリン著 富士辰馬 廣田千元譯	唯物史觀	勞農露國第一の理論家たる著者が現代思潮の指導原理たる唯物史觀を平易に徹底的に譯述せるもの	最新	四六上 五四〇	三・五〇 ・二八
ロマン・ローラン著 大津幸譯	先立ちて來る者	深遠たる思想と熱意ある筆致を以て世界の思想界に卒乎たる位置を占むるローランの「先驅者」の翻譯。	1冊	四六並 二六六	一・五〇 ・一六

(2) 政治及法律

著者	書名	内容	版	判型・頁數	定價・送料
法學博士 末弘嚴太郎著	農村法律問題	○序章○部落有財產と農村生活○永小作の法律關係○小作問題と小作法○小作爭議と小作調停法	22版	四六上 四一八	二・五〇 ・二二
法學博士 末弘嚴太郎著	法窓閑話	○法窓閑話○裁判賠償の根本原理○軍法會議廢止論○小作人と土地所有權○法律小話（十二話）（外二篇	20版	四六上 四二三	二・五〇 ・二三

里見弴著

大道無門

定價金貳圓
送料金二十錢

忽七版

豊かなる美感と、深刻なる描寫、自由なる構想と、妖艶の美女。吾々は氏の神品に接するごとに、唯々その豊潤なる美の香氣と奇矯なる人生の綾に醉はされきつてしまふのだ。今や、氏の熱誠の總てを傾倒せる駿品大道無門は遂に完成した。一點一劃の技巧をもゆるがせにせぬ氏が、此の長篇こそ、實に我が文壇と讀書界に大渦紋を呼び起さずには置かぬものである。凡そ文藝を口にするものの必讀玩味すべき書だ。

發行所
東京市麹町區內幸町
幸ビルデイング一階
振替東京八四〇二番
改造社

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX [illegible] A YEAR
OFFICE: [illegible]IZOSHA, UC[illegible]AI-CHO KOJIMACHI-KU, TOKIO.

株式會社秀英舎印刷